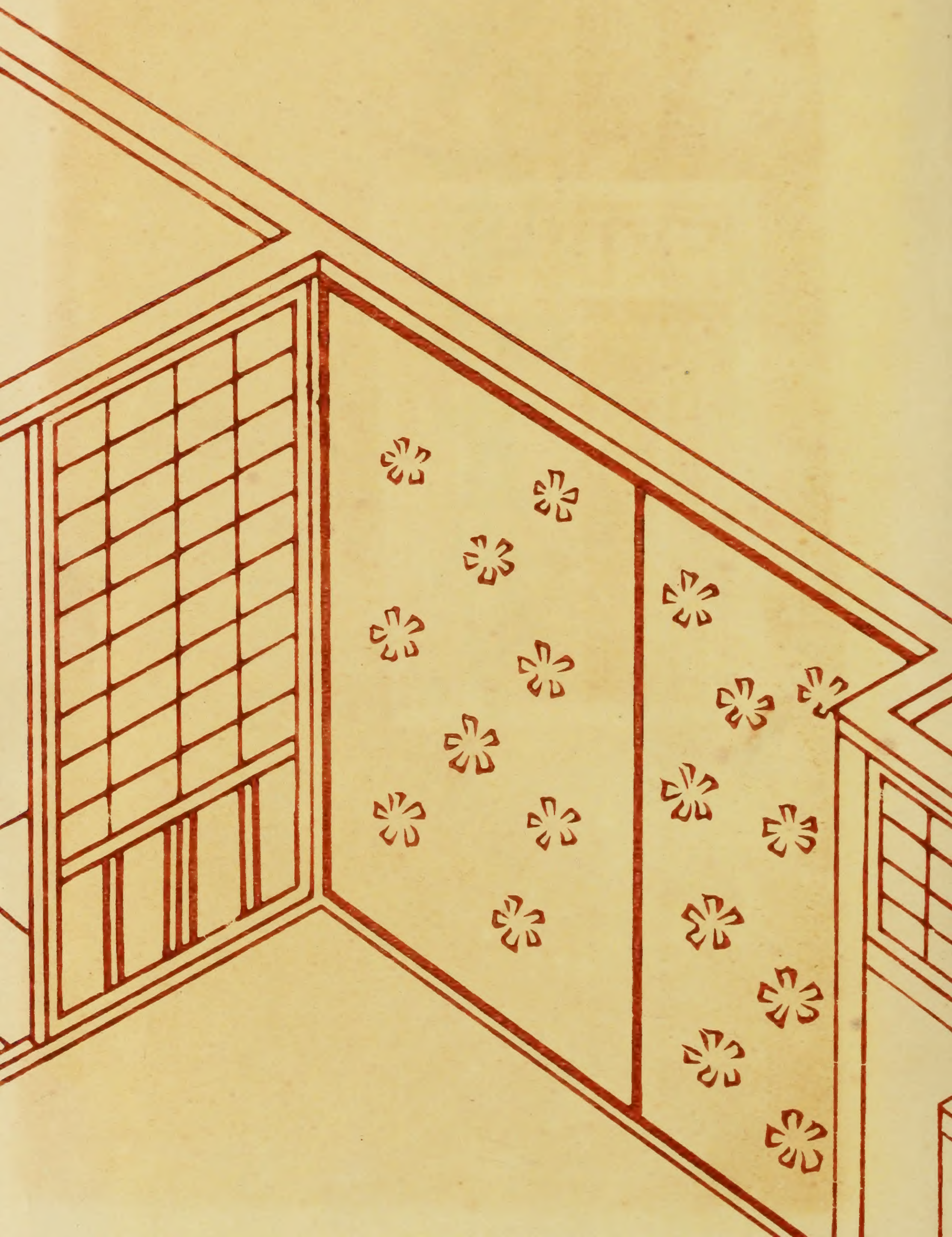




大南小言集

文學博士坪内逍遙
渥美清太郎共編

大南北全集

第壹卷

東京春陽堂刊行

大南北全集 第一巻目次

挿繪目次

挿繪解說

■口繪に挿入した木版摺りの錦繪は、『靈驗曾我籬』初演當時のもので、四幕目曾我の對面の場である。五世市川團十郎追善に、七世市川團十郎が初めて祐經を勤めたのである。脚本のト書の通り、白猿の肖像を持つてゐる。

■『四天王楓江戸粧』の中に挿入したのは、初演の折の繪本番附全部である。

■『彩入御伽草』に入れたコロタイプ版は、「小平次住家の場」の錦繪である。首を咬へて現はれた松助の亡靈の凄さには、觀客も顔を上げ得なかつたといふ。

■『靈驗曾我籬』に挿入したうち、「鈴ケ森の場」の錦繪は、俳優は初演當時と同じであるが、發行されたのは再演の折であらうと思ふ。

■「山谷堀船中の場」は初演の時の錦繪である。「花川戸の場」の錦繪も同様である。

■挿入した錦繪は何れも初代歌川豐國の筆である。


澤村源之助
市川團十郎
尾上榮三郎
豊國画



緒言

どこの國でも其國の最大劇作家をシェークスピヤに擬するのが例である。わが國では、大近松をわが沙翁と稱し來つてゐる、けれどもこれは正當でない。近松は操り芝居といふ一種の通俗樂劇の爲に筆を執つたので、所謂劇作家ではないからである。日本で沙翁に比すべき作家は、其時代といひ、位置といひ、技倆といひ、其影響といひ、大南北の外にはない。彼れは我エリザ朝時代ともいふべき歌舞伎劇の爛熟期、文化文政時代の代表的大作家である。默阿彌が江戸演劇の集大成者たる名譽を博したのは畢竟前に彼れの如き巨匠が出て、其縱横の奇才によつて千變萬化の趣向を凝らし、凡そ歌舞伎が發揮し得る限りのあらゆる可能美を具體化しておいたからである。大南北は實にわが江戸作者中の鬼才である。若し彼れを其位置、技倆、影響等より見て、假に大近松に比すべくば、默阿彌は半二プラス出雲であり、彼れをシェークスピヤに比すべくば、默阿彌はフレッチャー兼マッシンジャーである。或は放膽な彼れをミケランジェロだとすると、細心な默阿彌はラファエルでもあらう。とにかく南北は後のあらゆる狂言作者の師表であつたと共に、其最も大いなる作家であつた。それは、一は文化、文政が我歌舞伎劇の最隆盛最爛熟の期であつて、劇文學としても又劇藝術としても、その種々の矛盾的諸要素が――舞踊劇と科白

劇、象徴式と寫實式、時代脈と世話脈　偶人と活人、遊戲と眞摯、無稽と條理、荒唐と自然、卑猥と洒脱、グロテスクとエレガント等の諸要素が――累代の工夫と馴致と洗錬とによつて不思議な渾融を成就し得てゐた時代だからであり、一はまた南北自身が稀有の劇的天才であつたからである。だから南北を究めない以上、到底歌舞伎の本體を理解する事は出來ない。それだのに、今日に至るまで、彼れの作は、曩に私達が『歌舞伎脚本傑作集』に於て紹介した八篇以外には、僅に二三篇が知られてゐるのみである。少くとも九十餘篇の作があるのに、單にそれだけで彼れを代表させるのは彼れを誤る所以であるばかりでなく、わが國劇の本來を誤解せしむる所以である。

明治以來文運頓に進み、諸學科の向上いちじるしく、各方面に新しい研究法、編述法が適用され、考證も評論も歷史も傳記も次第に其面目を一新したと同時に、同主題の著書が幾種も竝び出づるのが例であるのに、特り我國劇史のみは伊原青々園君の名著が只一種あるばかりで依然として今に及んでゐるのは一見奇怪な現象だが、是れ一に其肝心な研究資料たる脚本の供給が不備だからである。わが劇のシェークスピヤたる大南北の作すらも極少數の專門家以外には禁制の果實だからである。

それほど大切な脚本類がどうして今日まで等閑視されてゐたか?

完全な形で世に傳存してゐるのが乏しいからである。或は幸ひに傳存してゐても、それは例の讀みに

くい當宇澤山の、樂屋專用の寫本なのだから、全くの局外者には殆ど謎同樣に解しがたいからである。大南北の作の如きも、普通に知られてゐる以外の作は、之を手に入れるのすら容易でない位だから、之を讀み易い形式に引直して廣く世人に提供することは更に一層の困難である。隨つてわが歌舞伎劇史は今なほ未開拓の荒蕪地同樣の有樣で取殘されてゐる。國劇の本來が普く內外人に理解され且つ其眞價値が發揮されるに至るのは、若し此まゝに捨てゝおいたら、いつの事だか分らない。それは明かにわが文化事業上の一缺陷である。歌舞伎の絕巓を代表するわが劇文學の精粹たる大南北全集の發刊は此缺陷の重要部を補塡するに足るものとして頗る有意義な計畫である。

が、大南北の作の完全な姿で今日に傳存してゐるのは、さなきだに甚だ貧少であつたところへ、昨年の大震火災のために、其貧少であつたのが更に一層貧少となつたので、假にも全集と稱し得べきものを編成するのは非常な困難であつた。それにも拘らず、現在に於ては到底是れ以上を望むべからざる本全集の如きものを提供し得たのは、一に渥美清太郎君の多年の蒐集と研究と其極めて熱心な搜索の結果であつたことを特に世に披露しておく。

本全集は、其編輯の方針並びに印刷の體裁等を『歌舞伎脚本傑作集』に準ずることゝし、挿繪、口繪は、精巧なコロタイプや美麗な三色版等で、成るべく創演當時の舞臺面を髣髴さするに足る古錦繪を複

製すべく力め、なほ古狂言本や古番附等の中からも參考用として斯道の研究家を裨益すべき幾多の珍しきものを選んで隨處に挿入することにしたから、これまた本集の一特色であるといへると信ずる。

坪內逍遙

四世鶴屋南北の傳

我過去の俳優、作者及び其他の劇場附きの技術家らが、代々、同一の稱呼を有してゐて、初代、二代三代等の肩書きだけで區別される習慣になつてゐるのは、我劇史地圖上の、頗る厄介な、紛はしい熊手徑ともいふべきである。初心な歌舞伎探檢者は、之が爲に、とんでもない方角へ誤り導かれないとも限らない。

南北の代々なぞも其一例である。

南北は、初代孫太郎も、二代の魯風も、三代の鶴屋南北も、いづれも道外を本領とする俳優であつた。三代目には男の世繼ぎがなかつたので、娘のお吉といふのに聟を迎へた、其聟が、作者であつて、後に舅の藝名を繼いだのがもとで、作者としての南北が出來たのである。だから、劇文學史の上からいふと、四世南北は、むしろ初代南北といつて當然である。

俗に大南北と稱する此四世南北に關する逸話は、隨分いろ〳〵に言ひ傳へられてゐるが、其正傳と見るべき分は、早くは關根默菴氏が『早稻田文學』（明治廿六年）の「狂言作者大熊手」中に集錄し、次ぎに、伊原靑々園氏が、同じく『早稻田文學』（同廿九年）の「狂言作者の傳統」中に記述し、後に、大正

二年に『近世日本演劇史』中に多少の補修を施して再錄せられたものに盡きてゐるといつてよい。こゝには、二氏のを根幹として、新たに必要と思ふ枝葉を茂らせて、傳を立てゝ見た。

四世南北は、寶暦五年(西暦一七五五年)に生れた。江戸乗物町の紺屋の型附け職人伊三郎といふ者の子で、はじめは源藏と呼ばれてゐた。後に伊之助と改名して、父と共に紺屋職をしてゐたが、安永四年廿一歳の時に、其頃立作者であつた金井三笑の弟子になつて、勝俵藏といふ名を貰ひ、中村座へ出勤することゝなつた。但し番附けに其名が載つたのは、同五年十一月の森田座からであつた、と默蒼氏は言つてゐる。もとよりどういふ正式の素養があつたわけでもなく、「旗」を「畑」、「先」を「待」で間に合せて平氣でゐるほどの薄弱な學殖しかなかつたのであつたが、耳學問や目學問は相應にあつたらしく、とりわけ、思ひ切つて大膽に、とつ拍子もない變幻百出の空想を組織立てる脚色の才に於ては、頗る豐かな天稟を備へてゐたところから、追ひ〳〵に時の名優らに其特長を認められたが、就中、尾上松緑の引立てによつて、後の出世の基礎を築いた。

因みに云ふ、まだほんの作者見習ひとして二立目(開幕劇)の筆を執つた時にさへ、舞臺一面に手習草紙の反故を貼り附け、それを大鯨の胴腹と見せ、それを切り破つて大百の曲者が、四天姿で、金の冠を小脇に抱へて、ぬつと出るといふ趣向を立て、劇場内外を驚歎せしめ、後には必ず出世する作者となるだらうといはれたといふ逸話

があ る。

けれどもそれは、文化以後の事で、天明の初年までは、やつと五枚目と稱する作者の末班たるに過ぎなかつた。寛政の初め、三十六七歳頃と雖も、まだやつと三枚目どこであつたが、享和元年（一八〇一年）四十七歳、はじめて二枚目の作者となつた。其頃もう既に、所謂素世話物の作者として、特殊の名聲を博してゐた。按ふに、學殖の乏しかつた彼れは、市井の實際觀察から得來つたところに、自家の特長を發揮しようと努力したでもあらう。『作者店おろし』に據ると、彼れは、最初は、主として時の道外方大谷德次の爲に、をかしみ本位の作を書いてゐたといふ。それらの作が後の素世話物の地盤であつたらう。次に、彼れは專ら三世坂東三津五郎に隨身した。其悴を三津五郎の弟子にして、初め、坂東鯛藏後に鶴十郎といふ藝名を貰はせたのも、さういふ緣故からであつた、『役者店おろし』に據ると、此鶴十郎は、後に俳優をやめて、二代目勝俵藏となつた程の作才のあつた男で、俳優であつた時分から、親南北の懷小刀ともも片腕ともなつて、いろ〳〵の新案を工夫し、其上、役者側をうまく說き納めることにも長じてゐたとある。又彼の尾上松綠の幽靈物、仕掛け物の趣向の如きは、多く鶴十郎の創案に負うたとあるが、すると、南北が三世の聟となつたのは、そも〳〵いつ頃の事であつたか？

『近世日本演劇史』には、鶴十郎の二世俵藏は天保元年十二月十七日に、五十歳で死んだとあるから、

彼れは天明元年に生れたのである。すると、四世が三世南北の聟になつたのは、晩くも安永九年で、其廿六歳の時であつたらしい。『店おろし』によると、妻となつたお吉は、彼れよりも餘程年上であつたとある。一種の政略的結婚であつたかとも疑はれる。といふのは、天明六年の猿若座の顔見世番附を見ると、狂言作者としては、金井三笑が例の太文字で特筆されてゐる外には、勝俵藏だけが只一人、二枚目どこに筆太に書き出されてゐるのが、天明初年まで五枚目、寛政頃にやつと三枚目、享和元年に始めて二枚目になつたといふ關根氏の說と一致しないばかりでなく、實際、其後の番附面には、（私の目擊した限りでは）さういふ例は、享和以後までは絕無であるから、どうやら結婚後の一時の特待であつたかの如くに憶測されるからである。

序でにいふが、『增補青本年表』に、天保元年の條下（四世南北の歿した翌年）に、五世南北作の草双紙を收めたと同時に、其略歷を揭げてゐるが、それは、明かに、二世俵藏の鶴十郎と通例孫太郎南北として知られてゐる五世南北（四世の聟勝兵助の養子）とを混同して、紛はしい事を書いてゐるので、いふまでもなく誤りであらう。但し此兵助（藏？）の養子孫太郎が五世南北を名乘つたのは、鶴十郎の俵藏が存生中であるらしいのが聊か不審である。といふのは、『店おろし』に、俵藏の事蹟を語つて、「南北忰鶴十郎、今深川櫓下に直江屋重兵衞といふ」と書いたと殆ど同時のだと思はれる筆で、勝兵藏（助？）の事を語つて「今南北の養父なり」と書いてゐるからである。『店おろし』は天保十四年と其序には書いてあるが、隨筆の習ひ、追ひ〳〵に書き足したものであらうか

ら、右の條々は、天保初年と見ても差支へはなく、或は四世南北が死んだすぐ其翌年の天保元年と見てもよいかも知れぬ。『日本演劇史』は五世南北の襲名は天保八年十一月だとして居る。或は、隨筆者二三治は、俵藏の重兵衞が元年の暮に死んだのを知らないでゐて、天保八九年頃に此記事を物したのでもあらうか？　さうして草双紙に五世が早くも南北の名を出してゐるのは、これは、おのづから別格の事として、仲間内の默許を得てゐたことでもあつたか？　どうでもよい事のやうだが、後の劇史研究者が、どんな事で、誤り導かれまいものでもないから、一寸注意しておく。

二枚目作者となるまでに、約二十六年の辛抱を要したとすると、南北の立身は、決して速かであつたとはいへない。併しながら、假令作才に於て、如何に彼れが秀でてゐたとしても、其頃は、上に、師匠の金井三笑や例の老功の櫻田治助(初代)や大阪下りの並木五瓶なぞといふ巨頭が儕々としてゐる、おのおの相競つて手腕を揮つてゐたころであつたのだから、急には伸しかねたのも無理はない。が、五十前後の彼れは、譬へば黑雲の渦き起るを俟ちつゝ瀧壺から躍り登る鯉といふ勢ひであつたところへ、尾上松緑といふ大黑雲が誂へ通りにおつかぶさつて來た。傳説によると、松助(松緑)が、わざわざ彼れの陋屋へコンデツセンドして、禮を厚くして、新狂言の書きおろしを乞ひ、有名な「天竺德兵衞韓噺」の新趣向を立てさせて、七十日間連演して、古今に稀有な大當りを取つたのは、文化元年(一八〇四年)の夏であつた。けれども松緑の彼れに於ける關係は、後の河竹新七(默阿彌)に於ける市川小團次のそれのや

うではなかつた。何となれば、何分にも、まだ／＼多くの先輩作者があつた爲に、松綠の引立てゞ、一旦は河原崎座の立作者とまで推擧され、同年の十一月に「四天王 楓 江戸粧」を書きおろし、松助（松綠）の辰夜叉姬、市川男女藏の四天王で一時見物を狂喜せしめたものゝ、其立作者の位置は餘り安固でなく、時としては、二枚目、三枚目に押下げられたこともあつたからである。

文化二年の『役者正札附』を見ると、彼れは河原崎座の立作者であるが、別座格に木村園夫と烏亭焉馬が据ゑられてゐる。文化四年の『役者眞行草』では、彼れは市村座に屬してゐるが、立作者は並木五瓶、二枚目は松井幸三、彼れは中央の客座へ廻されてゐる。六年の『役者大學』では、彼れは同座の立作者で、松井幸三が二枚目へ廻つてゐる。同七年の『役者新綿船』でも、同前、二世櫻田治助が二枚目に据ゑられてゐる。

それにも拘らず、彼れは、此間に於て、「御江戸花賑曾我」松助の祐經、半時九郎兵衛、乳母お時、二番目は「小絲佐七」だの、「彩入御伽草」だのを書いた。其うちに、老先輩の治助と五瓶とが殆ど相續いて沒したので、彼れは漸く名實の相稱つた立作者の位置を占めることゝなつた。それは文化五年（一八〇八年）で、彼れが五十四歳の時であつた。

其頃、松綠はもう漸く老衰して、文化十二年には病死してしまつたが、幸ひに、次代の中堅たる名優

らが恰も盛んに活躍しつゝあつた際であつたので、俳優の柄行きに適めて新作意を凝らすに妙を得てゐた俵藏は、ます〳〵其手腕の冴えを見せた。彼れが新作の當事者となつた名優には、立役としての三世坂東三津五郎、敵役としての五世松本幸四郎、若女方としての五世岩井半四郎らの外にも、三世尾上菊五郎(松緑養子、初め榮三郎、後松助)や七世市川團十郎や二世澤村田之助や二世市川團之助なぞがあつた。

文化八年の十一月に、彼れは俵藏の名を、舅の名を襲いで、鶴屋南北と改めた。さうして、其後は、本所龜戸村の植木屋淸五郎といふ者の隣地を借りて、居を卜し、六十歳過ぎまではそこに住んでゐたらしい。晩年駕籠屋新道に、後又轉じて、深川黑船稻荷の地內に住むやうになつてからは、當時狂言作者の泰斗と推されてをり、草双紙などの著作も多かつたから、相應に餘裕ある暮らしをしてゐたらしいが、文化頃の彼れの生活は頗る質素で、家はさゝやかな草葺きであり、表の小門に南北の二字を書いた表札は出しておいたものゝ、近所の者には何者とも知れず、最初は醫師と間違へられたといふ逸話もあり、又出水の最中に出火に逢ひ、草葺きの事とて忽ち燃え上り、村人ら群り來つて、肥料桶から肥料柄杓で汚い水を打掛けたゝめ、有りがた迷惑の目に逢つたなどといふ奇話もある。

龜戸村へ移つた以前の俵藏時代には、高砂町に住んでゐたといふが、其頃は更に貧窮であつたらしい。

『作者店おろし』は其頃の彼れの生活ぶりを、活き〳〵と傳へてゐる。其儘を引抄しよう。

俵藏のむかし、高砂町に住む時、机に向ひ、書き物にかゝりゐる時、女房、釜の下を焚き附けて、もし、湯が沸きましたが、米はどうなさるといふ。此事聞き附けず、やはり書き物にかゝりゐるゆゑ、女房、又、どうなさるといふ。此催促に俵藏じれて、今少し待てといふ。薪がむだになりますといふゆゑ、又むつとして、いま〳〵しいやつ、どれ、取つて來ようと、筆を捨てゝ立ちかゝる。秋の末の頃なれば、錢はなし。戸棚をあけて、蚊帳を引き出し、そのまゝ抱へて、下駄をはき、駈け出して、横店の大黑屋へ行く。四つ角にて、知つた人に出逢ふ。俵さん、どこへ行きなさる、と呼びかけて、其人、俵藏が顏を見れば、顏色變り、癇癖の體ゆゑ、不審に思ひ、又、どこへ行きなさる、と問へば、はい、殺しに行きますといふ。これにて其人尙更びつくりして、まア待ちなさい、殺しに行くとはどういふわけで。俵藏、いやさ、今、蚊帳を殺しに行きますといふ。

この事實が、其儘「謎の帶」に利用せられ、二度目に、例の「四谷怪談」にも使はれたかと思ふと、面白い。

文化八年以後文政、天保の作劇壇は、殆ど南北が獨擅場であつたといつてよい。僧侶出で、多少の漢學素養のあつた初代松井幸三や、東條琴臺の兄であつたとかいふ花笠魯助なぞもゐたが、いづれも南北の下流に立ち、又、二世治助、二世五瓶なぞもゐたが、勿論、南北に楯を突く者でなく、二世如皐や福森久助は、一時は南北の先輩であつたのだが、前者は天保四年に七十餘歳で、後者は文政元年に五十餘歳

で死んでしまつた。

『近世日本演劇史』は、文政十二年十一月廿七日に、彼れが七十五歳で死んだまでの間の作を算へて、前後七十一篇に及んでゐるが、どういふわけでか、約二十四五篇の脱漏がある。で、それらを合算すると、彼れの一代の作の全數は、九十篇以上に及んでゐる。もつとも、是等の作は、根本の趣向及び脚色は主として立作者の創意に成り、又、主要な幾幕かは無論立作者の筆に成るのが例となつてはゐたもの丶、其他は二枚目、三枚目の作者らが、立作者の指定に從つて、多少の創意を加へつ丶筆を揮ふのが常習であつたのだから、それらを今の所謂創作と同樣の意味で立作者の作と見ることは出來ない。隨つて、學殖のなかつた南北としては、どうして書いたかと思はれるやうな場面や脚色や詞句のあるのも、此常習を考へ合せれば、何の不思議もない。彼れの協力者がどんな作家であつたかを見、又、彼れと他の者との位置の關係がどんなであつたかを見る爲に、左の二三の「役割番附」のそれ、及び「評判記」のそれを擧げて見よう。

文化十二年
五月河原崎座
「杜若艶色紫」（カキツバタイロモエドゾメ）
（役割番附）

瀬川如皐
笹尾鷹助
竹田俵七
大月五郎次
柳川大助
田島此助（スケ）
鶴屋南北

文化十五年
都座
「役者當撰鏡」
（評判記）

篠田金次
音羽助
勝井源八郎
花笠魯助
勝兵助
今野圓八
進ト一
松井幸三
重扇助
鶴屋南北

文化十三年
十一月河原崎座
「清盛榮花臺」（ノウテナ）
（役割番附）

鶴屋南北
勝兵助
槌井飄七
瀬川如皐
外三人
三升屋二三治
櫻田治助

文政三年
玉川座
「役者開帳」
（評判記）

鶴屋南北
松井幸三
外二人
勝井源八郎
外三人
松井由輔

文政四年
河原崎座
「玉藻前雲井公服」
（役割番附）

鶴屋南北
松井由輔
勝兵助
外六人
松井幸三
音羽助

文政八年
中村座
「御國入曾我中村」
（役割番附）

松井幸三
外五人
三升屋二三治
外三人
勝井源八
鶴屋南北

就中、松井幸三との協力は、勝俵藏時代からで、隨分久しい。佛教や漢文學の知識は、おそらく彼れの注入か加筆かであつたらしい。

南北の作に係るものは、臺帳以外に、草双紙が約七十七部ほどある。それは『增補青本年表』に據ると、文化六年以後で、東西菴南北といふ作者名前で書かれてある。勿論、これとても、後々の分には代作同樣のものも多くあらうし、さうでなくも、臺帳の荒筋を燒直したり　捏ち返したりしたやうなものばかりであるが、何かの參考にもと、下に、臺帳の次ぎに其書名を揭げておく。

南北の最長所は、突拍子もなき茶番めく趣向を、眞面目くさつて、臺帳に適用し、故實にも、論理にも、史蹟にも、自然味にも、少しも顧慮する所なく、面白い目先きの變化と驚異とより來るセンセーションを大膽に組合はする技倆である。茶番的趣向は、成立のそもそもからの歌舞伎の附屬性には相違な

いのであるが、眞面目くさるといふ一特質あることが、南北をして怪談物の專門家たるに適せしめた所以であつた。彼れの作が慘酷と猥褻とで知られたのも、此一特質からである。夥しい不條理、不自然の作意でありながら、尙ところ〴〵に、市井の寫生畫めく部分を粧點して、何となく自然らしく思はせ、よつて以て「素世話物」の名作家と言はれるやうになつたなぞも、やはり、茶番趣向の適用鹽梅が他の作者らとは違つてゐたからだと思はれる。彼れが作風に關しては、後に、別に細論する積りだから、今は只これだけを言つておくに止める。

通例、彼れの作と見做されてゐるもので、

臺帳

に屬するものは左の通りである。

「天竺德兵衛韓噺(いこくばなし)」　文化元年七月、河原崎座。

「四天王楓江戸粧(もみぢのえどぐま)」　同年十一月、同座。辰夜叉姬と四天王。（本集收錄）

「御江戸花賑(のひ)㑒我」　文化二年正月、河原崎座。二番目に小絲、佐七。

「彩(いろ)入(いり)御伽草(ざうし)」　同五年六月、市村座。小平次と皿やしき、お妻八郎兵衛。（本集收錄）

「時桔梗出世の請狀」同年七月、同座。馬盥の光秀。（本集收錄）
「是箧殘高麗屋縞」同年八月、同座。かしく六三。
「松二代源氏」同年十一月、市村座。賴光四天王と仲光。
「靈驗曾我籬」同六年四月、同座。二番目に幡隨長兵衞と龜山仇討。（本集收錄）
「阿國御前化粧鏡」同年六月、森田座。天德と湯上りの累（書卸し。）
「高麗大和皇白浪」同年九月、市村座。石川五右衞門。（本集收錄）
「貞操花鳥羽戀塚」同年十一月、同座。高尾の文覺。（本集收錄）
「春の榮松曾我」同七年正月、同座。幸四郎の閉坊。
「心の謎解色絲」同年同月、同座。小絲、佐七。（本集收錄）
「勝相撲浮名の花觸」同年三月、同座。白藤源太。（本集收錄）
「昵蓬萊曾我」同八年正月、同座。幸四郎の畑右衞門。
「仕立萠昔綺」同年正月、同座。白木屋おこま。
「盟話水滸傳」同年三月、同座。幸四郎の日本駄右衞門。（本集收錄）
「御註文仕入の茜染」同年五月、同座。三津五郎の金神長五郎。

「玉藻前尾花の錦繪」　同年七月、同座。三國妖狐傳。
「嚴島雪官幣」　同年十一月、同座。宗十郎の淸盛。
「當穐八幡祭」　同年八月、同座。夜蕎麥賣の娘殺し、駕籠屋甚兵衞。(本集收錄)
「繪本合法衢」　同年七月、同座。立場の太平次。(本集收錄)
「謎帶一寸德兵衞」　同年同月、同座。大島團七。(本集收錄)
「初菘鶯曾我」　同九年一月、同座。常磐津の三津朝。
「色一座梅椿」　同　二番目。小梅の瓦師殺し。(本集收錄)
「姿花江戸伊達染」　同年三月、同座。先代萩。角力の達引。
「雪吉野木毎顏鏡」　同九年十一月、森田座。犬神、伊賀の局。
「例服曾我伊達染」　同十年正月、同座。伊達騷動。
「お染久松色讀販」　文化十年三月、森田座。お染七役。(本集收錄)
「曾我祭俠競」　同年五月、同座。「夏祭」の改作。
「尾上松緣洗濯噺」　同年七月、同座。轆轤首。
「累淵扨其後」　同年四月、市村座。累の怨靈。

「御贔屓繋馬」 同年十一月、同座。相馬内裏と信太妻。

「戻橋背御摂」 同年同月、市村座。二番目に茨城屋鬼七。（本集收錄）

「双蝶々化粧曾我」 同十一年正月、森田座。幸四郎の引窓與兵衛。（現今行はるゝ草摺引は此時出來たもの。）

「隅田川花御所染」 同年三月、同座。鏡山と女清玄。（本集收錄）

「復再松緑刑部話」 同年五月、同座。天竺德兵衛とお夏清十郎。

「新織博多稿入船」 同年七月、同座。博多小女郎と十木傳七。

「もと様かしくの文月」 同年同月、同座。お園、六三。

「世界花菅原傳授」 同十一月、同座。「天神記」の改作

「清盛榮花臺」 同十三年十一月、河原崎座。清盛火の病。

「其杯色三組」 文化十二年正月、市村座。おふさ德兵衛。

「懲紅葉汗顔見勢」 同年七月、河原崎座。伊達の十一役早替り。

「大和名所千本櫻」 同年十一月、同座。女湯のお里。

「杜若艶色紫」 同年五月、同座。土手のお六。（本集收錄）

「染替蝶桔梗」 同十三年八月、同座。光秀と双蝶々。

「木挽町曾我の賜物」　同年正月、同座。景清大日坊殺し。
「妹脊の縁利生の組絲」　同年同月、同座。本町綱五郎。
「櫻姫東文章」　同年三月、同座。清玄と小雛半兵衛。（本集收錄）
「惠咲梅判官贔屓」　同年十一月、都座。源九郎狐。
「曾我梅菊念力箭」　文政元年二月、同座。神道德次郎と帶屋長右衛門。（本集收錄）
「松竹梅東鑑」　同年五月、同座。八百屋お七。
「東染榮久松」　同年六月、森田座。お染久松、鬼薊清七。
「四天王產湯玉川」　同年十一月、玉川座。相馬太郎。（本集收錄）
「惠方曾我萬吉原」　同年正月、同座。佐野次郎左衛門。
「宿花千人禿」　同年三月、同座。清盛と茜屋半七。
「梅柳若葉の加賀染」　文政二年五月、玉川座。柳澤騷動。（本集收錄）
「蝶鵺山崎踊」　同年七月、同座。長吉、長五郎。（本集收錄）
「七小町櫓雫」　同年十一月、同座。小町とお七。
「梅曆曙曾我」　同三年正月、同座。清川文七。

「櫻舞臺幕の伊達染」　同年三月、同座。伊達。

「伊勢平氏額英幣」　同年四月、河原崎座。崇德院。

「三賀の庄曾我の島臺」　同四年正月、同座。小萬源五兵衛、小雛半兵衛、お千代半兵衛。（本集收錄）

「松尾上岩藤」　同年三月、同座。菊五郎の岩藤お初。

「敵討櫓の太鼓」　同年五月、同座。お八つ太鼓と八百屋お七。（本集收錄）

「玉藻前御園の公服」　同年七月、同座。九尾の狐。（本集收錄）

「月出村廿六夜諷」　同年同月、同座。玉屋新兵衛。（本集收錄）

「菊の宴月の白浪」　同年九月、同座。「忠臣藏」の改作。（本集收錄）

「妹脊山眺望千本」　同年十一月、同座。「妹脊山」と「千本櫻」

「松梅鶯曾我」　同五年正月、同座。平井權八と稻葉小僧。（本集收錄）

「現金浮名の糶」　同年四月、同座。おかめ、與兵衛。

「靈驗龜山鉾」　同年七月、同座。「龜山仇討」の改作。（本集收錄）

「御贔屓竹馬友達」　同年十一月、市村座。菊五郎團十郎和睦。

「八重霞曾我の組絲」　同六年正月、同座。お園六三と小絲佐七。

「浮世柄比翼稻妻」　同年三月、同座。不破名古屋と幡隨長兵衞。（本集收錄）

「法懸松成田利劍」　同六年六月、森田座。日蓮記と祐天、淸元の累。（本集收錄）

「幟雛石尊贐」　同年七月、同座。伊賀越と巖流島。（本集收錄）

「造物梅の由兵衞」　同年九月、同座。菊五郎の由兵衞。

「大和大和花の山樵」　同年十一月、同座。三津五郎の山姥。

「假手曾我當蓬萊」　同七年正月　同座。曾我と忠臣藏。

「牡丹蝶初筐」　同年三月、市村座。鏡山の二番目へ江戸の梅忠。

「男山惠源氏」　同年十一月、河原崎座。幸四郎の熊坂、白峯の神靈。

「御國入曾我中村」　同八年正月、中村座。權三權八。（本集收錄）

「紋盡五人男」　文政八年四月、中村座。鴈金五人男。（本集收錄）

「初冠曾我皐富士根」　同年五月、同座。夜討曾我。（本集收錄）

「東海道四谷怪談」　同年七月、同座。お岩と小平。（本集收錄）

「盟三五大切」　同年九月、同座。忠臣藏と五大力。

「鬼若根舞臺」　同年十一月、同座。鬼若丸とお染久松。（本集收錄）

「舞扇千代の松稚」　同年九月、河原崎座。松若丸。

「三升曾我顔見勢」　同九年二月、河原崎座。曾我とお駒才三。

「藤川船艤話」　同年五月、中村座。龜山仇討改作。（本集收錄）

「紫女伊達染」　同年六月、同座。伊達の改作。（本集收錄）

「曾我中村穐取込」　同年八月、同座。小雛半兵衛と三日月お仙。

「還花雪櫻勝鯨波」　同年十一月、同座。源平盛衰記。

「獨道中五十三驛」　同十一年閏六月、河原崎座。五十三驛の怪談。（本集收錄）

「蝶々孖梅菊」　同年正月、同座。双蝶々の改作。

「雪御伽平家」　文政十一年十一月、中村座。盛衰記とお七吉三。

「紅葉鹿封文曾我」　同十二年正月、同座。曾我とお七吉三。

「金幣猿島都」　同年十一月、同座、相馬御所。（本集收錄）

草双紙

に屬するものは次の如くである。

「小ひな半兵衛 二人茂右衛門 角兵衛獅子」春扇畫 六冊……文化六年

「婦女庭訓 喜右衛門之茶碗」同前 七冊……同前

「復讐大日坊物語」同前 六冊……同前

「うてや鳴 むかし物語 巴のおせん」同前 三冊……同七年

「夕霧 伊左衛門 浪花浴衣團七島」同前 六冊……同前

「お千代 半兵衛 初夢ばなし」同前 三冊……同前

「吾妻染大和屋紋」（一名、江戸染杜若紋）同前 三冊……同前

「二人 文七五 連立春雁（かりがね）」春扇畫 六冊……同前

「身振いろは藝」登龍齋畫 二冊……同前

「鏡山後日の佛」春扇畫 六冊……同前

「筆始金出の松」金藏畫 三冊……同前

「關羽 勘兵衛 張飛 五郎 花雲笠屋之連彈」春扇畫 六冊……同八年

「大日坊 隅田夕立 扇蝶お染が簪」 同前 五冊……文化八年

「梅川 忠兵衛 三度笠江島遊」 同前 六冊……同前

「繪本下界頭會」……同前

「椀久松山 硫屋五郎作 桑名屋徳藏 夜蒿賣名代鈂菊」 同前……同九年

「富士の山程 嬉しの千話文 美人膚雪の城木屋」 同前……同前

「二人左衛門 二人葛の葉 壽字染小萬紅筆」 同前……同前

「於國が戯場 二階の正本 女合邦戀の修行者」 豐清畫 一冊……同前

「えびらの源太 けいせい梅ケ枝 鶯姫梅の合宿」 春扇畫 三冊……同前

「鏡山化粧之紅筆」 國丸畫 五冊……同前

「丁子車手妻琴」 春扇畫 三冊……同前

「鹿子娘八百屋振袖」 同前 六冊……同十年

「子曳松一夜撿校」 國滿畫 六冊……同前

「富士太郎梅の隱家」國丸畫 五冊……文化十年

「江戸形氣女蝶兵衞」美丸畫 六冊……同十一年

「團七島於夏の浴衣」春扇畫 六冊……同前

「都染於花の振袖」國直畫 六冊……同前

「若草男猪之助梅ヶ枝花魁」龍子畫 三冊……同十二年

「戀の矢齋當り商賣息女草履打」春扇畫 六冊……同前

「大入角力一番太鼓」國直畫 三冊……同前

「蓑屋笠屋花雪降」豐國畫 六冊……同前

「國性爺倭話」貞繁畫 六冊……同前

「姥が池汀の山吹」國直畫 四冊……同前

「小ひな半兵衞紅仕立女達磨」重信畫 六冊……同十三年

「化納め歌右衞門草紙」春亭畫 三冊……同前

「梅與櫻二人權八」重信畫 六冊……文化十三年
「天の岩戸初日門松」龍子畫 六冊……同 前
「二蝶々菜の花草紙」豐國畫 六冊……同 前
「綱手車花の藤澤」美丸畫 六冊……同 前
「土蜘太郎一代話」春扇畫 六冊……同 前
「已惚鏡の藝者 一寸鏡の全盛 傾城草履打」重信畫 六冊……同十四年
「鳴戸越出世の島鯛」同 前……同 前
「福祿壽黄金の釜入」美丸畫 六冊……同 前
「伊勢道中戀の紀行」春扇畫 六冊……同 前
「市川流三升新琴」貞繁畫 三冊……同 前
「四季の花黄金の鉢植」貞繁畫 三冊……同 前
「東振浪花女」春扇畫 六冊……同 前

「敵討二挺三味線」六冊 春扇畫……文政元年
「四竹節二人白藤」同前……同前
「蝙蝠羽織苫通人」同前……同二年
「於妻八郎兵衛」同前……同前
「本草盲目集」三冊 自畫……同前
「瀧登黃金の鱗」六冊 春扇畫……同前
「三人若衆獨權八」六冊 重信畫……同三年
「梅の王由兵衛頭巾」六冊 春扇畫……同前
「合せ鏡對の振袖」六冊 國貞畫……同前
「寶珠玉岩井模樣」六冊 重信畫……同四年
「女灘右衛門」六冊 二世春好畫……同前
「由良湊娘甚孝記」十二冊 二世春好畫……文政五年

「高尾小紫夕露傾城三極子」豊國畫六册……文政五年
「花角力娘大全」同前……同前
「昔模樣戲場の雛形」國貞畫十二册……同六年
「浮世心學夜店の始」自畫三册……同七年
「女帶絲織八丈」英泉畫六册……同前
「成田山御手の綱五郎」豊國畫六册……同八年
「四十七手本の裏張」國貞畫六册……同九年
「女扇忠義の要」同前……同前
「通人料理かしくの獻立」英泉畫六册……同十年
「手本裏張後日いろは緣起」同前……同前
「褄模樣沖津白浪」同前十四册……同十一年
「怪談巖倉萬之丞」同前六册……同前

「昔ながら今物語」英泉畫 六冊……文政十二年

「小町紅牡丹の隈取」同前……天保二年

「怪談鳴見絞」（岩倉萬之丞後篇）同前……同前

此後の三作は、死後に其遺稿を出版したのである。

（逍遙）

解説及年表

『四天王楓江戸粧』

四世鶴屋南北は、尾上松緑の引立てに依り、文化元年十一月、木挽町の河原崎座で、初めて立作者の位置に据ゑられた。まだ南北と改名しない、勝俵藏の時代であつたが、彼れの齢は既に五十歳であつた。立作者——役者でいへば座頭である。その立作者として初めて筆を執つた狂言が、この「四天王楓江戸粧」であつた。南北が、どんなに緊張した心持で作つたかゞ想像される。

立作者になれたが、併し彼れは餘り幸福ではなかつた。彼れの後援者であつた尾上松緑（當時は未だ松助）は勿論一座に居たが、座頭の市川男女藏とは、仲が惡かつた。男女藏は、松緑の引立てゞ立作者となつた南北を排斥した。彼れは、親友たる烏亭焉馬を入れて、自己が主たる幕の筆を執らしめ、また、木村園夫をもスケの名義で入れさせて、南北に對抗させた。南北の心情が察しられる。この脚本で、南北

が、どの幕とどの幕とを受持つたかは明瞭でないが、四建目の「戻り橋」と、二番目とは、筆致から推して、明かに彼れの作だと斷定は出來る。そして、この狂言は好評だつた。南北も褒められた。彼れは、グイ〱と進んでゆく事が出來た。立作者としての第一作は、成功の方であつた。

「四天王楓江戸粧」は、江戸の顔見世狂言である。

簡單に、顔見世狂言の事を說明して置きたい。

江戸の劇場で、座主が俳優を抱へる契約期限は、滿一ヶ年であつた。毎年十一月に始まつて、十月に終る。十一月には、三座とも、座組みが新しくなる。關西から下つてくる俳優も、多くは此時を機會とした。新しい顔觸れで開演する第一回の興行が所謂「顔見世」で、芝居國年中行事のうち、最も重い、最も華やかなものであつた。其時上場される「顔見世狂言」は、江戸歌舞伎の特色を極端に發揮したもので、他の月の狂言が、時代に順應して、年々發達して行つたに係らず、「顔見世狂言」は、文化の初年までは、形式も內容も殆ど變らずに押し通して來たのであつた。「顔見世狂言」として、必ず具備すべき形式が二つあつた。一は、一日の狂言は必ず一番目(四幕乃至五幕)二番目(一幕乃至二幕)に分けられ、一番目を時代、二番目を世話にして、しかも其世話物が、最後には、必ず一番目の時代物に返つて、筋が首尾一貫するといふ事である。一は、狂言の「世界」(時代)が、ある小數な範圍に限定されてゐたといふ

事である。「御位爭ひの世界」（小町、黑主）、「伊勢物語の世界」（業平、松風村雨）、「前太平記の世界」（賴光四天王、相馬）、「奥州攻の世界」（義家、貞任）、「保元平治の世界」（淸盛、爲朝）、「平家物語の世界」（淸盛、宗盛）、「伊豆日記の世界」（賴朝、時政）、「木曾の世界」（義仲、巴）、「義經記の世界」（義經、辨慶）、「鉢の木の世界」（時賴、佐野）、「太平記の世界」（新田、足利）、「東山の世界」（不破、名古屋）、「甲陽軍記の世界」（川中島）、「出世奴の世界」（信長、秀吉）等が、主なるもので、顏見世ごとに此中から選定して、必ず新作した。此中で最も多く選ばれたのは「前太平記の世界」、「平家物語の世界」等で、最も尠いのが「東山の世界」、「甲陽軍記の世界」等であつた。『四天王楓江戸粧』は卽ち「前太平記の世界」である。此二つの形式は、弘化末年まで、可なり嚴重に守られて來たのであつた。

此外、十の顏見世狂言中、八つまでに、必ずのやうに見られた特色が、いろ〳〵あつた。たとへば、「三立目或ひは三立目の返しには「暫」があつた。」「三立目の返し又は四立目にはだんまりがあつた。」「四立目及び大切には所作事があつた。」「一番目の大詰めは金襖の御殿場に限つた。」「二番目の世話場は雪降りの景であつた。」「二番目は滑稽を主とし、これには、女房の離緣や、引越し騷ぎが使はれた。」「一番目のだんまりは二番目で解決した。」「狐又は樹木の精が現れた」なぞが、その主なるものであつた。

これらの形式や特色は、本篇をお讀みになれば自然と解る。

顔見世狂言の再演されたものは、其所作事を除くと極めて尠かつた。（「山姥」「關の扉」「安宅松」等は、後世まで殘つた顔見世狂言所作事の例である）。本篇も、或る一場面を除く外は、再演されなかつた或る一場面といふのは、一番目の大詰「暫」の場である。この場は、多少の改訂を施され、「御攝接若栬（ごひいきつぎきのもみぢ）」といふ名題で、現世市川男女藏が、大正六年四月、市村座で、襲名した折の披露狂言として上演され、初世男女藏の勤めた暫を、現男女藏が勤めたのであつた。

初演の際は、左の通りの役割であつた。

渡邊源次綱　（市川男女藏）
坂田主馬之丞公時　（市川男女藏）
碓氷荒太郎定光　（市川男女藏）
茨木五郎實ハト部季武　（市川男女藏）
辰夜叉御前　（尾上　松助）
土蜘の精靈　（尾上　松助）
古金賣り七面傳七實ハ
　相馬小太郎良門　（尾上　松助）
和泉式部妹、橋立　（小佐川七藏）
局、春町　（中村　松江）

源頼光　（尾上榮三郎）
袴垂れの安輔實ハ
　平井安輔　（尾上榮三郎）
息女花園姫　（中山富三郎）
足柄山の山姥　（中山富三郎）
女郎あがりのおつな實ハ
　小女郎狐の靈　（中山富三郎）
保昌妻、和泉式部　（小佐川常世）
女房おまさ實ハ
　良門妹七綾　（小佐川常世）
田原の千晴　（松本小次郎）

權頭妻、雪の戸　（中山常二郎）
安輔母、幾野　（山科四郎十郎）
丹波太郎鬼住　（市川　門藏）
若黨、仁八　（市川　門藏）
土蜘法印　（松本國五郎）

家主、茂九郎右衞門　（松本國五郎）
猪熊入道雷雲　（坂東彦左衞門）
さぼてんお婆ア　（坂東彦左衞門）
居候ふの彦　（坂東彦左衞門）
大宅太郎光國　（市川　辨藏）

『彩入御伽草（いろいりおとぎざうし）』

本篇は、南北がまだ勝俵藏時代、文化五年八月の市村座に書き卸した怪談劇で、「小幡小平次」に「播州皿屋敷」といふ、代表的な怪談を二つ組み合せて、新たに趣向を立てたものである。皿屋敷の傳説は、可成り古くから傳はつて居り、この以前にも數度、脚色上演されてゐるが、小幡小平次はこの時初めて舞臺に現はれたので、當時には新らしい怪談であつた。尤も、小平次といふ名は南北の創作ではない。享和三年刊行、山東京傳作、五冊物の讀本（よみほん）「復讐奇談安積沼（あさかのぬま）」が當時非常に行はれたので、その小説の主人公たる小平次を脚本に借用したのであるが、勿論單に名前だけで、筋は全然變つてゐる。

この狂言には、「天竺德兵衞」が附いてゐた。序幕が天竺德兵衞の術讓りで、大詰が天竺德兵衞の見顯は

しであつた。そして、その間へ小平次と皿屋敷とを一日變りに挿んで見せた。初日は「小平次」を、二日目には「皿屋敷」を、見せたのである。兩者の筋は連絡してゐるが、實演の際には交互に上場したのである。そして「小平次」の方が非常な好評を受けた。

この時の「天竺德兵衛」の脚本は、全然傳はつてゐない。百方捜索したが發見されないので、やむなく「小平次」と「皿屋敷」の四幕だけを一番目に收めて置いた。

「おつま八郞兵衞」は、この時の二番目狂言である。一番目とは連絡のない世話物であるが、特別に名題は附いてゐない。併し全然別箇な脚本なので、項を改めて收容した。當時本所の榛の木馬場に、これに似た人殺しがあつたのださうである。南北はそれを早速脚色したのであらう。

この脚本に就いては、一つの逸話が殘つてゐる。南北が、この脚本の本讀をしたのは夜であつた。本讀をしてゐる最中に。兩三度も戶に異樣な物音がした。これは小平次の亡靈の祟りであらうと恐れて、その夜は本讀を中止した。その翌日、小平次に扮する筈の尾上松助は激烈な熱病に罹つた。愈々これは祟りに相違ないといふので、回向院で盛大な施餓鬼をしたところが、松助の病氣は立ち所に癒えてしまつたので、直に初日を出した。この評判が市中に高く、芝居は非常な大入りを占めたが、實は物音も病氣も嘘で、南北と松助とが相談した擧句の、大袈裟な宣傳であつたといふのである。これが事實か何うか

は疑問であるが、南北は、斯種の宣傳が非常に巧みであつた事は本當である。

この狂言は再演されなかつた。併し、文政十年六月、市村座で、四世坂東彦三郎が勤めた「斯將優曲者(こゝにまためはえのくせもの)」といふ狂言は、明かに「彩入御伽草」の小平次の件を書き直したものである。彦三郎は、小幡小平次と、小平次女房お久の二役を勤めたが、非常に好評だつたので、江戸でも度々演じた。これが明治まで殘り、先頃物故した中村福圓が「怪談雨古沼(くわいだんあめのふるぬま)」として、矢張り早替りを賣り物に度々演じてゐた。いづれも木水や蚊帳を使つて早替りをするのである。「彩入御伽草」の形だけは明治まで殘つた譯である。尤も、默阿彌は小幡小平次の狂言を二種も作つてゐるが、これは「彩入御伽草」と直接關係はない。

役割は左の通りであつた。

小幡小平次	（尾上　松助）
小平次女房おとは 實ハ 鐵山妹山の井	（尾上　松助）
淺山將監鐵山	（尾上　松助）
三平姉、幸崎	（尾上　松助）
香具屋彌兵衞	（尾上　松助）
爲士、多九郎	（市川宗三郎）
淺山藤内景信	（市川宗三郎）
坂間新藤次	（市川宗三郎）
月若乳人、敷浪	（岩井龜次郎）
野宿の里賤女、お種	（岩井龜次郎）
丹波屋、助太郎	（花井才三郎）
醫者、小佐保天南	（坂東　善次）

馬淵伴五郎	（坂東　善次）
船越三平實ハ彌陀次郎時綱	（尾上榮三郎）
鰻屋八郎兵衛	（尾上榮三郎）
鮫鞘新助	（尾上榮三郎）
淺山腰元、おりく	（市川團之助）
八郎兵衛女房、おつま	（市川團之助）
小幡の百姓、正作	（尾上　斧藏）
古手屋三郎兵衛	（尾上　斧藏）
大場宗佐	（坂東大五郎）
韓坊主、ぽん七	（桐島儀右衛門）
奴、栗平	（市川　栗藏）
箱廻し、小助	（松本小次郎）
牟禮一角照光	（市川團十郎）
小旦那喜太郎	（市川團十郎）

『靈驗曾我籬（れいけんそがのかみがき）』

本篇は、文化六年四月、市村座へ書き卸した脚本で、前二篇と同じく、南北の勝俵藏時代、彼れが五十五歳の時の作である。

背景に曾我の世界を置き、本筋に龜山の仇討を立て、間々へ比翼塚を搦ませ、別に嫁切りを中幕的に挿んだ、非常に複雜な、長い脚本である。「この狂言大當りにて六月上旬まで興行す」と、歌舞伎年代記續編に特筆してある。

四月に曾我の對面を見せたのは異例であるが、これは、同年の正月元日早々、牛込左内坂から出た火事が堺町、葺屋町まで延燒し、市村座も燒失したので、その普請が四月になつてやう／＼出來た。この狂言が、同年に於る市村座の初興行なので、慣例に依つて曾我を一幕見せたのであるが、本來なら五月にかかる興行は、お家物と極つてゐるのであるから、本筋は龜山の仇討に依つて立てたのである。龜山仇討は、元祿十四年五月九日、龜山の城下に事實あつた出來事で、石井兄弟が亡父宇右衞門の敵、赤坂水之助を討つたのであるが、これは翌十五年、「道中評判仇討」といふ外題で、淨瑠璃に仕組まれた。作者は近松門左衞門だと云はれてゐる。これが戲曲としての最初で、その後に、義太夫としては、「道中龜山噺」（安永七年七月、近松半二作）「仇討優曇華龜山」（寛政六年十月、司馬芝叟作）等があり、歌舞伎としては、「仇討千手助太刀」といふ大阪狂言が最も有名で、江戸でも龜山仇討は、この狂言のみ行はれてゐたのであるが「靈驗曾我籬」に至つて、全然江戸式の龜山仇討が出來た譯である。南北はこの外にも龜山仇討を三種書いてゐる。いづれも後に本全集に收容された

白井權八幡隨長兵衞の狂言も、勿論「靈驗曾我籬」が最初ではない。義太夫に「驪山比翼塚」（安永八年七月、源平藤橘作）大阪歌舞伎に「思花街容性」（天明四年一月、並木五瓶作）「平井權八吉原衢」（寛政五年三月、並木五瓶作）江戸歌舞伎に「傾城吾妻鑑」（天明八年一月、櫻田治助作）等は、南北以前の權

八の戲曲として、最も有名な作であるが、南北の「靈驗曾我籬」に至つて、全く完成されたと云つていい。卽ち、有名な「鈴ヶ森の場」は、この時に初めて今日のやうな舞臺面に定まつたのであるし、「俎板の場」はこの時に初めて作られたのである。この二幕から龜山仇討の筋を拔いたものが、現今でも盛んに上演される「鈴ヶ森」と「俎板」の脚本なのである。

本篇の五幕目と六幕目とは、全體に筋の連絡はあるが、稍エピソードの形をなしてゐる。この二幕は「嫁切り」と俗稱されて、後に獨立した狂言になつた。讀んで別箇の狂言の如き感があるのは、元來が奈河龜助の作、義士傳の一節であつたのを、南北がこの件だけを借用し、スツカリ改訂增補して、澤村源之助の爲に挿入したからなのである。龜助の作とはいふが、如何なる脚本であるのか、いつ作られたものであるかは判然しない。その後は、すべてこの「靈驗曾我籬」に依つて上演された。

「靈驗曾我籬」初演の役割は左の通りであつた。

曾我十郎祐成（澤村源之助）
若黨、田邊文藏（澤村源之助）
絹賣り、彌市實ハ本庄助市（澤村源之助）
曾我五郎時宗（尾上榮三郎）

石井源之丞（尾上榮三郎）
寺西閑心（尾上榮三郎）
小林の朝比奈（坂東彥三郎）
田邊文太夫（坂東彥三郎）

右内娘、八重梅　（中村　里好）
長兵衛女房、お時　（中村　里好）
石井下部、袖助　（花井才三郎）
進藤沼五郎　（花井才三郎）
宇佐美七郎祐員　（花井才三郎）
八幡三郎行氏　（澤村四郎五郎）
久下玄蕃　（澤村四郎五郎）
船宿、因幡屋助八　（澤村四郎五郎）
石井右内　（市川門三郎）
北條四郎時政　（市川門三郎）
宇佐美庄司祐政　（市川宗三郎）
伊丹郷左衛門　（市川宗三郎）
醫者、藤川卜庵　（市川宗三郎）
梶原平三景時　（坂東彦左衛門）
足輕、彦兵衛　（坂東彦左衛門）

松蔵母、おなべ　（坂東彦左衛門）
下部、鐵平　（坂東　善次）
神職、左司馬　（坂東　善次）
久須美庄司景光　（松本小次郎）
神職、左近　（松本小次郎）
宗匠、石斧　（松本小次郎）
赤羽根五郎作　（澤村次之助）
梶原源太景季　（市川團兵衛）
中間、土手助　（市川團兵衛）
近江小藤太成家　（松本幸四郎）
藤川水右衛門　（松本幸四郎）
船頭、濱松屋松蔵　（松本幸四郎）
幡隨長兵衛　（松本幸四郎）
白井權八　（岩井半四郎）
手越の少將實ハ宗の小女郎　（岩井半四郎）

藝者、明石のお松　（岩井半四郎）
長兵衛一子、長松　（岩井松之助）
庄屋杢兵衛　（叶　新平）
二の宮太郎朝忠　（叶　新平）
本庄助太夫　（尾上　松助）
蒲冠者範頼　（尾上　松助）
化粧坂の少將　（澤村田之助）
郷左衛門、お妻　（澤村田之助）
三浦屋の小紫　（澤村田之助）
女髪結ひ、お大　（坂東岩次郎）
工藤左衛門祐經　（市川團十郎）
蝮の次兵衛　（市川團十郎）
大岸主水　（市川團十郎）

「龜山仇討」と「白井權八」を通したまゝで上演した事が、その後二度ある。その時の役割を左に對照して掲げる。

年月	文化十年九月	文政六年九月
座名	森田座	中村座
名題	『男一疋達引安賣』（をとこいつぴきいきぢのやすうり）	『御誂文高麗屋縞』（ごあつらへかうらいやじま）
長兵衛	松本幸四郎	松本幸四郎
水右衛門	松本　四郎	松本幸四郎
松藏	松本幸四郎	松本幸四郎
權八	岩井半四郎	岩井粂三郎
おまつ	岩井半四郎	岩井粂三郎
助市	市川團十郎	三桝源之助
閑心	市川團十郎	嵐　冠十郎
主水	市川團十郎	三桝源之助
源之丞	尾上紋三郎	坂東彦三郎

おとき	山下龜三郎	中村　松江
小紫	藤川　官吉	尾上菊次郎
八重梅	山下龜三郎	瀨川路之助
助太夫	市川宗三郎	松本小次郎

支番	澤村四郎五郎	淺尾　友藏
助八	澤村四郎五郎	坂東彦三郎
右内	市川門三郎	嵐　冠十郎
次兵衞	森田　勘彌	中村傳九郎

「鈴ケ森」と「俎板」の件だけは、その後も度々上演された。初演から二年後の、文化八年十月の森田座に、「江戸紫流石男氣」の名題で演じられた時には、既に龜山仇討の筋が拔け、下部八内といふ、本篇の因幡屋助八に該當する役が新たに設けられて、今日上演の臺本と殆んど違はなくなつた。極めて短期の興行であつたから、番附等も出版されなかつたので、役割は判然しないが、長兵衞は松本幸四郎、權八と長兵衞女房が岩井半四郎、閑心と下部八内とが關三十郎であつた事は確かである。

その後、「鈴ケ森」と「俎板」とを續けて演じた場合の年表を左に掲げる。

年月	座名	名題／役割	長兵衞	權八	おとき	閑心	八内	小紫
文政元、三	中村	幡隨長兵衞精進俎板	松本幸四郎	岩井半四郎	岩井半四郎	市川團十郎	坂東三津五郎	瀨川菊之丞
文政十一、三	中村	不負江戸男俎板	松本幸四郎	岩井半四郎	岩井半四郎	坂東彦三郎	松本幸四郎	中村　大吉

天保四、五	中村	三銀杏御存地染	松本幸四郎	岩井杜若	岩井杜若	中村芝翫	三桝源之助	中村芝翫
天保五、九	森田	花川戸名物俠客	坂東三津五郎	澤村訥升	澤村訥升	嵐冠十郎	澤村清十郎	坂東玉三郎
天保十四、八	中村	花川戸紫其名所	市川高麗藏	岩井紫若	岩井杜若	嵐吉三郎	澤村清十郎	岩井紫若
嘉永三、三	河原崎	杜若手向花川戸	市川海老藏	岩井粂三郎	岩井粂三郎	坂東彦三郎	市川九藏	市川團之助
嘉永六、十一	中村	意升手向花川戸	市川高麗藏	市川猿藏	吾妻市之丞	市川團十郎	市川猿三郎	中村歌女之丞
安政五、十	市村	小春宴三組杯觴	市川海老藏	河原崎權十郎	尾上菊五郎	市川小團次	市川米五郎	中村歌女之丞
文久二、九	市村	花川戸未熟者中	河原崎權十郎	市村羽左衛門	岩井粂三郎	中村芝翫	關三十郎	中村歌女之丞
明治五、五	守田	御存幡隨長兵衛	河原崎權之助	岩井半四郎	岩井半四郎	市川左團次	中村翫雀	河原崎國太郎
明治二十八、六	明治	御存幡隨長兵衛	市川團十郎	市川權十郎	坂東秀調	市川左團次	市川小團次	市川米藏
大正六、十一	市村	御存幡隨長兵衛	中村吉右衛門	尾上菊五郎	河原崎國太郎	守田勘彌	中村東藏	尾上菊次郎

「嫁切り」の二幕も、左の通りその後度々演じられた、役名は、時に依つて變へられるので、側へ記して置いた。

年月	座名	名題	文藏の役	お妻の役	文太夫の役	郷左衛門の役	沼五郎の役

文政五、四	市村	時鳥雨夜杯(ほととぎすあまよのさかづき)	(稻の谷半兵衛)市川團十郎	(小ひな)市川門之助	(稻の谷半太夫)澤村四郎五郎	(伊丹覺左衛門)大谷馬十	(近藤沼五郎)淺尾友藏
文政九、三	河原崎	花雨濡嫁入(はなのあめぬれてよめいり)	(稻の谷半兵衛)市川團十郎	(小ひな)中村龜之丞	(稻の谷半太夫)片岡仁左衛門	(伊丹覺左衛門)片岡仁左衛門	(近藤沼五郎)嵐七五郎
天保三、二	中村	假名手本忠臣藏(かなでほんちゅうしんぐら)	(潮田又之丞)市村羽左衛門	(おつま)岩井紫妻	(潮田又左衛門)山下京四郎	(伊丹幸左衛門)坂東三津右衛門	(近藤沼五郎)坂東三津右衛門
天保八、五	市村	小いな半兵衛嫁切り(こいなはんべえよめきり)	(稻の谷半兵衛)市村羽左衛門	(小いな)岩井杜若	(稻の谷半太夫)坂東三津五郎	(伊丹覺太夫)坂東三津五郎	(近藤沼五郎)市川海老藏
天保十四、九	市村	畫三艷僞毫(かいてみついろのにせふで)	(稻の谷半兵衛)市村羽左衛門	(小いな)尾上菊次郎	(稻の谷鄉助)淺尾工左衛門	(伊丹覺左衛門)淺尾工左衛門	(近藤沼五郎)關三十郎
嘉永元、三	中村	忠孝譽高輪(ちゅうこうほまれのたかなわ)	(佐藤與茂七)市川九藏	(おいと)岩井粂三郎	(佐藤鄉助)市川男女藏	(岩木忠太兵衛)市川男女藏	(進藤浪次郎)關三十郎
明治元、十	市村	東京忠臣由良意(あづまのみやこちゅうしんのゆらい)	(佐藤與茂七)大谷友右衛門	(おみつ)坂東三津五郎	(佐藤鄉助)關三十郎	(岩木忠太兵衛)關三十郎	(近藤太平次)坂東彥三郎
明治七、十一	中島	雨夜杯濡花嫁入(あまよのさかづきぬれてのめいり)	(佐藤與茂七)中村重藏	(お花)嵐德之丞	(佐藤鄉助)坂東太郎	(伊丹鄉右衛門)吉川路鳥	(近藤沼五郎)吉川路鳥

渥美清太郎識

四天王楓江戸粧

してんわうもみぢのえどぐま

四天王楓江戸粧

第一番目　三建目

愛宕山の場
岩倉山の場

役名――川原ノ千晴。猪熊入道雷雲。大宅ノ太郎光國。坂戸七郎。加藤九郎。山伏九郎雲高。岩角重藤光遠。大江八郎。石黒兵藤。一の瀬源吾近忠。刀鍛冶、唐作實ハト部季國。石蜘法印。侍女、春町。同、早咲。同、くれなゐ。權ノ頭妻、雪の戸。高明姉、辰夜叉御前。渡邊源次綱。

本舞臺、三間の間、朱塗りの廻廊。上の方に好みの松ケ枝。すべて愛宕山のかゝり。爰に早咲、振り袖着流しの上へ、錦摺り込みの直垂れの上ばかり、天冠をかむり、下の方にくれなゐ、小烏帽子に素袍の上ばかりを引ッかけ、短かき槌と挺を持つて、よろしくすまふ。坂戸の七郎、加藤の九郎、半素袍のなりにて、左右に床几にかゝり、控へゐる。仕丁大勢、うしろに立ちかゝつてゐる。幕の内より、「神事の始まり」と呼びあつて、賑やかなる人寄せの鳴り物にて、幕明く。

七郎　當今花山の院、御行くへなうなり給ひし所、近來所々に變化あつて、多くの人を惱ますとの取り沙汰ゆゑ、君の御行先き知らんがため

九郎　今日西の宮の高明卿、奉幣使のお成りにつき、神事今様相勤めよとの仰せに隨ひ
七郎　斯く檢分のわれ〳〵兩人。
九郎　急いで神事を始めてよからう。
仕丁　ハア、。
早咲　見渡せば、樹々の梢も紅葉に、照りそふ花の今日顏見世。
くれ　御免を請けて賤の身が、役にさゝれし神事の今様。
早咲　小鍛冶の見得を
くれ　かり衣。
早咲　歸り新參
くれ　新お目見得。
早咲　相手になつて相槌を
くれ　打つも惠みの
兩人　河原崎。
七郎　きり〳〵神事に

皆々　かゝれエヽ。

トこれより槌の所作になつて、よろしく納まる。この所作の切れに、早咲は懐中より白絹の密書を落す。七郎これを取上げ、

七郎　これなる女が懐中より、とり落したる怪しき白絹。およそ唐土の遺帖といふもの、ろかんはふしやの薬を以て、栴檀の板に書き附け置く、死後に及んで湯を注げば、遺言委く現はるゝと聞き及ぶ。

九郎　察する所この絹も、人目を憚かる願書の類か。何者なれば神事の役人となつて、この所へ入り込んだ。

兩人　その俗性を明かすまいか。

早咲　そのお疑ひさる事ながら、全く怪しき者にあらず。お咎めをうける上からは、今は何をか包むべき、われ／＼は花山院の、御所女の童。

くれ　弘徽の女御のお別れを、嘆き悲しませ給ひ、行くへなうなり給ひしゆゑ、神事の役を勤めしも、神の告げにて君の御行くへを知らんがため。

早咲　愛宕へ祈誓の今日の今様。

くれ　お疑ひを、お晴らしなされて

兩人　下さりませいなア。

七郎　イヽヤ、それぢやァ濟まない。都の虛に乘つて相馬の一族、純友の餘類、叛逆の企てあるとの取り沙汰。それのみならず、大江山の鬼神、野瀬山の大蛇、多くの人を惱ますよし

九郎　都の注進、齒を引くが如し、大方わいらも、さういふ奴の廻し者であんべい。

七郎　われ／＼の目にかゝつたが、うぬらが因果。

九郎　高明卿の御前へ引く。

兩人　女め、うせう。(ト引ッ立てにかゝる。)

早咲　待つた。僞り飾らず身の上を、お話し申した其上にも、まだお疑ひが晴れませずば、高明公の御前はおろか

くれ　どなた樣のお目通りにも參りませうが、滿願みたざるその內に、身に凶事あつては心がかり。

七郎　さう吐かせばとて坂戸の七郎景連。

九郎　加藤九郎盛時、いま兩人を引つ立てる。

兩人　女め、うせう。

ト引ッ立てかゝると、向うにて

呼び　高明卿御社參。

早咲　ナニ、高明卿の

兩人　御社參とな。

七郎　女め、動くな。

トきつと思ひ入れ。三味線入りの樂になり、花道より猪熊入道雷雲、坊主の拵へにて、緋の衣、兜巾篠懸、斧を持ち、高足駄にて、笈を背負ひ、附け太刀。山伏九郎雲高、上下衣裳、傘をさしかけ、岩角軍藤光遠、三方に蒔繪の御鏡の箱をのせ、うや〳〵しく持つて出てくる。大江八郎、石黑兵藤、半素袍烏帽子にて、三方に告文と錫の神酒德利とをのせ持つて出てくる。奴鷲平實は二の瀨の源吾、箱を抱へ、取まかれ出てくる。

猪熊　雀海中に入つて蛤と、なる程餘年を經て、海に千年山伏と、見立てられたる猪熊入道、今日山入りと出かけて來た、路次を遮る不屆き者。

山伏　お供にくつ附く山伏九郎、雲高ぼッくな七曲り。

岩角　岩角軍藤光遠が、とうから睨んだ箱の內。

大江　大方それと大江の八郎、時定かには知れねども

石黒　丸い黄金か石黒兵藤、宗忠ならぬ怪しい奴。

猪熊　なぜ妨げを

一同　ひろいだヱ、。

源吾　(思ひ入れあつて)怪しき者とのお疑ひ、御尤もではござりまするが、田原の千晴が草履つかみ、鷲平といふ武骨者、主人が社參の先走り、お供を割つたも夢現、とるに足らざるうつけ者、御免なされて下さりませ。

猪熊　イヽヤ、その云ひ譯ぢやァ濟まされねど、高明卿の御名代、奉幣使の役目終つた上の事。

山伏　まづそれまでは雷雲どの。

猪熊　方々、こなたへ

四人　まづお越し、あられませう。

ト鳴り物の切れにて、皆々本舞臺へ來り、よろしく住ふ。この時坂戸七郎それへ出て

七郎　これは〳〵、西の宮の左大臣、高明卿と思ひの外、猪熊入道雷雲どの、今日のお役目、御苦勞千萬に存じまする。それに就いてわれ〳〵が、神事の警護致せしところ、怪しき女を、引ツ捕へま

してござりまする。

猪熊　ナニ、怪しき女とは、そりや何奴。

四人　そこへ引き出して、顔を見せさッしやい。

七郎　サア、女め、そこへ。

ト早咲、くれなゐを眞中へ突き出す。兩人思ひ入れ。

四人　この女が、如何致した。

七郎　サア、いづれも、聞いて下さい。あの白絹こそ、何やら祕文を書いた願書、人目を忍んで所持するは、なんと怪しいではござりませぬか。それゆゑ捕へ置きましてござります。

山伏　いかさま、そいつは怪しいわえ。

岩角　雷雲ならぬ高明卿

四人　お聞きあられましたか。

猪熊　いかさま。その願書、これへ。

七郎　心得てござる。

ト七郎、女形の持つてる願書を取つて雷雲に渡す。雷雲見て

猪熊　坂戸の七郎、貴殿いま願書とおいやつたが、何にも書いてはござらぬぞよ。

七郎　(取つて見て)成ろ程、知れぬ筈でござります。此やうな密書には酒をかけると、文字が現はれると承つて居りますれば、神前へ參つて酒をかけて、御覽じたらようござりませう。

山伏　それならそりやァ、マアそれにしておいて、女が俗性

皆々　眞直に名乘れ。

早咲　幾度お尋ねなされたとて、花山の院の御所づとめくれ女の童と申しまするより外に、名乘りまする名は

兩人　ござりませぬわいなア。

山伏　しぶとい女め。

岩角　この上は、われ〳〵が

ト山伏岩角の兩人、早咲、くれなゐを引ッ立てようとする。この時、鷲平實は源吾出て、山伏等を突きのけ、女形兩人を圍つて、きつと見得。

山伏　コレ、奴め。うぬが體の疑ひ晴れぬ内から、しや〳〵り出て、何とするのだ。

岩角　すッ込んでうしやァがれ。

源吾　イヽヤ、すツ込みますまい。可哀さうに二人の女、あれほど云ひ譯するを無理無體に、道も法も知らない奴の、いふ事を聞いてゐる耳は持たないヮ。

猪熊　ヤア、わが前とも憚らず、出る儘の過言、なんで道を知らぬと吐かす。

源吾　聞きたくば云つて聞かすべい。耳の穴を掃除して、よく聞きやァがれ。

七郎　サァ、耳の穴を掃除して待つてゐる。

一同　キリ／＼と吐かしやァがれ。

源吾　イヤ、外でもない。上座に緋の衣を着てござらつしやる見越し入道どの、西の宮の左大臣、高明卿の御名代、この愛宕へ奉幣使に、お立ちなされたと承つたが、肝心の愛宕へ行かぬ内から、道草をくつてもお役儀が濟むのか。道も法も知らぬといつたが、この奴が誤まりぢやァあるまいがな。

猪熊　一度ならず二度ならず、雜言緩怠、引つ立てめされい。

山伏　サァ、雷雲どのゝ仰せ。三人ともに

一同　うしやァがれ。

ト立ちかゝる。源吾思ひ入れあつて

源吾　オヽサ、参れとあらばどこまでも、お辭儀なしに參りますべい。

早咲くれ　モシ、それぢやというて。

猪熊　引つ立てろ。

一同　うしやアがれエヽ。

ト下り羽になり、雷雲先に源吾、早咲、くれなゐ、敵役一同附き添ひ、皆々下座へ入る。大拍子の神樂になり、花道より春町、田舍女の拵へ、手拭を頭へ卷き、裾を端折り、藁苞を背負ひ、菅笠を持つてくる。跡より大宅の太郎、福助人形の雨掛けの荷をかつぎ、深草燒の商人にて出てくる。

大宅　モシ〳〵、女中さん、最前から後になり先になり、これまで來ましたが、お前もこの愛宕へ、參詣のお方でござりますかな。

春町　ほんにさう云はしやんすりや、最前もちよつとお目にかゝつた商人さん。わたしも久しぶりでこの靈場、初々しうてならぬによつて、どうぞこれから、道連れになつて下さんせいなア。

大宅　イヤ、初々しいといへば、わしとても矢ッ張り、久しぶりの歸り新參、丁度よい道連れだ。そんなら一所に行きませうか。

春町　それは嬉しいわいなア。

大宅　そんなら一所に
春町　サア、ござんせいなア。
　　　トこれにて兩人本舞臺へ來り、大宅の太郎、荷を下して
大宅　あの山坂をはる〴〵と登つて來たせゐか、大きに草臥れました。なんと、一服のんでゆかうぢや
　　　ごんせぬか。
春町　それがようござんせうわいなア。
　　　ト兩人一所に下にゐて、春町は藁苞を取り、脇に置く。
大宅　時に、見たところが、お前も年若な女中の、ひとり旅の御樣子、それには深い樣子もござんせ
　　　う。して、どこからどこへ行かつしやりますぞ。
春町　サア、わたしはズッと東の者でござんすが、親の行くへを尋ねて、はる〴〵と都三界へ、上つて
　　　參りましたわいなア。
大宅　そりやァ大抵な事ぢやァござるまいが、兎角人間は、辛抱が大事でごんすぞえ。
春町　それいなア。見ればお前は、可愛らしい人形を賣らしやんす樣子、そんなら都のお方でござんす
　　　な。

大宅　アイ、いま流行する深草燒の人形、この福助は身の出世と、愛敬守りのもてあそび、商ひますが腹からの、都の者でもござりませぬて。

春町　話し合うて見たならば、わたしが父さんを、尋ぬる傳手にもなりさうなお方、ほんによい所でお目にかゝりましたなア。コレ、福助とやらの人形さん、わたしもどうぞお前にあやかつて、愛敬をたんと貰うて、いつまでもこのお庭にゐて、身の出世するやうに、お守りなされて下さんせいなア。

ト福助人形を取つて、よろしくせりふを云つてゐる。ドロ〳〵になり、松ヶ枝より蜘蛛舞ひ下りて來て、藁苞の中より、金の鍬形を引き出し、これを咬へて我が巣へ引き込む。兩人これを見て、恟りして思ひ入れ。この時向うにて

呼び　田原の千晴參詣。

ト矢張り薄ドロ〳〵、かむせて太鼓謠ひになり、花道より田原の千晴、上下、小さ刀、百日鬘にて出て來り、松ヶ枝の蜘蛛を見上げ、三人一所にきつと見得になる。これをキッカケに、小太鼓の樂になる。

千晴　ハテ、心得ぬ。いま相模之助田原の千晴、愛宕山へ參詣の、折に臨んで笹原の、遠目にしかとは

判らねど、黄金と見紛ふ怪しき一品、絲より細き雲井にまとひ、引き上るあの有様。昔唐土咸陽宮に、一つの蟲現はれ出で、針を好んで食せしと聞き及ぶ。

春町　宮女その輿に乗じ、戯れのあまり、有あふ鐵氣を與へしかば、忽ち體巨大にして

大宅　後にはその身鐵の如く、刃をくひ折り刀を呑み、國中亂の基となる。

千晴　まつた我が朝にては泰平年中、父にて候ふ田原藤太秀郷

大宅　勅諚に依つて江州の、三上山の大百足、鐵をも呑みしを退治し給ふ。

春町　それは古へ、今も又、葛城山に年經りし、蜘蛛の妖術なすとの噂。

大宅　それをかんがみ、これを悟れば

千晴　御代の善悪

春町　身の吉凶

大宅　怪しき蜘蛛の

三人　振舞ぢやなア。

ト小太鼓の樂打ちあげる。千晴、ツカ〳〵と寄つて、拔き討ちに松ケ枝を打ち落す。ドロ〳〵やむ。千晴、鍬形を取り上げる。

千晴　こりやこれ、天慶の亂に亡びたる、平親王將門が、黄金の鍬形。

春町　それを

トかゝる春町を引ッ捕へ

千晴　思へば今のさゝがにも、葛城が蜘蛛の業ならん。この一品を所持するからは、良門が身寄りの女、繩打つて詮議する、腕廻せ。

春町　イヽヤ、身に覺えなきお疑ひ、左樣な者ではござりませぬ。

千晴　ヤア、正しく證據のある上は、陳ずるとて陳じさせうか。女め、腕廻せ。

ト繩さばきして立ちかゝる。

大宅　イヤ、マアさうは成りますまい。

千晴　すりや其方には朝敵たる、良門が肩持ちめさるか。

大宅　イヤ、朝敵の肩は持たない。

千晴　その肩を持たぬ者が、何ゆゑ女をかばふのだ。

大宅　イヽヤ、かばひは致さぬが、この女はたつた今、わしと道連れになつて來た、ひとり旅の女ゆゑ、身元は知らぬが旅は道連れ、あなた樣の御自由にはなりますまい。

千晴　すりやこの女は、ひとり旅といふか。
大宅　アイ、ひとり旅でござりますわサ。
春町　はるか東の、田舎者でござりますわいなア。
千晴　ムウ。あの鍬形を所持するからは、正しく相馬の、（ト思ひ入れあつて）　それなる女、田原の千晴が抱へてくれう。
春町　それいなア。一樹の蔭、一河の流れとやら、そりやマア、誠の事かいなア。
千晴　それについて、千晴が心は　（ト合ひ方になり、今切り折つた松の枝を持つて來て、春町の前に置き）　この謎を解いて見せい。
春町　アノ、松ヶ枝のこの謎を、わたしに解けと仰しやるのか。
千晴　いかにも。
大宅　こいつは何だか、むづかしく引つ搦んで來た。
春町　何であらうな。秦の始皇の昔より、松に大夫の位あれば、文字かざしを着せしと聞く。
千晴　とりも直さず、其方の身の上。
春町　どうしてわたしに

大宅 イヽヤ解つた、謎が解けた。
春町 早う云うて聞かしやんせいなァ。
大宅 アヽ、ざつと斯うだ。松が大夫の位を取つたも、秦の始皇がその松に、惚れたからやつたのだ。女は氏なうして玉のかんむり、たとへて云はゞ、こなさんはその松の木、千晴様は始皇の帝、なんと、あんまり違ひはあるまいがな。
千晴 イヤ、驚き入つた松の判斷。
春町 そんならアノ千晴様が、大夫の位を下さんすといふ、お心ぢやといはしやんすかえ。
大宅 オヽサ、こなたの器量に現をぬかし、秦の始皇の松の引き事、女房にする氣になつたのだ。
春町 そのお志しは嬉しけれど、どうもお心が知れぬわいなァ。
千晴 ナニ、心が知れぬとは
春町 嬉しがらせたその上で、又今のやうに
千晴 イヤもう云はぬ。疑ひ晴れずば金打せうか。
春町 アノ、ほんまに
ト羞かしき思ひ入れ。大宅太郎は春町を千晴の側へ突きやる。

そんならアノ、お側へ寄つても大事ないかえ。

千晴　此方から願ふところだ。

春町　恥かしいわいなア。

ト寄り添ふ。薄ドロになる。千晴、春町はムウと悶絶する。大宅太郎思ひ入れあつて、千晴が懷中の袱紗包みを引き出す。トこれにて兩人心附く。ドロ〳〵やむ。

大宅　女中、心が附いたか。千晴どのとやら、氣がはつきりなされましたか。

千晴　すりや、夢となく、現となく

春町　あなたも、わたしも

千晴　悶絶なせしは……………ムウ。

ト此うち大宅太郎、今の服紗包みを開き

大宅　こりやコレ先帝花山の院、御遁世の砌り殘されたる、眞筆の御遺文。その御遺文紛失ゆゑ、未だ御卽位定まらず、密かに詮議と聞き及ぶその一品。そんなら今の動搖は、この一品を所持せし故か。

千晴　（思ひ入れあつて奪ひ取り、ちやつと懷中して）イヽヤ、そんな物ぢやァない。

大宅　でも、見すく〳〵
千晴　こりやア某が濡れ文でござる。
大宅　アノ、それが
千晴　いかにも。
大宅　ハテなア。（ト思ひ入れ。）
春町　濡れ文と云はしやんすからは、可愛がらしやんすお方が、たんとあるに極まつたわいなア。
千晴　イヤ、たんとあらうが、あるまいが、妻になつたら云ひ分あるまい。
春町　ほんまに持つて下さんすか。
千晴　一旦持たうと云つたからは、金輪奈落變ぜぬ魂ひ。
大宅　その魂ひがうろたへて、やがて憂き目を見ぬ内に、マア仲人は宵の程。
春町　その色直しの濟むまでは
千晴　花嫁御寮は其方へ。
春町　やがてめでたう
大宅　迎ひの輿。

春町　必ず待つて居りますぞえ。

ト唄になり、思ひ入れあつて、大宅太郎と春町は、下座へ入る。千晴は跡を見送り、思ひ入れあつて

千晴　大事の一品を、ちらりと見た今の兩人、どうで生けちやァ置かれぬわえ。

ト大拍子になり、下座より猪熊入道雷雲に、坂戸七郎、山伏九郎、岩角軍藤、加藤九郎、二の瀬の源吾を引ッ立てゝ出てくる。

猪熊　千晴どの、これにござりましたか。某は最前より、貴殿の參詣を待つてゐました。

千晴　お待ちなされたは、何用でござるな。

猪熊　イヤ、外の儀でもござらぬ。この奴め、貴殿の召仕だと吐かしまするが、いよ〳〵左樣でござるかな。

千晴　いかにも某が家來、鷲平と申す者でござる。

猪熊　然らばこの入道、あの奴めをお貰ひ申したうござる。なんと某に下さるまいか。

千晴　いかにも、お望みなれば、進ぜますまいものでもござらぬが、そりや何故でござるな。

七郎　その仔細は奉幣使の、使ひを割つたる不屆き奴。

山伏　無禮咎めを仕れば、千晴が家來と我意をして

岩角　無禮緩怠雜言過言、その上怪しき女が身許。

九郎　詮議の妨げひろいだ科。

猪熊　のッぴきならぬこの雷雲。

源吾　この奴めが店おろし、雜言過言は云つたに違ひござらぬが、供を割つた覺えはないワ。

猪熊　まだヌケ〳〵とその僞り。供を割つたその代りに、この鉞でうぬが頭を、割つてやるのだ。

源雲　お望みならばどなた樣でも、跡へは退かぬ。

山伏
岩角　その舌の根を

　　ト切つてかゝる。立廻りに、兩人の刀を打落し、取つて投げる。坂戸七郎、加藤九郎、入れ替つて拔いて切り附けるを、留めて

源吾　首の掛け替へあるなれば、容赦はせぬが、命惜しくば刀を引け。

七郎
九郎　さう云ふうぬを

千晴　方々、控へめされい。

七郎
九郎　なぜ留めさつしやる。

千晴　切角入道どの御所望なれど、進上致す事罷りならぬ。

猪熊　この入道が貰ひかゝつた下郎め、ならぬとありやアこの上は、この雷雲が相手になるぞ。

千晴　見事汝が

猪熊　おんでもない事。

千晴　サア拔け。

猪熊　サア拔け。

兩人　イヤ、小癪な。

ト兩人詰め寄る事あつて、互ひに顔見合せ

千晴　ム、

猪熊　ハヽ

兩人　ムハヽヽヽヽ。

千晴　猪熊どのといひ。

猪熊　千晴どのといひ、日頃仲よい同腹中。

千晴　些細な事に

猪熊　いかいたはけな。

千晴　斯うなるからは、後に根も葉も殘らぬやう、いづれも一所に

皆々　ア、ヨイ〳〵〳〵。

千晴　イヤ、その者は見どころござつて、この度召し抱へました、某が下郎でござれば、各々方の御所望にはえゝ任せますまい。切り捨てに致さうが、どう致さうが、ナ、そりや某が心任せ、いづれもの手は借り申さぬ。なんと御合點が參つたか。（ト思ひ入れ。）

猪熊　ムウ、成る程〳〵、承知致した。そんなら貴殿の勝手におしやれ。

ト納まる。大拍子になり、花道より若黨一人、菖蒲革出立ち、仕丁に唐櫃をかつがせ出て來り

若黨　千晴公へ申し上げます。仰せに隨ひ伏見へ立ち越え、勅諚と申し聞かせ、則ち小狐丸の一腰を受取り、立歸りましてござります。

千晴　オヽ、大儀々々。

若黨　それに附きまして只今、高明卿の執權、室津權の頭が妻雪の戸とやら申す女、一人の下郎を召し具し、お目見得を賴みますが、如何計らひませう。

千晴　オヽ、それこそ刀鍛冶ならん。待ち兼ねた。こなたへとお云やれ。

七郎　ハツ。（ト七郎花道の方へ向ひ）　室津の内室雪の戸どの、召し具されし男子もろとも、急いでこれへ。

雪戸　（向うにて）　委細畏つてござりまする。

ト管絃になり、花道より雪の戸、裲襠衣裳。跡より刀鍛冶唐作、木綿の裁附を穿き、出て來り、花道附け際に控へる。

岩角　雪の戸どの、召し具されし男は

山伏　刀鍛冶唐作でござるかな。

雪戸　（こなしあつて）　まことに、數なりませぬ不調法の私しを、身にあまりましたるお取り立て。主人高明、申し越しましたお使ひの趣きは、兼ねて仰せられました、筑前の國三笠の郡、土山と申す所に、年を重ねましたる、寶珠文珠の唐作と申しまする刀鍛冶、辭退致すを無理やりに、昨夜參着、今日奉幣使の節、御面唔と存じの外、風邪の心地ゆゑ、女ながらも雪の戸を、密々のお使ひ召し連れました唐作に、お詞下し置かれませうならば、有り難う存じまする。

千晴　御念の入りし高明卿のお使ひ。（ト唐作へ向ひ）　刀鍛冶、寶珠文珠の唐作とは其方よな。

唐作　ハツ。

千晴　目通りへズッと參れ。

唐作　然らば御免下さりませう。(ト本舞臺へ來る。)

千晴　某儀は、相模之助田原の千晴と申す者。其方、業に秀でたる事を聞き及ぶ。この度召し寄せしは即ちこの一品。

ト源吾が持つてゐたる箱の中より、鐵の丸がせを取出し、唐作の前へ置く。唐作思ひ入れあつて

唐作　ムウ、そんなら爰は、大内山とやらではござりませぬか。

源吾　いかにも爰は、大内山といふではない。王城より西に當つて、愛宕山といふ靈場。

唐作　アヽ、嬉しや〳〵、私しは又、御禁中樣の御前へ出ます事かと、惣身がブル〳〵して、齒の根も合ひませなんだが、ちつと氣が落ち着いて參じました。

千晴　イヤナニ、寶珠文珠の唐作、其方が父は、唐土人と聞きつるが、しかと左樣か。

唐作　ハツ、仰せの通り、父は唐土京府といふ所に、唐來明といひし鍛冶なりしが、私しもその業を繼ぎまして、營みまするやうにござりまする。して、召し寄せられたる御用、この品とある、その仔細は。

千晴　これは我が父田原藤太秀郷、龍宮城より取り來りし鐵の丸がせ、元より人間界の物に非ず。これ

を鍛へて劍となさば、唐土の干將莫耶、我が朝の十握の名劍にも劣るまじと、龍神の敎へ。父の遺言。この丸がせを地金として、將軍の御劍二腰を打たせよと、名作の鍛冶を選むところ、今日幸ひ其方が事を承り、迎ひを遣はしたるところ、早速の上京 祝着致した。劍成 就の上は、莫大の恩賞を取らす。まづ地金の目利き致せ。

唐作 ハツ〳〵。

ト舞臺の眞中に出て、この丸がせを取り上げると、管絃になる。唐作これを甞めて見る事などあつて、

千晴 ハア、天晴れ無類の地金、和國はおろか唐土にも有るまじ。いかなる名劍ともなるべき重寶。拜見するさへ鍛冶の冥加。打ち上げの儀は思ひもよらず、偏へに御免下されませう。

千晴 すりや、はる〴〵の所を、心を盡して呼び寄せた唐作、打ち上げの儀は免しくれよといふのか。

唐作 誠に恐れ入りましてござりまする。

猪熊 (思ひ入れあつて) イヽヤ、それぢやァ濟まないワ。初めから打たぬ氣なら、はる〴〵の所を、なぜ上京した。

唐作 サア、その儀は

猪熊 刀鍛冶を呼び寄せて、堂宮建てうといふべら棒があるものか。邪でも非でもこの丸がせ、一振り

の劍を打ち上げぬ内は、生けて國へは歸さないワ。

唐作　すりや、どのやうに御辭退申しても

猪熊　叶はぬ事だ。

唐作　ハツ。（ト思案のこなし）

雪戸　深い樣子のある事かは存じませぬが、お受けなうては、立歸つて御主人へ、何と申し上げやうもない仕合せ。唐作どの、いつの幾日までに打ち上げますと、ツイ請合うて下さんせいの。

唐作　折角のお心入れなれど

皆々　劍を打つ事ならぬといふのか。

唐作　いかにも、罷りならぬ。（トきつと云ふ）。

皆々　そりや又なぜ。

唐作　職人の中でも刀鍛冶は、天下の安危を預かる業、世の常の町人とはアイ、魂ひが違ひますワ。

皆々　何がどうした。

唐作　この劍な打たす氣なら、なぜ打明けてお頼みなされぬ。

敵役
四人　ヤア。（ト思ひ入れ）

唐作　勅命と僞つて、なぜ唐作を釣り寄せたのだ。

雪戸　サア、それには段々

唐作　譯があらうが、仔細があらうが、よこしまから出た劔の鍛へ、この唐作は打たれませぬ。

猪熊　すりや、勅命とだにあらば

唐作　知れた事、勅とあるから上京したこの唐作。只今にても打ち上げまする。

千晴　然らば今より參内して、勅を以て申し附けん。

ト立ち上がるを、唐作その裾をとらへ

唐作　イヤ、勅諚は合點で、上つてくる道噂を聞けば、花山の院樣御遁世とやら。

猪熊　いかにも花山の院は御遁世なれど、關白大臣は忝くも、西の宮の高明卿。

唐作　エヽ。

猪熊　その關白も御惱にて、猪熊入道雷雲が、今日一日は御名代。

千晴　征夷將軍は則ち田原のこの千晴。

猪熊　關白の上意。

千晴　將軍の嚴命。

兩人　唐作、劍を打ち上げろ。

唐作　（思ひ入れあつて）委細承知仕つてござれども、高の知れた田舍職人、將軍の御帶劍、遂に打つたる覺えなければ、何卒手本となるべき蔭の御太刀、拜見を願ひまする。

千晴　さこそと思ひ、稻の魂の寶劍小狐丸、取寄せ置いた。ソレ鷲平。

源吾　ハア。（ト唐櫃の中より小狐丸を出して）小鍛冶宗近が打つたる小狐丸、これを手本に。

ト唐作の前に置く。

唐作　すりや、これが小狐丸、

千晴　いかにも。

唐作　ハツ。程經ずして劍を打ち上げ、御覽に入れるでござりませう。

ト小狐丸と丸がせを小脇にかいこみ、花道へかゝる。雪の戸思ひ入れあつて

雪戸　曲者待て。

ト唐作かまはず歩いてゆく。

卜部の次官季國待て。

唐作　（立歸つて思ひ入れあつて）身に覺えなき姓名を呼びかけ、待てとおとゞめなされしは。

雪戸　筑前より參着せしと、西の宮の館へ入り込みし初めより、怪しき男子と思ふに違はず、刀鍛冶唐作とは僞り、此方の身方に加はり、謀叛の證據を聞き出さんとの謀り事、誠は頼光の郎黨、卜部の次官季國であらうがな。

唐作　(思ひ入れあつて)チエヽ殘念な。包むより顯はるゝはなしと、目に立つ上は是非に及ばず、都に謀叛の兆ありと知つて、入り込みし效もなく、斯く顯はるゝ上からは、我が一命は塵芥、切つて切つて切りまくり、この場の逐一御主人へ注進。片ツ端から覺悟なせ。

千晴　ヤア、腕も叶はぬ老ぼれめ。

猪熊　踏み附けて繩掛けろ。

皆々　季國、繩にかゝれ。

唐作　老の思ひ出、一々首を並べるワ。

トばた〳〵にて唐作、丸がせを振り立て、源吾、七郎、九郎、山伏、岩角等と渡り合ひ、下座の方へ追ひ込む。千晴、猪熊、雪の戸殘つて思ひ入れ。管絃になる。

千晴　流石は西の宮の執權、室津の内室ほどあつて、季國と見顯はせし一條、今の働き、天晴れ〳〵。

猪熊　あんな奴は一人づつでも、方を附けないと癖になるワ。

雪戸　つきましては御兩所樣へ伺ひませう。葛城山の修驗石蜘法印、招魂の法を以て、辰夜叉御前の蘇生を祈らるゝと承りましたが、未だその安否は、相知れませぬかいなア。

猪熊　オヽ、その石蜘が行法も、丁度今宵が七日の滿願。高明卿叛逆の企てあるといへど、われ〳〵兩人の外は、棟の柱となるべき者なく、さるによつて、高明卿の爲には實の伯母、伊豫の掾純友が妻の辰夜叉御前、天慶の亂に夫純友が討死、牙を嚙んで無念の思ひ、岩倉山に生きながら、埋もれ死したるその屍、未だ天の命數盡きずして、魂魄迷ふ辰夜叉ゆゑ、石蜘法印が招魂の法を以て、蘇生なさしめ、叛逆の荷擔人となさんとのお企て。

千晴　首尾よく成就なす時は、東三十三ヶ國はこの千晴。

猪熊　西三十三ヶ國はこの雷雲。

千晴　東西に別れて國の探題。

猪熊　君の補佐。

兩人　喜べ〳〵。

雪戸　ほんに、承れば承る程、勇ましい思し立ちでござりますわいなア。

千晴　イヤ、それについてこの御遺文。（ト懷中より御遺文を出し）最前見受けし奴があれば、おれが方へ

は置かれぬ品。しばし貴殿へ。

猪熊　イヤ〳〵、そんな物なら、矢ッ張り置いてもらひませう。

千晴　然らばこの一品は、雪の戸、其方へ預け置く程に、大切に所持致せ。

雪戸　すりや花山の院の御遺文とや。（ト受取る。）

千晴　しかと汝に預けたぞ。

雪戸　委細畏つてござります。

猪熊　われ〳〵はこれより直に、岩倉山へ赴いて、何かの密談。雪の戸も一所に參れ。

雪戸　左様なれば御兩所様。

兩人　雪の戸、こなたへ。

雪戸　まづお入りあられませう。

ト唄になり、千晴先に猪熊、雪の戸、附き添ひて下座へ入る。バタ〳〵になり、下座より早咲とくれなゐ出る。跡より山伏九郎と、岩角軍藤、石黒兵藤出て來り

三人　これ〳〵女、何處へ逃げる〳〵。

早咲
くれ　イエ〳〵、逃げはせぬ程に、どうぞ堪忍して下さんせいなア。

岩角 イヽヤ、まだ詮議が殘つてゐる、入道樣の所へ來やれ。
山伏 うせう。

ト引ッ立てにかゝる所へ、春町出て二人を圍ひ

春町 お前方もなんでござんす。あれ程堪忍してくれいといふからは、もう料簡してやらしやんせいなア。
三人 それぢやァおれ達の役が濟まない。
春町 そりや尤もぢやが、モシ。(ト三人に囁く。)
三人 そんならおいらに、あの女を
早咲 くれ モシ。(ト思ひ入れ)
春町 承知ぢやわいなア。
三人 必ずともに賴んだぞよ。

ト三人思ひ入れあつて下座へ入る。春町こなしあつて

春町 必ず案じなさんすな。ありや三人の衆をあちらへやらうといふ、俄かのわたしが思ひ附きぢやわいなァ。

早咲　どうなる事かと案じましたが
くれ　お前のお庇で助かつたわいなア。
春町　して、お二人さんはこの所へ、何しにお出でなさんしたえ。
早咲　サア、わたしらが來たのは、この品でござんす。
　ト赤き願文を書いた白絹を出す。春町これを取つて見て
春町　こりやこれ、謀叛の輩を誅伐なさしめ給へと、愛宕山へ祈誓の願書。
くれ　アイ、わたしらは花山の院の、女の童ぢやわいなア。
春町　謀叛人といはしやんすは、高明はじめ千晴雷雲。（ト思ひ入れあつて）そんなら、モシ。
　ト兩人に囁く。兩人思ひ入れあつて
早咲　すりや、わたしらは懷仁樣の、お側離れず。
春町　必ず共に、悟られまいぞや。
兩人　心得ました。
春町　早う行かんせ。
兩人　おさらば。

ト早三重になり、早咲くれなゐは向うへ入る。春町これを見送つてゐる。この時下座にて人音するゆゑ、下手の方へ小隱れする。下座より唐作、大宅の太郎と切り結んで出て來り、立廻りあつて唐作をとつて押へ、繩を掛ける。

唐作　エヽ、やみ〳〵と生け捕られしか、殘念やなア。

大宅　卜部の次官季國を搦め捕つた。方々、出合へ〳〵。

トこの時下座より雪の戸出て來り

雪戸　季國を生け捕りしは、天晴れの働き。

大宅　小狐丸、鐵の丸がせ、取返しましてござりまする。

雪戸　オヽ、見事々々……季國どの、さぞ殘念にござらうな。

唐作　天の時到つて、我が運命の盡きるところ、さのみ無念にも存じ申さぬ。

大宅　わしは深草燒きの人形商人、御褒美をお願ひ申します。

雪戸　いかにも、當座の褒美。（ト唐作の繩を解く。）

唐作　これは。

大宅　折角生け捕つた科人、なぜ繩をほどかしやつた。

雪戸　その不審よりその計略。大宅の太郎光國どの。

大宅　何かなんと。

雪戸　繩をほどいた、仔細はこの一品。（ト御遺文を出す。）

兩人　この品とは。

ト合ひ方になり、いづれも思ひ入れあつて

雪戸　源家譜代の方々、いろ〳〵と心を盡され詮議ある、これこそ花山の院が殘されし、懷仁君への御遺文。左大臣高明卿、雷雲が勸めによつて、良門純友が殘黨を語らひ、より〳〵謀叛の御企て。夫權の頭もろとも朝暮の諫めも、金言耳に逆らふの道理、聞き入れなきゆゑ、火は火を以て鎭めんと、わざと叛逆の腰を押し、いろ〳〵に心を碎く胸の切なさ。今改めてこの御遺文、お返し申すは高明が、この度の企てこそ、全く千晴と入道が勸め、惡事露顯のその時に、何卒高明卿が一命ばかりは、お助けなされて下さるやう、わが身にかへての一つのお願ひ。滿仲公、賴光公の、御前よしなに申し上げ下さりますやう、偏へに願ひ上げますわいなア。

唐作　（思ひ入れあつて御遺文をおし戴き）誠にこの一品ゆゑ、種々に詮議に心を盡すところ、今計らずも其許の手より、差上げられしは莫大の勳功。

大宅　願ひの趣き一々に、聞き届けたる上からは、高明卿御助命の儀は、及ばずながら源家四天王の者共が、一命にかへても申し受けん。雪の戸どの、必ず氣遣ひめさるゝな。

雪戸　返す〲も、お頼み申し上げまする。

トこの時後へ、岩角軍藤、石黒兵藤出て來り

兩人　小狐丸の一腰。

ト引ツたくつて駈け出さうとする。大宅の太郎兩人と立廻りあつて、しやんと留める。この時下手より山伏九郎出て

山伏　御遣文はこの雲高が

ト引つたくり、一散に向うへ入る。この時後より源吾出て

源吾　季國どの、御遣文は某が（ト花道へ駈けて行かうとする。）

大宅　あの奴めは千晴が家來。

源吾　イヤ、氣遣はれな、われも名乘れば二の瀨の源吾。

トこの間に岩角軍藤、小狐丸を取つて、「ソレ」と東の花道へ入る。

唐作　兩人、お行きやれ。

大宅源吾　いづくまでも。
ト早神樂になり、源吾花道へ追つて入る。大宅の太郎は東のあゆみへ駈けて入る。この跡を石黒兵藤追つて入る。唐作、雪の戸、思ひ入れあつて

唐作　思ひがけなき今の兩人、小狐丸は兎も角も、捨て置かれぬは御遺文の事。

雪戸　跡追ひかけて、季國樣。

唐作　雪の戸、お行きやれ。

ト兩人花道へかゝる。この時仕丁一人出て來り

仕丁　二心の雪の戸、覺悟。

トかゝる。立廻りにて唐作、仕丁をトンと切り

唐作　お行きやれ。

雪戸　さうぢや。

ト早三重になり、雪の戸唐作向うへ入る。時の鐘になり、日覆より半月出る。下座より仕丁一人出て來り、あたりを見廻して、呼子を高く吹くと、下座より千晴出て來り、あたりを見て、思ひ入れあつて側へより

千晴　合圖の呼子は、正盛よりの密書なるか。
仕丁　先刻より仕丁となつて入り込み、日の暮れを相待ちましてござります。
千晴　して、使ひの趣きは。
仕丁　この一品。
ト懷中より狀箱を出す。千晴、これを取つて明ける。中より密書と連判狀出る。思ひ入れあつて、この密書を見て
千晴「今宵こそ辰夜叉御前を蘇生の祈り、事成就の上はこの連判、何かの手つがひ……」
ト讀んで思ひ入れ。仕丁こなしあつて
仕丁　ナニ、辰夜叉御前を蘇生とは
ト大きな聲を立てゝいふ。千晴思ひ入れあつて、拔き討ちに仕丁をポンと切る。
千晴　下郎は口のさがなき者、不便ながらもこの世の暇。（ト血を拭ひ、思ひ入れあつて）これより直に岩倉山の、辰夜叉が廟所へ赴き、石蜘に何かの密談。ソレ。
ト花道の方へ行きにかゝる。この時春町、後へ出かゝりゐて、千晴が鐺をとらへて引き留める。これにて千晴思ひ入れあつて、立廻り、入れ代つてしやんと見得。

ヤ、其方は。

春町　最前の賤の女、女房に持たうの何のかのと、人を嬉しがらせておいて、よう騙しなさんしたな。

千晴　なんの、僞りを云はうぞ、眞實ぢや。

春町　それでも今まで待つてゐたが、誰れも何とも云うては下さんせぬもの。

千晴　それゆゑ其方は

春町　お前に逢はうと思うて

千晴　よう尋ねて來てくれたな。

春町　サア、早う女房に持つて下さんせいなア。

千晴　そりや其方よりこの千晴、心は急けど、關が留めた。

春町　關とはえ。

千晴　逢坂の關。

春町　そんな事は、わたしには知れぬわいなア。

千晴　心の關を

春町　どうぞ明かして　（ト側へ寄り添ふ。）

千晴　逢坂の
　　ト手に取つて思ひ入れ。春町、千晴が懷中より連判狀を引き出す。その手を取つて
　こりや、何とする。
春町　よその戀路が羨ましさ。
千晴　それでこの
春町　アイ。
千晴　名を名乘りや。
春町　エヽ。
千晴　サア、おれが心の關よりも、其方の冷たい心の淸水、明かさぬ内は、關は開かぬ。
　　ト連判狀を引ッたくる。
春町　エヽモウ、辛氣な事ぢやわいなア。
　　ト千晴、物も云はずに切り附ける。春町、ちよつとかはして、その手を留め
　まだ心中には早いぞえ。
千晴　早いか、遲いか、いつか一度

春町　わたしが命を

千晴　たつた一討ち。

ト切り附けるを、立廻りにて、今の連判状をひろげ、白刃を摑み留める。

春町　月影にてよく見れば、こりやこれ謀叛の連判状。

ト立廻りあつて

千晴　最前おのれが懐よりとり落せしは、將門が兜の鍬形、すりや汝こそ良門が身寄りと思ひ、心を試した其上にて、良門が行くへ、尋ね問ふべきと思ひしに、この連判に心をかけるは、さては汝こそ、源家の輩であらうがな。

春町　推量の上は何をか包まん、良門が一族と僞り、叛逆謀叛の實否を糺せと、滿仲公の仰せを受け、徘徊なす妾こそ、卜部の季武が妹の春町、謀叛の證據の連判状。

ト取りにかゝる。立廻りあつて

千晴　うぬに渡してなるものか。今打ち捨てる、覺悟なせ。

春町　此方へ渡しや。

千晴　女め、觀念。

ト立廻りあつて

春町　小癪な事をいは橋の、夜の契りと引きかへて

千晴　しのぎをけづる　（ト拔きかける。）

春町　月の弓張り。

トよろしく立廻りあつて

千晴　絶えて久しき

春町　この場の出合ひ。

千晴　花を散らして

ト立廻りあつて、左右へ別れて

春町　花々しく

兩人　どつこい。

ト見得。これより鳴り物をかりて、花々しきタテあつて、トゞ連判狀を引き合ひ、兩人しやんと見得。

これをキッカケに早神樂、突ッかけにて

幕

ト時の鐘にてツナギ、すぐに引つ返す。

本舞臺、三間の間、一面の山組み、眞中に誂への五輪を据ゑ、大卒堵婆のまはり、石の玉垣、正面二枚屏、これへ一面に葎しげり、苔蒸したる道具、左右は松の立ち樹、すべて岩倉山、辰夜叉御前廟所の體。風の音、時の鐘にて幕明く。

ト向うより千晴、猪熊入道、坂戸七郎、加藤九郎、大江太郎、いづれも序幕の姿にて、めい／＼忍び頭巾をかむり、龕燈を持ち、窺ひ／＼出て來り、直に本舞臺へ來り、左右へ立ち別れて

千晴　今鳴る鐘は早九つ。

猪熊　最早岩倉の

三人　御廟でござる。

千晴　誠に、夕に紅顔空しくて、玉の臺の床とても、今は葎に苔蒸して、實に一睡の夢のあと。

猪熊　この世を去りし辰夜叉が、又ぞろこの土へ蘇生あらば、花山の御所へお入りあり、源家の奴等を味方に附け、亡びし將門純友の、無念を散ずる謀叛の企て。

七郎　さるによつてこの程より、葛城山の修驗者、石蜘法印が法力にて

九郎　年經る蜘蛛の術を學び、招魂祕法の行法も、既に今宵が滿願日。

大江　大願微妙の奇瑞を現はし、辰夜叉御前蘇生あらば、兼ねての大望。
千晴　ヤア〳〵、滿願の今宵に當れる、石蜘法印
皆々　おはするか。
石蜘　（いがきの中にて）松風自から聲あり。アラかしましの、人々やなア。
　　へそれ樹下石上にある法師、花の衣もふすぶりし、護摩の煙りや松風を、誘ふも凄き鈴の音は、波羅那の昔、かくやらん。
　　ト大薩摩淨瑠璃切れと、鈴の音しきりに、いがき開き、この中に石蜘法印。いが栗かつらの修驗者、物凄き拵へて、鼠衣の露を取り、いら高を持ち、五輪に向ひ行ひすましてゐる見得。物凄き合ひ方。
千晴　今日招魂の滿願日、としや遲しと相模之助、田原の千晴參りたり。
猪熊　續いて入道雷雲も、御蘇生あらば一番に、辰夜叉御前へ御味方、いづれも相詰め
皆々　ましてござる。
石蜘　我れ去る頃より葛城山に、年經る蜘蛛を從へ、招魂續命の法を傳へ、一度黃泉へ赴きし辰夜叉御前、再びこの土へ呼び迎へ、關白高明卿の姉君として、花山の御所へお入りあるとも、誰れかさゝふる者あらんや。

千晴　いかにも貴僧の詞の如く、兼ねて花山の院御行くへ知れず。その砌り残し給ひし御遺文あるがゆゑに、中納言兼房、藤原の師忠なんぞ、道を守るのたはけ公家。

猪熊　何は兎もあれ辰夜叉御前の蘇生、貴僧の法力

皆々　お頼み申す。

卜風の音烈しく、向うより源吾と山伏九郎、以前の御遺文を争ひ出て來り、直に本舞臺に來て立廻る。猪熊入道駈け寄つて御遺文を引つたくり

猪熊　そりや

三人　動くな。

源吾　誰れかと思へば入道雷雲、田原千晴に組みしたる、謀叛徒黨の佞人ばら。殊に怪しき僧を語らひ辰夜叉の蘇生を祈る巧みの程、見かぢつたる二の瀨の源吾、サア、その通り奏聞するが、その御遺文を渡すまいか。

猪熊　小癪な源吾め、いづれも、ソレ。

三人　二の瀨の源吾、觀念。

源吾　小癪な奴ばら。その御遺文を

ト取りにかゝる。猪熊入道渡さじと立廻りて、御遺文をありあふ護摩壇の中へ投げ込む。煙硝火パッと立つ。源吾思ひ入れあつて

ヤヽヽヽ、大切なる御遺文を火中なせしか。もうこの上は、怪しき賣僧め。

ト石蜘法印へ立ちかゝる。これにて法印祕文を唱へ、九字を切る。ドロ〳〵になり、源吾いろ〳〵思ひ入れあつて、苦しみ、かつぱと倒れる。

皆々 これは。

石蜘 我が法力は大盤石、いで〳〵開き見せ申さん。方々、これを見られよ。

ト又祕文を唱へ、印を結ぶ。ドロ〳〵になり、石蜘法印、珠數にて五輪を打つと、仕掛けにて五輪、バラバラと碎ける。この内に辰夜叉御前、誂への形にて屍の拵へ。皆々驚き

皆々 イヤア。

千晴 ハテ痛はしき有樣かな。これでも蘇生

皆々 ござらうや。

石蜘 それぞ卽ち日頃の法力。只今招魂密法の、しるしを目前見せ申さん。

トこれよりノツトになり、風の音烈しく、法印は壇上へ上り、珠數を押しもみ、護摩木をくべ、鈴を

振り立て、
東方には千じんの長人、魂ひを消す事恐るべし。南方にはふくしや。しん〳〵として人を呑む。西方にはあかきあり、さうの如く、その土人をたゝらかす。北方には水の山、がくとして雪の淵千里なり。雲風火水の五輪五行、地下にはとはくの三かんかくぎゝたり。天地四方にとゞまらず天の屍に返り來れよ。

トどろ〳〵になり、松ヶ枝より大きなる蜘蛛現はれる。

へ不思議や冥々朦々と、暗きに迷ふ烏羽玉の、その玉の緒の返り來て、人呼ぶ術や招魂の、祕法のしるしぞ恐ろしき。

ト大薩摩の切れにて、大どろ〳〵、蜘蛛下りて松の下にて消え、煙硝火パッと立つ。燒酎火燃える。辰夜叉ムックと顏を上げる。皆々恟りして

皆々 これは。

辰夜 天の命數一日を待たず、閻浮にひとり漂ふ辰夜叉、歸り來れと呼びつるは、峯の嵐か、山彦なるや。

石蜘 それぞ招魂の祕法にて、生ある蜘蛛の魂ひに、死したる御身の魂ひ合體、呼び迎へしは葛城の、

山の修驗者石蜘法印。

辰夜　して自らを呼び迎へし、仔細はいかに。

千晴　仔細といふは花山の院、御遁世にてお行くへ知れず、さるによつて大内には、中納言兼房、藤原の師忠なんど、源家の輩を荷擔人となし、心の儘の取裁き。

猪熊　御身は正しく關白高明卿の姉君たり。今日只今御蘇生あらば、花山の院に御座あつて、高明卿とお心を合せ、あまねく天下の政事、とり計らふは心の儘。

七郎　その企てゆゑ修驗者を頼み

九郎　この程蘇生の御祈り。

山伏　事成就の上からは

大江　我れ〳〵までも身の滿足。

千晴　さてこそ心を盡したる修驗法力

猪熊　再びこの土へ

石蜘　御身は蘇生

皆々　あられしぞ。





辰夜　ムウ、すりや花山の院は
千晴　今に御行くへ定かならず。
辰夜　して年號は
皆々　貞元二年。
辰夜　四季の時候は
皆々　冬のなかば。
辰夜　今の時刻は
皆々　寅の一天。
千晴　辰夜叉御前はこれより直に、花山の御所へ發向あり
猪熊　池田の息女花園姫を虜となし、源家の奴ばら味方させ
石蜘　純友どの〻未來の迷ひ、晴らさせ給へ。
皆々　辰夜叉御前。
辰夜　いかにもこれより勸めに任せ、大望の思ひ立たんが、墳墓の中に久しくあつて、骨肉心身思ふに任せず、これにも貴僧の奇特あらんや。

石蜘　それこそお心安かるべし。これまで愚僧が多年の法力、五體感通忽ちに、身體元へ戻し申さん。辰夜叉御前も御觀念。

辰夜　心得たり。

ト これより三味線入りのノツトになり、石蜘法印護摩木を焚き立て、鈴を鳴らし、いら高を揉んで

石蜘　天眞明王四大天、我れに應護を加へよ。諸神助力のけんらい密法。

〽祭文經文鈴の聲、比叡の根おろし雪颪し、谷の嵐を吹き上げて、さつとたなびく香煙に、忽ち五體感通し、髪を生じて其儘に、すつくと立つたる有樣は、恐しくも又凄まじき。

ト この内法印は九字を切り、印を結ぶ事あつて、大薩摩の切れに大どろ〳〵、辰夜叉仕掛けにて髪の毛生え、引き拔きにてすつくと立ち上がる。皆々ギヨツとして

皆々　はてさて不思議な、密法ぢやなア。

辰夜　アラ嬉しや、喜ばしやなア。今こそ夫純友が、無念を散ずる時節到來、以前に變らぬ辰夜叉は、關白高明卿が實の姉、亡びし相馬將門が、一族一類狩り催し、花山の院に亂れ入り、夫の仇たる源家の奴ばら、討ち亡ぼさんは目のあたり。アラ〳〵〳〵、心地よやなア。

千晴　辰夜叉御蘇生あられし上は、花山の御所へ還御の路次。

猪熊、兼ねて用意の御裝束、いづれもこれへ持參おしやれ。

皆々 ハア。

ト廣蓋へ十二單衣、緋の袴、緋扇、その外とり揃へ、四人して持つて出て、辰夜叉の前に置く。

辰夜 服改むる用意致せ。

四人 ハアヽ。

ト誂へ物凄き音樂になり、四人立ちかゝつて辰夜叉に裝束を着せる。この時源吾心附き

源吾 さてこそ朝敵純友が、妻となつたる辰夜叉御前、蘇生させしは源家に對し、弓引く企て、やはか其儘。

ト行かうとする。猪熊入道引き戻して上手へ突きやる。千晴拔いて切り附ける。立廻りあつて、この内猪熊、竹槍を取つて源吾を突く。これにて撞となる。千晴も手早く竹槍にて源吾を突く。

源吾 チエヽ、殘念や。朝敵謀叛に荷擔なす、人非人の手にかゝるか。エヽ、口惜しいなア。

千晴 いらざるうぬがよまい事、念佛申して往生ひろげ。

猪熊 坊主の役は入道が、引導わたす、源吾國行、くたばつてしまへ。

ト兩方より抉る。このうち辰夜叉、服を着かへる事あつて、皆々辰夜叉を見て

千晴　星霜つもつて三十七年、その粧ひも艶々と、昔に返る

皆々　辰夜叉御前。

千晴　花山の院へは餘程の道のり、朝風いとふ路次の道もせ、被衣の用意もとくよりこれに。

ト白練りの被衣を出す。源吾思ひ入れあつて

源吾　思へば今日の蘇生の有樣、今この所で國行が

ト前にある刀にて竹槍を切り拂ひ、辰夜叉に立ちかゝるを、辰夜叉すぐにその刀を取つて、源吾をポンと切る。

辰夜　門出の血祭り、方々、來やれ。

皆々　ハア、。

ト辰夜叉、被衣をかむり、先に立ち、石蜘、千晴、猪熊皆々跡について花道へかゝると、突ツかけになる。向うより渡邊源次綱、掛け烏帽子、露を取つた半素袍、高股立ち、大小小手臑當て、重ね草鞋、凛々しき拵へにて、金札を持ち出て來り、花道にて見得あつて、辰夜叉を押し戻し、舞臺へしやんと見得。

皆々　どこえ。

猪熊　待て〳〵、いま辰夜叉御前が還御ある、路次を遮る暴れ者、誰れかと思へば渡邊の源次綱、なぜ邪魔を

皆々　ひろぐのだ。

綱　草も木も、皆大君の國なるに、いづれか變化の棲家なるべき。四年ぶりにて又今年、歸り新參四天王、その隨一の渡邊源次綱、今日顏見世の初お目見得、そも天慶の大亂に、亡び失せたる辰夜叉御前、今ぞ謀叛の地固めに、花山の院に狼藉とは、只事ならざるこの場の振舞、聞くに忍びず走せつけた。その俗性を明かすまじきや。

辰夜　ヤア、餘人は兎もあれ自らに向ひ、いはれざる汝が一言、妨げひろがば、引き裂き捨てるぞ。

綱　ヤア、をこがましくは思へども、綱が手の內御存じなくば、いで物見するが合點か。

辰夜　方々、ソレ。

皆々　渡邊、やらぬ。

ト早笛になり、皆々切つてかゝる。綱は金札にてはりのけ、大廻しの立廻りのうち、辰夜叉、綱の襟髮を取つて引き戾し、引き上げ柱の上へ乘り

辰夜　來れや渡邊。

綱　小癪な奴の。
ト刀を拔き、辰夜叉が手を取り、キッと思ひ入れ。大ドロ〳〵にて、兩人を破風まで引き上げる。皆々居並び、アリヤ〳〵の掛け聲。この見得、大ドロ〳〵、カケリにて、ちよん〳〵。

幕

四建目

三島明神の場
足柄山の場

淨瑠璃「雪振袖山姥」常磐津連中

役名――源の頼光。傾城、錦木實ハ花園姫。坂田公時。禿、照葉。足柄山の山姥。丹波太郎鬼住。仕丁、鷲峯。同、熊武。狼の丸市。月の輪熊藏。猪の牙平。小猿の六平。

本舞臺、三間の間正面高足の土手、この上に石垣、朱塗りの玉垣、五色の幕を張り、左右の柱卷き梅楓の大樹、日覆ひより紅葉の釣り枝、下の方に高足の土手、同じく段幕、すべて伊豆の國三島明神の景色。こゝに熊武、鷲峯、粕烏帽子、仕丁の形にて、舞臺眞中の紅葉の立ち樹に、銚子を吊り、落葉を焚き、酒を飲みゐる見得。大拍子の神樂にて幕明く。

鷲峯　ヤレ〳〵、これで心から溫まつたわえ。

熊武　ソレ〳〵、おぬしが云ふ通り、林間に酒を暖め、紅葉を焚きなんぞと、しやらくさい事はとりおいて、もう一杯引つかけねえか。

鷲峯　イヤモウ、强的に溫まつた。時におぬしと、この鷲峯が、宮奴となつてこの社へ入り込んだも、下向なしたる賴光めを、

熊武　コリヤ。(ト思ひ入れあつて)おぬしもおれも、丹波太郞鬼住どのゝ賴みに任せ、この關東へ入り込みしも、花園姬を引つ浚はん爲ばかり。

鷲峯　折よく今日この所へ、賴光社參なすとの事。窺ひ寄つて姬もろとも

熊武　必ずぬかるな。

鷲峯　合點だ。

熊武　來い。

ト山颪し、時の鐘になり、兩人思ひ入れあつて下座へ入る。爰にて頭取、淨瑠璃役觸れあつて、納まる。知らせに附き、前彈きになり、上の段幕を切つて落すと、常磐津連中居並び、淨瑠璃にかゝる。

〽改まる、頃は貞元神樂月、今日を歌舞伎の日の始め、月の笑顏や初舞臺、天正月と壽を、

祝ふや梅の浪花津を、又東路へ歸り咲き、櫻に紅葉こきまぜて、錦色どる花の顏見世。

ト花やかなる鳴り物になり、上の方に賴光、廣袖羽織衣裳、紫の置き頭巾、長煙管を持ち、庭下駄をはき、傾城錦木實は花園姫、裲襠、紅葉の枝に短冊の附けたるを持ち、駒下駄、八文字道中の見得。かむろ照葉、振り袖の拵へにて、結構なる莨盆を持ち、駒下駄ばき。坂田の公時、市川流の古風なる拵へ、着流し、大小の上へ白丁の上を引ッかけ、粕烏帽子、紅葉にて葺いたる長柄の傘をさしかけたる見得。清搔めいたる鳴り物にて、この四人を一ばいにせり上げる。鳴り物打ち上げる、淨瑠璃。

〽賴光公は故鄕より、はる〴〵來ぬる旅ごろも、東の空のしたりして、歩行路を急ぐ道もせに、爰も三島の神垣や、御武運祈る心願を、かけ奉る心意氣、重ね扇に抱き柏、比翼に附けし櫻川、姿は御守殿御所風を、戀なればこそ八文字、廓を爰に全盛の、太夫は松の位山、あかぬ眺めも色見えて、綠なりける女の童、禿と呼べど廓馴れし、長い返事の長局、聲細殿にこませもの、父公時は赤いもの、ほんに眞赤な面見世は、新酒新川新入りを、新車で爰へ木挽町、ひきかけたりや赤男、ふし瘤立ちし赤松は、花に緣ある男振り。

賴光　山の名も、もる程もなく村時雨、下葉の色は露に染まらん。勿體なくも命により、東へ下るこの賴光、爰は都に事かはり、伊豆の三島の神垣に、照葉かゞやく風景は、實にも山路の錦ぢやよな

ア。

花園　錦着て、故郷へ戻るわが君の、お跡慕うてかちはだし、踏みも習はぬ花園が、とり形さへも不束な、見やう見眞似の八文字。

照葉　廓をこゝに花魁の、禿はたのもこのもより、又みどりとも夕化粧、床にはぬしの手活けにて、梅でをりんす初舞臺。

公時　舞臺一面紅葉は、もみぢ色どる赤ッ面、男女遠目から見てゐれば、傾城なりのお姫樣、旦那によつほど色時雨、濡れる仕掛けと見たゆゑに、氣轉きかせて公時が、長柄をちよつと相傘の、赤いはきとく氣の附いた……なんと皆さん、よつぽと通ぢやござりませぬか。通天高雄も及びなき、爰も紅葉のまつ盛り。

賴光　樹々の錦に折よくも、一村雨のはら〳〵と

照葉　梢木の間も濡れ色に

花園　濡れにぞ濡れし山の端も、濡れてぞ歸る惡性者。

公時　これぞ旦那の濡れし修行。

賴光　色ある樹々の

四人　眺めぢやなア。

公時　ほんに時雨もやんださうな。ドレ〳〵、傘をとりおいて、(ト長柄を方寄せ) 時に合點の參らぬは、花園姬樣のこのお姿、賴光樣のお館へ、傾城なりの御來臨は、こりやアどういふ御趣向だの。

賴光　成る程、公時が云やる通り、賴光ことははる〴〵と、任に下るとは表向き、誠は將門純友が輩、寄り〳〵蜂起なすとの訴へ。朝敵退治のその爲に、公時一人召し具して、忍びの步行のその路次に、思ひがけなき花園どの、一年逢はぬその內に、廓出たちの全盛は、ハア、俄とやらの思ひ附きか、何とも某、合點が行かぬて。

花園　エヽ、又そのやうな憎て口。自ら事は父のお指圖にて、あなたとは云ひ號けありしかど、正盛どのゝ橫戀慕といひ、殊更あなたは東へお下り、未だ輿入れなき自ら、お目もじ致すも心に任せず、花園で逢ふ時は、禁庭の咎めを思ひ、路次までお出迎ひ申せしも、花園ならぬ傾城姿。いつぞや御所の簾のひま、垣間見しその折から、思ひに絕えかね一首の歌。

賴光　その短冊は我れとても、肌身離さず、コレ〳〵(ト懷中より守り袋と短冊とを出し)「夢にだに見えてもせめて初櫻、君ならずして誰れかわきみん。」

花園　その時あなたの御返歌に、「まれだにも聽く鶯の初音さへ、春を待たるゝ思ひなるかな」。コレこの

やうに、大事にかけて居りますわいなア。（ト紅葉の枝の短册を見せる。）

公時　色をするにも、歌をよむにも、おいらは四六屋體へ上つても、鼻唄も知らねえから、念佛か題目より外にやらねえ男だ。コレ、女郎の側で使はれる、禿とやら、蕪菜とやら、てめえ知つたやうに、取持ちを、やらかせ〳〵。

照葉　そんならわたしが、あのお客の側へ連れ出しんせう。サア、花魁も來なんしよ。

ト花園姫を突きやる。花園姫恥かしさうに

花園　アヽコレ、自らは

照葉　エヽ馬鹿らしい、いつそモウ自烈たいにヨウ。

頼光　アヽコレ、爰ではどうも

花園　叶ひませぬか。

頼光　サア、それは

〽勅に應じて頼光が、國家の亂れを鎭めんため、東へ下向の忍びの旅、はや關東には將軍太郎、一揆の企て櫛の齒を、引くが如くに都へ訴へ、すはや大事と聞く時は、かの桝花女より賜はりし、ひやう羽おい羽の二つの矢、らいせふとうの弓携へ、たとへば鬼神變化たりとも、

神力應護の射術の程、よつぴき放す矢面に、梢木の葉がちら／＼／＼、花の吹雪か峯の雪、やがて消えゆく殘黨餘類、源氏は榮ゆる盛りの色、心安かれ花園どのと、のたまふお顏うち眺め、それそのやうな勇ましい、そのお話しを聞く度に、嬉しさも又物安し、いとしあなたにそもやそも、なんと別れてゐられうぞ、自らとても共々に、連れてやいのとばかりにて、縋りついたるわりなさに、姿は粹な川竹も、とり亂したる御所育ち、かこち給ふも道理なり。

ト花園姫、賴光へ縋りつき、思ひ入れ。公時立ちかゝつて

公時 オヽ、たがよ／＼。コレ／＼、小じよく／＼、お姫の花魁どのが、氣を揉んで癪でも起しては、後で手こずる。禿の役だ、てめえいゝやうに、介抱しろ／＼。

照葉 わたしやそんな事は、知りんせんにヨウ。

公時 知りんせんで濟むものか。わりやア禿ぢやないか。コレ、禿々。

〽かむろ／＼、袖振る禿、派手なとりなり廓育ち、莟みの花もいつしかに、照葉も時の羽子板は、夢の心地と手品よく、ひとごにふたご見事にえ、いとしらしうてなまめきて、花の吹雪に追風や、色香をこめし振りの袖、愛敬こぼれ可愛らし。

ト紅葉の枝を羽子板に見立て、照葉よろしく所作ある。

頼光　ヤンヤ〳〵。禿の照葉が今の振り事、アヽ面白い事であつた。あの禿の振り事で思ひ出した。廓の道中、そのしこなしを、サア公時、見たいものぢやわいなう。

花園　ほんに仲の町とやらで、傾城の道中姿、外八文字のくり出し歩み。

公時　アヽ。その道中とやら、旅立ちとやらを、この公時を太夫にして

頼光　さしづめわれらが若い者、姫がその夜の大盡風。

照葉　禿は矢ッ張りわたしかえ。

花園　傾城の道中を

公時　さらばこぢつけ申さうか。

ト清掻になり、公時は女かむりに手拭をかむり、太夫のこなし。照葉附いて、照葉の羽子板を持ち、頼光は長柄をさしかけ、若い者の見得。花園姫は扇を顔にあて、大盡のこなし。この人數花道へ行きしやんと留まる。

〽廓の柳のたをやかに、しやんときりゝと一つ前、小褄をとりが七重八重、けふ九重に匂ひぬる、君が移り香それぞとは、姿たぐひも大盡の、見て見ぬ振りの流し目は、色に仕掛けて此方から、誠を明かす眞實を、疑うてばし下さんすか、これ恨めしい腹が立つ、憎い仕様と

ばかりにて、叩いつ泣いつ胸づくし、とるもこなのた田舍客、まじめに腹を田作りや、在所でいせきとつん出るは、なか〳〵氣樂で氣散じぢや、そこで年貢をはかるときや、人手をかりて小唄ぶし。

ト花園姫と照葉手をどり。

〽酒はてんとくさ、何であふるべいていな、やれさて〳〵、尤もぢや、さすが押へべい、肴が無い、おや〳〵れ醉うたでおんぢやるさ、いけぬ口舌、おりやくすぐるべいとの、つて〳〵つて〳〵〳〵、このほんかえ、か〻はてんこちないこと忍ぶべいてな、やれさて〳〵尤もぢや、雨がしぐれべいか、如才がない、あやくれお〻さておんぢやるさ、月の曇りなら宵から寢よとの、つて〳〵つて〳〵〳〵、このよいかえ。

ト宜しく振り納まる。

公時 こいつは餘ッ程面白かつた。時に我が君、姫君を傾城に仕立て、このやうにじよなめく所を、胸惡どもに見られては、御身の大事。君には關東へ御下向、姫君にはこれより一先づ、池田のお館へお歸りあつて、御尤もに存じまする。

花園 すりや自らは賴光樣に、逢うたばかりでアノ、爰から都へ。

公時　御歸館あつて然るべう存じまする。

花園　アレ、我が君樣、公時があのやうに云うてぢやわいの。

賴光　いかさま、公時が申す一條、尤もながら、賴光思ふ仔細あれば、何事もわし任せにコレ、きなきなと思はぬがよいわいの。コリヤ、公時、それへ出い。

公時　ハア、御用でござりますかな。

賴光　いかにも。其方はこれより直に、其方が出生なしたる高山こそ、西に當つて聳えし峰。今其方が名に呼んで、公時山と下世話にいふ、かの深山に分け入つて、母山姥にめぐりあひ、賴光問ふべき仔細あれば、在家をもとめ、立歸つてよからう。

公時　すりや、何と仰しやります、母に逢うて參れとかな。

賴光　いかにも。

公時　イヽヤ、そりやァ否でござる。なんぼ怪童丸が生れ故鄕、伊豆の深山に來ればとて、侍ひになつた公時が、母の隱れ家を尋ねて逢ひに行つたと云はれちやァ、卑怯未練とさみされん。殊更平の正盛、花園樣に心を掛け、このあたりに家來をさし越し置くと聞いては、猶々お側は離れられぬ。わしやァ行く事は、否だ〳〵、否でござるぞ。

賴光　すりや公時は、身が詞を背くか。

公時　サア、全く背きは致さぬが

賴光　我が詞を背かずば、かの深山へ立越え、ほのかに聞いたる朝敵の、輩に組みなす山賊野武士、山谷に忍びある由、母の在家をもとむる次手、彼れらが詮議を致して參れ。

公時　アヽ、そんなら母の在家を尋ねた上、君に敵たふ謀叛の奴ら、深山に隱れ忍ぶゆゑ、その詮議と仰しやるか。面白し〳〵、母の便りは兎も角も、山家に忍ぶ惡黨めら、一々首を引つこ拔き、お土産に仕らう。コレ、禿とやら、公時が行つた跡は、旦那のお側で御用を聞けよ。

照葉　アイ、氣遣ひなしに行きなんしよ。

公時　これからちよつと一走り、おれが名に呼ぶ公時山、雲霧聳えたあの嶮岨。

〽主命もだしがたけれど、山道岩角踏みしたき、難所惡所も故鄕ぞと、霧立ちのぼる高山へ、母の便りと公時は、勇む心をおし隱し、慕ひ行くこそ殊勝なれ。

トかけりにて、公時思ひ入れあつて向うへ入る。

賴光　サア、これからは公時は居やらず、心に思ふあらましを、これにて聞きたいものなれど、云ひ號けばかりにて、輿入れもなき花園どのに、心のたけをつもらるゝも如何、これより別れてあの都

三建目





へ、立歸つて下されぬか。

花園　エヽ、お胴慾な我が君樣、あなたを焦れ慕へばこそ、君傾城に姿を變へ、これまでお跡を慕ひしに、このまゝ館へ歸れとは、もし、そりやお情ない、賴光樣。

〽そもやあなたを垣間見し、桃の節會のその夜さは、ほんに簾洩る月の影、好いた水干直垂れの、衣紋をつくし美をつくし、脇目もふらず殿振りに、迷ふわたしが心根を、推してたべと寄り添ふを、禿照葉がかい取つて、エヽコレ花魁そのやうな、廓口說きがあるかいな、口舌は野暮と兩方を、丸う納める氣轉きゝ、茶屋の迎ひの來ぬうちに、それ〳〵早うとすゝめられ、ついそれなりに仲直り、互ひに顏を三つ蒲團、わりなき床のむつの花、廓の戀路やつもるらん。

トこの文句にて、照葉は二人を取持つ振りあつて、トヾ花園姬を賴光へ突きやる。これにて兩人思ひ入れあつて寄り添ふ。時の太鼓になり、向うより丹波太郎鬼住、上下、高股立ちにて、仕丁四人を從へ、鋲打ちの女乘り物を擔ぎ、足早に出て來り、直に舞臺へ來て

鬼住　花園姬のお迎ひ。

ト控へる。賴光見て

頼光　ヤア、其方は丹波太郎鬼住、よくぞ在家を存じたり。して、都よりの迎ひなるか。

鬼住　頼光公には朝敵の輩、誅伐のため關東へ、御下向と承り、池田の息女花園姫、姿を變へて同じ東へ、忍びの旅路心許なく、まつた御大切の御身にて、不義の疑ひかゝる時は、互ひにお家の大事と申し、世の人口を思ふゆゑ、晝夜を急ぎ只今到着。イザ姫君にはこれより直に、早々御歸館あられませう。

花園　すりや自らはこれより直に、アノ都へ

鬼住　サア、お乘り物へ。（ト駕籠をよき所へ直す。）

頼光　父君よりの迎ひとあれば、違背あつては不孝といひ、頼光の身に後日のお咎め。迎ひの輿を幸ひに、姫には一先づ都の館へ。

花園　それぢやというて折角に、尋ね逢うた甲斐もなう、どうマアあなたへお別れ申して。わたしやあなたのお供して、いづくへなりとも。

ト立ち寄るを、鬼住制して

鬼住　ハテ、それでは戀しう思し召す、頼光様の御身の不爲。

花園　そんならこのまゝ自害して

ト鬼住が刀へ手をかけ、自害せんとする。鬼住立廻つて留めるはずみに、懐中より密書を落す。

鬼住　お聞分けなき姫君様、拙者がお供するからは、何しに悪しく仕らん。承引あつて、お館へ。

頼光　太郎に任せて何事も

花園　そんならお別れ申しまする。必ずともにお變りなう

頼光　やがて迎ひを遣はすぞよ。

花園　それ樂しみに

鬼住　急ぎの御歸館。憚りながら女の童も、御乘り物へ。

頼光　花園どの

花園　我が君様

鬼住　イザお立ちあられませう。

〽いざ御立ちと鬼住は、姫の供して一散に、旅宿へこそは

ト花園姫照葉、乘り物へ入る。鬼住、仕丁に目くばせし、乘り物を舁ぎ上げ、一散に向うへ入る。頼光殘つて

頼光　ハテ、返すぐも、不便な姫が心根ぢやよなア。（ト時の鐘。この時落ちてある密書を見附け拾ひ取り）

ハテ〳〵「鬼住へ、辰夜叉より」……ハテ心得ぬこの書狀、ナニ〳〵「兼ねて申し越しおいたる花園姫こと、賴光が色香に迷ひ、關東へ下りしとの條、急ぎかの地へ赴き、姫を都へ連れ來り、花山院へ隱しおき、まつた側仕への女の童こそ、懷仁君に疑ひなし、其方連れ來るに於ては、恩賞たるべし、月日」……さてこそ太郎鬼住は、辰夜叉よりの廻し者であつたるか。さりとは知らず花園姫を。ホヽホイ。

ト當惑の思ひ入れ。山颪しになり、向うより鬼住、大わらはにて一散に駈け戻り、本舞臺へ來り、大息ついて

鬼住　ヤア、我が君これに御座ありしか、花園姫の御身の大事、出來いたしてござりまする。

賴光　ナニ大事とは、してその樣子は。

鬼住　只今姫をお供なし、歸館の道は喜瀨川より、並木にかゝる繩手にて、俄に山手に風起り、黑雲一むら見ゆるとそのまゝ、異形の變化現はれ出で、姫の乘り物奪ひ取り、跡をくらまし消え失せしは、鬼神の仕業に疑ひなし。手がゝりとても變化の業、面目もなき身の越度、申し譯には拙者が一命

賴光　斷つとも姫が在家知れんや。コリヤ、氣遣ひ致すな、その手がゝりは知れてある。

鬼住　ナニ、手がゝりがござるとな。

頼光　即ちこれに。

　　ト密書を投げやる。鬼住取つて、ギックリして

鬼住　ヤ、こりやコレ、どうして

頼光　うろたへゐな太郎鬼住、最前汝が懐中より、落しおいたる悪事の密書、辰夜叉御前に頼まれて、姫を花山の古御所へ、虜になしたであらうがな。かゝる證據が手に入る頼光、未だ武運に盡きざるしるし、サア、眞直に白狀いたせ。

鬼住　さういふ密書をウカ〳〵と、落しおいたはこの身の誤まり。いかにも頼まれ花園は、辰夜叉御前へ渡したり。この上は頼光どの、こなたの御首申し受ける。兩人、ソリヤ。

鷲峯
熊武　心得ました。……頼光、動くな。

　　ト物蔭より熊武、鷲峯出て、頼光を取巻き、

熊武　鬼住どのに頼まれて、間者に入り込む御嶽の熊武。

鷲峯　御栗の鷲峯兩人が、附け廻したる頼光どの。

熊武　おいらに首を

兩人　渡さつしやい。
賴光　小癪なる匹夫が一言、速かにそこ退くまいか。
鬼仕　ぬかるな兩人、合點か。
兩人　心得ました。……賴光、捕つた。
　　ト梅の花槍を押ッ取り、突いてかゝる。賴光立廻りあつて、
賴光　すりや、どうあつても
鬼仕　梅の花槍花やかに、命を鳥毛に引替へて
賴光　振つて振り込む梅ヶ枝の
熊武　槍はちよん〳〵
鷲峯　女郎衆に持たせて
鬼仕　ソリヤ。
　　ト立廻りよろしくあつて
皆々　よいやさ。
　〽行列揃へてお國入り、對の道具に大笠、伊達笠、先箱、蓑箱、褄折りの、打ち物並びしお

供の大きさ、陸尺六人徒歩四人、手を振る押へは腰を振る、殿さゆらりとお馬の手綱を斜に構へ、道はだゝぼゝかつくりそつくり、見事な花槍〳〵八重一重咲く梅ヶ枝に鶯の、花を散さで來啼くは憎や、今宵しつぽり逢ふ宿梅と、その約束はありながら、花を散らすは憎てらしほんに思へばさうかいな、花の嵐の山路かな。

ト賴光、熊武と鷲峯を見事に投げのけ、鬼住切つてかゝるを、花々しく所作あつて、トヾ四人、向う正面の二重舞臺へ上り、キツと見得。カケリ、山颪しになり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、茅葺きに伊豫簾をかけたる屋體。竹簀、大木の松、すべて足柄山奥の景色、矢張り太夫連中上の方に居並び、この道具納まる。

ト合ひ方にて、淨瑠璃の前彈きにかゝる。

〽登り〳〵たる高山、いづれの時にか盡きん、先はいづくに生ひ茂る、樹木の嵐山彦の、音にたくへて物凄き、峯より峯に白雲の〽大薩摩がかり かゝる所へ向うより、登る坂田の公時は

トこの文句切れると、花やかなる鳴り物になり、花道より公時、羽織衣裳、大小にて、紅葉の枝に洒

樽と大杯を結び附け、これを引ッ擔ぎ出る。よき所へ留まる。

〽紅葉照り添ふ顏の色、酒も山々谷々を、臑に覺えの大丈夫、あぶない〽浮れに唄の出放題、樣と時々醉うた〳〵千鳥足、かの猩々もかくやとばかり、笑ひ戲むれ來りける。

公時　ヤレ〳〵、久し振りで親里へ、歸りしんざん幽谷も、嬉しさにツイ打忘れ、やう〳〵と爰まで は來たが、慥かにそれと、トあたりを見て、思ひ入れあつて　ウヽ、ヽ、爰だ〳〵、この山中の一つ家といひ、日當では違はぬあの松の樹。さりながら、滅多にも入られまい。……賴みませう、賴みませう。

山姥（內にて）遠近の、たつきも知らぬこの山中、松吹く風の音信より、とふ人稀れなる我が住家へ、案內乞ふは、誰れ人なるや。

〽柴の戸の、跡見ゆばかり技折りせよ、忘れぬ人のかりにこそ、訪ふも嬉しと立ち出づる。

トこの文句の內キツカケにて、屋體の簾を卷き上げる。この內に山姥、白無垢の振り袖、蔦の模樣を縫はせたるさげ附きの衣裳、さら毛の好みの鬘、若き山姥の拵へにて

〽姿は若き振り袖に、結ぶ親子の緣の絲、賤の苧環くりよせて、裾もまとふや蔦かつら、歩む巖の門の口。

ト此の文句にて山姥、二重を下り來て、門口にて兩人顏見合せ

山姥　其方は快童丸ぢやないか。

公時　母樣。

山姥　快童丸、マアよう來てたもつたのう。マア〳〵、此方へ入りや。

公時　アイ、やう〳〵尋ねて來ました。

ト兩人平舞臺へ來る。

山姥　ほんにマア、大きうなりやつたっそしてマア、きつい肥りやうぢや。酒を飮みやるかや。

公時　アイ、あんまり飮みませぬが、一升や二升ぐらゐは、朝のうちに飮みました。酒といへば、幸ひ持つて來た酒、御免なされまし、一杯たべませう。ドリヤ。

〽遠慮會釋もなみ〳〵と、大杯の續け飮み、紅を奪ふや蔦紅葉、重ね〳〵て足る事も、知らぬ上戶に見えにけり。

ト此の文句のうち何杯も重ねて飮む。だん〳〵醉うたるこなし。

山姥　そのやうに酒のんでもよいのかえ……見れば、旅支度も無う、都三界からこの東へ、下りやつた譯はどうぢや。この母はどうも合點が行かぬ。

公時　エヽヽヽ、ナナなんでござります。アノ、今日爰へ參つたこの形が、ハヽヽヽ、こりや尤もさらばお聞かせ申さうか。拙者儀は只今にては、源の頼光の家臣、坂田兵庫之助公時。

山姥　ハテ、立派な侍ひになりやつたの。嬉しい〳〵。

公時　エ、有り難いね、お喜びかえ。此度主君には、關東へ忍びの御下向、その御供を仰せ附けられた。なんと解りましたか。ハヽヽヽ。

山姥　そんならアノ其方は、頼光樣のお供して來やつたのかいのう。

公時　サア、爰に一つの曰くがござるて。將門が餘類の奴ら、謀叛を起すとの事。いやな奴ね。此奴らを詮議のため、又、何萬騎押し寄せても、この公時がお供すれば、たゞ醉つて申すのではないがイヤ醉つて云ふぢやァないが、氣遣ひのキの字もない。もしこの山奥に隱れ住むかと、尋ぬる次手に、母に對面して參れとの事、有り難えね。ハヽヽヽ。所で參つた。よしかえ〳〵。えいか。アヽ、もう一杯飲まう。樽底川く舌鼓だ。

山姥　オヽ、それ聞いて落ち着いたわいのう。小さい時から人に勝れたれど、この氣まゝ我まゝ者、もし御主人樣のお氣にばし違うて戻りやつたかと、ほんに大抵案じた事ではないが、それなれば嬉しいわいの。

公時　モシ〳〵、この公時には父親もなく、生れた所も知れぬと云ふ奴があるが、マア第一外聞が悪い親の名は何といひました。

山姥　其方の父御は、坂田の藏人時行どのというて、元は禁裏北面の侍ひ。この母が身の上も、云はねば詳しう知らぬ筈。恥かしい事ながら、都九條の里に、八重桐というて流れの身。
〽夜な〳〵變る川竹の、憂き節しげき中々に、そも突き出しのその日より、初めて一座の御見の時、どう云ひかけたらよからうと、心に袖を敷妙の、枕の床の睦言は、思ひの外にあちらから、嬉しい事の數々が、積る三年のその內に、あそこの樣子、爰の茶屋、面白さうに話しても、居やしやんしたと聞く時は、はや癎癪の胸づくし、鷄の鳴くまでこれ男。

公時　なんだ。

山姥　エヽ、なんぢやとはアノ、まざ〳〵しい顏わいのう。
〽今日はとりわけ朝早う、ござんす筈ぢやないかいな、その約束も何處へやら、外に浮氣なお前とは、知らずわたしは朝夕に、思ひ出すとはまだな事、忘るゝひまのないゆゑに、客の座敷も上の空、脊中合せて聽く時鳥、ないて明かしてゐるものを、あんまりむごいとばかりにて、つめる痕さへ紫の、ゆかりの色も恥かしや。

ト振りあつて公時を抓る。

公時　オ、、痛え／＼＼。もう／＼それで譯が知れました。そんな生ぬるい事はよしにして（ト云ひながら山姥の振り袖をヂロ／＼見て）まだ解らねえ事もある。お前の顔かたち、昔より若くなつて、花やかな形恰好、どうも合點がゆかねえ。……ムウ、かの太郎樣のおかみ樣か。

山姥　エ、、何云やる。そのやうにこの母の、姿が何で

公時　何でどころか、振り袖を着てゐる山姥が、錦繪にもあるものか。

山姥　そんならこの姿が、其方は心得ぬと云やるのか。

公時　そればかりぢやァござりませぬ、どういふ譯だと、御見物樣方もさ。

山姥　成る程、合點のゆかぬは尤も、母がこの有樣、そんなら云うて聞かさうかいのう。

〽そも足柄の山住ひ、木の實につなぐ玉の緒の、あるかなきかの命さへ、自然と長き仙術にその面影は變らねど、夜晝わかぬ山姥の、四季折々の眺めには、春は梢に花の振り袖、夏は涼しき蟬の羽衣、秋は冴えゆく月に浮れて、夜すがら明かす山めぐり、冬は深山に雪の振り袖、邪正一如と見る時は、柳の綠。

山姥　花は紅ゐのいろ／＼。

〽狂言綺語の戯れも、讃佛乘の因ぞかし。

公時　ムウ、それで譯が知れました。そんならお前は、山姥とやらにならしやつたか。アノお前が

ト公時泣き出す。

山姥　コレ〳〵、何が悲しうてそのやうに泣くぞ。

公時　おらア山姥ぢやア否だ〳〵。（ト足摺りして又泣く。）

山姥　これさ、よい子ぢや、泣くな〳〵。ドレ、鼻かんでやりませう。サア、ちんと云や〳〵。（ト鼻をかんでやり）オヽ、よい子になつた。サア〳〵、何ぞうま〳〵買うてやりたいが、山中の事なれば自由にならぬ。木の實さへなき冬籠り。

公時　コレ、母樣。

山姥　オヽ、何ぢや。

公時　乳呑まう。

山姥　オヽ、この子とした事が、泣かずば褒美に乳呑まさう。（ト思ひ入れあつて）サア〳〵、もうよい。必ず駄々を云ふまいぞや。過ぎし頃、其方に別れてより、獨り住みの淋しさに、跡に殘りし持ち遊び箱、其方と思うて明暮れに、大事にして、これ爰に。

ト箱の中より、竹に入れたる蝶、太鼓、鼓、鬼の面を、だん〳〵に取出し

へ蝶よ花よと寵愛に、蝶々とまれや菜の葉にとまれ、そりやとまつた、でん〳〵太鼓は嵐の音、鼓は瀧野屋音に聞く、めぐり近江や湖水は、富士を産み出す親と子と、眺めにあかぬ持ち遊び、箱に散り敷く紅葉ばや、松の木蔭に隱れんぼ、怖い顏する鬼の面、欲しかサアやろサア取つて見やれ〳〵、子を取り子取り、どの子が目つき、あの子を呼んで、おまんに抱かしよ、あの子どこの子、いたいけな事云うた、殿御が欲しいと唄うた、そもさても和御寮は誰れ人の子なれば、定家がつらか離れがたやのう、川船に乘せて神崎へ、てもさても和御寮は、踊り手が見たいか、踊り手が見たくば、北嵯峨へお下りやれの、對の帽子をしやんと着て、踊る振りが面白や、餘念他愛もねん〳〵ねんよ、明日はとふからおひになれ〳〵、酒の過ぎたる醉ひごゝろ、しばしは時も移すらん。

ト公時樽を取つて肱枕の風情あるべし。薄どろ〳〵になり

山姥　うたゝ寢して、風ひくまいぞや。

へ折から谷峯動搖して、どつと吹きくる風につれ、不思議や今まで綾かと見えし袖袂、木の葉衣も破れはてし、山姥とこそなりにけり。

公時　さては誠の姿を現はし、われを諫めん御所存なるか。

鼓唄〽眞如の月も澄みわたる、親子のきづなにからまれしと、人の譏りも恥かしく、われは元より山樵の、山路を通ふ花のかげ、休む重荷に肩をかし、月もろともに山を出で、里まで送る時もあり、又ある時は山めぐり、法性の峰に登りては、上求菩提の道に出で。

山姥　無明の谷深く下りては

〽下化衆生を評して金輪際に至れり、たま／＼逢ひし賤の女は

たゞ鬼女とのみ恐るれど

〽人を助くる業をのみ、これ山姥がつとめなれ〽一世の對面これ限り、とはいふものゝこれがマア、名殘惜しやいとほしや、離れ難なやこち寄れと、幼き者に云ふ如く、涙の雨や瀧津瀬の、淵に水をやまさるらん、斯くてはあらじと立ち上り

アヽ、われながら未練なり。いかに公時、今にも謀叛の者あらば、討ち亡ぼすべき手段あるや。

公時　ハア、仰せにや及ぶべき

〽かねて謀叛の聞へある、相馬の太郎良門なんぞ、何萬騎にて寄るとても、いひ甲斐もなき葉武者のともがら、もし大軍にて押し寄せなば、君を守護なし討つて出で、馬の蹄にかけぬ

けて、近附く奴原かい摑み、かき首ねぢ首人つぶて、落花微塵に折り散らさん、コレ〳〵コレ、氣遣ひあるな、名を萬天に上げんものと、勇みに勇む有樣は、健氣にもまた勇ましき。

山姥　オヽ、賴もしや〳〵。その心を聞くからは、母が思ひも晴れ渡り、身は雲水の山姥と

ウタイ〽暇申して歸る山路の〽鬼女が有樣、見よや〳〵と峰より峰、呼ぶは谺か輪廻を離れぬ親と子の、妄執の雲の

トこの内山姥は舞かゝりになり、公時がとゞむる袖を振り拂ふ風情あるべし。

〽晴れるは白旗、源氏の榮え、賑はふ人の足柄山、山又山に山めぐり、山又山に山めぐりして、行く〳〵も知れずなりにけり。

トどろ〳〵にて、上より練りの雲下りて山姥を隱す。この時下座より丸市、狼の縫ひぐるみ、牙平は猪の縫ひぐるみ、熊藏は熊の縫ひぐるみ、六平は猿の縫ひぐるみ、いづれも一對の形にて出て來て、公時にかゝる。公時見事に投げる。皆々起き上り、縫ひぐるみの面を取つて見得よく居並び

四人　動くな。

公時　こりやアうぬ等は何奴だ。

丸市　何奴とは知れた事、山賊夜盗を渡世にして、この足柄の山ごもり、狼の丸市とはおれが事だ。形

は痩せても口は又、耳まで酒も呑み仲間、うぬを〆め子の兎にしろと、猪熊どのに頼まれた、しかも四人の頭分。

牙平　牡丹といへば看板に、僞りのねえ吸ひ物の、一杯くはせたこの獸物、誠を嘘に鐵砲の、あたる程猶荒れ出して、岩をも突き拔く猪牙平。

熊藏　苦いは熊の膽黑丸子、指で丸めて公時でも、只一呑みと受け合つた、褒美の金の山割りを、取らうと思ひ月の輪熊藏。

六平　盜人仲間に手の長い、猿とは猿猴遠方から、木挽町まではる〴〵と、谷の清水か瀧の屋の、跡にちよつくり栗藏が、柿の蔕でも蜜柑でも、仲間に入つた小猿の六平。

丸市　おいらが目先へかゝつちやア、もう百年目と觀念して、サア尋常に腕

四人　廻せエヽ。

公時　ハヽヽヽヽヽ、こいつらは大きな聲で、遠吠えをしやアがる。畜生の皮をかむつた、四足に近え山賊めら、一疋づつは面倒だ、どいつも一度に、來い〳〵。

ト誂への鳴り物になり、よろしく立廻りあつて、トヾ四人「ドッコイ」と留まる。山姥、いつもの鉢巻き、木の葉の姿、蔦の搦みし梅の枝を持ち、ふり出しにて松の上に現はれ

山姥　猶々行末守るべし。

公時　ハア、有り難やなア。

〽尽きせぬ色に常磐津の、松の梢に有り難や、千代萬世と河原崎、親も親なり子も子なり、天晴れ奇代の若者なりと、貴賤上下おしなべて、感ぜぬ者こそなかりけり。

ト宜しくあつて、段切り打上げる。片シヤギリにて、

幕

五建目小幕

一條戻り橋の場

役名━━辻君、袴垂れの安實ハ平井安輔。卜部季武、小女郎狐の靈。良門妹、七綾。侍女、春町。安輔母、幾野。さぼてん婆ア。男辻君、有祐卿。同、優連卿。夜蕎麥賣り、仁八。坊主、西念。子守り、おしげ。大宅太郎光國。

本舞臺、三間の間黒幕、上の方に橋の袂を見せ、正面に番小屋、左右に床見世、葭簀張り、上よりふつさりとしたる柳の吊り枝、辻行燈、天水桶、よき所に井戸あり、すべて一條戻り橋、夜の景色、暮六ツの鐘、四つ竹節にて幕明く。

ト爰に仁八、夜蕎麥賣りの姿にて荷を下し、蕎麥を盛つてゐる。西念、七つ坊主の拵へにて、黑い頭巾をかむり、麻衣を着て、蕎麥を食べてゐる。子守りおしげ、木綿もやう、田舍染めの振り袖にて、子供を抱へ、子守り唄を唄ひゐる。笠をかむりし巫子、被衣を着たる屋敷女中、袖頭巾の女房など、立ちかゝつてゐる。

女達　サア〱、爰へも下さんせいなア〱。

仁八　アイ〱、今上げやす、もちつと待ちなさい、手が廻らない。何だか今夜は五丁目の橋で、芝居の崩れたを待つたやうだ。強氣な人だの。

西念　コレ、蕎麥屋どの、その筈でござるわいの。この間、この戻り橋の柳の御殿へ、男の惣嫁が出るとの評判、そこで下女はしたはいふに及ばず、男に遠い後家なぞは、さかりのついた犬のやうでの。

しげ　サア、わつちも男の夜鷹が出ると聞いたによつて、子守りに出た次手、旦那の目顏を忍んで、どうぞ一目なりとも見ようと、小錢を盜んで來やんした。

西念　ハテ、呆れた小娘だ。

しげ　コレ〱、蕎麥屋どの、して、男の夜鷹は、どこから出ました。

仁八　ハイ〳〵、なんでござります、今度花山の院へ、辰夜叉御前とやらが蘇生してお歸りなされ、公卿を殘らず追ひ出し、女官達ばかりとの事。そこで追ひ出された公卿達が、せう事なしに、男の夜鷹に出ますのさ。

西念　なんと若衆は出ますまいかな。

仁八　マア、一廻り廻つて來なさい、今に出やせう。

巫女　わたしらも來た次手だ、袴垂れの安とやらいふ惣嫁を、見て行かうぢやあるまいかいな。

皆々　さうしませう。

西念　ドレ、その內修行して來ようか。

しげ　わたしも子供を置いて來よう。

皆々　サア、ござんせ〳〵。

ト四つ竹節になり、皆々下座へ入る。仁八殘る。向うより岩角軍藤、石黑兵藤、三建目の形にて、袋入りの小狐丸を持つて、兩人ともスタ〳〵と出て來り、本舞臺にて

軍藤　ヤレ〳〵、此やうに又逃げあるく事もない。この小狐丸を光國めに渡すまいと、一倍氣骨が折れるワ。

兵藤 それ〳〵、彼奴に逢つてはむづかしい。こりやア早く千晴どのに渡すがよい。したが、おぬしは
どうだ、腹はよいか。

軍藤 イヤモウ、殊の外空腹だ。見れば爰に風鈴がゐる。二三杯底を入れて行かうか。

兵前 そいつはよからう。コレ〳〵、蕎麥屋、二つ盛りにして、四つばかり出せ〳〵。

仁八 ハイ〳〵、畏りました。隨分熱くして上げませう。

ト捨ぜりふにて蕎麥を拵へて出す。兩人無性に食ふ。仁八、手の廻らぬ思ひ入れ。時の鐘になり、向うより大宅の太郎、三建目の形にて、息せきと出て來り

大宅 なんでも二人の奴等は、この道へ失せをつたに違ひない。アヽコレ、どうぞあの劍を

ト云ひながら舞臺へ來り、蕎麥屋の灯にて二人を窺ひ見て

ヤア、うぬらは爰に失せをつたか。

軍藤 イヤア、さういふのは大宅の太郎か。

兵藤 南無三、しまつた。

ト蕎麥の茶碗を捨てゝ逃げようとする。大宅太郎は二人を引附け

大宅 動きやアがるな、がらくためら。爰で逢つたは百年目だ、その一腰を渡すまいか。

軍藤　これを渡してたまるものか。このまゝ爰を

ト逃げんとする。大宅太郎捕へる立廻りあつて、軍藤は劔を持ち、一散に下座へ入る。大宅太郎は兵藤を投げのけ、その跡を追つて入る。兵藤も起き上つて追つて入る。仁八殘つて

仁八　おきやァがれ。なんだ。彼奴らは食ひ逃げをひろいだ。ざつと百四五十の損をしたわえ。

トそこらを方附けゐる。四つ竹節に天王立を崩したる鳴り物になり、向うよりさぼてん婆ァ、年増の嚊にて、廣袖の素布子、細帯にて、片端折りをして、白木綿の湯もじ、下駄をはき、小田原提灯をともし、矢立てを腰に挾み、手拭をかむり、女の妓夫にて出る。後より有祐、優連、嬢らしき公卿にて、着流し、刺貫、笏を持ち、手拭を口に咬へ、頰かむり、安下駄をはき出て來り、花道にて

さほ　サア、これな、お前達、もうちつと早くあるきねえ。參内とやらをするやうな事ぢやァいけねえ。ちつとマア尻でも端折りねえな。夜鷹が袴をはいて、商賣になるものか。とやにでもついたら、マアどうせうと思ふ。成る程、公卿の食ひ潰しだ。

有祐　コリヤ〳〵、下々の女子々々、其やうにはしたなう物のたまふな。麿は、男の惣嫁は初めてぢやわいやい。

優連　有祐卿ののたまふ通り、この左少辨も歌はよめど、公卿の夜鷹は昔から聞かぬわいやい。

さほ　エヽ、知れた事だわな。公卿の夜鷹がいつの世にあるものか。無駄な事を云はずと、早く來なさいよ。

有祐　イザ、左少辨優連卿、御同道にて橋詰めの

優連　葭簀の蔭へ赴かん。隨身仕丁、用意はよいか。

さほ　なんだ、仕丁だ。イヤハヤ馬鹿にした手合ひだ。サア〳〵、歩かつしやいよ。

ト鳴り物の切れにて、三人本舞臺へ來る。

仁八　イヤア、公卿の色子が、來たな〳〵。

さほ　サア〳〵、爰が戻り橋の柳の御殿だ。爰がこなた衆の見世だよ。時にお前方の名は何といふ。

有祐　麿が名は、鷺の森の有祐といふわやい。

さほ　なんだ、有祐だ。折助の食ひ物に、有祐で濟むものかな。こちらの鍋取りどのは何といふえ。

優連　左少辨優連といふわいやい。

さほ　なに左少辨、無用なら鳥居に書いてもいゝわな。そんな名では通りか惡い。斯うしねえ、こなたは艶之助、こちらの少辨どのは何がよからう。アヽ、それ〳〵、姫吉がよからう。

有祐　すりや、麿は艶之助。

優連　麿は姫吉と呼ぶかや。

さぼ　オヽ、お神樂堂の袴を脱いで、着物も着替へさつしやいよ。

優連　艶之助、然らばお先へ。

有祐　姫吉卿、イザ御一緒に。

さぼ　ヤレ、きり〳〵着替へさつしやいな。

ト四つ竹節になり、向うより安輔、黒小袖一つ着、少し廣き帶を締め、五十日の鬘、手拭の頰かむりにて、尻を端折り、日和下駄をはき出て來り、あちらこちらと窺ひながら本舞臺へ來り、さぼてん婆アを見て

安輔　伯母御、もう出かけたのか。

さぼ　オヽ、こりやア安公か。今時分見世を張らないで、いつ商賣がなるものかな。そして、今夜仕舞を稼ぐ公卿の新造が出て來たから、稼がせて見る氣よ。

安輔　アヽ、何か、花山の院を叩き出された幽靈公卿を置いたのか。そいつはいゝ。何ぞの時の替へ玉に、引ッ込んで置くがいゝ。

優連　こりや〳〵、その男子も惣嫁の勤めをするよなア。

有祐　麿も貴公も男の辻君、よしなにそな者、頼むぞや。

ト刺貫を取り、小袖を裏返すと、黒き無地になり、誂への白き帯を締める事。

仁八　いかさま、衣裳が黒くなると、一倍男振りがよくなるわえ。どうでも男夜鷹ぢやア、袴垂れの安公がやうなのはない。勇み肌で、いきまの二才だから、娘でも藝者でもお姫様でも、見るが最期二十四文ぢやア、イヤ廉いものだ。

さほ　それさ。この安公は、わしが爲には白鼠さ。妓夫こそすれ、さほてんおばァが金箱でござりやすよ。

有祐　然らば麿達は錢箱かな。

さほ　エヽ、おきやァがれ。そりやァさうと、今夜は強的に寒いの。河岸の普請場で、ちつと溫まつて立たうか。

安輔　わしやァ見世を張るから、あの新造手合ひを連れて行つて、ちつとあたらせねえな。

さほ　さうせうわな。サア、二人ながら此方へ來ねえ。

兩人　然るべく頼み入る。

仁八　歸り時分に送つて來ようよ。

安輔　さうしねえ。

さほ　そんなら安公

安輔　伯母御

さほ　あたつてくるよ。

ト四つ竹節になり、さほてん婆アは有祐、優連を連れて下座へ入る。仁八は荷を擔ぎ、呼びながら向うへ入る。安輔殘つて思ひ入れあり

安輔　アヽ、寒い晩だナ。人間は心がら、誰れあらう、平井の保昌が弟、平井の安輔ともあらう者が、どういふ事か刃物を見ると、そゝけ髮の立つ程恐ろしくつて、いまくしい病氣。したが、小力にはあんまり負けない、兄保昌が、役に立たずと見限つて、屋敷を勘當、今では小盜み小働き、異名に取つて袴垂れの安。平井の家に居る内も、兄嫁の和泉式部の妹を云ひ號け。アヽコレ、今あの女を此方へそびき出したら、一元手にあり附かうが、何をいつても屋敷へは寄せ附けられずせう事なしの往來の懷中、又は女の頭のまはり、盜みの爲の思ひ附き、此やうに男の立ち君、今夜も爰に見世を張つて、ドレ、いゝ鳥を待たうか。

ト四つ竹節になり、向うより町人一人、小提灯をともし、捨ぜりふにて出て來り、安輔と摺れ違ひ、

行かうとする。安輔、ちよつと懐中へ手を入れる。町人恟りして

町人　エヽ、此奴は何をするのだ。

ト云はれ、安輔、ウロ〳〵して、町人の袂を控へ

安輔　モシ、遊んで行きなさいな。

町人　ナニ遊べ、アヽ、男の惣嫁だな、コレ、おれも男だワ。アヽ、埒もない。

ト行きかけるを引寄せ、提灯を打落す。時の鐘になり

アヽコレ、どうするのだ〳〵。

ト聲立てるを引ッ捕へ、見事に縊め殺し、懐中を探し、紙入れを取つて口に咬へ、死骸を井戸の中へ投げ込み、紙入れの中を探し、二朱銀一つ取り出し、思ひ入れあつて

安輔　たつた南一、無駄骨を折らせるやつさ。

ト紙入れを井戸の中へ投げ込む。唄になり、向うより奴一人、小箱の提灯をともし、春町、帽子、屋敷女中にて出てくる。すぐに本舞臺へ來り

春町　今のは初夜であらうの。

奴　左樣でござりまする。お急ぎなされませ。

ト行かうとする。安輔あちこち窺ひ、春町の懐へちよつと手を差入れる。春町、その手を取つて思ひ入れあり

春町　夜中といひ、殊には女子の懐中へ、手を差入れて、こりや何とするのぢや。

安輔　サア、これは……

春町　こりや、其方は盗賊ぢやな。

安輔　アモシ、そんな者ぢやアござりませぬ。私しはこの橋詰めに出まする、惣嫁でござります。

春町　ヤ。

安輔　アイ、この頃洛中で噂のある、男の夜鷹は、私しでござりまする。

春町　その又男の惣嫁とやらが、懐中を窺ふ様子。なんで其方はわしへ立ち寄り

安輔　ハイ、お遊びなされませ。

春町　遊べとはや。

安輔　奥勤めのお女中様、定めて徒然な御奉公、ちよつと一切り男の惣嫁、遊んでお出でなされませぬか。

春町　すりやわしに、男の惣嫁、求めいとな。

安輔　左樣でござりまする。ツイ一切り、お遊びなされませ。もし、お女中樣。
春町　忝くも頼光公の、奧を勤むるこの春町、惣嫁とやらに用はない。
安輔　すりや、遊んでは下さりませぬか。
春町　おいなう。
安輔　そこを一切り
春町　慮外者めが。

ト唄になり、提灯持ち先に、春町思ひ入れあつて下座へ入る。安輔、跡を見送り

安輔　アヽ、流石は屋敷だ。すつぱりとした女だわえ。

ト思ひ入れ。人音するゆゑ、番屋の内へ入ると、下座よりさぼてん婆アに有祐、優連附いて出て來り

さぼ　アヽ〳〵、どうも寒くつて堪らねえ。サア、見世を張らんせ〳〵。
有祐　然らば小路に立ち明かさん、のんし〳〵。
優連　立ち寄り給へ、乙女の姿しばしとゞめん。エヽ、なんす〳〵。
さぼ　サア、口切りでござい。エヽ、なんす〳〵。

ト呼びかける。下座より以前の女の仕出し、ゾロ〳〵出てくる。

しげ　イヤア、評判の手合ひが、出たの〳〵。

さほ　アヽ、コレ〳〵、お前方も氣のきかねえ、提灯は御免だ〳〵。

婢女　どれも〳〵、よい殿御の男立ち君。したが、どうか印しがありさうぢやわいな。

女房　それ〳〵、安物の錢失ひ、公卿の夜鷹を買つて、顏の色は移りにけりな得手吉に、惡い夜鷹に馴染みせしまに。

皆々　ハヽヽヽ、サアござんせいなア。

ト皆々捨ぜりふ云うて向うへ入る。

有祐　アヽ、寒やの〳〵、麿はとんと冷え切つてしまうたわいの。

優連　寒さと腹の空つた辻君、四つ辻へ行つて、風鈴蕎麥にてこの身を凌がん。

有祐　麿も貴公ともろともに

さほ　ほんにお前方も可哀さうだ。ぶつか菩提と洒落て來さッし。

有祐　然らば勤めの暇を乞ひ

優連　蕎麥賣る男子が在家を求めん。

有祐　アヽ、誠に公卿の

兩人　喰ひ潰しぢやよなア。

ト四つ竹節になり、兩人向うへ入る。さぼてん婆アも思ひ入れあつて

さぼ　風鈴蕎麥と聞いたらば、此方も急に酒が欲しくなつた。汐時前にいつもの所で、ドレ、ちよつと一杯引ツかけて來ようか。

ト四つ竹節にて下座へ入る。唄になり、向うより幾野、黄綿帽子、裲襠を抱へ、後家髷、母の拵へにて、小提灯をとぼし、杖を突いて出てくる。

幾野　ほんに、爰は一條の戻り橋、尋ぬる者はこのあたりと、聞いて夜な〳〵老の身の、供をも連れず館を出で、尋ね歩くも我が君樣の（ト思ひ入れあつて）慥かに向うの橋の下。アヽコレ、今宵は首尾よく、尋ね逢ひたいものぢやなア。

ト時の鐘、唄にて、舞臺へ來る。この時番屋の中より安輔出て、幾野の風體を見て、よき客と心得、手拭をかむり、側へ寄り

安輔　モシ〳〵、お客さん、ちつと遊んでお出でなされませ。

ト袂を控へる。幾野思ひ入れあつて

幾野　この婆に遊んで行けとは、何を遊ぶのであるぞいの。

安輔　ハイ、わたしや毎晩この所へ出る、男の
幾野　辻君といやるのか。（ト提灯にて顔を見て）ヤ、其方は
安輔　あなたは……こいつは堪らぬ。

ト逃げようとする。幾野は安輔を引き留めて

幾野　コレ、辻君どの、こりやこなたは年寄りに、其方から遊んでゆけといひかけて、爰を逃げるは手が悪い。サ、遊んでゆきませうわいのう。
安輔　エヽ、左様ならあなたは、私しを他人向きで、遊んでござるお心か。
幾野　侍ひも落ちぶれては、斬り取りするは習ひなれど、常から身持ち惰弱の安輔……サ、平井の家の大事と、勘當して追ひ出せしが、よもやマア此やうな。サア、此やうな辻君男、何その縁があるのであらう、遊ばてし下されぬか。
安輔　ハイ、お遊びなされませ。お屋敷様のお寢間には、むさい番屋の二疊敷、御承知なればお婆様、ちよつと遊んで下さりませさ。
幾野　遊びませう。わしも其方に折り入つて、サ遊ばにやならぬ譯あれば、今宵はわしが館へ揚げ詰めの惣嫁どの、不承であらうがこの婆が、部屋へ來てたもるまいか。

る立図



江逮図



安輔　アノ、勘當の私しを
幾野　ハテ、勘當したは不孝な忰、其方は河原の辻君惣嫁、茶代揚げ代、いか程なりとも遣はさう。わしと一緒に屋敷まで。
安輔　お召しとあらば參りませう。どうで體は切り賣りの、男妾の奉公でも、又はこの身に相應な、御用で參る事なれば、お屋敷までもどこまでも、のさばり行くのが江戸育ち。お婆樣、お連れなされて下さりませ。
幾野　オヽ、その心なら迎ひの駕籠、目立たぬ用意もしておきました。
　ト小提灯を疊み、思ひ入れあつて灯を吹き消す。時の鐘になり
安輔　これは
　ト思ひ入れ。向うより仁八、一腰差し、若黨二人、駕籠舁きの形にて、四つ手駕籠を擔ぎ、一散に出て來て、本舞臺へ來り
仁八　尋ぬるお方の、在家は、いよ〱
幾野　コレ。（ト思ひ入れあり）イザ、あの駕籠へ。
安輔　アノ、私しを

仁八（駕籠の中より大小を出し）帯刀あつて

ト差出す。安輔はこの刀を見て、わな〳〵慄ふ思ひ入れあり、又氣を變へて、思ひ切つて手早く取り、

大小を腰に差して

安輔　御免を受けて

ト駕籠へ乘る。この時下座より春町、提灯を袖にて隱し、窺ふ。さぼてん婆アも出て、窺うてゐる。

幾野　片時も早う

春町　そんならあなたが、（ト提灯を差出す。）

幾野　コレ。

ト思ひ入れ。春町は提灯を吹き消す。

さぼ　駕籠のはたしか

ト駈け寄るを、春町立廻つて押へ附ける。

安輔　何か樣子の

ト出ようとするを、仁八駈け寄つて垂れを下す。これに附いてハラリと綱下りる。

春町　これは

幾野　駕籠やりや。

仁八　ハア。

ト早めたる時の鐘になり、若黨駕籠を舁ぎ、仁八附いて向うへ走り入ると、さぼてん婆ア、幾野を引とめる。春町これを支へて、さぼてん婆アに辻行燈を取つてかぶせる。立廻りよろしく、この見得にて道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、眞中に卒堵婆の藪垣、上の方に一間の地藏堂、下の方に樋の口、尤も誂へあり、物凄き道具。爰に大宅太郎、袋入りの小狐丸を持ち、岩角軍藤、石黑兵藤を引附けゐる見得、禪のツトメにて道具とまる。

大宅　こりやアうぬ等は、どうでも邪魔をひろぎやアがるな。

軍藤　命にかけても小狐丸

兵藤　われには渡さぬ。

大宅　小癪な、そこ退け。

兩人　劍を渡せ。

ト三人奪ひ合ひの立廻り小短かくあるべし。軍藤、劍を持ち、行かうとする。大宅太郎さゝへる。

兵藤取り附く。立ち廻りの内、有り合ふ卒堵婆にて打つてかゝる事。軍藤手早く卒塔婆を取つて袋の中へ入れ、誠の太刀を腰に差し、吹替へを拵へ、爭ふ。大宅太郎これを知らず、袋入りを引ッたくり、二人を見事に投げ退け、一散に向うへ入る。兩人起き上り

兵藤 南無三、劍は太郎めが

軍藤 コレ、氣遣ひするな、持つてうせたは垣根の卒堵婆、袋の中へ吹替へて、誠の劍は、コレ爰に。

兵藤 そいつは出來た。片時も早く小狐丸を

軍藤 合點だ。來い。

ト藪の際へ寄り、兩人行かうとする。藪の中より白刃出て、軍藤を貫く。軍藤苦しみ倒れる。兵藤見て

兵藤 さては曲者

ト藪へかゝる。中より見事に首を落す。兵藤かへる。時の鐘、三味線入りの本神樂になり、藪垣を押し分け、卜部季武、忍び頭巾、黒の四天の姿にて、白刃を提げ出る。樋の口より七綾、黒の忍び形にて袖頭巾、短刀を差し、繋ぎ馬の旗を懐中し、龕燈を持ち、窺ひながら出る。季武血刀を拭ひ、鞘へ納め、軍藤が持つたる小狐丸を取上げ、行かうとせる。軍藤心附き、季武にかゝる。季武、軍藤の襟上を摑み、思ひ入れ。軍藤苦しみ落ち入る。季武蹴飛ばし、太刀を提げ、行かうとする。七綾これを

さゝへる。立廻りよろしくあつて太刀を下へ落す。この途端、七綾も懐中より旗を落す。季武取らうとする。七綾龕燈を取つて季武に差しつける。薄ドロ〳〵になり、後の練り塀へ、灯り映る。七綾が影七人に映る。季武、さてはと思ひ入れ。七綾龕燈を下へ伏せる。ドロ〳〵打ち上げ、姿消える。この間に季武劍を取り上げる。七綾やらじト捕へ、見得になり、この時薄ドロ〳〵にて、小女郎狐、ひらり帽子、誂への女の姿にて、舞臺よき所へスツポンにてすつくと出る。兩人きつと思ひ入れ。立廻りにて、季武、小狐丸を思はず拔く。これにて雷序になり、小女郎狐、狐の振り、これを七綾龕燈の灯にて、兩人きつと見て、三人顏見合せる事。季武龕燈を打ち落し、小狐丸は季武が手へ納まる。七綾の懐中より旗を引出さんとする立廻り、三人よろしくあつて、小女郎狐、狐のもやう、仕組みよろしく、チヨン〳〵〳〵と、ひやうし、

幕

五建目　平井保昌館の場

役名――平井安輔。保昌妻、和泉式部。同妹、橋立。安輔母、幾野。若黨、仁八。石蜘法印。權ノ頭妻、雪の戸。三藤平馬。さぼてん婆ア。

本舞臺、三間の間、中足の屋體、金襖、欄間踏込みとも結構に致し、下の方白梅の立ち樹、上の方

に柴垣、石の手水鉢、手拭掛けに白き手拭をかけ、すべて保昌館の體。幕のうちより二重舞臺の上に、石蜘法印、鼠どてらの上へ冠り裝束、笏を持ち、床几にかゝり、その次に雪の戸、裲襠衣裳の形。平舞臺に幾野、裲襠、保昌母の形。その次に春町、着流し後ろ帶の形にて控へ、琴唄に、かすめたる下り羽をかぶせて幕明く。

石蜘　辰夜叉御前よりの上使。

幾野
春町　ハア。

雪戸　私しは高明が執權、室津權の頭が妻、雪の戸と申す者。

石蜘　今日の上使、餘の儀に非ず、兼ねて先君御心をかけられし、池田中納言の娘花園、先達て東國下向と披露なしたる、頼光が跡を慕ひ、今以て行くへ知れず。

雪戸　これ全く頼光こと、花園姫と心を通はせ、東國の相馬良門征伐とは僞り、兩人とも保昌が館へ、隱れ忍ぶに相違あるまじ。まつた行くへは知れざれども、先君お心をかけられし姫君なれば、差當つたる罪科に、池田中納言には虜となりおはすれば

石蜘　花園が首ぶッ放し、受取つて立歸れと、當時御威勢並ぶものなき、辰夜叉御前よりの

雪戸　嚴命にござりまする。

幾野　これは又、いかなる事のお上使かと存じますれば、思ひ寄りませぬ御不審の段々。尤も悴平井保昌は、丹後守に任ぜられ、東國赴任の留守なれども、その母のこの幾野、何しに御主人頼光公、花園姫樣もろともに、當家に隱まひ申さんや。

春町　左樣でござりまする。保昌任國の留守中、當家の介添へとなり居りまする、卜部季武が妹の春町同じ家臣の内なれども、何かの目代候はゞ、兄の云ひ附け、わたしが役目。

幾野　左樣のお疑ひ受けまする覺え、かつぷく以て

兩人　ござりませぬ。

石蜘　して、保昌が妻の和泉式部は、なぜこの所へ罷り出ぬのだ。

幾野　式部ことは今朝未明、高明公より火急のお召し、早速參れど今以て

春町　歸りの遲いは只事ならず、いかなる御用の筋なるや。

雪戸　それも矢ッ張り花園樣と

石蜘　頼光が身の上詮議。

幾野　すりや、どこまでも

雪野　申し譯の筋もあれば

春町　御老母様

幾野　春町どの、ハテ何としたら

兩人　よからうぞいの。

ト思ひ入れ。向うにて「滿仲公よりの上使」と呼ぶ。

春町　ナニ、御主人滿仲公よりの御上使とは

幾野　ハテ、時も時、折りも折り。

ト向うを見て思ひ入れ。又「上使」と呼ぶ。三味線入りの鳴り物になり、向うより和泉式部の妹橋立、振り袖、裲襠衣裳、金の短册の附いたる梅の折り枝を持ち、後より三藤平馬、麻上下、大小、股立ち取つたる形にて出て來り、花道にとまる。

幾野　滿仲公よりの御上使とござれば

春町　まづ〳〵あれへ。

橋立　御免なされて下さりませ。

ト鳴り物の切れにて、橋立舞臺の上へ通り、床几にかゝる。平馬、ツカ〳〵と來り、幾野を目がけ

平馬　御老母、動くまいぞ。（ト立ちかゝる。）

春町　こりや理不盡に、何とめさるゝ。

平馬　今日の上使は、この館の主保昌、その内室の和泉式部が、妹の橋立どの、縁者のよしみで猶豫はさせぬ。それゆゑ平馬が

春町　何となさる。

平馬　取かこんで潔白を、糺すが役目。

橋立　コレ〳〵、お控へなされ平馬どの、御主人滿仲公よりの上使に、立ちましたはこの橋立、未だ仔細も申さぬ内、老母へ對して慮外でござらう。

平馬　でも附き添つた平馬が役目。

橋立　（思ひ入れあつて）見事勤むるこの橋立、控へてよからう。

トきつと云ふ。平馬、モヂ〳〵して

平馬　畏つてござりまする。（ト下手へ控へる）。

幾野　して、御主人滿仲公より、御上意の趣はな。

橋立　滿仲公へお宮仕へのこの身ぢやとて、勿體なくも頼光公の、罪を咎むる今日の役目、上意の趣、橋立が、心を籠めしこの一ト枝、いざお受取り下さりませう。

ト持ちたる梅の枝を幾野に渡す。幾野取つて

幾野　滿仲公より御上使の、心を籠めし梅の一ト枝。（ト見て）結び附けたる短册は、ナニ〳〵「春の夜の闇はあやなし梅の花、

春町　色こそ見えぬ色は隱るゝ。」

幾野　こりやこれ、保昌が嫁の和泉式部、未だ大内にありし時の詠み歌。（ト思ひ入れあつて）「春の夜の、闇はあやなし梅の花。」（ト考へるこなし）。

橋立　サア、春の夜の、闇はあやなしあやなくば、戀路に浮名立ち染めし、花は卽ち花園樣、色こそ見えぬ色は隱るゝ、たしかにそれと見えねども、色は隱るゝお二人の、在家はたしかにこの館と、疑ひかゝりし上からは、滿仲公にも是非に及ばず、賴光公のこの一ト枝、手折つて出せと仰せを受け、上使に立つたる橋立が口上、御合點が參りましたか。

幾野　すりや、御主人滿仲公にも、お疑ひをかけ給ひ

春町　お家の根繼ぎ花の兄、梅は卽ち賴光の

橋立　御首賜はり立歸れと

幾野　その口上の橋立どの。

春町　色も香もあるこの一ト枝。

幾野　でも郎答にその引受けの、ならぬは梅のその一首、その詠み主は和泉式部、保昌が留守なれば、式部が歸りを待受けて

石蜘　花園姫が首打つて、上使のおれに屹度渡すか。

平馬　頼光どのゝその首にも、受取り役の差添へに、役目を請けた三藤平馬。

石蜘　その時異議は云はせぬぞよ。

橋立　（思ひ入れあつて）暫く爰に待つわれ〳〵、その刻限は

ト あたりを見廻し、あり合せたる手拭へ、手水鉢の水を柄杓にてかけ

まツこの通り。

幾野
春町　これは。

橋立　この濡れ衣のかはくまで、その御返事を

幾野　致すでござらう。

橋立　「ぬぎ捨つる、そなたばかりの濡れ衣、

幾野　ながき涙の、

雪戸　習ひなりけり。」
幾野　それは古へ筑前に、子を憎みたる繼母の業。
橋立　傳へて濡れ衣物語り。
石蜘　長物語りを聞かうより、和泉式部が歸りを待受け
平馬　黒白わかつ二人の命。
橋立　まづそれまでは
雪戸　幾野どの
春町　お上使樣
幾野　奥の一間へ
皆々　入らせられませう。

と唄になり、石蜘先に雪の戸、橋立、平馬附き添ひ、春町とも、この人數奥へ入る。幾野殘り、思ひ入れあつて、奥を窺ひ、揚げ幕の方へ向ひ、手招きをすると、向うより前幕の網を掛けたる駕籠に安輔をのせ、跡より仁八、菖蒲革の足輕にて附添ひ、ひそ〳〵と出てくる。幾野、二重舞臺へ上り、奥を窺つてゐる。仁八、駕籠より安輔を引出す。駕籠舁きの足輕、駕籠を舁いて入る。安輔あたりを見

廻し思ひ入れあつて

安輔　爰はマアどこだ。

仁八　爰か、爰は滿仲公の御家來、平井保昌樣のお館だワ。

安輔　そんなら爰が

ト思ひ入れ。幾野は奥へ心遣ひしてゐる。

仁八　噂に聞きやア、今度丹後守に任國をして留守ださうたが、前方と違つて、强氣に立派な屋敷になつたわえ。ア丶、羨ましい事だなア。

安輔　此奴はふざけた事を云ふ男だ。前方に違つたものと、そんならわりやア、おらが旦那保昌樣の、前方の事を知つてゐるか。

安輔　知らないでどうするものだ。今こそこんな身柄になつたが、誠を云やア

幾野　コリヤ〳〵、何をツカ〳〵と、滅多な事を云ふまいぞ。

安輔　モシ、わしを戻り橋の柳の御殿から、暗雲に駕に打ち込んで、韋駄天が早打ちそこのけに、引つ淩つてござりましたが、こりやアマア、わしをどうする氣だえ。

幾野　其方にはわしが、賴まにやならぬ事がある。

安輔 アノ、わしに頼まにやならぬ事がある……そりやマア、内證のつうくつになる事なら、火の中へでも飛び込まうし、どんな事でも頼まれませうが

ト この臺詞を云ふ内、幾野、安輔の顔をいろ／＼に見て

幾野 成る程、よう似た／＼。成人するに隨うて、勿體ないが其儘ぢや。

ト 思はず云ふを安輔聞き咎め

安輔 モシ／＼、わしが似たとは、そりやマア誰れに似たえ。

幾野 サア、わしが似たといふは

仁八 それ／＼、さう云やマほんに、下りの榮三郎が錦繪に其儘。そして、頼光樣にも似てゐるわえ。

幾野 コリヤ／＼、ちやつと坐りやいのう。

安輔 なんだ坐れ……斯うかえ。(トしやんと坐る。)

幾野 見れは見る程、よい男に(ト思ひ入れあつて)立つて見や／＼。

安輔 なんだ、又立つて見ろ……それ。(トしやんと立つ。)

幾野 ほんによう成人して(ト云はうとして)そちや病があつたが、癒つたかや。

安輔 何の事だ。下に居て見ろ、ヤレ立つて見ろ、病があつたが癒つたか。しつかいそりやァおれが、

さぼてんお婆ァに云ふ世間の臺詞。マア、早く歸りたい、歸して下さりませ。

ト行かうとする。仁八留めて

仁八　待て。そりやァならない。これにござる幾野樣の云ひ附けで、いろ〳〵と態を變へ、われが在家を柳の御殿で見出したのだワ。どういふ御用か知らないが、われへ今度お賴みなさるゝ、その御用さへ仕負せたらば、われも、おれも、一かどの御褒美だ。無駄事にやァ、マア〳〵させない。

安輔　コレサ、もう褒美も何もいらない。こんな屋敷に居るのは嫌ひだ。サア、そこを退いてくんな。

ト又行かうとする。

幾野　ヤリヤ〳〵待て。仁八、留めい。

安輔　その內來やせう。

仁八　そりやァならない。

ト仁八は安輔を引留める。ちよつと立廻りあつて、安輔　ツカ〳〵と向うへかゝる。途端に向うにて「奧樣のお歸り」と呼ぶ。これにて安輔、向うを見て、しやんと留まる。

待ちをらう。

ト仁八安輔入れ替り、又「式部樣お歸り」と呼ぶ。三味線入りのみだれになり、向うより和泉式部、裲

襠衣裳の形にて、後より菖蒲革の侍ひ三人附添ひ出てくる。これにて安輔仁八、ヂリ〳〵と舞臺へ押し戻され、和泉式部本舞臺へ來ると、侍ひは下手へ入る。安輔すぐに又向うへ行かうとする。

和泉　その者留めや。

仁八　ハツ。又しても、動くな。

ト仁八留めて、ちよつと鍔先をくつろげる。安輔慄へる思ひ入れ。和泉式部この樣子を見てゐる。

幾野　和泉式部、戻りやつたか。

和泉　御老母樣には、これにお出でなされましたか。只今高明公の御前より、戻りましてござりまする。

幾野　イヤモウ、あんまり戻りが遲いゆゑ、大抵案じた事ぢやござらぬが、してマア、何の御用ぢやぞいのう。

和泉　御尤もでござりまする。何もお案じなさるゝ事ではござりませぬわいの。

幾野　併し、さうばかり聞いては、どのやうな御用かわからぬが

和泉　サア、その仰せ渡されました御用と申しまするは

幾野　どのやうな事でござるぞいの。

ト此内安輔心附き、下手へ控へる。

和泉　それ〳〵、マアお聞き遊ばしませ。丹波の國、大江山と申しまする所に、此間より鬼が出まするとのお話し。なんとマア、怖いお話しではござりませぬか。

幾野　そんならアノ大江山へ、鬼が出るとのお話し、それをマアあのやうに、慌しくお召し。ホヽヽわしやモウ、大抵案じましたわいの。

和泉　左樣でござりませうとも。私しも、何ぞむづかしい御用かと存じました所が、そのお話し。何がソノ鬼が、美しい女とさへ申しますれば、洛中洛外駈け廻つて捕へて參り、多勢を調へ置きまして、御酒の相手を致させまするとさ。

幾野　ほんに、そりや油斷のならぬ事。コレ、其方なぞは、保昌が留守といひ、別して氣を附けたがようござるぞや。

和泉　なんのマア、私しどものやうな者を

幾野　又卑下を云はしやんすかいの。忰保昌が戀ひ嫁の和泉式部、美しいといふ事、御所中にも隱れない。鬼もよう知つてゐますわいの。

和泉　サア、それもずんと若い時分の事。前方稻荷山へ參りまして、俄の時雨に蓑を借り……それ〳〵「時雨する稻荷の山のもみぢ葉は、靑かりしより思ひ染めしを」……文を附けられた事もござりま

すわいな。

幾野　きつと用心をするがようござるわいの。

和泉　それゆゑ高明公の仰せには、御主人頼光公、良門征伐とは僞り、保昌が館に居るであらうによつて、早速大江山へ立越え、その鬼女の首を切つて來いと、思ひもよらぬ今日の難題。こりやマア、どう致したらようござりませうぞいなア。（トこなしにて云ふ。）

幾野　そんなら御主人頼光公へ、鬼の首を切つて出せと

和泉　退引きならぬ高明公の難題。

ト兩人顏見合せ、ヂツと思ひ入れあるべし。

幾野　それゆゑにこそあの若者

和泉　どれからお連れなされました。

幾野　抱へました。わしが側近う召し使うて、とつくりと云ひ聞かせ、まさかの時には頼光公のお供先大江山の鬼神退治の、お命替りになるべき者と

和泉　でも、身許も知れぬ者に

幾野　滅多に明さぬ家の作法。仁八、奥へ同道しや。

安輔　どうでもわしを歸す事は
仁八　ならない〳〵。奧へ來い。（ト又鍔をくつろげる。）
安輔　アヽコレ。
和泉　御老母樣
幾野　式部どの
安輔　そんなら奧へ參りませう。
　　ト唄になり、幾野先に仁八安輔附き添ひ、思ひ入れあつて奧に入る。和泉式部見送り
和泉　そんなら御老母幾野樣にも、高明公より急のお召し、この式部が參りしは、賴光公のお身の上と、兼ねて御存じありしゆゑ、割符を合す互ひの心、明けては云はぬ一大事。お召し抱へなされしと仰しやつたあの若者、夫平井の保昌どのに、兼ねて噂を聞いてゐた、もしや弟の
　　ト思ひ入れ。奧より石蜘法印に雪の戸、下座より平馬出てくる。
石蜘　和泉式部、戻つたか。
和泉　あなた樣は
石蜘　辰夜叉御前よりの上使、波早中納言興風。

和泉　お前は室津權の頭樣の御内證

雪戸　雪の戸でござりまする。

平馬　身共は此度滿仲公へ、今參りのお氣に入り、今日上使に立てられたる、式部どの丶妹御、橋立どのに附添ひ參つた、三藤平馬と申す者。

和泉　これは〳〵、夫保昌こと、任國の留守中、名代として高明公の御前へ召され、お待たせ申せし大きな失禮。早速承りませうは、御上意の趣

石蜘　云ふなといつても云はにやァならぬ、雪の戸、御身から云ふか、波早から云はうか。

雪戸　お前も仰山な。辰夜叉御前樣からの御上使なりや、お前から

石蜘　オヽ、ちつとさうもござるまい。この波早を差措き、先へ云つてお見やれ、手は見せぬ所だ。波早を立てゝ、おれから云へとの一言、過分でござる〳〵。

和泉　これはしたり、そのお辭儀合ひは兎も角も、いかやうな御上使でござりますぞいなア。

石蜘　先刻も云つた事、長くは申さぬ。先君御心をかけられたる、池田中納言の娘花園、賴光と不義に極まれば、コレ全くの大罪、急ぎ花園が首ぶッ放し、この波早に渡せとある、嚴命でござるわえ

和泉　それこそ誠に、思ひもよりませぬ御不審。東國下向の賴光公、殊にその花園樣との不義密通

石蜘 イヤ〳〵、まだそればかりぢやァない。まだある〳〵。サア、後を云やれ。

雪戸 この事御違背あらば、兼ねて滿仲公に下し賜はる所の武將の官符、お取上げなされんとの御難題

石蜘 それ〳〵、その官符々々。

雪戸 これはしたり、邪魔になりますわいなァ。

石蜘 なんだ、身が申す事が邪魔になる。それならなぜ連れ立つて來た。

雪戸 でも官符といふ物を、あなたが知らぬと仰しやるゆゑ。

石蜘 サア、知らぬによつて尻馬に出たのだ。知つて居れば、御身に臺詞は廻さぬわえ。

雪戸 左樣なればこの後は、お前仰しやりませいな。

石蜘 イヽヤ、お手前お云やれ。おれが官符を知らぬによつて、この後を云へとは慮外者めが。サア、後をキリ〳〵云やれ。

雪戸 多田のお家の御家督は、賴光公へ下し賜はり、花園姫の御首を、官符もろとも受取つて立歸れよとの、辰夜叉御前樣の嚴命にござりまする。

和泉 すりや、武將の官符、花園姫樣の御首もろとも、お受取りなされえとあるお上使樣。はてなァ。

平馬 さて、これからは平馬が番。其許の妹御橋立どの、上使には立たれたれども、姉妹のよしみ、油

断はならず、頼光公花園姫、不義の科は重き罪科、滿仲公にも云ひ譯なく、保昌が館へ立越え、
頼光の首ぶッ放し、受取つて歸れとある、滿仲公の上意でござるぞ。
石蜘　サア、花園が首討つて渡すか。
平馬　頼光公の御首も、討ち取つて渡さつしやるか。
和泉　いかにも、討つてお渡し申しませう。
雪戸　滿仲公へ下しおかれし、武將の官符も差上げめさるか。
和泉　畏りました。
石蜘　コレ〳〵、何を云つても、畏る〳〵と、間に合せの安請け合ひ。いよ〳〵頼光花園の、二人の首
を、見事討つのか。
和泉　そりやはや、何とござりませうか。
石蜘　辰夜叉御前の仰せを背けば、その身の滅亡。
平馬　滿仲公の仰せも背くか。
石蜘　和泉式部、返答は
兩人　サア〳〵

石蜘　なんとだ。

和泉　（こなしあつて）これは餘りの御性急、假初ならぬお二方のお身の御難儀、さう又お急きなされては、工夫思案の御返答、申し上げらるゝものではござりませぬ。まづ〳〵酒でも召し上りまして。

石蜘　ナニ、酒を飲め……

和泉　誰ぞ、銚子土器を持ちやいのう。

腰元　畏りました。

ト合ひ方になり、奥より腰元一人、白木の三寶に土器と、長柄の銚子を運ぶ。

仰せ附けられました銚子杯、持參致しましてござりまする。

和泉　まづ〳〵一獻召し上りまして後、ゆるりとお受け申し上ぐるでござりませう。煙草盆持ちや。

腰元　畏りました。

ト煙草盆を持つてくる。和泉式部二重へ上り

和泉　御免なされて下さりませ。

ト和泉式部、煙草盆引寄せると、向う揚げ幕にて「ドれ〳〵」と云ふ。すぐにテンツヽになり、菖蒲革の若黨一人、六尺棒を突き、さぼてん婆ア、前幕の形、片端折りにして、呉蓙を抱へ出てくる。花

道にて

若黨　下れ〳〵。此奴は下り居らぬか。

さほ　ハテサテ、そんな古い事は云はないものだ。退きなさい〳〵。

若黨　下れ〳〵。

ト云ひながら舞臺へ來る。

さほ　ハイ、ちつとお頼み申しませう。こちらのお屋敷の御老母樣に、お目にかゝりに來た者でござりやす。お取次をお頼み申しやす。

トこの時奥より仁八出て來り

仁八　なんだ、御老母樣にお取次を頼むといふのは、われか。そんなむさい穢ない形で、抱いてるのは寐茣蓙ぢやアないか。其方がやうな者にお近附きはない、キリ〳〵と歸りならう。

さほ　これなア、わッちが抱いてる寐茣蓙は、西行が風呂敷包みと同じ事、離さないのが商賣づく。何も胡亂な者ぢやアござり申さない。さほてんお婆アが來たと、ちよつと仰しやつて下さりまし。

仁八　(思ひ入れあつて)して、お目にかゝりたいと申す、用向きはいかやうな事だ。

さほ　アイ、わッちが抱への代物、袴垂れの安といふ男、惣嫁ぢやア板頭、それを引上げなすつたは、

爰のお屋敷のお婆ア様、まだしも心中されないが仕合せ。玉さへ取返しやア、これから直に戻り橋へ行つて、商賣がなるといふもの。生き物を使ふわッちだアな。それとも取次ぐ事がならざア、ドレ、奥へ行つてお目にかゝらうか。

ト奥へ行かうとする。仁八引留め

仁八　身の程知らぬ下郎めが。

さほ　オヽ怖。こりやア怖い、なんの事たえ。たかゞ男惣嫁で身すぎをする、さほてん婆アだよ。その位なおどしをくつて、こんな商賣がなるものか。やかましい、退きなよ。

仁八　おのれ、御上使のお入りといひ、お歴々の前とも憚らぬ横道者、慮外者めが。

さほ　なにさ、御上使様だらうが、お歴々だらうが、筋のない強請り騙りぢやアないよ。誰れだと思ひなさる、さほてん婆アだアな〳〵。（ト云ひながら石蜘を見て）ヤア、お前は

平馬　さほてんか。

石蜘　コリヤ〳〵、滅多な事を申すまいぞ。さほてん野暮てん殿上人、波早中納言に向ひ、慮外申すと免さぬぞ。

ト云ひながら無性に頭を振り廻す事などあるべし。和泉式部ヂッと様子を見てゐる。

平馬　左やう〳〵、滅多な事を申したら、其方が爲になるまい。身も此間滿仲公へ、今參りのお氣に入り、三藤平馬といふ者だ、滅多な事を云ふな〳〵。

さほ　なんの事たな。無性に云ふな〳〵と、漬け菜が聞いて呆れらア。云ふなら何も云ふまいが、サア、わッちが抱への袴垂れの安を、キリ〳〵返してくんな。爰の内にやァ挨拶の仕手はないのか。御亭主樣はお留守かえ。どうしてくんなさる、どうするのだ。

ト無性に怒鳴る。和泉式部、思ひ入れあつて

和泉　夫平井の保昌は、丹波守に任國の、留守を預る妻の式部、最前より樣子を聞けば、一條戻り橋に於て、男惣嫁とやらを渡世に致すとの事。御主人多田の滿仲公、當時洛中の警護職、その家臣たる保昌へ、屆けもなく洛中に於て、古今聞かざる男惣嫁、何方へ屆けをなして、其方は渡世を致すぞ。

さほ　サア、そりやァ

和泉　返答によつては、その分には差置かぬぞ。

石蜘　イヽヤ、そりやァこの波早中納言に屆けた。オヽ、波早中納言が申し附けた。

和泉　この和泉式部、上東門院へ仕へ奉りしより此方、大內に於て波早のお家と申すを聞かず。猿猴に

石蜘　冠りと、紛れ者の御上使樣、石蜘の法印ぢやと、キリ〳〵名乘つておしまひなされ。

雪戸　イヽヤ、たとへ素性は兎も角も、時に取つて辰夜叉御前よりの使者だ。

平馬　イヽヤ、さうは申されまい。當時辰夜叉御前樣の、嚴命は重けれども、上使と僞はる今日のお役目。それゆゑにこそ關白どのより、仰せを受けて附添ふ雪の戶。

和泉　三藤平馬もまツその如く、附添ひ來りし滿仲公の御家來、上使に對し今の挨拶、式部どの、慮外であらうぞ。

平馬　滿仲公の仰せを受け、上使に立ちしは妹橋立。凡そ家來に住み込む者、保昌が方へ屆けなき三藤平馬、とくと身許の詮議をしようか。

和泉　何がなんと。

平馬　今改めて平井の保昌、三藤平馬へ暇を遣はす。キリ〳〵と出てうせう。

和泉　サアそりやア

石蜘　お上使樣の衣冠を剝がうか。

和泉　サアそりやア

石蜘　御法度を渡世を致す其方、きつと糺明申し附けうか。

さほ　サアそりやア
和泉　サア
三人　サア
皆々　サア〳〵〳〵
和泉　誰ぞ參れ。
仁八　ハツ、御用でござりまするか。（ト前へ出る。）
和泉　あの三人を、ほツ拂へ。
三人　アノ、われ〳〵三人を（ト思ひ入れ。）
雪戸　モシ、式部様、斯様な事もあらんと存じ、附添ひ參りしこの雪の戸、辰夜叉御前様への御返答必ずわたしへ御遠慮なう
和泉　でも今日は御上使ゆゑ
雪戸　なんのわたしに其やうな。只何事も打明けて
和泉　お願ひ申すは（ト皆々へ思ひ入れあつて）サア、參りませう。
ト唄になり、和泉式部に雪の戸附添ひ、奥へ入る。四人顔見合せ

仁八　こりやアとう〳〵三人とも、しくじつてしまつたな。
石蜘（冠り裝束を脱ぎ、）とんだ目にあつたわえ。
平馬　石蜘先生、こりやマア何の事た。
石蜘　何の事だといふ事があるものか。おれも高明どのゝ氣に入つて、あの辰夜叉樣を蘇生させる時分までは、精根も強かつたが、どうでもあんな事で氣を遣ひ過ぎた上からは
さほ　それ〳〵、どうかこの頃は氣抜けがしたやうだ。てめえも矢ッ張り妓夫仲間で居ればいゝに、いらざる滿神公の館へ住み込んだばかりで
平馬　斯うしてしくじつてしまつた日にやア、身のまはりだけ上げ坪に
さほ　時に仁八さん、お前の云ふにやア、なんでもあの袴垂れの安さん、屋敷へ引ッ淩はせたら玉に使ふ種を見附けて、きつと金にしてやらうと兼ねての約束だが、その玉は知れたかえ。
仁八　サア、おれも實事師と見せかけて、いろ〳〵に氣を附けても、どういふ玉に使ふやら、今以て譯が知れない。これからおらア氣を變へて、こんな事にかゝつちやア居ない。今日石蜘どのと一所に來た、權の頭が妻雪の戸の、仕打ちがどうも呑み込めぬ。いよ〳〵式部と腹を合すやうなら、その證據を見附け出して、高明どのへ知らせりやア、一かどの褒美の金。ドリヤ、そつと奥へ行

つて

ト仁八奧へ行かうとする。さぼてん婆ア引留め

さぼ　コレ、なんぼみんなしくじつてしまつたといつて、さう性急に離れる事はない。又何ぞの相談が
あらうわの。

石蜘　根が拵へ物といふものはいかないものさ。これだから辰夜叉樣へ、公卿になつて行く事は、否だ
否だといふのを、こりやマアどうしたものであらう。

平馬　斯ういふ時は、なんぞいゝ智慧がない事かなア。

さぼ　三人寄れば文殊の智慧といふが、一人多い。そこで智慧が出ないわえ。

平馬　おきやアがれ。

雪戸　（奧にて）誰ぞお侍ひ衆は居ぬか。お侍ひ衆〳〵。

トこれにて仁八、三人に囁き、思ひ入れあつて、さぼてん婆アと平馬は下の方へ、石蜘と仁八は上の
方へ忍ぶ。奧より雪の戸出て來り

夫權の頭は、高明公の御家來ゆゑ、それに連れ添ふこの雪の戸、表向きは敵方ながら、頼光公花
園樣、どうぞ御助命あるやうにと、今御老母より願ひの一通、關白殿下政平公に、どうぞ持たせ

て上げたいものぢや。

　ト雪の戸、懐中より一通を出す。後ろへ仁八出かゝりゐて、この時ちよつと取りにかゝる。

仁八　サアこれは……何サ、政平様へこの仁八が、使ひに行つて上げうと思つて。

　こりや何するのぢや。

雪戸　それでこなたが

仁八　イヤ、さうなくつても最前から、どうぞお前に逢ひたい見たい、ちよつと當つて水性と、金性ならば色仕掛け、指切髪切り骨ツ切り、急いで行つて上げうと思つて（ト又懐へかゝる。）

雪戸　ヤア。

仁八　どうぞそのお使ひへ、わつちをやつておくんなさい。

雪戸　人も頼まぬ文使ひ、女子と侮り懐中へ、手を入れぼくろ悪性な、そんな浮氣な手管では、すつきり末が遂げぬもの。所詮色にはマアならぬ、諦めたがよいわいな。

仁八　そんならどうでもその使ひは

雪戸　其方にや頼まぬ。キリ〳〵行きや。

仁八　でも云ひかゝつた文使ひ、高明公へ差上げて、褒美にさせてくんなさいな。

雪戸　いらざる差配。小癪な事を
仁八　所をどうぞ
雪戸　罷りならぬ。
仁八　イヤ面倒な。（ト又取りにかゝる。）
雪戸　何をするのぢや。
仁八　これ程爰に（ト一通を引き出す。）
雪戸　それを
仁八　どつこい。
　トこれより大小入りの鳴り物になり、兩人この一通を枷に、いろ〳〵見事なる立廻りあるべし。トヾ仁八は雪の戸を當て、一通を取つて
仁八　高明公へ。ソレ
　ト早三重になり、仁八一散に向うへ入る。雪の戸心附き
雪戸　さうぢや。
　ト追ひかけ行かうとする。この時後ろへ安輔出て

安輔　コレ、待つた。

雪戸　でも、追ひかけて

安輔　ハテ、雪の戸どのとやら、今日辰夜叉様から嚴命の、お上使同前、大事なお役目、些細な事に構はずと、奥へござつて館の安否、返事を聞かずばなりますまいがな。

雪戸　それは

安輔　但しお歸りなさるゝか。

雪戸　サア。とはいへ今の

ト又行かうとするのを引廻し

安輔　ハテマア奥へ。（ト思ひ入れあつて）お役目御苦勞。

ト合ひ方になり、これにて雪の戸是非なく奥へ入る、ト石蜘とさぼてん婆ア出て來り、安輔を見附け

さぼ　ヤア、袴垂れの安はそこに居たか、嬉しや〳〵。サア〳〵、早く歸つてくりやれ〳〵。

石蜘　安輔、いゝ所で逢つたわえ。折角辰夜叉様を蘇生させた、褒美に貰つた五十兩、直にてめえに貸してやつたが、さぼてんお婆アが抱へのてめえの事だから、今日までは待つてゐたのも、斯う物毎をしくじつた日にやア、此方も待たれぬ五十兩、サア、たつた今返してくりやれ。コレ、なぜ

物を云はないのだ。

さぼ　そんならお前にも、五十兩借りがあるのかえ。

石蜘　あるどころか。サア、たつた今返せ。イケ太い野郎めでござるわえ。

ト安輔を足蹴にする。安輔ちよつと柄へ手をかけ、思ひ入れをする。

なんだ、なんの面だ。なんぼわれが惡黨でも、この石蜘にやア齒は立たない、サア、たつた今返すか。但しびくしやくするか。これで切るか。

ト安輔が差してゐる大小の柄へ足を踏みかけ、こづく。安輔、ムツとして拔かうとして、拔かれぬ思ひ入れ。ガタ〳〵慄へる。

何が口惜しい。それほど口惜しかア、たつた今返せ。

さぼ　これなア、それも內へ行つたらどうともならうわの。安や、コレ、てめえが又一所に歸るまいといへば、おれが方から尻割りをして、袴垂れの安といふなア、この屋敷の殿樣、保昌樣の弟御、藤原の安輔といつて、關白殿下大江の政平樣へ、押込みに入つたも、此奴でござりますと怒鳴るぞ。

安輔　コレ。

トきつと思ひ入れ。あたりを見廻す。

石蜘　サア、五十兩たつた今返すか。
さぼ　サア、キリ〳〵と歸らないか。どうするのだ。いよ〳〵歸らにやア、今の通りおれが又怒鳴り出すワ…………もしえ、この袴垂れの安といふはネ、爰の殿樣の弟御、藤原の安輔といふ者だよ。
そしてアノ

ト云ふを、最前より安輔、いろ〳〵一腰を拔き兼ねる思ひ入れあつて、この臺詞云ふゆゑ是非なく、思ひ切つてポンと拔き討ちにさぼてん婆アを切り倒し、その刀を持つたまゝ、立ち竦みにガタ〳〵慄へて、悶絶する。

石蜘　切つた〳〵、助けてくれ〳〵。

トわめき廻る。平馬出て來り

平馬　石蜘どのぢやアないか。
石蜘　助けてくれろ〳〵。
平馬　合點だ〳〵。
石蜘　早く逃げべい〳〵。
平馬　ドッコイ、しつかりと

石蜘　忝い。

ト始終時の鐘にて、平馬は石蜘を背負ひ、一散に向うへ入る。この時奥より橋立出て來り、安輔の樣子をよく〳〵見て、悄りして、思ひ入れあつて、一腰へ手水鉢の水を掛け、以前の手拭にて拭ひ、そこにある鞘へ納めると、安輔心附きたる思ひ入れにて、あたりを見廻し、橋立を見て

安輔　そこに居るのは（トきつと思ひ入れ。）

橋立　アイ、わたしでござんす。和泉式部が妹、橋立でござんすわいなァ。最前からの樣子といひ、お前が人を

安輔　コレ。（ト思ひ入れあつて、さぼてん婆アが死骸を下座の方へ蹴込み）滅多な事を云はつしやるな。

ト合ひ方。

橋立　アイ、お前の云ふなと云はしやんす事、何しにわたしが申しませう。その代りに又お前も、わたしが云ふ事、聞いて下さんすお心かえ。

安輔　聞いてくれる心かとは。

橋立　サア、聞かねばならぬ事が、大分此方にあるわいなァ。

安輔　人を殺めし身の科を、隱してもらふお女中の詞、なんなりとも聞きませう。

橋立　エヽ、有り難うござんす。そんなら云うても大事ないかえ。
安輔　云うても大事ないかとは。
橋立　アノ、わたしやお前さんにな
安輔　エ。
橋立　つんとモウ、何ぢややら堅くろしい。そしてマア、お前さんのお名は、何と申しますえ。
安輔　サアそれは
橋立　あなたは藤原の安輔様と申しませうがな。
安輔　コレ、どうしてわしが其やうな
橋立　イエノ〵、お隱しなされますな。よう存じて居りまする。常々母御樣幾野樣のお話しにも、勘當した安輔は、刃物を見れば眩暈の病があつたが、今ではどこにどのやうな、住居をしてゐる事やら、無い緣なら是非なけれど、其方と兼ねて云ひ號け、其方の顏を見る度に、思ひ出しては案じられ、涙の種ぢやと仰しやるを、よう聞き引けて居りまする。それをマア其やうに、なぜ隱しては下さります、そりや聞えませぬ、安輔樣。
安輔　成る程、その恨みは尤もなれど、その勘當もまだゆりぬ。心得ぬはこの館へ、虜となつて入り込

みし、この身の仔細が解らぬうちは、母と互ひに他人向き。其方の姉の式部どのも、わが面體に覺えなければ。安輔とはよもや知るまい。所詮惡黨惡者と、呼び立てられたこの安輔、女夫にはなられまい。

橋立　イエ／＼なんの、天下晴れての云ひ號けぢやもの、何も構ふ事はござんせぬ。そりやお前、胴慾ぢや。わたしや今まで明暮れも、寐た間も忘れぬお前の事、どこにどうしてござんすやら、おなつかしうて逢ひたうて、どうぞしみ／＼お顔が見たいと、神々樣や觀音樣の、お引き合せで逢うたもの、可愛い者ぢやとたつた一言、なぜ云うて下さりませぬ。

安輔　イヤ、さう云やるは僞りであらう。

橋立　なぜ噓ぢや、僞りぢやえ。

安輔　ハテ、其方は多田の奥勤め、結構なマア身の上、此方は今では見すぼらしい、斯ういふ姿の身の零落。

橋立　そんならお前はどこまでも、女夫になつては下さんせぬかえ。

安輔　サア、さういふ譯ではなけれども、この館へ虜となつて、母の詞の端々を、よく／＼聞けば賴光公が御身の大事、まさかの時は安輔が御身……サア、御身が段々の志し、さら／＼仇には思はね

ど、親兄弟の許しもなければ、どうも女夫にやなられまい。

橋立　それが矢ッ張りお前の云ひ抜け、親兄弟に背いても、好いた同志の縁なれば

安輔　其方はわしと添ふ心か。

橋立　そりや云はいでも知れた事。

安輔　たとへ鬼棲む山奥でも

橋立　烏のあさる野末でも

安輔　二人一所に

橋立　暮すが樂しみ。

安輔　とてもさうは、マアなるまい。

橋立　そりや又なぜにえ。

安輔　ハテ、今云うた

橋立　そりや胴慾でござんすわいなア。

ト橋立、安輔が胸づくしを取り、膝へ泣き伏す。この時和泉式部、雪洞を持ち出て來り

和泉　不義者、動くまいぞ。

ト兩人悔り、ほぐれて

橋立 ヤア、お前は姉様

安輔 式部樣。(ト思ひ入れ。)

和泉 妹、其方は今日御主人滿仲公より、賴光公の御首討てよと、上使に立つた役目ではないか。そのお上使に向ひ、若者が慮外緩怠。保昌が留守と思ひ、この式部を見くびつて、妹が役目仕損じさせる下巧みか。アノこゝな橫道者めが……アヽ、見れば見る程、寸分違はぬ

安輔 エ。

和泉 サア、顏形ものごしまで、親は素直に育てしもの。それに引替へ放埒にて、勘當受けた身分ぢやげな。大事にかける我が子ぢやもの、その親が追ひ出したは、よく／＼堪忍ならぬ筋。それからその身も流浪して、上方三界憂き苦勞も、皆樣の御贔屓ゆゑ、早う此方へ呼び返せと、そのお詞の御恩は海山、それも矢ッ張り親の光り。わしも一人のこの妹、どうぞ身持ちをようさせて、その身の出世皆樣の、御贔屓願ふ心は山々、この身に比べて親々の、心を察しわしが意見、云ふは慮外か知らねども……また慮外でもあるまいか。今日の御上使樣。(ト橋立に向ひ) 上使に來たは何の爲、賴光公の御首を、賜はるがその身の役目。見のがしならぬ二人の不義者、そこ一寸も動くま

いぞ。

兩人　エヽ。

安輔　段々私しを思し召しての御異見、誠に骨身にこたへまして、一言半句の返す詞もござりませぬ。前非を悔ひしこの身の放埒。最前も母人の、お詞を承り、符合を合す某が覺悟、せめては今度御主人の、お役に立つて相果てるが

和泉　エヽ。

安輔　最前母の御教訓に、それとは明し給はねども、慥かにこの身をお身替り。

和泉　コレ

安輔　サ、よう得心して居ります。

和泉　ムウ。すりや母樣のお詞を解きおほせ、得心して潔よう

安輔　サア、相果てましても忘れぬ御異見。母人樣、お免しなされて下さりませ。

和泉　オヽ、出かしやんした。それでこそ母御へ孝行、忠孝全きその身の最期。

橋立　エヽ。(ト思ひ入れ)

和泉　サア、最前のその素振り、云ひ號けの殿御ぢやもの、添ひ遂げたいと思ふも道理、無理ではない

添はせてやらう。
橋立　エヽ。
和泉　添ひたいか。
橋立　アイ。
和泉　それ程までに思うた心、せめて名殘りに
橋立　エヽ。
和泉　サア、この世もあの世も二世かけて、變らぬ女夫のその杯、内祝言をさせませうわいの。
橋立　そんなら、祝言させて下さりまするか。エヽ、嬉しうござります。
和泉　コレ。

ト和泉式部、雪洞へ、有り合せたる石蜘法印の裝束をかける。兩人思ひ入れあつて

安輔　なぜ灯し火を
橋立　お隱しなされました。
和泉　暗うするのが內祝言、祝言の取結びは、三々九度の儀式とあれど、急な事ゆゑそこ〳〵に、待ち女郎も腰元も、水いらずの姉が役、さし合つて灯し火隱し、上下立派に婿樣の、衣服をちよつと

改めませう。

ト誂へ胡弓入りの合ひ方になり、和泉式部、廣蓋より白無垢と水上下を持つて出て來り、安輔に着せかゝる。橋立嬉しきこなし。トゞ着せ替へてしまひ、兩人が手を取り、そこへ連れて出て

これから恥かしい床杯とやら。何やら彼やら、ちよつとまなびの神酒土器。

ト白木の三寶へ白鞘入りの九寸五分をのせ、持つて出て

千秋萬歳の（ト泣きながら謠ひ、安輔の前に直し）今こそ誰れに憚らず、色直しの晴れ衣裳。

ト雪洞の衣裳を取る。橋立、安輔の姿を見て驚き

橋立　ヤア、そのお姿は……見れば白無垢、水上下、こりやこれ腹切り刀。もし姉さん、いま祝言させうト仰しやつたぢやござりませぬか。それに引替へ死裝束

和泉　コリヤ、現在義理ある夫の弟、殊に母上の手前といひ、其方よりもこの姉が、助けたいは山々なれど、コリヤ、お家にかゝはる一大事、拔き差しならぬ手詰めの難儀、姉に如才があらうかいのう。殊に今日辰夜叉樣より、雪の戸どのを以て、花園姫樣の御首を討てよとの嚴命、まつた御主人滿仲公より、其方の上使は、頼光公の御首、必ず討てよと、これも主命。その上今朝高明公の館へ、この和泉式部を召され、異議に及ばず多田の家の、一大事との仰せ渡され。獨り武者と呼

ばれたる、夫保昌任國の留守に非ずば、申し開きの筋もあらんに、是非に及ばず、まッこの如く賴光公のお身替り。

橋立 エヽ。

安輔 弓矢の家にありながら、刃物を見れば眩暈の病、所詮平井の家名思ひもよらずと、いよ〳〵つのる身持ち惰弱。勘當受けて家出なし、惡黨の頭となり、盜み取つたる金銀は、手下に與れてこの身の放埓。ふと街の風聞を聞けば、賴光公にお咎めかゝり、多田のお家の一大事と、聞くより心ひるがへり、かゝる時こそ何がなの、お役に立たんと思へども、入り込む手段の無き折から、思ひもよらず戻り橋より、虜となりしはこれ屈竟、忠義を立つるは今この時。とくと母人の心を探れば、誠に違はぬ御教訓、ハア有り難や忝や、最期を急ぐ我が本懷、云ひ號けの橋立どのへ、最前無下の挨拶も、心急かれて兎や角と、扨こそ明す我が本心、兄嫁の式部樣、推量なされて下されい。

橋立 ぢやというて、これがマア、どうマアお前を殺されませう。死なで叶はぬ事ならば、わたしを先へ殺しておいて、それから死んで下さんせ。わたしや先へ死にたい〳〵。モシ姉さん、思案して下さんせ。外に仕樣は無い事か……さうぢや、南無阿彌陀佛。（ト安輔の刀にて死なうとする）

和泉　コリヤ、早まつて粗相せまいぞ。

安輔　この期に及んで未練な事を。時刻移らば皆無駄事。イザ

橋立　モシ。

安輔　コリヤ。

ト和泉式部に介錯してくれいといふ思ひ入れあつて、九寸五分を拔かうとして拔かれぬこなし。橋立寄るを、和泉式部隔てる。この時後ろへ幾野、春町、雪の戸、雪洞を持ち、出て來り

幾野　安輔、出かした。今こそ免す母が勘當。

安輔　すりや、御勘當を

幾野　免す證據は、まつこの通り。

ト幾野、錦の袱紗に包みし安輔の臍の緒の中より龍頭草を出し、そこにある火鉢へ打ち込む。煙硝火パツト立つ。

春町
雪戸　これは。

幾野　閏月庚申の日に生れし臍の緒を、龍頭草に包みおけば、忽ち眩暈の病となると聞きしゆゑ、せめては刃物へ近寄らず、怪我せぬやうにと母が計らひ。

和泉　すりや、最前お話しの通り

幾野　今火にくべしは龍頭草、なんと癒つたであらうがの。

安輔　（刃物をキッと見て）いかにも癒りしこの身の病。

和泉　それも矢ッ張りあなたのお慈悲。少しも早う

安輔　南無阿彌陀佛。

ト橋立は和泉式部を押しのけ、ツカ〳〵と安輔が側へ來たを、引廻し、安輔、膝に引き敷き、思ひ切つて腹へグッと突ッ込む。これにて橋立起き上り、安輔へ取り附かうとする。

橋立　モシ。

和泉　コリヤ。

トこれより竹笛入りの合ひ方になり、安輔苦しみながら

安輔　お役に立つて相果つるは、この世の思ひ出、この身の本懐。これまでも母人や、兄上へ不孝の段段、御免なされて下さりませ、式部樣、お賴み申しまするは、返す〴〵も兄者人、保昌どのへこの仔細を

和泉　氣遣ひある…

安輔　南無阿彌陀佛。

ト苦しみながら、介錯してくれいといふ思ひ入れ。

皆々　南無阿彌陀佛。

和泉　臨終稱會、南無阿彌陀佛。

ト和泉式部、刀を振り上げる。橋立「モシ」と寄るを、幾野隔てる。とたんよろしく、ひやうし

幕

六建目　暫の場

役名――高明姉、辰夜叉御前。碓氷貞光。坂田公時。丹波太郎鬼住。田原ノ千晴。二の瀬源吾近忠。大宅太郎光國。猪熊入道雷雲。保昌妻。和泉式部。同妹、橋立。權ノ頭妻、雪の戸。石蜘法印。息女、花園姫。侍女、春町。同、早咲。同、くれなゐ。

本舞臺、三間の間、結構なる簾屋體、柱巻き紅葉の立ち樹、眞中に「嫐」といふ文字の額を掛け、爰に官女一、二、三、四、すべらかし、緋の袴、手に蕗の臺、三寶土器、長柄なぞを持ち、立ちかゝつて居る。くれなゐ、早咲、白張の上を肩へ引つ掛け、男禁制の高札を持ち、控へ居る。この見得、

鈴の入つたる樂にて、幕明く。

官一 花山の院樣お行くへなく、暫く空き居のこの御所も、さいつ頃より辰夜叉御前樣、補佐としてお入りに附き、以前にまさる御所の賑ひ。

官二 その上、花園姫樣捕はれの身の慰めに、朝な夕なのお歌やら、香やら花やら御酒宴やら、打ち込んでこの氣をとり〳〵。

くれ それについてこの程より、高明公の仰せにて、これこのやうに、男禁制の高札を建てられ、女ばかりの花の御所。

早咲 男といふ字と女といふ字と、三つならべしあの額を、お掛け遊ばしましたは、あれにもいはれがある事かいなア。

官三 その譯を知らしやんせぬか。花山の院樣、外々の女御は捨てたまひ、弘徽殿の女御を、御寵愛深かりしゆゑ

官四 藤壺の女御達の嫉み強く、弘徽殿樣を祈つたゆゑ、花山の院樣には御遁世遊ばしたのぢやわいのう。

官一 嫐の文字の額を掛け、それゆゑ男禁制とは




宮二　なんと恐ろしい嫉妬ではないかいのう。
くれ　ほんに左樣でござりましたか。
早咲　それで譯が解つたわいのう。
辰夜　「思ひやる人の女の隔てずば
花園　幾重もかゝれ峯の白雲。」
くれ
早咲　ヤア、あのお聲は
宮皆　辰夜叉御前樣。

ト琴唄になり、皆々左右へ別れ、宜しく住ふと、チョン〳〵のキッカケにて、簾あがる。上の方に辰夜叉御前、十二單衣、緋の袴、下の方に花園姫、廣振り袖の衣裳にて控へ居る。

辰夜　松風の聲ありてこそ落葉錦を敷くと、よみつらねたる唐歌も、四季折々の戯れに、興を催ほす外山の景色、よい眺めではないかいのう。
花園　夜叉御前樣の御意の通り、花は心を慰むる物とは申しながら詩に作り、歌の心にとりましては、雪を催ほす落葉の風情、却つて眺めが深いやうに存じますわいなア。
辰夜　流石は中納言兼輔どのゝ御息女ほどあつて、歌の心を兼ねたる詞。さいつ頃よりこの御所に、宮

仕へ同前なこなさん、さぞ物憂いやうにも思ふであらうが、これには段々譯のある事、必ずともに何によらず、心置かぬがよいわいのう。

花園　何かは知らず、姫御前の身はお世話勝ち。御深切の程、お嬉しう存じますわいなア。

辰夜　それはさうと花園どの、今自らが「思ひやる人の心を隔てずば」と詠ぜし下の句を「幾重もかゝれ峯の白雲」と詠ましやつた、その心が聞きたいわいの。

花園　ハイ、思ひやる人の心を隔てずばと、遊ばされました心は、これ程に思うてゐるものゝなぜ中に隔てをするぞといふ、疑ひの情を籠められました、手爾波と存じましたゆゑ「幾重もかゝれ峯の白雲」と、憚りながら取あへず、お附け申しましたわいなア。

辰夜　ムウ、そんなら其方の心には、頼光の後を慕うて行きやつたを、親子もろともこの御所へ誘ひしゆゑ、思ひやるの上の句を、其方の心に引きくらべ、幾重もかゝれと續けやつた歌の心は、雲の上といへど詰め牢も目前といふ、心で詠んだ句かいのう。

花園　イエ、左様ではござりませぬ。人の心を隔てずば、幾重もかゝれと戀の情を籠めました心でござりますわいなア。

辰夜　イヤ、さうは云はれまい。峯の白雲とは、心に晴れ間がないと、世を怨みたる歌の下の句であら

うがな。

花園　さうではなけれど、押して左様仰しやれば、又あなたにも少と伺ひませねばなりませぬ事がござりますわいなア。

辰夜　そりや云やらいでも知つてゐる。頼光としつぽり東へ下るところを、この御所へ引寄せし、心を問はしやんすのであらうがな。

花園　御推もじの通り、あなたも女儀でいらせられながら、自らが妹背の仲を、引分けられしお心は

辰夜　妹背の仲とは、そりや誰が事。

花園　頼光と二人が仲。

辰夜　コリヤ、其方には入内の勅使下りしに、いまだ奏聞もなき縁定め、頼光と云ひ號けせしとの返答は、違勅に等しき科により、先達て頼光の首討てよと、波早中納言を以て、多田の館へ申し渡せしわやい。

花園　すりや、頼光樣の御首を

官女　討てとの上意が、下りましたわいなア。

花園　エヽ。（ト思ひ入れ）

辰夜　コリヤ、それが否なら、其方の親の兼房と、頼光を參內させや。

花園　ハテ、心得ませぬそのお詞。（ト思ひ入れあつて）すりや、只今にも參內致さば

辰夜　科を免して、兼房は關白、頼光は將軍。

花園　すりやアノ、本當に

辰夜　おいのう。

花園　ぢやと申しまして

辰夜　其方の力にや及ばぬか。

花園　サア

兩人　サア〳〵

辰夜　自らが詞一つとして、受けぬは背く心ぢやの。

花園　イエ、左樣ではござりませぬが

辰夜　左樣でなくば、なぜ受けぬ。見るもいまはし花園姬、きり〳〵そこを下りや。

花園　ハイ。

辰夜　下れといふに、下らぬか。

ト立ちかゝつて平舞臺へ蹴落す。花園姫思ひ入れ。

サア、無念にあらう。どのやうに苦しうても、この辰夜叉に齒は立たぬ。死首見るを待つてゐや。

花園　そりや又あんまり

ト裾へ縋り附く。辰夜叉檜扇を打ち付ける。花園姫思ひ入れ。辰夜叉所體を繕ひ

辰夜　ホヽヽヽヽ。皆の者、九獻の用意。

トこなし。唄になり、簾下ろ。花園姫思ひ入れあつて泣く。皆々立ちかゝり

官一　モシ／＼、花園姫様、ヤレ／＼お氣の毒な事でござります。頼光様は好い男と、噂の高いお大將様。

官二　そんな好い殿御と、女夫におなりなされしは、あなた様のきつい御果報。

官三　それも果敢なく、お首になつての御對面とは

官四　聞けば聞く程、ヤレ／＼、笑止な事ぢやわいの。

早咲　モシ、花園姫様、源氏を守る神々様もござりまする。

くれ　必ずきな／＼と力をお落しなさらず、時節をお待ち遊ばしませ。

官一　又叱られぬその内に、そんなら皆さん

皆々　サア、ござんせ。

ト官女皆々下座へ入る。この時「平井保昌出仕」と呼ぶ。花園姫思ひ入れ。

花園　最早平井保昌出仕との知らせ。頼光公のお身の上。

ト思ひ入れ。又「出仕」と呼びあつて、三味線入りの樂に、薄ドロ〳〵をかむせたる誂への鳴り物になり、花道より和泉式部、裲襠衣裳大小にて、首桶を抱へ出て來る。この時、嫐の額のあたりに蜘蛛舞ひ下る。兩人これを見て、こなしあつて

和泉　さゝがにの、絲にかゝれる白露は、荒れたる宿の花簾かな。誠に荒れにし花山の御所。

花園　今嫐の額の下へ寄れば、いとも大なるさゝがにの、風かあらぬか飛び退く有樣。

和泉　酉陽雜俎に記したる事、車輪の如き蜘蛛は今山に棲みて、よく人を食すといふ。我が日の本にも古へより、そのためしあると聞く。さては此程洛中にて、葛城山に年經る土蜘、障礙なすとの噂ある、王位に敵たふ魔性なるか。

花園　二世と誓ひし我が夫の、緣の切れ目を蜘蛛の絲に、及ばぬ事を知らするか。

和泉　今目の前にあり〳〵と

花園　かゝる不思議を

兩人　見るものぢやなア。

花園（和泉式部を見て）ヤア、其方は和泉式部、いま平井の保昌というたは

和泉　或る程、御不審は御尤も。今日參りました譯と申すは、辰夜叉樣の嚴命に依り、夫保昌參る筈のところ、折惡しう任國の留守といひ、殊に男禁制のこの御所、それゆゑ女子だてらに刀脇差、夫をまなぶ二人前。

花園　オヽ、その樣子が早う聞きたい。サア、マアこちへ。

和泉　そんならお許し下されませう。

ト鳴り物の切れにて、本舞臺へ來り、大小を下の方へ拔いて置き、首桶を裲襠の下へ隱す模樣にて下にゐる。

和泉　花園姬樣には、この御所においでの御樣子、承りましたゆゑ、さぞお氣もじにあらうと、お案じ申し上げましてござりまする。

花園　そもじも無事で嬉しい。さて何から云はうやら、マア、賴光樣のお身の上、早う聞きたい、云うて聞かしやいのう。

和泉　その賴光樣のお身の上、辰夜叉樣の仰せに依り、是非なく御生害をお進め參らせ、御首討つて、

只今持参いたしました。（トこなし。）

花園　ヤア、なんと。そりやマア本かいのう。コレ、誰聞く人もない。有やうに云うてたもいのう。

和泉　これはお前様、なに偽りを申し上げませう。憚りながらあなた様には、我が君より参れとある上意、それを頼光様と云ひ號けとて、變替へあるゆゑ、頼光の首討てよとある、辰夜叉様の嚴しい仰せ。花山の院様御遁世ある上は、高明公の姉君なれば、退引きならぬそのお詞。それゆゑお覺悟の御切腹。

花園　アノ、誠に御生害遊ばしたか。

和泉　ハテ、なんの嘘を申し上げませう。さぞお嘆きと察したゆゑ、お隠し申せし事ながら、誠御首はコレ爰に。

ト首桶を見せる、花園姫思ひ入れあつて

花園　ヤア〳〵、早お首となりなされたか。ハアヽ。（ト泣き伏し）コレ、其方はマア鬼か蛇かいのう。たとへ嚴命あればとて、ようも〳〵心強う、頼光様の御首を討ちやつたのう。御最期の折柄は、さぞ御無念にあつたであらう。せめて果敢なきお首になりとも、一目逢はせて

ト首桶の蓋を取らんとする。和泉式部隔てゝ

和泉　イヤ、まだ實檢も濟まぬうち、迂濶にお目にはかけられませぬ。まづ辰夜叉樣の御前へ……さうぢや。

ト首桶を持つて立つ。花園姬とめて

花園　マア〳〵待つて

和泉　イヽヤ、おとめなさるな。

トちよつと引留める立廻りある。簾の內にて

辰夜　賴光が首、持參なせしとや。辰夜叉それにて實檢せん。しばし〳〵。

ト管絃にて簾上がる。

嚴命に背かず、賴光が首持參なせしとは、男增りの和泉式部、保昌が名代、大儀〳〵。

和泉　仰せに任せ、不義の賴光、生害を進め、斯くの通り。

辰夜　出かしたく〳〵。さりながらこの辰夜叉、賴光が面體、未だ知らぬ事なれば……オヽ、花園が居るこそ幸ひ、自らが目通りにて、賴光が首、淨玻璃の鏡は女の魂ひ、とつくと据ゑて實檢しや。

和泉　左樣ならアノ姬君樣に、實檢せよと仰しやるのか。

辰夜　おいのう。

和泉　ハイ。

トばた〳〵にて、橋立、着流し振り袖にて、花道より駈けて出て、本舞臺へ來る。辰夜叉、花園姫心得ぬこなし。和泉式部押しとめ

和泉　コレ〳〵、其方はマア何として爰へ來やつた。どういふ譯で……ムウ、狂氣ばししやつたのぢやな。

橋立　イエ〳〵、わたしや悲しさのあまり參りました。よう思うても御覽じませ、殿御に別れてこれがマア、何と生きて居られませう。せめてま一度この世の別れに、お顏を見ようと思うて參りました。お情に、どうぞ逢はせて下さんせいなア。

和泉　オヽ、嘆くは道理々々、さりながら、滅多な事を云ふまいぞ。コレ、あなたは誰あらう、辰夜叉御前樣、そのお目通りも憚らず、徒步や裸足であられもない、慮外があつては爲にならぬ。早うこの場を、サア〳〵、立ちやいのう。

辰夜（不思議さうに見て）見れば怪しき地下の女、殿御よ妻よと詞の端々、そちや何者ぢや。

和泉　ハイ、この女は……アヽ、それ〳〵、賴光樣のお情をかけられました、三保と申す、ハイ、舞ひ子でござります。

辰夜　オヽ、その舞ひ子が、爰へ何しに來たのぢや。

和泉　御生害の樣子を聞いて嘆きのあまり、爰へ來やつたのでもあらうが、爲にならぬ、サア、この御首の爲にならぬ。未練らしい。アレ、花園姫樣さへあの通りに、嘆きをこらへてお出で遊ばす。それに何ぞや。舞ひ子づれの分として、殿御よ妻よとは、場所辨へぬ無禮者、早う立つて行きや。

辰夜　すりや、その女子が舞ひ子ぢやまで……アノ、賴光が寵愛しやつた……はてのう……幸ひ〳〵、花園姫どのといひ、三保とやらも、賴光が首實檢。コリヤ、申し附けたぞ。

和泉　仰せに任す首實檢。お姫樣、必ず悔りなされまするな、未練な事を仰しやらずと、心を鎭めてとつくりと。コレ、其方も嘆きのあまり取亂し、何もかも、サ、云うては返らぬ……辰夜叉樣の御前ぢや程に、賴光樣の御首とつくりと、この世の別れ、姫君樣も、イザ、御覽あられませう。

ト首桶の蓋を取る。兩人見て

花園
橘立　ヤア、このお首は

ト兩人寄らうとする。和泉式部思ひ入れあつて

和泉　サア、コレ申し、賴光樣に違ひはござりますまいがな。お嘆きは御尤もなれど、返らぬ繰り言。また其方も、コレ、賴光樣のお首であらうがな。

花園　さうぢや、成る程、其方の云やる通り、この期に及んで何の未練な、最前其方に怨み云うたが、今では恥かしい……とは云ふもの、愛着の、別れは同じ悲しみの
橋立　やる方もなき蜑小舟、こがれて爰へ來たかひも、其なき人に、たつた一目。
花園　逢ふも涙の
橋立　手向けの回向。
　　ト橋立ツカ〳〵と側へ寄る。和泉式部こなしあつて
和泉　コレ。（ト首桶の蓋をする）。
花園
橋立　お首に相違ござりませぬ。
辰夜　すりや、賴光の首に相違ないとな。イヤ、まだ心得ぬ事がある。舞ひ子の三保とやら、誠舞ひ子に相違なくば、自らが目通りに於て、一指し舞を舞うて見せや。
和泉
橋立　（悔りして）サア、それは
辰夜　舞ふ事はならぬか。
和泉　なんの違背申しませう。コレ、お疑ひを晴らす爲ぢや。
橋立　（うじ〳〵して）さりながら、この場に於てその用意も

辰夜　イヤ、その儘の扇の手。幸ひ、若君を慰めの爲、官女どもが亂舞の樂器。誰そあるか、これへ持て。

官女　畏りました。

ト管絃になり、官女一二三四、鼓と太鼓を持つて出て來り、よろしくそこへ並べる。

辰夜　三保といふ名も面白い。羽衣などもよからう程に、拍子とり／＼、謠ふも舞ふもこの座の興。太鼓は和泉式部、鼓の役は花園、地謠はをかしくも、自らが當座の間に合ひ。

橋立　すりや、どうあつても私しに

和泉　舞はねばあなたの仰せを背く。假に吾妻の駿河舞。

ト狩り衣を橋立へ渡す。官女一、着せる。

花園　玉の冠りのたま／＼に、逢ひ見し人も天人の、今はさながら下界の苦しみ。

ト天冠を取つて橋立に渡す。官女一、紐を結ぶ。

和泉　打つは太鼓の、ばちも報いも、只兩の手に心を籠め

花園　鼓に寄せて我が戀は、三ツ地長地の二世かけて、しん氣しんくの調べの絲。

橋立　結ぶ間もなき憂き別れ。

ト首桶の側へ寄らんとするを、和泉式部とめて

和泉　コレ、返らぬ歎き、今よりは、菩提の爲の尼法師。

橋立　身は墨染のあまの羽衣。

花園　その法の道を佛前へ

橋立　花をかざしの

和泉　追善供養。

橋立　有爲轉變の

ト橋立寄る。和泉式部太鼓の撥にて留める事あつて　地謠〽舞ひの袖

有爲轉變の我が夫に

ト橋立、ツカ〳〵と首桶の側へ寄る。

和泉　コリヤ。（ト思ひ入れ）。――

辰夜　我が夫とは

橋立　サ、我が夫……吾妻

辰夜　吾妻

和泉　サア

ト思ひ入れ。「吾妻遊びの駿河舞ひ」トこれより破の舞になり、何れもよろしく、橋立、首桶の側へ寄らんとするを、和泉式部とゞめる事あつて

〽吾妻遊びの數々に、その名も月の色人は、三五夜中のこれは又、滿願眞如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれをほどこし給ふ。

辰夜　舞ふに及ばぬ、紛れ者。

橋立　紛れ者と仰しやるは

辰夜　最前より心を附けて見るところ、立ち舞ふ内に首桶へ愁ひの有樣、さてこそこれに縁ある者、賴光が贋せ首に相違ない。

和泉　サア、それは

辰夜　サア〳〵〳〵、なんとぢや。

和泉
橋立　ホイ。

ト思ひ入れ。この時花園姫懷劍を出し

花園　南無阿彌陀佛。

ト自害せうとする。和泉式部とめて

和泉　姫君様、こりや何故に御生害遊ばすのぢや。

花園　何故とは、所詮生きては添はれぬこの身、君が御首の證據に自らが死ぬる。放して殺してたもいのう。

橋立　イエ、死ぬるは私し、遠から覺期極めて居ります。

ト自害せうとする。和泉式部、左右を押しとめる思ひ入れあつて

和泉　イヤ〳〵、其方は殺さぬ。何事も滿仲樣のお館にて、夫保昌どの歸り次第、時節があらう。サ、爰で死んでは犬死同前。

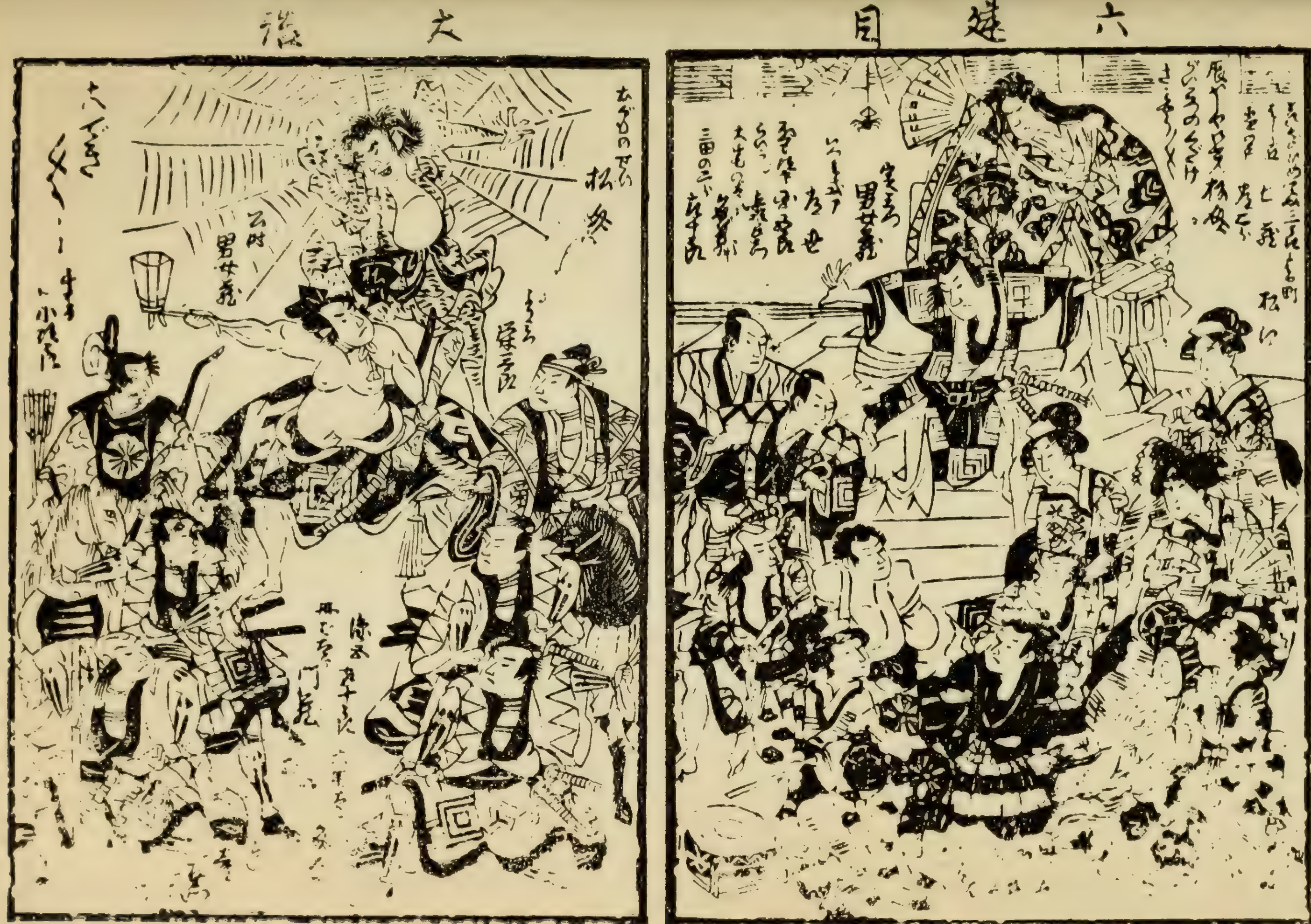
橋立　すりや死ぬるにも死なれませぬか。思へば因果な身の上ぢやなア。

ト泣く。辰夜又、和泉式部が差して來た刀を見て

辰夜　イヤ、その女は兎も角も、花園姫が生害とは面白い。所詮は違勅の罪なれば、死にやいのう。幸ひ式部が帯して來たその刀で、自らが介錯して遣はさうが、どうも死なれまいがな。

花園　なんの〳〵、生き甲斐もなき自ら、片時も早く冥土の旅へ。

和泉　暗き道にぞ入りぬべし、かすかに照らせ山の端の月、月日の惠みもない事かいのう。



ト泣き落す。辰夜叉思ひ入れあつて

辰夜　時刻が移る、最後の用意。

四人　委細畏りました。

ト三保神樂になり、四人の官女、白布と銀の水呑を持ち出る。くれなゐと早咲とは花園姫が所體を繕ふ。辰夜叉、刀を拔き寢刃を合せ、官女の一、水呑の水をかける。官女の二、白布にて刀を拭ふこなし。その內官女の三四は舞臺へ白布を敷くことあつて、辰夜叉は花園姫の後へ廻る。和泉式部、橋立思ひ入れ。これを四人の官女隔てる見得にて納まる。

辰夜　違勅の罪ある花園姫、この場に於て首打放す。今が最後ぢや。觀念。

ト刀を振り上げる。揚げ幕にて

定光　しばらく。

官女　ヤア。（トこなし）

辰夜　ハテ、心得ぬ。男禁制のこの御所にて、いま花園が首討たんとするところへ、慥かにあれは男の聲、暫くと聲かけしは

官女　何者ぢややい。

定光　しばらく。
官女　しばらくとは
定光　しばらく〳〵〳〵。
〽かゝる所へ碓氷の荒太郎定光は
ト大小入り人寄せになり、碓氷定光、市川流の筋隈、荒事の拵へ、三方に官符をのせ、目覺ましく持つて出てくる。
〽實に鳳凰の羽づくろひ、勇ましかりける次第なり。
辰夜　國家を補佐する左大臣、高明が姉辰夜叉が、目通りとも憚らず、慮外をひろぐ赤ッ子め。そもまづおのれは
官女　何者ぢややい。
辰夜　イヤサ
官女　何者ぢややい。
トこれにて定光思ひ入れあつて
定光　東夷、南蠻、北狄、西戎、四夷八荒、天地人の三つを用ひ、合せて三升の紋どころは、市川一陽

來復の、向島なる隱居から、讓り受けたる筋隈に、今年は素袍も改めて、上下賑ふかん顏見世、敵役にはしやッ面見せ、事もおろかや某は、源の賴光が股肱腹心と呼ばれたる、碓氷の荒太郎定光、邪正を糺す花山の御所、美しいへんなご達、男はならぬとまけ出すが、男とも又女とも、いま男女藏が名にめでゝ、いなあふせ鳥呼ぶ子鳥、これ三朝の百千鳥、手爾波も知らぬ長ぜりふ、只御ひいきを何れも樣、願ひあげ幕花道に、花のお江戸の厄介若衆とホヽ、敬つて申す。

和泉　オヽ、よい所へ定光どの、姫君樣の御難儀、サア、早う〳〵。

定光　お氣遣ひなされまするな。この定光が參るからは鐵の楯、いつものやうに引立てを待つてはゐねえ。敵役の化の皮を顯はしてくれべい。御見物樣方、御免なされませ。一番お目にかけませう。ヤツトコトツチヤア、ウントコナ。（ト身繕ひして肌を脫ぎ）サア、脇へ並んだ紙雛ども、今そこへ行くぞ。

官女　ヤア。

定光　さらば御輿を荷ひ出さうか。

トとひよになり、本舞臺へ行き、辰夜叉と見得よろしく

花園　碓氷の定光、參つたか。

定光　ハア、。
橋立　先刻にから待つてるたわいなア。
定光　委細の譯は、あれにて承知致してござる。何は兎もあれ辰夜叉どの、姫君には何科あつて、こなさん劍の舞ひをおッ始めた。
辰夜　花園姫は賴光と不義の科あれば、首討つても大事ない。
定光　そりやア其方の得手勝手といふものだ。若君と花園樣を、この御所へ虜にして、主人賴光を一味させてといふ謀叛、その當てがくひ違つたゆゑ、首を討たうといふのであんべい。
辰夜　ヤア、いはれぬおのれが一言、この辰夜叉を謀叛といふ證據ありや。
賴光　その證據は源の賴光、辰夜叉御前へ見參々々。

トッかけになり、花道より賴光、陣羽織に小手臑當、鋲打ちの鉢卷きにて、重ね草鞋、金の采を持つて出る。跡より田原の千晴、上下を劍ねた上へ、大繩をかけられ、春町、凜々しき形にてこの繩の先を持ち、續いて猪熊入道、繩にかゝり、この繩を大宅の太郎取り、丹波太郎鬼住、袴ばかりの形、この繩を雪の戸取り、あとより石蜘法印の繩を三田の次郎、上下にて取り、皆々出て來り、舞臺へよろしく住ふ。

定光　なんと膽が潰れたか。

辰夜　珍らしや頼光、この者どもを引立てしは

頼光　さん候ふこの頼光、父滿仲が命によつて、謀叛逆徒の輩をば、不意に押寄せ、生捕つて斯くの通り。

春町　辰夜叉御前も叶はぬところ、覺悟きはめてこの御所を

雪戸　片時も早く明け渡され、いづれへなりとも御退去あれ。

三田　異議に及ばゞ御身の爲に惡しかるべし。サア、これからは生捕りの面々

四人　白狀々々。

敵役皆々　白狀する覺えはない。

定光　覺えないもすさまじい、うぬら一々白狀しやァがれ。まづ第一の謀叛人、田原の千晴は、小狐丸の在所まツ直にぬかせ。次に並んだづく入め、高明公へ謀叛を勸めた事。三島の宿から姫君をひつ淩つた鬼任。いが栗坊主が魔法の術。一々白狀ひろぎやァがれ。

千晴　知つた事知らぬといふものか、そんな卑怯未練な田原の千晴でない。家來にいひつけ、捲きあげたを、殺らして取つた奴があると、聞いたばかりでそれから知らない小狐丸、體は鞘割り、身の

猪熊　鍔際、命の切羽に詰まつても、知らねえ事は知らねえワ。この入道も同じ事だ。高明公へ謀叛を勸めた覺えはない。押しの重たい要石、知らねえ事は金輪奈落、大地は無性に搖ぐとも、よもや築地のこの雷雲。そんな安い鯰坊主ぢやァねえワ。

鬼住　丹波太郎鬼住も、無明の酒に醉ひ紛れ、繩目の恥に大江山、たとへ鐵の鎖でも、藁しべ同然引ッ切るツ。その頼み手を云ふものか。突くとも切るとも勝手にしろ。滅多に云つてつまるものか。

石蜘　アヽ、コレ〱、皆が皆そのやうに、太平樂を並べるのは惡い料簡。おれもこの頃は土蜘の術も盡き果て、河童の頭に水のないやうだ。もう瀧野屋の親方が來ちやァおたまりはねえ。この上に飛んだ日にあつては、ほんに大笑ひだ、野暮な事はよしにして、おらァみんな白狀する。おれが口でおれが云ふものを、誰が何と云ふものか。コレ、親方、その謀叛のお頭は

　　トこの時辰夜叉、後にて印を結ぶ思ひ入れ。これにてドロ〱、皆々の繩解ける。

皆々　これは。

辰夜　いらざる無益の詮議立て。頼光如きの批判はいらぬ。この上は虜にしたる若君、面倒な、おッ殺してしまへ。いそふれ方々。

四人　心得ました。

ト千晴、猪熊入道、鬼住、石蜘法印、官女四人續いて下座へ入る。春町、大宅太郎、三田の次郎、雪の戸、互ひに顏見合せ、思ひ入れあつて、四人の跡を追つて入る。くれなゐ、早咲も同じく入る。

定光　片腹痛き惡だくみ。そんな事があらうかと、此方も手段の網を張つて、我が君の御計略。

頼光　渡邊の綱に申し附け、早先達て若君は奪ひ返し、花山寺へお供申した。この上は逆徒を亡ぼし、御代泰平に治めるは、この頼光が方寸の内にあり。

辰夜　イヽヤ、日月の寶劍紛失なせば、政をなす事思ひもよらず。思ひ切つて降參なせ。

花園　その寶劍の紛失も、慥かにそれとは知れねども、最前ちよつと簾の隙。

和泉　慾に巣をくふ山蜘の、まそふの絲の一筋に

橋立　男を嫉む瞋恚の猛火、心の鬼。

和泉　サア、鬼の棲みし羅生門、頼光樣より賜はりし、金札を立てしは渡邊の綱、男禁制のあの禁札、心を附けて定光どの、寶劍詮議のよい手がゝりが

定光　成る程、羅生門にて渡邊が、鬼の腕を切つた時、伯母に化けて取返された。今又御劍を取返すは、鬼にまさつた角前髮、この禁制の禁札を以て、國家を亂す嬲の額、まツこのやうに

ト禁制の札を引抜き、額を落すと、仕掛けにて御劍出る。

頼光　さてこそ尋ぬる日月の御劍。

皆々　有り難やなア。

定光　こんな事があらうと思つて、仕込みに仕込んだこの狂言、なんと一言もあんめえが。アヽ、つがもねえ……サア、これからは若君を、御代に出すこの寶劍、これでも云ひ分があるか。

ト辰夜叉へ差しつける。辰夜叉苦しむ思ひ入れ。この時棧敷上の窓蓋をおろして暗くなる。仕掛けにて、後へ黒幕一面に下りる。よき程に定光、劍をグッと辰夜叉へ差しつけると、これにて辰夜叉引拔き、白骨となる。これを見て皆々思ひ入れ。定光、また劍にて辰夜叉を打つ。これにて、バラ〳〵と碎ける。煙硝火パッと立つ。これにて元の通り黒幕を切つて落す。一面に明るくなると、大なる土蜘を上へ引上げる。皆々これを見て

皆々　さては土蜘の仕業であつたか。

ト石蜘法印、軍兵を連れて下座より出て來り

石蜘　頼光觀念。

ト頼光へ切りかける。立廻りあつて石蜘を切り倒す。軍兵「やらぬワ」とかゝる。定光刀を拔き、一度にバラ〳〵と切る。和泉式部、花園姫、橋立、土蜘を見て思ひ入れ。この途端、拍子

幕

トどん〳〵にてツナギ、引つ返す。

向う一面に大簾、爰に早咲、くれなゐ、以前の形に鋲打ちの鉢卷、紅の手甲にて、薙刀をかいこみ、立ち身。これを軍兵四人左右に分れ、取卷いてゐる。この見得、早神樂にて幕明く。

軍兵 どこえ。

早咲 高明千晴へ一味なしたる葉武者の面々、習ひ覺えし早咲が、この薙刀の葉風にて、首をならべる覺悟しや。

くれ 賴光公のお目鏡にて、若君へかしづくくれなゐ、女と思ひ侮つては、爲になるまい。

兩人 そこ退いて通しや。

軍兵 小癪な。

兩人 しや、面倒な。

軍兵 やらぬワ。

ト立廻りあつて、兩人とも軍兵を左右へ追ひ込む。向うより大宅の太郎、門を振り上げ、軍兵四人と立廻りながら出て來り、花道にてしやんと見得。

軍兵　動くな。

大宅　いま大宅の太郎光國が、君の御安否窺ふところ、妨げひろぎやア、叩き碎いて來た陽明門の閂で床几倒しに命を取るが、道おッ開いて通すまいか。

軍兵　やらぬワ。

大宅　いで物見せん。

ト立廻りにて「ドッコイ」と見得。これより大太鼓入りの鳴り物にて、立廻りあつて下座へ追ひ込むと、向うより丹波太郎鬼住、以前の形にて出て來る。大宅太郎見て、花道へ押し戻し、立廻つて、しやんと見得。

大宅　うんざいめらを追ひ拂つた、跡へつん出た丹波の鬼住、うぬらが方の化け物頭、辰夜叉御前は寶劍の、威德で微塵に毀れてしまつた。うぬも早く尻尾を巻き、三拜なしてあやまれば、命ばかりは助けてやるワ。

鬼住　云はせておけば途方もない野癡事。辰夜叉御前再び冥土へ赴くとも、高明公は關白職、源氏の奴ばら皆殺しだ。命惜しくば、われから先へ降參ひろげ。

大宅　さう吐かしやア、もう料簡がならないワ。今素ッ首を切り落すぞ。

鬼住　くらひ太つたその體を、胴切りにしてやるワ。

大宅　この光國が刀のほど

鬼住　この鬼住が武藝のほど

大宅　われが

鬼住　汝が

兩人　小癪な。

　　トこれより立廻りあつて、「ドツコイ」ととまる。ドン／＼にて花道より田原千晴、老繫したる冠、裝束の露を取り、馬上にて出る。この馬の轡づらを猪熊入道取り、裸身の鎧、鉞を持つて出て來り、直に本舞臺へ來る。下座より頼光、以前の姿。これに三田の次郎、早咲、くれなゐ、附いて出て來り

頼光　ヤア、千晴と入道、辰夜叉御前亡き上は、最早叶はぬ汝等が謀叛、降參するか、繩かゝるか。

千晴　たとへ辰夜叉亡きとても、頼光風情が詞にて、思ひとゞまる叛逆ならず、運を天に任する一戰。

猪熊　この入道が取つておきの、力を一時にさらけ出して、千晴どのゝ腰押しする。頼光はじめ觀念ひろげ。

三田　おろか／＼、源氏には四天王といふ强者あれば、何萬騎にて寄するとも、物の數にも足らぬ者ど

も。

皆々　降參々々。

千晴　ヤア、奇怪なるその一言。入道、鬼住、合點か。

猪熊 鬼住　ソレ、者ども。

軍兵　頼光、やらぬワ。

頼光　イヤ、小癪な。

ト思ひ入れ。この時、大簾の内にて

公時　ヤア〳〵方々、變化の正體、坂田の公時見屆けた。

土蜘　くらひ殺すぞ、覺悟なせ。

ト太鼓ながしにて、大簾を引きあげる。上の方に土蜘の精靈、立ち身。下の方に公時、かけ烏帽子、かちんの素袍、雪洞附きの手燭を持つた見得。この兩人をよき程に押し出す。直に薄ドロ〳〵。

皆々　どこえ。

千晴　いかに公時、變化の正體見屆けしとの今の一言。

頼光　心得がたきこの有樣。

猪熊　捕へし變化の正體は

皆々　何奴だえゝ。

公時　花山の御所にて定光に、打碎かれたる辰夜叉の、血汐を慕つてはる〴〵と、追ひ駈け捕へし變化こそ

土蜘　この日の木を覆へし、わが棲む魔國になさんずものと、思ふ折から石蜘法印、わが魂魄を辰夜叉が、屍をかけて招魂の、折に乘じて人界に、交はつたる我れこそは、葛城山に千年經る、土蜘なるワ。

皆々　さてこそな。

土蜘　いま公時が爲に正體を顯はす上は、どいつもこいつも、片ッ端から食ひ殺すぞ。

公時　われが土蜘で食ひ殺すとぬかしやァ、子供の時から猪猿を、相手に育つた坂田の公時、われをおれが食ひ殺すワ。

土蜘　何がどうした。

頼光　その妖術も叛逆も、いはゞめでたき顏見世なれば

猪熊　初座頭の四天王

頼光　一先づこの場は立別れ
千晴　再會なす戰場まで
大宅　互ひに預かる互ひの命。
土蜘　生を變じて叛逆の荷擔人。
公時　相手は公時、待つてゐる。
土蜘　まづそれまでは
頼光　田原の千晴
千晴　源の頼光
公時　方々
皆々　さらば。

ト和歌になり、皆々立廻りあつて、上の方に千晴と猪熊、その次に鬼作と大宅太郎、閂引き合つて見得になり、下の方に頼光と三田の次郎、早咲、くれなゐ、この外軍兵は棹に並び、眞中に土蜘と公時、キツと見得。

公時　これより第一番目新狂言始まり。

ト打込みにて、めでたく

幕

第二番目

紅葉ヶ茶屋の場

役名――茨木五郎實ハト部季武。古金買ひ、七面の傳七實ハ相馬太郎良門。五郎女房、お政實ハ良門妹、七綾。女郎上り、お綱實ハ小女郎狐。家主、茂九郎右衛門實ハ小山茂忠太。いさみの金。居候ふ、彦。樽拾ひ、三太。質屋、惣太。

本舞臺、三間の間、藁葺きの世話場、正面納戸口、暖簾、戸棚、上の方に九尺の障子屋體、門口には葭簀の風除け、「紅葉ヶ茶屋」と書いたる行燈かけ、雪をおひたる照葉の紅葉・門口に千句合せの角行燈、鴨居の上に天地人、、、と並べて書き附け、右天の字の下に西の内三枚續きに「七ツあるものは片目おろしの戀目」その次に「行きつ戻りつするものは畔道の水鏡」次に「七つあるものは三升に四つ紅葉」右三枚筆太に書き、それより半紙に種々の面白き句を貼り出し、上の方軒口に雪隱し、この雪を切り出しにて下げ、居候の彦、會林にて、木綿やつしにて抱き火鉢をして、題の判木を捺してゐる。惣太、質屋の手代にて、極樂落しに鼠二三疋入れたるを持ち、三太、柿の胸前垂れ、樽拾ひの形にて、五合徳利を三つばかり持ち、金太、いさみの拵へ、この三人寄つて貼り出しを見てゐる。すべて白金

中道寺前、紅葉茶屋の模樣、すべて雪の景色、在郷唄に冬至の通り神樂をかむせたる鳴り物にて幕明く。ト若い者二三人立ちかゝつて

○ 爰へ題を下さい〳〵。

△ 爰へも下さい〳〵。

彥 サア〳〵、お持ちなされませ〳〵。

ト出して渡す。若い者は捨ぜりふにて向うへ入る。

金太 コレ、會林「黑いものは烏」といつたが、類句があつたかの。

三太 アヽ、お前は烏といつたのか。道理でおれの鯨が出なんだ。組みで落ちたよ。

惣太「七つあるものは片目おろしの戀目」とは、なぜ片目おろしが七ツだの。

彥 ハテ、お前それが知れねえか。片目おろしの戀目は一六だワ。

惣太（勘定して）ほんに七ツあるわえ。

會林 その次の「七つあるものは三枚肩の四つ手」こいつもよからうが

惣太 コレ、爰に出てゐる「七つあるものは四日市の三つ星」あいつが一と思つたが、役場へ出なんだわえ。

彦　どうでも七つあるもの〻内ぢやア、「三升に四つ紅葉の比翼紋」といふのが、いッち思ひ附きだ。

金太　イヤ〳〵、どれも〳〵貼り出し面は面白い。明日は「上下」を入れようわえ。

惣太　おらは「無くつてもい〻ものは傾城の絲切歯」で、鉢植ゑの松を景物に取つたが、内へ持つて行くと親方に叱られる。會林、爰へ置いて下ッし。

金太　成る程、傾城に絲切り歯はいらぬものだ。景物は松の位といふ心だな。

三太　そいつは根ッから解らぬ句だ。おいらは地口にせう。會林、紙をくんねえ。

會林　この小僧はよく紙を取る奴さ。大方紙鳶の尻尾か、煙管通しにするのであらうな。

三太　エ〻、しはい人だぞ。

惣太　コレ、向う河岸の天甫の選みに、「青いものは竹光の新身」「當て推量なものは尿瓶の穴」とは、おつりきな句だの。

金太　成る程、そこいらだらうの。時に惣太さん、お前の持つてゐるのは極樂落しに鼠が二三疋、そいつは景物に取つたのか。

惣太　なにサ、こんな景物があるものか。コレ、彦さん、昨夜の半纏の譯が解つたよ。

彦　解つたもすさまじい。其方の内ぢやア、よく物をなくなしたり、そして見えねえ〳〵が癖だぞ。

たま／＼ありやァ、おれが半纏のやうに、襟をズッと疵だらけにして……あの疵が初手からあつたら、一本は貸すまいワ。そんなら其方で出來た疵であらうが、あんまりぞんざいな内だぞ。

惣太　ナニ、ぞんざいな事はござりませぬ。藏の中で出來た疵、番頭もわしらも知らぬ事。その科人を捕まへました。

彥　おれが半纏へ疵をつけた、科人を捕まへたのか。

惣太　アイ、その科人は卽ちこいつらサ。（ト極樂落しを見せる）

彥　ナニ、その鼠が科人か。

惣太　アイ、半纏の襟を喰つて、疵をつけた科人はこの鼠ども、落しにかけて連れて來たから、打つとも殺すとも、存分にして濟ましてくんなせえ。

彥　エヽ、この男も人を馬鹿にした。なんぼおれが親とも思ふ半纏を、喰ひ裂いた敵だといつて、鼠を仇討ちもなるまい。

金太　それ／＼、「なくつてもいゝものは岩見銀山の鼻黑猫」と入れようか。

彥　何をいひなさる。コレ、惣公、おらが内へ鼠を放すまいよ。

惣太　サア／＼、靜かにして地口でも案じねえな。

彦　エヽ、もう五郎どのは歸りさうなものだ。

ト錢箱にもたれてゐる。三人は題を案じてゐる。てんつゝ、通り神樂になり、向うより茂九郎右衞門、家主の拵へにて、大黒傘をさし、下駄がけにて出てくる。

茂九　ハテ、この雪になぜ大神樂があがるな。ハヽア、今日は冬至だな。定めておれが句は、役場へ一に出たであらう。（ト云ひながら本舞臺へ來り）五郎どのや。

ト門口から入る。

彦　アヽ、こりやア大家さん、雪の降るのによくお出でなされました

茂九　イヤモウ、雪でも雨でも來ねばなりませぬ。久しい奴だが、お觸れもあるし、マアそれは後へ廻して、五郎どのは留守かな。

彦　アイ、今し方湯へ行きやした。もう歸りやせう、お待ちなされまし。

茂九　アヽ、錢湯へ行かれましたか。お内儀も留守か。ドリヤ、待つうちに、ちよつと見ようかえ。定めておれの句が出たであらう。（ト貼り出しを捨てぜりふにて讀んで廻り）コレ〳〵、會林、おれが句は今日も出ぬか。

彦　どうござりますか。そこをよく御覽じまし。

茂九　サア、爰には出てゐぬよ。

彦　何といふ句でござりやす。

茂九　ハテ、人の氣の附かぬ奇妙な句を入れておいた。「黒いものは炭團」といふ句だが、なぜ出ぬの。

彦　エヽ、あの炭團はお前かえ。こいつは大笑ひだ。成る程、大家さんの句であらう。モシお前、人體にも似合はぬ、嗜みなさいな。

茂九　コレ、なぜ嗜むのだ。「黒いものは炭團」、氣の附かぬ句であらう。

彦　お前も町役をしながら、あんまり智慧がないぞ。

茂九　コレ、彦や、なぜおれが智慧がない。この家主の茂九郎右衛門は、町内でも小口もきゝ、十間口の支配もする家主が、なぜ智慧がない。コレ、おぬしは居候ふだよ。あんまりきいた風な事を云ふなえ。

彦　ハテ、大家さん、炭團といふ句が出ないといつて、お前熱くなるのか。「熱くなるものは家主の炭團」といふ句がよからう。ハヽヽヽヽヽ、こいつは大笑ひだ。

茂九　おきやァがれ、それがなぜをかしいのだ。黒いものだから炭團と入れたワ。白いものを炭團と入れはしまいし。總別、家主の入れ句は出さねえな。アヽ、聞えた、こりやァいかさまをするのだ

な。コレ、一體爰の内は紅葉ヶ茶屋といつて、見世は水茶屋だが、冬の内は目黒詣りもないから千句合せでもしませうと、あの五郎坊が云ふから、大家も知らねえ顔で、何も世過ぎだから默つてゐれば、家主をいかさまにかけるのだな。店子の居候ふに家主が馬鹿にされちやア、組合に濟まないぞ。この貧乏野郎め、誰だと思ふ、家主樣だぞ。

彦　なんだ、この亡者め、家主でも蠑螈でも怖かアないぞ。なんだ、居候ふだと。コレエヽ、居候ふ居候ふとぬかしてもナ、うぬらに居候ふの眞似がなるものか、尻切り鳶め。とつけもない御託をあけやアがつたな。

ト火鉢を打附ける。そこらが灰だらけになり、茂九郎右衞門の顔へ炭團あたつて割れ、眞黒になる。

惣太　ヤレ〳〵、大家さんの顔で炭團が割れて、眞黒になつたぞよ。

金太　「黒いものは大家の顔」だワ。

三太　おかつしやいな。この手合ひは面白さうに、大家の顔の黒くなつたのが、それ程にをかしいか。

茂九　コレ、居候ふめ、ウヌ、おれに炭團をぶツつけたな。

ぶツつけたがどうした。ぶツつけたばかりぢやア濟まないぞ。ウヌ、おれが斯うするワ。

ト火鉢を取つて茂九郎右衞門の頭をくらはせる。頭割れて血が流れる。

惣太
金太　アヽ、コレ〳〵、大家さんの頭が割れたぞ〳〵。

三太　ほんに、大家さんの頭から血が出て、眞赤になつたり。

惣太　「赤いものは大家の頭」と入れろ。こいつは大丈夫だぞ。

茂九　おきやァがれ。コレ、大家の頭を慰み物にしやァがるのか。コレエヽ、居候め、大家の頭が割れて血が流れるぞ。サア、これぢやァ濟まないぞ〳〵。

彦　やかましいワ。大家の頭の十や二十ぶち割つたとて、へこむやうな居候ぢやァねえぞ。なんだ、大家の頭が割れて血が流れる。淺間山が割れて浪は出ようが、大家の頭が割れて血が流れるといふ、年代記は見た事もねえ。こゝな、黑面大家め。

茂九　ぶちやァがつたな。こゝな、長ツ面野郎め。ウヌ、ぶんのめすぞ。

彦　やかましいわえ、叩ツ挫くぞ。

トこれより兩人叩き合ひになる。皆々捨ぜりふにてとめる。てんつゝ、通り神樂になり、向うよりおまさ、世話女房の拵へにて、塗り下駄を穿き、手拭をかむり、前垂れを肩へかけ、雪を凌ぐ體、茨木五郎、廣袖、やつし平ぐけの横帶、下駄、置き手拭、勇み肌の形にて、澁蛇の目の傘をさし、おまさに胸倉をとられながら出て來り、花道にて

五郎　コレエヽ、この女はなんの事だ。なぜ男の胸倉をとりやァがる。見つともない、放さねえか。
まさ　イヽエ、放しやせん。お前マァ内も忙がしい時分ぢやに、どこへ行きなさつた。
五郎　知れた事だワ、溫まりに湯に行つたが、それがどうした。
まさ　イエ／＼、お前、湯ではござんすまい。錢湯ぢやの、髮ぢやのといふて、あの吉川の傳七さんの所へ、この頃コソ／＼行く事は知つてゐやんす。あそこの内には、品川の年明けが來てゐるげな。この間女湯の番頭が話しで聞きやしたが、若い衆が皆入り込みなさんすげな。その中にお前も居なさんすげな。穴入りもいゝ加減にしなさいよ。
五郎　おきやァがれ、どこにおれが穴入りをした。眞崎の狐ぢやァあるまいし、コレエヽ、見つともない、爰を放せよ。
まさ　イヽエ、放しやせぬ。サア、來なんせ。
五郎　エヽ、放しやァがれといふに、

ト兩人爭ひながら舞臺へ來り、捨ぜりふにて内へ入る。

茂九　サア、濟まないぞ／＼。
彥　うぬよりは此方が濟まないぞ。

惣太　コレサ、宿六が歸つたさうだ。

五郎　こりやアなんだ。居候ふの彦が大きな聲を出して、大家さんの頭から血が出やすが、こりやアざツといさくさと見えるが、どういふ道行だな。

茂九　オヽ、五郎どんか。大家が公用で來て、店子の居候ふにぶたれた。このやうに頭から血が出るほど、こなさんの留守に家主がぶたれたぞ。濟まねえよ〳〵。

五郎　ハテ、大家さん、ようござりやすわな。相手は知れてゐやす、ようござりやすよ。相手さへありやア、譯はいつでも附きやす。お前のへこむやうな事もあるまいわな。

まさ　イヽヤ、へこむやうな事がござんす。アイ、その相手がきつと知れてあるから、此方は氣が揉めるわいな。アイ、その相手があるから腹が立つわいな。

五郎　やかましい、われが事ぢやアねえ、此方の事だ。歸り早々夫婦喧嘩かと思やア、内ぢやア大家さんが居候ふといさくさをおッ始めたか。しつかいおれが内は喧嘩の寄せ場だ。コレ、彦坊や、おぬしも又なんで大家さんの頭をぶち毀した。

彦　サア、宿六、聞いて下さい。あの大家の猿松め、「黒いものは炭團」といふ句を入れて、それが出ないといつて、こなさんやわしを、なま句を出すの、いかさまのといふから、それで起つた喧嘩

サ。

五郎　モシ、大家さん、あの通りかえ。

茂九　成る程、あの通り。おれも町役人をする茂九郎右衞門、無理な事は云はねえよ。黑いものだから炭團と入れたが。それを出さねえ上に、火鉢で頭をぶち毀した。濟まねえ〳〵。

五郎　ハテ、ようござりやすわな。マア、ざつと炭團から出來た喧嘩だワ。炭團の句が出ないから、お前が眞黑に腹を立てたワ。よしか、ムウと云ひなさい。

茂九　マア、ムウ。

五郎　サア、その眞黑に腹を立てたところへ、炭團をぶッつけたので、一倍眞黑に腹を立てたワ。よしか、ムウと云ひなさい。

茂九　さうだ、ムウ。

五郎　その上に火鉢でぶつたから、頭が割れて血が出て、眞赤になつたからお前が怒つた。よしか。

茂九　よしサ。

五郎　ざつと初手は炭團の黑いから起つて、頭が赤くなつたから、それでマア怒つたのも尤も。怒りさうな事サ。それでお前の云ひ條は立つから、物事は灰にしてしまひなさい。ハテ、炭團は當つて

碎けろだわな。

茂九　成る程、貴樣のやうにわしを火いけにしてくれゝば有り難い。有明炭團の物事丸くする氣サ。のう、兄分。

彥　イカサマ、そこがどうでも兄弟分のよしみだけだ。併し「兄弟炭團の始まり」といふ事があるによ。

惣太　サア、たどんな事でも濟ませばすみます。大家さん、碎けてしまはつしやりませ。

茂九　それもさうかい。濟ませませう。

五郞　エヽ、お前は道樂者だぞ。サア、てめえも〆めておけ。

彥　合點だ。

皆々　ヨイ〳〵〳〵。

茂九　イヤ、いたいお世話になりました。

五郞　時に大家さん、何しにござりました。

茂九　ほんに、わしが來たは、久しい奴だがお觸れがあつてよ。コレ〳〵（ト懷中より繪姿を出し）朝敵將門の悴良門といふ者の、これが人相書だ。爰の內は人出りが多いから、この繪姿に似た奴が來

たら、油斷さつしやるな。

ト五郎へ繪姿を渡す。おまさ思ひ入れあつて

まさ　これがアノ、良門の人相書かえ。

茂九　いかにも。そればかりぢやアござらぬ、良門が妹に、七綾といふ女があるげな。その兄弟が相馬の家に傳はる、繫ぎ馬と名附けし二流れの旗、それを懐中する時は、その影七ツに映るとの事。殊に良門は將門が胤で、不死身でござるげな。

まさ　（思ひ入れあつて）モシ、お家主さん、そんならその繪姿は、良門どのゝ

五郎　ヤ。（ト目を附ける。）

まさ　サア、今云はしやんした、影が七ツに映るとは、いろ〳〵な生れ素性も、あるものでござんすなア。

五郎　もうお歸りなされますか。せめて仲直りに、五合も買ひませうに。

茂九　イヤ〳〵、造作をかけては氣の毒でござる。コレ、彦坊、必ず心にかけさつしやるなよ。

彦　なにサ、頭の割れたお前さへその氣なら、わしが方になんで云ひ分あるものかな。

五郎　さうサ、物事は斯う打ち割つてぶち碎くのがいゝのサ。

茂九（頭を抱へ）アヽ、この上ぶち碎かれて見たがよい、大家の頭は柘榴にならう。コレ、お内儀、人は只堪忍が大事でござる。こなさんも腹の立つ事があつても、隨分氣長う、コレ、なんぞ相談があらば、必ず遠慮さつしやらぬがよい。

まさ　ハイ、そりや御深切に、有り難うござります。

茂九　必ず、用があらばござりませ。（ト門口へ出て）そんなら、五郎どの

五郎　大家さん、御苦勞でござりました。

　ト通り神樂になり、茂九郎右衞門は下駄傘にて向うへ入る。

まさ　エヽマア、あの大家さんは見かけによらぬ、さりとは深切な男、よい氣性なお方ではあるぞ。それに引かへ、穴入りばかりする男もあり。エヽ、ほんに世の中といふものは、心に任せぬものぢやわいな。

五郎　なんだと。人の居るところで當てつけがましい。それが否なら出てうせろ。

まさ　アイ、出てうせる、出てうせるわいなア。

　トありあふ極樂落しを取つて叩き立てる。鼠、外へ出て逃げ出す。

彦　ソレ〳〵、鼠が逃げた〳〵。

惣太　オヽ〳〵、鼠が逃げた〳〵。

三太　コレ、かみさん、大概にしなさいな。

まさ　イエ〳〵、否でござんす〳〵。サア〳〵、出て行きやんす〳〵。出て行くからは、わたしが道具も持つて行かにやアなりやんせぬ。（ト戸棚の方へ行く。）

五郎　イヽヤ、道具といつちやア、塵ツ葉ほどもやられねえワ。

まさ　エヽ、おいても下さんせ。わたしや着のまゝでは來やんせぬ。相應に着替へもある。道具もちつとは持つて來たぞえ。出るからは、着のまゝで行くは合點、その代り、針箱でも持つて行くわいなア。

ト戸棚より針箱を取り出し、抱へて行かうとする。

彦　コレサ、おまささん、マア待ちなさいな。

まさ　イヽエ、とめなんすな。わたしや出て行きやんす。

惣太　ハテ、お内儀、急かつしやるな。

まさ　構うて下さんすな。

金太　それでも待ちなさいな。

五郎　ハテ、打つちやつておきなせえ、出られるものか。
まさ　出て行くわいなア。
五郎　うしやアがるなら、その針箱も置いてゆきやアがれ。
まさ　エヽ、しみつたれなこの針箱、何にするものぢや。

ト針箱の中より、袱紗に包みし旗を、五郎に見えぬやうに、ソッと出して懐中する。

それ〳〵、こんな道具はいらぬわいなア。

ト内へ抛り込む。これにて唄になり、おまさはピンシヤンとして、ありあふ傘を出し、下駄を穿いて向うへ、金太惣太三太も捨ぜりふにてとめながら、向うへ附いて入る。

彦　五郎さん、おまささんは强氣に熱くなつて行つたが、あれでもお前濟むまいぞえ。
五郎　なにサ、打つちやつておくがよい。彼奴が燒餅にやア手こずりのめした。見さツし、大風の吹いた跡のやうだ。
彦　併し、どんな女房でも去つた當座は、錢を三百落した心持ちがする。
五郎　おきやアがれ、三百や五百は附けてもやるワ。したが、當分飯炊きが難儀だ。
彦　さればサ、買ひ物は伊勢九の御用で間に合せようが、三度が三度、茶漬屋へも行かれまい。

五郎　ナニ、それしきの事は、どうでも話がなるが、貴樣が見る通り、夜着も拵へかけてあり、浴衣も襦袢も穢れたまんまで、ちよつと繼も一つあてゝくれてがなくても濟むまい。肝煎へ行つて、雇ひ婆アでも頼んで來さツし。

彥　ハテ、雇ひ婆アが小穢なくつて置かれるものか、いつそ若い奴を入れさつせいな。

五郎　入れうといつて、今急に來さうなたぼがあるものか。

彥　ハテ、ねえ事があるものか、隱す事はねえわな。古金買ひの傳七どのゝ所へ來てゐる宿の年明きこなさん遠に跡釜に引摺り込む相談に、極めてあらうがな。

五郎　おぬしはそれを知つてるるのか。

彥　ハテ、わしも去年までは、切り見世の路地番までした男だ。こなさんの目尻の動きやうでも、やるものぢやアねえわな。

五郎　そんなら隱す事はねえが、おらア下ツ齒があるから、いろ〳〵逃げを云つてゐるが、あの女ナ、彼奴は今夜にもふり込む氣よ。

彥　さうでごんせう。そいつは幸ひだ。ちよつと傳七どのへ行つて、彼のを連れて來ようか。

五郎　そいつは有り難い。湯へ行くにも留守がないと行かれねえ。出來るならちつとも早いがいゝ。

彦　のみ込んだ〳〵。一ッ走り行つて連れて來べい。

五郎　こりやァ寒いのに大儀だの。

彦　なにサ、こんな事は早いがいゝ。ドレ、行つてくるべい。（ト門口へ出る。）

五郎　そんなら賴むぞよ。

彦　合點だ。ドレ、嚊ァを一人工面して來てやらうかな。

ト通り神樂になり、下駄、傘にて一散に向うへ入る。五郎殘つて跡を見送り

五郎　コレ、隨分早いがいゝぞよ。支度も何もいらねえから、マア玉を先へ連れて來てから、跡できめ引きをするがいゝぞよ。サア〳〵、ちつと內を方附けずばなるまい。アヽコレ、取散らしておきやァがつた。これにつけても女房が無いと、どうも內がきまらねえぞ。

トそこらを方附け、棕梠箒にてあちこち掃きながら、フト下へ心附き、疊を上げると、合ひ方になり、ちよつと小狐丸を取り出し、思ひ入れあつて

いつぞや都一條にて、不思議に手に入る小狐丸、早速君にと思へども、朝敵の輩おびき寄するに屈竟のこの劍、殊更今家主が持つて來たこの人相書。すりや、相馬の餘類がこのあたりに、徘徊するに極まつた。その上、素性の知れぬ女房おまさ、針箱のあの中を、大事にかけて見せともな

がるも不思議の一つ。心の知れぬあの女房。殊には宇賀の御魂の神の守護なし給ふ小狐丸、不浄を散ずる劍なれば

ト思ひ入れ。この時向うにて

彦　サア〳〵、早いがいゝよ〳〵。

トこの聲に五郎はキッと向うを見て、手早く舞臺前の雪板を掘り、雪の中へ劍を袋のまゝ埋めるこなし。直にてんつゝ、通り神樂になり、向うより彦、絹の五幅蒲團を肩にかけ、繼ぎ棹の三味線箱を持つて先に立ち、おつな、袖頭巾着流し、年明け女郎の拵へにて、黒塗りの下駄、蛇の目の傘にて出る。跡より傳七、木綿やつし股引、下駄がけにて、頭巾をかむり、古金の籠をかつぎ、竹の大笠をかむり、出て來り、花道にて

傳七　コレナ、彦坊、早く〳〵も大概があるものだ。白癡がぶッかけを食やアしめえし、商賣から歸るが最期、湯へも行かないで送つて來たが、そして、直に相談が出來るのか。

彦　出來ねえ事にわしが迎ひに行くものか。おらが內はたつた今、下齒が出て行つたによつて、跡に女房もないから內がきまりやせん。ちつとも早いがいゝのサ。

つな　わたしは又、お內儀さんの出なさつた事は知らず、是非とも今夜はおかみさんが居なさんせうが

まゝ、傳七さんが歸り次第に送られて、押しかけ女房に行くつもり、出かけたところへお前、よう迎ひに來て下さんしたの。

彦　サ、其方がその心なら丁度幸ひ、下齒は別れ引きに及ぶし、渡りに船だ、サア、早く來なさい。

傳七　カウ、彦坊、急ぐはいゝが、押しかけ女房の道具は、こなたが持つてゐる蒲團に三味線、殘りは吊り臺の代りに、古金笊へぶち込んで、親分も仲人も宰領も人足も、わし一人だよ。祝儀が出たなら、その勘定に賴むによ。

彦　オツトのみ込んだ。サア、新らしい下齒、ちつとも早く駈け込みねえな。

つな　そんなら彦さんとやら

彦　サア、來なさい〱。（ト門口へ來り）サア〱、嫁御が來たぞ〱。どこへでも遊びに行きねえ。留守が出來た〱。

五郎　オヽ、彦坊か、もう嚊アの工面が出來たか。

彦　出來た段か、コレ、幸ひ向うから押しかけて、駈け込み女房に來るところに、道で逢つたから引摺つて來たのサ。

五郎　そりやア御苦勞。サア〱、寒いのに、此方へ入りなさい〱。

つな　アイ、五郎さん、先程はちよつと逢ひやした。よくぬしを迎ひに寄越して下さんした。

ト内へ入る。

傳七　コレ、五郎坊や、おらアたつた今、商賣から歸つたらの、この子が云ふには、なんでもぬしの所へ押しかけ女房に行くから、人を雇つてくれろといふワ。この雪に日雇を頼めば、三百も出る詮議だワ。そこでこの子の嫁入り道具を、古金笊へぶち込んで來たが、宿に勤めをしてゐるうちは、わしが判をついたによつて、ざつとマア、親分なり、仲人なり、ひつくるめてわし一人で濟ますからは、此方も勝手。貴樣の方でも何も勘定づくだらう。近年はこの位氣を附けねば、大きに損得のある出入りもの。

五郎　イカサマ、こいつはいゝ所へ氣が附きやした。わしもたつた今、嚊アを追ひ出したから、人手がなくつて困り切つてゐます。何事も物のいらぬやうに頼みます。

傳七　そりやァ合點だ。何も道具といつて、高の知れた手廻り物ばかりさ。まづざつとした花嫁の道具といふのが、五幅蒲團が一枚、今夜から柏餅で濟ますがよい。繼ぎ棹の三味線が一挺、それ〱鏡臺に鏡、こいつは無くてならぬやつよ。枕に豊後長唄の本が一册、お齒黒壺に、コレ〱、手水の糠もあるによ。こりやァ活けかけた紅梅、ソレ、筒ごとあるよ、水のこぼれないやうに頼む

によ。

　　トせりふに合せて小道具を出す。五郎受取り、よろしくこなしあつて

五郎　アヽ何かえ、活け花の梅まで御持參かえ。

つな　さいなア、今宵は冬至ぢやによつて、活けかけた冬至梅を持つて來たわいな。

傳七　跡から出る物は、茶漬茶碗に蓋茶碗、眞鍮のちろり。茶呑み茶碗、中打ちの下駄に裏附きが一足、以上が花嫁の道具の荒まし、こんなものサ。

彥　お雜物慥かに受取りました。時に五郎さん、酒でも出さうか。

五郎　知れた事だわな、ちよつと杯を出しねえ。

彥　オツト合點だ。幸ひ伊勢九の御用めが、新酒を忘れて行つた、これで濟ましてやらう。肴が無かつたわえ。

五郎　ちよつとぶツかけを誂へて來ねえ。併し、ぶツかけは祝儀でもあるまいかえ。

彥　それ〳〵、どうかそれぢやァ藏打のやうだの。アヽコレ、肴を取りにやる人があると、直に吸ひ物位はおれが拵へるに。

五郎　さうサ、これにつけても女房の無いは不自由なものサ。

傳七　これはしたり、女房が無くつて困るといふから連れて來たのだわな。なんぞ相應な用があらば、遠慮なしにさせさつしやいな。

五郎　ほんにさうであつたな。イヤモウ、出した女房の噂をするぢやァねえが、夜着もまだ出來ねえ。マア、早速頼まうは、袖口の綻びを、ちよつと縫つてくんねえ。

つな　アノ、わたしに縫ひ物をさすのかえ。

五郎　さうサ、今までの嚊ァが引摺りだによつて、仕事はみんなぶち込んである。明日は早々仕事にかかつてもらはねばならぬよ。

つな　エヽ、滅相な、わたしにどうしてマア、縫ひ物がならうぞいな。

傳七　それ〳〵、コレ、五郎どんや、云はねえ事は惡いから先へ斷つておかうが、この子は針仕事といつちやァ、爽縮緬の斷ち縫ひはおろか、羽織袴に上下合羽、どんな手輕い繕ひでも、縫へたらよからうが、一針もいかねえ。

五郎　エヽ。(下悄りして)そんなら針仕事は

つな　人のするを見ても面倒ぢやもの、それが出來てよいものかいなァ。

彦　五郎さん、こいつはちつとむづかしいわえ。

五郎　アヽ、そんなら仕事は出來ねえとして、それでも何か出來るだらうの。

傳七　イヤモウその代り、味噌ぢやァねえがいくらもある。マア第一、朝寢といつちやァ、この子ほどの者はあるまい。晝は八ツ時分に起きて飯を食ひ、湯へ入つたせうがには、日短かな時分は丁度二刻はかゝる。サア、それから身じまひだ。そいつがやう〳〵出來ると、そこら中の男を集めて拳を始めの、飲み出すといつちやァ、明日の朝までは請合ひ。その内が三味線の無駄彈き、茶の湯もなるが香花、俳諧、それもいひ立てになる程の藝ぢやァねえ。髮も獨りでは出來ないのよ。油代が一分、とめが一分、頭ばかりも月に二分。その代りには酒と首ッ引き、どんな強い上戸でも、へこむのぢやァねえ。大概の身代は、忽ち飲み潰してしまふ事は請合ひだ。マア、ざつとこんなものだが、こなさんはいゝ女房持ちだぞ。

五郎　彦坊や

彦　五郎さん

　ト二人は顏見合せ

兩人　こいつはちつとむづかしいの。

彦　コレ、頭、今更かけ替へもなるまい。何も緣づくだ、祝言をさつしやいな。

五郎　マア、今夜は花嫁をもらつたつもりで、泊めて見ようか。
彦　さうしねえ。ドレ、おれが酌をしようか。
五郎　そんなら傳七どん、わざつと杯を始めよう。
傳七　ようござりやせう。併し、わしは空下戸だから構ひなさるな。
五郎　時に、杯は女房の方から飲むのかえ。
彦　さうサ、サア、おつなさんとやら、お前が飲んで五郎さんへ獻しねえ。
つな　ハテ、見立ての杯だわな。ぬしの方からわたしに獻しなさいな。
彦　ハテ、女郎買ひと祝儀とは違ふから、マア、默つて飲みねえ。

ト杯臺に、ちろりを持つて出る。

つな　そんなら一つ飲みやんせうか。モシ、こりやァ小さいの。茶碗にしねえな。
彦　ハテ、食ひ好みをする花嫁だ。（ト茶碗を出して）ソリヤ、ぬしの望みの通り、茶碗々々。ドレ酌をしやせう。

ト彦が酌しておつな一つ飲み、五郎へ獻す。傳七は下戸ゆゑ氣まじめな思ひ入れ。てんつゝ、通り神樂になり、茂九郎右衞門、下駄傘にて、おまさ、向うより出る。

茂九　コレサ、お内儀、何事も家主に任せるがよいぞや。

まさ　イエモウ、あんまりでござんすわいな。

　ト捨ぜりふにて兩人本舞臺へ來り

茂九　コレ〳〵、おまさどの、どうだ。女房は亭主に負けろだ。どんな事を云はうとも、只ハイ〳〵と聞いてゐるがよいぞや。

まさ　サア、その無理を聞いてゐると、方圖がござんせぬわいな。

茂九　ハテマア、何事も家主が、よいやうにします。マア〳〵、アイ〳〵と云はつしやれ〳〵。（ト門口へかゝり）五郎どのや、内かな〳〵。

彦　アイ〳〵、宿に居りやす、誰だ〳〵。（ト出て來り）アヽ、こりやァ大家さん、又お出でなされやしたか。

茂九　オイ、別の事でも來やせぬが、内儀の事で來ました。コレ、ちよつと五郎どのを呼んで下さい。

彦　アヽ、何かえ、おまささんを連れて來なさつたか。

茂九　さうサ。

彦　そいつは幸ひだ。……五郎さん、ちよつと來ねえ〳〵。

五郎 なんだ〳〵。（ト立つて來て）こりやァ大家さん、なんぞ用かえ。

茂九 イヤ、別儀でもないが、おまさどのゝ事でござる。わしが仲へ入るからは、悪いやうにはしませぬ。コレ、先刻に割れたこの頭に免じ、何分料簡して、内へ歸しては下さるまいか。

五郎 そりやァもう、お前さんの云ひなさる事を入れまいぢやァないが、彼奴はお前、ころび合ひだから、親兄弟もなし、見捨てるも男の本意でもござりやせぬが、何をいふにも燒餅が過ぎるから、重ねて燒餅を燒かずば、隨分入れまいものでもござりやせん。

彦 さうサ、あんな不自由な女房が入つちやァ、ちつと又内の事を取計らひもする女房も、なくつちやァ不自由だ。

茂九 そんなら承知かな。

五郎 大家さんの御挨拶なら、わしやァどうとも致しやせう。

茂九 そりやァ忝い。幸ひお内儀も同道しました。コレ〳〵、おまさどの、サア〳〵、此方へ入らつしやい〳〵。（トおまさの手を取つて内へ入る。）

まさ 一旦出たからは、歸るまいとは思うたが、大家さんの御挨拶ゆゑ、歸つて來たのぢやわいな。

茂九 ハテ、そりやァ知れてるるよ。……ハヽヽヽヽヽ。時に五郎どのや、この上は隨分夫婦喧嘩の

ないやうに頼みます。世帯道具は其方の勝手ぢやが、壁を落されたり、根太を拔かれては、大家至つて迷惑いたすてや。ハヽヽヽヽヽ。

五郎　イヤモウ、折角の御挨拶でござりますから濟しまするが、この上燒餠を燒かねえやうに、仰しやつて下さりませ。

茂九　隨分云ひ附けまするて。

彦　イヤモウ、燒餠は世帶の毒でござりやす。時に、今夜は客もあるから、おまささん、お前、挨拶に出てくんなさい。

五郎　ほんに幸ひ、酌をしてもらふがいゝ。コレ、嚊アや、そこへ出て酌をしや。

まさ（思ひ入れあつて）酌をせいと云ひなさんすが、見れば見馴れぬ女中さん、ありやどこからでござんしたえ。

五郎　あの女中か。ありやアてまへが出た跡へ來た女房よ。

まさ　エヽ。（ト恟りする。）

つな　ほんに、こりやアお初にお目にかゝりやした。わたしやたつた今來た、五郎さんの女房でござんすわいな。

傳七　仲人は古金買ひの傳七だ。お內儀、この上心安くしてやつて下さいよ。
まさ　エヽ、なんぢやえ、五郎さんの女房ぢやとえ。コレ、大家さん、あれぢやわいな。お前ヽ所へ行た留守へ、もう女房が入つたわいなア。これがマア、腹を立てずにゐられうかいなア〳〵。
茂九　尤もだ〳〵。
五郎　コレ、大家さん、お前は尤もだと云ひなさるが、たつた今燒餅を燒かせまいと云つておいて、あの通り、來ると早々燒きかけるが、これでお前濟みますかえ。
茂九　サア、請合ひは請合うたが、お內儀が自身に燒くから、どうもこの押へ控へは
まさ　エヽコレ、お家主さん、お前も何をグチ〳〵云ひなさんす。わたしといふ女房があるからは、後から來た女は女房ぢやアござんせぬ。
つな　モシ〳〵、女中さん、お前味な事を云ひなさんすが、後から來た女房は、女房でないといふのかえ。モシ、わたしも今夜初めて亭主を持つからは、女房の譯は知らぬが、勤めぢやというて、女房ぢやというて、道こそ違へ、別に變つた事もござんすまい。わたしには傳七さんといふ、きつとした仲人があるわいな。
まさ　仲人があらうが、親分があらうが、わたしや先の女房ぢやによつて、それが否なら、お前出て行

きなさんせ。

つな　イヽエ、こなさん出て行かしやんせ。

まさ　出て行けとは、あんまりであらうがな。

つな　エヽ、こなさんがあんまりぢやわいな。

まさ　イヽエ、こなさんが

つな　イヽエ、こなさんが

ト兩人疊を叩いて爭ふ。皆々兩方へかゝつてなだめ

傳七　コレ〳〵、二人ながらマア靜かにさつしやい。外聞が惡い……コレ、おまさどん、よく聞かつしやい。こなさんは去られたといふから、このおつな坊をおれが仲人したのよ。ところへこなたが歸つたといつて、後の女房をもうよいというて歸されもしまい。ナウ、五郎さん、さうぢやアないか。

五郎　サア、わしも斯うなつちやァ手古摺つてゐますよ。

傳七　サア、そこをわしが挨拶で、二人ながら機嫌よく、仲直りをした上は、先の女房を姉分にして、上十五日に下十五日と引分けて、半月代りの女房よ。小の月は一日の損があらうが、そいつは來

彦　年の閏月で埋め合すがよい。なんと、この相談は出來まいか。
茂九　イカサマ、そんな事に納めずばなるまい。
五郎　何分よろしく頼みます。
傳七　のみ込んだ〳〵。サア、二人ながら今の理窟だ、よしかな。
つな　ハテ、惡いといふて、今更せう事がないわいな。
まさ　どうなりとよいやうに、お前、取計らつて下さんせいな。
傳七　サア、さう二人が溫なしく出れば、仲人のおれも立つといふもの。そんなら兄弟分の、杯をして
はくれまいか。
まさ
つな　どうなりとならうわいなア。
傳七　そいつは有り難い。ソレ、五郎さん、ざつと爰で仲直りなり、祝言なり、兄弟分なり、三つ合せ
て三々九度、おらア下戸だが、杯をさせようぢやあるまいか。
五郎　そいつはよからう。併し何も肴はなかつた。
彦　ちよつと湯豆腐でも拵へようか。
茂九　大家もしたぢでも煮て進ぜうか。

五郎　そんなら頼みますよ。

彦　オット合點だ。湯は爰にある。（ト樽に銚子を出し）サア、大家さん、湯豆腐に取かゝらう。

茂九　ドレ、手傳うて進ぜう。

ト合ひ方になり、彦と茂九郎右衞門は捨ぜりふにて奥へ入る。

五郎　サア、親分、こなさんから飲んで、二人へ獻さつしやい。（ト茶碗を二つ出して渡す）

傳七　ほんに、こりやア仲直りの杯だの。下戸のわしが、斷う眞似ばかりして廻しませう。

五郎　ドレ、わしが酌をしませう。

ト傳七、兩の手に茶碗を持つ。五郎酌をする眞似をし、傳七、捨ぜりふにてふ附をして

傳七　サアノ〜、おつな坊も、お內儀も、この茶碗で始めねえ。（ト兩方へ獻す。）

まさ　こりやマア、何かとお世話でござんすの。

つな　サア、五郎さん、ついでおくれ。

五郎　オット合點だ。

ト兩方へ酌をする。おまさ、おつなは一つ受けてグッと干し

まさ　そんならこの杯は、あのお方へ獻りのかえ。

五郎　さうサ。
つな　わたしもぬしへ廻さうかの。
傳七　さうしねえ〳〵。
つな　ハイ、おまへさん、憚り申しやせう。
まさ　ハイ、わたしもちよつと上げやせう。
　　　ト互ひに茶碗をやりちがへにする。
五郎　サア、一つつがうか。
傳七　なる口なら、一つ受けねえな。
つな　アヽ、丁度あるよ。
まさ　アヽコレ、滅相な、こぼれるわいな。
　　　ト兩人また引受けて飲む。
つな　サア、杯は五郎さん、お前へ獻すよ。
まさ　ぬしが獻しなさるから、わたしも上げやせう。
　　　ト兩方より茶碗を出す。五郎は兩手に取つて

五郎　おつな坊と、嚊アが思ひざしのこの杯、恨みつらみがあつちやア惡い。兩方一緒に受けべい。

傳七　ドレ、酌をせうか。

　トこの二つの茶碗についで獻す。五郎、兩方とも飲んで

五郎　サア〳〵、兩方とも一時に飲んだ。サア〳〵。獻さう〳〵。

つな　イヽエ、あんまり見事だから、押へたわいな。

まさ　お前が押へなさるなら、わたしも押へようわいな。

五郎　なんだ、兩方ながら押へか。どちらがどうとも云はれまい。兩方ながら飲むぞ〳〵。

傳七　ハテ、よく飲む屋敷だ。ドレ、酌をせうか。

五郎　（又二杯飲んで）サア〳〵、この杯は、二人へ獻したよ〳〵。

まさ　アイ、この杯は、ちよつとおつなさん、お前が間ぢやわいな。

つな　ほんに、傳さんは下戸なり、差詰めわたしの杯も、お前へ間を賴まうわいな。

　ト兩方より杯を入れ違ひに獻す。

傳七　ヤア〳〵、もういゝ加減にしねえか。強氣に飲むぞえ。おらア側にゐてさへ、飲まない酒に醉つたやうだ。

まさ　新しいをかみさんに、飲み負けてはならぬわいな。
つな　昨日まで勤めをしたわたしが、素人衆に負けては濟みやんせぬ。サア、もう一つおつぎ〳〵。
ト兩人茶碗を出す。傳七捨ぜりふにて酌をする。兩人飲んで五郎へ獻す。
五郎　女さへ飲むのに、亭主が飲み負けてなるものか。サア、ついでくんねえ。
ト兩手へ茶碗を持つ。傳七呆れて、酒の匂ひを嫌さうに酌をする。五郎、二つの茶碗をグッと干して
サア、飲んだよ〳〵。今度はこの二つの杯を一緒にして、おつな坊へ、獻しやせう〳〵。
つな　こりや何ぢやえ。なんぼわたしが酒が好きぢやというて、二つの杯を二つながら、面當に獻す事はござんせぬ。エヽ、聞いた風だな。わつちやアもういつそ口惜しくつて、ホヽヽヽ。ハヽハヽヽ。こりや、をかしいわいな〳〵。
ト自然と笑ひ出す。おまさ、おつなを見て
まさ　こりやをかしいわいなア。おつなさんとした事が、杯が二つ廻つたといつて、さのみをかしい事でもないに、なんでマアそれがをかしいえ。そのやうにわたしが顔を見て笑ふ事はないわな。ほんにこりやをかしうて、わたしやをかし涙がこぼれた。エヽ、どうやらをかしうなつて、いつそ涙がこぼれて〳〵

トしやくり上げて泣く。五郎、二人を見て

五郎 こいつはどうだ〳〵。嚊アが泣くに、おつなは笑ふの、こりやア大笑ひだ。てめえ達が照降町を始めたで、おれもをかしくなつて〳〵、なんだかムシャクシャと小腹が立つわえ。腹が立つわえ。いま〳〵しいわえ〳〵。

ト獨り腹立てる。傳七立寄つて

傳七 コレサ〳〵、めでたい晩だに、なんで腹を立てるのだ。……エヽ、強氣に匂ふぞ。

ト顔をしかめてなだめる。

つな コレ、五郎さん、お前なんで腹が立つえ。それを又同じやうに傳七さんが、酒が匂ふのなんのと、匂へばどうしますえ。五郎さん、なんで腹を立てなさる。ホヽヽヽ、こりやをかしいわいなア。

傳七 これサ、おれが匂ふといつたが惡くば、堪忍さつしやいの。あんまり笑ふと、また五郎坊が腹を立てるわい。コレ、あんまり笑はつしやるな。エヽ〳〵。

トおつなをなだめながら、顔をしかめて思ひ入れ。

まさ エヽコレ、傳七さん、構ひなさんすな。ぬしがこのやうに腹を立てるは、わたしがをかしくつて涙がこぼれるといつたから、それが氣に障つたのでござんせう。エヽすかねえ。こいつは大笑ひ

だ。オヽ、をかしい〳〵。をかしくつてわたしや、涙がこぼれて悲しい。アヽ、悲しいわいな。

傳七 これサ、お内儀、大笑ひだといふ口の下から、そんなに涙をこぼす事はねえ。コレ、笑ふ氣があらば、泣く事はないわな。エヽ、匂ふワ。エヽ強氣に、エヽ〳〵。

ト三人捨ぜりふにて、正體なく腹立てたり笑ふたりする。五郎二人を見て無性に腹を立てる。傳七、眞面目に三人をなだめ廻り、ト三人の酒の氣を受けて、飲まぬ酒に醉ひ、ひよろ〳〵して

アヽコレ、おらァ飲めもしねえ酒に廻されて來たかして、フラ〳〵〳〵と、アレ〳〵、爰の内が廻るワ〳〵。イヤア、强氣に廻るワ〳〵。こんなに廻る内に、なんで店賃を出して居る事があるものか。アレ、廻るワ〳〵〳〵。イヤア、五郎や、おぬしも廻るワ。ハア、三人ながら廻るワ。こいつは飛んだ仕掛けだ。イヨ大仕掛け、有り難い。强氣に廻るワ。飲みもしねえのに醉ひ醒めがして、咽喉がかわくワ。水を一杯くれないか。エヽ〳〵。アヽ、水をくれ。内が廻るワ〳〵。水が廻るワ。内を一杯くれろ。エヽ〳〵。

ト酒の氣に醉ひ、フラ〳〵して、水を呑みに暖簾口へ入る。捨ぜりふにて、おまさは上の方へ、おつなは下の方へ倒れてうたゝ寐をする。五郎も捨ぜりふにて二人を見て

五郎 コレエヽ、こいつはイケざつな。もう寐やァがつたな。あればかりの酒に廻つたな。コレエヽ、

二人ながら起きろ〳〵。（ト搖り廻れども二人ながら寐てゐるゆゑ）エヽ、よく寐やァがつた。……アア、寒い〳〵、醉が醒めたせゐか、强勢に寒くなつて來た。ドレ、火鉢を引寄せて（ト火鉢を引寄せても、火なきゆゑ、思ひ入れあつて）エヽ、火が一つねえ。これだから早く女房を入れにやァならねえといへば、女房は二人まであるが、成る程、負けず劣らずの飲み倒れだ。ドレ、ちつと焚きつけてあたらうか。アヽコレ、焚附けが欲しいものだ。オヽ、あるぞ〳〵（ト鉢植の松と、花筒にある梅の枝を取つて來り）寒い時にァ丁度よい。しかも今宵は冬至だな。めでたい〳〵。冬至梅に、この松を焚いてあたらう。强氣に寒くなつて來た。コレ、てめえ達もあたるか〳〵。（ト蒲團を背中へかけ、寐てゐる二人を引寄せて）愛想のつきるほど寐やァがる。ドレ、松も梅も焚きつけてあたるべいか。

ト蒲團を背中へ置き、松と梅を火鉢へくべる。煙立ちのぼり、五郎これにあたる。この煙と共に薄ドロになり、上の方の紅梅に鶯來て鳴き、陰火もゆる。下の方に狐火むらがる。五郎、左右を見てキッと思ひ入れ。誂への鳴り物。おまさ、おつなとも目覺め、おまさは鶯、おつなは狐火へ思ひ入れあつて

まさ　ヤ、わたしが本名七綾と、呼びなさんしたは、いづくの誰。

つな　妾を小女郎と呼び給ふは、ヤヽ、お前は父さんでござりまするか。
まさ　ヤヽ、鶯の囀りと、思ふに違ひ、物のたまふは、ヤヽ、さては我が父将門の亡き魂、夢中に詞を交し給ふか。エヽ、おなつかしうござりまする。
つな　ヤヽ、父さん、なんと仰しやりまする。宇賀の御魂の神より仰せを受け、その夜の宿直は我れなるに、情なや小狐丸を人手に奪はれ、その咎めに今以て、多くの狐の下座に附いて……ヤヽ何と仰しやりまする。尋ぬる劍は、この家の内にござんすとな。
ト思ひ入れ。おまさもこなしあつて
まさ　ヤヽ、何と仰せられまする。この七綾が日頃尋ぬる兄良門どのが、この家に居やしやんすとや。アノ、良門どのが……エヽ、ほんに兄さんと心を合せ、源氏を再び討ち亡ぼし、修羅の苦患を晴らせよと仰しやりまするか。
つな　ヤヽ、そんなら尋ぬる小狐丸、いよ〳〵この家にあるとかや。
まさ　エヽ、わたしが尋ぬる兄さんの、行くへを知るも今宵の内とや。
つな　この家に御太刀あるからは、何卒わたしが詮議して
まさ　良門どのに逢うた上、力となつてあなたの迷ひ

つな　やがて取り得ん小狐丸
まさ　修羅の苦患を今しばし
つな　古巣へ早く
まさ　未來は成佛
つな　父さん、おさらば。
まさ　南無阿彌陀佛。

　ト兩人思ひ入れあつて、うつとりとなる。陰火、狐火ともに消える。ドロ〳〵打上げ、鶯飛び去る。五郎、兩人へ思ひ入れあつて

五郎　女房、女房、氣が附いたか。
まさ　エヽ。（ト恟りしたる思ひ入れにて）わたしらが（ト互ひに顏見合せ）どうしたえ。
つな　二人ともに夢か現か、亭主のおれが聞く前で、問はず語りの今の樣子、色氣がなうて氣に入らぬ。
五郎　愛想が盡きた。女房、去つた〳〵。
兩人　エヽ。

　ト恟りして

つな　女房を去るとは、わたしをかえ。

まさ　但し、わたしを去るのかえ。

五郎　二人の女房、縁切つた。その去り状は、何をがな。（ト見廻し）幸ひ〳〵。（ト貼り出した二枚剝がして來り）離別のしるし。

ト一枚づゝ二人が前へ投げてやる。銘々取つて見て

まさ　離別のしるしと下さんした、去り狀ならぬ商賣ものゝこの貼り出し、これは卽ち「七つあるものは」……アノ、七つあるものは……ハテナア。（ト思ひ入れ。）

つな　わたしも同じこの書き物。「畔道の水鏡」と書いたこの句を去り狀とは、もしやわたしがこの身の素性を

まさ　この身の素性を

ト三人顏見合せ

五郎　サア、去つた女房二人とも、爰の內には置かれない。きり〳〵戻れ。二人とも、きり〳〵戻れ。二人とも、爰をきり〳〵戻り橋、黑白はそれとわからねど、忍び姿の黑出立ち、ひらり帽子の女の影。

まさ　ほんに都の一條通り、怪しき曲者、怪しき女中。

つな　その戻り橋くらき夜に、爭ふ二人。

二人　合せし顏は（ト顏見合せ）ほんに、こなさん

五郎　コリヤ、思案をしやれ。

　　ト唄になり、五郎、莨盆を提げ、思ひ入れあつて奧へ入る。兩人殘り、貼り出したを見て思案の體
　　合ひ方になり

まさ　ハテ、合點のゆかぬ、こちの人の今の詞、殊に離緣のしるしぞと、渡しなさんしたこの貼り出し
　の、題は卽ち「七つあるもの。」

つな　わたしへ置いてござんしたは、「畔道の水鏡」。アヽ、どうかわたしが身の上を

まさ　エ。（ト顏見合せ、思ひ入れあつて）ほんに今日はマア、さま〴〵の事を聞いた日ではあるぞ。した
　が、先刻にお前と、兄弟分の契約をした上からは、爰の內を去られても、わたしやお前と一緒に
　出て行く心ぢやぞえ。

つな　そりや嬉しうござんす。押しかけて來た二度目の女房の、わたしゆゑ去られたお前は、さぞ腹が
　立ちやんせう。したが一緒に出て行かうとは、そりや嬉しうござんすわいな。きつと禮を云ひや
　んすぞえ。

まさ　なんのマアそれが禮どころかいなア。わたしやお前を、今から實の妹と思うて居るわいな。去られて行くとも二人一緒、サア、出て行かうぢやないかいな。

つな　アヽコレ、お前も滅相な、何處を當てに出て行くのぢやぞいなア。

まさ　ハテ、そんな事で世渡りがならうかいなア。捨てる神ありや、また助ける神もあらうわいな。サア、早う行きやんせう。併し、わたしや今日折惡う、髪を解かさずにおいたわいなア。

つな　サア、そりやわたしも同じ事、傳七さんが急きなさんすによつて、髪も直さずに來やんしたゞ、いつそモウ、顔へ髪が垂れかゝつて、オヽうるさ。（ト櫛にて髪を撫で上げる。）

まさ　ほんに、そりや心持ちの惡いものでござんす。ちよつと撫でつけてあげうか。

つな　エヽ、御慮外ぢやわいな。

まさ　イエ〳〵、また後でわたしも、お前の手を借りやんせうほどに、マア、お前から撫でつけてあげやんせう。コレ〳〵。幸ひ爰に鏡臺がある。サア〳〵、ちよつと出しなさんせ〳〵。

つな　そりや嬉しうござんすわいな。（ト鏡臺を前へ出す。）

まさ　サア〳〵、そんならちよつと撫でつけてあげうわいな。

ト獨吟になり、おつなの前へ鏡臺を直し、おまさ、櫛を取つて撫でつける事よろしく、唄一くさり切

れる。

つな　ほんにマア、不思議な縁で、思ひがけなう、ぬしさんのお世話になる事ぢやわいな。

まさ　なんのマア、そりやモウ互ひの事。わたしは幼い時に別れたゑ、兄さんがあるとは聞けど、今に於てめぐり逢はず、心細い女子の身、せめてお前のやうな妹でもあつたなら、さぞ力にもならうと思へば、モウ他人の世話をするやうにもないわいな。

つな　そりや嬉しうござんす。コレ、おまささんそんならお前には、兄さんがござんすかえ。

まさ　兄さんがあると聞いたばかり、幼い時に二親には離れ、今はほんにわたし獨り身ゆゑ、夫が猶更大事ぢやわいなア。

つな　その大事にしなんす男を、押しかけ女房、これといふも、お前の身の上と同じ事、わたしとても親兄弟というては

まさ　ござんせぬかえ。

つな　アイ、便りない身でござんすわいなア。

トほろりとする。これにて又獨吟になり、おまさ、おつなの髪を撫でつける事よろしく、唄切れる。
これにて暮れ六つの鐘鳴る。おまさ思ひ入れ。

まさ　オヽ、いから闇うなつて來たわいな。手許が見えぬ。ドレ、灯をともして

　ト合ひ方にて、行燈へ灯をともし、袖頭巾をとつて油をつぐ事。この時、ドロ〳〵になり、おまさの手の影七つに移る。この時、上手の障子より傳七見てゐる。おつな、行燈の影を見て

つな　オヽこは。

　ト恟りする。おまさもこの聲に驚き

まさ　アヽコレ、お綱さん、何がそのやうに怖いぞいな。

つな　ソレ、マア見なさんせ。行燈へお前の手の影が、夥う映るわいなア。それ〳〵、手先が七ツに映るぞえ。

まさ　エヽ。わたしの手先が、アノ七ツに（ト恟りして持つたる油差をとり落し、おつなの小袖の上へ油をかけたる思ひ入れ。）アヽコレ、不調法な、お前の小袖へ油をかけたわいな。

つな　ハテ、大事ない、捨てゝ置きなさんせいなア。

まさ　イエ〳〵、さうでござんせぬ。疊も何もかも、オヽ〳〵、油だらけにしやんした。エヽコレ、ほんに幸ひ、爰に小糠があるわいな。これを撒いて、油を取つてあげやんせう。

　ト箱の中の糠を取つて、そこへら中へ撒きちらし、おつなが着物の裾へも糠をかける。これにて鼠二

　　三疋出て、おつなの裾をねぶる。おまさ、これを見て

　ア、コレ、お綱さん、そこへ鼠が〳〵

つな　ナニ、鼠がえ。

　　トおつな、鼠に見惚れて思ひ入れ。この時、前の鏡に、おつなの顔、狐に映る思ひ入れ。おまさ、この鏡の影を後より見詰めて、こなしあつて

まさ　コレ〳〵、おつなさん、鏡に映るお前の姿は、まさしく野狐。

つな　エ。

　　ト悄り、心づき、鏡を外して鼠を打つ。これにて雷序打あげ、鼠飛び去る。

まさ　さては、お前は

　　トおつなと顔見合せる。おつな、思ひ入れあつて、鏡を抱へて

つな　ドレ、傳さんに逢うてこようか。

　　ト唄になり、途端に傳七障子をさす。おまさ思ひ入れ。おつな、奥へ入る。おまさ見送り

まさ　エヽ、氣味のわるい……合點のゆかぬあのおつなさん、考へて見れば、いつぞや戻り橋の樋の口で、ちよつと逢つた稀有な女中に、とんとそのまゝ。そんならおつなさんは（ト思ひ入れあつて）

この家へ入り込み來りしには、樣子がなけりや叶はぬ事……それはマア捨てゝおいて、夢ともなく現ともなく、最前父樣の告げ給ひしは、年月尋ぬる兄さんが、この家の内に居なさんすとの知らせ。

トこの時傳七、また障子を明けて窺つてゐる。おまさ思ひ入れ。

あの家主どのは年が違ふ……　居候の彦でもあるまいし。但し夫五郎どの、でもあるまいし。さうして見れば兄さんは（ト思ひ入れあつて）エヽモウ、父樣も父樣、とても知らせて下さんす程なれば、兄良門が今の身は、何屋の何兵衞とありの儘に、告げて下さんすればよいに。（ト思ひ入れあつて）もしや、あのお綱の親分ぢやというて來た、古金買ひの傳七どのか。ひよつと夫の五郎どのが兄さんなら、マア何としたものであらうなア。

傳七　（ズツと出て）妹七綾、案じるな。其方が年月尋ねてゐる、兄といふのは、おれぢや。

まさ　ヤア、さういふ聲は傳七さん。すりや、最前からの樣子は殘らず

傳七　其方の影が行燈へ、七ツに映りし、事までとつくと

まさ　見なさんした上、お前の口から兄さんぢやと云はしやんすには、何ぞ慥かな證據がござんしてか

傳七　證據といふは、疑ひ晴らし。その行燈を

まさ　アイ。

ト行燈を出す。傳七とつて

傳七　これを見や。

ト障子を閉す。ドロ〳〵にて、傳七の影七つに映る。おまさ思ひ入れあつて

まさ　障子に影のあり〳〵と、七ッに映るは、紛ふ方なきわたしが兄さん。そんならお前は良門どの。

傳七　（又出て）コレ。（ト思ひ入れあつて）父に別れしその時は、未だ幼少、妹ありとは聞きつれど、亂軍のその中に、何國に遁れ忍ぶ事にや、又は源氏の輩に探され、果敢なき死をば遂げしかと、思ひ暮らせし其方の身の上。

まさ　そりや、わたしとても同じ事。今更云ふも恥かしい、詮議厳しきその中を、やう〳〵少しの縁を求め、雪の越後に身を遁れ、この年月を乳人の者に、育てゝもらうた甲斐もなく、乳母も果敢なく七年以前、病の床に末期の遺言、繋ぎ馬の家の旗。（ト思ひ入れあつて、懐中より旗を出し）これを證據に兄さんに、めぐり逢へよと教へられ、それから女子の身一つに、諸國を尋ぬる憂き艱難、いふにいはれぬ身の活計、縁でこそこの家へ嫁入り。思ひがけなうこの場にて、お目にかゝりし實の兄さん。

傳七　（旗を取つて見て、我が懐中よりも同じ旗を出し）オヽ、我れとてもまッその通り、後の證據と殘され

し、父の筐は雌雄の旗。

まさ　所持する時は面影の、七ツに見ゆる寶の奇特。

傳七　危き事を幾度も、遁れて無事なこの對面。

まさ　これも矢ッ張り父樣のお引合せ。

傳七　加護なす神の惠みにて

まさ　名乘り逢うたる

傳七　血筋の緣。

まさ　兄さん

傳七　妹。

まさ　おなつかしうござんしたわいな。

ト兩人思ひ入れあつて

傳七　それについても妹、其方に云ひ聞かさんと思ふ所存、年月過ぎし今とても、將門が血筋と聞けば搦め捕らんと焦るは必定、天高しといへども脊を越さず、地深しといへども隱るゝ所なし、誰あらう將門が子と生れ、卑怯未練に生き延びん事本意にあらず。父が謀叛を受け繼いで、源氏の奴

まさ　原責め亡ぼし、天下を握らん我が存念。よりより味方を集むるところ、六郎公連を初めとして、相馬の殘黨走せ參じ、追々に增す味方の勢。この家の主もその以前、由緖ある武士の果、身許を糺すは其方の緣、やがてこの良門に一味させなば、大望成就は目のあたり、心得たるか、妹七綾。御尤もの思し立ち、無理とはさらさら思はねど、關八州はいふに及ばず、東三十三ケ國は、大半從ふ父上さへ、天命叶はず秀鄕の、遠矢にあたつて御落命。それになんぞや兄さんは、草木に心置く身を持ち、父の無念を晴らさんとは、なかなか成就覺束なし……兄さん、外に思案はござんせぬかいなア。

傳七　ヤア、いはれざるその一言。わりや大望の鋒先挫くか。

まさ　アヽモシ、全くさうではなけれども

傳七　そんなら夫を一味させよ。

まさ　それも明すは一大事。もし承引なき時は

傳七　騙し寄つて、たつた一討ち。

まさ　エヽ。（ト悔りする）

傳七　その驚きでは心許ない。わりや兄親の存意を反故にするか。

二番目



大切



まさ　サア

傳七　夫を味方に附ける心か。

まさ　サア

兩人　サア〳〵〳〵

傳七　承引なければ妹七綾、良門ならぬ父の折檻。（トおまさを引附けて、旗にてさん〳〵に打ち）なんと骨身にこたへたか。

まさ　あやまりました〳〵。（ト旗を取つて戴き）兄さん、たとへ顯はれ死なうとも、それまでは力一ぱい、夫を味方にさせませう。

傳七　ムウ、合點がいたか。

まさ　必ず氣遣ひなさんすな。

傳七　得心の上は、その身を捨てゝも味方させよ。それにつけても、奇特を現はす雌雄の旗、某が守護なさん。其方は夫が心底を

まさ　探り見るのも今宵の内。

傳七　敵か

まさ　味方か
傳七　善惡二つを
まさ　お前に代つて
傳七　糺せよ妹。
まさ　良門樣。
傳七　コリヤ。

ト思ひ入れ。おまさ、こなしあつて

まさ　ドレ、炬燵の炭なとついでこようか。

ト唄になり、思ひ入れあつて上の障子屋體へ入る。跡に傳七の良門、思ひ入れあつて

良門　某が兼ねての大望、直に今宵が大事の場所。

ト貰盆を引き寄せる。この時、かすめたる雷序になり、前の雪の上に狐火燃える。だん〳〵に雪解けて、小狐丸の太刀現はれる。良門これを見て

ハテ、心得ぬ。つもりし雪のその上に、妖火忽然と燃ゆるにつれ、解けゆく雪のその中より、現はれし一つの劍。宇賀の御魂の神寶、紛失と聞きつるが、何者の隱せしやらん。正しくこれこそ

小狐丸。（ト立寄つて取り上げると、狐火消える）父將門、多年心をかけられしかど、手に入る事なく打過ぎしが、寶劍思はず我が手に入るは、大望成就のしるしなるか。アラ、嬉しやなア。

ト太刀を持つて思ひ入れ。この時、上の障子の内にて

五郎　エイ。

ト聲して、短册附いたる矢飛び來て、欄間の雪隱しへバッタリあたる。これにて雪碎けて落ちる。欄間より焰硝火立ち、良門の繪姿落ちる。これを合圖に遠寄せを打込む。良門思ひ入れあつて

良門　ハテ、心得ぬ。いづくよりか飛び來る一矢、欄間に立ちしを合圖と定め、はるかに聞ゆる貝鉦大鼓。ハテ、いぶかしい。殊にこの矢に結びし短册。

ト落ちたる矢を取り、短册の歌を見る。この時、以前の三太、惣太、手甲、股引、半纏の形にて、十手を持つて出で

兩人　良門、捕つた。

ト取卷く。良門、ヂロリと見やり

良門　心得ぬ一言。良門とは何を以て

三太　後で樣子は立ち聞いた。

惣太　卑怯な良門
兩人　腕まはせ。
良門　小癪な事を
兩人　捕つた。

ト近よるを見事に投げのけ、落ちたる短册を取上げ

良門「將門は米かみよりぞ射られける
五郎　田原藤太が射たる矢なれば」
良門　何がなんと。
五郎　將門が一子、將軍太郎良門へ、勘解由の丞卜部の季武、見參々々。

ト鼓の合ひ方にて、障子を引拔くと、茨木五郎實ハ卜部の季武、上下大小にて、懐劍を持つたるまゝ實は七綾を引附けゐる。この途端に、茂九郎右衞門、彥、肌ぬぎ、大小にて出て、良門を圍む。

良門　すりや、この家の主は、季武にてありしよな。さもあらん、尤もながら、將軍太郎良門とは、何を以て
季武　ヤア、爭はれな。良門と見たる某に、緣を組んだる女房こそ、貴殿の妹七綾とは、彼れが口から

自身の白狀。
茂九　家主となつて窺ふも、殘黨詮議の目代の役、小山の義仲。
彥　居候ふの彥といふは假り名にて、季武の組下たる、白銀左馬之助。
季武　最早遁れぬ、良門と
兩人　名乘つた〳〵。
良門　すりや、妹の七綾が
七綾　兄さん、堪へて下さりませ。夫へ身の上明せしも、お前の命が助けたさ。
良門　兄が本名、その身の素性
季武　慥かに知るゝ上からは、良門なりと
皆々　名乘つてしまへ。
良門　チエヽ、殘念な。名乘るまじとは思へども、妹が白狀なせし上は、是非に及ばず、今こそ名乘らん、よつく聞け。一度下賤に交はりしは、味方を集むる我が計略、誠は汝が推量に違はず、平親王將門が一子、將軍太郎良門とは我が事なり。（ト引拔きてキツと見得。）
皆々　さてこそなア。

季武　良門と名乘る上からは、搦め取るは易けれども、妻に緣ある其方ゆゑ、見遁しくれん。劍を置いて、速かに立歸れ。

良門　ヤア、運命拙く顯はるゝは天の時、一旦手に入る小狐丸を殘し、この場を立去る良門ならず、卜部の季武、サア、立寄つて勝負を決せよ。

ト小狐丸をくつろげて立ちかゝる。七綾、良門をとめて

七綾　コレ、兄さん、誠ある季武どの、必ずともに

良門　未練な。そこ退け。

ト立ちかゝる。金太、鉢巻、襦袢の肌をぬいで飛んで出て

金太　小狐丸を

ト引つたくり、行かうとする。良門、引戻して立廻る。花道まで行き、金太逃げると、雷序になり、花道中程へおつな、スッポンにて現はれ、太刀へ手をかける。良門立廻り、これにておつな、引拔き、良門を舞臺に押し戻す。

皆々　この體は

つな（思ひ入れあつて）　その御不審はさる事ながら、宇賀の御魂の神寶、小狐丸を取戻せよと、都の

神の命により、假りに女の姿となりしが、鋭き劍の威德にて、俗性を顯はせど、妾こそ藤の森、小女郎狐でござんすわいなア。通力自在の身を以ても、その一刀を得り得ねば、眷屬を省かれ、野狐となる身の罪業、あはれ不便と思し召さば、劍を返し給はるやう、偏へに願ひ上げますわいなア。

季武　神妙なるその願ひ。良門より奪ひ返し、直に汝に與へ得させん。

良門　小女郎、觀念。

　　ト切つてかゝる。立廻りに季武、劍を取つておつなへ渡す。

季武　とく〳〵古巣へ立歸れ。

つな　返す〴〵も嬉しやなア。

　　トこれより狐火澤山に燃える。

良門　それを

　　トかゝる立廻り。上手に良門と七綾、雌雄の旗を差上げて見得。眞中に季武、下の方におつなの小女郎狐、小狐丸を持つて見得。茂九郎右衞門の義仲、彦の左馬之助、左右へ立ちかゝり、軍兵四人、弓張り提灯を持ち、舞臺先へ棹に並ぶ。

皆々　どつこいっ
まづ今日(こんにち)はこれぎり。

打出し

彩入御伽草（いろいりおとぎざうし）

彩入御伽草

山城國螢ヶ沼の場

役名――小幡小平次。小平次女房、おとわ。彌陀次郎時綱。馬士、多九郎。醫者、小佐保天南。
菊地若君、月若丸。同乳人、敷浪。下郎、栗平。廻國修行者、廻便實ハ牟禮一角照光。

役觸れ濟むと、禪のツトメになり、東の方へ樋の口と浪板を出す。向うより月若、やつし笈摺、順禮姿。敷浪、笈摺、同じ巡禮姿にて札を掛け、菅笠を持ち、跡より栗平、旅奴、飛脚のこしらへ、刀の鞘へ狀箱を附け、菅笠を持つて出て來り、花道にて

栗平　オヽイ〳〵、巡禮々々、連れにならう〳〵。

敷浪　ハイ〳〵、それは有り難うござりまするが、御覽の通り私しどもは、幼いのを連れましての長旅足弱連れでござりますれば、所詮お飛脚體のお道連れには、及びもない事。思し召しは有り難うはござりまするが、サ、お先へお出でなされませいな。

栗平　アヽ、そもじは小さいのを連れて札打ちか。そいつは奇特な事だ。親の爲か、但し亭主の爲の巡

禮か、しつかい平假名の三段目といふ思ひ附きだな。コレ〳〵、この飛脚も、そもじのやうな姐えに思はれたら、それこそ奴がじだらくや、岸打つ浪は三熊野の、那智のお山が藝子節、こいつはどうも堪へられぬ〳〵。（ト敷浪に抱きつく。）

敷浪　アヽコレ、滅相な事さしやんすな、わたしやアノ若君……アヽイヤ、あの子を連れての西國巡禮女子ぢやと思うてこのてんがう。こなさんは道中にゐやる、護摩の灰とやらぢやの。

栗平　エヽ、埒もない。身共はそんな者ではないぞ。コレ〳〵、刀を差してゐるぞ。武士の御家來、侍ひぢやぞ。御主人は播州にて、淺山鐵山といふお方、仔細あつでこの山城の、小幡の里へ急用あつて、極く内々の御狀を持つて參つた者。決して胡亂な者ではない。コレ、この狀箱が慥かな證據、そんな者ぢやアないぞ〳〵。

ト鞘のまゝで狀箱を出して見せる。敷浪、思ひ入れあつて

敷浪　エヽ、そんなら、心底知れぬ鐵山どのゝこの狀箱、何か怪しき急ぎの密書。ちよつとわたしが、

ト狀箱を取る。栗平慌てゝ

栗平　どつこい〳〵、それを見られて堪るものか。とんだ女だ。（ト狀箱を取らうとする。）

敷浪　イエ〳〵、どうあつても中の密書を

栗平　見せてはならぬワ。

ト捨ぜりふにて爭ひ、立廻りのうち、誤つて狀箱を樋の口の流れへ打ち込む。

敷浪　ヤ、、あの狀箱を

栗平　流れへぶち込んだか。サア〳〵、大事だ〳〵。（トうろ〳〵する。）

敷浪　この間に早う、月若樣。

栗平　エ、、われをやつては（ト追はうとして、樋の口を見て）エ、、行かれぬ〳〵。

ト慌てゝゐる內に、敷浪は月若を連れて上手へ逃げて入る。栗平、ウロ〳〵して

エ、、女め、待ちやアがれ……と云つたところが、大事の狀はあの流れ。こいつはマア、大事だ大事だ。アレ、流れるワ〳〵。こいつは利上げをせずばなるまい。アノ、流れるワ、ソレ、流れるワ。

ト捨ぜりふにて、キヨロ〳〵して川へ目を附け、これも幕の內へ入る。すぐに双盤になる。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、正面に辻堂、誂への二重舞臺、所々に稻叢、松、榎の大樹、上の方に苫船を繫ぎ、舞臺前は水船、川べりに蘆の茂りたる道具、すべて山城の國、小幡の里、螢ケ沼の景色。爰に馬士四人、敷浪、月若を取り卷きゐる見得にて幕明く。

馬一　姐さん、馬を貸しませう。
皆々　馬を貸しませう〳〵。
敷浪　こりや、こなさん達は、今も云ふ通り、馬は借らいでも大事ない程に、さう思うてたもいのう。
馬二　コレサ〳〵、姐さん、見たところが巡禮の事だ。賃は廉くやりませう。その子を連れて、乘らつしやりませ〳〵。
馬三　さうだ〳〵。コレ、姐さん、この小幡の里は、馬を貸すのが所の習ひ。否でも應でも貸さにやアならねえよ。
馬四　それとも借りるが否なれば、その連れの小さいのを、おいらに酒代にくれて行きやれ。
馬一　その子はおいらが貰つたほどに、酒手と思つて
皆々　くれて行かんせ〳〵。
敷浪　ハテ、こなさん達は、變つた事を云はんすが、なんで又この小さいのを
馬二　ハテ、お觸れのある菊地の一類、月若丸、そんな者ではあるまいかと、駄賃馬から仕掛ける仕事。
馬が否ならその餓鬼を
ト月若へかゝる。敷浪さゝへて、見事に立廻りあつて

敷浪　この子に指でもさして見さんせ、女ながらも許さぬぞえ。

馬一　エ、、面倒な。引ッぱらへ。

皆々　合點だ。

トてんつゝになり、皆々月若丸へかゝる。敷浪、立廻るところへ、向うより天南、醫者の拵へにて馬の手綱を曳き、駄賃馬の上に多九郎、馬士の拵へにて、頬かむりして横に乘り、藥箱を馬に附け、この模樣にて出てくる。天南、馬を曳いて舞臺へ來る。皆々、敷浪を引ッ立てんとして、馬に蹴られて飛び退く。皆々、天南が顏を見て

馬一　エ、、どうしやアがる〳〵。

馬二　馬を引き込んで刎ね廻らせるとは

皆々　誰だ〳〵。何といふ駄賃取りだ。

天南　なんだ、駄賃取りだ。コリヤヤイ、わいらは愚老を馬士と思ふか。イヤ、さう思はるゝも尤もかえ。併し、醫者と馬士とは、ちつと商賣の筋が違ふワ。愚老は小佐保天南といつて、生き藥師同然の藪醫者だが、聞いてくりやれ、この馬士の馬を借りて、藥箱を下荷にして、病家見舞ひに出かけたところ、この馬士が俄の霍亂、そこで駄賃を拂つた事なれば、爰から馬を歸すも殘念と、

すぐにこの馬に馬士を乘せて、醫者が手綱を曳いてくるやつさ。なんと、馬士が馬に乘つて、醫者が馬を曳くとは、これでは築地へ歸られまい。

皆々　アヽ、馬で來たのは、多九郎だな〳〵。

多九　コレ〳〵、仲間の手合ひか。いま醫者どのが話しの通り、駄賃取りのこの多九郎、この頃の暑さに霍亂をしたさうよ。現在醫者に口取らせ、乘つたわしは先刻から、おいどが痛くてならぬ。もう下りやせう〳〵。

天南　アヽ、危ない〳〵。抱き下してやらう。（ト馬より多九郎を抱き下ろす。）

多九　ヤレ〳〵、馬に乘るのも大儀なものだ。時にお醫者樣、酒手を下さりませ。

天南　アヽ、駄賃を拂つたその上に、愚老は下りておぬしを乘せ、手綱を曳いたその代り、酒手を取るのか。

多九　ハテ、その代りには、脈を見てもらひますワ。コリヤ、脈を見ろ〳〵。

天南　ナニ、白酒賣りではあるまいし。コレ、足を見ろといふ地口だワ。

多九　イヤハヤ、肝つぶし蠅の頭だ。脈を見るのは醫者のみやくだい。

天南　アヽ、この男は、こぢつける地口だな。ドリヤ〳〵。（ト捨ぜりふにて多九郎の脈を伺ひ）これは脈體

をかんがみるところ、死脈拂ひましよ、みやくく落しぢや。

皆々　何を云はつしやる。

多九　時にてめえ達は、あの巡禮どのを捕まへて、何をワッパサッパ云ふのだ。

馬一　ハテ、あの餓鬼めはお觸れのある

馬二　菊地の小悴、月若丸、さまよひ歩くと聞いたによつて

多九　そこでわいらが詮議せうといふのか。

皆々　そんなものよ。

多九　イヤ、わいらが詮議しようといふと又、わいらが俗性も詮議せにやならないぞ。

皆々　そりや、なぜ〳〵。

多九　ハテ、この間噂にも、播州に住む小坂部太郎といふもの、女子を連れて歩くとの事。もしやその手先の者であらうも知れぬ。てめえ達も、あの巡禮を連れてゆくといへば、否でも其方の身許も詮議せねばならぬ。さう思つて居やれ。

皆々　アヽ、そんならおいらを詮議して

多九　それが否なら、あの女中にいさくさは無いか。

皆々　サア、それは

多九　いつそ、わいらを引つ捕へて

天南　ドレ、醫者も手傳はうか。

ト兩人立ちかゝる。皆々驚き

馬一　アヽコレ、あの巡禮の詮議は、ありやァ粗忽だ〳〵。

多九　そんなら、ほんこにする詮議ではないか。

馬二　オヽサ、ぶちツこでござるよ。

多九　ソレ、見やァがれ。

馬三　エヽ、いま〳〵しい。いつそ、うぬをぶちツこに

ト割り木を持つて多九郎へ打つてかゝる。多九郎、その手を捕へ、割り木を引ツたくつて

多九　ソレ、ぶちツこだ〳〵。（ト馬士の三をしたゝかくらはせる。）

馬四　ヤア、多九郎め、仲間の者を

皆々　ぶつたな〳〵。

多九　ぶつてもいゝワ、ぶちツこだ〳〵。

天南　おいらも仲間へ入らう。ソレ、ぶちッこだく／＼。

ト馬士の一をくらはせる。皆々驚き

皆々　ぶちやァがつたな／＼。

馬二　ハテ、不承しやれ。ぶちッこだく／＼。

ト双盤になり、皆々捨ぜりふにて立ちかゝるを、天南、馬をくらはす。馬は刎れて薬箱を落し、大勢を刎ね倒し、馬士四人は馬に追はれて下座へ逃げて入る。

多九　大べら棒め。ハヽヽヽ。姐さん、見なさつたか。この多九郎が來ては、この位なものサ。

敷浪　ハイ／＼、お前がござんせずば、どのやうな無體を云はうも知れぬ。よい所へござんして、このやうな嬉しい事はござりませぬわいなァ。

多九　さうでござらう。して、巡禮どのは、この小幡へは、知る人でもあつてござつたかな。

敷浪　左様でござりまする。この小幡の在所にゐる、小平次といふ百姓を尋ねて、九州よりはる／＼と參つた者でござりまする。

多九　アヽ、そんならあの小平次を尋ねてござつたか。以前は九州菊地に仕へ、馬添へ役のあの小平次。それを尋ねて足弱づれ、あの九州から山城三界へござるといふは、いよ／＼菊地の

敷浪　アヽモシ。(ト思ひ入れ)
多九　さぞ長旅は草臥れたでござらうが、尋ねさつしやる小平次は、廻國に出て留守でござるよ。
敷浪　エヽ、そんなら折角尋ねた小平次は
多九　廻國に出ましたが、たしか今日この頃は、歸るといふ噂でござる。
天南　尋ねてござるならこの道筋を、小幡の里と聞いてござりませい。
敷浪　それは忝うござりまする。サア、そろ〳〵と行きませうぞや。
月若　イヤ〳〵、おりや草臥れた。コレ、敷浪。
多九　ヤア。(ト聞き咎める。)
敷浪　アヽコレ……今云はしやんした小幡の里へ。
多九　巡禮の女中。
敷浪　ハイ、忝うござりまする。
ト双盤になり、敷浪、月若の手を引き、上手へ入る。兩人殘つて
多九　コレサ、天南、こなたに頼んでおいたあの毒の事は、いゝかえ〳〵。
天南　ハテ、人を助けるは少と不得手なれど、殺す事なら丈夫に請け合ふ。砒霜石、斑猫に、青蜥蜴の

陰干しまで、打込んで調合した毒だもの、それを服むが最期の助、コロリバッタリ、ヒリ〳〵ヒリ。それにつけても、あの小平次は、今日あたり歸るといふ事だが

多九　そりやアこなさんも知る通り、小平次が女房のおとわは、以前は播州淺山の屋敷、鐵山樣の實の妹。この多九郎が、若黨奉公してゐた時、連れて逃げたあの女。それから二人とも、屋敷を構はれ馬士商賣。不仕合せが度重なり、相對づくの夫婦別れ。いま小平次が女房はおれの女房。今では鐵山どのゝ首尾も直り、通路もしてゐるが、廻國に出た小平次が、急に中歸りに歸るとの知らせ。内に置いては少つと面倒。そこで彼奴に毒をくらはせ、おッ殺す工面を、こなたに頼んだではないか。

天南　サア、おれもさう思ふから、毒も爰へ、コレ〳〵、調合して持つて來た。(ト紙入れより毒の包みを出し)して、小平次を、ジメ〳〵とやりさへすれば、跡へはこなたが乘り込むか。

多九　乘り込むとも〳〵。跡はおとわの亭主は多九郎。一體おれの方が、初手からの色男だ。

天南　愚老が匙の毒がきゝ、小平次めをおッ殺せば、跡腹やめず貴樣の女房、その仲人は小佐保天南、爰は所もこのしろや、こはだの鮨に馬はあれど、君を思へば徒歩や裸足の代參り、と來りやどうでござい。

多九　何を云はつしやる。

トちと双盤になり、栗平、キヨロ〳〵と流れへ目を附けながら出て來り

栗平　アア、こなたは多九郎どの。

多九　さう云ふは、鐵山樣の下部の栗平、蚤取り眼で何を探すのだ。

栗平　サア〳〵、聞かつしやい。大事が出來たり。……お旦那鐵山樣は先達つて、義政公のお心に違ひ所領莊園召し上げられ、淺山家斷絶と思ひの外、山名樣の推擧にて、武將宣下の儀式に用ゆる御土器、手造りに仕上げ差上げるは、お家柄の皿屋敷。それについて、妹御山の井樣へ火急の御狀、持參いたしたこの下部。跡の堤で女巡禮に出合ひ、一杯機嫌のじやらくらから、持參の狀箱、この流れへ取り落し、水に迫かれて蘆間の蔭、その行先を見失ひました。こりやマア、とんだ事を仕出かしたわい。

多九　栗平、待ちやれ。女巡禮といふからは、アヽ、そんなら今の奴に違ひはあるまい。して又、狀の趣き、少しは聞いた事でもあるか。

栗平　成る程、聞かないでもござらぬて。菊地の家の重寶、雌雄二つの龍の印とやら。

多九　雄龍の印は菊地の娘、小坂部姫に附け置き、捨て子になしたるを、大伴宗鑑、拾ひ取つて養育な

し、即ち天竺徳兵衛の手へ渡り、軍勢催促なす爲に、この多九郎が預かつて、コレ、人知れずこの沼へ。（トあたりを見廻し、沼の中より、石を附けたる魚籠を引き上げ、その中より赤地錦の袱紗に包みたる印を取り出し）まツこの如くに隱し置き、軍勢を狩り催ほす今この時。

天南　して又、片しの雌龍の印は。

多九　菊地が身寄り、彌陀次郎といふ者預かりしを、鐵山どのが人知れず、奪ひ取つて隱せしを

栗平　何奴が盜みしやら、雌龍の印は館の內に、かいくれ見えませぬて。

多九　この多九郎も馬方風情で、この印を持參するは危ないもの。殊にこの程失ひし、彌陀次郎めが詮議とあれば、矢ツ張り元のこの沼へ。（ト元の通り魚籠に入れて沈める。）

天南　それでは氣の附く事はあるまい。

トこの時、向うにて百姓大勢「サア、ござれ〱」と聲する。

栗平　ヤア、あの人聲は

ト三人向うを見て

多九　ヤア、向うへ來るは小平次め。

天南　堤の茶屋で毒の調合。

多九　必ずぬかるな。

天南　合點だ。

栗平　サア、ござりませ。

ト双盤になり、天南、藥箱を抱へ、三人連れ立つて下座へ入る。直にてんつゝになり、向うより小平次、白手甲、股引、白き單衣、鼠の帶、敷き茣蓙、草鞋、鉦と撞木、藁にて束ねし亂鬢にて、世話六部の拵へ。百姓大勢、脚絆草鞋にて、鋤鍬などを持ち、一人は大きなる草刈り籠を擔ぎ、一人は小平次が笈を背負ひ、ワヤ〳〵云ひながら出て來り、直に舞臺へ來て

百一　ヤレ〳〵、達者でめでたうござる。さぞ草臥れてゞあらう。サア〳〵、爰へ掛けて休まつしやい
休まつしやい。

ト絲立てを敷き

皆々　サア〳〵、爰へ掛けさつしやりませ。

百二　コレ、小平次、大事の笈摺は、爰へ持つて來ましたぞや。

百三　留守の内も、跡に變りはござらぬ程に、案じぬがよい。して、どこまで廻つて戻らしやつたぞ。

小平　これはハヤ、どなたもよう優しくして下さります。わしも内を出たからは、六十六ヶ國を廻らず

ば、歸るまいと思ひましたが、聞かつしやりませ、親仁どのを三日續けて夢に見ました。そこで夢見は惡し、一旦中歸りに歸つて、西國四國は別に立たうと、まづ東國を殘らず廻り、奧州から北國筋、コレ、聞かつしやりませ、夢見の惡かつたは加賀の白山、場所が惡いだけ一倍氣になりました。アヽ、こんなケチな根性では、六十六部は合點のゆかぬものサ。それにこの頃は流行り風で、二三日この方、この暑いのに心持ち惡く、寒氣がします。アヽ、また寒くなつた〳〵。

百四　アヽ、それはどうでも旅疲れでござらう。」

百九　イヤモウ、親を案じるは、そりや誠に人間の情のあるところでござるて。

百六　わしらも去年廻國に出ようかと、この山城を立つて、大和河內を廻りましたが、跡へ殘した女房の事が心にかゝりまして、二ケ國は半分廻つて歸りましたて。そこで六十六部ではなうて、二分五厘ぢやわいの。

皆々　何を云はつしやる。ハヽヽヽヽヽ。

百六　時に、小平次どのゝ歸られた事を、お內儀に知らせませうではござらぬか。

百七　それがようござる。コレ〳〵、笈は爰へ置きましたぞや。晚にはいづれ、珍らしい話を聞きませう。

小平　アヽ、そんならこなた衆は知らせて下され。必ずともにわしの病氣の事は、沙汰なしにして下されや。

皆々　合點ぢや〳〵。さぞ内儀も喜ばるゝであらう。サア、ござれ〳〵。
　ト禪のツトメになり、百姓大勢、捨ぜりふにて、草刈り籠を殘し、下座へ入る。引き違へて敷浪、月若の手を引いて出て來り、小平次を見て

敷浪　オヽ、こりや行き暮らしたる六部どのさうな。ドレ、巡禮が志しを進ぜませう。
　ト手の内をやる。小平次取つて

小平　これはマアお前方も、長の旅の巡禮衆さうなが、お志し有り難うござります。……只今の志し、御先祖代々の諸精靈、佛果菩提の爲、南無阿彌陀佛々々々々々々。
　ト鉦を打ち鳴らし、回向する。敷浪、よく〳〵見て

敷浪　ヤヽ、こなさんは、小平次どのではござらぬか。

小平　さう仰しやるお前樣は、敷浪樣、ヤレ〳〵マア、思ひがけない所でお目にかゝりました。あのお小さい樣は

敷浪　この和子樣は主人の御胤、月若樣ぢやわいのう。

小平　エヽ、あなた樣が月若樣とな。モシ、若君樣、下樣の御奉公仕りましたる、當所小幡の生れ、小平次と申しまする者。故郷の空のなつかしく、今日只今戻りまして、まだ親女房にも逢ひませぬところ。あなたにお目にかゝりまするも、主從三世の奇緣盡きざるところと、このやうな喜ばしい儀はござりませぬ。

敷浪　其方に逢うてわしも安堵。忠臣の彌陀次郎どのは、大切なる雌雄の印を盜み取られ、所々方々と詮議最中、然るに所持する彌陀の尊像の尊き靈夢、汝が尋ぬる雄龍の印こそ、水中に沈みありと御佛のお告げに任せ、心にもなき漁りの、この宇治川に網曳く世渡り。頼み少なき月若樣の御身の成行き、この上ともに頼むぞや。

小平　お氣遣ひなされまするな。この小平次がお目にかゝつたからは、埴生に伴ひ、お隱まひ申しまするが、さりながら、女房のとわと申す者、心の程の知れぬ生れ、必ず御油斷なされまするな。

敷浪　何から何まで、深切な其方の詞。モシ、月若樣、あの小平次に、お詞を遣はさりませ。

月若　コレ、小平次とやら、世に頼みなき月若、この上ともに頼むぞや。

小平　エヽ、勿體ない。有り難いそのお詞。少しも早く私しが隱れ家へ。（ト立たうとして、ワナ〳〵慄へ出し、思ひ入れあつて）アヽ、困つたものだ。風のせゐかして、また寒氣がして來た。困つたものだ

(トわな／＼慄ふ。)

敷浪　アヽ、そりや困つた事ぢやわいの。どうぞマア、その寒氣をとめる仕樣はないかいのう。

小平　アヽコレ、寒くつてどうもなりませぬ。なんぞこゝらに肩へでも引つかけてゐられさうな物があつたら、御覽じて下さりませ。

敷浪　成る程、なんぞ着やるやうなものが

ト二人してあたりを尋ね、小平次が敷いてゐる絲立を見附け

小平　アヽコレ、爰によい絲立がござりまする。これなりと着て居りませう。

敷浪　それで濟む事なら、ドレ、手傳うてやりませう。

ト敷浪、絲立を取つて小平次に着せてやる。この時、多九郎、茶碗を持ち、天南、土瓶を提げて出てくる。このあたりより川の縁にて、いろ／＼の蟲の音する。

多九　ヤレ／＼、小平次、達者で歸らしやつたか。めでたうござる。アヽ、女中は先刻の巡禮だの。

天南　いま村の衆に道で聞きましたが、こなたは病氣ではござらぬか。

多九　定めし旅の疲れもあらうし、その樣子を聞いたゆゑ、早速內にと思つたが、イヤ／＼、知らせたら親仁も內儀も案じようと、この天南樣を同道し、引き風を早速發散させる、煎藥を持つて來た

サア、立て續けに二三杯まゐれ。ヤレ〳〵、こなたはよう息才で戻つたのう。

ト茶碗へ薬をついで出す。小平次取つて

小平　これは〳〵、馬士の多九郎か。わしが留守の内は、何かと家内を世話でござらう。天南様もお變りなうて、おめでたうござりまする。わしもまだ、歸る時分ではないが、親仁どのゝ事を案じて、中歸りに戻りましたが、病氣といふも當座の引き風、こりやはや、薬を忝うござります。

天南　なんのお禮に及びませう。サア、立てつけて、服まつしやい〳〵。

ト二人して勸める。小平次、服まうとして、フト茶碗の中を見て、思ひ入れあつて

小平　時候あたりの引き風に、用ゆる薬は俵屋の、その振り出しに事變り、色合とても常ならず、殊に泡立つ様子といひ、どうやらこれは（ト思ひ入れあつて）アヽコレ、お前が折角の志しだが、この薬は、こりや服みますまい。

天南 多九　そりやアなぜ、服まれない〳〵。

小平　ハテ、よく〳〵物を辨まへ見れば、山野を家と踏み出した廻國が、在所へ歸つたればこそ、近所の衆の志しで、薬も煎じて下さるが、これが深山幽谷で、どんな大病やめばとて、誰が薬をくれませう。出家に同じ廻國修行、國を出た日を忌日と定め、行きあたりバッタリに、死ぬは覺悟

の六十六部、ナニ、藥には及びませぬ。誠に壽命は天道樣任せ。南無阿彌陀佛々々々々々……
サア〳〵、この藥は返します。忝うござります。（ト茶碗を返す。）

多九　これはしたり、小平次どの。こなたは正直な男ではあるぞ。それは藥の無い國へ行つた時の事だ。
有る藥なら服むがいゝわな。

天南　藥の仕込みはしつかりだ。問屋の醫者が附いてゐる。いくらでも服まつしやい〳〵。

小平　イヽヤ、服みませぬ〳〵。

多九　ハテ、さう云はずとも

ト捨ぜりふにて三人、茶碗をあちこちして、前の流れへ茶碗を取り落す。水草の蟲、音をとめる。

小平　アヽコレ、勿體ない、藥をこぼしたわいの。

敷浪　併し藥のこぼるゝを、病が早速平癒するとやらいふからは、こりやめでたいわいの。

多九　ナニめでたいものか。折角持つて來た藥を、みんなにしたわえ。

天南　油一升こぼしたら、次郎どんの犬と、太郎どんの犬とが、みんな嘗めてしまはうに、何をいつて
もあの毒を

多九　アヽコレ……ハテ、この醫者は云はずともの事を

小平　今まで澤の水草に、音をなきつるゝ蟲の聲、一度にその音をとゞめしも、取り落したる一藥は、正しく毒藥。

ト思ひ入れ。小平次もこなしあつて

多九　ヤア。

小平　多九郎どの、晩に逢ひませう。

ト暮れ六ッの鐘。唄になり、小平次、絲立を着たるまゝ、わな〳〵するを、敷浪、介抱しながら、月若の手を引き、下座へ入る。あと捨て鐘、空へ朧の月を引き出す。多九郎、天南、顏見合せ

多九　天南老、あの小平次めは今の藥を

天南　彼奴は毒と悟つたわえ。

多九　これが誠に、毒くらはゞ皿の譬へ。彼奴を生けては置かれぬ。この多九郎と女房が、不義といふ事、見出すに定。

天南　殊に先刻の女巡禮、餓鬼を連れたは、正しく菊地が身寄り。

多九　彼奴等二人も手に入れる、仕樣を斯うして　（ト天南に囁く。）

天南　合點だ。

ト思ひ入れ。バタ〳〵になり、馬士二人、月若を追つて出てくる。跡より敷浪追つて出る。これにて兩人小隱れする。

敷浪　こりや最前の馬追ひども、又ぞろや若君を、こりや何れへお連れ申すのぢや。

馬一　さてこそ若君といふからは

馬二　聞かずと知れた菊地の小悴、女め、われも連れてゆく。うしやァがれ。

敷浪　小癪な一言。若君渡しや。

ト立廻る。後より多九郎出て、馬士二人をぶちのめす。これにて馬士は向うへ逃げて入る。

多九　彼奴等は、さて〳〵しつこい奴等だ。

敷浪　こなさんは先刻の馬士どの、よう來て下さんしたの。

多九　氣遣ひさつしやりますな。この多九郎が來ては、二人や三人はわし一人でも、びくともするのぢやァござらぬ。落ち着いてござりませ。

敷浪　忝うござんす。これにつけてもあの小平次は、折惡いあの樣子、早う同道して小幡の里へ

多九　その小平次は、わしが尋ねてやりませう。お前はあの子を同道して、ぢつとも早く。

敷浪　合點ぢやわいの。

ト行かうとするを引ッ捕へ、月若を踏み附ける。天南出て月若を縛り、手拭をはませ、笈の中へ入れる。敷浪、聲立つるを、多九郎、縛り上げ、手拭にて猿轡をかけ、あたりにある草刈り籠の内に入れ上に草をならして、あたりを見廻し、苫船を見附け、苫の内へ草刈り籠を入れる。このうち始終時の鐘、日の暮れたる景色。

天南　コレ〱、多九郎、この笈は擔いで行かうか。

多九　待たつしやい〱。あの草刈り籠も船へぶち込んで置けば、この笈も船でやらうぢやあるまいか

天南　成る程、そいつはよからう。

ト兩人探り寄るところへ、人音するゆゑ、また隱れる。時の鐘になり、下座より小平次、絲立を着たるまゝ、よろぼひながら出て來り、あたりを見て

小平　エヽ、殘念な。僅かな病といひながら、身體自由ならざるうち、あのお二人を惡者に奪ひ取られ追ひ駈けんにも息切れして、エヽ、殘念な。お二人樣〱。(トよろぼひながら水船の際へ寄り)アヽ息切れがして來た。この沼の水なりと、せめて一口。(ト本水をすくひあげて、飲まんとして心附き)イヤ〱、先刻多九郎めが勸めた藥、正しく毒と思ふから、怪我の振りにてこの沼へ流せば、忽ち鳴きやむ蟲の音。……彼奴に毒害される覺えはないが、どうも合點が

ト思ひ入れ。誂への合ひ方になり、所々に螢澤山飛んでくる。この途端に水船の中へ、最前の狀箱流れくる。小平次、これを見附け

水の面へ、何やら流れて

ト蘆の一本を拔き、岸へ引き寄せ、狀箱を取り上げる。この時、栗平出て窺ふ。小平次、思ひ入れあつて

こりやこれ、狀箱ぢやが

トこの聲に栗平恂りする。多九郎、天南も稻叢の蔭より窺ひゐる。

合點のゆかぬこの沼へ、流れ寄つたるこの狀箱。（ト蓋を開き、中より濡れたる狀を取り出し、思ひ入れあつて、朧なる月にかざし）「山州小幡、山の井方へ用書、淺山鐵山。」

ト讀む。後の三人これを聞き、さてはと思ひ入れあつて、このうち小平次、濡れたる狀を開き、飛びかふ螢や、月明りに讀む事あつて

こりやこれ、雌雄二つの中、その一つなる雌龍の印は、彌陀次郎樣の預かりなるを、淺山が奪ひ取り、雄龍の印はあの多九郎が所持の文言。知らぬ事とて、この小平次が女房は、あの鐵山の妹とは、ハテ、今日が日まで

ト悄りする。この時、後に窺ふ多九郎、天南、割り木を持つて小平次を打ち倒す。小平次、狀を持つたまゝ「ウン」と倒れる。栗平、悄りする。

多九　コレ〳〵、栗平、あたりに氣を附けろ〳〵。

栗平　合點だ〳〵。

ト東西を駈け歩いて窺ふ。二人は小平次をしたゝかにぶち、多九郎は持つたる狀を取らんとするを、小平次これを離さずにゐるゆゑ、二人して髻を摑み、ありあふ石を取つて頭を打つ。仕掛けにて血流れ、これにて狀を離す。天南手早く引つたくる。小平次、むしやぶりつくを、多九郎捕へて水船へ打ち込むと、一旦沈み、また這ひ上るを、多九郎、沼の緣へ引きつけ、髻を捕へて、押へつけて

コレ〳〵、大事のその狀を破らぬやうに、月明りで合點か。

天南　合點だとはいふものゝ、朧月では一向わからねえワ。（ト狀を空へ透し見て）ナニ〳〵一飛札を以て申し越し候ふ。先達て弟藤内に申し附け、船越三太夫を殺害なし、奪ひ取つたる雌龍の印、この程紛失したるところ、いつぞや其方國遠の砌り、不義の相手たる多九郎こと、天竺德兵衞より軍勢催促なすべき雄龍の印を所持なす事承はり、某思ふ仔細あるにつき、暫く借り受け、近々武將宣下の折を幸ひ、儀式の土器十枚を、巳の年月日揃ひし女の生血に、土を混じて作る時は、

義政を調伏するに疑ひなし。まつた腰元りく事、菊地の血筋に相違なき條、小坂部太郎と夫婦の契約、仲に儲けし稚子を世話いたし候ふは腰元幸崎、彼れは正しく三太夫が娘と推察いたし候ふ。何卒雄龍の印、早々われら方へ差し越さるべく候ふ。月日、妹山の井へ、淺山鐵山。」

トこの文言、捨ぜりふを交ぜて、おぼろに讀みしまふ。よき時分てんつゝになる。多九郎は小平次を水へ押し込み、押へてゐる。向うよりおとわ、世話女房の拵へにて、草履下駄をはき、手拭をかむり息せきと出て來り、花道より舞臺を窺ひ見て

とわ　そこにござるは多九郎さんか。

多九　おとわどのか。コレ、かの奴を。コレ、早うござれ〳〵。

トおとわ、本舞臺へ來て

とわ　コレ、かの奴とはアノ

多九　コレサ、鐵山樣から來た狀を、とつくり讀んだこの小平次、助けて置いてはこなたといひ、わしらが爲にならぬゆゑ、沼へ突ッ込み、この通りだ。

天南　大事の狀はコレ爰に。

ト渡す。おとわ懷中して

とわ　まだ息の根がとまらずば、女房のわたしが引導で、浮めてやらう。ちよつとお貸しよ。

ト天南の合口を取つて水船の縁へ行き、小平次に向ひ

サア、女房がとゞめだ。この世を清く成佛しなさい。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト合口にて滅多突きにして、合口を返す。多九郎は小平次の死骸を放す。

栗平　主人の御狀をお渡し申せば、下郎は直さま播州へ

とわ　返書は後より。お使ひ御苦勞。

天南　愚老はこれなるお飛脚と、同道して鐵山樣へ

多九　右の樣子を必ず詳しく。

天南　心得てござる。

ト捨て鐘になり、天南、栗平、一散に向うへ入る。この時稻叢の蔭より、廻國行者廻便實は一角、網代笠、黑衣、白の股引、手甲、草鞋、伏せ鉦を帶に挾み撞木を持ち、旅僧の形にて、出かゝつて窺ふ。

多九　斯う物事が巧くゆけば、おれが爲には福德の三年目。

とわ　のろけた亭主の小平次は、沼へはまつて往生かんまみ。

多九　誰憚らず今夜から、こなたはおれの女房だ。仕掛けた仕事は、コレ。

トおとわに囁く。心得て苫船の方へ行く。捨て鐘。一角探り寄つて、笈へかゝるを、多九郎も探り寄つて一角の衣に手をかけ、心得ぬ思ひ入れにて一角へかゝる。立廻りにて衣脱げ、鼠木綿の袷に淺黄の平帶の形になる。多九郎、笠へ手をかけ引つ張る。笠脱げると、鼠木綿の錣頭巾になり、多九郎を當てる。多九郎、立ち身にて氣を失ふ。おとわは苫の中の草刈り籠を取らんと苫を取りのける。この船に彌陀次郎、やつし形、肩へ綱をかけ、以前の籠にもたれ、咬へ煙管にて、摺り火打ちにて火を打ちゐる。これにておとわ、思ひ入れあつて、件の籠へ手をかける。彌陀次郎その手を捕へ、船より出て來り、立廻りのうち、おとわの懷中より右の狀出かゝる。彌陀次郎手早く取り上げる。おとわ取返さんとするとき、狀は兩方の手へ半分づつちぎれ取る。おとわ、下の方へくる。多九郎、心附き、笈を探し、擔がんとする。一角、笈を背負つて行くゆゑ

多九　コレ、おとわ、笈を脊負つたはこなさんか。

とわ　ナニ、おらァ爰にゐるよ。

多九　ヤヽ、そんなら盜人、

トかゝるを見事に投げる。このうちおとわ、花道へゆく。ドロ〳〵になり、沼の中より陰火燃え上がる。彌陀次郎、一角、キツと見て

彌陀　あの水中より

一角　陰火の不思議。

とわ　ヤ。

ト三人、この火にて顔を見合つて、思ひ入れあつて、おとわ、簪を手裏剣に打つ。彌陀次郎、船の中にてチヤンと打ち落す。一角、多九郎立廻り、一角、伏せ鉦をカンと打つ。

彌陀　ハテ、危ない事の。

ト思ひ入れ。これにてドロ〳〵をかむせ、一角早めて鉦を打ち、回向の見得。拍子、

幕

おとわ、花道に殘つて、向うへ入る。この上を誂への人魂、薄ドロ〳〵にて、おとわの跡を慕つて向うへ行く。知らせにつきシヤギリ。

小幡の里小平次内の場

役名――小平次の亡靈。小平次女房、おとわ。彌陀次郎時綱。小平次妹、おまき。小幡の百姓正作、馬士、多九郎。月若丸。同乳人、敷浪。牟禮一角照光。

本舞臺、三間の間、張り出したる平足の三重、正面暖簾口、佛壇、戸棚、鼠壁、下の方に竈、臺所道

具を見せ、よき所に流し、水瓶、手桶など飾り、藁葺きの門口、出入りの馬部屋、その屋根より振り
よき柳の大樹枝垂れゐる。上の方、反故張りの障子屋臺、すべて山城の國、小幡の里、小平次住家の
體。在郷唄にて幕明く。

卜正作、親仁の拵へにて、佛壇に向ひ、鉦打鳴らし、看經してゐる。平舞臺におとわ、前垂れ襷にて
燒き物火鉢に鐵灸を渡し、串差しの鮎を燒きゐる。おまき、木綿模樣の振り袖、前垂れ、田舍娘の拵
へにて、手拭を冠り、釜の下を焚いてゐる。百姓三人、鍬をかたげ、ワヤ〳〵云うてゐる。

百一　コレ〳〵、かみさん、小平次どのは、さぞ草臥れさつしやつたであらうの。今に納戸に

三人　寢てゐられまするか〳〵。

とわ　これはしたり、この衆は、こちの小平次どのは、いつマア戻つたぞいの。

三人　それでもわしらは、昨日逢ひましたわいの。

とわ　ハテ、お前方は、眞顏でわしを騙すのか。いゝ加減に焦らさつしやいよ。

百二　ナニこなさんを焦らすものか。昨日逢うたに

三人　違ひござらぬ。

まさ　モシ〳〵、待ちなさんせや。そんなら何と云ひなさんす。わしが兄の小平次さんが、昨日在所へ

戻つて來たと云はしやんすのかえ。

三人　オヽサ、昨日わしらがしつかりと、逢ひました／＼。

正作　コレ／＼、おまきや。そんならあの衆は、こちの小平次に逢うたと云はつしやるのか。

百三　コレ／＼、親仁どのも妹御も聞かつしやれ。昨日小平次どのに逢うたら、小平次どのが云はるゝには、打ち續いて夢見が惡いゆゑ、親仁どのゝ事が案じられ、中歸りに戻つたと云はれたわいの。

正作　ハテなう。在所まで來て、なんでマア我が内へ戻らぬのぢや。こりやてつきり、新田の狐に化されたか。コレ、おまき、われ、ちよつと行て、近所を尋ねて來いやい。

まさ　アイ／＼、合點でござんす。わたしが在所ぢう駈けて歩いて。（ト行かうとする。）

とわ　ア、コレ／＼、おまきや、お前うろたへて行く事はねえ。小平次どのも歸りさへさつしやれたら、我が内だもの、來るなといつても來ないでは……わしはさう聞いたによつてな、待ち受け心で、鮎の魚を燒いて置くも、廻國の事ゆゑ、定めて精進であらうし……コレ／＼、お前方、畑仕事にござる道に逢はしやつたら、内では待つてゐると、この通りを云つて下され。

百一　合點ぢや。そんなら親仁どのも、おまきも、今にも戻られたら、馳走さつしやれ。コレ、お嚊、こなたも馳走してやらつしやれ……サア、行きませうか。

正作　こりや皆の衆、よう知らせて下された。大方おツつけ戻りませう。久し振りだやに、小麦など挽いて、饂飩打つて食はせましよ。おまきよ、ソレ、釜の下より焚つけよ。

まき　アイ〳〵。

正作　ドリヤ、饂飩打つて待ちませうか。

三人　晩に話しに來ませうかい。

　ト合ひ方になり、皆々ワヤ〳〵云うて向うへ入る。正作も暖簾口へ入る。

まき　ドリヤ、湯を沸かして置きませうか。

　ト釜の下を焚きつける。てんつゝになり、向うより多九郎、駄賃馬を曳き、一升樽を提げて來り、門口にて捨ぜりふ云ひながら、馬を部屋へ追ひ込み、內を覗き

多九　おとわさん。

とわ　多九郎さんか、入りねえな。

多九（內へ入り）ヤレ〳〵、お互ひに昨日は

　ト云はうとする。おとわ、煙管にて突き、おまきが聞いてゐるといふ思ひ入れ。

　イヤモウ、昨日は馬を忝うござりやす。今日も駄賃取りに出ようと思つたが、この暑さで心持

ちが惡し、こんな日には酒でもかッ喰つてづるけべいと、見さッし、一升買つて來たよ。どうだ氣はねえかの。

とわ　そいつはよからうよ。わつちも氣があつたから、鮎の魚を燒いて置いた。こいつを蓼酢にして、一杯やらかさう。

多九　何も身祝ひだ。昨日首尾よく小平次を

まき　エ。

とわ　コレナ、この人は、よう問はず語りをする。コレ、おまきや、アノてまへ大儀ながら、行水の湯も沸かしてもらはう。水も二三杯汲んで來や。

まき　アイ、どうで今、湯は沸きやんすわいな。

とわ　エヽ、そればかりの湯で足りるものか。手桶で四五杯、汲んで來いといふに。骨惜しみをするあまぢやアねえか。

まき　ナニ、あまだえ。あまはお前が云はずと知れた事だわな。何ぞといふと、あまだ〳〵と、あまならば河が聞いて呆れるワ、とんだ惡婆だ。

とわ　なんだ、惡婆とかおれが事か。ウヌ、いけ口を引ッ裂いてやらう。

まき　サア、引ッ裂いてお兄〱。いけ口の明いた。繼姉だといつても、兄さんの緣がない時は他人だよ。あんまり大風な事を云ひなさんなよ。

とわ　エヽ、そのいけ口を

ト立ちかゝる。多九郎とめて

多九　コレサ〱、もういゝわな。靜かにしなさいな。コレ、おまき坊、てめえ兄嫁に御託をするが惡い。ちつと口を嗜まつしやいな。

まき　なにサ、おかまひでない。姉だといつて、退けば他人だわな。

とわ　コレ、あの口を聞きなさいな。

多九　ハテ、ようござるわな。サア〱、おまき坊、からかはずとも、水を汲んで來な。

まき　アイ、汲んで來るわいな。もう打つちやつてお置き〱。これから思ひ入れ汲んで來るからの。掘拔を汲み干してやらう。

多九　サア〱、汲んで來な〱。

まき　ドレ、思ひ入れ汲んで來ようか。

ト唄になり、手桶を提げ、安下駄を穿き、下手へ入る。多九郎見送る。

多九　あのあまッ子も餘ッ程情が強い。
とわ　ナニモウいけるのぢやねえよ。……そりやアさうと、昨夜ちよろまかした二人の奴はどうした。
多九　エヽ。こなたはあの船の中の草刈り籠をどうした。
とわ　エヽ、この人はの。昨夜見る通りだわな。船の中に何者かうしやアがるから、こいつは見附かるまいとうろたへまぎれに、大事の狀をコレ、半分引ッ切られたわな。（ト狀のちぎれを出して見せる。）
多九　そいつはとんだ事をしたの。しかも宛て名の方を取られた。イヤ、おれも、餓鬼をぶち込んだ笈を引ッ淩はれた。ほんに無駄骨を折つたぞ。
とわ　いゝわな、その位な事は捨てゝ置きねえ。あのマア小平次さへ方附けてしまへば、今日からはこなさんと、天井拔けた夫婦仲。わつちはこなさんに逢ひ通す心で、鮎の魚を燒いて置いた。これで一杯飲みねえな。
多九　成る程、それもさうかえ。併し、小平次が親や、あの妹めはどうせうな。
とわ　ハテ、彼奴らこそまちんでも服ませて、だりむくらせてしまふわな。
多九　そいつは面白い。サア／＼、この酒を燗をして、差向ひにやらかさうか。
とわ　ちよつと燗をつけねえな。

多九　もう使ふのか。あやまるの。ハヽヽヽヽ。ドリヤ、燗をつけようか。

ト樽の酒をちろりへ明け、飯釜の中へつける。おとわ、鮎を鉢へ入れる。このとき、時の鐘、六部の出の合ひ方。向うより衣禮一角、以前の六部の形、錫杖を突き、笠を背負ひ出て來り、花道にとまり

一角　誠に、爰は都に程近き、小幡の里を歌人の「我が駒をしばしとむるか山城の、小幡の里にありと答へよ。」牛馬の背は借らねども、山野に伏して岩角も、夜の枕となすが習ひ、こゝが廻國修行の身の上。あれなる民家に立寄りて、手の内乞はん。おゝそれよ。

ト合ひ方になり、門口へ來る。このうち舞臺の二人は酒盛りをしてゐる。一角、思ひ入れあつて

廻國の修行者、手の内御報謝。

多九　アヽ、手がふさがつてゐる。通らつしやい〳〵。

一角　それは近頃忝い。通れとあれば遠慮なく、ドリヤ、それへ通りませうか。

ト門口へ入り、笈をおろし、捨ぜりふにて草鞋を脱ぐ。兩人見て

とわ　この人はなんだ。案内なしに、なぜ人の内へのめくりこむのだな。

一角　さればでござります。今あのお人が、通れ〳〵と云はつしやるゆゑ、幸ひ旅の疲れ、お辭儀なし

に通りますのサ。

多九　イヤ、わしが通れと云つたのは、手の内報謝はならないから、外の内へ通れといふのだ。見れば生若い形をして、年にも似合はぬ六十六部。コレ、爰の内へ通れではない。其方の足の向いた方へ通れといふ事だワ。

一角　ハテ、そりやお情ない御挨拶。年端もゆかぬ廻國修行、人様のお情を、受けにやならぬわしでござります。正眞の猿が人眞似、見やう見眞似の六十六部。どうぞ爰の内へ、泊めては下さるまいか。

とわ　イヽヤ、泊める事はならねえ。多九郎さん、追ひ出してやんねえな。

多九　サア／＼、六部どの、女あるじのあの内儀が、あの通りだ。片時も置く事はならねえ。サア／＼出て行きやれ／＼。

一角　ハテ、そこが世は情とやらだわな。是非とも泊めてもらはねばなりませぬよ。

多九　エヽ、イケあつかましい小二才だ。なんのよしみがあつて泊めるのだ。

一角　わしはこれで泊めてもらひますのサ。

ト笈を返して見せる。後の札に、「山城の國宇治の郡小幡村小平次」と記しある。おとわ見て

とわャア、その笈は、アノ、小平次の

多九　捨てゝ置いたる笈なれば、内へ隱せし月若丸。

ト立ちかゝるを、一角突き廻して

一角　なんと泊めずばなるまいが。

多九　サア、そりやァ

一角　得心ならずばこの笈を、引ッ背負つて通りませうか。

ト行かうとする。多九郎、門の戸をシャンとさして

多九　イヽヤ、ゆるりと泊まらつしやい。

一角　それは近頃忝い。

とわ　して、その笈は、どうしてこなたの。

一角　さればサ、昨日宇治川の螢ケ沼の暗まぎれ、わしが背負つたる笈佛と、とり替つたるこの笈の、國は山城小幡村、名は小平次とあるゆゑに

多九　こなたは戻しにござつたか。

一角　イヽヤ、取替へに來ました。この笈がお望みなら、わしが笈と替へませう。して、小平次どの

は
とわ　今に於て戻らぬのサ。
一角　そんなら亭主の小平次は、廻國修行の留守のうち……ようごんす、小平次の戻るまで、お宿を借りて待ちませう。
多九　待つてゐるならその笈は、この多九郎が預かつた。
　　　トかゝるを突き廻し
一角　イヤ、小平次どのに逢ふまでは、片時も離さぬこの笈の、佛へ六部が朝夕の
とわ　看經佛は笈の內。
多九　めぐりめぐつて月若を
とわ　アヽコレ……軒洩る月のこの埴生。
一角　小部屋を借りてゆつくりと
多九　旅の疲れを
一角・お內儀さん
とわ　六部どの

多九　正しくこの内

ト笈へ寄るを突き廻し、笈を抱へて

一角　ドリヤ、看經にかゝりませうか。

トちやんと鉦を打つ。唄になり、思ひ入れあつて障子屋體へ入る。おとわ、多九郎囁き合ひ、暖簾口へ入る。合ひ方になり、勝手口よりおまき、桶に水を汲んで提げて出て來り

まき　さて、しんどや／＼。この暑いのに、このやうに水ばかり汲んで、こりやマア、美しい黒髪も赤がしら、手足は山のこけ猿か、ほんに氏より育ちぢやのう。……オヤ、氣が違うたさうな。あの意地惡の惡婆に叱られぬうち、ドリヤ、湯を沸かさうか。

トまた唄になり、手桶の水を釜へあけ、薪をくべて沸かしにかゝると、暮れ六ツの鐘になり、向うより彌陀次郎、草刈り籠を擔ぎ出て來り、花道にて、懷より狀のちぎれを出し

彌陀　昨夜不思議に手に入りし、狀のちぎれの宛て名は鐵山、その妹の山の井こそ、小幡の里の小平次が女房おとわ。この書き物の詮議はあの家。さうぢや。

ト門口へ來り、籠を下ろし

ハイ、ちとお頼み申しませう。

まき　アイ〳〵、どれからござんしたえ。

彌陀　アイヤ、私しは旅の者でござりまするが、なんと、宿を貸しては下さるまいか。

まさ　アイ、そりや易い事ぢやがな、爰は宿屋ではござりませぬ。この向うの村を半道あまり行かしやんすと、百姓町がござんす、そこには泊りがござんす程に、早うござんせいな。

彌陀　ア、、そりや困つたものでござるわえ。もう〳〵、なか〳〵一町も行けませぬ。姐さん、どうぞ情だと思つて、泊めては下さるまいか。

ト このうちおまき、彌陀次郎が顔を見て思ひ入れあり。この時、おとわ出かゝりゐる。

まき　ハテマア、こゝらあたりには見馴れぬお方。見れば見る程、在所育ちに引替へて、いとしらしい男振り。して、お前、お一人かえ。

彌陀　一人旅ゆゑ、どこでも泊めませぬて。

まき　お一人さんかえ。アノ、お前はたつた一人……ようござんす。泊めませう〳〵。

彌陀　エ、お泊めなされて下さりますか。

まき　泊めいでかいなア。お一人とあれば、さぞ御難儀でござんせう。主は外にござんすが、斯う見たところがいとしらしい、可愛らしいお旅人さん、お泊め申しませうわいなア。

彌陀　それは近頃忝い。然らば一人旅でも苦しうないかな。
まき　サア、一人ゆゑにお泊め申しますわいな。お泊め申してこつそりと、旅疲れのお前のお寢間へ（ト思ひ入れあつて）ハイ〳〵〳〵、益體もない事ぢやわいなア。
彌陀　ハイ〳〵〳〵とは、そりや馬を追ふのか。
まき　ハイ〳〵〳〵とは馬の事。爰は所も山城の、小幡の里に馬はあれど、君を思へば（ト思ひ入れあつて）徒歩跣足ぢやないかいなア。
ト彌陀次郎に寄り添ふ。おとわ、ズツと寄つておまきを引退け
とわ　エヽ、見つともねえ、何をするのだ。其方へ退いてゐや。モシ、若いお人、こなさん一人旅なら泊める事はなりませぬといふところだが、どこやら見たところ小綺麗な、立派に見えてキツとした、粋な二才さん。アイ、わつちが泊めやす。あの女は居候でござりやす。あんな者にかまひなさんな。わたしが泊めるよ。
トよき時分、多九郎、行燈を提げ出かゝりゐる。
彌陀　エヽ、左樣なればお前が爰の內の
とわ　アイ、主はわたしでござりやすよ。二才さん、わつちが泊めてあげるよ。

ト嫌らしき思ひ入れ。おまき、こなしあつて

まき　エヽ、なんぢやいな、アタ阿房らしい。なんのこなさんが主であらう。主といふはわたしが兄さん、他國へ行つて歸らんせぬ小平次さん。お前は內の娘ぢやないわいな。

とわ　エヽ、このあまめは、まだツベコベと、すツこんでゐや。わたしが泊めやす。サア、此方へお出で〳〵。

まき　イヽエ、わたしが部屋へござんせいな。

とわ　エヽ、此方へ來なよ。

まき　ハテ、此方へ寄りなさんせ。

ト捨ぜりふにて兩方より引ツ張り合ふ。この時おとわの懷より、前幕の狀のちぎれを落す。彌陀次郎手早く拾ひ

彌陀　こりやコレちぎれし

とわ　エ。

多九（後にて樣子を見てゐたりしが、堪へ兼ねてズツと入り）イヤ〳〵〳〵、さうはならぬぞ〳〵。コレ、おとわどん、アタ見つともない。妹は妹とも思はうが、年增のくせに、イヤハヤ呆れたものだ。

とわ　コレ、多九郎どん、主のわしが泊めようといふに、なんでこなさんがいらぬ口出し、打つちやつておかつしやいな。
多九　それ〳〵、さういふ浮氣者だワ。現在、おれといふ色男があるゆゑに、あの小平次を
とわ　アヽコレ
多九　サア、云つて惡くば云ふまいが、いかに男がいゝといつて、貴樣の前からは弟とも、又は息子にしてもいゝ年配、それをマア引き摺り込んで
とわ　泊めたらどうする。たつてこなさんが妹に搦んだ事を云ふなら、破れかぶれ、何も彼も云つてしまふよ。云ふ段になれば、貴樣もあやが拔けねえよ。
多九　サア、そりやァ
とわ　しやつとでも云つて見さつしやい。
多九　（思ひ入れあつて）イヤ〳〵、泊める事はなるまい。ハテ、一人旅は泊めるなといふ、所のきつい法度だよ。
彌陀　そんなら一人旅は、アノ、所の
多九　主が泊める心でも、所の法で泊められまい。

彌陀　イヤ、わしには連れがある。
まき　エヽ、お前には道連れが……連れがあるなら遮つて
とわ　泊められまいとも云へまいぞえ。
多九　して、その連れはどこにゐる。
彌陀　こなたの心の落ち着く道連れ、いま門口に待たせて置いた。
　ト合ひ方になり、門口へ出て、持つて來りし籠の中より、前幕の敷浪を出し、同じく籠より一腰を出して脇ばさむ。
敷浪　すりや、お噂のこの内が
彌陀　コレ、マア何事もわしに任せて。（ト手を取つて内へ伴ふ。）
まき　ヤ、女中さんを道連れは、こりやこなさんの
彌陀　この道連れは、わしが女房。
敷浪　アヽコレ、なんのわたしが
彌陀　ハテマア、こなさんが女房、夫婦連れ立つ仲の旅、一人旅ぢやござらぬ程に、心置きなうこの内に、今宵の宿りを、主の女中、若い人、なんと泊めては下さるまいか。

多九　そんなら女房連れての旅か。さう聞いては萬更に、……ヤヽ、こまたは昨日の女巡禮。

敷浪　ほんに、其方は昨日黄昏に、若君樣を奪ひし馬追ひ。

彌陀　アヽ、コレサ、若い女を道連れの、宿に困つた二人連れ、是非に一夜のお情に

まき　あづかりたいはわたしが願ひ。それに女中を道連れとは、ほんに氣が揉めるわいな。

とわ　てまへばかりか、わしまでも、宿した上に氣が揉める。したが、お連れの女中は、多九郎どのが噂した

多九　落人くさいあの女、奥に來てゐる餓鬼もろとも

とわ　アヽコレ、泊めて置いたら、手を濡らさず

彌陀　無理に附け込む泊り人、今夜の木賃に

ト前幕の簪を投げてやる。おとわ取つて

とわ　こりやコレ、昨夜の暗まぎれ

彌陀　帶紐といてしつぽりと、末の末まで約束の、女が渡したその簪、手離し憎い品なれど、今宵の宿のその禮に

とわ　この簪を

彌陀　受けて下さい。
とわ　きつとお貰ひ申しました。
まき　その簪は、慥かにお前の
とわ　アヽコレ、口數云はずと、ぬし達二人を
彌陀　案内頼む、女中さん
敷浪　面倒ながらよいやうに。
まき　エヽ、腹の立つ。知らぬわいなア。（トぴんとする。）
彌陀　ドリヤ、御造作にあづからうか。

ト唄になり、皆々こなしあつて、おまき、悋氣の思ひ入れにて先に立ち、彌陀次郎、敷浪、奥へ入る。おとわ、殘つて思ひ入れ。多九郎、急いだるこなしにて、おとわが胸づくしを取つて

多九　コレサ、おとわどん、イヤサ、こゝなすつぱりめ。今あの二才が云ふを聞けば、あの簪を證據にして、われは昨夜、彼奴とふさつたな／＼。エヽ、腹の立つ。われが云ふ事を誠と思ひ、頼むに引かず小平次めを、沼へおつぱめ殺したも、てめえと二人添ひたいから。そのほとぼりも覺めぬうち、よく又外に間男を拵へたな。エヽ、腹の立つ／＼。（ト思ひ入れあつて）　いゝワ、われがさ

ういふ心なら、おれも男だ。たつた今思ひ切つてしまふぞ。待て〳〵。（トそこいらを尋ね、硯箱に紙を添へ持ち來り）サア、この多九郎に切れ文を書いてくりやれ。サ、これで書きやれ。書いても書かいでも書かす。今日向おれにかまはぬといふ、書き物を寄越しやれ。（トさしつける）

とわ　なんだ、この男は。切れ文を寄越せ……イヤハヤ呆れたものだ。コレサ、そんな色氣のある事を云ふはノ、道樂肌な通り者の云ふ事だ。こなたは鏡を見た事はないか。やんま蜻蛉も恐れるやうな目を剝き出して、切れ文も氣が強い。書かねえでどうするものだ。待つてるや。（ト硯を引寄せ、サラ〳〵と書き）サア、切れ文だ、持つて行かッし。

ト多九郎に渡す。取つて見て

多九　こりやアなんだ〳〵。小平次を殺した事を書き込んだこの切れ文。これをどこへ持つて出られるものだ。

とわ　ソレ見たか。どうでこなたも科は同罪。むづかしい事を云ふと、貴樣の首から先へ飛ぶよ。

多九　アヽコレ、今となつちやア、どうも斯うも拔けられない話になつたの。いつそ毒を喰はゞ皿だ。六部が笈の月若丸、雌雄の印を詮議してゐる彌陀次郎、彼奴が懷には彌陀の尊像、此方へ引ッ淩つたその上に、彼奴も生けては置かれぬわえ。

ト この内、一角、障子を明けて覗く。

とわ　そんならその切れ文の文言は

多九　こんな書き物を、人に見られて堪るものか。（ト引裂いて袂に入れる。）

とわ　今宵の内に奥の六部を

多九　おツ方附けて、月若を

ト 思はず三人顔見合せ、一角、バッタリと障子をさす。おとわ、多九郎、思ひ入れあつて、暖簾口へ入る。おと合ひ方、捨て鐘。障子屋體より一角、月若丸を連れて出る。暖簾口より正作、彌陀次郎、敷浪出る。

正作　マア／＼、あれへお出でなされませ。承りますれば、倅小平次が御主人菊地様に、身寄りのお方と承り申しますわいの。

彌陀　いかにも、某こそは菊地の一類、彌陀次郎時綱といつし者。

一角　さては御身が聞き及びたる、彌陀次郎にてありけるか。拙者は謀叛の聞えある、天竺徳兵衛詮議のためのこの姿、牟禮の一角照光と申す者。貴殿の主人の月若どの、お渡し申す、受取られよ。

ト月若丸を渡す。

彌陀　忝き御仁心。主人菊地の忘れ形見、時綱警護いたすでござらう。
敷浪　月若樣には御安泰。エヽ、有り難う存じまする。
彌陀　主人より預かりの、雌雄の印を失ひ、在所詮議のその内は、漁る業の船越三平。まつだこの尊像こそ、劍難除けの尊き御佛。（ト錦の袋に入れたる彌陀の尊像を出す。）
一角　その佛力の應護にや、昨日暮れ方不思議にも、通りかゝりし螢ヶ沼、捨てゝあつたるこの笈の、中に尊き月若君。正しくこの家の小平次は、沼に陷り横死の樣子。
敷浪　すりや、昨日やう〳〵めぐり逢ひ、力と思ふあの小平次。
正作　今朝曉方の烏啼き、惡いがもしやと案じる親。そんなら悴の小平次は、沼へはまつて死にましたか。そりやマアどうして。モシ、何奴が殺しました。敵を取つて下さりませ〳〵。（ト思ひ入れ。）
彌陀　老の悔みは尤も至極。證據は夜前手に入りし、鐵山より密書の片割れ。（ト狀のちぎれを出し）この文言の樣子では、この家の女房は鐵山が妹の山の井、わが姉者人の雌龍の印を奪ひしは、鐵山に極まらば、親の敵は淺山兄弟、樣子探らんその爲に腰元奉公。まつた小坂部太郎と、主人の姫との仲に儲けし幼子は、野宿の里に預け置く。コレ（ト二つの密書を出し）最前女房が落せしは、昨夜ちぎりし密書の片端。この文言にて、父三太夫を討つたるも、正しく淺山鐵山が仕業。傅手を

求めて入り込まん。（ト狀を懷中する。）
一角　月若丸を相違なく、菊地の身寄りへ渡せし上は、この家にあつて益なき照光、右のあらまし義政公へ言上なし、底意知れざる鐵山が、館へ立越え窺はん。
彌陀　然らば一角照光どの。
一角　次郎時綱、重ねて參會。
兩人　おさらば。
ト三重になり、一角、一腰を差し、向うへ入る。この時、おまき出かゝりゐる。
正作　イザ、若君樣、一まづ奧へ。
ト立ちかゝるを、おまきさゝへて
まき　父さん、待つて下さんせ。あのお方にはこのまきが、存分云はにやなりませぬ。退きなさんせ。
ト正作を引退け行かうとするを、正作、おまきを押へて
正作　たはけ面め。何をあなたに……サア、おかまひなう奧の別間へ、ちつとも早う。
彌陀　然らば正作……サ、敷浪どの、
敷浪　若君樣、入らせられませう。

ト合ひ方になり、月若丸を連れ、敷浪、彌陀次郎、奥へ入る。

まき　アヽコレ、時綱樣とやら、わたしやお前に

ト行かうとするを、正作隔てゝ

正作　こりやヤイ娘、おのれは兄小平次が死んだを聞いたであらう。

まき　サア、兄さんの事も聞きやんした。いとしい事と思へども、いま奥へござんした、彌陀次郎樣に心を奪はれ、兄さんの事も思ひませぬ。わたしやあなたのお側へ

ト行かうとするを、正作引附け

正作　コリヤヤイ、おのれは兄の事も思ひ居らず、血相變へてこの樣子は……アヽ、こりやアノ、彌陀次郎樣に

まき　アイ、わたしやあなたに江戸橋ぢやわいなア。

正作　ナニ江戸橋ぢや……江戸橋ならば、アヽ、川後か。

まき　その近所ぢやわいな。

正作　その近所なら土橋か。

まき　エヽ、父さん、不粋な。江戸橋とは、あなたにほれた……ぢやわいなア。

正作　アヽ、ほれた、か。こりや判じ物ちやな。

まき　サア、惚れたによつて、わたしや戀を叶へにやなりやんせぬ。父さん、そこ退かんせ。

トかきのけて行かうとする。正作引附け

正作　たはけ面め、いかに阿房なおのれぢやとて、兄は非業の死をしをる。惚れたお方はお主樣。おのれお主に惚れてもよいか。

まき　お主樣でもよい殿振り、家來の娘が惚れまいものか。是非とも奥のあのお方に

ト行かうとする。正作引附け、捨ぜりふにておまきを引敷き、表の方より來てゐる繩を取つておまきを縛り

正作　おのれ、動いて見をれ〳〵。いかに阿房に生れたればとて、兄めが死んで間もないに、お主に惚れたとは大膽な。奥へは決してやる事はならぬぞ。

まき　コレ、父さん、そんならどうでも、わたしが戀は

正作　オヽ、かなはん〳〵、佛の椀ぢや、兄が回向をこの親が、せめて一夜さ。

まき　すりや、どうあつてもわたしが戀は

正作　ハテ、佛の椀ぢや。

ト唄になり、正作、念佛を唱へながら奥へ入る。おまき殘り、行かうとして、縛り繩に自由ならざるこなしあつて

まき　エヽ、胴慾な父さん、いかにお主の高下ぢやとて、惚れまいものか。それをマア、むごたらしい縛り繩。この戀が叶はぬものならば、わしや死ぬる。アイ、死んでしまふわいなア。自然死ぬなら、恨みの丈を、せめて一筆書き殘し（ト硯箱を見附け）アヽ、イヤ〳〵、書き殘さんにも手は叶はず、こりやマアどうせう、何とせう。（ト唄になり、思ひ入れあつて）アヽ、思ひ當りし事こそあれ、信仰記の雪姫は、足で鼠を畫きし例し。幸ひありあふこの筆にて、一間の障子へ一首の歌。「戀しくば尋ね來て見よ山城の、小幡の里に馬はあれども」……オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れあつて、硯箱の筆を口に咬へ、墨を含ませ、上の屋體の障子へ口筆にて、一點打つ。この時、下手の木部屋より以前の馬出て、一散に向うへ走り入る。この手綱に引かれ、縛られて筆を咬へしまゝ、跡ずさりに馬に引かれて、おまきも向うへ入る。あと合ひ方、時の鐘になり、暖簾口より多九郎出て

多九　なんだか今夜は、油斷のならない晩だわえ。彌陀次郎が大事にする、月若を引ッ浚ふには、なんでも腹を丈夫にしてるにやァならぬ。待て〳〵。茶を沸かして飯と出ずばなるまい。待て〳〵。

ト捨ぜりふにて土瓶を探し、取つてくる。この時、障子の内にて、回向の鉦かすかに聞える。

あの鉦はなんだ。どこぞに佛でも出來たのか……ア、、奥の親仁めが回向の鉦だな。彼奴らを逃がしてはならねえ。門口をしつかりと締めて置かう。

ト門口の戸を閉め、栓をさし、土瓶を振り廻して、思ひ入れあつて、

南無三、茶が無い。ドレ、水を入れて仕掛けよう。

ト土瓶を持つて流しの方へ來り、甕の上の柄杓を取り、蓋を取らうとする。誂への物凄き鳴り物にて、雨窓をおろし、行燈の灯、仕掛にて、暗くなつたり又明るくなつたりすると、竈の上へ焼酎火燃える。水甕のわきへ小平次の幽靈、物あはれなる様子にて、忽然と現はれ、多九郎が顔を怨めしげに見詰める。このうち終始寐鳥、薄ドロ／＼。多九郎、水を汲み、幽靈をフツと見附け、うろたへて二重舞臺へ駈け上がり、佛壇へ向ひ、鉦と撞木を取つて、念佛を申しながら、無性に鉦を打つ。小平次の幽靈後向きになり、多九郎を見詰めゐる。多九郎これを知らず、ソツと振り返る。小平次矢張り見詰めゐるろゆゑ、鉦撞木を持ち、うろたへて平舞臺を駈け下り、東の方へ行く。東の方を向き。目を閉ぢて鉦を鳴し、念佛を申す。幽靈はこれにてフイと消える。多九郎、又ソツと振り返り、怖さうに見る。死靈消えたるゆゑ、ホツと息をして、また東の方を向く。幽靈、多九郎が目の前へポツと出るゆゑ、多九郎うろたへ、大音に念佛を申す。鉦撞木を投げ捨て、門口の方へ逃げてゆく。これにて亡靈パツと消える。多九郎、念佛を申しながら、我が手に締めし栓を忘れて、門の戸を無性に明けようとすれど

明かぬゆゑ、猶々念佛を申して、門の戸をしやくる。この時、薄ドロ〳〵にて、門口の栓へ細長き燒酎火、ボカ〳〵と燃える。多九郎これにてうろたへ、ワツと云うて舞臺へ駈け戻りて、念佛を申しながら氣を失ひ、ウンといつて倒れる。この時、上の障子を明け、彌陀次郎窺ひ出で、この陰火にキッと目を附け

彌陀　ハテ、いぶかしきこの家の樣子。もしや横死の小平次が、障礙をなすか。ハテ、恐ろしい。

ト思ひ入れ。この時、奥にて

とわ　コレエヽ、蚊帳をどこへ置きやァがつた。おまきや〳〵。

ト呼び立てる聲に、彌陀次郎、シヤンと障子を閉す。唄になり、暖簾口よりおとわ、麻蓙と枕を持つて、酒機嫌にて出て來り、二重舞臺にて

あのマアおまきめは、どこへ行きやァがつたやら。エヽ、いま飲んだ酒に、つひにねえ醉つたさうだ。ドリヤ、爰へ床を取らうか。(ト思ひ入れあつて)昨日思はず破られた、ちぎれた狀も、慥かに先刻の(ト上の屋體へ思ひ入れあり、多九郎の倒れゐるを見て)そこにゐるのは誰だ。多九郎どんぢやァねえか。蚊が食ふに、コレサ、起きさつしやいな。コレ〳〵(トゆすり起しても起きぬゆゑ)オヤ〳〵、この人は目を廻してゐる。コレ、多九郎どん〳〵。

ト手桶の水を顏へ吹きかけ、呼びかける。多九郎、やう〳〵心附き

多九　南無阿彌陀佛々々々々々々々々。（ト目を閉ぢてゐる。）

とわ　コレサ、氣が附いたかよ。どうしたのだ。

多九　南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

　　　トうろたへて暖簾口へ駈け込む。おとわ、跡を見送り

とわ　なんだ、あの男は、無性に念佛ばかり申すが、エヽ、氣障な男だ。アヽ、惡酒のせゐか、頭がフラフラする。あの先刻の若い人は、どこに寢てござるの。人にばかり思はせて、エヽ、情を知らねえ……ドレ、蚊帳を吊らうか。

　　　ト戸棚を明け、蚊帳と搔卷を出し、四方へ蚊帳を引ッ張り、搔卷を持つて蚊帳の中へ入り

アヽコレ、あつたら年增を獨り寢させるの。先刻の若いのはもう寢なさつたか。エヽ、氣の揉める。思はせ振りも大概がいゝよ。

　　　トころりと寢て、搔卷をかぶる。矢張り一つ鉦聞え、凄き合ひ方、薄ドロ、寐鳥、行燈ほの暗くなり煙硝火パッと立つて、蚊帳の外へ小平次の亡靈現れ、蚊帳の中をヂッと見詰め、怨めしげにさし寄つて、蚊帳の中へ入り、女房の枕許へ近寄り、ヂッと見詰める。おとわのうなされ、恐るゝ聲聞える。上の障子を明け、彌陀次郎窺ひ、蚊帳の中へ思ひ入れあつて

彌陀　さも苦しげなる女の聲は、宿の女房が蚊帳の内。枕の許に忽然と、姿おぼろのあの形。守護なす彌陀の尊像にて

ト厨子を出して開き、蚊帳の方へかざす。ドロ〳〵にて小平次パツと消え、煙硝火立ち、おとわ目の覺めし體。彌陀次郎、障子を閉ず。おとわ、蚊帳の外を見て

とわ　エヽ、怖い夢を見た。コレ、びつしよりと汗になつた。エヽ、寢直つて見ようか。

トまた搔卷をかけて寢る。彌陀次郎、障子屋體より出て、行燈を提げてあたりを見廻し、懷中の狀のちぎれを取出し

彌陀　手に入る狀のこのちぎれ。この文言にて、雌龍の印の在所の詮議。

ト思ひ入れあり。行燈を搔き立て、文言を讀まうとする。あかり暗くなる。彌陀次郎、思ひ入れあつて、また搔き立てゝ狀を見ようとする。また暗くなる。この時、彌陀次郎の前へ小平次の亡靈、雄龍の印に水草の茎からみしを右の手に捧げし形にて、煙硝火と共に現はれ、物も云はずに件の印を差出す。彌陀次郎キツと見て

小平　又も怪しきその姿。手に何やらん携さへし、そも又おことは何者ぢや。

これぞ御身の尋ね給ふ、雄龍の印。

彌陀　ヤヽ、これが（ト手に取上げ、よく〳〵見て）疑ひもなき雄龍の印、いづれに隱しあつたるぞ。

ト小平次の亡靈、顏を上げ、いろ〳〵と思ひ入れ。

ヤヽヽヽ、すりや、多九郎めが仕業にて、螢ケ沼に沈めありしを、我に渡さんその爲に、持ち來りしと申す其方は、して、何者ぞ。

ト小平次の亡靈、こなしある。

すりや、其方は、身が家來の小平次とや。この品渡さんその爲に、呵責のいとま乞ひ受けて、我にまみゆる健氣な心底。水に溺れてこの世から、非業の最期遂ぐるとも、未來は成佛得脫の、彌陀の淨土へ。

ト廚子の扉を開く。ドロ〳〵になり、小平次の亡靈忽ち消える。煙硝火パッと立つ。

ヤヽ、さては朧のその形、搔き消す如く失せたるか、アヽ、不便の者の成行きぢやなア。

トこの時、バタ〳〵になり、奥より多九郎、月若丸を引ッ抱へ、あとより敷浪、正作、追ひ駈けて出て來り

正作　おのれ多九郎、その和子樣を何とする。

多九　何とするとは、菊地の小忰月若丸、訴人するのだ。そこ退け。

敷浪　イヤ〳〵、さういふお方ぢやない。必ず共に早まつて

多九　面倒な、退きやアがれ。

　　ト行かうとする。彌陀次郎、多九郎を引附ける。その間に月若丸、蚊帳の中へ駈け込む。

彌陀　コレサ多九郎、あの子は決してそのやうな

　　こりやア二才め、多九郎様を何とするのだ。

多九　イヽヤ、彼奴は月若丸。正しく爰へ

　　ト蚊帳へかゝる。中よりおとわ、月若丸を引附け、ヌツと出る。

敷浪　ヤヽ、こなさんは

正作　おとわだな。

多九　コレサ、其奴は菊地の小悴。

とわ　月若丸と名乘らせる。餓鬼め、キリ〳〵名を明せ。

月若　知らぬわいのう。

とわ　しぶとい餓鬼め。吐かさぬとこの鐵弓、横つ面へチリ〳〵だぞ。うぬらも餓鬼の素性を云はぬか。

彌陀　ヤア、極惡人の淺山が、妹の山の井。昨夜手に入る汝が密書で、何も彼も詳しく知れた。敵の片割れ、覺悟なせ。

とわ　うぬら寄つたら、月若がしやツ面へ燒き印だぞ。

彌陀　アヽコレ、滅多な事を

とわ　この燒き金が否ならば、月若丸と吐かしてしまへ。

彌陀　全く以て

とわ　但し餓鬼めを苛なまうか。

彌陀　サア、それは、

皆々　サア〳〵〳〵、

とわ 多九　どうだ。

とわ　いつその事に

ト　さゝへる正作を踏まへ、月若丸の顏へ燒けた鐵弓を當てる。月若丸、苦しみ倒れる。

敷浪　ヤヽ、月若樣を情なや。

正作　大惡人め、忰が敵、和子の仇。

彌陀　現在連れ添ふ小平次を、あの多九郎と云ひ合せ、殺せし報いは今目前。

とわ　小癪な奴だ。多九郎どの。

　　ト多九郎は鐵弓、おとわは出刃を持つて彌陀次郎にかゝる。立廻りあつて、多九郎を當て、おとわを一刀切る。

彌陀　若君まつた小平次だ、眼前敵のこの山の井、狂言綺語といひながら、現在親に刃向ふも、無人ゆゑの役廻り、舞臺の事とていづれも樣、御免なされて下さりませ。

二才野郎と侮つて、深手を負つたか、口惜しい。

とわ　エヽ、口惜しい。

　　ト倒れる。彌陀次郎立ちかゝるを、多九郎心附き、これをさゝへ、おとわを見て

多九　ヤヽ、山の井どのには手を負うたか。もう斯うしてはゐられぬわい。

彌陀　正作、其奴を取り逃がすな。

正作　心得ました。……おのれも忰が

　　トかゝるを突き退け、一散に向うへかゝる。突つかけになり、向うよりおまき、力附きたる思ひ入れにて、一散に出て來り、多九郎をとめてキッとなり、立廻つて本舞臺へ來り、見得になる。

多九　娘おまき、戻つたか。

まき　べら坊あまもつひぞねえ、女に似合はぬ馬鹿力、こりやどうだ。

多九　ヤイ、多九郎の悪人め。あなたも聞いて下さりまし。常から愚かなこのおまき、馬に引かれて氣を失ひ、正氣附かざるそのうちに、不思議や兄の小平次が、亡き俤のあり〳〵と、今より其方が皮肉に喰ひ入り、力量増すゆゑ御主人の、一大事ある時は、共々救ひ奉れと、云ふかと思へば忽ちに、心附いたる向うから、駈けくる馬追ひ、この多九郎。女のよれる黒髪で、一番とめた。びくとも動かれるなら、動いて見さんせ。

彌陀　すりや、小平次が一念にて、妹おまきがその力量。

敷浪　さはさりながら痛はしき、若君樣のこの亡骸。

ト月若が死骸にかゝる。ドロ〳〵にて、月若ムツクと起上がり、彌陀次郎が所持の廚子を開き、捧げゐる。

正作　ヤヽ、こりや若君は御安泰。

彌陀　殊に燒き金の痕もなく、時綱が守護なす尊像、うや〳〵しく捧げ給ひしは。（ト尊像を取上げ見て）さてこそ彌陀の尊像の、燒き爛れしは若君の、御身替りに立ち給ふか。アラ〳〵〳〵、

皆々 有り難やなア。

多九 時綱、うぬを

トかゝるを立廻り。この間におとわ心附き

とわ 餓鬼めはおれが

ト月若を抱へ、引附けんとする。ドロ〳〵になり、焼酎火燃え、おとわ連理引きにて、蚊帳の方へ引摺られ、二枚折りの屏風の蔭へ倒れる。途端に蚊帳の上より、白き怪しき形の物、スル〳〵と蚊帳の裾へ逆さに落ちる。正作、屏風を取除けると、おとわの死骸のめりゐる。彌陀次郎は多九郎を切り倒し、乗りかゝつてキツトなる。

皆々 これは。

ト皆々思ひ入れ。この時ドロ〳〵、煙硝火立ち、蚊帳の裾より小平次の亡靈、女房の首を抱へ、ぼつと小高く現はれ、女の首を透し見て、につこと笑ふ。

彌陀 今ぞ成佛。

多九 野郎め、うぬを、

ト刎ね返さうとする。彌陀次郎、とゞめを刺す。


同 女房 二役
尾上松助
豊國画

皆々　南無阿彌陀佛。

小平　嬉しやなア。

ト　げら〳〵笑ふ。大ドロ〳〵にて　見得よろしく、ひやうし

幕

堺川辻堂の場

役名――淺山將監鐵山。三平姉、幸崎。舟越三平實ハ彌陀次郎時綱。淺山藤內景信。醫者、小佐保天南。下郎、粟平。安達郡八。奴、多々平。奴、彌太平。腰元、おりく。賤の女、お種。牟禮一角照光。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、正面に辻堂、二枚屛に錠おろしあり、藪垣、所々に稻村、上の方に柳の吊り枝、舞臺前は水船、蘆澤山に茂りたる體、よき所に攝州堺川と書きたる榜示杭を立て、爰に多々平、頰かむり、奴姿にて抱き子を抱へ、これをお種、在所女の拵へにて、立廻つてゐる見得。葛西念佛の鳴り物にて幕明く。

ト　兩人よろしく立廻り、このうち抱き子頻りに泣く。お種、多々平をキッととめて

たね　イヤ〳〵、なんぼうでもやらぬ〳〵。コレ、こなさんは〳〵、人さんから預かつた、大事の〳〵

その子を、なんでマア滅相な、盗んでゆくのぢや。マア／＼、盗む物も多い中に、預かつた里子を盗むといふものがあるものか。なんぼうでもその子は、やらぬ／＼。こゝな盗人めが。

多々　エヽ、默りやアがれ。女め、身共を盗人と思ふか。コレエヽ、盗む位なら、なんで餓鬼を盗むものか。下郎は旦那の云ひ附けで、ちつと入用があるから、この餓鬼を捲きあげに、夜を日についで津の國の、野宿の里の田作りの女房が預かつてゐる里子は、菊地の姫と小坂部太郎が、仲に出來たる餓鬼であらう。奴が淩つてお旦那へ持參する。在鄉嗅アめ、そこ退け。

たね　さう聞いてはなんぼうでも、やる事はならぬぞえ。在所あるいてツソ／＼と、添へ乳してから寢せて置いた、その子を取られてよいものか。瓜茄子盗む夜嵐より、こはい目附きの奴どの、ほんにこなたは鷲熊鷹、蹴爪にかけさせよいものか。早う此方へ戻さんせいなア。

多々　イヽヤ、ならない。戻せといつてもこの奴が、形より大きな猿眼、睨んで置いた菊地が血筋、その餓鬼だから淩つてゆくヮ。

たね　なんぼこなたがさう云うても、そんなお人の子ではない。早う此方へ戻さんせ。

多々　エヽ、面倒な、退きやアがれ。

たね　返さんせ。

ト立廻りあつて、キツとなる。これより念佛踊りの合ひ方にて、兩人、抱き子を枷に立廻りのタテ、そのうちに抱き子泣く。多々平いぶり附ける。お種、邪魔する。立廻りあつて、禪のツトメになり、トヾお種、子をひつたくり、一散に向うへ入る。多々平、跡より追ひ駈け入る。この時向うより藤内、深編笠、着流しにて出て來り、お種と摺れ違ひ、舞臺へ來り、向うを見て、

藤内　今の二人が爭ひは、正しく兄鐵山が云ひ附けたる、野宿の里に預けしといふ、小坂部太郎が一子ならん。あの辻堂へ連れ來り、尋ね中の腰元幸崎。弟といふは彌陀次郎。彼奴めが親の三太夫、預かりの雌龍の印、兄鐵山が指圖を受け、三太夫めをぶつ放し、雌龍の印は又ぞろ紛失。これも大方縛め置く、あの幸崎が仕業ならん。兄に代つて藤内が

トあたり見廻し、辻堂の錠を明けんとする。この時、向うにて

彌陀　モシ／＼、旦那方、御免なさりまし／＼。

天南　うしやアがれ／＼。

トこの聲を聞き、知らぬ顔にて堂に腰をかけ、窺ひゐる。てんつゝになり、向うより天南、醫者の拵へ。栗平、同じく前の飛脚形。三平貫ハ彌陀次郎を引つ立てゝ出て來り、捨ぜりふにて直に本舞臺へ來る。

彌陀　モシ、旦那樣、私しが惡いゆゑお詫び申しまする。どうぞ御料簡下さりまし。

天南　なんだ、料簡しろ……コレエ、、われは愚老の面の泥が目にかゝらぬか。イヤサ、醫者の面へ泥を塗つても、料簡と申せば相濟むかよ。

栗平　左樣でござります。お前ばかりか、奴が面にも泥の刎ね。ぬかるみの刎ねをこのやうにかけても大事ないか。濟まないぞ〳〵。

彌陀　モシ〳〵、お前方、濟まぬ〳〵と仰しやるが、こりや誠に怪我でござりまする。あの畔道の溜り水、辷るところを仕合せと、私しは轉げませぬが、側杖あがつたあなた方、お顏へ刎ねたその泥水、二人が刎ねを浴びるとは、アヽ、どうでもあなた方は、刎ねてお出でなさると見えますわえ。

天南　コリヤ、ヤイ〳〵、なんだ、愚老が刎ねてゐる。ヤレ、おのれ、醫者を刎ねてゐると申すのか。人の病を癒す醫者が、刎ねて居つてはナ、コリヤ、匙の手前へ立たぬわい。

栗平　左樣でござりまする。身共も御扶持を頂戴いたす、この奴が刎ねてゐて、御奉公が勤まらうか。たはけ者め。

天南　コレサ、栗平、こんな野太い奴は屋敷へ引ツ立て、厩へでもぶち込んで、吠え面をかゝすがよい。

栗平　それがようござりまする。野郎め、うしやァがれ。

ト兩人、彌陀次郎へかゝる。藤内、この仲へ入り、兩人をさゝへる。兩人見て

天南　ヤア、あなたは淺山

栗平　藤内樣。下郎は旦那の御用につき、小幡の里へお使ひの道にて、大切な狀箱を、フトした怪我にて流れへ落し

天南　あの小平次といふ奴に、拾ひ取られたもやう〳〵と、取返したるあの御狀。したが、大事を知つたる小平次。その場で直に

彌陀　ヤア。（ト思ひ入れ。）

藤内　コレ。（トこなしあつて）役にも立たぬ問はず語り、あたりに他人も、ナ（ト彌陀次郎へ目を附け）委細は屋敷で……控へておゐやれ。（ト思ひ入れあつて天南に向ひ）只今あれにて聞くところ、お手前はじめ下郎まで、面へ泥を塗られたとな。

天南　左樣々々。お聞きの通り、愚老ばかりか御家來まで、御覽なされい、この通りサ。

藤内　委細詳しく承つた。コリヤ、若い者、其方はいづれの家來だ。

彌陀　ヘイ、下郎めは未だ主なし、ならう事なら武家方の、御奉公が致したく、仕官の願ひに所々方々遍歷いたす、ヘイ、下郎めでござりまする。

藤内　すりや、奉公の望みとな。して、われが家名は

彌陀　へイ、舟越三平と申しまする。
藤内　アノ其方が、舟越三平といふ、侍ひの端くれか。身は淺山鐵山の弟、同苗藤内景信といふ者だワ。
彌陀　すりや、其許が藤内どのとな、さすれば將監樣の御舍弟、手に入る密書の文言にて、敵の手蔓も
藤内　ヤ、なんと。
彌陀　サア、づるい奴とも思さうが、何を申すも武骨な私し、無禮の段は幾重にも、お二人樣、御免な
　されて下さりまし。
天南　イヽヤ、ならない、どなたが何と御意あつても、この天南は料簡ならない。
栗平　左樣でござります。下郎も淺山家の御家來だ。藤内樣、これではあなたは濟みますまい。
藤内　われが云はずと身共が承知だ。三平とやら、家來の面へ泥をかけられ、その儘にして置かうと思
　ふか。
彌陀　サ、それは
藤内　性根を据ゑて返答ぶて。一合取つても武士の家來、面の泥は雪ぐとも、赤恥かいた家來が恥辱、
　洗つても落ちぬぞよ。
彌陀　成る程、面の泥は洗つたら落ちもしようが、心の穢れは

藤内 ヤ、なんと。

彌陀 心穢れし無道人、父を討ちしも（ト藤内と顔見合せ、思ひ入れあつて）ハテナァ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、空に烏の聲して、數多の烏飛ぶ、柳の梢へ烏一羽、髑髏をくはへ來り、羽を休めゐる。兩人これを見て思ひ入れ。

藤内 耳に殘つていまはしい。阿房烏の友呼び連れ、頭の上でガァ〳〵鳴く、奇怪なる山烏。イデ、遠ざけて

折も折とてかしましく、渡り烏か知らねども

ト小石を摑んで柳の梢へ打ち附ける。烏飛び去り、髑髏バッタリと落ちる。

天南 ソレ〳〵、何やら烏めが落してうせたり。（ト取上げ見て）こりや髑髏でござります。

藤内 （取つて）これをついばむ山烏。

彌陀 いづくの誰が身の果か。

藤内 さてもみじめな

彌陀 哀れな有り樣。

藤内 ハテ、いまはしい態だなァ。

天南　コレサ、藤内樣、烏の鳴くはそりや外事。愚老はじめ御家來の、面へ泥を塗られても

栗平　あなたはお腹は立ちませぬか。

トきつと云ふ。藤内、思ひ入れあつて、髑髏にて彌陀次郎の眉間を打つ。彌陀次郎の額へ疵つく、彌陀次郎こなしあつて

彌陀　こりや藤内樣とやら。物も云はずに私しが、眉間をそれなる髑髏にて、打つのみならず面の疵。なんで下郎が面體へ。

藤内　血汐の刎ねに此方の、家來が面を穢されし、泥の返報、これで五分々々。

彌陀　ヤなんと。

藤内　召し抱へるが、奉公するか。

彌陀　すりや、誰人へ御奉公。

藤内　淺山將監鐵山へ、奉公いたせ、舟越三平。

彌陀　すりや、私しを鐵山樣へ

藤内　奉公するなら、推擧しよう。

彌陀　こりや面白いそのお詞。お抱へなされて下さらば、主取り好むこの三平、いかにも奉公いたしま

せう。

藤内　見所のある下郎三平。髑髏で面を割られても、辛抱したる大丈夫。武士の持つべき向う疵、その身のこれがよき幸ひ、面の疵が即ち印形、その請け判は

ト髑髏を投げる。彌陀次郎、手早く取上げ、よく／＼見て

彌陀　わがしやツ面の向う疵、滴る血汐が、アレ／＼、残らず髑髏へ浸み込みしは、もしや同氣同性の、由緣の人の頭なるか。

藤内　すりや、その髑髏へ

ト立寄るを、立廻つて手早く髏髑を懐中し

彌陀　請け狀がはりのこの髑髏。下郎め慥かに

栗平　ウヌ。

トかゝるを、見事に立廻つて

彌陀　お貰ひ申すでござりませう。

ト思ひ入れ。暮れ六つの鐘鳴る。

藤内　見所のある下郎三平、屋敷へ參れ、推擧しようワ。

彌陀　萬事よろしくお執りなし

天南　すりや、この者を藤内樣、お抱へなさる。

栗平　御所存か。

藤内　ハテ、其許も御覽の通り、何かの役に立つべき若者。屋敷へ留置なした上、殊によつたら

彌陀　ヤア。

藤内　是非とも身共が推擧いたさう。

彌陀　よき上取りに下郎めも、安堵いたしてござりまする。

天南　然らば愚老はお別れ申さん。藤内樣には、直樣これより

藤内　右のあらまし物語らん。栗平は天南老と同道なし、必ずともに、合點か。（ト思ひ入れ）。

栗平　承知いたしてござりまする。

彌陀　この三平はお跡から、然らば淺山藤内樣。

藤内　三平、必ず待つてゐるぞよ。

ト合ひ方、時の鐘になり、藤内、天南と顏見合せ、思ひ入れあつて藤内は向うへ、天南は栗平を連れて下座へ入る。彌陀次郎殘つて

彌陀　首尾よく敵鐵山が、屋敷へ入り込む好き手蔓。それにつけてもこの髑髏、いよ〳〵父の（ト懷中より取出し、思ひ入れあつて）變り果てたる

トこれにて雨車。こなしあつて

アヽ、折悪い俄雨、幸ひのこの辻堂。雨の霽れ間を

ト堂の戸を明けんとする。錠おろしあるゆゑ、思ひ入れあつて

こりや、辻堂に錠のおりたは、ハテ、何とやら。（ト向うに人音するゆゑ、キツと見て）ドリヤ、木陰でなりと、雨の霽れ間を

ト上の方、稲村の蔭へ入る。矢張り時の鐘、雨の音烈しく、向うより赤合羽の中間、箱提灯を持ち、中間二人、男の乗り物を擔ぎ、紙合羽の侍ひ附添ひ、多々平、赤合羽の形にて、挾み箱を引ツ抱へ、足早に出て來り、本舞臺よき所へ乗り物をおろし、侍ひ、庭下駄を直す。駕籠の中より鐵山、大小にて出て來り、思ひ入れする。侍ひ心得、辻堂へおろしたる錠を明け、片扉明きかゝる。鐵山、縁先に腰をかけ、内を覗き

鐵山　ヘイ、幸崎、云はねば今夜も指一本。もう明日で十本は皆落すが、これといふも正しく雌龍の印は、われが盗んで隠しつらん。サア、有り様にぬかしてしまへ。

ト堂の内にて苦しげなる聲する。鐵山、思ひ入れあつて

しぶとい女め。知らぬとぬかすか。うぬは正しく三太夫が娘、この鐵山を親の敵と入り込みつらんと、この辻堂へ引き出して、憂き目を見するもおのれが素性、巳の年月揃ひし生れゆゑ、指一本を巳年の女一人につばめ、武將宣下の土器へ、數も十枚、十本の、指の血汐を土に混じて作らば、義政調伏疑ひなし。今宵で九本、明日はおのれが命の寂滅。

ト刀を拔き、堂の内へ入る。堂の内にて物騒がしく、バッタリと音して鐵山、血刀と、切つたる指を持つて出て來り、刀を拭ひ、鞘にをさめ、指を紙に包み、袂に入れ

多々平、用意の挾み箱。

多々　ハツ。

ト挾み箱の中より、以前の抱き子を簀卷きにし、これに石を附けたるを出し、多々平、提灯を差上げ、堂の内へ見えるやうに川岸へ持ち行く。

鐵山　館に見えぬ雌龍の印、在所を云はねば、アレ見たか。おりくが産んだあの餓鬼は、小坂部太郎が悴であらう。野宿の里の土民に預け、育てると聞いたゆゑ、引ッ浚つてこの通りだ。印の在所をぬかさねば、この水底へ沈めにかけうか。

幸崎（堂の内にて）サア、それは、
鐵山　在所を云ふか。
幸崎　サア
鐵山　サア〳〵〳〵、どうだ。
幸崎　エヽ、知らぬ〳〵。（ト苦痛の聲。）
鐵山　ぬかさにやいつそ。多々平、ソレ。
多々　ハッ。

ト提灯を差上げ、よく〳〵見て、浪板の中へポンと打ち込む。子の泣く聲する。堂の内にて女の叫ぶ聲する。侍ひ、錠をシャンとおろす。

鐵山　これで心がさつぱりした。明日の夜が命の寂滅。（ト駕籠へ乘る。）
皆々　鐵山樣。
鐵山　コリヤ……乘り物、やれ。

ト捨て鐘、合ひ方になり、家來、乘り物を擔ぎ、鷹揚に向うへ入る。この内、稲村の蔭より彌陀次郎窺ひゐて、跡を見送り、ツカ〳〵と出て

彌陀　今のは正しく淺山鐵山、忍び來りしあの乘り物。殊に流れへ沈めにかけし、あの幼子の樣子とい
ひ、さるにてもこの辻堂にて、女の叫ぶ聲するは、ハテ、訝かしい。

ト思ひ入れあり、駈け寄つて、錠を捻ぢ切り、内へ駈け入り、介抱して引出す。幸崎、やつれたる腰
元姿、色蒼ざめ、荒繩にて兩手を縛られ、九本の指を切られ、兩手より血流るゝを舞臺へ連れ來り、
月あかりに透し見て

ヤヽ、あなたは姉上、幸崎樣。縛め置きしこの深手は、さては淺山鐵山が

ト無念の思ひ入れにて、幸崎の縛めを解き

幸崎　弟、三平、口惜いわいのう。
心を慥かに、コレ、姉者人。

彌陀　御尤もでござりまする。して何故にこの有り樣。

幸崎　この身を三太夫の娘と悟り、巳の年月の事までも、よつく知つたる淺山鐵山。指十本を十人に譬
へ、武將宣下の十枚の、土器へ血汐を混じ、義政公を調伏と、惡に凝つたるあの鐵山。

彌陀　して、雌龍の印の在所は

幸崎　あの鐵山が隱せしゆゑ、心を附けてやう／＼と取返し、人知れず隱し置く。それを云へとて夜

毎の責め。殊に腰元おりくといふは、主人の姫君、小坂部太郎と云ひ交し、仲に儲けし幼子の、在所を尋ねてたつた今、あの水底へふしづけに、いとしや和子をやみ／＼と。

彌陀　すりや、鐵山が沈めにかけしは、主人の若君。エヽ、しなしたり、殘念な。それに附けてもこの髑髏、只今これにて手に入りしが、この三平が眉間の血汐、浸み込む不思議はこれ正に、父の無念のこの白骨。疑ひ晴らすは姉上の、流るゝ血汐をこの中へ

ト髑髏を出し、幸崎が指より滴る血を受けて試みる。これも同じく髑髏へ浸み込む。

さてこそ血汐の浸み込むからは、疑ひもなき父の白骨。

幸崎　ナニ、その白骨が親人とや。エヽ、親子今際の髑髏の對面。これにつけても怨みは鐵山。どうで存命叶はぬ姉。身はこの儘に入水なし、和子の皮肉に分け入つて、菊地のお家を立てゝいで置かうか。

彌陀　イヽヤ、深手といひながら、養生加へてお前の一命

幸崎　イヤ／＼、存命思ひもよらず。この身を捨てゝ和子の一命

彌陀　して又、寶の在所はいづく。

トこのあたりより天南、栗平、出かゝり、窺ふ。

幸崎　雌龍の印は人知れず、あれなる蘆間に埋め置く。
彌陀　さてはあれなる蘆間に隱し
天南
栗平　三平、うぬを
　　トかゝる。二人を相手に立廻りのうち
幸崎　南無阿彌陀佛。
　　ト本水へ見事に飛び込む。彌陀次郎驚き
彌陀　ヤヽ、姉上には早まつて
天南
栗平　うぬを
　　トかゝるを見事に當てる。兩人倒れる。彌陀次郎、川端へ駈け寄り
彌陀　せめて水死の亡骸を。
　　ト時の鐘になり、蘆間に立ちし卒堵婆を取つて、波板を尋ね、幸崎の死骸を引き上げ、介抱して
　コレ、姉者人々々々。縡は切れたか、口惜しい。これも誰ゆゑ、淺山鐵山。
　　ト向うを見て、キッとなる。栗平心附き、起上がつて
栗平　證據の白骨、おれが貰つた。

ト白骨を取つて駈け出す。彌陀次郎やらじと立廻り、栗平は一散に逃げ出し、彌陀次郎追つて　下座へ入る。これより薄ドロ〳〵、寐鳥、物凄き合ひ方になり、水の中より幸崎の亡魂、以前の抱子を抱へ、忽然と現はれる。この時、本雨降り出す。これにて天南、雨水をのみ、心附きたる體にて起き上がり、捨ぜりふにて幸崎の姿を見て、恟りして腰をぬかす。幸崎の亡靈、抱き子をいろ〳〵と介抱し蘆間へゆき、埋めし印を取り出す。抱き子せかるゆゑ、いろ〳〵介抱し、印を口に咬へ、川の中へ小用をやり、いろ〳〵して、蘆間の中にて抱き子の顏を見て、涙にむせぶ思ひ入れ。このうち天南、始終慄へてゐる。バタ〳〵にて彌陀次郎、栗平と立廻りながら出て來り、天南も起き上がつてかゝるを、彌陀次郎、見事に二人を切り倒す。抱き子しきりに泣く。彌陀次郎、この聲を聞き、蘆間をキツと見返る。幸崎の亡靈、子を抱いてスツクと立つてゐる。

彌陀　ヤヽ、さては中有に、

ト大ドロ〳〵。彌陀次郎、持つたる刀を捨てゝ手を合す。煙硝火立つて、幸崎の亡靈、子を抱きたるまゝ、東の方を中乘りにて眞直に行く。暫くドロ〳〵。よきキツカケにて、ひやうし、

幕

幕の外を幸崎の亡靈、向うへかゝり、中の間へ切れて揚げ幕へ入る。ドロ〳〵打ちあげる。すぐにシヤギリ。

播州皿屋敷の場

役名――淺山將監鐵山。幸崎の亡靈。舟越三平實ハ彌陀次郎。淺山藤内景信。安達郡八。奴、多々平。同、彌太平。牟禮一角照光。腰元、おりく。賤の女、お種。

本舞臺、三間の間、上の方に誂への障子屋體、振りよき柳の大樹、植込みの庭先、栗丸太の井筒、下草しげり、正面二重舞臺、緣側附き障子、向う張り物、鼠壁、裾通りみの張り、床の間、違ひ棚、瓦燈口、よき所に時計をかけ、下の方枝折り戸、手水鉢、石燈籠、萩垣、すべて播州皿屋敷、誂への道具。爰に藤内、麻上下、大小にて立ちかゝりゐる。多々平、彌太平、奴にて、お種を引き立てゐる。おりく、振り袖の腰元にて、井筒の石臺に秋草を植ゑ、これに附きし蟲を竹箸にて拾うてゐる。琴唄にて幕明く。

彌太 女め、下がらぬか／＼。

藤内 ヤイ／＼、女め、見苦しい態をして、淺山鐵山が庭先近く、アヽ、うぬは氣ちがひだな。

たね アイ、氣も違はいでかいな。預かり者の大事のお子、連れて逃げたは、コレ／＼、この奴どの、サア、こなさん、あの子を返さんせ／＼。

多々 イヤ／＼、おらァ知らない／＼。とんだ事を云ふ女だわえ。

たね　イヽヤ、さうは云はさぬ。こなさんが連れて走つたゆゑ、附け込んで來たこのお屋敷。早くあの子を出して下さんせいなア。

りく（お種を見て）ヤ、こなさんは、津の國野宿の在所、あの子を預けた

たね　お種でござりまするわいな。

藤内　して、腰元おりく、わりやこの女を存じて居るか。

りく　アイ……イヽエ、知らぬ女中でござりますわいな。

藤内　さうであらう。よもや知つたとは云はれまい……コリヤヤイ、女、此方にても餓鬼とやら、決して存ぜぬ。知らないぞ。

りく　コレ、在所の女中さん、わしやお前とは、つひぞ逢うた事もないが……近附きでもござんせぬが朋輩の幸崎どのが、懇ろに噂のあつたこなさんゆゑ、知らぬでもなし、知つたでもなし。して、お前は、マア、何しにこのお屋敷へ。

たね　サア、大それた事でござんす。さるお人から預かつた大事のお子を

りく　あの子といふは、アノ兼若を

藤内　存じてゐるか。

りく　イヽエイナア、何しに存じませうぞいなア。

たね　サア、その預かつた幼子を盗みに來たは、コレ〳〵、この奴どの。附け込んで來たこのお屋敷。早うあの子を返して下さんせいなア。

りく　そんなら里子の兼若を、アノ云ひ附けて、このお屋敷へ……それに附けても幸崎どの、戻つて來ぬも十日あまり、その幼子の樣子も見えぬは、どうも合點の（ト思ひ入れ。）

藤内　われが云ふ通りこの家に、餓鬼の沙汰もあるまい。殊に家出をひろいだ幸崎。そりや彼奴が仕業であらうワ。

りく　藤内樣の仰せなれど、どうしてマア幸崎どのが、あの幼子を……これには深い樣子がなけりや叶はぬわえ。

ト思ひ入れ。時計の五ツ打つ。てんつゝになり、郡八、足輕にて棒を突き、「下がれ〳〵」と制して出る。彌陀次郎、一本差しの奴の形にて、先へ立ち出て來り、花道にて

郡八　下がれ〳〵、下がれといふに。

彌陀　これはしたり、私しは藤内樣の御推擧によつて、御奉公に上がりました、三平と申す下郎、胡亂な者ではござりませぬ。お通しなされて下さりませ。

郡八 イヤ〳〵、今日は都よりお使者の御入來。胡亂な奴だ、下がれ〳〵〳〵。

ト制しながら本舞臺へ來る。

藤内 ヤイ〳〵、郡八、騷がしい、何事だ。

郡八 ヘイ〳〵、只今御門をこの者めが

彌陀 ヘイ〳〵、私しでござります。藤内樣、お詞に任せまして、只今上がりましてござりまする。

藤内 其方は昨日奉公を望みし、三平ではないか。

彌陀 ヘイ、左樣でござります。今朝未明に上がりまする筈のところ、何かに紛れ、只今やう〳〵上がりましてござりまする。コレ、部屋頭、これから隨分心安く賴みますよ。

郡八 ア丶、そんならおぬしは、いよ〳〵このお屋敷へ御奉公に上がつたのか。ハテ、蓼食ふ蟲も好き好きだ。噂にも聞いたであらうが、人使ひといつては、評判のこの皿屋敷。

彌太 コレ〳〵頭、どうしたものだ。

郡八 ヘイ〳〵、人使ひのよいお屋敷でござりまする。

たね サア、藤内樣とやら、お屋敷へ附け込んで來たからは、早うあの子を返して下さんせいなア。

藤内 ヤア、武士たる者へ云ひかけをする下素女めが。その息の根を

ト立ちかゝるを　彌陀次郎とめて

彌陀　アイヤ、女中は慥か。

たね　野宿の里の種でござんす。さういふお前は幸崎さんの

彌陀　アヽコレ。(ト思ひ入れ。)

藤内　そんなら三平、これなる女を存じて居るか。

彌陀　アイヤ、知らぬ在所のその女、何かあなたのお心に、違へた樣子と存じたから、出過ぎた事とは思へども、おとゞめ申した藤内樣……コレ、女中、粗忽があらば幾重にも、早くお詫びをしたがよい。

りく　慥かにそれとは知らねども、もしや乳人の

彌陀　アモシ、下郎は即ち今參り、まだ御勝手も知りもせぬ、このお屋敷の初奉公……朋輩衆、心安く賴みますぞえ。

ト思ひ入れある。時計の五ツ半を打つ。向うにて「お使者」と呼ぶ。皆々思ひ入れ。

藤内　使者の入來は、慥かに武將の御土器。

りく　受取る役目のお使者なるか。賤の女中は、マア、奥へ。

たね　イヽエ、わたしはあの子の詮議。
藤内　慮外な奴だ。
りく　コレ、お前は幸ひわたしが部屋へ。
郡八　その附け人はこの郡八。
たね　おりくさん
りく　わたしが部屋で
呼び　お使者――、

ト呼ぶ。太鼓入り謠になる。お種、郡八、多々平、彌太平附いて下座へ入る。皆々舞臺へ並よくゐならぶ。向うより一角照光、麻上下、大小にて出て來り、直に本舞臺へ來る。

一角　義政公よりの使者、牟禮の一角照光。役目でござれば、罷り通りまする。
藤内　イザ〳〵、あれへお通りあられませう。
一角　許しめされい。

ト上座へ通る。藤内、思ひ入れあつて、

藤内　今日、お使者の御入來は、定めて武將より仰せ下りし、御土器お受取りのお使者ならん。一角ど

近頃御苦勞千萬に存じまする。のには遠路のところ、御苦勞千萬に存じまする。

一角　これは〳〵、鐵山どのゝ御舍弟、藤内どの。使者の拙者をお出迎ひ、近頃御苦勞千萬に存じます

る。

彌陀（思ひ入れあつて）ヤ、あなたはこの程、小幡の里にて

一角　その節面談いたしたる

彌陀　廻國修行の

一角　ア、コレサ、その節逢うた其方は下郞か……ハテサテ其方は、鐵山どのに御奉公を致すか。

藤内　お使者には、只今拙者が申した通り、御土器をお受取りの、そのお使ひでござるかな。

一角　いかにも、今日今宵夜中の使者は、右の一條。承れば當家の筋目、淺山の御先祖は、先年尊氏公の御代、南天竺より大唐へ渡つて、應量器（？）となづけ、殘塘（？）の東坡模樣を描き、燒き改め、その後日本へ渡りしゆゑ、唐繪の皿と名く。その頃先祖は、都深草にあつて、唐繪の皿の寫しを拵へ、武將へ差上げ、その恩賞として、この播州を領地に賜はり、親鐵山より當所に住居す。さるによつて、播州皿屋敷と世に云ひなす。然るに義政公の御心に違ひ、山名どのゝ執り成しにて、この度武將の富下の砌り、數十枚の土器を、鐵山自らこれを作り、差上げよとのお指圖に、

この由申し聞けんため、わざ〳〵參つた牟禮の一角。使者の口上、あらまし斯くの通りでござる。

藤內　お使者の口上、逐一承知仕つてござりまする。兄鐵山にも申し達し、早速お請け仕るでござりませう。腰元りくは右のあらまし、兄鐵山へ申してよからう。

りく　畏りました。

ト立たうとする。障子の內にて

鐵山　將監鐵山、それへ參つて、お使者に面談仕るでござりませう。

ト唄になり、上の屋體、引き拔きにて障子開く。內に鐵山、羽織衣裳にて、上の方に誂へ土器燒きの塗り垂れの竈、土器を燒く道具、素燒の土器十枚、棚に飾り、居間へ注進を張り、土器十枚を手作りの體。鐵山、燒き上げし土器へ火を打ちかけ、平舞臺へ來り

こは恐れ入つたるお使者の御入來。管領よりの只今の仰せ、鐵山あれにて、逐一承知仕つてござりまする。いよ〳〵今宵子の上刻、武將宣下の御土器、成就淸めの切り火仕つて、差上げまするでござりませう。

一角　早速のお受け、使者に參りし拙者も滿足。然らば今宵九ツまで、奥にて照光、相待ちまするでござりませう。

鐵山　見苦しけれど別間に於て、御休息下さりませう。
彌陀　すりや、お使者には御土器、子の刻までに御持參とな。アノ、仔細ある十枚の
鐵山（彌陀次郎を見て）見馴れぬ下郎、そちや何者ぢや
彌陀　ヘイ、下郎は今日お屋敷へ有り附きましたる、三平と申す二合半でござりまする。
鐵山　アノ其方が、弟藤內が推擧せし、三平と申す下郎か。
彌陀　なかなか左樣。して、殿樣が當家の主、淺山將監鐵山樣、只今からは下郎めが、お主と崇める旦那樣、思へば無念口惜しき、あなたのお面見る度に
　　　ト怨めしげなる思ひ入れ。鐵山見て
鐵山　ハテ、いぶかしき下郎が振舞ひ。眼に涙浮べし顏色。今日よりして身が扶持を、喰ふ身分でありながら、何の怨みに、身共に向つて
彌陀（氣を替へ、思ひ入れあつて）アイヤ、只今よりは御主人。傳手もあらばと今日が日まで、願ひに幸ひこのお目見得。冥加至極と存ずるゆゑ、ツイ思はずも嬉し涙が
鐵山　アノ、其方が
彌陀　ヘイ。

鐵山　今より身共に奉公するか。
彌陀　願うてもなき御主人樣。
鐵山　しかと左樣か。
彌陀　ナニ僞りを申しませう。主人の仰せ、何なりと
鐵山　致す所存か。
彌陀　なか／＼左樣でござりまする。
鐵山　戀を執り持て。
彌陀　エ。
鐵山　主の詞を背かずば、奉公はじめに鐵山が、年にも似ざる色の道。役目首尾よく勤めた上、身共が戀の執り持ち致せ……と申すもお使者お聞きの手前。面目次第もござりませぬ。
彌陀　すりや、下郎めに、戀の執り持ち致せとな。して又あなたの戀人は。
鐵山　それに控へし腰元りく。
りく　エヽ、私しへ勿體ない。現在お主のあなた樣。
鐵山　これまで口外いたさねど、疾より其方に身は執心。

彌陀　いよ〳〵これなる腰元の
鐵山　素性知れざる女ゆゑ、惚れたばかりか、身許の詮議。
彌陀　アノ、私しが、身許の詮議を
藤内　兄貴の惚れたは表向き、身許を尋ぬる詮議の起り。
一角　して、鐵山の手廻りにて、召し仕はるゝその女、何の疑ひ、何故詮議を
鐵山　菊地が餘類と思ふゆゑ。
彌陀　エヽアノ、この女中を
りく　菊地の身寄りと
鐵山　サ、明けてそれぞと云はぬが花。蕾みの花の菊地が娘。
りく　エヽ。
鐵山　それゆゑ惚れた。その身の素性、明し聞かすか但し又、戀の返事を致すか、女。それ聞く役目は
下部三平。
彌陀　奉公始めに下郎めが、きつと返事を致させませう。
一角　何か樣子のありさうな。今宵に限つて女の返事は、今宵の子の刻。

鐵山　九ツまでに御土器
藤内　差上げまするそれまでは
一角　奥の別間で相待ち申さう。
りく　すりや、どうあつても、わたしが素性を
彌陀　ハテマア、何事も旦那の仰せを請けたこの三平、下郎任せに、御合點か。
鐵山　然らばお使者は暫らく休息。
一角　案内おしやれ。
藤内　イザ、御同道
鐵山　下郎、役目を云ひ附けたぞ。
ト唄になり、鐵山、上手の障子屋體へ入る。一角、藤内、正面の口へ入る。おりく、三平殘る。あと合ひ方。
彌陀　サア、今聞く通りだ。腰元のおりくどの、新參の三平が、今日からしては犬も朋輩、たかの知れたる奴らさ、二合半の身分でも、重いは主人の今の仰せ。こなさんの身にとつては、有り難い事とお請け申し、鐵山樣へ色よい返事を

りく　イエ〳〵、そりやこなさんの云はんす事なれど、女子と生れて一生に、定まる夫は只一人。いかにお主の仰せぢやとて、どうしてマア、あなたにこの身が任されませう。三平どのとやら、必ずともに、この後とても

彌陀　そんならこなたの氏素性、菊地の息女と名乘らつしやい。

りく　コレ、滅相な。どうしてわたしが、菊地とやらいふ武士の、なんで娘でござんせう。わたしは筋なき土民の娘。

彌陀　筋なき土民の娘なら、この上もなき身の幸ひ、鐵山樣へ隨つたら、そこが女は氏なうて玉の輿。

りく　イヽエ、わたしには夫がござんす。いとけない時云ひ號け、杯せねど云ひ約束。一旦定まる男のある身。

彌陀　こなたの定まる夫といふは、小坂部太郎といはうがや。

りく　ナニ滅相な、三平どの、どうしてわたしが、そのやうな男を

彌陀　未だ杯せざれども、二人が仲には兼若といふ、一子がござらうがや。

りく　どうしてわたしにそのやうな、

彌陀　無いとは云はさぬ、奥にゐる、野宿の里の賤の女に、預け置いたる兼若丸。こなたの素性は、先

ノ 頃亡び失せたる、コレ（ト縁先の夏菊の石臺を取つて、おりくが前に置き）この石臺の夏菊は、今を盛りと開けども、開かぬ運の菊地の一族、小坂部姫と御本名、お名乘りなされて下さりませ。

りく （思ひ入れあつて）心ありげな三平どの、この一本の夏菊を、わたしに見せ、菊地の餘類とうらどひ事。殊にわたしに子まであるとは、覺えなき身のこのおりく。本名實名あるやうな、女子ぢやござらぬ。三平どの、疑ひ晴らして下さんせ。

彌陀 すりや、これ程に申しても、お明しなされぬ上からは

ト思ひ入れあつて、おりくが帶を捕へ、ぐつと引寄せ、抱き附かうとする。上の屋體より、藤内窺ふ。

りく アヽコレ、何をなさんすぞいなア。

彌陀 何をするとは、わしはこなさんに惚れたからよ。

りく エヽ、アノこなさんが、わしに

彌陀 朋輩同士の轉び合ひ。惚れまいものか、おりくどの、主人に返事がならぬなら、この三平に色よい返事を、聞かせてはくれまいか。

りく 御主人さへも返事せぬ、わたしを捕へてこなさんが、返事せいとは眞實か、但し浮氣か三平どの。

そのこなさんの善惡の、心の底を見た上は
彌陀　返事をさつしやる心なら、心中見せう。
りく　エ、アノ、こなさんが
彌陀　心中見せう。その心中は夏菊を、植ゑし井筒のこの石臺、菊の花びら切らずして、この三平が左の小指。

ト菊の石臺の縁にて、見事に小指を切り落す。おりく驚き、駈けゆくを引とめる。立廻りに彌陀次郎以前の髑髏を懷より落す。おりく見て

りく　ヤ、こりやこれ白骨。

ト思ひ入れ。彌陀次郎、手早く取つて、左の小指の血を絞り、白骨にかけ、きつと差しつける。切つたる小指は、藤内の前に落ちる。藤内拾ふ。

彌陀　菊地の家の忠臣たる、俗名舟越三大夫、變り果てたるこの髑髏。
りく　すりや、その髑髏は、菊地の一類
彌陀　父にて候ふ三大夫。拙者は實の悴にて、その幼名は彌陀次郎、いま世を忍ぶ舟越三平。僞りならぬ小指の血汐、髑髏に浸み込むこの不思議、これにて疑ひお晴らしあれ。主從三世の姬君樣、お

名乘りなされて下さりませ。（トきつと思ひ入れ。）

りく（こなしあつて）さては敢へなく世を去りし、三太夫が髑髏とや。また其方は實の悴、乳人幸崎が一人の弟、彌陀次郎時綱であつたか。

彌陀　サ、只今仰せ下されし、姉幸崎は果敢なき最期。野宿の里に假り寝ある、その幼子の隠れ家も、松は根方を洗はれて、悲しや和子も鐵山が、邪險の淵にふしづけの、敢へなくおなくなりなされました。

りく　ヤヽ、すりや自らが云ひ交せし、太郎樣の御胤たる、あの兼若も、幸崎もろとも殺害せしはこの家の鐵山、父の敵も淺山兄弟。

彌陀　して又其方が實の親、三太夫が奪はれし、雌龍の印の在所はいづく。

りく　サ、それを聞かんず隙もなき、鐵山一味の惡黨ばら、さゝふるその間に姉幸崎、水に溺れて相果つれば、詳しさ在所もいたづらに

彌陀　雌龍の印のその行くへ、知れざる內はいつまでも、叛逆謀叛の汚名をとり、義政公への申し譯。

りく　立たねばお家はいつ迄も

彌陀　日蔭に植ゑし菊地が一類。

彌陀　開く時節も情なや
りく　八重九重に咲きもせで
彌陀　盛りの夏も霜もろとも
りく　消えて跡なき、
彌陀　お家の成行き。お姫様
りく　三平、是非もなき世の
兩人　有り樣ぢやなア。

ト兩人互ひに思ひ入れ。よき時分に後より藤内出て、ツカ〳〵と寄つて、以前の小指を出し

藤内　不義の兩人、動きやァがるな。
彌陀　ヤア、こなたは御舍弟
りく　藤内樣、なんで不義とは仰しやりまする。
藤内　ぬかすな、女郎め。菊地が娘小坂部姫、三平こそは彌陀次郎。鐵山どのを玉にして、この緣先にてどれあふ樣子。證據といふは心中に、切つたる指は舟越三平、われが小指であらうがな。
彌陀　サ、それは

藤内　この由、兄の鐵山に、詳しく語る、證據はこの指。
彌陀　ヤヽ、それを
藤内　待つてけつかれ。（ト障子をシヤンと閉す。）
彌陀　あの小指、藤内に拾はれては……イデ、踏ん込んで取返さん。
りく　アコレ、もし誤つて其方の身に
彌陀　氣遣ひあるな、姫君樣
りく　次郎時綱
彌陀　イデ、藤内に
ト合ひ方になり、跡を追つて奥へ入る。おりく、跡見送り
りく　アコレ、拾ひし小指を、どうぞ首尾よく
ト奥の方を見て窺ふ、人音するゆゑ、思ひ入れあつて、行燈を吹き消し、小蔭に窺ふ。奥より多々平彌太平、窺ひ〳〵出て來り
彌太　コレサ多々平、おぬしはこの彌太平に、何を頼むといふのだ。
多々　イヽヤ、外の事でもねえ。おぬしも聞いてゐる、野宿の里のあの女め、餓鬼を返せとせちがふゆ

ゐ、うるさくつてならねえワ。おらはこれから堺川まで一走り、餓鬼の樣子を見屆けてくる。跡はおぬしに賴んだよ。

彌太　氣遣ひするな。跡はおれが呑み込んだ。して、今夜もこれなる拔け井戶から

多々　ハテ、この拔け井戶を拵へたも、お旦那の思ひ附き。密事の御用とある時は、通路自由なこの井筒。

彌太　必ず人に見附かるな。

多々　合點だ。

ト捨て鐘にて、多々平、井筒の中へ忍び込む。彌太平は奧へ入る。おりく、始終、後に窺ひゐる。このうち上の障子を明け、一角これを見てゐて

一角　すりや、鐵山が庭先の井筒は、通路の拔け道なるか。ハテ、あくまで根強き

トこの聲を聞き、おりく窺ふ。この時、時計の四つを打つ。一角、思ひ入れあつて

ありや後夜の時計。子の刻までにはもう一時。ハテ、夏の夜は

ト思ひ入れあつて、シヤント障子を閉す。

りく　今のお聲は、慥かにお使者の一角樣。

トためらふ。この時いづくにてか、赤子の泣く聲する。おりく、聞き耳立て

ハテ、合點のゆかぬ。この屋敷にて、耳馴れぬ幼子の泣く聲。アヽコレ、子を持つた身では、身につまされて、もし兼若でも來はせぬかと、思ふその子は情ない（ト思ひ入れあつて）アヽコレ、暗うて黒白がわからぬ。どうぞ灯を。オヽ、それ〳〵、この庭先に、御土器に打ちかけし、慥か火打ちが、

ト火打ち箱を尋ねて火を打つ。こゝにて物凄き合ひ方、薄ドロ〳〵、寐鳥になり、心火燃えて、行燈の中より幸崎の亡靈、以前の子を抱き、ほつと現はれ、行燈を離れ、舞臺へ來ると、行燈にほつかりと灯ともる。おりく、不思議さうに思ひ入れあつて

灯を附けうと思うたに、いつの間にやら行燈の灯。さもほのくらき物蔭にて

トこの時、子は頻りに泣く。

アレ〳〵、又も頻りに幼子の泣くはいづく（トあたりを尋ね、幸崎を見附け）ヤ、そこにゐやるは誰ぢや、何者ぢや。コレ、いま泣いた幼子の、あの聲は……アヽ、抱いてござんすその子かえ。して、お前は誰ぢやえ……エヽ、すりやわが身は、乳人幸崎。ほんにマア、十日あまり見えもせで誰が子をそのやうに大事にかけて……ヤヽ、このお子はお前のお子、野宿の里へ預けてあつた、

兼若様……ヤヽ、そんならその子は息才でかいな。エヽマア、あの三平とした事が、其方も幼子も、鐵山が爲に死にやつたと、たつた今、眞顔になつて云やつたが、もしや其方は

ト幸崎、哀れ氣に涙にむせぶ。おりく、これを見て、怖氣立つたる思ひ入れあつて

ヤヽ、そんならこなたは世を去りし、幸崎が靈魂、再び迷ひ來て……ヤ、この兼若は鐵山が沈めにかけしを助け上げ、渡さん爲に來りしとや。ヤヽヽ、かねて鐵山、叛逆の根ざしあるによつて、山名に與なし、巳の年月時日揃ひし、其方の指を十日に切り、十人の數を一人につばめ、その生血を土に混じ、十枚の土器を作り、義政公へ捧げ、武將を調伏疑ひなし。今宵子の刻、使者に立つたる牟禮の一角、持ち歸るその時は、武將の御身氣遣はしく、一枚たりとも不足せば、當日の儀式を妨げ、義政公の御身に恙なければ、菊地のお家再興を、草葉の蔭より願ふといふ、實義を現はす幸崎が、修羅の苦患の暇乞ひ、まみゆるものとの告げなるか。

ト幸崎の亡靈、思ひ入れあつて、抱き子を渡す。おりく、取上げ見て

すりや、この和子は我が子の兼若、恙ないのも其方の庇。エヽ、忝い。

ト幸崎の亡靈、懷より雌龍の印を取り出し、指なき手にて捧げ、思ひ入れにて渡す。

ナニ、これが雌龍の印とや。エヽ、忝い……この上は、其方の詞に隨つて、あの鐵山が居間へ忍

び、首尾よう土器盗み取り、使者の刻限妨げなば、武將の御身も恙なく。エヽ、忝い。

ト思ひ入れ。この時頻りに子は泣く。お種、出かゝりゐて

たね　ヤヽヽヽ、子の泣き聲は慥かに若樣。どうして爰へ（ト幸崎の亡靈を見て）ヤア、お前はこの世を去りしと聞く幸崎樣。情ない身にならしやんしたのう。

ト幸崎の亡靈、抱き子へ思ひ入れ。

ヤヽナニ、乳に餓ゑたる幼子とや。心得ました。

ト子を抱き上げ、乳をのませる。抱き子泣きやむ。幸崎の亡靈見て、嬉しさうにニッコリ笑ふ思ひ入れあつて

幸崎　アヽ嬉しや、和子を手渡しせば、思ひ置くこと早これまで。只なつかしいは弟三平、まみえんとは思へども、閻王の使ひしげくして、修羅の太鼓のアレノ＼ノ＼。今ぞあの世へ、姫君さらば。

トどろノ＼になり、幸崎の亡靈、正面の壁へかゝると、心火燃え、煙硝火パッと立つ。姿消える。おりく、泣き落す。お種、思ひ入れあつて

りく　南無阿彌陀佛。

たね　大切なる兼若君、わたしは早う住み馴れし、野宿の里へお供せん。

りく　成る程、又も將監が、目にかゝつては一大事。其方は早う
たね　心得ました。
りく　わしは將監鐵山が、居間へ忍んであの土器、盜んでなりと妨げん。必ずともにその若を
たね　氣遣ひあるな、おりく樣。
りく　其方は早う
　　　トよき時分、郡八窺ひゐて
郡八　女め、うぬを
　　　トかゝるを、お種、手早く郡八を當てる。タヂ〳〵となる。
たね　おさらば。
　　　ト早三重になり、お種、子を抱き、一散に向うへ入る。郡八心附き
郡八　程は行くまい。
　　　ト管絃になり、跡を追つて向うへ入る。おりくも思ひ入れあつて、雌龍の印を出し、あたりを見て
りく　邪智深き鐵山に、見附けられては又ぞろや
　　　トあたりを見廻し、時計を見附け

蟠龍の印を誓くも、隠し所は（ト掛け時計の箱を開け、手早く隠し、髑髏を見附け、取上げ見て）忠義の武士のこの白骨、せめて菩提の（ト懐中し、思ひ入れあつて）さうぢや。

ト管絃になり、上の障子をソツと明け、忍び込む。奥より奴大勢、彌陀次郎を取巻き、藤内附いて出て來り、彌陀次郎と立廻りあつて、奴を見事に投げ退け、キツとなる。

皆々　動くな。

藤内　すりや三平、手向ひか。

彌陀　イヽヤ、手向ひは致さぬ。この三平を家來に云ひつけ、野郎呼はりその上に、腰元おりくと不義あるとは、何を證據に藤内樣、下郎を不義と仰しやるのだ。

藤内　ぬかすな三平。新參者の身を以て、兄鐵山が心をかけ、閨の伽にと口說かせた、腰元おりくと不義密通、藤内しかと見屆けた。證據は即ちこの小指。われが左のその小指、切つてあるのが爭はれぬ。キリ／＼白狀してしまへ。（ト以前の指を出し、差しつける。）

彌陀　イヽヤ、小指は切つたりとも、不義密通の覺えはござらぬ。

藤内　覺えないとは云はさぬ／＼。かゝる證據のある上は、不義の成敗。繩打つてその首刎ねる。腕まはせ。

ト彌陀次郎へかゝる。立廻り。この時一角、ツカ〳〵と出て、藤内を引附け、彌陀次郎を圍ふ。家來、バラ〳〵と下座へ入る。

一角 藤内どの、まづ控へめされい。

藤内 こりや牟禮の一角どの、不義の下郎を成敗いたすを、なんで貴殿はとめさつしやる。

一角 とめましたは、貴殿のお爲。

藤内 とめるを身共が爲とはな。

一角 申さずとも、貴殿にも御存じならん。今宵の子の刻、九ッの時計打つまでに、數十枚の土器を、受取り歸るは身が役目。不淨を禁ずる今日今宵、下部を手討ちにおしやつては、血汐の穢れ恐れあり。それゆゑ一角照光が、おとゞめ申した。藤内どの、これでも拙者が誤りかな。

藤内 サア、そりやア

一角 あまり惡くはあるまいかと存じまする。

藤内 イヽヤ、その血をあやした下部ゆゑ、繩打ちまするが誤りかな。

一角 すりや、この下部が血をあやして

藤内 場所辨まへぬこの心中、腰元おりくと不義働き、指まで切つたが慥かな證據。これでも貴公はお

とゞめなさるか。

一角　サ、その儀は

藤内　サア。

　　トこの時、時計は四ツ半を打つ。

一角　ヤヽ、ありやもう後夜半。いま半時が義政公へ、御土器を持參の刻限。

彌陀　今打ちしは早後夜半。その土器は情なや、巳の年月の揃ひの女の

藤内　ヤ、なんと。

鐵山　(障子の内にて) 怪しい女め、そこ動くな。

　　トばた／＼になり、障子を蹴はなし、内よりおり／＼、土器を一枚懷中して出て來る。後より鐵山、白木の箱に内曇りの土器九枚入れ、最前の髑髏を持ち、追ひかけて出て來る。逃げゆくおり／＼を、藤内押へる。

一角　こりや鐵山どの、あわたゞしいその振舞ひ。それなる女が、なんぞ無禮を致したかな。

鐵山　そのおまめこそ大それた、武將宣下の御土器、數十枚のその内を、一枚盜んだ横道者、それゆゑ捕へて詮議いたす。

彌陀　イヤ、憚りながら旦那樣、よもやこれなる腰元おりく、益なき品を盗まんや。そりや殿樣の、お
覺え違ひでござりませう。

鐵山　默れ三平。新參の身を以て、いらざるわれがかばひ立て。コレエヽ、眼前箱の土器が、一枚不足
いたして居る。正しく女が懷に

ト立ちかゝるを、彌陀次郎、おりくを圍ひ

彌陀　イヤ、御土器の盗人は、こりや外にござりまする。

鐵山　外にあるとは何者だ。

彌陀　外でもござらぬ、斯く申す、新參者の二合半、この三平めでござりまする。

りく　アヽコレ滅相な。なんで其方が盗み取らうぞ。この世を去りし幸崎が、死靈の數へ、義政公を、
調伏呪詛の御土器、一枚たりとも不足せば、その日の式を妨ぐる。

彌陀　さては世に亡き姉者人、かゝる大事をしめさんと

りく　殊に我が子まで恙なう、我に渡して野宿の里へ。

彌陀　すりや、みどり子も存命にて

鐵山　さてこそ、樣子ありげな兩人。

藤內　御土器まで隱したは、腰元りくに極まつた。詮議しぬいて

ト立ちかゝる。一角とめて

一角　イヽヤ、藤內、まづ待たれよ。見れば將監鐵山の、携へ持たれしあの髑髏。不淨を禁ずる貴殿の別間、何故不淨のその品を、御持參あるぞ鐵山どの、この髑髏の樣子は如何に。

鐵山　この髑髏こそ御土器。盜みし奴のよき手がゝり。拙者の居間へ落せしが、この白骨を所持せし奴こそ、御土器の盜人サ。

彌陀　左樣ござらば鐵山樣、その白骨は下郎が所持。疑ひもなき盜人は、この三平めでござります。

鐵山　左樣なうては叶はぬところ。この白骨はわれが親、三太夫が髑髏であらうが。

彌陀　サ、それは

鐵山　雌龍の印を奪はれて、人手にかゝつてくたばつた、腰拔け武士のこの髑髏。鳶や烏の食ひあまり見るもなか〳〵、エヽ、いまはしい。（ト上手の井の中へ投げ込み）これにつけても下郎三平、最前われが請合うた、腰元りくが鐵山への、返事は如何仕つた。

彌陀　サ、その返事は

りく　なんで色よいお請けのマア

藤内　ならねえ譯は三平おりく、二人は不義に相違ござらぬ。證據は左のこの小指。（ト以前の指を出す。）

鐵山　さては指まで切つたるからは、三平、わりやア不義密通。

藤内　殊に武將へ差上げる、清めに清むる土器の、その手作りのこの屋敷を、血に穢したる云ひ譯あるか。

彌陀　いかにも云ひ譯ござりまする。あなたの目通り勤めたる、腰元の幸崎こそ、この三平が實の姉。生れ素性の年月時日、巳の年揃ひし女の生血、指十本を十日に切る、その心願にて九本まで、切れども殘り一本が、成就いたさず鐵山樣、さぞ殘念と存じたから、姉と同腹同性の、實の弟のこの三平、もしやお役に立たうかと、切つたる指は左の小指。それでは揃ふ指の數。なんと御用に立ちませうがな。

鐵山　すりや、幸崎が事までも

彌陀　堺川原の辻堂にて

藤内　それを知つたか。

鐵山　ハテナア。

藤内

一角　この一角は最前より、樣子詳しく聞きぬるに、何か仔細のある樣子。それは格別、明日に、極ま

る武將の御土器、受取り歸るは今宵の九ッ、その刻限も早半時。十枚揃ひし御土器、渡しめされい、鐵山どの。

鐵山 サ、それは

一角 この場の不足は私し事へ身共は受取り歸らねば、役目の表が濟みませぬ。この内譯、承はりたい。

鐵山 渡しまする。

一角 ヤア。

鐵山 十枚数が不足せば、疑ひかゝりし腰元おりく、彼奴が首討ち相添へまする。それ受取つて御前よしなに……弟藤内、女の首討て。

藤内 心得ました。

トおりくへかゝる。彌陀次郎、立廻つてキツととめる。

彌陀 下郎がお願ひ。

鐵山 **藤内** なんと。

彌陀 不足いたした土器の、せめては女が心ゆかし。今一應の箱の內、數改める猶豫の程、何卒お使者

のお情にて。
一角　こりや尤もなる其方が願ひ。最早受取る刻限ならん。たとへ命にかゝるとも、今一應の念晴らし、急いで數を改めい。
彌陀　すりや、お聞き濟み遊ばされて
りく　御箱の中の御土器、數を數へて十枚の、揃ふ時にはこの身に恙も（ト思ひ入れあつて）義政公のお爲となる、幸崎が教へにて、首尾よう隱して持ちながら
藤内　さてこそ女が懷中に
ト か ゝ る を 一 角 突 廻 し、件 の 箱 を 手 早 く 取 つ て、二 人 が 中 へ 差 出 し
一角　急いで數を改めい。
彌陀　委細畏つてござりまする。
織山　不足いたさば女が一命。猶豫いたすな、弟藤内。
藤内　心得ました。女め、キリ〳〵數を改めろ。（ト刀を拔いて立ちかゝる）
りく　改め見ても矢張り不足の
藤内　なんと。

一角　アヽコレ、急いで女、改めい。

りく　ハア。

ト泣き落す、柱の時計、キリ〳〵と音する。

皆々　ありやもう子の刻。

彌陀　コレ、早う數へて（ト箱の中より一枚出し）ソレ。

ト差出す。おりく取つて

りく　一枚。

ト下に置く。時計の頭を打つ。これより誂への合ひ方。

彌陀　ソレ。（ト差出す。また時計の二つ目を打つ）

りく　二枚。

ト彌陀次郎、取つて出す。時計の三ッ目を打つ。

りく　三枚。

ト彌陀次郎出す。四ッ目の時計。

りく　四枚。

ト始終このうち彌陀次郎取つて差出す。おりく、數に合せ、下に置く。この度々に時計の音する。

りく 九枚。

ト數を合せ、あとなきゆゑ悲しき思ひ入れ。藤內、刀を振り上げ、キツとなる。この時、薄ドロ〳〵になり、井の內にて心火燃える。捨てたる白骨、おのれと井の內より差し金にてめぐり來り、土器の箱の中へ落ちる。彌陀次郎、キツと見て

彌陀 すりや、親人の、

ト取上げる。ドロ〳〵にてこの白骨、內曇りの土器となる。皆々キツと見て

皆々 ヤヽ、十枚の

一角 揃ひし數の御土器

りく 不足なければ

一角 女、其方には科はない。

りく エヽ、有り難い。

藤內 怪しき土器。

鐵山 その一枚は慥かに女が

りく　すりや懷中の
藤内　女め、覺悟。
ト切つてかゝる。彌陀次郎立廻り、この時ドロ〱になり、虛空より魂ひ飛び來り、鐵山が上に落ちると、心火燃える。鐵山さし俯向き、茫然となる。
一角　ハテ、心得ぬ鐵山の
藤内　この體は。
ト鐵山、顏を上げる。女形の思ひ入れ。おりく見て
りく　ヤア、慥か其方は
トキツと見詰める。鐵山、おりくを捕へ、上手の井筒へ投げ込む。皆々見て
彌陀　ヤア〱、姬君を井の中へ
藤内　ナニ、姬君とは
ト立ちかゝるを鐵山、藤内が刀をもぎ取り、見事に藤内が首を打ち落す。
皆々　これは。
鐵山　氣遣ひいたすな、弟三平。

彌陀　ヤア、我を弟と鐵山樣の

鐵山　イヤ、自らは姉の幸崎。

彌陀　さてはこの世に亡き人の

一角　假りに淺山鐵山が

鐵山　五體をかりてこの場の難儀。

彌陀　されども姫を井の內へ

鐵山　イヽヤ、あれこそ通路の拔け道。姫の身の上、氣遣ひない。

彌陀　エヽ、有り難き御しめし。父の敵も姉上の、最期も淺山鐵山ゆゑ。

一角　やがてめでたう敵討。

鐵山　修羅の妄執晴らしてたも。

彌陀　いふにや及ぶ。さりながら、尋ね求むる雌龍の印。

鐵山　その御寶の在所は爰に。

ト時計の方を振り返る。ドロ／＼烈しく、心火、時計の上に燃え上がり、鈴の音を出し、箱の蓋ひらき、以前の印落ちる。彌陀次郎、手早く取上げ

彌陀　こりや失ひし雌龍の印。
一角　手に入つたるか。
彌陀　エヽ、忝い。
鐵山　最早この世に幸崎が、思ひ置く事さら〱ない。たゞ願はくはコレ（ト土器を取つて差出し）髑髏に殘る父の恨みと、この姉が
彌陀　敵は鐵山、討ちおほせ、修羅の迷ひを晴らさせ申さん。幸ひ爰に彌陀の尊像、我が實名も彌陀次郎、この御佛の、

ト懷中より尊像を出し、廚子の蓋を開く。大ドロ〱にて魂ひ飛び去る。鐵山が持ちたる土器、また元の髑髏となり、放心する。

一角　ヤヽヽヽ、又ぞろ淺山鐵山が
彌陀　氣絶なしたか。

ト思ひ入れ。この時、彌太平窺ひゐて

彌太　三平、捕つた。

トかゝるを、立廻りにて當てる。この物音に鐵山心附き、起き上がつて

鐵山　ヤヽヽヽ、今の女の行くへはいづく。（ト藤内の首を見て）ヤア、弟が死骸。こりや何奴が。

トきつとなり、無念の思ひ入れ。

一角　こりや鐵山どの、心が附いたか。

鐵山　貴殿は一角。さては身共は

一角　藤内どのを思はぬお手討ち。

鐵山　アノ、某が

彌陀　これも死靈の

鐵山　エヽ。

ト彌陀次郎へ切り附ける。ドロ〳〵になり、心火燃えて、鐵山苦しむ、彌太平、多々平、窺ひゐて

兩人　うぬを

ト皆々へかゝるを、一角、見事に切つて捨てる。鐵山、この太刀音に心附き、思ひ入れあつて

鐵山　すりや、土器と見えたるも

一角
彌陀　髑髏の不思議。

鐵山　ヤヽ。

ト又そろ、ドロ〳〵にて、心火立ちのぼる。三人キッと見て

三人　ハテナア。

ト虚空を見上げる。魂ひ飛び去る。この見得よろしく、ひやうし、

幕

おつま八郎兵衛（『彩入御伽草』二番目）

序幕　兩國鰻屋の場

役名——鰻屋、江戸ッ子八郎兵衛。鮫鞘新助假名扇朝。丹波屋、おつま。丹波屋助太郎。小旦那喜太郎。馬淵伴五郎。大場宗佐。古手屋三郎兵衛、中間、傳助。坂間新藤次。箱廻し、小助。

本舞臺、三間の間、鰻見世の體。上の方に障子屋體、門口に幟を立て、看板、行燈、勝手元に鰻船、よき所に八郎兵衛、浴衣の形にて鰻を裂いてゐる。おつま、夏衣裳、女房の形、立ち身にて鰻を燒いてゐる。座敷には客二人、酒盛りしてゐる。門口の隣は床見世の古着屋、いろ〱の古手を吊し三郎兵衛、古手屋にて呼びかけてゐる。すべて兩國古着店、鰻屋の體、楊弓の音、辻打ちにて幕明く。

ト若い者一人、古着の價を附けてゐる。

三郎　なん〱〱、もそつと召しませ。元が十三に附いて居ります。

若者　一貫百に買はう。

三郎　どう致しまして、餘程違ひまする……なん〱〱。

ト矢張り辻打ちにて、若い者捨ぜりふにて向うへ入る。おつま鰻を枠へ入れて客の前へ持つて行く。

つま　ハイ、これでお誂へ通りでござります。

客甲　アイ〳〵、今日はとりわけ好い魚でござつた。お内儀さん、一つあがらんか。

つま　ハイ、有り難うござりまする。私は一向に不調法でござりまする。

客乙　ハテノウ、町藝者をさしつたやうにもない。下戸でござるか。

客甲　イヤモウ、爰のお内儀がおつまというて、座敷へ出られてゐた時は、きつとした好い藝者でござつた。聟の八郎兵衛どのも、立派な好い男でござる。

客乙　これが誠に、お内儀の蒲焼ぢや。

客甲　ハヽヽヽ、サア歸りませうか。

つま　マア、ごゆるりとなされませいな。

八郎　これはあなた方、お構ひ申しませぬ。ごゆるりとなされまし。どう致してもこの間の日なみでは、よい魚がござりませぬ。今日のは如何でござりましたか。

客甲　イヤ、魚は旨うござつた。又この間に來ませう。

八郎　もうお歸りなされまするか。おつまや、お履き物を見て上げや。

つま　アイ〳〵

客乙　アレ、構はつしやるな〳〵。いつもながら、繁昌な見世でござる。

ト辻打ちになり、客二人向うへ入る。摺れ違ひに揚げ幕より宗佐、羽織袴、大小にて出て來る。はるか跡より喜太郎、やつしの形、下駄がけ、奉加帳を持ち、ぽん七、しみつたれたるやつしの形、剃り立ての坊主、俄聾の思ひ入れ、藁草履を穿き、出て來る。宗佐、三郎兵衞を見て

宗佐　三郎兵衞、見世におゐやるか。

三郎　これは宗佐樣、御苦勞に存じまする。只今承りましたが、丹波屋助太郎、近所まで參つたとの事、マア〳〵、狹くともこれへお上がりなされませ。

宗佐　然らば許しやれ。いづれ今日は嚴しく申してくりやれ、おてまへも掛り合ひでござる。

三郎　イヤモウ、如才はござりませぬ。マア〳〵、お上がり下さりまし。

ト宗佐、古着店へ入る。このうち楊弓の音聞える。喜太郎、門口へかゝつて

喜太　お頼み申しやせう。この頃までお門へ商ひに來やした、金時を賣つた男でござりやすが、瘡を患つて、金聾になりやしたから、坊主にして善光寺樣へ遣はしやす。衣の奉加を少し附いてやつておくんなさい。コレ、此方へ入らつしやい。

ト大きな聲で云ふ。ぼん助、マヂ〳〵して内へ入る。

ほん ハイ、これが遠くなりました。何かとこの人の大きに世話になります。お頼み申します。……なんまみだ〳〵。

ト鞾の思ひ入れ。八郎兵衛見て

八郎 おつまや、錢の十二文もやりやれ。

つま アイ〳〵。(ト十二銅のおひねりを拵へて喜太郎の前へ行き)アイこれをお前、お世話ながら。

喜太 (取って、思ひ入れ)モシ、おかみさん、こりやア十二文かえ。

つま エ。

喜太 インエサ、十二文やそこら貰ふといつて、三文毛抜きもあてた野郎が、この暑いのに口をすぼめて、御無心ながらの八百も云ひ歩いて、話しが出來ようと思ひなさるか。爰らのお見世で十二文とは、あんまり氣がねえね。角兵衛獅子か、厄拂ひにやりはしまいし、もう少つと御苦勞をお頼み申しやす。

ト十二文を戻す。八郎兵衛見てゐる。

つま モシ、あゝ云うてぢやわいな。

八郎　いゝワ、此方へ入つてゐろ。……コレ、若い人、聞いてゐりやァ、こなさん十二文で不足か。物貰ひが一文貰はうが、足り不足をいつて誰がやり手があるものか。いらざァやるまい。やる筋によつちやァ千兩もやらうが、今日は無えよ。ある時やらう。通つてくんねえ。

喜太　ナニお前、奉加を頼んで無心をいふに、筋も絲瓜もいるものか。お前の見世が鰻屋だといつて、筋の吟味はいりやせぬわな。堀の内や成田を騙つて、錢貰ひに歩くのたァ違ふよ。しら几帳面で人の世話をするのだよ。旦那、モシ兄さん、お見世相應、奉加に附いてやんなさい。

八郎　ハテ、見世相應だから十二文よ。あの男ばかりなら、四文錢の一つもやるが、こなさんが來たばかりに、おひねりの十二文、鰻屋の見世相應だわな。

ほん　お構ひなされますな、今お晝を食べて來やした。

喜太　エヽ、この聾め、口をきゝやァがるな。

ほん　ナニ、お辭儀ぢやァねえ。

喜太　やかましいワ。

ほん　エヽ、もう腹がへつたか。

喜太　エヽ、無駄をぬかすなよ。

まん　さうさ、一降りあればいゝ。蒸し暑いの。

喜太　いま〳〵しい蹔めだ……モシ、兄さん、お前も鰻屋の八郎兵衞さんだが、十二文が爰のお見世の相應かえ。

八郎　（思ひ入れあつて）この若い人はなんだ。おつに搦んだ事を云ふが、コレ、いくらやらうが此方の志しだ。それをひねつて貰ふのは、強請り騙りだワ。

喜太　コレ、なんだ、騙りだ。……騙りとはおれが事か。コレサ、この頃こそ工面が惡いが、この兩國から淺草きつて、人に知られた小旦那喜太郎　只の二才野郎ぢやアねえよ。商賣は鰻裂き、江戸前の、江戸ッ子のと、幟を立てゝ見世は張れど、八郎兵衞どん、お身樣が騙りだよ。

八郎　なんだ、この八郎兵衞が、なんで騙りだ〳〵。

ト立ちかゝるを、おつま留めて

つま　これはしたり、なんでマア、あのやうな人の云ふ事を取り上げて……お前も捨てゝお置きなさんせいなア。

八郎　それだといつておれが事を、騙りだとぬかしやァがるから。

つま　ハテ、ようござんすわいなア。

ほん　アイ、輕業はよくしやすね。

喜太　コレサ、鰻屋の八郎兵衞は、當世流行る男ゆゑ、屋敷女中はいふに及ばず、後家、生娘に乳母子守り、女郎藝者に至るまで、こんたに惚れねえ女はねえ。この喜太郎が妹の、決して轉ばぬおいしまで、アノ、こなさんは

つま　エ。（ト聞き咎める）

八郎　アヽ、そんならこなたは、アノおいしの

つま　コレ、お前知つてかいなア。

八郎　イヤ、近附きぢやアねえが、騙りといふから

喜太　腹が立つのか、八郎兵衞どの、こなさんもお内儀のおつまどのが藝者の時から、仲人なしの轉び合ひ、五分も透かねえ兄貴が承知で、今ぢやア爰の聟同然。それといふのも兄貴が病身。コレ、氣短かをやめさつしやい。見世を張つた商人が、氣短かぢやア濟むまいが。わしも一人の妹が、頭の道具や衣類まで、入り揚げるのも、アノこなたに

八郎　アヽコレ。（ト氣の毒の思ひ入れ）

喜太　サ、わしも生れが癇癪持ち、蟲の居所でツイうか〳〵、いらざる事を云ふのも病ひ。どうした事

かこれまでも、こなさんに間違つて近附きにもならなんだ。喜太郎どん、これを緣に、今から心易く話しに來さつし。

八郎　アイ、善光寺へは六十五里サ。遠いねえ、ハヽヽヽヽ。

ぼん　男は當つて砕けろと、味な事からツイ心易くなるものサ。お前に少つと話しもあるが、なんとお邪魔ではあるまいか。

喜太　なにサ、話しがあれば奥へ行つて、晝寢でもして待つてゐなせえ。

八郎　アイ、忝うござりやす。左樣なら、お辭儀なしに八郎兵衛さん

喜太　喜太郎どん、

八郎　おかみさん、おやかましう。

喜太　アヽ、降つて來たか。

ぼん　やかましいワ。ドリヤ、奥へ行つて

喜太　お暇申しますか。

ぼん　エヽ、後生樂め。

喜太　ト唄になり、喜太郎思ひ入れあつて奥へ入る。ぼん七、心得ぬこなしにて同じく附いて入る。この時

向うより吾妻の新吉、勇みの姿にて駈けて來り、門口にて

新吉　モシ、八さん、內にか。ちよつと來てくんねえ。

八郞　誰だ〳〵、新公ぢやァねえか。イケ騷々しい、何の用だ。

新吉　聞きなさいな。市の野郞めが喰ひ醉つて、楊弓場でだりむくりを云ひ出して、外聞が惡いわな。お前、行つて叱つてやつてくんなさい。

八郞　エヽ、久しいものだ。又ふざきやァがるのか。ドレ、ちよつと行つてやらうか。

つま　モシ、お前、あの今の人は、あゝして置いてもいゝかえ。

八郞　ハテ、大事ない、直に行つてくるワ。兄さんが歸らしつたら、よいやうに云つて置け。ドレ、行つて來ようか。

ト下駄がけにて行く。辻打ちになり、向うより丹波屋助太郞、やつし、病氣の思ひ入れ、草履下駄をはき、丹波屋としるしある黑塗りの岡持を二つ集め、これを持つて出て來て、花道にて行き逢ひ

助太　こりや、八郞兵衞か、どこへ行きやるのぢや。

八郞　アイ、聞けば友達が喰ひ醉つて、廣小路の衆　世話になつてゐるとの事ゆゑ、ちよつと挨拶して連れて參ります。モシ、內にはおつまばかり居やす。直に行つて參りやすから、お賴み申します。

助太　わしも今朝から出前の岡持、大概集めて來たが、ほんに又代地へも行つてゐた筈ぢや。コレ、早く歸らつしやいよ。

八郎　ナニ、直に歸りやす。左樣なら兄貴、お賴み申します。

ト辻打ちになり、八郎兵衞に新吉附いて向うへ入る。助太郎、内へ入る。

つま　兄さん、戻りなさんしたかえ。

助太　オイ、岡持は皆集めて來た。いま道で八郎兵衞に逢うたが、役にも立たぬ友達附合ひ、困つたものだぞ。

つま　して、お前、今日は鹽梅はどうでござんすえ。

助太　氣遣ひしやんな。今日は昨日からの加減の藥で、餘ッ程心持ちがよいやうだ。コレ、お藥も貰うて來たほどに、後で賴みます。（ト藥を出して渡す。）

つま　アイ〳〵、いま煎じてあげませう。ほんにマアどうした事にか、お前が急に弱くおなりなされたので、わたしや一倍苦勞になりまする。何もお前の氣休めと、馴染みを重ねし八郎兵衞どの、まだひろめこそせぬものゝ、近所へ知れた主は入り聟、惡い友にも附き合はんすゆゑ、なんぞといふと氣短かに、喧嘩口論さしやんすが、わたしやお前に、どうも氣の毒ぢやわいな。

助太　アヽ、それも若い時はありがちの事。あの男の親御といふは、福井町にゐる香具師の彌兵衛どの元はあの人も侍ひの果て、母親は八郎兵衛が幼少の時、當歳子の弟を連れて飽かぬ別れ、今では八郎兵衛と弟は、互ひに音信不通といひ、逢うたといつて顔も知らず。丹州の家中へ母御が嫁づいてから、長の煩ひ、たうとう病死いたされたげな。八郎兵衛が前では云ひ憎いが、あの男の弟は、丹波の屋敷で人となつたる坂間新助、親仁の譲りの鮫鞘を平常差すゆゑ、異名に取つた鮫鞘新助、遊び先では扇朝とて、うるさがられる根が悪黨、それといはねど親御の新藤次様はあれが爲にはお主筋。

つま　あの扇朝さんは、主の爲には實の弟御

助太　誠に胤は爭はれぬ。八郎兵衛と扇朝さんを見やれ、瓜を二つに割らずとそのまゝ、よく似てゐるぢやアねえか。おれが爲にはお主筋の新藤次様、死なれた連合ひの遺言とて、きつと守つて、わしと其方へ

つま　お頼みなされたあの一軸、どうぞ首尾よう手に入れて、お渡し申せば八郎兵衛さんは、新藤次様へ義理も立ち、又二つには弟御のお命まで恙なう……アヽ、それに附けてもわしが身は

ト助太郎と顔見合せ、屈託の思ひ入れ。よき時分より、宗佐と三郎兵衛、門口へ來かゝりゐて

宗佐　助太郎、今歸つたか。
助太　ヤ、あなたは石堂樣の御家中
宗佐　大場宗佐ぢやが、今日は受取り歸らねばならぬ。口入れなれば、三郎兵衞も同道いたした。サア、御身もこれへ出て、しかと掛け合はぬか。
三郎　ハイ〳〵。コレ、兄貴、今日はもう切羽でござるぞ。この三郎兵衞が口入れして、お抱へなされたあなたのお屋敷、支度金として五十兩、受取つたその日から、こなたが病氣、今日の明日のといふ内に、いつの間にか八郎兵衞を聟にして、軒なみの三郎兵衞を馬鹿にさつしやるの。わしも古手屋三郎兵衞、八郎兵衞とは、いかに五郎兵衞不足してゐればとて、さう踏み附けにはせぬものぢや。サア、たつた今あの宗佐樣へ、挨拶さつしやい〳〵。
助太　サヽ、御尤もでござります。妹のおつまが、御前樣のお目にとまり、これなる三郎兵衞どのを請け判に頼み、お屋敷へ御奉公に上げまする筈にて、お給金まで受け取りましたる、その日からわしが大病、この間こそよろしうござりまするが、その節は醫者も見放すほどの病氣、人參の、熊の膽のと、お給金の五十兩、存じながら遣ひ捨てましてござりまする。何分お聞き濟み下さりまして、今少しのところを

宗佐　イヤ〳〵、相待つ事まかりならぬぞ。そりや手前勝手と申すもの。患ひであらうが、大病であらうが、その趣きが役人中、又は御前へ申し譯に相成らうか。こりや斯う致さう。この宗佐、これに居るおつまを、身共が屋敷へ同道いたし、某が身のあかりを立て申す。金子出來次第に連れに來やれ。こりや左樣に致さう。サア、おつま、身と一所に來やれ。（ト手を取つて引立てる。）

つま　アヽモシ、左樣仰しやりまするは、御尤もでござりまするが、わたしには八郎兵衞といふ夫のある身、どうもあなたのお屋敷へ參りましては

宗佐　ハテ、そりや其方の勝手ばかり申すといふものぢや。亭主があらうが此方は存ぜぬ。その又亭主のある女を、なぜ身が主人の屋敷へ、手かけ奉公に上げようと申した。

助太　サア、それは

宗佐　御大家を僞るのか。三郎兵衞、お身もこりや馴れ合ひか。

三郎　イエ〳〵、全く左樣ではござりませぬ。ようござります。これからは私しも身晴れでござりまする。そのおつまどのをお連れなされませ。私しが跡に殘りまして、善惡を附けるでござりませう。サア、お連れなされませ〳〵。

助太　これはしたり、三郎兵衞、こなさんまでが同じやうに。コレサ、あなたへ共々

つま　申し、お詫びなされて下さりませ。

三郎　イエ〳〵、なりませぬ〳〵。サヽ、旦那、早くお連れなされませ。

宗佐　心得た。サア、身共と一所に參れ。

つま　アヽモシ、左樣なされましては

宗佐　ハテ、來やれといふに。

助太　アヽモシ、どうぞそこを

三郎　コレサ、やらねば濟ませぬよ。サヽ、早くお連れなされませ。

宗佐　サア、おつま、參れといふに。

ト辻打ちになり、さゝへる助太郎を捨ぜりふにて三郎兵衞邪魔する。宗佐は嫌がるおつまを無理に向うへ押しやり〳〵、花道へかゝる。向うより鮫鞘新助、五分月代の侍ひ、鮫鞘の大小、着流し、裏附け草履。おいし、江戸藝者にて、草履下駄を穿き、榮三郎の似顏の團扇を持ち、伴五郎、着流し、大小、野だいこの侍ひ。傳助、草履取り、小助、繼ぎ棹の三味線を萌葱の風呂敷へ包みしを持つたる廻し男。花道中程にておつまと行き逢ひ

新助　おつまか。

うま　扇朝さん。

宗佐　アヽコレ

ト寄るを突き退け、おつまを後へ廻し、宗佐の手をキツと捕へる。宗佐、手の痛む思ひ入れにて、本舞臺へ押し戻される。新助、門口にて宗佐を突き放し、おつまを連れて共に、皆々跡について内へ入る。

助太　ヤ、扇朝樣、來さつしやりましたか。

三郎　アヽコレ、そのおつまが

ト寄るを新助、持つたる扇にて三郎兵衞の頭をくらはせる。これにてベツタリと坐る。

新助　出過ぎた野郎め。

ト思ひ入れ。門口の宗佐、起き上がつて

宗佐　コリヤ、貴公は何れの御家中かは存ぜぬが、掛り合ひのござるゆゑ、同道いたすそのおつまを、かばうた上に身共を、こりやァ何とさつしやるな。

三郎　さやう〳〵、この三郎兵衞も、扇で頭を毆り倒され、益體もない目にあうたぞ。お侍ひ樣、濟みませぬぞ〳〵。

伴五　コレサ〳〵、町人、左樣に大聲あげて申さずとも、大概知れて居るサ。

小助　あのお侍ひ樣も晝日中、旦那へ行きあたり、無禮があつたればこそ只今のやうに……モシ〳〵、早くお歸りなされませ。

宗佐　默らう、お身が存じた事ではない、すッ込んで居らぬか。

いし　ソレ、見なさんせ、お武家さんに口出しして、後で迷惑さしやんすなえ。

傳助　併し同じお侍ひ樣が、此方の旦那にあうて今の尻餅、モシ、よい〳〵にならぬ御用心なされまし。

宗佐　やかましいワ。おのれらが存じた事ではない。これからは助太郎、おつま、二人の者に申し分があるぞ。

三郎　この三郎兵衛も云ひ分があるぞ。

小助　モシ〳〵、兄貴へ。今のやうに、あのおつまさんを連れて行かれるを、知らぬ顔しておかつしやるは、これには大方

助太　サア、聞かれて話しまするも旦那の手前、お恥かしうござりまする。何を隱しませう、あのお侍ひ樣の御主人へ、妹のこのおつまを

つま　御奉公に上がる約束、お支度金の五十兩、受け取りまするとその日より、兄さんの病氣、今日は

伴五　明日はといふ内に、段々と病ひも重り、人參代の入り用に、遣ひ捨てたる五十兩。兄さんの病氣は本復したれど、何をいふにも、お借り申した五十兩。入り用に遣つたゆゑ、それでそのお屋敷から催促といふ事か。

つま　アイ、左樣でござります。

小助　モシ、旦那、お聞きなされましたか。ハテサテ、氣の毒な事ぢやァござりませぬか。

新助　イカサマ、その五十兩を遣ひ込み、屋敷へも行かれず、難儀してゐるあのおつま。これ程の事を、また聟に來た八郎兵衞には

つま　ハテ、云うたというてしがない町人、どうしてマァ五十兩といふ金が

新助　成る程、よもや出來もせまい。といつてそのまゝにして置いたら、毎日々々このやうな催促に逢ふし、アヽ、氣の毒なものだ。その入り譯を聞きながら、聞き流しにもなるまい。ナニ、お侍ひ樣、なんと拙者が、その金を償ひませうが、それにて事は濟みまするかな。

宗佐　そりやマァ、金子さへ身共へ戻れば、敢へて此方に申し分はござらぬ。

新助　いよ〳〵左樣か。それに相違ござらぬなら……イヤナニ、兄の助太郎、身共が五十兩用立てようが、借りる心か。

助太　そりやモウ、金子さへあなたへ戻りますれば、私しも苦拔けを致しつま兄さんの病氣も、めき〳〵と快氣いたしませう。なう、兄さん、さうぢやござんせぬか。
助太　さうとも〳〵、成らう事なら一日も早う、その五十兩の
新助　サ、金は無い。
助太　エ。
新助　サ、五十兩の貯へは無いが、持ち合せたる品がある。手前も金子が入り用ゆゑ、幸ひ爰へ持參させた、恥かしながら預け物、當分の金に致す所存ぢやが、日頃から心のあるあのおつま、それが足しにもならうから、その品なりと貸してやらう。ソレ、小助。
小助　心得ました。（ト三味線箱の蓋を明け、中より漢の武帝の一軸を出し）旦那、この掛け物を渡しまするかえ。
新助　サアそこが、寶は身の差合ひとやらだ。コレ、助太郎、こりやアおぬしへ貸すが、捨て賣りにしても二百兩。五十兩の質物には、取りさうなものだぞよ。
助太　すりや、その一軸を私しに、お貸しなされて下さりますか。
新助　さし當つて金子は持參いたさぬゆゑ、その品當分預かつて、この場を濟まして下さるなら

つま　アノ、わたしが支度の五十兩、いま兄さんの難儀となつたを、お前が救うて下さんすかえ。

新助　救ふからにやア魚心、あれば此方も水心、コレおつま、魚と水との心の程を、汲み分けてナ、コレ（トおつまへ思ひ入れあつて）兄が難儀を救やれサ。

つま　あの一軸を……エヽ、嬉しうござんす。コレ、兄さん、あの掛け物を、わたしに貸さうと云はしやんす程に、お借り申してお前の難儀を

助太　エヽ、有り難うござりまする。左様ならば、その一軸を……コレ、小助どの、ちやつと見せさつしやい。（ト小助より取つて一軸を開き、鷹の繪を見て思ひ入れあり）モシ、宗佐樣、只今お聞きの通りでござりまする。五十兩の金子、調達いたすそれまで、この一軸をお預かりなされては下さりますまいかな。

宗佐　イヽヤ、身共は武家の家來、金の抵當に品預かる質屋はせぬ……と申したところが當世でおりない。コレ、三郎兵衞、あの一軸を預かつて、暫く待つて遣はさうか。

三郎　成る程、憚りながら拜見いたしませう。（ト助太郎の手より一軸を受け取り、見て）まことに漢の武帝の鷹、又と外に似寄りといつても無いこの一軸。こりや不躾ながら、百兩には捨て賣りにしてもなる代物。五十兩の代りに預かるがよろしうござりませう。（ト助太郎へ戻す。）

宗佐　左様なら兄助太郎、金子出來までその一軸、預かつて置かうわえ。

助太　左様なされて下さりまするか。モシ、旦那、お聞きなさる通りあなたは御承知、何分お貸しなされて下さりませい。

新助　そりやモウ、此方から貸さうと申した事なれば、隨分と用立てゝやらう。委細は伴五郎どの、かかり合つて下さい。

伴五　心得ました……コレ、兄貴、云つて置かうは、一體その一軸は、さる方から出た拂ひ物だ、扇朝が頼まれて、賣り口をきいてゐる最中、僅かの内は間に合せるが、長くはならない。その上に、魚心に水心。ありや、あの妹のおつま坊を（ト思ひ入れあつて）マア〳〵、この筋合ひは奥へ行つて、とつくりと云ひ聞かさう。

近しき仲にも垣とやら、一札を貰ひたい。コレ、兄貴、今の主の臺詞廻しを聞いたであらう。

小助　事濟むまでは大事の代物、この小助が預かつて、ドレ、三味線箱へ納めて置きやせう。

ト箱の中へ入れる。

助太　何事も承知仕りました。左様なら旦那の心意氣を、とつくりと承り、いづれとも仕りませう。なう、妹、おぬしも大概

つま　アイ、何か様子は存じませぬが、お前の難儀が救ひたさ、お借り申すあの一軸、この身に叶ふ事なれば、そりやどうなりとも

新助　どうなりとも、とは

小助　旦那、モシ、お嬉しうござりやせう。

新助　コレサ、おだてゝくれるな。

助太　左様ならばあなた様、今少しのところを、お待ちなされて下さりまし。

宗佐　然らば待ちは待たうが、今のあの一軸を

助太　あなたへ暫くお預け申すは申すものゝ、お聞きの通り私しも借り物、先様へ念の爲

三郎　そりや氣遣ひさつしやるな。この三郎兵衞がよいやうに文言認め、貴樣へ書附けを入れたらよからう。

助太　それ承知なら、よろしく頼みます。

小助　サア、それで物事は大概極つたといふものだ。委細の事は奥でこつそり、兄貴にお話しなさるがよい。なんと旦那、酒になされませぬか。

新助　この奴なぞは、鰻の匂ひを嗅ぎ込んで、鼻がいつそ木のやうになりました。酒の匂ひで咽喉はグ

ビグビ、鼻と咽喉とが大ぜり合ひ。イヤ、とんだ取組みだ。

伴五　そんなら委細は、あの奥で

つま　お指圖次第に、なう、兄さん

助太　その心なら、あなたと一緒に

三郎　あなたも見世で今の一札。

宗佐　よろしく頼む。

新助　酒にせう〱。

小助　サア、入らつしやりませ。

ト唄になり、新助、伴五郎、小助、三味線箱を持ち、傳助、助太郎、おつま附いて奥へ入る。宗佐、三郎兵衛門口へ出て古手屋に入る。おいしソツと殘つて、思ひ入れあつて

いし　いま扇朝さんの云ひなさんすを聞けば、どうやらあのおつまさんに……殊に助太郎さんの様子といひ、どうでもこりや八郎兵衛さんと、縁を切るに極まつた。この上は主の顏を立てるは、いつそ打明け

ト思ひ入れ。合ひ方にて、奥より喜太郎、ぼん七、袋艾を持ち、出て來り

ぼん　コレ、兄イ、もう一火頼むよ。
喜太　エヽ、否だワ。べら坊め、いくら灸を据ゑたとて、その耳が明くものかよ。
ぼん　ナニ、蛇が歩く……ドレ〳〵、どこに〳〵。どこへ蛇が〳〵。
　　　トおいしの前へ騒いでくる。
いし　オヽこわ。どこへマア蛇がえ。
ぼん　アヽ、蛇ぢやァねえ、鰻だ。
いし　ほんに、こなさんはぼん七どのゝいつの間に剃らしやんしたぞいな。
ぼん　ナニ、盆山へ行つて蠶豆を食ふ……とんだ事だね。
いし　エヽ、何を云はんすぞいなァ。コレ、わしやこなさんに頼みたい事があるわいな。
ぼん　ナニ、鰺や鰶が來たから呼んでくれ……今に夕河岸が來よう。
いし　エヽ、阿呆な事云はんすぞいな。
喜太　（出て）コレ、妹、その坊主は金聾、お通じはねえわえ。
いしャ、お前は兄さん……そんなら、この人はアノ
喜太　圓通寺といふでも坊主サ。コレ、われがそのべら棒を頼みたいといふは、云はずと知れた八郎兵

衞の事であらうが。

いし　アノ、それをどうして

喜太　ハテ、われが爲には兄の喜太郎、その位な事が解らないでなるものか。コレ、八郎兵衞は女房持ち、そりやァ惡からう、よしにしや。成らない事だ、成らねえ……と云ふ所だが、さうは云はねえ。妹、なんといくらか貸してくれねえか。

いし　アヽ、また兄さんの無心事、久しぶりぢやに、モシ。（ト莨入れをやる。中に國分が入つてゐる）その莨、のんで見なさんせ。

喜太　こいつはのめる。こんな莨なら何服でものむ氣よ。その代りには、八郎兵衞が來たら、てめえもあの男を何服でものむがいゝよ。

いし　アノ、ほんまにかえ。

ぼん　按摩がいるなら揉んでやらうか。

喜太　おきやァがれ、金鍔め。

ぼん　店賃を寄越せ……あの大家がか。べら棒め。

喜太　うぬがべら棒だ。

ほん　さうサ、違ひねえ。

ト喜太郎、呆れてゐる。唄になり、向うより八郎兵衛、スタ〳〵と戻り來て

八郎　エヽ、また無駄にかゝつて、兄貴も待ち兼ねてゞあらう。（ト內へ入る。）

喜太　オヽ、八郎兵衛さん、お歸りかえ。

八郎　オヽ、喜太郎どんか、よく話して居たの。

喜太　アイ、わしやァ先刻云つた通り、ちつと話したい事があるによつて

八郎　ほんに、先刻云はしつた話しといふは

喜太　外の事ぢやァない。コレ、この女の事サ。

八郎　アヽ、そりやァ、藝者のおいし坊。

いし　八郎兵衛さん、この間はお遠々しうござんしたなア。

八郎　そんなら、あの子は

喜太　わしが妹のこのおいし、話したいとは此奴の事。遠からこなたに氣あり名古屋サ、兄のわしが賴みだが、なんとこなさん、この女を

八郎　アノ、兄貴のこなたが執り持つて

喜太　差合ひなしの喜太郎が妹を、こなたにころばせる。

　　ト おいしを捕へて八郎兵衞の方へ突きやる。八郎兵衞思ひ入れある。

ほん　コレ兄貴、兄弟喧嘩は不承しなさい。お前、早く逃げなさい。

喜太　エヽ、うるさい聾だ。喧嘩ぢやァねえよ。

ぼん　ナニ、癲癇病みだ。あの子が……そりやァ大事だ。

喜太　べら棒め、癲癇ぢやァないよ。

ぼん　玄關から廻れ……ドレ、どこが玄關だ。（トきよろつく。）

喜太　エヽ、金聾め、どこへでもうしやァがれ。（ト鰻笊をぼん七にかむせ）ドレ、氣を通さうか。

　　ト唄になり、喜太郎、底巧みある思ひ入れにて奥へ入る。ぼん七、笊を取る。鰻、ヌラ〳〵して出る

　　ゆゑ、ぼん七悔りして

ぼん　アヽ、それ〳〵、鰻が飛び出して騷ぐワ。それ〳〵、そこへ〳〵。此奴ら、逃げるとて逃がさう

　か。ぬらくら物だといつて、手の内に叶ふものか。ドレ、押へてやらうか。

　　ト辻打ちになり、いろ〳〵に鰻を押へ〳〵、捨ぜりふ云ひながら向うへ入る。あと合ひ方。

八郎　あの聾めは、鰻にかゝつて、とう〳〵鰻に釣り込まれた。この八郎兵衞も、なんぼ商賣柄だとい

つて、今の鰻のやうに釣り込まれちやアならない。ドレ、商賣にかゝりませう。

いしコレ、八郎兵衞さん、釣り込まれてはならぬと云ひなさんすが、そりや誰に釣り込まれるのぢやえ。

八郎お前にサ。

いしエ。

トこの時おつま來かゝり、窺ふ。

八郎ハテ、おつまといふ女房のある八郎兵衞を、釣りに來たお前だから

いしそりやモウ、わたしが思ふ胸の内が、ホのおつまさんに知れて、どのやうな辛い目をすればとて

八郎さういふ心意氣なら面白い。コレ、おれが色になつてくんねえ。ハテ、おつまといふ女房のあらうが儘サ。山の神がやかましくぬかせば、叩き出してしまふわな。コレ、あのしみツたれが來ねえ内に、爰へ來ねえ。ナ、コレサ、大事ないわな。この子も藝者のやうにもねえ。

ト引き寄せる。おいし、思ひ入れあつて

いし八郎兵衞さん、そりやお前、眞實かえ。

八郎眞實だわな。ちよつきりころびの幕と來やせう。

いし　ア丶コレ

八郎　大事ねえよ。

ト おいしにしなだれる。後に聞いてゐるおつま、ツカ〳〵と出て、二人が仲へ入り

つま　八郎兵衞さん〳〵。

ト大きな聲で呼ぶ。兩人、悔りして

八郎　ア丶、おつまか、悔りしたわえ。

つま　アイ、悔りもしやんせう。お前の悔りより、わたしが悔りしたわいな。アタ阿呆らしい。男は惡性とも思はうが、主ある男を盗まうとする藝者さん、ほんにマア大それた、厚かましい、エ丶、腹の立つ。

ト思ひ入れ。おいし、氣の毒さうに

いし　コレ、おつまさん、さう云はしやんすりや、皆わたしが惡うござんす。決してもう八郎兵衞さんには

つま　エ丶、おきなさんせ。そのやうに庇ひ立てしなさんすが、一倍腹が立つわいなア。いま聞いてゐれば、アノわたしを、コレ、八郎兵衞どの、お前は叩き出すと云ひなさんしたが、サア、お前わ

たしを出して見なさんせいなア。

八郎　アヽ、こいつはおれを聟だと思つて、叩き出す事はならないと思ふか。コレエヽ、聟であらうが氣に入らない女房は叩き出してしまへといふ、天下樣のお觸れだわえ。

つま　エヽ、口強情な。サア、追ひ出すならば出して見さんせ。（ト身を摺り附ける。）

いし　アヽコレ、わたしが惡いから、堪忍して下さんせいなア。

つま　エヽ、退いてゐなさんせ。（ト突き飛す。）

八郎　エヽコレ、この子の知つた事ぢやアねえワ。

つま　エヽ、贔屓しなさるが腹が立つわいなア。（ト鰻笊を打ち附ける。）

八郎　此奴、投げ打ちをしやアがるな。ウヌ、土性骨を

ト棕櫚箒を持つて打つてかゝる。おいし留める。この時、助太郎出かゝりゐる。

いし　アヽコレ、滅相な、放しなさんせ。

八郎　エヽ、退きなさい〳〵。ウヌ、亭主に口答へしやアがると、斯うするワ。

トおつまを打つ。おいし慌てゝ

いし　コレ、誰ぞ來て下さんせ。アレ、夫婦いさかひぢやわいなア。

ト呼びながら奥へ入る。八郎兵衛、捨ぜりふにておつまへ打つてかゝるを、助太郎、ツカ〳〵と出て箒を捕へる。八郎兵衛見て

八郎　ヤア、兄貴か。

つま　オヽ、よい所へ。これいなア、八郎兵衛どのがナ（ト云はうとする。）

助太　ハテ、妹、何も云ふな。先刻にから、あれでとつくり、見たり、聞いたり。一體われが悪いワ。何も云ふな〳〵……コレ、八郎兵衛どん、見世先で見つともない。この箒をマア放しやれな。

ト引つたくつて捨てる。あと合ひ方。

八郎兵衛どの、こなさんも知つての通り、近頃のわしが患ひ、何をするにも氣むづかしく、この商賣も出來ないから、藝者盛りの妹を引かせ、こなさんと譯のある事知つたゆゑ、一つにしたは、辛抱次第でこの見世を、やつてしまふ兄が心を、コレ、こなさんは無足にして、近所の藝者衆を引摺り込み、これ見よがしの色事か。さうされちやアまた女だもの、どんな者でも腹を立てねえでは……その上にぶち叩き。こなさんに妹を、ぶちやれといつてやりやアしねえよ。なんぼ親の無い彼奴だといつて、兄がゐるわな。さう酷くはしないものだわな。

ト急き込みしはずみに、咳入つて思ひ入れ。おつま、湯を持つて行つて飲ませ、背を撫つて介抱する。

この時屋體の障子をよき程にあけ、伴五郎、小助、傳助、酒肴を取り散し、新助、障子の蔭に半身見えて酒盛りしてゐる。助太郎、眞中に直り、おつまは上の方にゐる。

〔八郎 そりや早、さうばかり氣取つては、兄貴が腹を立つのも尤もだが、わしが惡いにしたがよい、現在亭主に女房の分際で、口ごたへをしますから

助太 コレ〳〵、八郎兵衞どん、亭主だの、女房だのと云はつしやるが、妹とこなさん、いつ杯をしやつた。

八郎 エヽ。

助太 イヤサ、いつ祝言が濟みました。こなさんに仲人はあるまいが。妹を藝者に出して置く時分から譯のあるこなさん、それも知らない顏でゐたよ。近頃の病身から、いつそ見世を預けて見ようかと、相對づくで爰へ入れたによ。まだ〳〵、近所隣り、町内へも、聟の披露目もしませぬよ。それになんだ、女房だの、亭主だのと、これが帶代で候ふと、二朱銀一つ寄越しはしまいが。あんまり口の明いたまゝ、大風な事を云やるなよ。

つま アイ、兄さんの云ひなさんす通り、近所の女中を引き込んで、現在女房の……イヤ、始終は女房に持たうといふわたしが前で、今でさへあれぢやもの、末々になつたなら、どのやうな事しなさ

んすかも知れぬ。わたしも、もう〳〵深入りせぬうち、こりや分別をしかへて見ずばなるまいわいな。

八郎　（思ひ入れあつて）コレ、おつま、てめえ味な事を云ふが、深入りをせぬ内に分別をしかへようとは、アヽ、わりやおれに……そんなら愛想が盡きたのか。

つま　ハテ、腹立しさんすな。女房の兄に過ごしてもらふほどな男、今の若さにこれぢやもの、兄さんでもない後は、どんなマア無理我儘を云はんせうも知れぬわいな。それぢやによつて、アノわたしや

八郎　おれと別れる心になつたか。

つま　アイ……とはいふものゝ、三年此方馴染んだる、いとしい男を

ト思ひ入れ。小助、掛け物を出して、ちよつと見せる。助太郎、おつまと顔見合せ、咳拂ひする。おつま、思ひ入れあつて

切れてしまふも約束事、無い縁と諦めて

八郎　そんならわいやア、この八郎兵衛を、急に突き出す心になつたか。アノ、うぬは

ト立ちかゝらうとする。助太郎、キツと思ひ入れある。八郎兵衛氣を替へ

ハヽヽヽヽ。アヽおれとした事が、強氣に熱くなるやつサ。この位な事は、常からいくらもある事だに、コレ〳〵おつま、先刻にからあのおいし坊とぢやらついた事は、ありやァほんの無駄事といふものだ。決してねえ事だ。コレ、ありやァ間違ひだ。腹が立つなら堪忍しや、ヨ、コレ、おれが惡かつた、あやまる程に兄貴へも、てまへから、よいやうに云つてくりやれ。ナ、ヨ、コレサ、おつま（トいろ〳〵に云へども默つてゐるゆゑ）これ程までに云ひ聞かすに、挨拶のないは、そんならどうでも（ト奥の方を見て、侍ひ客の來てゐる事を見つけ）アヽ、よめた。これでおつまの心變りの事が知れたワ。常からおれに噂した、藝者の時から附けつ廻しつ、ころばしかゝつたが、あの鮫鞘の扇朝どの、この頃毎日來る筈だ。そんならアノ、ぬしの所へ（ト思ひ入れあつて）これにやアくツついて、絲引きをする奴がゐるな。

小助（思ひ入れあつて八郎兵衛の側へ來り）コレ〳〵、八郎兵衛さん、イヤサ、八郎兵衛どん、こなさん味な事を云はつしやるが、旦那のお側に附いてござるのは、伴公さんと、わしだが、絲引きだの何のと、コレ、人さんの女房を、絲引きにかけようが、女が不承知なら、てんから出來ねえ仕事だわな。こりやァこれ、女の方が、強氣に乘りのある話しだよ。平たく云へばサ、こなさん女に飽きられたのだ。愛想を盡かされたのだよ。女に突き出されたを幅にしようと、外へ食つてかゝ

るのか。コレ、そりやアよしねえ〳〵。人の事ぢやアねえ、こなたが女房に突き出された話しだわな。エヽ、業晒しめ。

ト八郎兵衞これにて無念の思ひ入れ。おつまを見詰めてゐて

八郎　エヽ。（ト小助をくらはす。）

小助　アヽ、痛い〳〵。コレエヽ、何をしやアがる。八郎兵衞、わりやアおれをぶつたな、くらはしたな。コレ、われにやアこの小助は恩があるぞ。コレ、一體爰の內へ來たのは、おれが橋を渡したのだぞよ。おらァ仲人も同然だぞ。うぬはそれに拳を上げても、濟むかえ〳〵。こゝな、二才野郎め。

伴五　コレ〳〵、小助々々、その野郎めは大分氣が違つたのであらう。コレエヽ、あそこにござる扇朝さんがどうしたと……コレエヽ、うぬが働きのない事は棚へ上げて、ぬしの事を云ひ出すが、コレ、爰の內へ入る身のまはり、扇朝さんへ無心をいつて、四角な帶でも締めたではないか。その上にナ、小見世や岡場所から附き馬を連れて來て、ぬしの屋敷へ吠え面をして駈け込んだ事は度だワ。その度每にぬしの恩になつたであらうが。

小助　橋渡しの小助に拳をあてる恩知らずめ。ぶつた代りには、うぬを

ト ありあふ割り木にて八郎兵衞をくらはす。

伴五 扇朝さんに代つて身共が

ト伴五郎も割り木にてぶつ。おつま立ちかゝるを、助太郎引き附けゐる。障子の蔭より扇朝、一軸の箱を取つて見せびらかす。これにておつま堪へる思ひ入れ。八郎兵衞思ひ入れあつて

八郎 モシ、成る程、只今はわしが惡うござりました。いらざる出過ぎた小野郎と、ぶち叩かれるに腹は立ちませぬが、モシ、どうも近所隣りへ外聞が惡うござります。別して隣りは上店の、仕入れ手厚き呉服見世、引け物なしの新荷物、ト一ぞろへのその中に、夏の芝居の中だとて、土用の中の丑鰻、わしも殘りの友達も、江戸前ながらめそッ子ばかり、親はあつても鯔髭、裂くとも裂かれぬはね出され、（隣町中村座の歌右衞門一座と榮三郎が勤むる市村座當て込みのせりふ）モシ、あなた方に捨てられては、世間の譏り、座中の聞え、サ、こゝが氣性の井の頭、上水清き水道の水旅と違つて江戸前商人、役にも立たぬが人でもない、蟲同前の丁稚上がり、弱いを助ける御當地の、モシ、そこがお江戸でござりまする。（ト手を合せて思ひ入れ。）

小助 エヽ、うぬがやうな小野郎を、誰がなんと思ふものか。ぶたれた禮には、うぬを又

ト割り木にて打つてかゝるを、その手を取つて、おつまの方ばかり見詰めてゐる。

八郎　現在かういふ目にあふを、知らない面で見てゐるとは（ト割り木を引ッたくつてあたりへ捨て、鰻裂きの庖丁を取り）もう破れかぶれだ。

トおつまへ突いてかゝる。助太郎ズンと立つて、おつまを障子の中へ突きやる。小助、伴五郎、傳助、割り木にて八郎兵衞の庖丁を打ち落し、外へ突き出す。このはずみに傳助もひとまくしに外へ出され、小助、戸をシャンと閉す。傳助、門口にてウロ／＼してゐる。八郎兵衞思ひ入れあつて

こりや兄の助太郎、男のやうにもない。人頼みをして、この八郎兵衞を追ひ出すのか。それほど縁が切りたくば、未練を殘さず切れてやらうが、去り狀もやるその上に、おつまに逢つて、たつた一言

ト門の戸を明けにかゝる。小助押へゐる。

助太　イヽヤ、妹に逢ふ用はない。殊には夫婦の披露目もなし、去り狀取るには及ばぬ男、聟には取らぬ、勝手に行きやれ。

八郎　そんならどうでも、あのおつまに

つま　逢つてこの身の云ひ譯を（ト駈け出る。）

助太　コレ。（ト引附ける。）

つま　おゝ、むごたらしい。……ホヽヽヽヽ。あのマアみぢめな形わいなア。

ト泣き顔を笑ひにて紛らす。

八郎　さういふ聲はおつまだな。よくもおのれは僞つて、男に恥をかゝせたな。

ト門口より内へ思ひ入れ。このとき助太郎、おつまを上の屋體へ突きやり、障子をシヤンと閉す。

覺えてゐろよ。兄貴、今までは（ト又キッとなる。）

傳助　ウヌ、どうして

トかゝるを、花道へ見事に投げ

八郎　世話でごんした。

ト唄になり、時の鐘を打ち込み、傳助起き上がり、一散に向うへ逃げる。八郎兵衛思ひ入れあつて、揚げ幕へ入る。おつま、障子を明け、ツカ〳〵と走り出て

つま　尤もぢやわいなア。

ト門口へ駈け行くを、小助捕へて

小助　ドッコイ、門へ出るのは危ないもの。あの無法者の八郎兵衛、どんな事をしようも知れぬ。未練の殘らぬ今の緣切り、あれぢやァ旦那も

ト上の方を振り返る。障子を明け、新助、顔を出して

新助　今の緣切り、兄弟二人、手きびしい氣性を見るからは

小助　その一軸を兄貴へ貸して

助太　わしが難儀を

伴五　救ふはぬしの兼ねての願ひ。

小助　あれ程までに云つたけれど、おつまさんにはまだ扇朝さんの疑ひが、あると睨んだこの小助、旦那も一つ望みがござりませうね。

新助　サア、それもおつまと差向ひ、あの子の返事を聞いた上、渡してやるはこの一軸。

助太　すりや、妹が心意氣

つま　わたしにとつくり尋ねた上

伴五　屋敷へ連れて奧樣だヮ。

小助　粹を通して、兄貴もおれも、爰らは氣をきかせよう。モシ、旦那、おしげりなされませ。

ト唄になり、伴五郎、小助、助太郎、思ひ入れあつて奧へ入る。新助、醉つた體にて平舞臺へ出て來り

新助　おつま、いま兄の助太郎を、ちつとの間遠ざけたのは、外ではない、消してくりやれ。
つま　エ、消せとは何を、アノわたしが
新助　おぬしに無心は外でもねえ、八郎兵衛女房と彫つた腕の入れぼくろ、今見る前で消してくりやれ。
つま　すりや、このわたしが彫り物まで
新助　隱してゐれど知り拔いて、消してもらふはコレ爰の（ト立廻つて、おつまが左の腕をまくり）この彫り物が消してほしいワ。
つま　サア、こればかりは
新助　消さねば心が殘つてゐるか
つま　サア、それは
新助　そんなら消すか。
つま　サア、
兩人　サア〳〵〳〵。
新助　消さぬばおぬしが僞りか。
ト思ひ入れ。おつまもこなしあつて

つま　消さいでかいな。今もお前が見る前で、愛想づかしのこのおつま、心の殘らぬわたしが氣性を、
新助　そんなら幸ひ、コレ、爰に、袋艾があつたのも
トぼん七が捨てたる袋艾を取つて
つま　これで消せとの湯ざらしは
新助　末の七九もいとひなく
つま　据ゑるわたしが心中の
新助　灸よりあつき
つま　男と緣切り。
新助　結ぶ今宵に
つま　離るゝ今宵。
新助　年日でなくば
つま　エヽ、
新助　据ゑてくりやれ。
ト獨吟になり、新助、行燈を提げ來り、おつまが腕をまくろ。おつま、これにて思ひ入れ。新助、袋

　　　　艾を置き、入れぼくろへ据ゑる事あり。唄一くさり切れる。

　　どうだ、おつま、熱からうとも辛抱して

つま　サア、その辛抱も、熱いのも、わたしや堪へる心でも、堪へかねるは女房の

新助　二字を消すのが悲しいか。

つま　エ……なんのマア

新助　ドレ、もう一火据ゑておかうか。

　　　　トまた唄になり、灸据ゑあつて納まる。彫り物消える。おつま思ひ入れあつて泣き落す。助太郎出かかりゐて

助太　彫り物消した上からは、もう妹に、疑ひはござりますまい。

新助　心底見えた。今こそ約束の、ソレ一軸。

　　　　ト箱を投げてやる。

助太　エヽ、忝い。コレ、おつま、われが腕の入れぼころ、消したばかりに

つま　あなたの願ひも

助太　コレ。

ト掛け物を戴き、思ひ入れ。時の鐘になり、向うより傳助、四ツ手駕籠に提灯を吊し、足早にて出て來り

傳助　旦那、お駕籠を云ひ附け、お迎ひに參りました。

新助　傳助、大儀……サア、おつま、約束通りだ、屋敷へ連れる、駕籠に乘りやれ。

つま　アノ、爰から直に

助太　旦那の屋敷へ

つま　行たというても、なんの長らへ

新助　ヤ、なんと。

助太　ハテマア、駕籠へ。（ト手傳うておつまを駕へ乘せ、空を見て）アヽ、こりやア一降り來るわえ。旦那お傘をお持ちなされませ。召し憎からうが、わしがこの下駄で

ト蛇の目の傘と下駄を直す。

新助　大降りもあるまいが、借りて行かう。

ト下駄を穿き、傘をさして、駕籠の後に立つ。助太郎、思ひ入れあつて

助太　ほんに、伴五郎樣も、小助も、酒機嫌で寐てゐられました。ドレ、お起し申しませうか。

新助　イヤ〳〵、打ッちやつて置きやれ、折角よく寐てゐるなら、目の覺めるまで寐せて置け。遲くなつたら、泊めてくりやれサ。

助太　畏りました……モシ、旦那、別して恐るゝ事はござりませぬが、ひよつと八郎兵衞めが待ち伏せしまいものでもござりませぬ。灯を消して、あなたも傘でお面を

新助　隱れて行くも未練だが、向うが無法の八郎兵衞、怪我でもすれば癩病に棒打ち。傘で面を隱して行かうか。（ト傘をすぼめて窺ふ。）

助太　妹も隨分氣を附けて、駕籠の灯を、奴さん

傳助　心得ました。（ト提灯を消す。）

つま　そんなら兄さん

助太　氣を附けて行きやれ。

ト時の鐘になり、駕籠の垂れをおろし、傳助附いて向うへかゝり、新助は傘にて顏を隱し、花道へかゝる。この時向うより八郎兵衞、頰かむりにて、出刃を懷へ入れ、窺ひ〳〵出て來り、花道にて摺れ違ひ、思ひ入れあつて兩方へ別れて揚げ幕へ入る。八郎兵衞、門口へ來て

八郎　あの今の駕籠といひ、附いて行つたは慥かに侍ひ。もしやあれが

ト思ひ入れ。この時奥より伴五郎、醉つたろ體にて、寢ぼけ顏にて出て來り

伴五　コレ〱、兄貴、扇朝さんは歸らしつたか。

助太　たつた今おつまを連れて、お歸りなされました。

伴五　そんなら起してくれゝばよいに。

助太　さう申しましたが、後からでもよいと、先へお歸りなされました。

伴五　エヽ、おつまを連れて道行きだな。氣の揉めた……ドレ、行くべいか。（ト門口へ出て）アヽ、少し降るわえ。

助太　傘を上げませうか。

伴五　ナニ、いらねえ〱。したが、道がねつから（ト尻をからげ、跣になり）大方石原へ行く道だから、榛の木馬場へかゝつてゞあらう。

ト捨て鐘になり、跡を追つて向うへ入る。八郎兵衞思ひ入れあつて

八郎　今の駕籠は、いよ〱おつま。ウヌ、追ッ附いて

ト跡へ追つて向うへ入る。宗佐、三郎兵衞は隣より、おいしは奥より出て來り、助太郎と顏見合せ、

宗佐　まんまと首尾よく一軸をば

助太　出來ました。
宗佐（衣類を脱ぎながら）こなさんに頼まれて、おつまさんを抱へたも、貸さねえ金の五十兩、差しつけぬ大小は、葺屋町から借りて來た小道具、わつちはお題目の與市といふ、勇みでござりやす。
三郎　袴羽織に身のまはり、侍ひ一人拵へたは、商賣物の古手屋の、この三郎兵衞が思ひ附き。
いし　おつまさんに氣を持たせ、八郎兵衞さんとの女夫いさかひ、悋氣の種を拵へたは、惚れた顏したこのおいし、これといふのも兄御さん
三人　こなたの頼み。

ト思ひ入れ。三郎兵衞は宗佐の衣類を殘らず風呂敷へ包み、見世へ入れて戸をおろす。宗佐は和しの形になる。

助太　何かとお三人のいかいお世話、おいしさんは夜が更けよう。アヽ、誰ぞに送らせて
宗佐　堀江町へ歸りなさるなら、わたしが送つて上げやせう。
三郎　わしが提灯で、サア、ござりませ。
いし　そんなら兄御さん、おつまさんへよいやうに。
助太　御苦勞でござりました。

ト唄になり、三郎兵衞提灯を提げ、お石、宗佐は大小を抱へ、「降りさうな」といふ捨ぜりふにて向うへかゝる。揚げ幕より新藤次、羽織袴の侍ひにて、蛇の目の傘をさし、下駄。中間、菅笠、赤合羽を肩に掛け、提灯をともして出て來り、舞臺へ來る。三人は向うへ入る。

新藤　どうぢや、一降り參らうか。

助太　へイ／＼、どなたでござりまする……これは新藤次樣、サア／＼、お入り遊ばしませ。

新藤　（上手へ通つて、思ひ入れあつて）この間より賴み置きましたる悴めが事、いよ／＼武帝の鷹の一軸この家へ持參いたしたかな。

助太　左樣でござりまする。この間中から、お拂ひ遊ばさるゝ由にて、御持參なされた鷹の一軸、その一軸を、僞りを申しまして、首尾ようお借り申しましてござりまする。（ト差出す。）

新藤　それは重疊。惡黨の悴め、殿の重寶、武帝の一軸は身共が預かり。それを存じて盜み取り、家出なして在所も知れず。見附け次第に繩打つて、詮議とは存ずれど、彼奴は身が實子でない。其方も身が宅に、奉公の砌りなれば存じ居らう。七年以前病死いたした女房めが、男子二人產み居つたを、惣領は殘し、當歲の弟を連れ、先の夫より鮫鞘の一腰を受け取り、離緣いたして身共へ後添ひ。奴めが今際の枕の際、あの惡黨めをくれ／＼賴み相果てた。その心根が不便さゆゑ、憎

い奴とは存ずれども、どうも盗人の惡名附け憎く、風の便りに承れば、父親も存命にて、この内に掛り人の、八郎兵衛は實の兄。この事を存じたは、拙者と其方たつた二人。てまへの働きを以て、悴にも恙なう、身共も皺腹一つ助かるといふもの。忝い〳〵。家來とは存ぜぬ。マアマア、一軸を改めて（ト箱の中より取り出し、袱紗を取つて開き見て、思ひ入れあつて）ヤヽヽヽこの一軸は、こりやコレ贋せ物。

助太　ヤア

ト驚く。新藤次こなしあつて

新藤　似ても似つかぬ眞赤な贋せ物。

助太　すりや、最前見せたる掛け物と、いつの間にか摺り替へて

新藤　贋せ物渡した憎い悴め。して、惡黨めはいづれへ參つた。

助太　さは存ぜずして妹を渡し、石原邊に住居の由。

新藤　詮議いたして繩打つか、殺してなりと誠の一軸（ト門口へ出かける。）

助太　アヽモシ、お急きなされな、アノ、私しが

新藤　アイヤ、これと申すも手前勝手、もう其方は頼み申さぬ。最早べん〳〵と相待たれぬ。在所を尋

ねて、身共が直々。

助太　左樣あつては、あなたのお爲に

ト立ち寄る助太郎の手を拂ひ

新藤　人面獸心。おのれ、悴め。

助太　アモシ

新藤　（外より戸をシヤンと閉し）提灯やれ。

ト捨て鐘、唄になり、家來を連れて新藤次、急き込んで向うへ入る。助太郎、思ひ入れあつて

助太　そんなら折角妹めが、心にもない惡口に、八郎兵衞との緣切りも、あなたのお賴み、この一軸を、取り得ん爲の拵へ事、心づくしも皆仇事、もしや誠の一軸と、三味線箱のあの中で

ト摺り替へたといふ思ひ入れ。この時、障子の内にて

小助　その一軸はこれにあり。必ず早まり召さるゝな。

助太　（悄くりして）今のは慥かに小助が聲。慥かに爰に。

ト障子を明ける。小助、三味線箱を枕にして鼾をかいてゐる。助太郎、思ひ入れあつて、

アヽ、そんなら此奴の寢言だな。

ト側へ寄る。小助、寝がへりして

小助　よしさ〳〵、一軸はこの小助が預かつたから、爰かまはずと奥の一間で。さらばだ。

ト寝言を云ふ。この時、喜太郎出かゝり、窺ふ。助太郎、さてはト思ひ入れあり、そろ〳〵寄つて、三味線箱をソツと取り、跡へかけ硯をさせる。喜太郎、見てゐる。助太郎、箱の中より一軸を取り出し、思ひ入れあつて戴く、この時小助、まだ寝言にて

泥坊々々。ソレ、猫が〳〵、なまり節を曳くワ。

ト鼾をかく。助太郎、行燈の灯を消す。喜太郎、ソロ〳〵探り出て、小助が上へ踏みかける。

アイタヽヽヽ。盗人か。

ト目を覚まし、暗きゆゑ、かけ硯を箱と心得、ひツ抱へて合點のゆかぬ思ひ入れ。助太郎、一軸を持ち、門口へ出ようとするを、喜太郎探り寄つて取らんとする。小助、この中へ交り、暗がりの立廻りあつて、誠の一軸を喜太郎取つて門口を出て、花道へかゝる。小助、似せ物の一軸を拾ひ取り、行かうとする。助太郎、探り寄つて小助を捕へ、兩人立廻りよろしく、キツとなる。よきキツカケにて、ひやうし、

幕

幕の外、時の鐘。喜太郎、一軸を持ち、仕濟まし顏にて行かうとする。雨車の音はげしく、喜太郎、雨に濡れ、あたりをウロ／＼窺つてゐる。向うより按摩、下駄がけ、杖を突き、笛を咬へ、傘をさして出てくる。喜太郎、花道にて行き違ひに、按摩の横面を毆り倒し、持つたる傘を引つたくり、悠々と向うへ入る。按摩うろたへ、探り寄つて入る。雨車、時の鐘にてツナギ、引ツ返し。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、竹藪、前通りは土手、よき所に辻番、稻荷の鳥居。すべて棒の木馬場、夜更けの體。回向院の伏せ鉦、時の鐘にて幕明く。

ト向うより八郎兵衞、頰かむりにて、一散に駈け來り、舞臺へ來て

八郎　おつまが乘つた駕籠は、もう來る筈たが、石原がへりは此の道筋。（ト向うを見て）アヽ、あそこへ人聲がする。あれがてつきり駕籠に附いた野郎だ。アヽコレ、何をいつても附いてうせる奴らは侍ひ、此方は丸腰、命かぎりにこの出刃で、どうぞあのおつまめを

ト出刃を出し、思ひ入れあつて番屋を見て、戸を明けて内へ入る。矢張り時の鐘、雨の音、向うより以前の四ツ手駕籠、提灯を消して出てくる。跡より傳助附いて、新助、醉つたる體にて伴五郎につかまり、一本の傘へ入り、捨ぜりふにて出て來り、直に舞臺へ來る。

伴五　アヽソレ、危ないよ／＼。公は殊の外醉はれたな。それ／＼、道が惡い／＼。

新助　何サ、酔ひはせぬが、どうしたか先刻の酒には、強氣に廻された。何だか頭がフラ〳〵する。コレ、傳助、そこらへ行つて、駕籠をもう一挺雇つて來い。

傳助　これは旦那、どう致しまして今時分、もう九つでござりまする。今からどこへ行つたとて。なう駕籠の衆、

駕甲　左樣でござりまする。もう今頃は駕籠は出拂ひまする。

駕乙　モシ、お合ひ輿に召しませぬか。

新助　アヽ、合ひ輿に乘せられるか。

駕甲　その代りに旦那樣、駄賃をしつかり下さりまし。ナア、棒組。

駕乙　さうサ。隨分合ひ輿に召しませ。酒手はお二人分お貰ひ申します。

新助　そりやァいくらでもやるが、コレ、おつまや。（ト駕籠の垂れを揚げて）なんと合ひ輿に乘つても、てめえ窮屈ぢやァあるめえか。

つま　なんのマア、お前さんが窮屈でなくば、わたしやどうでもよいわいなア。

新助　そいつは有り難い。コレ、伴公、そんなら合ひ輿にやらう。

伴五　奇妙だの。おつま坊を膝の上へ抱き上げの合ひ輿とは、こいつはどうも堪へられぬの。

新助　サア、この刀をそこへ頼むよ。
つま　爰へ寄越しなさんせ。後へ立てゝ置くぞえ。
　　ト駕籠の内の後へ立てゝ置く。新助乘らうとして、脇差が邪魔になる思ひ入れにて
新助　アヽコレ、脇差も邪魔になるわえ。
傳助　そりや私しが持ちませう。爰へ遣はされまし。（ト鮫鞘の脇差を受け取つて持つ）
伴五　アヽ、雨も小降りになつて來た。傳助、この傘へ入つて來やれ。
新助　（駕籠に乘り）伴公、どうだ。いゝ心持ちになつたワ。
伴五　エヽ、氣が惡くなるわな。垂れをおろしなさい。
　　ト垂れをおろす。この内おつま、後へ拔けて出る。
　　サア、そろ〳〵行かうか。これから先は道がだりむくるから、傳助、ころぶなよ。
傳助　ナニ、藝者ぢやァあるまいし。
伴五　おきやァがれ。脇差を濡らすなよ。
傳助　合點でござります。
　　トおつま、この間に跣にて、裾引あげ、忍び足にて、窺ひ〳〵、東のあゆみを通り、中の間を拔げ

て揚げ幕へ入る。

伴五　サア、駕籠の者、早くやらぬか。

駕甲　ハイ〳〵、サア、やらかせ。（ト舁ぎ上げる。）

駕乙　コレ、棒組、合ひ輿にしては大分輕いなア。

駕甲　さうサ、思ひの外だワ。

ト行かうとする。番屋の内より八郎兵衛、ツカ〳〵と出て、出刃にて突いてかゝる。皆々うろたへ、伴五郎、傳助は八郎兵衛へかゝる。持つてゐる出刃を引つたくる。八郎兵衛、手早く傳助が持つたる脇差を引ッたくり、傳助を一太刀切る。ワッと倒れる。これにて駕籠舁きは「人殺し〳〵」と呼んで逃げる。伴五郎かゝるを切り附ける。ワッと逃げて入る。八郎兵衛、駕籠へ駈け寄り、上よりグッと突く中の新助、苦しむ。この間に傳助起き上がり、後より組附き、立廻りあつて、傳助を切り倒し、駕籠の中より新助を出して、ズタ〳〵に切つて、探り見て、思ひ入れあり

八郎　エヽ、殘念な。おつまめと扇朝めを、四つにしようと思つたに、男めは仕止めたが、おつまを逃がして、エヽ、口惜しい。遠くは行くまい、跡追つかけて

ト新助の鮫鞘を腰に差し、行かうとする。伴五郎窺ひ寄つて

伴五　見附けた。

トかゝる。立廻りあつて、時の鐘、蟲の音。向うより新藤次、箱提灯を持つたる中間を先に立て、捨ぜりふにて出てくる。この間に八郎兵衛は花道へ行く。新藤次はツカ〳〵と行きかゝり、灯にて新助が死骸を見附け、思ひ入れあつて

新藤　こりや悴めが死骸。

伴五　人殺し。

ト向うを見る。八郎兵衛は小石をつかみ、ぶつつける。伴五郎にあたり、顔をかゝへて、タヂ〳〵となる。この聲に中間、悄りして提灯を落し、灯を消して、ワナ〳〵慄へる。

新藤　たはけ面め。

ト叱る。八郎兵衛は一散に向うへ入る。この仕組みよろしく、時の鐘にて、ひやうし、

幕

大詰

淨瑠璃『蟬時雨恨刃』常磐津連中

役名――鰻屋、江戸ッ子八郎兵衞。香具屋彌兵衞。丹波屋、おつま。丹波屋助太郎。小旦那喜太郎。葛坊主、ぼん七。坂間新藤次、馬淵伴五郎、枇杷葉湯賣り、長右衞門。香具師、天八。同新吉。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、上の方に障子屋體、見附け納戸口、佛壇、いつもの所に門口。下の方は黑塀、忍び返し、植込み、隣りの二階、葭簀かけあり、すべて淺草福井町邊、香具師の内。こゝに八人藝覗きの箱を直し、天八、親仁、やつし脚絆の形。新吉、浴衣にて、兩人立ちかゝつてゐる、長右衞門、手甲、脚絆、枇杷葉湯賣りにて、側に荷ひ桶を置き、二人の中へ入つてゐる。八人藝の鳴り物にて幕明く。

長右　マア、二人ながら、待ちやれな〳〵。

新吉　イヽヤ、天八めが、合點しないぞ〳〵。

天八　エヽ、やかましいわえ。……マア、靜かにして御覽じませ。（ト拍子に乘つて）皆樣寄つて打たしやませ、それ〳〵居ながら歩む膝栗毛。

新吉　エヽ、何を人を外らすのだ。なみを寄越せ〳〵。
天八　イヽヤ、やる物はない〳〵。
長右　コレサ、何だか譯が知れない。おれがいゝやうにするから、マア、待ちやれな。
新吉　そんなら、いゝやうにする。
長右　おれも永樂屋の長右衛門、枇杷葉湯は暑氣や癨亂もよくするものだ。喧嘩の仲直りも、よくしないでどうするものだ。
新吉　いゝかえ。
長右　ハテサテ、……この枇杷葉湯は、烏丸大納言様の御製法にて、諸人助けの爲に御調合下されしを今賣り擴むる、第一の效能は暑氣あたり、癨亂、下り腹、澁り腹。（ト云ひ立てになり）この利き目を知つてゐるなればゝいゝやうにするわな。
新吉　とんだまやを云ふが、噓ぢやァないかえ。
長右　何を噓を云ふものか。……本家烏丸枇杷葉湯。（ト長く呼び）時に天八、こなたは夜なもせずに、もうハネかえ。
天八　聞かつしやい。今夜はまぶだから、先刻のばれでハネたのさ。

新吉　晝の內から、まぶだから、なまになつたが、終日熱くるしい箱の中で、八人藝をさせて、歸りには片棒かづいで來れば、九人藝のおれに、ちぎ文も餘計は吳れず、一杯飲めといつて、たつたばら四文。（ト端錢を出して）これぢやァ否だ。はッつけ親仁め。

ト立ちかゝるを、長右衞門とめる。

天八　新公、ぶつのか。ぶちッこぢやァおれも甲をへたものだ。面白い、ぶたれべいワ。

ト兩人立ちかゝるを、長右衞門押へて

長右　これサ、マア〳〵、二人ながら待たつしやい。天八、こなたはそのやうに急きこますと、茶でも飲んで……幸ひ〳〵、ぬるんでゐるこの枇杷葉湯。

ト荷の中より茶碗を一つ出し、枇杷葉湯を汲んで來て、天八に飲ませる。

新吉　そいつは丁度よい。長右衞門どの、おれにも一杯。

長右　オイ〳〵。（トまた汲んでくる）

新吉　暑氣拂ひに、こいつは妙だ。（ト飲む）

長右　ハテ、よく賣れるわい。

新吉　成る程、こなたの挨拶に、料簡しませう。時に永樂屋、こちの親方彌兵衞どのゝ、養子にやつた

實の子の八郎兵衛どの、此方へ見えなんだか。

長右　いんにや。

新吉　イヤサ、その八郎兵衛といふは(トきつとなつて、腹を押へ)アイタヽヽヽヽ、どうしたか、腹が痛くなつて、アヽ、をかしな鹽梅だ。ドレ、裏へ行つて(ト下座へ入る。)

天八　成る程、おれもその八郎兵衛が事には……アイタヽヽヽヽ、おれもどうやら腹鹽梅が。早く裏へ行つて

ト下座へ入る。引き違へて新吉出て來て

新吉　これサ、その八郎兵衛の事はの……アレ、また腹が痛くなつた。

トまた下座へ入る。直に二人とも出てくる。

天八　さて〳〵變な心持ちだ……コレ、永樂屋、その八郎兵衛の事は……アレ、また痛い〳〵。

トまた下座へ入り、直に出て來て

兩人　これサ、その八郎兵衛の事はの。

長右　どうさつしやれた。

ト兩人とも、げんなりしたる思ひ入れにて

兩人　アヽ、强氣に下り坂の車を曳いたやうに草臥れた。

長右　ハヽヽヽヽ、その筈だ。先刻枇杷葉湯を飲んだ人が、加減をして飮ませろと云つたから、巴豆を買つて入れて飮ませたが、矢ツ張りその枇杷葉湯を、こなた衆に飮ませたから、下る筈だ。

兩人　道理で度々の裏入り。

トてんつゝになり、向うより彌兵衞、着附け、羽織。町人二人、袴羽織にて附添ひ出て來て、本舞臺へ來り

彌兵　今日はお家主樣、御苦勞に存じまする。

町中　彌兵衞どの、思はぬ目にあはつしやるの。

長右　そんなら親方は、どうぞさつしやりましたか。

彌兵　わしが實の子の八郎兵衞めが、昨夜人を殺して立ち退いたとあつて、そのお尋ねで、お代官所へ呼ばれました。

町乙　併し、八郎兵衞どのを尋ねの間、お預けとはお慈悲でござる。これから直に組合の中から、爰の内へ番を附けませう。

新吉　そんならアノ、八郎兵衞どのゝ事が

天八　もう代官沙汰で、彌兵衛どのはお預け。（ト思ひ入れ。）

彌兵　オヽ、みんな、もう歸つたか。

天八　頭、今歸りましたが、勘定して下さりませ。

彌兵　天八と新吉が勘定とは

新吉　八人藝の諸道具、覗きの箱の損料サ。

ト云ひ〳〵、覗きの箱の中より、太鼓、鼓、いろ〳〵な物を出す。

彌兵　その算用なら一緒でいゝわな。永樂屋、てめえも今夜は夜流しか。

長石　先刻のばれでハネましたが、わしは頭の所の居候ふ。外の衆は損料物を返して、内へ歸れば喜見城。この永樂屋の長右衛門は、金盥どころか、柄杓で水のしよび〳〵と、顔を洗つて釜の下を、焚きつける部屋ッ子さ。時に、頭、もう日が暮れませうが、目はようござんすかえ。

彌兵　何サ、まだ何ともない。

天八　頭、目をどうぞさつしやりましたか。

彌兵　聞かつしやい、この頃は鳥目で、日が暮れると見えましない。

町人　そんなら彌兵衛どの、もう歸りませう。

新吉　ドレ、わしらも歸りませう。

彌兵　これは大きに御苦勞でござつた。

ト町人二人、下座へ、天八と新吉とは向うへ入る。

彌兵　親の心、子知らずと、この彌兵衞は若い時から、道樂で武士を捨て、香具師仲間に入つて國々を歩き、俠できほつて、立てられた事も立てられたが……それになア、人を殺して逃げ廻る、大恩のあるを知りながら、我が心一つにて、この親にまで苦勞をかけるといふやうな、因果な事があらうかい。

ト思ひ入れ。段々と目の見えぬ思ひ入れ。長右衞門見て

長右　親方、また目が惡うござりまするかえ。

彌兵　ほんに長右衞門、もう日が暮れたか。

長右　今打つたのが、暮れ六ツでござりまする。

彌兵　奥へ行つて、湯殿山へ拜みを上げるから、燈明をあげて下され。

長右　アイ〳〵。

ト納戸口へ入り、行燈を提げて出て、二重舞臺へ置いて奥へ入る。

彌兵　人の手前を思つて、若い時の強い事は云ふもの〻、可哀や八郎兵衞　どこにどうしてゐるぞいやい。

トしつぽりとなる。合ひ方になり、向うよりぽん七、前幕の形にて出て來り

ぽん　許さつしやりませ。彌兵衞どのは此方かな。
彌兵　大きな聲だの。彌兵衞は此方だ。どこからござつた。
ぽん　(聞えぬこなしにてムッとして)そこに居て、なぜ挨拶をしないのだ。町内から來た番の者だ。挨拶をしたがよい。
彌兵　これほど挨拶をしてゐるに、何も腹を立つ事はない。どこにゐさつしやる、此方へ入らつしやい。

トぽん七聞えぬゆゑ、きよとりとしてゐる。彌兵衞これを知らずに

こなたこそ、これほど物を云ふのに、挨拶もしないで

トこのうちぽん七入り、彌兵衞の側へ來るを、彌兵衞見えぬゆゑ知らずに

此方へ入らつしやれといふに。
ぽん　爰が彌兵衞どのゝ内か。(ト側にて大きな聲で云ふ。)
彌兵　大きな聲の男だ。……ひよんな事で、御町内の厄介になりまする。

ト脇を向いて辭儀をする。ぼん七これを見て、聞えぬゆゑ

ぼん　何とさつしやる、蚤でも取らつしやるのか。

彌兵　蚤は取りませぬ。お前に挨拶してゐまする。

ぼん　蚤なら其方の疊の間へ逃げました。

彌兵　ハテ、蚤の事ではござらぬ。この番の人は、蚤が嫌ひださうだ。ドレ、爰を掃除して進ぜませう。

ト唄になり、彌兵衞、探り〳〵奥へ入る。跡にぼん七殘り

ぼん　ハテ、斯ういふ蚤のくふ内に番をしたら、蚤に食ひ殺されるであらう。蚤食ひといへど、こりや番人に何も食はさぬのか。

ト腹を立つて莨盆を引き寄せ、莨をのむ。知らせにつき、隣りの二階の簾を上げる。内に綱太夫、古式部、羽織にて出語り。

〽浮名を流す神田川、水道の水が生粋の、その江戸前の八郎兵衞、我れと我が身を鰻屋の、裂かれたえにしおつまゆゑ、影さへ哀れ夏の雨。

トこの淨瑠璃文句の內、雨車にて、向うより八郎兵衞、着流し、頰かむり、尻をからげ、鮫鞘の一本差しにて出て來り、花道にて

八郎　いひ交したるあのおつまが、新助めに心變り、昨夜榛の木馬場で、おつまと思つて一突きに、駕籠の中のは新助め、戀の敵といひながら、親仁樣の大恩ある、新藤次樣の息子どの。エヽコレ、おつまを尋ねあてヽ

へ是非に今宵のその內に、やつきり〳〵なぶり殺し

とはいへ實の親仁樣、せめて一日は暇乞ひ。

へ親子の緣も鮫鞘の、戀に鯉口くつろげて、はや宵月も落し差し、軒に彳む蚊柱に、身をさされてぞ忍びゐる。

トこの淨瑠璃にて八郎兵衞、本舞臺へ來て、內を窺ひ、門口にヂツと思ひ入れ。

ぼん　これは怪しからぬ。茶を一つ呑ませぬが。誰ぞ來いよ〳〵。

長右　オイ〳〵。(ト出て來り)こなたは何だ。

トぼん七聞えぬこなし。長右衞門、合點のゆかぬ思ひ入れ。

ぼん　こりやヤイ、町內の番人になぜ構はぬ。酒でも飮ませぬか。

長右　此奴は横柄な奴だわえ。

ぼん　(長右衞門を見て)なんぢや、おのれ口を動かすが、この番人に蕎麥を食はさうといふのか。よく

氣がついた。よからう〳〵。

長右　おきやアがれ。うぬに食はせる蕎麥があるものか。蚯蚓でも食はしてやらう。

ぼん　しつぽくか、にふ麵にせう……それは忝い。

長右　蟲のいゝ事を云ふわえ。

八郎　(表より見て)長右衞門、長右衞門。

長右　(表よりソッと覗き)ヤア、お前は八郎兵衞さん。(ト悔りして)いま來ては惡い〳〵。

八郎　そんならもう、おれが事を(ト思ひ入れ)

ぼん　コリヤ〳〵、そこで風鈴を誂へるのか。にふ麵の出來る間、茶を一杯くれぬか。

長右　いろ〳〵な事をぬかすが、いゝワ、茶の代りに

ト枇杷葉湯を汲んで來て、ぼん七にやる。

ぼん　こりやア枇杷葉湯か。暑氣拂ひによからう〳〵。

ト飲む。長右衞門、門口にはだかつてゐて

長右　八郎兵衞さん、お前、昨夜榛の木馬場で

八郎　すりや、新助を殺めた事が……ホイ。(ト思ひ入れ。)

ほん　コリヤ、早うにふ麵を食はせぬか……アイタヽヽヽヽ、どうしたか腹が痛んで來た。コレ、手水場はどこだ。

ト長右衞門、奥を指さして敎へる。

合點だ……アヽ、痛い〳〵。

ト下座へ入る。

長右　お前が人殺しだといつて、親方は實の親だから、八郎兵衞が尋ねて來るに違ひない。人質だといつて、親方を町内預けにして、今のはその番人でござんす。

八郎　エヽコレ、親仁樣の樣子を聞きたいものだが、

長右　マア、此方へ入りなさい。

八郎　誰やらそこにゐるぢやァねえか。

長右　あの番人には、巴豆の入つた枇杷葉湯を飮ませたから、いま裏へ行きやした。

八郎　（内へ入り）そんなら何處ぞへ。

長右　（そこらを見て）幸ひ、八人藝のあの覗きの箱の中へ。

八郎　あそこへ忍んで、樣子を聞かうか。

長右　サア、忍びなさい。

ト覗きの箱の障子を取つて、八郎兵衛を中へ入れ

人の尋ぬる八郎兵衛さん、この八人藝の箱に入れてあるとは、滅多に心は附くまい。ハテ、八人藝は身を助くるぢやな。

ト奥へ入る。唄になり、向うより喜太郎、着流し、ひとへ帯、下駄がけにて出て來て、花道にて

喜太　ずんど遣ひ習ひの市川團十郎でござい。（ト聲色を一くさりあつて）イヨ、成田屋ァ。

〽ひとりで譽めます遣ひます、よく眞似ました三升が、尋ぬる目玉きよろ〳〵、見附外へとそゝり節。

揚げて氣兼ねをせうよりは、見世から歸して茶碗酒。

〽手拭肩に風かをる、香具の門へとしたひくる。

トこの淨瑠璃にて喜太郎、本舞臺へ來る。この間に八郎兵衛、覗きの箱より出て

八郎　親仁樣に逢はう爲、命を惜しんで爰まで來たが、長右衛門が志しで、あの覗きの箱に隠れ忍んでも、どうやら未練で心が濟まぬ。ハテ、なんとせうなァ。

ト思ひ入れ。この時喜太郎、表より

喜太　捕つた。
八郎　ナニ、捕つた
喜太　ソレ、今そこへ行つた鼠を捕つた。（ト穿いた下駄をぶつつける）
八郎　おぬしやァ喜太郎。
喜太　八郎兵衛、よくまめでゐたなァ。
八郎　隨分達者で親仁樣の所へ、土用見舞ひに來たが、どうして爰へ。
喜太　古い奴だが、賣り物があつて來た。
八郎　賣り物とは
喜太　われが差してゐるその鮫鞘の一腰を
八郎　ヤ、なんと。
喜太　昨夜本所横網の、榛の木馬場の人殺し、主は誰とも白雨の、濡れた死骸は鮫鞘新助、差した刃物で殺された、その殺し手は江戸前の、八郎兵衛といふ事は、樣子が知れた證據の鮫鞘。
八郎　すりや、この鮫鞘を差したる者が
喜太　いつもの證據は落したを、拾つて來るが賣り手の役。そこを一番新らしく、證據を持つて立ち退

いた、その鮫鞘が人殺し。代々傳はる荒事など、今度は一つ氣を替へて、小僧が憎い敵役、いま流行のお前をば、苦勞をさせたり苛めたり、憎い奴だと皆樣の、お叱りさへも顧ず、これが今度の山の芋、鰻屋旦那の八郎兵衞、なんと買つちやァくれまいか。

八郎 ムウ、その場の樣子を知つたゆゑ、訴人をしての褒美を望むか。

喜太 知れた事だワ。

八郎 (思ひ入れあつて) 成る程、賣り物スッパリ買はう。

喜太 そりや又、いくらに。

八郎 相場は知れた五十兩。

喜太 そんなら金は

八郎 それもお定まり、夜中の鐘。

喜太 代物なしに賣り物は

八郎 古手廻しを新らしく

喜太 仕組んだ訴人も喜太郎が

八郎 必ずともにこの事を

喜太　ハテ、お前もおれも江戸つ子だァな。
〽生野暮薄鈍情なし手なしの癖として、惡洒落云うたり、大通仕打もあるまいが、どういふ理窟か氣が知れぬ〳〵。
トちよつと振りあつて
おきやァがれ。大事の約束を踊りにするやつサ。ハヽヽヽヽ。
〽げた〳〵笑ふ下駄片し、提げて心を殘し行く。
トこの淨瑠璃にて喜太郎、下駄を提げて向うへ行く。
八郎　喜太郎めが樣子を知つて、この鮫鞘を賣り物と、訴人に引ツかけ、五十兩を強請る上面……何事も、一目親仁樣に逢つた上。（ト行かうとして思ひ入れ）併し、見附けられては長右衞門の志しが無益。ドレ、暫く箱の中へ、ソレ。
トまた覗き箱の中へ入る。バタ〳〵にて向うより、おつま、走り出て來て
つま　八郎兵衞さんは昨夜から、樣子知らねば憎ましやんすであらうが、これには深い譯ある事。實の親御の彌兵衞樣へ、尋ねて行たら逢はれうか。せめて逢うたら云ひ譯を
〽わしゆゑさぞや男氣に、やもめ烏のうろ〳〵と、恨みは深い二世なれど、淺草にある實親

を、たづね水鷄のはしの戸を、たゝこと門をさし覗き
　　トおつま振りあつて、本舞臺へ來て、
嬉しや爰が、親御彌兵衞樣のところ。マア、入つて（ト思ひ入れあつて）イヤ〳〵、內の樣子も知れぬのに、……エヽ、辛氣な事ではあるわいなア。
　　トこのうち奧よりぼん七出て來て　おつまを見て
ぼん　コレ、そこにゐるのは、誰ぢや〳〵。
つま（幸ひといふこなしにて）ハイ、私しはちつとお尋ね申したい事がござんす。彌兵衞樣はお內でござんすかえ。
　　ト手をモヂ〳〵して尋ねる。ぼん七、聞えぬゆゑ、おつまを見て
ぼん　なんぢや、手をかう〳〵するは、こなたは女の按摩か。先刻から氣が屈して、殊に腹鹽梅が惡うてきつう疲れた。一つ揉んで下さい。
つま（悔りして）エヽ、いやな。わたしやそんな者ぢやござんせぬ。
ぼん　何やら物を云ふさうだが、おれは圓通寺だ。（ト耳を指さす）聞えぬ〳〵。
つま　エヽ。さういへば、昨日來た聾の人かいなア。こちや忘れて、阿房らしい。

ト行かうとするのを、とめて

ぼん　コレ〳〵、どうぞ揉んでくれ〳〵。

つま　（思ひ入れあつて）成る程、按摩というて爰にゐたら、もしや八郎兵衛さんがござんして

トぼん七に、揉んでやらうといふこなし、ぼん七心得

ぼん　揉んでくれるか。それは忝い。この腹塩梅の悪いには、枇杷葉湯をもう一杯飲んで（ト又一杯汲んで飲みながら）サア〳〵。きつう揉んでくれ〳〵。

ト上の方にてぼん七あちら向く。おつま入つて、ぼん七の肩を揉む。このうち覗きの箱より八郎兵衛、顔を出し、キツとなつて

八郎　そこにゐるは、おつまぢやないか。

つま　八郎兵衛さん。（ト恟りする。）

八郎　ウヌ、畜生め。（ト脇差を持つて出ようとする。）

つま　アヽモシ、今お前が人目にかゝつては、爲になるまいぞえ。

八郎　ヤヽなんと。

ぼん　（恟りして）按摩どの、何事ぢや。（ト此方を向かうとする。おつま、目をふさぐゆゑ）こりや、どうす

るのぢや〳〵。頭痛を揉むにはあんまり早いなァ。
つま　モシ、お前の腹立ちは尤もではござんすが、わたしが惡性は、深い樣子のある事でござんす。
八郎　ヤア、何がどうした。
ほん　コレ、按摩どの、待つてくれ。また腹が痛んで來た。
　　　〔トぼん七、下座へ駈けて入る。すぐに八郎兵衞、覗きの箱より飛んで出て
八郎　譯も絲瓜もいらない。お妻、うぬをぶッた切つて
　　　〔ト拔いて切り附けるを、おつま立廻り、トヾ八郎兵衞乘りかゝり、脇差を振り上げる。おつま下にて
　　　とめて
つま　わたしや否な新助どのに、身を任さうといふたのも、お前の實の親御樣の、大恩ある新藤次樣の御難儀になつた鷹の掛け物、取返さう爲、兄さんと云ひ合せての愛想づかし。
八郎　ヤ、なんと。
つま　それをお前、疑はしやんす心なら、わたしを殺して下さんせ。したが、これまで深う云ひ交した仲、どうぞ暫く暇乞ひを
八郎　エヽ、どう畜生め。〔ト突き放す。〕

つま　エヽ、胴慾な、むごいわいなア。
〽今死ぬる身の愚癡ながら、お前を悪う人さんが、いはうと儘の水髪の、すつきりとした勇み肌、惚れたが縁で大津提げ、その口前も巻き舌に、なんの鹿の子の一重帯、無理に解かせてしつぽりと、汗もしぼりの浴衣さへ、派手な仲ぢやを樂しみに、わたしや藝者で候ふと、いやな座敷も勤められ、あのゝものゝで執り持てど、みな斷りをいふ藥師、金毘羅さんへ願かけて、怖いお前の顏見ても、矢ッ張り可愛しぢやないかいな、又も取り付く釣り葱、涙にかはく隙もなし。

　ト この淨瑠璃にておつま、八郎兵衞を捕へ、口說きの振り。

八郎　今も云ふ通り、みな鷹の掛け物を取返さう爲。その鷹の掛け物を、新藤次樣へお渡し申したが、わたしが云ひ譯でござんす。

つま　(思ひ入れあつて) さうとも知らず、昨夜榛の木馬場へ追ひかけて、われと思つて殺したる、駕籠の中には鮫鞘新助、人殺しとなつたれば、實の親仁樣へ暇乞ひと爰へ來たが、われに逢うて、委細の事が知れたで嬉しい。

つま　お前に逢うてこの云ひ譯、云はう〳〵と昨夜から、方々尋ねて今爰で、逢ふも盡きせぬ緣かいな

八郎　ア。モシ、八郎兵衞さん、堪忍して下さんせいなア。（ト八郎兵衞に取附き、泣く。）

つま　オヽ、疑ひ晴れた。

つま　お前に逢うたら、暇乞ひして殺さるゝ覺悟。形見と思ひ出して下さんすやうにと、わたしが肌身に附けた襦袢。

へ形見の襦袢あかつきの、知死期を急ぐ身の哀れ。

トこれにておつま、襦袢を出し、八郎兵衞に渡す。このうち、ぼん七窺ひ出て

ぼん　ヤア、見附けた／＼。人殺しの八郎兵衞、嘘つきのおつまめ。伴五郎樣から頼まれ、聾と僞り犬に入り込んだこのぼん七、何かの樣子は皆聞いた。サア、うせう。

ト兩人を引ツ立てる。立廻りあつて八郎兵衞、ぼん七をポント當てる。おつま、愕りして

つま　殺しても大事ないかえ。

八郎　ハテ、毒喰はゞ皿だ。幸ひ。

トぼん七の死骸を覗きの箱の中へ入れる。この時、奥にて

彌兵　御町内の、番の衆／＼。

八郎　（聞いて）あの聲は親仁樣、われも見附かつては惡いほどに、そこらへ隱れてゐや。

つま　アイ〳〵。

ト下座へ入る。

八郎　外ながらお暇乞ひを

ト八郎兵衛も小隠れする。

〽親子のきづな凡夫心、隣りはいつか浄瑠璃に、浮かれとなふる題目和讃。

トこの浄瑠璃にて彌兵衛、探り〳〵出て來て

彌兵　番の衆か。これはしたり、わしは鳥目で見えませぬ。

トこれを聞いて八郎兵衛、外ながら暇乞ひといふ思ひ入れ。彌兵衛こなしあつて、

コレサ、そこにゐさつしやるは（ト思ひ入れあつて）悴、八郎兵衛か。

八郎　エヽ。（ト恟りして）そんなら私しが參つたる、何かの様子を

彌兵　とくより知つてゐるわいやい。

八郎　ホイ。（ト俯向き、ヂッとなる。）

彌兵　八郎兵衛、腹を切れ。

八郎　エヽ。

彌兵　イヤサ、切腹せねば、以前の武士が立つまいぞ。大恩ある新藤次樣、その御子息を殺し、鷹の掛け物を奪ひ逃げるとは、なぜそのやうな性根になつたぞ。いづくの親でも、我が子が人を殺したと思へば、因果物や不具をつかふ商賣だけ、一倍その不具な子が可愛さ、今こそ思ひ當つたわやい。浮世の義理には代へられぬ。腹切つて、昔の武士をあらはしくれやい。

八郎　(思ひ入れあつて)親仁樣、よく云つて下さりました。若氣の至りとはいひながら、早まつて人違ひ。新助どのを殺しましたは、全く私しの誤りなれど、鷹の一軸奪ひ取つた、この身に覺えはさら〳〵ない。このやうな未練を起して參りましたも、せめて一目はお暇乞ひ、親仁樣のお心の内聞いて命は惜しみませぬ。お目にかゝればそれが本望。モシ、先立つ不孝は、お免しなされて下さりませ。

彌兵　八郎兵衞、出かした。今まで未來は賴まぬ彌兵衞も、念佛申すその間、未練殘さず最期の用意。

ト立上がるを、八郎兵衞とらへて、ヂツと思ひ入れ。彌兵衞思ひ入れあつて振り拂ひ

〽そも〳〵日蓮上人は、淸澄寺にまし〳〵て、朝日に向ひ妙法の、初めて七字をとなへつゝ

トこの淨瑠璃のうち彌兵衞、佛壇の前へ行き、鉦と撞木とを出して回向の思ひ入れ。八郎兵衞、鮫鞘の一腰を取つて死ぬ用意をする。この時おつま、ツカ〳〵と出て八郎兵衞に取附き

つま　モシ、八郎兵衞さん

八郎　コリヤ。

〽ぢつと互ひに忍び泣き、なく鶯はほう法華經、南無妙法蓮華經々々〳〵々々々〳〵々。

彌兵　八郎兵衞、泣くか。

八郎　エヽ。

彌兵　コリヤ、武士だぞよ。（トきつと云ふ。）

八郎　なに泣きませうぞ。

ト思ひ入れ。おつまは八郎兵衞に取り附き、一緒に殺してくれといふ思ひ入れ。

〽既に片瀬の御難こそ、蓮にあらぬ敷革や、首の座にこそ南無妙法蓮華經。

トこれにて八郎兵衞、一腰を抜き放し、おつまの胸許へ差しつける。おつま、手を合せ、思ひ入れ。

このうち新藤次、向うより出て來て、門口に窺ふ。八郎兵衞こなしあつて

隣りの二階の題目和讃、われとおれとは鮫鞘の、この一腰が六字の名號。

つま　八郎兵衞さん

八郎　おつま

南人 南無阿彌陀佛。

ト彌兵衞これを聞いて

彌兵 ヤレ待て悴、早まるな。

八郎 早まるなとは親仁樣、そりや御未練でござりませう。

彌兵 イヽヤ、未練でない。今、われとおつまが最期の一腰、鮫鞘とあるからは、この身に覺えのその拵へ。

八郎 刃の色は物にとり、切先までの亂れ燒。

彌兵 鍔は象眼、南蠻鐵。

八郎 目貫は岩に獅子の彫り物。

彌兵 親子亂れのこの鮫鞘、その一腰の拵へを

八郎 親仁樣には

つま どうして御存じ。

彌兵 改易かうむるその折柄、其方の弟あつたるが、この一腰ともろともに、添へて離縁をなしたる女房。

つま　この脇差は常々から、新助どのゝ差添へにて
八郎　昨夜殺しておれが手へ、殘つた一腰……すりや、鮫鞘の新助どのは
彌兵　八郎兵衛、其方の弟に違ひない。
つま　そんなら、いよ〱、
八郎　アノ、新助どのが……ヤア〱。

ト三人恟りする。

〽その一筋を常磐津の、調べに傳へ殘しける。

ト簾チヨンと下りる。表に窺ふ新藤次、思ひ入れあつて

新藤　委細の様子は殘らず聞いた。死ぬるに及ばぬ、おつま八郎兵衛。
八郎　すりや、新藤次様には
彌兵　何かの事を
新藤　彌兵衛どの、最前も申す通り、生さぬ仲の悴ゆゑ、勘當せぬがその身の仇、互ひに實の兄弟とも知らいで夜前八郎兵衛が、手にかゝりしはまだしも仕合せ。こなたが離縁せし内儀が、身共の後妻と知つたるは、この鮫鞘の一腰ゆゑ。

彌兵　すりや、其許樣とは、娵も同じ事。

新藤　とはいへ最早人殺しの、科人となつたれば、是非もなき八郎兵衛どの

皆々　つれない浮世であるわいの。

ト向うより助太郎走り出て來り

助太　ヤア、あなたは新藤次樣、八郎兵衛どの、妹、爰にであつたか。

つま　お前は兄さん

八郎　助太郎どの。

助太　昨夜人殺しのその場より、立ち退かれたる八郎兵衛、逃げた妹が行くへといひ、折角取り得し一軸の、盗人を詮議せんと、病み上がりの身で尋ねしに、これにと聞いて參りました。

つま　モシ、兄さん、案じて下さんすな。

八郎　何かの事は皆解つて、間違ひとはいひながら

新藤　殺されたる新助は、八郎兵衛が實の弟。

助太　そんなら樣子が知れた上、

彌兵　親子兄弟。娵の名乗り合ひ。

助太　それにつけても、鷹の一軸手に入らねば

新藤　この新藤次が

四人　御身の御難儀。

ト思ひ入れ。向うバタ〳〵にて、喜太郎先に伴五郎、捕り手を連れて走り出て

伴五　そりや。

トバタ〳〵内へ入る。これにて新藤次、助太郎、兩人を後へ圍ふ。捕り手は彌兵衞を取卷き

捕手　動くな。

伴五　ヤア、そりやア人違ひだ〳〵。

喜太　（内へ入つて）アヽ申し〳〵、人殺しの八郎兵衞は、八人藝の覗きの箱の中へ隱れ忍ぶ事は、この喜太郎が睨んでおきました。

伴五　そりやその中に、人殺しの八郎兵衞が隱れ居るか。家來ども、あの覗きの箱を引き縛れ。

捕手　ハツ。

ト覗きの箱を荒繩にて縛る。

伴五　新藤次どの、最早新助どのゝ敵、八郎兵衞は召捕つてござれば、安堵めされい。

新藤 朋友のよしみとあつて、近頃忝うござる。併しながら、町人とは申せども、以前は武士と承る。よく召し捕られたなア。

伴五 なにサ〳〵、この位は些細な事。五萬十萬の敵でも、塵灰とも存ぜぬ拙者。勇力の程をお目にかけたいが、世が泰平で、ほんの寶の持ち腐れ。

新藤 イヤ、お手柄〳〵。

伴五 鬼神と呼ばれたる、鰻屋の八郎兵衛を召捕つた。勝鬨〳〵。

ト八人禁の鳴り物になり、伴五郎先に捕り手皆々、覗きの箱を擔いで向うへ入る。

新藤 すりや、あの箱の中に

彌兵 八郎兵衛が隠れてゐると思つて

助太 召捕り行きしか。エヽ、忝い。

喜太 それもみんなおれが犬になつて

八郎 （前へ出て）そんなら何かの訴人といひ

助太 慥かに昨夜の一軸を盗みしも

兩人 ウヌ、喜太郎め。

喜太　ヤレ待て。先刻の賣り物ならぬこの一品。

ト前幕の鷹の一軸を投げてやる。八郎兵衞取つて見て

八郎　こりや尋ぬる鷹の一軸。

つま　そんならそれも

新藤　昨夜首尾よく手に入りしも

助太　又くらがりにて盜まれし、その一軸を

喜太　八郎兵衞どのへ渡した上、新藤次樣へ義理を立てさせたい爲。いはゞこれも江戸ッ子の深切づく。

彌兵　さては何かは八郎兵衞の爲。

喜太　一番變つて、何かの事を世話役に

八郎　エヽ、忝い。

助太　イザ、新藤次樣、鷹の一軸。

新藤　これにて身共が武士も相立ち

皆々　めでたい〳〵。

喜太　まづ今日はこれぎり。

めでたく

打出し

靈驗曾我籬（れいけんそがのかみがき）

靈驗曾我籬

序幕

濱松五社明神の場
本庄屋敷の場

役名──藤川水右衛門。本庄助太夫。石井右内。本庄助市。久下玄蕃。赤羽根五郎作。白井下郎、細内。本庄下郎、熊太。藤川下郎、鐵平。足輕、彦兵衛、白井權八。石井娘、八重梅。濱名奥方、操の前。

本舞臺、三間の間、向う一面牡丹畑、雨障子のかゝりたる花壇。幕の内より操の前、衣裳裲襠の奥方にて床几にかゝり、次に八重梅、詰め袖の奥女中の拵へ、刀箱をうや〳〵しく持ち、助太夫、右内。五郎作、いづれも衣裳麻上下。すべて濱松五社明神社内のかゝり、大拍子にて幕明く。

五郎　今日た奥方、當社五社明神へ御入りは、氏神御參籠といひ、殊には神職の祕藏たる、牡丹の花の眞盛り、見事な事でござりまする。

操　當主濱名常磐之助は、北條時政どのゝ御分地にて、弱年ながら神影一流達せしとあつて、此度賴朝公、富士の御狩の御催ほし、その御供に召し出されしは、濱名の家の規模。

右内　その儀について鎌倉より、久下玄蕃どの御入りありしが、今日御歸國、お見送りの役目は、貴殿の御子息助市どのと、斯く申す右内なれど、奥方のお供につき、悴源之丞が代役、今頃は兩人とも、天龍川に居るでござらう。

助太　それは又一しほ御苦勞に存ずる。

八重　ほんに奥方樣には、工藤金石樣の御姉君にて、諸家方とは重緣。

操　されば、その工藤金石祐經、病氣によつて、御狩の御供も叶はぬよし、嬉しい中での案じ事ぢやわいのう。

助太　尤も賴朝公、富士の御狩の御供は、五月下旬との事。それまでには祐經どのも、御平癒でござりませう。必ずお案じ遊ばしまするな。

五郎　それにつき、御狩惣奉行の儀は、〓どなたとも定まりませぬかな。

操　その儀もやがて知れるであらう、まづ當家の面目なれば

八重　御禮詣りの御參詣。

助太　さるによつて本庄助太夫はじめ

右内　石非右内

五郎　斯く申す赤羽根五郎作

三人　御供仕つてござりまする。

操　一家中の者の喜びより、自らの嬉しさ。弱年の常磐之助が御狩の御供も、全く神影流の上達、指南なしたる石井右内が丹精。

助太　（思ひ入れあつて）この助太夫とても、淺山一傳流の御師範の家柄なれども、若君樣には御幼年より石井どのゝ預りにて、神影流の御上達、こりや時の廻り合せ、右内どのゝ面目、仕合せと申すもの。併し神影の武心のかため、一傳流には心元なうござる。ハヽヽヽヽヽ。

五郎　いかさま、武術の流儀數多あれども、身共などが稽古いたす一傳流には、何流も及びますまい。

助太　イヤモウ、他流の太刀筋には、一向手練が見え申さぬ。たとへに申す蠅が燈心を使ふのでござる。

さて氣の毒千萬な。

右內（ムツとして）これは又、御人體な助太夫どのと申し、五郎作どのが今のお詞。他流は知らず、神影の一流は、諸流に通ふ奥儀なれば、隨分心を附けて稽古致すやうにと、常々門弟どもへ申し附けてござる。只今のそのお詞は、ちと承り憎うござるて。

五郎　イヽヤ、そりやァ手前勝手と申すもの。神影流が諸流に通へば、此方の一傳流は、一心以て致す

操　武術、痴言はたくと、その舌の根を（トきつとなる）。コリヤ〳〵、五郎作、そりや何事。併し當家を思ふ武藝の勵みから起る事、深くは咎めまい。神妙に致してよからう。

五郎　ハッ。（ト控へる）。

助太　助太夫とても、面目次第もござらぬ。

八重（こなしあつて）ナニ助太夫樣、あなたのお屋敷にお出で遊ばす、白井權八樣と申すあのお方は

助太　權八ことは、大江因幡之助廣元、鳥取の家臣なれども、父白井兵左衞門は切腹、故あつて實子助市を、身が許へ養子に貰ひ受けたる緣によつて、幼年の權八ゆゑ、身が方へ引取り、武藝は神影流なれど、當時淺山神傳流を、稽古致して出精仕りまする。

八重　誠に白井權八樣は好い殿御、情らしうてきつとして

五郎　イヤモウ、近國に稀れな美少年と、男女ともに腰を拔かしての評判でござる。

操　賴朝公富士の御狩の御供につき、師範たる石井右內へ、常磐之助が方より遣はしくれよとある、蛙丸のこの一腰、五社明神の神前にて、武運長久を念じ相渡す。右內、近う。

右內　ハッ。

ト合ひ方にて右内、操の前の側へ行く。

操　腰元ども、その刀これへ。

ト八重梅、刀箱を操の前の側へ持つてゆく。操の前、刀を取出し

この一腰は、鎌倉どのまで聞えある、濱名家代々秘藏の蛙丸。此度常磐之助御狩の御供仰せつけられし喜びに、當社に於て遣はす程に、受け取つてよからう。

右内　ハツ〳〵、重ね〴〵の君恩、武名の譽、蛙丸の一腰

操　イザ

右内　（うや〳〵しく受取り）有難く存じ奉りまする。

五郎　（思ひ入れあつて）若殿の御師範にて、御前よきまゝ、右内どのゝ時の面目

助太　助太夫も羨ましい儀でござる。右内どの、ちとあやかりたうござる。

五郎　イヤハヤ、アタめでたい儀でござる。

右内　最早神事の刻限でござれば

操　自らは神職方にて

助太　暫時御休息。

五郎　後室樣には

ト唄になり、操の前先に八重梅、右内、五郎作、下座へ入る。助太夫殘り

皆々　まづお入りあられませう。

助太　兼ねて申し合せし久下玄番樣、いよ〳〵今夕出立の門出に、當五社明神へお立寄り。その節何かの儀を申し上げんと約せしが、最早お入りでありさうなもの。

ト大拍子になり、向うより玄番、野袴ぶつ裂き羽織、大小、跡より中間附き添ひ、後に水右衞門、着流し、深編笠、大小にて、風呂敷包みを背負ひ、筆を大分に持ち、彥兵衞、足輕にて、棒を突きながら出てくる。

彥兵　下らぬか〳〵。(ト花道にて)ヤイ〳〵、穢い態をしては社內へ叶はぬ。殊に今日は後室樣の御入り。又それにお出で遊ばすは、鎌倉からのお上使、その御前とも憚らず、慮外な奴め。

水右　慮外も緩怠もいるものか。筆商ひするお侍ひ樣だぞ。

彥兵　此奴不屆きな。下れ〳〵。

ト云ひ〳〵三人舞臺へ來る。助太夫、玄番を見て

助太　これは久下玄番どの

玄蕃　助太夫どの、參詣でござるか。
助太　奥方のお供でござりまするが、兼ねてお立寄りを相待ち居りまする。
玄蕃　身も出立の祝儀、五社明神へ參詣いたした。
助太　これは當社警固の下郎、何をかしましう申すのぢや。
彦兵　申し上げまする。この編笠をかむりましたる、乞食同樣のなまり武士めが、慮外を仕りまする故の事でござりまする。
水右　ウヌ、神職の警固の癖に、先刻から身共を乞食々々と、何が乞食だ。
彦兵　うぬの態が乞食だから。……慮外な奴。
ト六尺棒で打つてかゝる。水右衞、門棒を引ツたくり
水右　われこそ慮外ひろぐと。（ト彦兵衞を叩く）。
彦兵　ヘイ／＼、御免下されまし／＼。
玄蕃　社內警固の者は格別、久下玄蕃が前にて慮外な編笠。
水右　そんならあなたが久下玄蕃樣。（ト編笠を取る）。
助太　そちや藤川水右衞門。

水右　助太夫どの、奥方のお供でござるか。

玄蕃　（思ひ入れあつて）　藤川水右衛門とあるからは、もしや藤川卜庵が

水右　忰水右衛門でござりまする。これはお初にお目にかゝりました。

玄蕃　兼ねて鞠谷流の達者と承る。この上とも身が方へ便られたがよい。

助太　水右衛門儀につき、この助太夫も種々申入れて、かの神妙劍を

水右　（思ひ入れあつて）　おかつしやい。又しても〳〵その事を。イケ馬鹿々々しい。（ト屹度云ひ）　玄蕃樣、また御意得ませう。

ト大拍子になり、水右衛門ツイと下座へ入る。玄蕃見送り

玄蕃　ハテ、沒義道なる今の樣子。ムウ。

助太　イヤ、警固の者、最早これに用はない。次へ〳〵。

彦兵　ハイ〳〵、私しは棒で制しまして、人を打つのが役目でござりますが、今の侍ひに棒を脊負はされ、誠にこれが棒脊負ひの入道前關白太政大臣、ハテ長い名もあるに、おれは築地、そこで役目は六尺棒を築地。

ト褒める。神樂にて、彦兵衛棒をついて下座に入る。あと合ひ方、兩人思ひ入れあつて

玄蕃　今日當社へ參詣せしは、兼ねて談じられたる毒藥

助太　アモシ……傳手を求めて申し遣はしましたれど、未だ一藥相調ひませぬが、最早家來も歸るでござりませう。

玄蕃　その一藥は身共が受取り、鎌倉に罷りある、常磐之助や近習の者を……何かの事は、兼ねてこなたとへ荷擔の仁と

助太　その人々の名も相知れ、書狀も認め、卽ちこれに。（ト懷中より書狀を出し）これを差上げまするからは、一藥の參り次第、憚りながら御一所にお屆け下さりませう。

玄蕃　（手紙を取つて）然らば暫く當社にて、家來が歸りを待つてござらう。

トこの時揚げ幕にて

鐵平　イヽヤ料簡しないぞ／＼。

細內　料簡しないといつて、どうする／＼。

ト大拍子になり、向うより細內、中間にて、たんぽ附きの稽古槍を擔ぎ、鐵平、中間にて生醉のこなし、割れたる目錄臺を持ち、取り合ひながら出てくる。

コレ、どうするのだ／＼。

鐵平　どうするといつて、鎌倉のお上使樣の所へ引きずつて行くのだ。

ト云ひ〳〵舞臺へ來る。

玄蕃　濱名家より身共が見送りの中間鐵平。

鐵平　この折助めがくらひ醉つて、玄蕃樣お見送りのお供を仕りまする私しが、持つて參つたお初穗の目錄臺を、稽古槍で突き割り、毀しましてござりまする。エヽイ。

ト生醉のこなし。助太夫見て

助太　その下郞は身が方にゐる、權八の召使ひ。

細内　成る程、細内でござりまするが、私しの旦那權八樣のお迎ひ、今日五社明神へ參る道にて、この中間衆が無禮な致し方。

鐵平　どこが無禮だ。うぬがくらひ醉つて、目錄臺を臺なしに

助太　細内默らう。大切なお客人玄蕃樣を、お見送りの供の衆は、お上の中間、それへ慮外いたす不屆き者。

玄蕃　誠に當社へ參詣の、初穗の目錄臺を毀せしは、第一不吉。

細内　イヤお旦那樣、助太夫樣、何も私しが突き當つたのではござりませぬ。彼方から此方へ

鐵平 何を勝手な……慮外をしたのはうぬだぞ。
助太 コリヤヤイ、細內、控へぬか。
細內 でも、わしは酒にも醉はず、突き割りも致しませぬ。
助太 ハナサテ此奴が
細內 イヤ〳〵、中間奉公こそ致せ、武士の扶持を戴きまする細內、曲つた事は申しませぬ。
助太 ヤイ〳〵、おのれ常々から身が云ふ事をきかず、たとへ無理非道でも、權八が申す事は、一言にて控へる無禮な奴。
鐵平 こんな奴は以後の見せしめ
玄蕃 ようござる、助太夫どの、構はつしやるな。身も發足の幸先、神詣での目錄臺が毀れては心が濟みませぬ。身共同道にて濱名どのゝ屋敷へ歸り、屹度曲事に申し附けて見せませう。
細內 エヽ。(ト悄りする)。
助太 誠に蛙は口ゆゑと、片意地者の日頃の不屆き、身が家來ながら權八が、國元より連れ參つた其方ゆゑ、不便をくはへれば附け上り、今更身共が相濟まぬわやい。
玄蕃 ヤイ、下郞め、玄蕃が手を下し濱名家へ召し連れ、屹度成敗。サア、うしやアがれ。

ト三味線入り大拍子になり、玄蕃、鐵平は細内を引き立てさせ、花道へかゝると、向うより權八、若衆形、着附け羽織、高袴、大小にて、具足や竹刀なぞを持ち、稽古歸りの體にて出て來り、花道中程にて行き合ひ、これを見て驚く。

玄蕃　往還の邪魔だ。わツぱめ、そこ退け。

權八　そちや家來細内

玄蕃　ナニ、われが家來か。

權八　何故お侍ひにはこの狼藉

玄蕃　此奴慮外な

權八　何か樣子は存じませぬが、下郎をこれへ。

ト細内を引き退ける。玄蕃きつとなる。權八、細内を後に圍うて舞臺へ來る。助太夫見て

助太　白井權八ではないか。

權八　あなたは助太夫どの、今日は奥方の御供にて、御苦勞に存じまする。

助太　それは格別、此度鎌倉より當家へ御上使、今日御發足にて當社へ御參詣、そのお初穗の目錄臺を打ち毀せし不調法、それゆゑ身が樣々に申し聞かせしが、聞き入れなき常からの片意地。

權八（これを聞き、驚き平伏して）ハツ、大切なるお客人とあれば、家來が不調法は權八が不調法、只管お詫び申し上げまする。

玄蕃 すりや、下郎が詫び言を

權八 ハツ。

助太 なり憎い下郎が詫びなれど、權八、まづ其方の詫びの致し方によつては、

權八 アノ、私しの詫び方とは、

助太 玄蕃どのには役柄にて、鎌倉の御直參、お詫び致さうと思はゞ、その大小を取りおいて、犬つくばひにつくばつてお詫び致せ。

ト權八思ひ入れ。

鐵平 それ〱、その上にてこの中間の、鐵平にも頭を下げて、丸裸になつて踊を踊れ。

權八 ヤア。（トむつとする）。

玄蕃 こりや詫び事も面白い。流石は助太夫どの、出來た〱。

細内 そりや又あんまりな詫びの仕樣。（ト屹度なる）。

權八 コリヤ。

細內　ぢやと申して

權八　ハテサテ、聞き分けのない。大切なお客人とあるゆゑ、たとへ七重の膝を八重に折つても、お詫び申すが卽ち禮儀、そこへ心附かぬ無禮者めが……何卒御料簡の程、偏へに願ひ奉ります。

助太　左樣思はゞお客人の側へ參り、お御足にて踏み蹂られ、お詫び申せ。

權八　サア、それは、

助太　但し犬つくばひか。

權八　サア、

兩人　サア〳〵、

助太　權八、其方がお詫び致さねば、同所致す助太夫が相濟まぬ。

權八　その儀ばかりは（ト思ひ入れあつて）私しとても、武術の家に生れし白井權八。

助太　すりや劍術が鍛錬ゆゑ、ならぬといふその身の高慢。

權八　イヤ、全く以て

玄蕃　左程武術を申し立て、誤りを顧ぬものなら、いつそ試みに、身共が相手になつてくれう。

權八　エヽ。（ト悄りする）。

玄蕃　劍術の相手に

權八　アノ、私しを

助太　イヤ〱、そりやお相手にはなりませぬ、鎌倉どのゝ御家臣、武術鍛錬の玄蕃どの

權八　どう致しまして私しが

ト思ひ入れ。玄蕃こなしあつて

玄蕃　そりや早、どうでこの玄蕃、ぎやつといふと武藝の中、弓矢鐵砲槍薙刀、それで育つたこの玄蕃權八どのと立合ひは、誠に鬼に餓鬼のじやれ。併し志が不便だ。まづ玄蕃が武術鍛錬は、劍術が關口流で、槍術が寶藏院流、馬が大坪、弓が日置、魂ひが大將で、守護神が摩利支天、誠に鬼に鐵棒だ。あまり劍術々々と申すゆゑ、一二合致した上、其方の負けとならば、眞劍を以てたつた一討ち。

細内　エヽ。

玄蕃　何も驚く事はない。一刀の下に命の終るは知れた事。もし又千に一つ、萬に一つ、怪我の拍子に其方が勝つたなら、それを手柄に科を免してくれうわえ。

權八　（思ひ入れあつて）すりや、何と仰せられまする。立合ひに私しが勝ちましたならば

玄蕃　まぐれ當りに勝つたなら、詫びの一埒、免してくれるワ。

權八　それは有り難うござりまする。

玄蕃　幸ひ其方が持つて參つた竹刀をこれへ。

ト鐵平、竹刀を二本眞中へ直す。

權八　然らば立合ひの

玄蕃　竹刀のあしらひ

權八　冥加に叶ひし

玄蕃　仕合せ者め。

ト騙し討ちに打つてかゝる。立廻りあつて、しやんと見得。

こりや丁稚め、中々味をやりをるわえ。

權八　誠に未熟でござりまする。

玄蕃　所を

ト又拂つて打つてゆく。立廻りあつて玄蕃竹刀を落し、叩かれる。助太夫思ひ入れあつて、ツカ〳〵と來て、權八を扇にて打ち据ゑる。細内キッとなり

細内　こりや權八樣を
權八　なんで打擲めさるゝな。
助太　なんでとは不調法者めが。大切なるお客人へ對してこの粗忽。
權八　でもお聞きの通り、立合ひに勝つたなら、慮外の科は免してやらうとある、お客人の約束ゆゑ、立合ひましたはお詫びの爲、それにあなたの折檻は
助太　いかに若輩なればとて、今の立合ひを勝と思ふは、慮外を重ぬるうつけ者、默り居らう。
玄蕃　助太夫どの、苦しうない。丁稚めが勝は、ほんのまぐれ當り、この玄蕃の負と、サアいへばいふものゝ、こりや上手の手から洩つた水。誠に神苑の庭先、爰の飛び石、あそこの木の根、つまづいて負けたのだ。大功は細瑾を顧ず、これしきの事大事ない。ヤイ、權八。
權八　ハツ。（ト平伏する）
玄蕃　其方が武術に免じ、免しがたき所なれど、免してくれる。
權八　有り難う存じまする。
助太　ハテ、仕合せ者め。
鐵平　おらアどうやら醉が醒めたやうだ。

助太　あなたの御仁心にて、この場は御容赦下さるのぢや。有り難いと思ひ居らう。

細内（前へ出て不承々々に）有り難う存じまする、

玄蕃　下郎め、うぬ。

ト玄蕃、扇にて細内の眉間へ疵を附ける。細内「ムウ」と行かうとするを、權八引き廻し、玄蕃と顔見合せ、辭儀をする。これにてチヤンと唄になり、權八先に細内附き添ひ、下座へ入る。あと合ひ方、玄蕃思ひ入れあつて

玄蕃　助太夫どの

助太　玄蕃樣

玄蕃　餓鬼と侮り……ほんのこれが、弘法にも筆の誤り。

助太　御尤も。

玄蕃　イザ、神職方へ。

助太　マア、ござりませ。

ト大拍子になり、玄蕃先に助太夫、鐵平附いて下座へ入る。すぐに合ひ方になり、八重梅出て來て

八重　慥かに今お見かけ申したは權八どの、日頃から思ひ思うて、いろ〳〵と云ひ寄つても、返事のな

いつれなさ。ほんにマア胴慾な、人にばつかり物思はせ、辛氣な事ではあるぞ。

トこのうち後へ水右衞門出て、この時八重梅をソツと抱く。八重梅悔りして

エヽ、お前は水右衞門どの、爰放して下さりませ。

水右　イヽヤ放さぬ。あの物堅い右内どのゝ目顏を忍び、御殿から來る度に、口說きかけても返事がないが、身共はこなたに首ツたけ、惚れて〳〵ほりぬき井戸の水右衞門だ。サア、ひいやりと返事が聞きたい。どうだ〳〵。

八重　返事とは、何の事ぢやえ。

水右　何の事とは白々しい。色よい返事を、

八重　エヽ。

水右　爰で逢つたは五社明神のお庇、誠にこれが結ぶの神、それだによつて

ト又しなだれかゝるを振り拂ひ

八重　アヽ申し、わたしやそのやうな事は存じませぬ。

水右　知らない者が、なぜ權八を尋ねた。

八重　サアそれは（トつかへて）そのお前の志しは嬉しけれど、父さんの手前を思うて

水右　それで返事をしないのか。そんならマァ相談は出來たといふもの。こいつはどうも堪へられぬ。

　　　ト又八重梅へしなだれかゝる。

八重　アレ、放しなさんせ。

　　　ト振り切り逃げる。水右衞門追ひ廻す。神樂になり、下座より右内出て來る。八重梅は下座へ逃げて入る。水右衞門は八重梅と思ひ、右内に取り附き、顏を見て悄りして

水右　ヤア、これは先生。

右内　藤川水右衞門。

　　　ト水右衞門ギックリと思ひ入れ。

　　　理不盡に娘を捕へ、途中に於て尾籠の振舞ひ、いかに若年とて座興も事による。嗜みめされい。

水右　イヽヤ、座興でない。

右内　なんと。

水右　見附けられた上からは、隱さうやうはない。御息女八重梅どのを、水右衞門が妻に申し受けたい

右内　ヤア。(ト思ひ入れあつて)そりやはや、どうで一度は方附けねばならぬ娘、其方にくれたいものなれど

水右　氣に入らぬのか。

右內　いかにも右內の心に染まぬ。

水右　たんと。

右內　水右衞門、よう聞けよ。（ト引き据ゑる。合ひ方になる）其方諸國を浪々いたし、本庄助太夫を使つて立身の願ひなれど、助太夫も愛想をつかし、親卜庵と身共とは、少々の緣あれば、氣の毒と存じ世話いたし居るを、おのれが高慢にて、鞠谷流の指南などと、不躾を知らぬ其方。それもならぬにして此程は、身が手前を病氣と僞り、筆賣り渡世を致し、放埓を極めるとは、見下げ果てたる人非人。まだその上に娘に惚れ、のめ〳〵妻にくれなどと、身の程知らぬ無禮者、畜生でも三日飼へばその恩を知るに、こゝな恩知らずの水右衞門め。

トいろ〳〵惡口して恥ぢしめる。水右衞門もつく〴〵と思ひ入れあつて

水右　成る程、そのやうに異見して下さるはあなたばかり、決して惡くは聞きませぬ。浪々の身の寄るべなく、本庄助太夫どのを使つて世話になつたれど、故あつて愛想つかされ、以前のよしみでこなた樣の許に、いつまでも掛り人。併し以前から習ひ覺えた鞠谷流、その國四郎が奧儀を究めたを幸ひ、弟子入りを賴む者には、一手づつでも敎へたれどみな端物、朝夕の一飯づつも貰うてゐれ

ば易けれど、湯錢や烟草の錢に困り、病氣といひ立て筆商ひ、武士のあるまじき事ながら、せう事なさの錢欲しさ。義理を知らねば人非人とも思はれうが、みな錢金より起る事。又娘御の八重梅どのに惚れたが不屈きとあつて、御異見とはござれども……戀は思案の外といふわえ。

トきつと云ふ。

右內　ヤア。

水右　イヤサ、娘に惚れたが氣にくはないか。たとへ畜生、人非人といはれても、一旦思ひ込んだ水右衛門。八重梅を女房に貰はう。サア右內、身共にくれう。

右內　ハテ、手強くも申したな。コリヤ、よく聞けよ。本庄助太夫が、悴の嫁に所望なれど、それさへ親助太夫が心底をのみ込まぬゆゑ遣はさぬに、おのれがやうな魂ひの腐つた畜生侍ひ、緣談などとは思ひもよらぬ。こゝな水右衛門の犬侍ひめ。

水右（ムッとして）ナニ、犬侍ひとは

右內　水右衛門、其方の事ぢや。

水右　ムウ。

ト屹度思ひ入れ。この時助太夫出て來て、

助太　その犬侍ひも、飼ひ手の心によるものでござる。
右内　飼ひ手によるとは
助太　今犬侍ひといはるゝ水右衛門も、身が方に居る節は、身なり大小、掛り人ながらも相應に致せしゆゑ、家中の内にも鞠谷流を懇望して、一手二手を稽古致す者も、内々にござつたさうぢやが、飼ひ手が變つて、石井氏へ參つてからは、武術の稽古を不躾などといはれしゆゑ、それもやめ、中間小者同然の、身に落してしまつたゆゑ、自然とその身の不自由から、筆商ひの慾得武士。尤も飼ひ手の心によるものか。右内どの、なんと左樣ぢやござらぬか。

ト右内へ當てつけて云ふ。右内思ひ入れ。

鎌倉どのには五月下旬、富士の御狩の御催ほし、定めて犬の手柄もござらう。イヤサ水右衛門、犬も恩を思へばこそ、主人の爲に嚙み合ひもすれ……飼ひ手の心次第であらうがや。

ト水右衛門ヂツとなつてゐる。

右内　イヤモウ、飼ひ犬の忠不忠は、飼ひ手の心といはるれど、そりや心得違ひ。なんぼ飼ひ手が實情を盡しても、當人の心によつて、善惡はわからぬもの、武士は猶更魂ひが大事ぢやて。
助太　そりや犬畜生にはよらぬ、人間とても同じ事。表面は仁者忠義に見えても、心まだらなぶち犬同

右内　ヤア。

然。

助太　水右衛門を犬侍ひといはれたも、八重梅どのより起る事、何かの樣子は聞きました。

右内　そりや聞かれいでござらうが、只今も申す如く、確執のこなたゆゑ、緣組み致さぬ身が魂ひ。

水右　（無念の思ひ入れあつて）すりや右内、いよ〳〵水右衛門は犬侍ひだな。

ト右内に詰め寄る。右内默つてゐる。

その畜生の手の內見せう。

ト拔討ちに切り附ける。右内居ながらに扇でとめる。十二座の鳴り物になり

右内　油斷をせぬも、これが神影。

水右　右內め、小癪をやりをるわえ。この上は鞠谷流の一刀にて

ト刀を引いて又切り附ける。右內立廻り、助太夫も思ひ入れ。右內は水右衛門に附け込まれて、たちたぢと花壇の際へ來て身をかはす。水右衛門切り込む刀に牡丹の枝を切り落す。

右內　切り込む刀に牡丹を切つたる落花狼藉、牡丹に狂ふ獅子身中の畜生侍ひ。

水右　その廣言を

ト又切り附ける。右内、牡丹の枝にて立廻り、よきほどに助太夫、右内を覗つて割笄を手裏劍に打つ。右内牡丹の枝にて受けとめ、すぐに水右衞門を當てる。

右内　助太夫どのには手裏劍を

助太　貴殿の持つたる牡丹の太刀筋、あまり見事に存ずるゆゑ、お邪魔申した今の手裏劍。

右内　一心を以て戰へば花も眞劍にまさる。花を散らさぬ神影の奧儀。

ト合ひ方になり、右内手桶を取つて來て、柄杓にて水を汲み、花壇の土を中へ入れ、水右衞門が持つたる筆にて、柄杓の泥を掻き廻し、水右衞門の額へ泥にて犬といふ字を書く。助太夫見て

助太　右内どの、水右衞門が面體へ

右内　花壇の土にて犬といふ字を書いたるは、此奴へ見せしめ。

ト水右衞門へ活を入れる。水右衞門心附く。

　コリヤ、其方の面體、とつくと見よ。

水右　ナニ、身が面體を

ト手桶にて顏を見て驚き、

こりや泥を以て我がしやつ面へ、犬といふ字を書いたるは

右内　其方の戒め。

水右　ムウ。

ト きつとなる。合ひ方變り、水右衛門水鏡を見詰め、無念のこなしにて手桶を毀す。

右内　口惜しいか。コリヤ、先達て因州にて紛失なしたる、神妙劍の一巻も盗賊の仕業。その盗賊も

ト 水右衛門思ひ入れ。

その一巻は神影流の、外に二となき奥儀の祕書、この一流を極むれば、諸流にわたる大切の一巻この右内とても未だ一見なしたる事なし。因州の御領主も、右の一巻紛失ゆゑ、當時御遠慮と聞き及ぶ。

助太　すりや、他流にもわたる祕書とや。

右内　左樣でござる。拙者鎌倉のお客人をお見送りのため、天龍へ悴を遣はしたが、最早御參詣のお供も相濟したれば、身共も御子息と同道にて、お先へ參る。

助太　然らば右内どの。

右内　御免下されい。

ト 唄になり、右内思ひ入れあつて向うへ入る。水右衛門、跡を見詰めて

水右　うぬ、右内め、よくも身共を犬侍ひと、恥辱を與へしこの無念、思ひ知らさでおくべきか。チエエ。

助太　水右衛門、無念の程尤も至極ぢや、必ず共に思案おしやれ。それにつけても先達て、其方が所持の神妙劒を、何卒身共へ

水右　ヤア。

助太　なんと譲つてはくれまいか。

水右　おかつしやい。身が所持なす神妙劒の一卷ゆゑ、こなたは身共を追ひ出したではござらぬか。それに今更……ならぬ事だ。

助太　すりや、どのやうに申しても

水右　知れた事だワ。

助太　（思ひ入れあつて）水右衛門らが右内に手向ひしては、誠に蚯蚓が龍にじやれ事、ハテ、氣の毒千萬な。

水右　（思ひ直して）いささま、鞠谷流の奥儀を極めた水右衛門でも、石井流には叶はぬか。アヽ、どうするものだ。………「石に鞠谷つけ合はざるは道理なり、蛙の面へほんの水右衛門」……おきやァ

がれ。ドレ、思ひ直して一杯飲まう。

ト唄になり、水右衛門、つか／＼と下座へ入る。助太夫思ひ入れあつて

助太 水右衛門を悪口の右内の心底、ハテ、大丈夫。もしや兼ねての大事を知つたか……それにつけても久下玄蕃どのゝ、深切なる計らひにて、浪人の藤川卜庵へ頼みし毒薬、取りに遣はしたが、もう歸りさうなものぢやが、

ト思案のこなし。始終合ひ方にて、下座より玄蕃、鐵平、外に中間附き添ひ出て來て

鐵平 助太夫様、鎌倉のお客人のお歸りでござりまする。

助太 これは玄蕃どの。

玄蕃 今宵は池田泊りなれど、最早夕陽、参るでござらうが（ト思ひ入れあつて）其方が身共へ餞別の、彼の一薬の儀は

助太 その儀は……未だ使ひが歸りませぬ。是非々々夕方までには

玄蕃 コレ／＼、助太夫どの、こなたの爲を思うての身が寸志の計らひ。これをその様に延び／＼に

助太 イヤモウ、痛み入りまする。

玄蕃 ようござる。いづれ天龍の小休みか、又は池田の泊りかへ、ナ。

助太　持參いたすでござりませうが、天龍川の別船仕立て、彼の渡しは夜に入つては

鐵平　暮れ六ツ限りでござりませう。

助太　すりや、暮れ六ツまでに

玄蕃　然らば必ず

鐵平　お立ちなされますか。

玄蕃　助太夫どの、大儀でござつた。

ト大拍子にて、玄蕃、鐵平と中間とを連れて向うへ入る。助太夫、跡を見送り

助太　あれ程までに玄蕃どのゝお世話。それにこの使ひの歸りの遲さ。エヽ、何を致し居る事やら。

ト思案の思ひ入れ。神樂になり、向うより善平、中間にて、狀箱を首へかけ

善中　エツサツサ〳〵。

ト駈けて出て、本舞臺へ來て、思はず助太夫に突き當り

ハイ、御免下さりませ〳〵。

助太　コリヤ、善平ぢやないか。

善平　あなたはお旦那。

助太　待つて居たわい。

善平　へイ〱、左樣でござりましたか、相良へ參りましたところが、先方も遠くへ出られて留守。兼ねて調合もされてあつたやうなれど、何を申すも至つて大事の藥ゆゑ、歸宅の上にて遣はされましたゆゑ、大きに隙どりましてござります。

ト首にかけた狀箱を取つて渡す。

助太　エヽコレ、今一足の事にて、玄蕃どのへお渡し申さなんだ。

ト云ひ〱狀箱を明ける。善平、汗を拭き〱

善平　昨夜から上下二十里餘の道を、夜をかけて先へ行けば、留守にて一刻ほど待たされ、餘程の遲れ
アヽ、豪儀に骨が折れた使ひであつた。

助太　オヽさうであらう〱。（ト藥包みを出し）ムウ、調合いたして參つたこれが毒藥。

善平　（愕りして）ナニ、毒藥とな。

助太　コリヤ……大儀であつた。宅へ歸つて休め〱。

善平　ネイ。

ト神樂になり、善平向うへ走り入る。

助太　ちつとも早く玄蕃どのへ……とはいへ、まだ後室の御用が

ト下座より權八出て來て

權八　助太夫どの、まだお歸りではござりませぬか。私しはお先へ。

助太　(思ひ入れあつて)コリヤ〳〵、權八、ちと其方に申し聞けねばならぬ事がある。

權八　(立戻り辭儀して)して、その御用は。

助太　先刻鎌倉のお客人の前にて身共が申せし事、定めて非道と思ふであらうが、其方の爲ぢや、必ず惡う思はぬがよい。

權八　御厚情の助太夫どの、何しに惡く思ひませう。殊に助市どのゝ緣によりますれば、誠の父と思ひ居りまする。

助太　然らば大事を申し聞かさう。金打おしやれ。

權八　エ。

助太　親とも思はゞ、善惡ともに一致の金打。

權八　いかにも、拙者が心底。

ト金打する。助太夫思ひ入れあつて

助太　天晴れ速やかなるその誓ひ……そちや當社へ日參致すが、何か望みがありさうな。若年なれど一器量ある其方、出世ばかりの望みではあるまい。
權八　何卒白井の家が立てたき望み。
助太　（あたりを見て）イヤ、この花壇の、牡丹が望みであらうがな。
權八　心得ませぬそのお詞、この牡丹が望みとは、
助太　牡丹は花の富貴草、花の富貴は身が富貴。
權八　ヤア。
助太　白井を大家に取り立てゝ、榮華の上に家國を、押領なさん其方が魂ひ。
權八　ムウ。
助太　見拔いた眼に違ひはあるまい。
權八　（思ひ入れあつて）すりや、私しが
助太　思ひ内にあれば色外に現はるゝの道理……兼ねてこの助太夫が思ひ立ちにて、鎌倉にある若殿の昵近、袋井刑部と心を合せ、若殿を毒殺なさん手段ぢやわい。
權八　エヽ。（ト愕りする。）

助太　されば白井の家も、大身に取り立てゝの榮華。悴助市にも明さぬ大事を明したは、其方が魂ひ見込んだゆゑ、委細を申して身が片腕、荷擔を致せ、コリヤ權八。

權八　すりや助太夫どのには家國を、押領の大望なるか。それに荷擔のこの權八、武士が金打いたせし上は〻ト思ひ入れあつて〻委細畏つてござりまする。

助太　すりや得心か、重疊々々。萬事鎌倉方へお取持は、即ち久下玄蕃どの。併し密計の毒藥は、相良在なる藤川卜庵に調合いたさせ、今宵の内に池田の宿の、玄蕃どのまで屆ける魂膽。さりながら天龍川の別船は暮れ六ツ限り、その六ツ限りに天龍へ參らねば、毒藥を玄蕃どのへお渡し申すこと叶はぬゆゑ、心を種々に碎き居るわい。

權八　左樣ならその毒藥を、暮れ六ツまでに天龍川を越えて、玄蕃どのへお渡し申さねばならぬゆゑ、私しをお見立てなされて、お使ひに行けでござりまするか。

助太　イヤ〳〵、其方が荷擔の事、御存じなき玄蕃樣ゆゑ、持參しても御承知あるまい。いづれ身共が暮れ六ツまでに

權八　いかさま、御尤も。

助太　また〳〵、云ひ聞かす事も樣々あれど、爰は途中

権八　また折もございませう。

助太　まづは身共もこれにて安堵。誠や唐土に

権八　義を結んだるは桃園。

助太　爰は牡丹の身の富貴。

権八　それは兄弟

助太　義を隔つれど

権八　これは親子

助太　ドレ、御歸館を相待たうか。

卜唄になり、助太夫思ひ入れあつて下座へ入る。權八殘り

權八　思ひがけない助太夫どのゝ陰謀。常から厚恩を受け居れば、是非もなき今の金打。大事を明かしてこの權八を、荷擔いたさせ、何かの出來事。これでは兄助市どのへの申譯なく……それは格別、暮れ六ツ限り助太夫どのには、毒藥を渡すとあれば、天龍川のしまひ船、こりや暮れ六ツまでに事を計らねばならぬわい。

卜きつと思ひ入れ。下座より水右衞門出て來て

水右　權八どの、何をしてござるぞ。

權八　イヤ、これにちと用事ござつて（ト水右衞門の顏を見て）こなたの額のその穢れは

水右　面目ない事だが、こりやァ先刻身共を右内が恥しめて、武士の面體へこの如く、犬といふ字を書いて恥辱を與へた……とはいへ此方が惡いから。長々右内の世話になつて、その娘八重梅どのへ惚れたが誤りゆゑ、恥辱を與へられても是非がない。何も身を潔白に、武士道を守りさへすればその誤りはないといふもの。また武士の義によつては、堪忍のならぬ事もあるもの。

權八　すりや水右衞門どのには面體へ、犬といふ字を書かれても

水右　理の當然には勝たれぬ道理。

權八　ハテ、料簡のよい水右衞門どの。

水右　犬といへば、犬ほど義に强いものはない。

權八　エヽ。

水右　町屋敷に限らず、その住居する所を城郭同前にして、他の犬を吠ゆる時には、味方の勝を爭つて、友を集めて命も知らず、嚙み合ひには人にまさつて義强い深切。何によらず魂が大事。

權八　（思ひ入れあつて）いかさま、これはよい教訓、武士は猶しも魂が大切。ハテ、賴もしい志し。

水右　これにつけても助太夫が、度々所望の神妙劍。

權八　ヤ。

水右　イヤサ、因州に於て紛失なしたる神妙劍は、慥か助太夫が所持。

權八　ナニ、神妙劍を

水右　彼奴と睨んだ眼に違ひはないわえ。

ト誠しやかにいふこなし。權八、思ひ入れあつて

權八　して〳〵、それには何ぞ慥かな

水右　これを證據と證據は無けれど、所持してゐるに極まつた。

權八　さては。

ト思案の思ひ入れ。下座より細内出て來て

細内　權八樣、これに御座りましたか。最早お歸りなされませぬか。

トこのうち向うより鐵平、捨ぜりふにて出て來て

鐵平　オヽ、水右衞門樣か。方々を尋ねました。

水右　大部屋の鐵平か。

ト逃げようとするのを捕へて

鐵平　鐵平かもすさまじいわえ。二本差せば劍術の師匠だといふが、コレ、中間の物を借りてゐて濟むか。

水右　濟んでも濟まぬでも、せう事がないわい。

鐵平　コレエヽ、この中おいらが部屋へ來て、酒や肴の錢もそれきり。それからソレ

ト云はうとするを

水右　アヽ、コレ〳〵、鐵平、何もそのやうに云ふ事はないわい。

鐵平　それでも折助の金を、一兩二三分といふもの借り倒しておいて、おれが立身出世したら侍ひにしてやらうの、大名にしてやらうのとは、あんまりでごんせう。懇づくは懇づく、貸し借りは貸し借り。サア、云ひ譯があるか、どうだ。

トこれにて水右衛門、モヂ〳〵として默つてゐる。權八、思ひ入れあつて、差添への小柄を拔いて

權八　中間衆、これを取つておかつしやい。

鐵平　（小柄を取つて）丸に井の字の紋ちらしのこの小柄、これをどうします。

權八　只今承つた、水右衛門どのゝ金の代りに。

鐵平　そんならわしが貸した金の代りに

水右　それでは身共が

權八　ハテ、難儀ゐ見かけて、その儘にもならぬゆゑ、武士の寸志。

鐵平　見れば金拵へ。ようごんす、取つて置きませう。

水右　權八どの、禮の申しやうもござらぬ。忝い〳〵。金子調達いたして、小柄を返却いたすでござらう。

權八　いつ何時でも

水右　それでは氣の毒

權八　イヤ、お心置きなう……家來、參れ。

ト唄になり、權八、細内を連れて向うへ入る。

水右　權八をあゝしてやつたれば、助太夫はくたばるに間はない。これから石井の屋敷へ出掛けて、重なる遺恨を

鐵平　すりや、右内めを

水右　コリヤ。

ト思ひ入れ。チョン〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、上の方筋かひに障子屋體、見附け唐紙、よき所に釜を掛けたる風爐を直し、後に刀掛け、大小。爰に助市、着附け、上下を自身に着てゐる。熊太、着流しにてゐる。すべて本庄助太夫屋敷の體。常の唄にて道具とまる。

助市　右內どのには、最早先へ行かれたであらう。善平が訊ねに參つた。

熊太　只今善平が歸りましたら相知れませう。

助市　同道いたせばよかつたれど、茶客にて思はぬ隙入り、それゆゑ遲なはつた。跡にて風爐を方附けておきやれ。

熊太　へイ〳〵。

ト助市、上下を着てしまふ。熊太は助市の草履を出す。

お履き物も出しましてござります。

ト助市、刀掛けの大小を取つて差す。向うより權八に、細內附いて走り出て來る。

細內　權八樣のお歸りでござります。

權八　助市どの、まだお宿にござりましたか。

助市　弟、只今か。

權八　ハッ。

　トつかへて思ひ入れ。助市、權八を見て

助市　殊の外急いたる樣子ぢやが、細內、途中にて喧嘩口論でも致したか。

細內　イヽヤ、何も左樣な事は

權八　ちと兄者人に、密かにお話し申す事がござりますゆゑ。

助市　(思ひ入れあつて)　密々とは打捨て置かれぬが、鎌倉の使者を見送りの爲、天龍堤へ參るが、大きに遲なはつた。歸宅いたして承らう。

權八　イヤ〳〵、殊の外の急用。(ト思ひ入れ)。

助市　でも、お上の御用なれば

善平　(向うより走り出て)　お旦那へ申し上げまする。最早右內樣には、お先へお出なされたれば、遲くなりませぬ內に

助市　ナニ、右內どのには先へ參られたとか。

善平　左樣でござりまする。

助市　然らば身共も

　　ト行かうとする。權八留めて

權八　アヽ申し、暫く。

助市　何の用ぢや。密々と申しても、他愛ない事であらう。

權八　イヤ、私しが、內々に。

助市　ムウ。（ト上手へ來て、中腰にて權八に向ひ）サヽ、申すことあらば早く申せ。

權八　申しまするも如何の儀でござりますれど、是非とも兄者人へ

助市　コレサ、殊の外急ぎぢやわえ。

善平　モシ〳〵、御出立のお使者は、最早天龍へお出でなされたでござりませう。早くお出でなされま

せ。

助市　善平、暫く待て。

善平　ヘイ。

助市　サア、弟、どうぢや。

権八 サア、それは

ト又つかへる。誂への合ひ方になり、白き蝶舞うてくるを、助市見て

助市 夜分の風爐は置かれぬものぢや。兎角に蟲が舞うて惡い。早う方附ければよいに。

トこのうち蝶ば風爐の中へ落ちる。

権八 風呂の湯氣にて死ぬといふは脆い蟲、槿花一日の榮えより愚人と夏の蟲、命知らずに火に入つて落ちるものぢや。

助市 ほくしうの千年も蜉蝣の一時、思へば果敢ない……義朝は大將の身にてありながら、風呂にて最期。

権八 (こなしあつて)保元の亂に義朝は、禁廷へ御味方。

助市 親爲義は、新院のお頼みにて、親子の戰ひ。勅命とはいひながら、親をも討つたる義朝が武士の義理。

権八 ヤヽ、何と仰しやりまする。(トきつと心附きて思ひ入れ。)

助市 忠義ゆゑには現在の

権八 親を討つたる(ト心づくこなしあつて)源の義朝。(ト助市の顏を見て、思ひ入れあつて)アノ、親を

討つたるは源の義朝。

助市　ハテ、知れた事を根問ひ致すものぢや。

權八　武士の義は、つれないものでござりまする。

ト涙ぐむ。助市見て

助市　弟、そちや何が悲しい。

權八　エ。（ト思ひ入れあつて）その義朝が

助市　安穩にはゆかぬもの。（ト思ひ入れあつて）そちや義朝の話しで、きつう悲しい樣子ぢやが

權八　されば、その義朝も親を討つには、定めて兄弟とても、

助市　爲朝は、親と一致に新院方。

權八　すりや、兄弟別れて刃の爭ひ。（ト助市を見て）モシ、兄者人。

トほろりとする。助市、思ひ入れあつて

助市　何を嘆くぞ。ムウ、聞えた。親兄弟も武士の義によつて、鎬を削る保元の一戰、それを思うて悲しいのか。未練であらうぞ。

權八　ぢやと申して

助市　サア、密々の用事、早う申さぬか。

權八　ハツ。

ト俯向く。この時、時計鳴る。助市、權八驚き

助市　ありや暮れ六ツ。

權八　すりや、天龍川を

助市　ヤア。

善平　モシ、お提灯を出しておきました。（ト箱提灯を出し）早うお出でなされませ。

助市　遲うなつた。

トつか〳〵と行かうとする。熊太、盆にある百合の花を出して

熊太　モシ、失念いたしました。御殿から百合の花が參つて居りました。

助市　たはけ者め、急用の場所で、花どころかえ。

熊太　でも、御殿からでござりまするゆゑ、お目にかけます。

助市　御殿から下されたか。（ト取つて花を戴き）明朝の客に生けよう。花溜へ入れて置け。

ト渡す。この時百合の花散る。

熊太　モシ、花が散りました。

助市　これは粗相な……併し、風も吹かぬにこの花の。ムウ………心がかりな。（ト思ひ入れあつて花道へ行きかけ、權八と顔見合せ）花の散つたは、物の別れか。

權八　モシ。

助市　行て參るぞ。

ト唄になり、助市に善平、提灯を持つて先に立ち、向うへ入る。權八殘り

權八　兩人とも奥へ。

熊太 細内　ハツ。（ト兩人、奥へ入る）

權八　暮れ六ツを打つたる上は、打ち捨て置かれぬ一大事、兄者人へ委細を申して、助太夫どのへ御異見と思ひしに、折も折とて殿の御用。流石に養父の惡事ゆゑ、云ふに云はれぬ密事の難………というて期を延せば、若殿の御大事。（ト思ひ入れあつて）今の話しの爲義、義朝、これに習うて、子にはあらねど權八が………ムウ、慥かに所持の神妙劍も

ト思ひ入れあつて、手水鉢にて刀を洗ひ、草履にて寢刃を合せ、二重舞臺へ腰をかける。時の鐘、チヨンにて、道具廻る。

本舞臺、九尺の高屋臺、大和葺き、前側へ障子を閉て、東西は柴垣、植込み、神職の奥座敷の體にて道具とまる。

ト雨車、向うより細內、赤合羽、竹の子笠にて、蛇の目の傘を擔ぎ、熊太、箱提灯を持つて出て來て

細內　困つたものだ。この雨の降るのに、權八樣はどこへ行かしやつたか。

熊太　大旦那があんまり遲いから、お迎ひに來た。

ト云ひ〳〵、兩人下座へ入る。障子の內にて

權八　すりや、どうあつても

助太　小癪な事を。

權八　是非に及ばぬ。

ト打合ふ音する。障子に血煙り立つ。助太夫苦しみ

助太　おのれ、權八

トこの時障子落ちて、助太夫手負ひの體。權八は二の太刀を振り上げる。時の鐘、知らせにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、一面の黒塀、忍び返し、見越しの松。雨車にて、道具とまる。

ト向うより彦兵衛、赤合羽、竹の子笠にて、箱提灯を持ち、六尺棒を突き、出て來り

彦兵 火の廻り〳〵……また降つて來たな。降つては上がり〳〵、いやな天氣だ。雨の降る夜も風の夜も、矢ツ張り變らず時廻り。アヽ、孫子の代にも、こんな下司奉公はさせまい〳〵。

ト本舞臺へゆく。細内、出て來て

細内 また夕立か。雨ばかりならよいが、あの雷めはきつい禁物だ。それに權八樣はどこへ行かれた。傘を持つて來たに

彦兵 火のまはり。

細内 時まはりの衆、どうだ、雷が來ようか。

彦兵 天龍の方がひどく光ります。

細内 それぢやア又ゴロ〳〵だらう。

この時バツタリと音して、塀より白刃出る。細内、彦兵衛恟りして

そりやこそゴロ〳〵ピツカリだ。

彦兵　ハア

細内　ヤア、桑原々々。

ト傘を捨てゝ向うへ逃げて入る。彦兵衞、ブル〳〵慄へてゐる。誂へ三味線入り本神樂やうの鳴り物にて、黒塀を切り破り、權八出る。彦兵衞は怖々棒で打つてかゝらうとする。權八キツと見て、刀の血を拭けと顏にて敎へ、刀を突き出す。彦兵衞、怖々ながら手拭にて刀を拭ふ。始終雨車。權八は彦兵衞に、穿いてゐる下駄を寄越せ といふ思ひ入れ。彦兵衞、下駄を脱いで直す。權八穿いて、又、提灯を持つて行けと顏にて敎へる。彦兵衞、怖々提灯を持つて先に立ち、花道へ行く。雨頻りに降る。權八、落ちてある傘を取つて開き、擔ぐ。これを木の頭。きつと思ひ入れにて、よろしく、ひやうし、

幕

出端になり、權八、彦兵衞を提灯持ちにして、悠々と向うへ入る。時の鐘のツナギ、早幕引つ返し。

二幕目

石井屋敷の場
小天龍辻堂の場

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面に茅葺きの中門、井筒の井戸、一面に螢飛びかふ。幕の內よ

り八重梅、着流し。袖助、奴にて、扇と團扇を持ち、螢を追うてゐる。眞中に右内、麻上下の下ばかりにて、下駄を穿き、以前の刀を持つてゐる。誂への合ひ方にて、幕明く。

八重　なんと袖助、この螢追ひも面白い事ではないか。

袖助　今日の夕立にて、今宵は螢も一しほ澤山でござりまする。アレ〱、あちらの往還の方より、すさまじく飛んで參りまする。

右内　これは、二人とも螢狩り。誠に螢雪の窓に學問をせしためし。月にもまさる螢の光りは、ハテ、よい眺めではあるぞ。

袖助　お旦那には、見ますればお庭の内を、お刀を携へ遊ばさるゝは、お客人のお出迎ひでござりまするか。

右内　イヤ〱、左樣でない。娘にはよく存じ居るが、今日五社明神にて、若殿御狩の御供仰せ附けられ、御祝儀として、蛙丸の一腰を下し置かれしは、全く御師範の規模。それゆゑ片時も離さぬは若殿へ仕へる心ぢや。

八重　誠に神影の一流、達人と呼ばれ給ふ父樣ゆゑ

袖助　下郎の我れ〱までも、御奉公仕る甲斐あらはれ、有り難い儀でござりまする。

右内　イヤナニ娘、其方は數寄屋へ參り、風爐の方附け。袖助は勝手へ行て、寐酒の一獻、女どもへ用意いたさせい。

八重袖助　畏りましてござりまする。

ト八重梅、袖助は中門へ入る。右内、螢を見て

右内　螢は花と違うて、また風雅の眺めぢやわい。

ト思ひ入れ。下手の藪陰に雀むらがる。雀笛鳴る。

ハテ、合點のゆかぬ。この夜陰に若竹へ、雀の宿るは希有の一つ。この藪垣の

ト時の鐘。右内、藪の際へゆく。途端にズイと槍の穗先出て、右内へ突きかける。手ばしこく鹽首を取つて引き出す。水右衞門、槍を持つてズイと出る。

そちや水右衞門。

水右　こま言ぬかすな。

ト突いてかゝる。立廻り。井戸より白刃出で右内を一かせ切る。物凄き合ひ方。井戸より鐵平出る。水右衞門、槍にてグツと突く。右内「アツ」と苦しみ、立廻りあつて

右内　コリヤ、水右衞門、卑怯な。加勢を頼みしな。

鐵平　知れた事だワ。水右衞門様の腹心、鐵平といふ渡り中間。

右内　すりや、云ひ合せて

水右　犬侍ひの手の内、うぬが身にこたへたか。

トまた立廻り。始終くらがりのこなし。右内、水右衞門の左の腕を一太刀切る。これにてタヂ〳〵となる。

鐵平　水右衞門様、何となされました。

水右　左の腕を一太刀

鐵平　エ。

水右　何も氣遣ひな事はない。

右内　（苦しみながら）おのれ、人非人め、よくも恩あるこの右内を、騙し討ちに致したな。

トよろばひかゝるを水右衞門、その手を捕へ

水右　卑怯でも、未練でも、刃向ひ立てはなるまいが。（ト右内を蹴倒し、グッと踏み附けて）かねて尋ねる神妙劍の一巻は、因幡の國にて盗み取り、肌身離さず身共が所持。まだ〳〵云つて聞かせたいがどうせ地獄へ行く奴だから、云つてやるのも無駄事だ。われ一人が達人顔で、人を蔑にするが

氣にくはない。犬と喩へた惡口が、今ぞその身に報つたのだ。この水右衞門を犬といつたがいゝか。畜生にしたがいゝか。ヤイ、親仁め、爺イめ、アノ死盛りめ。（ト踏みにじる）

右内　おのれ水右衞門、口惜しいわい。

水右　鐵平、叩きこなしてしまへ。

鐵平　骨附きをあら煮に致しませう。

ト さん〴〵に右内を切り倒し、水右衞門、右内が刀を取つて少し拔いて見る。蛙の聲する。

水右　これこそ蛙丸の一腰、エヽ、忝い。（ト腰に差し、槍を取り上げる）

鐵平　水右衞門樣、もはや右内は

水右　お定まり、今がとゞめだ。

ト 槍にてとゞめを刺す。水右衞門、思ひ入れあつて

人殺しの證據には、幸ひ〳〵、鐵平、われが取つたる先刻の小柄。

鐵平　成る程。（ト以前の小柄を出す）

水右　丸に井の字のこの小柄。後日の證據。

ト 右内の側へ落す。

鐵平　こいつは出來た。（ト人音するゆゑ）南無三、人音。

水右　鐵平、この場を

鐵平　心得ました。

ト時の鐘になり、水右衛門は下の方、鐵平は向うへ入る。バタ〳〵にて中門の内より、八重梅、袖助手燭を持ち、走り出て

八重　何事なるか、この路地にての人音し

袖助　何か餘程の騒ぎと存じまする。

ト云ひ〳〵尋ね、右内の死骸に躓づき、見て

八重　ヤア、こりや父様。

袖助　大旦那のこの御最期。こりや何者の仕業でござりまするか。

八重　モシ、お心をお附けなされませ。

ト兩人介抱して

袖助　すりや、深手によつて

兩人　ハア、。

ト泣き落す。バタ〳〵にて中門より水右衛門、丸に井の字の弓張り提灯を持ち、走り出て來て

水右　コレ〳〵、八重梅どの、袖助、あちらにても皆々が曲者詮議。御殿は元より、御家中へもお知らせ申した。（ト慌てゝ右内の死骸に取り附き）何意趣あつてこのやうに、切り苛なみし深手の最期。今更悔んで甲斐なけれど、これまで水右衛門不身持ちゆゑ、別して厚き御世話の御恩、報ずる事も叶はぬか。

八重　親子は一世のこの別れ。殊に兄源之丞どのは、今明日に鎌倉よりの御到着。父様の御最期にも、お逢ひなされぬその悲しさ。

袖助　モシ、八重梅樣。

八重　袖助。

水右　アヽ、是非もない

皆々　御最期ぢやあア。

ト水右衛門は目へ唾を附け、わざと悲しきこなしにて、皆々と顔見合せ泣き落す。

水右　とはいへ何ぞ敵の證據。

袖助　イカサマ。

ト手燭にてあたりを尋れ、右内の側に落ちたる小柄を取りて

何かこれにござりまする。

ト差出す。八重梅見る。水右衛門、巧いといふ思ひ入れ。

八重　こりやこれ、丸に井の字の紋ぢらしのこの小柄。

袖助　お旦那とは同じ定紋。

水右　それが敵の證據だわえ。

八重　丸に井の字の

袖助　この紋どころが

三人　ハテナア。

ト思ひ入れ。時の太鼓になり、向うより中間に提灯を持たせ、五郎作先に助市、衣裳、麻上下にて、出て來り、本舞臺へ來る。八重梅見て

八重　これは赤羽根五郎作樣、木庄助市樣。

五郎　お家の騷動お上へ達し、お目附より檢使の役目を蒙むつてござる。

助市　承れば、右內どの横死の樣子。拙者同道にて、鎌倉のお使者のお見送りながら參つたが、歸宅

の後にこの騷動。申し參つてござるゆゑ、直樣檢使の役目を蒙なり參つたが、源之丞どのは鎌倉より御歸國もなく、何は兎もあれ御愁傷

兩人　察し入りましてござる。

八重　御推量下さりませう。

助市　灯、これへ。

ト右内の死骸の側へ行く。

水右　ハツ。

ト袖助は手燭、水右衞門と中間とは提灯を持ち行き、見せる。助市、五郎作、とつくりと見て

助市　こりや餘程の深手、意趣ある者の仕業と見ゆる。

五郎　して、この騷動に家内の者は、出で合さぬか。

八重　尤も爰は住居とは、餘程隔たり居りまして、親右内一人、これに螢の飛びかふを眺め居りましたれば

袖助　騷動の樣子は、遲ればせに聞きつけまして出合ひましたれど、はや縡切れてこの御最期。

水右　それより家内の人數、所々へ手分けをなし詮議いたしましたれども、討つたる者は逃げ失せまし

たと相見えまする。

五郎 ウハヽヽヽヽ。若殿へ師範さるゝ、神影流の達人でも、討つたる相手に薄手も負はさず、やみやみと討たれたるは、ほんの犬死、大だはけ。

八重 憚りながら、御檢使樣へ申し上げまする。親右内儀、御師範の申し上げ、御厚恩は受けましたる者でござれども、不時に斯樣な死を遂げましたるは、申さば災難。

袖助 それを犬死、たはけとは。

五郎 默り居らう。いかやうなる騙し討ちにあへばとて、油斷せぬが兵術の達人なるに、みじめなるこのくたばりやう。この上は石井の家は改易、殘りし奴等は阿房拂ひ。

八重 エヽ。………その儀は何卒、兄源之丞が歸國の上にて

五郎 イヽヤ、そりやならぬ。歸國も知れぬ源之丞が

八重 イヤ、是非に今宵か明日は

五郎 何をたはけた。源之丞が五年過ぎて歸國やら、十年經つて歸るやら、それまで待つて、お家の掟が相立たうと思ふか。馬鹿な事を。

助市 イヤ、八重梅どの、氣の毒ながら武家の掟。師範の身にて横死なれば、外勤仕の方よりは又格別

濱名家にて師範の家は、石井と本庄、別して助市、笑止に存ずる。

八重　すりや御師範の家柄だけ、相手を討たねば家斷絶。ハアヽ。

ト思ひ入れ。助市こなしあつて

助市　して、横死の場所に落ちたる品とは

袖助　手槍一筋、刀一腰、即ちこれに。

ト槍と右内の刀とを差出す。助市、取り上げ見て

助市　この手槍と一腰は

水右　（前へ出て）それが右内どのゝ刀。また手槍は、常々書院に掛けてあつたものでござりまする。

助市　ムウ、この槍にて突きしと見えて血の滴り。右内が所持の刀にも血のあるは、敵に薄手負はせしと相見える。

ト水右衛門思ひ入れ。

八重　すりや、親人を討つたる敵は

袖助　いづれにか薄手の疵とや。

助市　この外にも落ち散りし物はなきか。

水右　モシ、八重梅どの、今の小柄を

八重　これが右内の死骸の側に

ト差出す。助市取つて

助市　落ち散りありし小柄とや。

三人　敵の證據になりませうがな。

助市　（見て驚き）こりや、丸に井の字の紋ぢらし。

八重　この方の石井の定紋。

助市　身共が實家の白井の紋も

八重　同じ丸に井の字とは

五郎　敵か、討ち手か、埒もないその證據。

水右　慮外ながら、その丸に井の字の小柄は、慥かに助太夫の所にゐさつしやる、白井權八どのゝ所持

と見えまする。

助市　すりや、弟權八が

八重　何意趣あつて討たれしか。合點のゆかぬ

水右（キッとなり）重恩ある右内どの、その恩報じに水右衞門が、敵權八を引ッ捕へ

　　ト向うへ駈け出す。助市、思ひ入れあつて

助市　ヤレ、水右衞門どの、待たつしやれ。

水右　でも、討つたる敵を

助市　神影流の達人、右内どのを討つて立ち退くほどの曲者、こゝらあたりにうろつかうか。急かずと
　マア〱、控へ召されい。

水右　エヽ、太え奴だなア。

　　ト　わざと拳を握り、口惜しさうに舞臺へ歸る。助市、思ひ入れあつて

助市　水右衞門どの、ちよつとこれへ。

水右　エヽ。（ト悄りする）

助市　ハテ、きつい悄りのしせう。

水右　イヤ、さのみ悄りも致さぬ。（ト合ひ方になり、助市の側へ行き）御用でござるか。

助市　下郎、その槍に覺えあるか。

袖助（槍を見て）いかにも、拔き身の儘でござれども、下郎ながら數槍の儀でござりますれば、折節見

かけまして、見覺えがござりまする。

助市　その數槍といふ事を、水右衛門どのには、ろく〳〵見も致されずに、夜目といひ、よくも見究めさつしやれたな。

水右　ヤア。

助市　殊に家內の手槍にて、脇より意趣斬りも……それぢやによつてこなたには、檢使の助市用がある。敵を覘ふは實子の役目、あまり身動き致されな。

水右　サア、それは

助市　ナヽ、なんと。

ト向うバタ〳〵にて、熊太、いの字の箱提灯を持ち、走り出て

熊太　助市樣、これにござりましたか。

助市　其方は熊太、慌だしい、何事ぢや。

熊太　親旦那助太夫樣には、今日奧方のお供にて、五社明神へ御參詣。

助市　それは身共も承知いたして居る。

熊太　あまり遲くなりまするゆゑ、下郎がお迎ひに參りましたるところ、五社明神の神職方にて、何者

とも知れず討つて立退き、親旦那には數ヶ所の疵に、はや縡切れて御最期でござりまする。

助市　ヤア〳〵〳〵。

卜大きに驚く。皆々も恟りして

皆々　ナニ、助太夫樣には

助市　アノ、人手にかゝつてお果てなされしとや。ホヽホイ。（卜當惑のこなし）して〳〵、討つたる者は、ナ、何者ぢや。

熊太　それよりその場の大騷動、人殺しを詮議のところ、大旦那のお側に落ちたるこの扇。

卜扇を出す。助市取つて

助市　血汐を以て記せしは、ナニ〳〵「本庄助太夫どの事、陰謀の志しあるによつて、お家の大事を見るに忍びず、討つて立ち退き申し候ふ。本庄助市どのへ、白井權八」。

皆々　ヤア〳〵。

助市　（また恟りして）すりや、親人を討つたる者は、現在の我が弟。ホヽホイ。（卜思ひ入れ）

八重　親人樣を討つたるも

袖助　敵は同じ

皆々　白井權八。

熊太　この事を申さん爲、檢使のお役の若旦那へ、お知らせ申して下郎はお先へ。

ト熊太は向うへ走り入る。

助市　討ち手は弟、討たれしは養父助太夫。こりやこのまゝには捨て置かれぬ。（ト行かうとする）

五郎　助市どの、こりやいづくへ

助市　ハテサテ、養父の最期ゆゑ

五郎　たとへ親を討たれても、大事の主命、檢使の役目を忘却さつしやれたか。

助市　サア、それは

五郎　何とでござる。

助市　ムウ。（ト思ひ入れあつて立ちどまる）。

皆々　さてはいよ／＼敵は權八。

水右　（うまいといふこなしあつて、思はず）　そんなら首尾よく權八が

ト思ひ入れあつて向うへ行かうとする。助市、水右衞門を捕へる、はずみに手を捕へる。水右衞門、腕の痛む思ひ入れ。

アイタヽヽヽ。

ト疵口を押へる、助市見て

助市　其方のこの生疵は

水右　ヤア。（ト悄りする）。

袖助　お旦那には一刀、相手へ薄手を負はせたる、證據はこれなる刀の血。

八重　何か怪しき水右衛門どの。

助市　右内どのゝ最期に、數槍の口走り。

八重　丸に井の字の小柄の主を、權八樣と云はれしも

助市　詮議をとげなば明白ならん。

袖助　何は兎もあれ

皆々　心得ぬは水右衛門。サア、尋常に（ト皆々詰め寄る）。

水右　オヽ、名乘つて聞かさう。いかにも重なる遺恨によつて、右内は身共がおッ殺したわ。

皆々　さてこそなア。

水右　是非がない。この場にて直樣敵の勝負せん。うぬら、いち〳〵

ト思はず蛙丸を拔く。蛙の聲すさまじくする。皆々驚き

八重 ヤア、その刀は拜領の

助市 聞き及んだる蛙丸。

水右 それ知られては

ト逃げようとするを、袖助さゝへる。助市は手槍にて水右衞門へ突いてかゝる。立廻りあつて、槍にて蛙丸を叩き落す。水右衞門は元の藪垣へ逃げ込む。五郎作、蛙丸を取り上げ

五郎 この蛙丸は上がり物。

八重 それを

トかゝる。立廻りあつて、よろしく見得。道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、松原、眞中に辻堂、この軒の下に源之丞、半合羽、大小、手甲、脚絆、菅笠と飛脚提灯を持つて、雨宿りの見得。雨車、時の鐘にて道具とまる。

源之 急がずば濡れまじものを旅人のといへど、濱松へ國入りの事なれば、少とも早くと心急き、折惡い今日の村雨。文藏は跡になつたか。なぜに早く來ぬ事ぢややら。早う參らぬかいやい。

ト雨やみをしてゐる。矢張り時の鐘にて、東の揚げ幕より水右衞門、走り出て來て、源之丞の提灯を見て、思ひ入れあつて舞臺へ來て

水右　モシ〳〵、それにござるは旅人さうなが、その灯を貸して下さるまいか。

源之　それはお易い事でござる。灯をお貸し申さうが、雨も降りますれば、この辻堂へ

水右　忝うござる。（ト云ひ〳〵顏見合せて）

源之　こなたは水右衞門どのではござらぬか。

水右　石井源之丞どの、只今御歸國かな。（ト思ひ入れ。）

源之　この體は

水右　イヤ、淺羽の村の鄕士どもが、手練が見たいとあるゆゑ、立合ひに參つて、何奴も此奴も見せ附けましたて。

源之　そりや鞠谷流の達人のこなた、さうであらう。

水右　そこでそれを殘念がつて、身共が歸り道で、狼藉に及びましてござる。それをやう〳〵と追ひ拂つて參りました。

源之　それは御無難にようござつた。

水右　その灯にて

ト辻堂の鰐口の紐を取つて腕の疵口を縛り、とつくりと支度して行かうとする。このうち源之丞、合點のゆかぬ思ひ入れにて

源之　水右衞門どの、屋敷へお歸りなさるゝなら、御同道いたさう。

水右　イヤ、身共は東の方へ

源之　ヤ。

水右　この疵養生に島田金谷へ。(トくどく云ふ)

源之　イヤ、心得ぬ水右衞門どの、何か詞の轉倒は、屋敷を立ち退く樣子と見受けた。

水右　ヤア。(ト思ひ入れ)

源之　それに、こなたのその腕に、受けたる疵は心得ぬ。

水右　サア、この疵は石井右内

源之　ヤア。

水右　エヽ、いけ邪魔な。

ト行かうとする。源之丞捕へんと立廻り、水右衞門は一刀拔いて源之丞へ切り付ける。これにて源

之丞、腕を押へてタヂ／＼となる。このうち向うより文藏、半合羽、大小、菅笠、風呂敷包みを割掛けにして出て來て、舞臺へ來て水右衞門と摺れちがひ、心得ぬ思ひ入れにて、源之丞に行き當る。

源之　文藏か。

文藏　源之丞樣。

源之　いま水右衞門が我が腕へ

文藏　ヤア。（ト悧りする。）

源之　手疵を負はせて

文藏　ナニ、手疵とは

ト側の提灯を取つて見るを、水右衞門、提灯を叩き落す。源之丞思ひ入れ。文藏は刀へ手をかける。

この途端、よろしく、ひやうし

幕

三幕目

鈴ヶ森の場

役名――白井權八。幡隨長兵衞。赤羽根五郎作。石井下郎、袖助。藤川下郎、鐵平。飛脚、郡八。雲助、權。同、三。同、松。同、鍋。同、音。

三幕目の口上觸れ濟むと、直に三味線入りの馬士唄になり、幕の外を揚げ幕より、袖助、旅奴の形、脚絆、草鞋にて、菅笠を持ち、後の方を見返り〳〵、花道へ出て來て

袖助 さて〳〵埒の明かぬ駕籠の者ぢや。何をして居をるやら。あの駕籠では源之丞樣も、さぞ御窮屈であらう。ハテサテ、遲い駕籠ぢや。

ト後の方へ思ひ入れしてゐる。矢張り馬士唄にて鐵平、同じく旅奴にて、菅笠をかぶり、いきせきと出て來り、袖助と行き違ひ、足早に行く。袖助見て

モシ〳〵、ちと物が問ひたうござります。

鐵平 ハイ、なんでござるな。

袖助 イヤ、別の事でもござらぬが、この後の鶴見の立場に、若い旦那が駕籠に召してござるのが、矢張り茶屋に立つてゐましたか。また、道までも出ましたかな。

鐵平　なんだか氣が附きませぬが、信樂の前に駕籠が三四挺下りてゐました。どれも皆江戸へござる、武家方と見えました。

袖助　エヽ、そんならまだ立つて居りましたか。モシ、わしの旦那は、お小袖の紋が丸に井の字を附けてゐられますが、そのお方を見さつしやりませなんだか。

鐵平　ナニ、紋は丸に井の字（ト思ひ入れして、袖助が顏を見て）ヤア、わりやア石井の家來、袖助か。

袖助　さうぬかすは鐵平めだな。よい所で（ト立廻つて鐵平を引き附け）サア、奴め、うぬが爰らをまごつくからは、水右衞門も同道であらう。いゝ所で見附けた。うぬを苛なみ、水右衞門が在所……アヽコレ、これにつけても源之丞樣のお駕籠は、何を隙取つてゐるやら。（ト思ひ入れ）

鐵平　コレエヽ、袖助、そんならわれは源之丞どのゝ供をして、水右衞門樣の在所を尋ねて江戸へ下るのか。この鐵平も、水右衞門樣の跡を追つて歩くのだ。知つた事なら云ふべいが、決しておれも知らないほどに、源之丞どのにさう云つて、爰から直に歸るがよからう。藤川樣のござる所は、この奴は知らないノヽ。

袖助　ナニ知らないといふ事があるものか。ぬかさないとウヌ、ひどい目にあはせて（ト立廻つて）エ、コレ、源之丞樣はどうなされたやら。

鐵平　その間に爰を

ト駈け出す。袖助引附ける。鐵平立廻つて振りほどき、一散に幕の内へ入る。袖助、思ひ入れあつて

袖助　ウヌ、鐵平め、敵の手がかり。

トごん〳〵になり、鐵平を追つて入る。直に浪の音、時の鐘にて、幕明く。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、正面に大なる榎の木、吊り枝、所々に振りよき松、この枝に鍋を吊し、爰に雲助の松、焚き火をしてゐる。舞臺先に浪板、石の地藏など、すべて鈴ヶ森の景色にて、幕明く。

松　成る程、夜は短かくなつたぞ。たつた今、日が暮れたと思つたが、もう五ツか、ハテ、何ぞよい鳥がかゝりさうなものだが。

トまた浪の音になり、向うより飛脚郡八、頭陀をかけ、柳行李、風呂敷包みを肩にかけ、飛脚提灯、三度笠を持ち、出てくる。あとより雲助の權、同じく三、附いて出て、花道にて

三　モシ〳〵、僅かな駄賃で、その荷を持たせておくれなされませ。ほんの酒手でようござりまする

郡八　エヽ、しつこい。こればかりな荷が苦勞になつて、道中がなるものか。エヽ、附くな〳〵。

權　モシ、お侍ひ樣、さう仰しやらずと、ちつとばかり酒手をやつて、お持たせなされませ。

郡八　エヽ、此奴までうるさい奴だ。どうあつても、賴まないぞ〳〵。

ト云ひながら舞臺へ來る。權、先へ廻つて、ちよつと思ひ入れして松に、いゝ鳥だといふ思ひ入れ。松、のみ込むこなし。三、郡八の荷へ手を掛け

三　先刻から十四五町、口の酸くなるほど云つても、持ち抱へたこの小揚げ、サア、持つて行かうよ

ト荷を取らうとする。郡八、恟りして荷を押へ

郡八　此奴が〳〵、持たずともよいといふに、アタしつこい。この上は、どうでも否だ。

ト行かうとするを、松、とめて

松　モシ、旦那、さう云はずと、廉く持たせてお出でなさい。

郡八　イヤ、持つてもらはいでも大事ない。身共は遠州より、江戸の屋敷へ急なお飛脚、御狀を持つてのお使ひだ。この位な荷が何程の事があらう。持つてもらはずとよい。附くな〳〵。

三　コレサ、附くな〳〵もすさまじい。おいらは乞食ぢやアないよ。

松　それ〳〵、わしらは五十三驛を股にかけて、上り下りの荷を當てに、その日を暮らす雲助だよ。

権　持つてやらうと云ひ出したからは、否でも應でも、その荷はおれが持つて行く。

郡八　コレエヽ、此奴等は何をしやァがる。アヽ、聞えた。うぬらはこりやァ雲助といへど、この街道の働きだな。

松　知れた事だ。晝は雲助、夜は追剝、なんと精が出ようがな。

三　モシ〳〵、とても斯ういふ所へ通りかゝつたが不運、身ぐるみ脱いで行きなさい。

権　四の五のぬかすと引ッ剝ぐぞ。

松　サア、お飛脚、脱いだり〳〵。

郡八　なんだ、身共に脱げ……イヤ、此奴等は身の程を知らぬ奴だ。身共は今も云ふ通り、遠州濱松家より、急ぎの御狀を持ち參つた、時限りの飛脚だワ。エヽ、命知らずめ、退いて通せ〳〵。

三人　やかましい。ふん剝げ〳〵。

郡八　おのれ、もう料簡が

ト抜かうとするを、皆々寄つて、縫ひぐるみにて郡八をぶち倒し、丸裸にする。郡八、褌一つになる

アヽ、コレ〳〵、せめてその頭陀を下さい、拜みます。

松　やかましいわえ。うしやァがらないと、うぬが刀で切り下げるぞ。

ト抜いて振り上げる。郡八、身を縮め

郡八 アヽ、御免なされませ〳〵、お前方は追剝をぶちつこになされると思ひましたら、誠になされまするが、モシ、どうぞ私しばかり、ぶちつこにして下さりませぬか。

三人 エヽ、うるさい奴だ。うしやァがらないか。

郡八 アヽ、參ります〳〵。裸で百右衛門歸らりよか。これでは地内へ歸られない。

ト節を附けて云つて入る。松、着物と大小を取り上げ、いろ〳〵見て

松 今の飛脚めは、淺草の地内から來る筈があるわえ。

三 千手觀音がゐるか。

松 噓アねえ。しかし、この頭陀の中には、せめて遣ひ殘りの路銀でもありさうなものだ。(ト云ひながら頭陀の中を探し、二朱の包みと手紙を出して)これ見やれ、たつた一分二朱あるワ。まづこれを三つ割りに。(ト金を分け、手紙を取り上げ)この手紙は何だ「御上屋敷御役所衆中樣へ。御國屋敷役人中」。

三 (郡八が置いて行つた提灯を取り上げ)中を讀んで見るがいゝ〳〵。

松 ドレ〳〵……「石井右内を殺害なし、同家中赤羽根五郎作同心の趣きにて、蛙丸の刀奪ひ立退

き候ふは藤川水右衛門……」。とんだ手紙の文言だ。

三　その五郎作といふは、あの新入りの五郎作ぢやァないか。

權　そんな事かも知れない。

松　それで思ひ當つた。彼奴が大事にする竹杖は、この手紙にある蛙丸だわえ。

三　ハテ、とんだ事から、杢が割れるものだな。

トこのせりふの内、向うより五郎作、雲助の姿にて走り出て

五郎　コレ〳〵、たつた今度へ、屋敷の飛脚らしい奴は來なんだか。

三　オヽ、五郎作か。おぬしの云ふその飛脚は

五郎　來たか〳〵。

松　來たとも〳〵。いま手も濡らさずに引つ剝いだ。ところが中にあつたこの手紙。

五郎　ドレ、見せやれ。（ト取つて開き）ヤア……「石井右内を殺害なし、同家中赤羽根五郎作同心の趣きにて、蛙丸の刀を奪ひ立退きしは、藤川水右衛門……」。サア〳〵、こいつは油斷がならねえわえ。

松　それでおぬしが五郎作といふ名も知れた。ドレ〳〵、その後を見せやれ。アヽ、なんだ。「仔細は

しかと相解り申さず候へども、老臣本庄助太夫を暗討ちに討つたるは、因州の武士、白井兵左衛門が伜とばかり、實正は未だ定かならず」。ハヽア、そんならおぬしが持つてる竹杖は

五郎　コリヤ、聲が高い。おれが駈落ちの根本は、殿の祕藏の蛙丸といふ刀よ。

松　そりやァ遠に睨んでおいた。

三　ハテ、いゝ物を持つてるなア。

ト馬士唄、バタ〳〵になり、向うより鐵平駈けて出て來る。松、見て

松　そりや又よい鳥が來たぞ。物も云はずにふん剝げ〳〵。

五郎　サア、旅人、裸になりやれ。（ト鐵平の胸倉を取り、顏見合せ）ヤア、わりやァ鐵平ぢやァないか。

鐵平　オヽ、お前は五郎作樣だね。

松　なんの事だ。近附きの人か、

五郎　近附きの段か、國屋敷の折助よ。

鐵平　モシ〳〵、五郎作樣、そんならお前は雲助になられましたか。ハテ、氣の毒な。………アヽコレ斯ういふ内にも今の野郎は來はしまいか。（ト逃げ支度をする。）

五郎　コレ〳〵、今の野郎とは誰が事だ。

鐵平　お聞きなされませ。石井の下郎、袖助めに逢ひましたが、モシ〳〵、爰へ今に源之丞めが參りま
す〳〵。

五郎　なんだ、源之丞が……そいつは斯うしては居られない。（トうろ〳〵する。）

松　コレ〳〵、五郎作、おぬしが爲にならない奴なら、寄つてたかつてぶち殺し、海へざんぶりやつ
てしまやれな。

鐵平　それ〳〵、それがいつちいゝ料簡だ。袖助めも、源之丞めも、ぶち殺してしまふが、上分別でご
ざります。

松　コレ〳〵、奴どの、定めてそいつ等は路銀があらうの。

鐵平　ある段か、遠州濱松の家中、石井源之丞といふ侍ひが、わしが世話になる旦那を、敵といつて追
つかけて出た道中ゆゑ、慥かに路銀はしつかりだ。

松　して、その侍ひの名は何といふ。

鐵平　石井源之丞といひます。

皆々　ナニ、石井源之丞だ。覺えた〳〵。

五郎　コレ〳〵、鐵平、おらア先へ逃げるぞ〳〵。

三　エヽ、臆病な男だ。

松　コレ〱、奴どの、その源之丞とやらは、何ぞ目じるしがあるかえ。

鐵平　サア、目じるしといふは、今逢つた袖助めがぬかしたは、小袖の紋は丸に井の字を附けてゐるといふからは、丸に井の字の紋どころ。年頃は二十歳ばかりの侍ひが、石井源之丞だぞ。

松　のみ込んだ〱。侍ひの名は石井源之丞。家來が袖助。紋どころは

三　丸に井の字だ。

鐵平　それ〱、これからおれも交つて手傳はう。

五郎　身共は直に、ふけるぞ〱。

松　コレ、皆の者、必ず丸に井の字を

三人　合點だ〱。

五郎　そんなら宜しく賴むワ。

ト時の鐘になり、五郎作は下座へ入る。バタ〱になり、向うより雲助の七、柳行李を抱へてくる。後より同じく八、錢の入つたる木綿の財布を持つて走り出て來る。

松　ヤア、二人とも何かしめて來たな。

七　なんでも大森でこの仕事をして、爰まで息もつかずに來たよ。

八　それ〳〵、なんでも宰領めが氣の附かない内にと思つて、とう〳〵引ツ浚つて來たこの錢財布、大方二三貫あらうと思ふ。

七　おれもこの行李が命がけの仕事。明けない内が樂しみ。こいつもしつかりと睨んだに違ひない。

松　オヽ、さういへば、コレ〳〵、わいらが爰へ來る道に、丸に井の字の紋つけた、旅人は見えなんだか。

七　ナニ、丸の井の字……見た〳〵。そりやァ慥かに駕籠に乘つてゐた、ナア

八　それ〳〵、もう爰へ來る時分だが、それがどうした。

鐵平　その丸に井の字が、今夜の商賣よ。

八　サア、面白くなつて來たわい。

松　コレ、今にもその丸に井の字が來たなれば

ト皆々に囁く。皆々思ひ入れあつて

三　そんなら爰に突ッ俯して、頑張るのか。

松　そりや。

ト菰を五六枚出す。皆々これを着て

皆々　果報を待たうか。

ト方々へ寝る。松、思ひ入れあつて

松　ドレ、仕事にかゝるべいか。

ト矢張り時の鐘、浪の音、向うより雲助の鍋、同じく音、四ツ手駕籠を舁いで出て來る。中に權八、着流し、大小の形、丸に井の字の紋附いたる小袖にて乘りゐて、舞臺へ來ると、駕籠を下し

鍋　モシ、約束の所まで參りました。

音　なんとモシ、早く來たぢやござりませぬか。

ト草履を直す。權八、駕籠より出て、あたりを見廻し

權八　然らば爰が觀音前といふ所か。

鍋　さうサ〳〵、爰が觀音前でござりますのサ。

權八　ヤレ〳〵、大儀であつた。誠に夜中といひ、勝手知らざるこの道筋。併し、あたりは濱邊ぢやさうな。

音　なんでも爰が、約束の所でござります。

鍋　サア、早く駄賃をお貰ひ申したうござります。

權八　成る程〱、極めの駄賃は、六鄉とやらから觀音前とやらいふ所まで、五百文の約束なれど、夜中といひ……サア、これを取つておきやれ。

ト二朱を包んで出す。鍋、取つて

鍋　こりやアたつた二朱かえ。

權八　ハテ、五百文のところなれど、心を附けて

音　たつた二朱か。

鍋　(思ひ入れあつて)おきやァがれ。二朱や三朱取らうといつて、よる夜中齷齪するものかえ。

ト權八に打ち附ける。

權八　して、どれほど取らうと申すのだ。

鍋　おいらが駕籠へ乘りやァ

音　持つてゐる金は

兩人　有りつたけサ。

權八　さては案內知らぬ一人旅と侮り、こりや物取りぢやな。

鍋　オヽ物取りだ。

音　その温袍から

鍋　ひつたくる。

ト兩人、權八へかゝる。ちよつと立廻り。松、出て兩人を引分け

松　コレ〳〵、待てよ〳〵。

兩人　とめるのは誰だ〳〵。

松　ハテ、おれが待てといふから、マア、待て〳〵。（ト引分け）今承れば、彼奴等が申し條、さぞお腹が立ちませう。お聞きの通り、惡い奴と申しませうか、とても癩病に棒打ちとやら、マア御料簡なされませ。

權八　これは〳〵、どなたかは存ぜぬが、忝うござる。あまりなる法外ゆゑ、やむ事を得ずして、あなたは、何れへお越しなされるのでござります。

松　御尤もでござります。二人の奴等は、私しがどうとも致します。必ずお氣遣ひなされまするな。

權八　成る程、そこもとは所の人かは存ぜぬが、これより江戸表へは、いか程ござるな。

松　江戸へはもう二三里ありませう。マア、ゆつくりと、莨でものんでござりませ。

權八　イヤ〳〵、短夜の事なり、當所不案内の某、急がずばなりますまい。忝うござつた。

ト行きかける。松、とめて

松　モシ、若いの、一服のんでござりませな。

權八　イヤ〳〵、拙者莨は所望でござらぬ。

松　コレサ、旅人、貴樣は道を聞いて、禮なしに通るのか。その上、莨をのめといやァ、所望でないの何のと、莨が祭に出やァしまいし。こりやァ何か、雲助だによつて、この火でのむのは穢いのか。嫌ひでも好きでも、のまさにやァならないぞ。

權八　これは又、無理を申す男ではないか。こなたが雲助やら、何やら、なに身共が存じて居らう。道を急ぐゆゑ急ぐと申したが、何と致した。

松　モシ〳〵、お侍ひ樣、その急がつしやる道筋も、わしが敎へて上げるによつて、マァ一服のんでゆけといふのだ。それになんだ、忝いとばかりで禮だと思ふか。

權八　イヤ、身共當所の勝手は知らぬが、この道筋では、道を敎へた禮物を取るか。

トこの時皆々、菰より顔を出して

三　それ〳〵、紋は丸に井の字だぞ。

皆々　石井源之丞だぞ。しめろ〳〵。

ト　これにて權八、左右を見やり、思ひ入れあつて

權八　待て〳〵。身の紋どころが丸に井の字ゆゑ、石井源之丞ぢやと、伏したる非人の口々に申すは、何とも合點がゆかぬ。……もしや遠州より先立つて（ト思ひ入れあつて）して、身共が石井源之丞なら、なんと致す。

皆々　酒手をもらふのよ。

權八　そりや、なんで

松　疊んでしまへ。

ト　でんつゝ、浪の音、捨て鐘になり、皆々割り木を持つて打つてかゝる立廻り。鐵平は權八を見て、人違ひせしといふ思ひ入れあつて、榎の上へ逃げ上り、隱れる。權八は五人を相手に立廻り、皆々手を負ふ。この時向うより垂れを下せし四つ手駕籠、棒端へ小田原提灯をつるし、三度笠を附け、駕籠舁き二人、舁いで出て來て、この體を見て

駕舁　ヤア、拔いてるワ〳〵。

ト　駕籠を捨てゝ逃げて入る。このうち權八、五人を見事に切り倒し、松、かゝるを又切り倒してとゞ





めを刺す。捨て鐘の頭を打つ。駕籠の垂れを揚げ、長兵衞、半合羽、一本差し、脚絆にて、駕籠の中より樣子を窺ふ。權八、血刀を拭ひ、行かうとする。

長兵　お若いの、待たつしやりませ。

權八　(思ひ入れあつて) 旅(ヽ)のお方か存ぜぬが、待てと仰せらるゝは、手前が事でござるかな。

長兵　いかにも左樣。鎌倉方のお屋敷へ、多く出入りのわしが商賣、それをかこつけありやうは、遊山半分江の島の、開帳かけて思はぬ隙入り、どうで泊りは品川と、川端からの戻り駕籠、通りかゝつた鈴ヶ森。お若いお方のお手の內、あまり見事と感心いたし、思はず見惚れて居りました。

ト權八と顏見合せ、思ひ入れ。

權八　拳もにぶき生兵法、お恥かしう存じまする。

長兵　不躾ながら見ますれば、未だ角髮のお侍ひ樣、お一人旅でござるかな。

權八　御覽の通り某は、勝手存ぜぬ東路へ、中國筋よりはるゞゝと、暮れに及びし磯際にて、一人旅と侮つて、無法過言の雲助ども。彼奴等は正しく追ひ落し。命を取るも殺生と、存じたなれど附け上り、やむ事を得ぬ不敵者、刀の穢れと思へども、往來の人の爲にもと、かゝる仕合せ。雉子も啼かずば打たれまじ。ハヽアヽ、益ない事を致しました。

長兵　ハテ、大丈夫なお若衆樣。切られた奴等は五六人、あなた樣には只お一人、若年のお手際には、憚りながら驚き入りました儀でござりまする。して、中國と仰せらるゝが、御生國は何れ、何御用にて江戸表へ。

權八　サ、別して用事もござらねど、繼しき母の讒により、心に思はぬ不孝の汚名。故鄕は即ち因州生れ。父の勘氣に力なく、お江戸は繁華と承り、武家奉公を致さんと、仕官の望みに習はぬ旅、見ますれば其許には、江戸表のお方と見え、御深切のお尋ね。しるべ便りもござらぬ拙者、お詞に甘えお賴み申す。何卒お世話下さらば、忝う存じまする。（卜手を突いて思ひ入れ。）

長兵　成る程、御身分の一通り、承つて御尤も。殊に只今の御手練のほど、拜見いたす上からは、猶更以てあなたのお世話、致すまいものでもござりませぬ。宿無しどもとはいふものゝ、四人五人のこの死骸、こなさんの難儀とならば、どこまでも私しが、云ひ拔けて進ぜませう。往來端に見苦しい。犬の餌食に

卜死骸を一方に方附け、思ひ入れあつて

口外はしませぬ。お若衆樣、必ず案じさつしやりますな。

權八　流石は江戸氣のそのお詞、これも爪づく緣の端、力と賴むそこもとの、御家名聞かぬその內に、

名乘る拙者が姓名は、因州の生れにして、當時浪人、白井權八と申す者。

　　　トこのとき榎の上にて鐵平思ひ入れ。

長兵　すりや、お若衆には權八どのとな。

權八　して、其許の御家名は

長兵　ハイ、訊かれて何の某と、名乘る程の町人でもござりませぬ。したが、生れは吾妻路に、身は住み馴れた隅田川、流れ渡りの氣散じは、江戸で噂の花川戸、幡隨の長兵衞といふ者でござります。

權八　エヽ、アノ其許樣が、中國筋まで聞えたる、江戸に名高き幡隨の

長兵　その長兵衞とは、わしが親仁でござつたが、八年あとに故人となり、今の幡隨長兵衞は、誠に以前の俤ばかり。親に似ぬ子の無口、生眞面目、洒落といつては一口も、氣轉のきかぬわしなれど何れも樣の御贔屓で、今度で丁度三度目は、親仁の役と間に合ひの、舍梨の鉛か銀ながし、流れの末のわしらでも、水道の水の有り難さ、野郎はちつと小鬢だが、膽は根生ひの江戸氣質、弱い者をば引立てゝ、强い奴なら向う面。ほんの事だが、韋駄天が革羽織で、鬼鹿毛に乘つて來ても、五分でも後へ寄るのぢやァごんせぬ。及ばずながら達衆の端くれ、阿波座烏は浪花潟、藪鶯

は京育ち、吉原雀を羽掻につけ、江戸の男と立てられる、親の讓りの男一疋、いつでも尋ねてござりませ、蔭膳据ゑて待つてゐますぞ。

權八　御深切のそのお詞。然らばお世話下されて、アノ武家方へ

長兵　口入れ致すはわしが商賣、殊に五月は狩倉ゆゑ、諸家の屋敷でお抱への、侍ひ衆を尋ねる最中。この長兵衞が手先から、若黨奉公の口なりと。

權八　萬事よろしく長兵衞どの

長兵　頼まれました。權八どの。爰から直に同道して

權八　何から何まで、お禮は詞に

長兵　なにサ、こゝが江戸ッ子、恩には着せませぬ。

ト疊みし提灯を持つて、舞臺前よき所まで行きかけ、以前の手紙を見附け、取り上げる。鐵平、上より窺ふ。

なんだ、手紙が落ちてあつた。

ト提灯のあかりにて見せる。權八、側へ寄り、見て

權八　ナニ〳〵……「石井右內を殺害なし、同家中赤羽根五郎作同心の趣きにて、蛙丸の太刀を奪ひ立

退き候ふは、藤川水右衞門」。(ト讀むことありて)すりや、古朋輩の右內どのには、アノ、藤川が

長兵　その石井とは、たしか女房のお時が勤めた、女中の名はお松、その隱れ家は明石町、圍つた旦那の苗字は石井。

權八　すりや、源之丞が隱し妻。

長兵　もし、その人が。(ト狀を見て)「仔細はしかと相解り申さず候へども、老臣本庄助太夫を、暗討ちに討つたるは、因州の武士、白井兵左衞門が忰とばかり、實正未だ定かならず」(トふり返り、權八と顏見合せ、思ひ入れあつて)權八どの、苗字も慥か

權八　エ。

ト思ひ入れ。長兵衞、持つたる狀を提灯の火にて燒き捨てる。パツと燃え上る。權八これにてホツと思ひ入れ。

長兵　これで何にも白井氏。

權八　武士も及ばぬ

ト思ひ入れ。燃えたる狀の灯影にて、前の流れへ鐵平の影うつる。權八見附け、手早く手裏劍を打つ

鐵平、飛び下りて

鐵平　權八か。

ト云はうとするを、權八、一刀に切り下げる。長兵衞見て

長兵　其奴も正しく

權八　彼奴等が同類。

ト長兵衞、提灯にて鐵平の疵口を見て

長兵　天晴れお手際。

權八　ゆるりと江戸で

ト血刀を拭ふ。これを木の頭。

兩人　逢ひませう。

ト鐵平、見事にかへる。權八は白刃をしやんと納める。この途端、よろしく、ひやうし

幕

四幕目　對面の場

浄瑠璃「元爲見花所領椎」　富本豊前太夫連中
大薩摩文太夫連中

役名――工藤左衛門祐經。曾我ノ十郎祐成。曾我ノ五郎時宗。小林ノ朝比奈。化粧坂の少將。手越の少將實ハ京の小女郎。蒲冠者範頼。北條四郎時政。久久美庄司景光。二の宮太郎朝忠。宇佐美庄司祐政。宇佐美七郎祐員。梶原平三景時。梶原源太景季。御所五郎丸重宗。狩野之助宗茂。近江小藤太成家。八幡三郎行氏。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、結構なる欄間、見附け、庵に木瓜の金襖、一面に升組みの揚げ障子、枝折り戸、柴垣に卯の花の盛り。上の方に梅の大樹、紅白の釣り枝、これは造り花の模様、管絃にて幕明く。

ト頭取出て、浄瑠璃の口上觸れある。富本の前彈きにかゝる。

富本〽卯の花の雪に粧ふ白粉も、造り花なる梅松櫻、松の幹なる赤澤山、椎の木三本鉢の木や。

ト誂へ、人寄せやうなる鳴り物になり、上の方に十郎祐成、羽織衣裳。眞中に少將。五郎時宗も羽織衣裳、逆澤瀉の鎧を持つてゐる。前に椎の木の鉢植を並べ、この見得にてセリ上げる。花チラ〳〵降

る。鳴り物打ちあげる。

富本へ花の兄たる梅ヶ香に、弟にたとへし櫻木の、蕾も惠む時宗が、待ち設けたる十八年、十八公のその榮え、松は太夫の縁より、五葉の街美しき、素顏も雪の化粧坂。

トこの文句にて、三人ちよつと振りあつて

祐成　今日工藤祐經どの、賴朝公より相違なく、賜はる所の三箇の莊、松梅櫻の造り花は、時にたとへし雪の卯の花。

時宗　目ざす敵は任官と、聞くも無念の凝る思ひ。

少將　その今樣の鉢の木は、赤澤山を寫したる、椎の木三本、葉の茂り

時宗（キッとなり）思ひ廻せば口惜しき、赤澤山のこの椎の木。

祐成　逢ひたい見たいと思ひ初め、いつか五つや三ッ蒲團、その鉢の木のお職株。

時宗　閨の狩場のかゝりとも、切つて無念の父の仇。

祐成　コリヤ。

時宗　でも

祐成　ハテ、鉢の木に落花狼藉。アレ、卯の花の雪が散るわい。

少將　眺められたい梅松櫻が

ト少將、時宗へ寄添ふを、突退けて

時宗　エヽ、面倒な。邪魔なす女め。(ト刀へ手を掛ける)

少將　切るともよもや惜しからじ。

トこれより大小入り、大盡舞の振りになる。

富本〽まづ禿より思ひそめ、窓の梅の北面は、仇し身こそは先立ちて、背を切りやそむべき主と寢てこそ嬉し〽お顔を見れば夜毎だに、花少し遲ければ、もしやはふると心づくしもなぶられて、ひざくらぞ恥かしや〽さて松はつれなきぞ悲しき。

トこの文句にて少將、時宗を捕へ、鉢の木を象り、大盡舞より口說き模樣の振りあつて

ほんにつれない時宗さん、戀路の端の一夜の契りを

時宗　否だワ。この時宗は箱根の稚兒、出家を遂ぐる身の上なれば、女は嫌ひだ。

少將　さう云はしやんすりや、江口の君が、假の宿りに心とむなと云はれたは、お前のやうな優法師。

祐成　おれは又、木の端のやうに、ほき〲と折れる。オヽ、野暮々々。これでは色事の氣遣ひない。アヽ、おれなれば、どうしたはずみには、缺脣でも鼻そげでも

少將　エヽ、阿房らしい。

時宗　（少將を枝折戸の外へ突出して）兄者人、ほんに色にはすき成どのだなア。

富本〽梅に立つたる兄の身も、この返答に行きくれて。

祐成　脇へも後へも參り難しぢや。

少將　祐成さん、ほんにお前も戀知らずぢやなア。

祐成　ぢやというて、あの通りの弟。日頃敵が討ちたい〳〵と、一萬が思ひ、十八年の天津風……ではない、これより十八町彼方に、山下の宿というて、化粧坂に近ければ、もう去んだがよい。

少將　エヽ、そのやうな事を

祐成　でも、この色事の取り持ちが（ト向うを見て）なう〳〵、誰人ぞお出であれ、あまりの大野暮らしく、申す事さへ聞き入れぬ。オヽイ〳〵。

ト上の方の幕を切つて落す。大薩摩連中居並び、直に人寄せになる。

大薩摩〽かゝる所へ向うより、和田が三杯飲みすごし、機嫌もよしや、エヽイ、醉うた時、茜さす花の吹雪か梅の花。

トこの文句にて、向うより朝比奈、羽織衣裳、下駄、傘にて出て來て、花道にて

大薩摩〽あぶない。

朝比　合點ぢや。

大薩摩〽あぶない。

合點ぢや。

大薩摩〽道は七筋八筋にて、くる／＼廻るワ、ちら／＼と、うつらふ人影は、何者か怪しやと、傘かざしよく見れば、ヤア化粧坂の少將かと、云はんとせしが、いや待てしばし我が心。

トこの文句にて朝比奈、本舞臺へ來り、傘をかざしゐる。

祐成　最前よりどう少將も籬に彳み、前後忘れて困つた所へ、戀の取り持ち。さては廓の鬼こもる

大薩摩〽鬼か。

朝比　いんにや。

大薩摩〽人か。

ムウヨ。

祐成　（朝比奈を見て）さういふ聲は小林か。

少將　ほんに朝さんぢやわいなア。

朝比　今日は祐經どのゝ所へ、三箇の莊の鉢の木の今樣と、聞いて一杯引つかけて、出て來て見れば、表には少將。(ト時宗を見て)少將、こいつ否な奴だな、兄イえ、何だか膨れてゐるな。

時宗　朝比奈か。女詮索で腹が立つわい。

朝比　アヽ、そんなら少將が兄イに惚れたのか。

祐成　アラ鉢の木の少將が据ゑ膳、濡れ手で粟のいゝ事は、日本一の醍醐味の、粟飯ならぬ女郎花。

富本〽何ち綺麗に美しい、萩の折れ箸土器も、よしありげなる姿なり。

ト祐成、少將を突きやつて

うまい盛りを食はぬとは惜しい事。せめて夢にも知らせたい。

朝比　惚れた惚れぬはちくらのえん、榮華も夢は五十年、その邯鄲の假り枕。

富本〽さつてもさても、どちらを見ても戀のたゞ中、口舌の戀仲、うまい盛りの、へヽヽ、口舌の段〽それ女郎買ひは、四ッ手駕籠に乘つて飛んで散財し、猪牙は蓑を着て漕いで徘徊すといへり〽されば今する口舌も、元せし癡話に變らぬぞ〽自體我等は色事が得物、なれが姿にほだされて、太鼓末社に騒ぎ立ち〽お前の袖と、わたしの袖と、二つ合せて、四つの袖の〳〵〽おこと寢るかよ、燒酎飲むか、わたしや下戸の性で、おこと寢るのも〳〵、ほんに寢まら

ば面白や。

ト この文句にて朝比奈、面白く振りあげる。

時宗 やかましいワ朝比奈。色の取り持ち、よしにしろ。この上は祐經どのへ、逆澤瀉の鎧進上した上、云ふ事を云ふべいか。(ト鎧を取つてキッとなる)。

祐成 アレ、あゝいふ癇癪持ておぢや。

朝比 コレエヽ、兄イ、短氣を起さず、マア、待てエヽ。

ト時宗を捕へるを、振り切つて

時宗 ヤア、小癪なり朝比奈、汝に樊噲が力量あればとて

大薩摩〽我れ又項羽が勢ひにて、馬に跨り、千里一はね、父の仇には共に天竺波羅門栗毛。

たとはゞ敵祐經が

大薩摩〽天に登らば月毛の駒。

地に又かゞまば

大薩摩〽地乘りの責めはハイシイ〳〵、しとゝしととん、逢ひたい見たい兄弟が、兩馬の引きつれ

連錢葦毛。しと〳〵うつてかけ粕毛。

惡くとめ立てひろぐが最後、馬に准へて一あふり、當てころばすが、退くまいか。

朝比　にしやアおれを、感應寺の富だと思ふさうだ。マア〳〵、とまれエ、。

時宗　エヽ、面倒な、そこ放せ。

朝比　（少將へ思ひ入れあつて）コレ、少將、おれに代つて抱きとめな。ソレ、しつかりと思ひの田之助だア。一番とまつておくれなら、忝けなんにも云はないで、色よい返事が嬉しいよもさア。

富本〽もさアと聞くさへ恥かしい、吾妻男の出立ちばえ。

トこれより少將、朝比奈のこなしにて

少將　とめた。

時宗　放せ。

少將、とめた〳〵、とめたわいなア。

大薩摩〽とめて見よなら利根川の、水の流れも達引の、強い生れの江戸ッ子は、勇み肌ではないかいな。

トこれより大太鼓入り。少將、時宗を捕へ、草摺り模樣の振りよろしくある。朝比奈、女形のこなしにて

富本〽又もとめよならめでたくしでとめやんしよ、それで毎晩通ふ神、宵にいなせにや合圖の手管、その睦言は妹背仲、羨ましいぢやないかいな。

大薩摩〽朝比奈力はそれぎりか。

富本〽とめるもどうも蝶々の、やさしさ髭の化粧坂、男なりける女なり、その雛鶴の羽をしめて抱きつかせたる朧夜は、少將濡るゝ春の雨。

トこの文句にて朝比奈、時宗を捕へ、いろ〳〵振りあつて、時宗を無理に少將の側へやり

朝比　こいつは堪らぬわえ。

ト後見の祐成に嚙りつく。祐成、突き倒し、小言を言ふ。時宗、少將を突きとばし

時宗　何をするのだ。

祐成　祐經どのゝ病氣も全快あつて、かゝるめでたきこの今樣。

富本〽百千鳥、百の囀り鶯の、ほう法華經の初子の日、內裏の儀式囃しもの、神樂催馬樂花やかに、狩衣の袖つゆのとりなり小うち着の、小松の根曳き土大根、かぶらえゝ菜の摘み籠に添へて祝せし老の興。

トこの文句にて向うより、手越の少將實は京の小女郎、着流し廣袖さゝぎ附き、秋野の摺つたる狩衣

なびつかけ、目籠に小松三本入れ、これを提げて、竹の子笠をかざし出で、振りあつて本舞臺へ來り

小女　折も折とて子の日の松は、とりも直さず小松の大臣、重盛樣に召仕はれし、金石樣の御武運の、開くる今日のこの今樣。

少將　そんなら手越の少將さんも

朝比　この今樣の役人か。

小女　ハイ、わたしや都の白拍子。

朝比　それに又、秋野の摺つたる狩衣のその形は

祐成　それこそは、父河津どのゝ御形見。

朝比　それぢやァ手越の少將は

祐成　腹は變れど我れ〳〵が兄弟

小女　京の小女郎でござんすわいなァ。

朝比　合點のゆかぬ。鉢の木の今樣に、椎の木ならぬ子の日の小松を、三本入れて持ち來りしは

小女　それも矢つ張り工藤どのより、云ひ附けられた今日の今樣。

祐成　ハテ、心ありげな

小女　ほんにマア、朝比奈さんの粹な取り持ち、色と戀との譯知りを
朝比　何でも問はしやれ、知つてゐる。
少將　そんならわたしが、
小女　問ひましよ／＼。
朝比　問はしやれ／＼。
小女　扇は
朝比　かなめ。
少將　傘は
朝比　轆轤。
大薩摩〽ひつたんちよほして楔をさそな、すんからもんから／＼、おひやりこひや。
小女　問ふぞや／＼。
朝比　問はしやれ／＼。
大薩摩〽川は石山、雪は越後に花は三芳野。
小女　女郎は

朝比　島原。

少將　揚屋は

朝比　新町。

大薩摩〽意氣地は吉原。

少將　衣裳は

朝比　長崎。

小女　唐人は……唐人は

朝比　ちやからんぷう。

大薩摩〽奴は智慧內、びつこはちか〱。

小女　鐙は

朝比　ゐち〱。

少將　猫は

朝比　にやァ〱

小女　雀は

朝比　ちう〳〵

富本〽すゝめてせい〳〵ひよ〳〵番ひの鴛鴦に、閨の睦言月日押せ、羽を伸す聲の孔雀鳥、染め色鳥のかほよ鳥、にしき鳥。

トこれにて朝比奈と少將、手踊り。

小女　今ぞ世に亡き御方に、準へし小松を、まツこの如く

トニ本の小松を、ありあふ火鉢へくべる。

祐成　すりや、二本のその小松。

朝比　よくはりて、當りたまへや親の敵に。

祐成　ハテ、面白きその秀句。

時宗　いでや敵にあふならば

祐成　浪人ながら兼ねてより、ちぎれたれども逆澤瀉。

時宗　疲れたれども、はだせ馬。

小女　錆びたれども薙刀の、一手も覺えて

三人　日頃の本望。

朝比　勇ましく

少將　御兄弟。

大薩摩〽花待ち得たる優曇華の

富本〽咲くや二つの對面と

大薩摩、富〽盡きせぬ春こそめでたけれ。

ト段切りにて富本、大薩摩連中を消す。時宗キッとなつて

時宗　さうぢや。

呼び　範頼公のお入り。

皆々　ナニ、範頼公のお入りとや。

ト下り葉にて、皆々、下の方へ控へる。下座より範頼、壷折り衣裳、袱紗に包みし御教書を懷中して出て來る。梶原平三景時、同じく源太景季、二人とも柿の素袍。御所五郎丸重宗、石持に丸といふ字の附いたるかちんの半素袍。高股立ちにて、範頼の刀を持ち、出て來り、範頼は上の方、二重臺の褥の上へ坐る。

景時　今日、範頼公より祐經どのへ、一臈職を賜はるにつき、蒲どの入來の附き添へ人、梶原平三景時

景季　お供は即ち惣領の、梶原源太景季。

重宗　お側去らずのお馬添へ、五郎丸重宗。

景時　朝比奈はじめ、御前に叶はぬ。キリ〱爰を

三人　下れエヽ。

朝比　何を。（ト立ちかゝる）、

範頼　景時控へい。範頼今日入來なせしは、祐經に謁し、申し渡す一條あり。あれに控へし者どもは、この範頼を慰めし、今樣の役人ならん。矢張りそのまゝ差置いてよからう。

三人　でも、我が君の御前でござれば

範頼　苦しうない。この席に差置いてよからう。

朝比　それ見たか。意地わるのゲヂ〱め、エヽ、ぐつとでも云つて見ろ。併しながら、鎌倉どのゝ弟君、範頼公の御前は恐れ、もそつと席を、合點か。

祐成　何事も、小林どのゝ詞に附き

範頼　この範頼の目通りを、遠ざからんと申すのか。

祐成　なか〱、左樣でござりまする。

範頼　ハテ、辨へよき柔和の若者。正しくおことは

祐成　アイヤ、我れ〱は

景時　御前だ。下がれ。

朝比　何を。

呼び（向うにて）　時政參上。

ト三味線入りの鳴り物になり、皆々思ひ入れあつて、小女郎は椎の木の鉢植を持ち、祐成、時宗も鉢植を持ち、少将は狩衣を持ち、向うへかゝる。揚げ幕より時政、立烏帽子三ツ鱗の素袍にて出て來り花道にて祐成と時宗を見て、控へいト顏にて知らせ、本舞臺へ行く。後より久須美庄司景光、立烏帽子、素袍にて、蕗の臺を持ち、次に狩野之助宗茂、垣根に卯の花の島臺　次に二の宮太郎朝忠、松の島臺を持ち、次に宇佐美庄司祐政、櫻の島臺を持ち、次に宇佐美七郎祐員、花橘の島臺を持ち、右五人とも庵に木瓜の紋附き、工藤一門の體にて出て來る。兄弟少將、この人々と入れ替り、花道中程まで行く。六人は本舞臺へ來る。

範頼　今樣の役人ども、それに控へい。

ト是れにて四人立ちどまつて

祐成　すりや、我れ〱ら

朝比　蒲どのゝ御意。控へろ〳〵。

皆々　ハツ。

ト四人とも鉢植を前に置き、花道に控へる。

時政　範頼公には、疾より御入來遊ばされしや。四郎時政、只今參上仕つてござりまする。

範頼　北條はじめ工藤金石、家門の輩、今日の參會、大儀にこそあれ。

景光　こは有り難き範頼公の仰せ。君を警衛仕る、役目の次第我れ〳〵は、當家の主祐經の、祝儀を祝さんその爲に、罷り越したる久須美の庄司景光。

宗茂　祐經病氣平癒の由、その喜びの祝儀により、席に連なる某は、工藤一家のその一人、狩野之助宗茂。

朝忠　今日祝儀の今様と、承つて我が君の、御もてなしと東上せし、二の宮太郎朝忠も、同じ勤めの庵に木瓜。

祐政　祐經どのゝ召し出しに、あづかる今日の晴れ舞臺、御賀を祝す家門の內、宇佐美の庄司祐政。

祐員　聖人御代に現はれて、麒麟も出づべき鎌倉山、祐經本領安堵の吉日、祐繼どのより重緣たる、宇佐美七郎祐員。

時政　只今席に連なりしは、工藤金石縁者の何れも。
景光　壽祝ふ持參の島臺。
宗茂　祐經どのを賀したるしるし。
朝忠　申し合せし家門の我れ〱。
祐政　殊に我が君範頼公、今日御入來のおもてなし。
祐貞　さてこそ相詰め
五人　ましてござる。
範頼　して、館の主祐經は、いづくにある。
時政　範頼公の
皆々　御前でござるぞ。
景時　一間にありて出合はぬは、緩怠とやいはん。いで祐經を景時が。（ト屋體へかゝる）
朝比　何をげぢ〱、控へてゐろ。
景時　小癪な小林、われ控へろ。
朝比　何を。

ト兩人立廻つてキツとなる。この時、蒲ドロ〳〵にて、屋體の内より一筋の白氣立ち昇ると、日覆ひより紫の雲棚引き、空にて音樂聞える。皆々見て

皆々　これは。

範頼　ハテ、いぶかしき大空に

朝比　心耳を濟ます音樂の

祐成　雲井はるかに

皆々　聞ゆるは

ト虚空へ目を附ける。この時、屋體の内にて

祐經　「時鳥、信夫の里に里馴れよ、まだ卯の花の皐月待つ頃」。

皆々　祐經どの〻、あの聲は

時宗　ナニ、祐經とや。（ト立ち上がる。）

朝比　コリヤ、無禮いたすな。

時宗　でも

祐經　近江八幡、庭前の障子を揚げい。

近江　ハア、。

ト小太鼓の樂、薄ドロ、空に音樂、この鳴り物にて障子を揚げる。内に、大なる掛け物、工藤武者祐繼、烏帽子大紋にて床几にかゝりたる、白猿の似顔の彩色の畫像をかけ、祐經、羽織衣裳にて、手づから畫像へ香を手向けゐる見得。片手に香臺にのりたる香爐を持ち、刀を突いて虚空に目を附けゐる。左右に、近江小藤太、八幡三郎、柿の上下、衣裳、吉例の兩家老にて、近江は赤木の短刀を刀掛けに掛けたるを持ち、八幡は三方に土器、兩人とも同じく虚空に目を附ける。

祐經　ハテ、心得ぬ。朝暮祐經ゐますが如く、仕へ參らす畫像こそ、當家五代の祖、武藤武者祐繼とも又は祐經の大恩うけし、故人市川白猿とも、その佛前にくゆらすは、重盛公に仕へし砌り、拜領なしたる、天乙女と名づけし名香、手向けの一炷き、えん／＼と、立ち昇りたる香氣につれ

近江　空に聞ゆる音樂に、名に名木の天乙女、迦陵頻迦の妙音も

八幡　斯くやとばかり思はれて、いとも妙なる雲井の果。

祐經　祖父祐經が某へ、眼前奇瑞を見せ給ふか。

近江　又は名木の徳なるか。何にもせよ

祐經　奇異なる事を

三人　見る事ぢやなア。

トどろ〳〵打ち上げ、紫雲消える。

景光　祐經どの、範頼公の御前、席を改め

皆々　出迎はれよ。

祐經　（思ひ入れあつて）ナニ、範頼公の御前とや。近江、八幡、高座の恐れ。

近江　ハツ。

ト鼓の合ひ方になり、祐經、平舞臺へ下りる。近江、八幡、續いて下り立ち、八幡は畫像を舞臺へ下げ、祐經の片脇へ置く。祐經平伏して

祐經　こは範頼公にましますや。祐經、この程まで病魔に冒され罷りありしに、醫藥の助けに全快なし病後の儘のこの祖服、偏へに御高免の程、願ひ上げ奉りまする。

八幡　拙者は當家譜代の家臣、八幡の三郎行氏。承れば頼朝公、富士の御狩の御催ほし、この儀について都より、勅使下向と承る。

近江　主人金石祐經こと、宇佐美の莊は領地いたせど、久須美、河津の兩莊の儀、これまでお上へ御預け。然るに祐經、病氣平癒のその上は、三箇の莊は恙なく、金石へ下し置かれん鎌倉の御沙汰。

範頼　殊更御連枝範頼公、今日の御入來は、定めて主人が身の面目、この上や候はん。執權たる小藤太成家、いかばかりか有り難う存じ奉りまする。

範頼　すりや、聞き及ぶ工藤の執權、近江、八幡。

兩人　ハツ。

範頼　承れば成家は、祐繼みまかりし後、遺言を守り、幼年の金石を、これまで守り立て附き添ふ心底、オヽ、天晴れ〳〵。それは格別、祐經には目通り近う。

祐經　ハツ。

ト平伏する。範頼、三箇の莊の御教書を出し

範頼　いかに祐經、其方病氣快癒の上は、今日よりして一﨟職を賜はり、工藤一﨟別當左衛門の尉祐經三箇の莊の主、七代つゞく工藤の家名。これと申すも武將の見出し、又二つには何れも樣の御高恩。殊には富士の狩倉の砌り、物奉行たる左門衛祐經、相違あらざるこの御教書。イザ

祐經　ハツ。（ト御教書を受け取り、思ひ入れあつて）存じよらざる御惠み。未だ童に等しき若年の金石に、三箇の莊を賜はり、工藤左衛門祐經とは、この身の冥加、家の面目、拙者に至つて七代相續、只今君の仰せの如く、何れも樣のお取り立て、側に掛け置く祐繼の、畫像もさぞや滿足ならん。八

近江　幡、小藤太、家門の面々、喜ばれよ。身にあまりたる須海大海、この大恩は祐經の心魂に徹し、勿體涙に度を失ひ、前後を忘ずる身の大慶、有り難くお受け仕るでござりませう。祐經の滿足、これまでも附き添ひ申せし、小藤太が身の喜び。

八幡　主人の心察しられ、有り難く存じ奉ります。

祐經　我れ〲とても一門のちなみ、共に喜ぶ一家の參會。

景光　工藤の家は萬代不易、おめでたう存じ

五人　奉ります。

ト　これにて花道の四人、きつと思ひ入れ。

範頼　いかに祐經。

祐經　ハツ。

範頼　三箇の莊を領地の上は、只今よりして席を改め、高座いたしてよからう。サ、祐經これへ。

祐經　ハツ、仰せには候へども、身不肖の祐經、その席ばかりは幾重にも、御高免の程、偏へに願ひ上げまする。（ト二疊臺に向つて辭儀する。）

近江　アイヤ、祐經樣、その席に直らん事を御辭退の段、御尤もにはござれども、世にありふれし一﨟

別當の坐すべき席、辭退は却つて恐れあり。申さば掛け置く祐繼樣の、畫像の席と思し召し、一禮あつて、急いでその座へ。

祐經　然らば其方が勸めに任せ、祐經ならぬ畫像と共に、高座仕るでござりませう。

範頼　急いでこれへ。

祐經　ハヽツ。

ト鼓の合ひ方になり、範頼は高二重へ上り、眞中に坐す。上の方に時政、五郎丸、下手に景時、景季左右に控へ、祐經思ひ入れあつて、二疊臺へ上り、きつとなつて

ア、これにつけても、工藤の家のその中に、河津は勿論、曾我どのも、近しき家門のちなみなるに、今は疎遠の兩家の確執。

朝比　近しき一家の曾我なれば、今にも逢つて下さる心か。

祐經　一家の端の曾我兄弟、今日の參會に召し寄せぬが、近頃以て殘念に存ずる。

朝比　そりやア幸ひ。今日今樣の役人こそ、曾我兄弟の者どもサ。

祐經　それは重疊。然らば小林推參いたされ、兄弟二人を

朝比　そりやア近頃かッちけない。さういふ事もあらうかと、あの今樣の二人は、花道へ先刻から待た

せておいた。どや〳〵。（ト花道へ向ひ）コリヤ、それに控へし兄弟の者、定めて委細は聞いたで
あんべい。日頃逢ひたい見たいと思ふ、金石どのも今日からは、三箇の莊のお職株、祐經どのが
われ達に、逢つてやらうとぎやァはる程に、盲龜の浮木、優曇華の、花待ち得たるよき參會、兄
弟二人に少將二人、その呼び出しは小林が、出やらしやんせを差おいて、古風な髭が後にて、控
へたほどに四人とも、おめず臆せず恥らはず、急いで御前へ、のたくり出ろエヽ。

祐成　委細畏つて候ふ。

時宗　合點だ。

ト岩戸神樂に對面三重をかむせ、花道の四人、銘々鉢の木を持ち、本舞臺へ來る。この内敵役、「アリヤ〳〵」の掛け聲よろしくあつて

皆々　どつこい。

ト朝比奈制して、四人とも下手に控へる。

範頼　すりや、今樣の役人と、入り來りし若者は、河津が胤にてありけるよな。

朝比　兄弟二人が祐經どのへ、今日の祝儀に彼方から、持參いたした逆澤瀉。

近江　見ればこれなる少將が、持參いたしたその品は

少將　サア、これは
小女　アイヤ、この狩衣こそ祐安樣、最期の折まで召されたる、
祐經　秋野の摺つたる狩衣か。
小女　いかにも。
祐經　ドレ。（ト狩衣を取つて、よく〳〵見て）亡き人の今は形見と（ト祐成と顏見合せ、思ひ入れあつて）我れも親には幼少にて別れし金石、この身につまされ、曾我兄弟の心の內、思ひやられて（ト思ひ入れあつて）三箇の莊を下し賜はるその祝儀、曾我へも使者を立つべきに、折よく館へ來られしは、滿足至極。アヽ、これにつけても伊東祐親、源家に仕へ居られなば、今日祐經領地なす、三箇の莊は、こりやお手前の領地あるか、又は諸大名多き事なれば、他家にて領地もあらんずもの。未熟の拙者が、存じもよらぬ今年の大役。一﨟別當なんぞとは、誠に世にいふ猿が人眞似、有り難くは存ずれども、何れも樣のお叱りもあらんかと、心も心ならざる祐經。これと申すも祐親どのゝ、誠に心一つから、時世でござれば、道に背きし今度の大役、首尾よう勤められますやう、偏へに賴み存ずる。
祐成　こは改まりし祐經どのゝ詞。我れ〳〵とてもこの年月、一家の端にてありながら、

時宗　ろく／＼顔も得存ぜず、これまで暮らせし今日只今。
小女　祐經樣へ三箇の莊、下し賜はるその日に至つて
少將　兄弟お二人、小女郎さん、わたしらまでも殊ない喜び。
祐經　顏を覺える一家の參會。河津の長男一萬丸、いま祐信の養子となり
祐成　曾我の十郎祐成。
祐經　次男の箱王、人となり
時宗　あれに居らるゝ北條どのゝ烏帽子子となり、曾我の五郎時宗。
小女　わたしは都、風折の、腹に宿りし京の小女郎。
近江　さては手越の少將は、祐安どのゝ實の娘。
八幡　今日今樣の役人と
祐經　花橘に吉例の、今年も變らぬ祐成、時宗。
祐成 時宗　思ひがけなき、
祐經　ハテ、珍らしい
三人　對面ぢやなア。

皆々　どつこい。
時宗　父祐安が仇敵、おのれ祐經。
朝比　コリヤ、そこを一番、おつこてえろ。
祐經　默れ時宗。いま祐經を河津が敵と申すが、コリヤヤイ、保元平治の亂れより、討ち討たるゝは合戰の習ひ。一人々々に敵討をしようなら、武士の胤は盡きるわやい。こゝな白癡者めが。
時宗　卑怯な祐經。この時宗が怖いのか。所領の敵、父の仇。（ト立ちかゝる）
祐經　又しても祐經を、所領の敵、父の仇よと、憤激なす汝が振舞ひ、天晴れ健氣と思へども、今日よりして一臈別當、富士の御狩の惣奉行、役目を受けし某に、凶事ばしあつては曾我の難儀、コリヤ、時節を待て。我れも時節を待てばこそ、身にも應ぜぬ三箇の莊。時節を待て。サア、人は時節を待つものぢやわやい。
時宗　何を。（トきつとなる。）
時政　コリヤ、時宗、祐經どのは今日よりして、富士の狩場の惣奉行、粗相があつては、却つて願ひの
イヤサ、必ずともに控へてゐようぞ。
祐成　時宗、コリヤ、時政どのゝ仰せなるぞ。只何事も、ナ、心得たか……さりながら、絶えて久し

き一家の參會。

朝比　こゝは一番兄弟に、若祐經の祝儀がてら、杯をしては下さるまいか。

祐經　成る程、小林の詞に附き、曾我兄弟へ

近江　一家のはじめ御兄弟、小藤太お酌を仕らう。

八幡　行氏土器持參いたさうか。

ト三保神樂になり、八幡、三方土器を直す。近江、長柄を持ち、立ちかゝる。祐經、土器を取つて一つ干し

祐經　イザ、祐成どの、獻し申さう。

祐成　頂戴仕るでござらう。

ト近江は酌して、祐成、返杯する。祐經取つて

祐經　五郎ヤイ。

時宗　なんだ。

祐經　土器くれん、ズッと參れ。

時宗　戴きますべい〳〵。

ト皆々「アリヤ〳〵」の聲。時宗、グツと寄つて三方を取り

今日はいかなる吉日ぞや、日頃逢ひたい〳〵と、願ひに願ふ祐經どのゝ土器、有り難いやら嬉しいやら、時宗頂戴仕るでござらう。

トきつとなる。祐經思ひ入れあつて

祐經　ホヽウ、似たワ〳〵。

時宗　そりや何者に似ましたな。

祐經　未だ祐經、金石丸の砌りなりしが、落命ありし河津どのに、ハレ、よう似たわえ……父を討たれて無念なか。

時宗　さん候ふ〳〵。

祐經　口惜しいか。オヽ、さもあらん〳〵。ア、親は無けれど子は育つぢやなア。

祐成　然らばこの場で祐經どの

時宗　河津を討ちしは我れなりと、名乘るまいか。

近江　イヽヤ、主人は御存じない。河津の最期は安元二年、その時二人は五つと三つ、金石丸は十五歲。祐親預り置かれたる、三箇の莊を押領し、返し與へぬ無道人。主君は未だ前髮の、その時小藤太

悪智慧を、お勸め申して遠矢の間違ひ、河津は矢先に落命も、みな小藤太のなせる科。主人の心に無き事まで、お勸め申すはこの成家。これと申すも工藤の家、引起さんず心遣ひ。サ、敵は斯くいふ成家だ。恨みがあらば身共にお云やれ。討ち討たるゝは武門の習ひ。殊に仰せの役ゆゑに、主人に代つて河津を討つた、敵は身共だ、成家だ。年々歳々ありふれた、とゞのしまひは友切丸、役にも立たぬ連判を、落して主人にバッサリと、首ぶち切られる敵役、そんな古手な小藤太ぢやない。兄は惰弱に弟は、山寺育ちの稚兒上がり、にぶき手練の手の内で、この成家に刃が立つものか。ハヽヽヽヽ、たはけた事を。

時宗　エヽ、口惜しい。

　ト三方を摑み毀す。朝比奈、キッと押へる。

祐成　イヤ、小藤太、左程主人をかばふとも、射留めし矢の根は工藤の流儀。さすれば敵は祐經どの、それが敵の慥かな證據。

近江　して、その矢の根は御所持でござるか。

祐成　サア、その矢の根は（トつかへる。）

近江　よもや證據はござるまい。

時宗　すりや、その矢の根がこの場になければ、名乗らす事は叶はぬか。

祐經　ア思へば兄弟、悔むは道理。親の敵を討たんず孝心、又小藤太が主をかばふ忠義の心底、感じても餘りあり。近しき一家も、祐親の、心一つで後の災ひ、河津が最期は安元二年神無月、十日あまりの事なりしが

　　　ト大小入りの合ひ方になり

近江　奥野の狩倉事終り、伊豆相模の大小名、陣所々々へ歸るさの、折待ち得たる兩人が、椎の木三本茂りたる

八幡　木の間隠れはこれ屈竟、小楯にとつて待つぞとも

朝比　知らでうたする馬上の武士。第一番にうつたるは、名におふ波多野右馬之丞。

少將　二番に聞ゆる轡こそ、これぞ大場の景親さん。

小女　さて三番は海老名の源八。

祐成　はるか後陣に

時宗　引き下がり

祐經　河津がその日の出立は、コレ。（ト狩衣を取つて、鎧櫃の上へ着せ、思ひ入れあつて）まツこの如く、秋

野の畫きし狩り裝束、竹笠サッと木枯しに吹きそらさせ、栴檀卷きの弓携へ、村雨月毛にゆらりと跨り、絕所惡所の嫌ひなく、駒を早めて歩ませたり。スワ祐安よ、ござんなれと、一の椎の木やり過し、引き絞りたる十三束、よッ引きひやうと放つ矢は、河津が乘つたる駿足の、鞍の山形射削つて、むかはぎの附け際より、前へスッパと射通したり。萬夫不當の祐安も、大事の痛手に堪り得ず、馬よりどうとおちこちの

成祐　すりや、父上はその場にて

時宗　落命ありしも祐經ゆゑ。（ト立ち上がる）。

祐經　小癪なる小冠者が振舞ひ。今聞く通り今日只今、三箇の莊を領地なしたる左衞門祐經、卑怯未練に包まんや。いかにも所領の遺恨により、若年者の金石が、近江八幡に申し附け、河津の三郎祐安を、射落させしは、斯くいふ左衞門祐經なるワ。

祐成
時宗　さてこそなア。

小女　伊豆相模の一の武者、祐安樣も情なや

祐經　惜しや三十三歳にて、柏ヶ峠の露霜と、消えて敢へなき河津が最期。そのとき金石十五歳、今年までは十八年。いま祐經は、祐安最期と同年にて、當年三十三歳の、めぐる因果は車の輪。

時宗　親の敵、祐經觀念。

祐經　コリヤヤイ、時宗、たとへ敵と名乘ればとて、富士の御狩の惣奉行、役目かうむるこの祐經、大任終らぬその内は、某に指でもさせば、曾我の難儀、養父祐信の越度となるがや。

祐成　すりや、惣奉行なる祐經ゆゑ、

時宗　寶の山へ入りながら、手を空しく立歸るか。エヽ、口惜しい。

祐經　イヤ、手を空しくは歸すまい。これを見たか。（ト側にある赤木造りの短刀を取つて）即ち赤木のこの短刀、本望達せしその時は、とゞめの刀、心得たか。今日對面の證據の一品。

朝比　辭退に及ばぬ。時宗、貰へ。

時宗　然らばこのまゝ

祐經　受取れ、時宗。イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。

時宗　（受取つて）慥かに落手仕つた。

祐成　父の最期も赤澤の、椎の木なくばやみ〳〵と、討たれまじきに、茂りたる

時宗　その椎の木の恨めしや。祐經どのゝ立身は、この三本の椎の木ゆゑ。

小女　曾我兄弟には仇たる椎の木。枝葉を枯らすが父への孝養。
少將　この三本の鉢植を、切つて當座の本望を
祐成　いふにや及ぶ。
時宗　あゆみの枝まで
三人　まツこの通り。

ト小女郎は懐劍、兄弟は銘々に小さ刀にて、鉢の木を切る。中より證據の矢の根、又一つの鉢よりは同じ拵への鏑の矢の根出で、小女郎の切りし鉢より、少將の身請證文出る。三人、取つて見て

祐成　こりや失ひし證據の矢の根。
時宗　爰にも同じ鏑の矢の根。
小女　こりやこれ慥かに少將さんの
少將　わたしを身請けの
近江　それで鎧を送られし、その返報に身請けの少將、本意を遂げるそれまでの、時宗へ娶合す少將、仲人はこの小藤太。
祐成　證據の矢の根を返されしも

祐經　祐經と銘ある鏑矢、同じ流儀の矢の根を添へしは、敵の證據の割り符を合せ、やがて討たるゝその契約。

祐成
時宗　して又討たるゝその場所は

祐經　狩場の役目濟むまでは、何れも樣のお惠みにて、身ば大役のこの祐經、高きは富士の根方に於て

祐成　本望達する

時宗　時節はな。

ト入り相の鐘聞え、送り花の白梅、ハラ〳〵と散る。祐經思ひ入れあつて

祐經　頃は皐月に消え殘る

近江　時にとつたる花の雪

八幡　花の吹雪ともろともに

小女　我が身散りゆく

少將　卯の花も

朝比　亡き祐安へ

祐經　心ばかりの祐經が、垣根の雪を手向けの狩衣。

トありあふ島臺の卯の花を取りて、狩衣の上にて枝を打つ。卯の花パッと散り、仕掛けにてこの狩衣
白雪殘りし富士の形に見える。

範頼　あの狩衣の
近江　形は卽ち
祐經　雪も消えゆく
皆々　夏の富士。
祐經　裾野で逢はう。
祐成時宗　祐經どの。
祐經　祐成、時宗。
皆々　さらば

トミナミナ思ひ入れ。替つて見得よろしく、下り葉、カケリにて

幕

五幕目

役名――川邊文藏。伊丹鄕左衞門。鄕左衞門娘、お妻。進藤沼五郎。神職、左司馬。同、左近。
巫女、さかき。

本舞臺、三間の間、平舞臺、上の方に石の鳥居、「荒人神」といふ額をかけ、蝶千鳥の幕を張り、手水鉢、納め手拭などよろしく、厚原、曾我の宮勸請の體。上手より舞臺先へかけて田の畔、土手板田植ゑの體。幕の内より田植ゑ女多勢、揃ひの浴衣、笠をかむり、植附けの模樣、田植ゑ唄にて幕明く。

ト皆々田植ゑのこなし。この内向うより左近、左司馬、烏帽子、刺貫、神職の形。さかき、白の形、緋の袴、巫女の姿にて出て、直に舞臺へ來て

左近　これは厚原の衆、植附けに御苦勞でござる。

皆々　アイ〳〵。サア〳〵、一服のみませう〳〵。

ト田植ゑ女は仕事をやめて床几へ腰をかけ、煙草を吸つたり、茶を飲んだりする。

女一　お前方は、このお宮の神主さんかえ。

左司　イヤ、わし等は草薙の宮の社家でござるが、先月の二十八日に、曾我の五郎十郎といふ、孝行な兄弟が、親の敵、工藤左衛門祐經どのを討たれたによつて

左近　そこで五郎どのは、頼朝公へ召捕られて、御前に於て十番斬りの云ひ譯。頼朝公も御感あつて、誠に武士の鏡ぢやと申されて

女二　わし等の在所、厚原の氏神にせいと、お代官樣から云ひ附けられ、荒人神といはれる神樣になつて、頼朝樣から結構な、この石の鳥居が立ちました。

女二　それからすぐにお宮の造營とやらで、この奥に御普請小屋も出來ました。

女四　それについてこの近所は、曾我の宮の御神領になつて、御田の植附けでござります。

女五　何でも今までの厚原と違うて、毎日々々このやうに賑やか。

女一　そこで諸國から、曾我兄弟のお方は有り難いというて、御參詣でござりまする。

左近　わし等は神いさめの神樂に頼まれて、毎日々々草薙の宮から、雇はれて來まするて。

さか　わたしは榊というて、草薙のお宮の巫女でござんす。田植のお方、ちと煙草參りませうわいな。

左司　イヤ、この榊の神樂の舞といふものは、大抵面白い事ではない。

女一　十二座とやらの時は、さぞようござんせう。

左近　イヤ、十二座二十五座の神樂は、みなおい等が仲間で、大方男が舞ひます。
左司　時に左近どの、田植ゑの衆は、どれもく美しいではござらぬか。
皆々　何を弄らしやんすぞいなア。
左近　イヤ、拙者は矢ツ張り神職同士、巫女の榊めがようござる。榊、どうだなく。
さか　エヽ、嫌らしいわいなア。
左近　ウヌ、さう云つても、今に思ひ知らしてくれるぞ。

ト此時神樂が聞える。

左司　アレ、神前で神樂の始まり。
左近　左司馬どの、參りませう。サア、榊
さか　エヽ、憎らしい。
左近　此方より其方が憎らしいわい。

ト神樂になり、左司馬、左近に榊ついて鳥居の中へ入る。田植女は賑やかに話しながら、又植附けた始める。田植唄になり、向うより進藤沼五郎、着流し大小、深編笠にて出て來て

沼五　ヨウく、早乙女の衆、精が出ますく。

ト田植女はこれに構はず植ゑ附けてゐる。

どれも〳〵うまさうな手合ひばかりだ。

ト女一の袖を引ッ張る。恟りして

女一　エヽ、誰さんぢや。何をするのぢやぞいなア。

沼五　何をするものか、身共は武士だぞ。刀が目にかゝらぬか。否といふと、刀にかけても往生させるぞ。

ト刀を捻くり廻す。

皆々　あれえ。

ト田植女皆々恟りして逃げて入る。神樂になり、左司馬、左近出て

左司　ヤア、鳥居先を騒がす狼藉者め。

左近　暴れるが最後、ふんじばつて（ト沼五郎へかゝる）。

沼五　何を

ト振り拂ふ。ちよつと立廻つて、沼五郎の編笠取れる。二人は見て恟りし

二人　ヤア、進藤沼五郎どの。

沼五　草薙の神職左近どの、左司馬どの。

左司　今日この荒人神の、神樂に賴まれて參りました。

左近　合點のゆかぬ沼五郎どの、お供もなしに深編笠

左司　しつかい浪人のやうなざまで、何の事でござる。

沼五　云はずと知れた、身共は鎌倉から府中の淺間へ勤め役。然るに御兩人にお賴み申したお妻の事、それが苦になり、どうも味な心持ゆゑ、この厚原の荒人神は、曾我兄弟を祀りしとあつて、殊の外の參詣。そこで府中からは五六里もあれど、慰みがてら供をも連れず、忍びにて參つたが、早乙女どもを見るにつけても、お妻にまさる女はござらぬ。

左司　イヤ、貴殿が厚き御執心ゆゑ、このお世話は仕遂げようと存じて、長沼なる伊丹郷左衞門の宅へ參り、緣附けさつしやれと勸めても、妾に遣はされいと申し入れても、內から外へは少つとも出さぬ箱入り娘。

左近　緣側も窓も締め廻し、何の事はない敵持ち同然。

沼五　イカサマ、左樣でもござらうが、神職の御兩所、神樂を以て岩戸の神を諫めたる通り、智謀計略を以て

左司　そのやうに申されては、別して一働き致さずばなるまい。
左近　どうなりともして得心させ、色よい返事をお聞かせ申さう。
沼五　その時こそ、しつかりと御禮申すぞ。
左近　(向うを見て)アレ、見さつしやれ、たしか向うへ見えるのは、伊丹親子でござるぞや。
左司　ドレ〳〵……ヤア、さうでござる〳〵。
沼五　それでは身共が爰にゐては
左司　幸ひあの幕の内にて、樣子を窺はれい。
左近　今日こそは、口說き落してお目にかけませう。
沼五　然らば身共は
左近　どうやら見合ひでもするやうでござる。
左司　即ち今日が見合ひなら、相談もきまるでござらう。ちと葛の葉の鳥居場のやうでござるな。
左近　これはしたり、たはけた事を云はつしやる。
ト沼五郎は幕の内へ隱れる。大拍子になり、向うより伊丹郷左衞門、羽織袴の老けたる武士、お妻は振り袖の娘、日傘をさして出る。

つま　申し、父樣、向うの新らしい石の鳥居が、曾我どの、お宮かいなア。
鄕左　イカサマ、さう見える。娘、このやうな遠い道を、神參りした事はあるまい。
つま　アイ、淺間樣や草薙のお宮へ參つたより、遠い所へは參りませぬ。
鄕左　オヽ、さうであらう。死んだ母が、いまはの時、其方が事を賴む、オヽ、氣遣ひ致すなと、夫婦といへど武士の番うた詞は金鐵、それゆゑ其方を大事々々と、男猫の側へも寄せつけぬ鄕左衞門ぢや。イヤ、併し草臥れたであらう、向うの社內へ行て休息せうわい。
つま　左樣なされませ。
鄕左　サア、娘來い。
ト二人は舞臺へくる。左司馬、左近迎へて
左司　これは伊丹鄕左衞門どの、遠方の所をよう御參詣
左近　娘御お妻どのと、親子連れ立つての御遊山かな。
鄕左　ホウ、誰かと思うたら、草薙の宮の神職の衆、よう參られた。
左司　イヤ、參詣ではござらぬ。神樂の役に賴まれて參つた。
つま　それは御苦勞でござりますなア。

左司　それは御苦勞でござりますなア、とは、爰な畜生め〳〵。
　　ト大きな聲を出す。お妻は愕りする。鄕左衛門、ムツとして
鄕左　娘、こちらへ來い。
　　トお妻を上へ廻して床几へ腰をかける。
左近　イカサマ、沼五郎どのが現をぬかすも尤も。鄕左衛門どの、立腹めさるな、其許の娘にしては、鳶が鷹だ。
左司　さうとも〳〵。それにつき少と相談がござる。
左近　貴公さへウンと云はるれば、忽ちに立身出世だ。
鄕左　斯く鎌倉の御治世の時に至つては、系圖由緒によつて、祿の高下も大略きまりのあるもの。相談によつて立身出世とは、こりや、ろくな事ではあるまい。
左司　これは又偏屈な。その美しい娘を抱へてござるが、立身出世といふものだ。先達ても申し上げた淺間の御番役、進藤沼五郎どの、府中近鄕の支配なれば、鄕士風情とは違ひ、第一福者でござる
左近　左やう〳〵、役柄はよし
左司　殊に以て男はよし

左近　イヤモウ、よし〳〵づくめで、流行り唄同然でござる。

ト郷左衛門は苦り切つた顔にて默つてゐる。

左司　時にその沼五郎どのが、そこにござるお妻どのにきつい執心。卽ち、われ〳〵が仲人致すほどにアツと云つて嫁入りさすれば、拵へ萬端は向うの請込み。それがならずば妾に……サア、妾というては惡いが、マア、客分といつて遣はさるれば、手輕にて互ひの仕合せ。

左近　またその上に、一人娘を手離して、便りなく思はるゝなら、貴殿は沼五郎どのゝ屋敷へ、引取られて樂隱居。

左司　金銀は遣ひ次第、旨い物は食ひ次第。

左近　得心なればお妻どのを、活計の身にするといふもの。

郷左　默らつしやい。

左司　これが誠に、氏神ならで玉の輿。

郷左　默らつしやい。

左近　黄金の釜を掘り出し娘。

郷左　默らつしやい。

左司　親子とも有卦に入つたとはこの事。是非ともこの相談を
　　　　ト疊みかけて云ふ。郷左衞門、ヂリ〳〵して
郷左　エヽ、默らつしやい。アタやかましい。べら〳〵と聞きたくもない。娘の庇で樂隱居、望みでない。身不肖なれども當國の長沼に於て、親代々の郷士。娘を當てに立身出世、妾奉公にとは穢らはしい。役にも立たぬ仲人口きかずと、さつさと歸らつしやれ。娘、さうではないか。
つま　アイ、父さんの申されまする通り、わたしや殿御は嫌ひ、妾奉公とは穢らはしい、否でござんす
　　　　ト幕の蔭より沼五郎、首を出し、この樣子を聞いて、腹を立てるこなし。
左司　これ程に申しても、不得心なら是非がござらぬ。
左近　これ程に骨を折らせても聞き入れぬとは、時代を知らぬ馬鹿侍ひ。
左司　あれが口の端の飯粒を、拂ひ落すといふものでござる。
左近　郷左衞門どの、どうあつても不得心かな。
郷左　不義の富貴は浮べる雲。
左司　すりや、お妻どのにも
つま　アイ、父さん次第でござりまする。

ト唄になり、鄕左衞門はお妻の手を引いて、ツカ〳〵と鳥居の内へ入る。沼五郎、ヌツと出る。

左司　沼五郎どの、あの通りでござる。

左近　何と致したら宜しうござらう。

沼五　何と云つたとて、沼左郎の武士は廢つたわえ。

左司　一旦云ひ出した事を、この儘には濟まされますまい。

沼五　邸へ歸る道すがら、府中までは餘程の道のり、また歩きながら思案もあらう。

左近　われ〳〵共も、今日の用をしまひ次第、晩程お宅へ參り

左司　御相談を致すでござらう。

沼五　御大儀ながら。

左司　沼五郎どの

沼五　御兩所

二人　ドリヤ、神前へ參らうか。

ト神樂になり、左司馬、左近は鳥居の中へ入る。

沼五　ウヌ、鄕左衞門め。

ト沼五郎は伊丹親子の跡をヂッと睨み、編笠をかむつて花道へゆく。三味線入りの大拍子になり、向うより田邊文藏、着流し、浪人姿、編笠にて出て來て、花道でゆきあひ、ちよつと笠の中より見合ふ事あつて、沼五郎は向うへ入る。文藏も小首傾けながら、舞臺へ來て

文藏 この厚原へ曾我兄弟を、荒人神と敬ひしも、時の武將の御仁德、鳥居も新たに（ト奥を見て）宮も造營最中と見える……兼ての願望。

ト鳥居の側へ行き、ひざまづいて奥の方を拜んでゐる。神樂になり、奥より以前の榊、大拍子と御幣を背中へ括りつけられ、泣きながら駈け出して來て、文藏に突き當つて倒れる。

何事ぢや〳〵……見れば巫女さうなが、御幣と大拍子を背負ひ（ト榊をいろ〳〵介抱して）コレどうしたのぢや〳〵。

さか （切なきこなしにて）ハイ〳〵、有り難うござりまする。

文藏 術ないといふか、どうしたのぢや。それ〳〵、そちらは田の畔ぢや。マア〳〵、此方へ。

さか アイ、あんまり今の先、腹が痛うござんしたゆゑ、突ッ俯してゐたところ、日頃から憎てらしい禰宜衆が、なぜ神樂を舞はぬというて、わたしを打つやら擲くやら、さうしてマア、嫌らしい、人のいふ事をきかぬというて、脾腹をきつく打つたゆゑ、術なうて〳〵なりませぬわいなア。

文藏　ムウ。さて〱憎い奴等ぢやなア。マア〱此やうなものを（ト背中の物を下してやり）脾腹は打ち所が惡い……幸ひ爰に藥がある。マア、これを服んだがよい。氣も休まる。腹が痛いにもよい藥ぢや。

ト紙入れより藥を出してやる。榊は戴いて服むところへ、鳥居の中より左司馬、左近、出て來て

左司　ヤイ、あまめ、どこへうしやアがつた……ウヌ、神樂の道具を持つて行けといふと、腹が痛いの、酢の蒟蒻のとぬかして、まだそこにうろついてゐるのか。

左近　なぜ早く行かない。イケずるいあまだ。

左司　ウヌ、いつそ叩き挫いて

ト打たうとするを、文藏とめて

文藏　アヽ、コレ〱、待たつしやい。今これへ通りかゝつたれば、腹が痛む上、脾腹を打つて切ないといふて、難儀の樣子ゆゑ、介抱して遣はしたが、よい加減に料簡してやるがよい。

左近　そりやア大きなお世話だな。さうしてこなたは

文藏　この荒人神へ參詣の者ぢや。

左近　（文藏をヂロ〱見て）ハア、聞えた。立派な大小見せかけて、こなたは誘拐だな。

文藏　なんと。
左近　誘拐だく。
左司　澁皮の剝けた顏から、お慈悲をかけて折を見合せ、引ッ浚はうといふ心か。ハテ、恐ろしいく、イヤ恐ろしい男だ。
さか　イエく、あなたはわたしが切ない所をお世話下されて、藥まで下されました、ようお禮いうて下さりませ。
左近　また口を叩きやアがるか。おれのいふ事をきかないから、そんな目にあふのだワ。
左司　うぬがウッソリだから、旨味を食はせて連れてゆかうとしたのだ。
左近　とんだ侍ひの誘拐樣だ。
文藏　又しても誘拐々々と（トむつとする）。
左司　コレ、お侍ひどの、只の高天ヶ原だと思ふと當てが違ふぞ。
左司　コレエ。（ト烏帽子の上より鉢卷をして）どうで駿河の片田舍、草薙の宮の禰宜樣だ。
左近　神職のひまな時には、府中や江尻の宿へ行つて、小揚もしたり、雲助にもなつたり
左司　また或る時は宿附の馬も追つたり、駕籠を舁いだりする左司馬どのだ。

左近　おれも芝原左近といふ社家だ。このやうに云はれては、誘拐でない誠の武士なら、刀の手前が立つまい。

左司　サア、抜け。抜いて切れ。サア、腕から切るか、足から切るか。

ト二人は足にて文藏の大小を動かし、文藏がチツと我慢してゐるゆゑ

エヽ、大泥坊の誘拐め。

ト文藏を足蹴にする。このうち鄉左衞門とお妻、鳥居の中へ出かけ、見てゐる。文藏こなしあつて

文藏　成る程、社家衆の御立腹は御尤も。見ず知らずの巫女どのを、あまり介抱致し過ぎて、誘拐とのお疑ひ、こりや御尤も。併し中々左樣な者ではござらぬほどに、幾重にも御料簡にあづかりたい。見らるゝ通り、武士が手を突き、お詫び申す。

ト兩手を突いて詫びるこなし。

左近　なんだ、武士とさへ云へば恐ろしからうと思つてか。少つとも恐ろしくないぞ。

左司　イケ張合ひのない奴だ。

左近　いつそ斯うして腹を癒ようか。

ト兩方より文藏を蹴とばす。

文藏 土足にかけて料簡がならば、存分に
左近 手向ひしないか。
文藏 お詫び仕る。
左司 其ざまで侍ひもすさまじい。
左近 今日は荒人神の神いさめ、それに免じて料簡してやるワ。
左司 エヽ、命冥加な
左近 サア、あまめ、うしやアがれ。

ト時の鐘になり、左近は榊の手を引つ張り、左司馬は大拍子と御幣を持つて向うへ入る。文藏、跡を見送り

文藏 荒人神は曾我の兄弟。（ト砂を拂つて立ち上り）鷄を裂くに、牛の刀を用ひず。千斤の石弓は、鼷鼠の爲めに發せず。相手のよさに、ハテ、仕合せな奴等ぢやなア。

ト衣紋をつくろひ、編笠を持つて靜々と花道へゆく。鄕左衞門とお妻、跡見送り

鄕左 ハテ、若いに似合はぬ、神妙な心がけ。
つま 可愛らしうて、きつとして

郷左　しかも勇ある今の詞。
つま　とても女子に生れたら（ト思ひ入れ、ぢつと跡を見つめる。）
郷左　そちや今の侍ひに惚れたか。
つま　アイ。

ト恥かし氣に顏を隱す。花道の文藏は編笠をかむる。

郷左　おれも惚れた。

ト同じく跡を見送る。よろしく拍子、

大拍子になり、文藏は靜かに向うへ入る。シヤギリ。

幕

六幕目

阿部川中島村の場

役名――田邊文藏。田邊文太夫。伊丹郷左衛門。郷左衛門娘、お妻。進藤沼五郎。唐犬の金兵衛。草薙の神職、左近。同、左司馬。彌勒の彌助。庄屋、杢兵衛。近所の娘、おしげ。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、茅葺き屋根、向う赤壁、納戸口、上の方に障子屋體、よき所に押入れ。下手に竈、いつもの所に門口、下の方に見切りの塀、隣の二階座敷、すべて阿部川中島村の體。

幕の内より文藏、着流し、七輪にて薬を煎じてゐる。「春日龍神」の早舞ひ、てんつゝにて幕明く。

文藏 さて／＼、隣家は金持と物數寄にて、日待ぢやというて鼓太鼓で、囃すやら三味線彈くやら。親仁様の病床へ筒抜け、お寐る邪魔になるであらう。したが、今日は少とお心ようて、そこらへ出さつしやれたが、もうお歸りであらうか。

ト獨り言いつて薬を煎じてゐる所へ、向うより中間一人、肴臺に肴をのせて持つて出て

中間 ものまう。

文藏 どなたぢや、お通りなされい。

トこれにて中間は内へ入り、肴臺を差出す。

どなたからのお使ひでござりまする。

中間 清水藤左衛門申し越しまする。文太夫どのゝ御病氣如何、お見舞ひ申し上げたく、使ひをあげますとの事でござりまする。

文藏 これは御深切のお見舞ひ、よう親共へ申しきかすでござりませう。

中間　承れば、御婚禮のござるとの事。お祝ひの爲、些少ながら、この品を進上致しまする。

文藏　これは〳〵。未だ定まつた儀でもござらねど、親共の病氣介抱人やらでござる、併し御祝儀とあれば、申し請けておきませう。

ト臺を持つて、入れ物に困るこなし。

中間　イヤ〳〵、入れ物は明日取りに參りませう。

文藏　左樣ならこの儘預りませう。宜しく御禮申して下され。

中間　お暇申しまする。

ト合ひ方になり、中間、向うへ入る。その前より花道へ、田邊文太夫、病氣にやつれたる老人の姿、近所の娘おしげに手を引かれて出てくる。

しげ　今日は天氣もようて、お氣も晴れましたらう。

文太　大分表を見晴らしたので心よいぢや。兎角步行が出來憎いので難儀でござる。

ト云ひながら舞臺へ來て、入れ違ひに内へ入る。

しげ　申し文藏樣、お父樣のお歸りでござんす。

文藏　ホウ、親仁樣、御保養にお出ましでござりましたか。

文太　おしげどのゝお庇で、氣晴らしをしたわい。（ト座敷へ入る）
文藏　お隣のおしげ樣、每度御苦勞でござる。マア〳〵、上らつしやれ。
しげ　イエ〳〵、母さんが待つてござんせうほどに。マア、去んで參りませう。
文藏　そんなら行て來さつしやりませ。
しげ　アイ〳〵。
　　ト　おしげは向うへ入る。文藏、藥を茶碗へつぎ
　　ト出す。文太夫、取つて服みながら、肴臺を見て
文藏　モシ、一番煎じでござりまする。
文太　ナニ悴、藤左衞門どのから見舞ひが來て、今宵祝言があると申して、祝うて來たではないか、
文藏　左樣でござゐまする。
文太　祝言とは、誰が祝言ぢや。
文藏　イヤ、この儀は折入つて申し上げうと存じましたが、當村の庄屋杢兵衞どのが申されまするには、親仁樣御病氣、獨り身の介抱は定めし苦勞であらう、幸ひ當所の鄕士にて、支度はなけれど家柄のよい人で、こなたに娘をやりたいゆゑ、急に世話してくれいとの事。先は筋目ある鄕士の

娘、暮しは兎も角も、田畑もござらぬ事ゆゑ、釣合はぬと申したれば、イヤ〳〵、それは先も合點の上、身上には係らず、是非娘をやりたいと世話を頼まれたればと、村の束ねをする庄屋どのの頼みといひ、第一は親仁樣の看病、何かの爲にもならうかと存じて、如何やうともと申しましたは夜前の事。マア、一應親仁樣へお尋ね申した上、しかとお約束致さうと申して、歸しましてござりまする。

文太　ムウ。それは杢兵衞どのゝいかい心づかひ。さほどまで向うの人が、懇望さつしやる事なれば、兎も角も致したがよい。それにつけても悴、尋ねる事がある。この田邊文太夫は、故あつて棚倉の家中、藤川卜庵どのに久しく奉公。息子どのゝ水右衞門どのが心よからぬゆゑ、度々異見を加へてもきかれず、身退いて當國へ浪人。其方は幼少の砌り家出をして、北條の一族、遠州濱松の家中にて、神影流の達人、石井右内どのへ弟子奉公と聞く。察するところ武術に鍛練して、よき武士になりをらう、出かした、一器量ある者と、心で褒めて居つたが、この程より浪人となつて當所へ立歸つたは、身も病氣が重つたゆゑ、尋ねなんだが、もし石井家に、凶事でもあつての事か。

文藏　(思ひ入れあつて) イヤ、主人石井家に別條もなく、矢張りその儘。

文太　ムウ。それに其方は、なぜ浪人いたした。

文藏　イヤ其儀は（トこなしあつて）朋輩どもと、口論によりまして

文太　すりや、朋友と口論にて

文藏　旣に討ち果さんと存じましたれども、親仁樣の事を存じ出し、命を全うしてお暇を乞ひうけ、イヤモウ、武家奉公にはとんと飽きましてござりますゆゑ、親仁樣の病氣の事も承りまして、歸國致してござりまするが、これを幸ひ仕官をやめまして、親子とも百姓に相なり、金銀を貯へ、一生を樂々と、孝行を盡しませうと思ふ、私しの存念でござりまする。

文太　イヤ／＼、その思案は惡からう。尤も二君に仕へるは侍ひの本意でないが……それは格別、その嫁の事は

文藏　これとても仰せ次第。先づ今の所は、杢兵衛どのへ斷りませうかな。

文太　イヤ／＼、久しう世話になつてゐる庄屋どのゝ賴み、斷る事もなるまい。併しこの暮しでは、嫁の手前、氣の毒千萬。

文藏　拙者もその儀を、只管申してござれども、

文太　好いた事ならよい。同じ事なら、身共の死んだ跡へ參らば、舅の氣兼ねもいらぬに、それにつけ

てもこの病ひ、早く方の附いてしまへばよい事を、命はつれないものぢや。
ト烈しく咳入る。文藏は背中をさすり
文藏　お氣の弱い事を仰しやらずに、早う御本復なされて下さりませ。
ト介抱して藥をのます。「椀久」の「自體我等は」の唄になり、向うより車力二人、劍菱の酒樽を二つ、菰かぶりのまゝかついで來て
二人　エイサツサ〳〵。
車甲　サア、こゝだ〳〵。田邊文太夫樣はこゝかな。酒一駄參りました。
文藏　文太夫はこれぢやが、見れば仰山な酒樽、こりや門違ひであらう。
車乙　イエ〳〵、こなたに今宵嫁入りがあるといふ事、その祝儀に持つて來ました。これが書附けでござります。（ト書附けを出す）
文藏　「田邊文太夫どのへ、劍菱一駄、若い者中より」………成る程、これでは手前へ來たやうなが、併し、このやうな品、申し請ける覺えがない。親仁樣、あなた、お覺えがござりまするか。
車甲　なんでも書附けが證據だ。
車乙　持ち込め〳〵。（ト酒樽を內へ入れて）慥かに渡しました。

文藏　コリヤ、一體先は、どこぢや〳〵。

車甲　どこでもかまふ事はない。中島村の車力百右衛門が持ち込んだのだ。サア〳〵、行かう〳〵。

ト文藏の詞もきかず、二人は向うへ入る。

文藏　コレサ、覺えがないといふに……こりや、てつきり門違ひであらう。

文太　ハテ、よいワ。門違ひなれば、取返しにくるであらう。片脇に寄せておけ。

文藏　いろ〳〵面倒な事をさせるぞ。

ト酒樽を片寄せる。「獅子とらでん」と「石橋」の唄になり、向うより庄屋李兵衛、羽織を引掛けたる形にて出て來り

李兵　文藏どの、お宿かな。

文藏　オヽ、庄屋樣、ようござりました。

李兵　オヽ、文太夫どのも大分よいやら、端近く出てござるの。

文太　これは庄屋どの、承れば忰に女房をお世話下されしとの事。まだ歸國致して間もないに、御深切な……文太夫久しく當國に居れど、浪人の身の上、先は鄕士で筋目の家柄とあるに、疾く調ひさうな事でござるかな。

李兵　サア〳〵、その事で來ました。先の人は當國長沼の郷士にて、伊丹郷左衛門といふて、その堅苦しさ偏屈さ、カン〳〵と鳴り渡るやうな堅親仁。その又娘のお妻どのといふが、その優しさ、美しさ、それゆゑ諸方から嫁に貰ひたい、イヤ妾に出せのといへど、中々金銀などでは七輪けつぱい。娘御が氣に入つた所なら暮しには構はぬ。筋目を土産に武士らしい人にやりたいと、常々の望み。昨日厚原の荒人神の社内で、内の文藏どのが、神妙な仕方があつて、まづ親御が第一番に惚れられた。娘御は猶更ほの字にれの字にたの字。江尻の御所で出合うたとき、世話を頼むと云はつしやる。心得たと請合つたワ。そこでこなたの病氣。此頃歸つてゐられる息子どのゝ手助けと、仲人口もきいた譯ぢや。文太夫どの、得心でござらうがな。

文太　成る程、こなたの取り持ちといひ、悴も承知の上は、よいやうにお頼み申す。

李兵　サア、これで埒が明いた。善は急げぢや。すぐに今夜祝言をさせませう。

文藏　モシ〳〵、それはあんまり早急。假にも緣談の事なれば、日を見ました上で

李兵　アヽ、コレ〳〵、そんな優長な事ではない。娘が昨日見染めて、昨夜の相談で、今日行きたいと張り切つてゐらるゝ上に、親御は猶以て性急、わしにすぐ連れて行つてくれいと云はしやる。それではあんまり押附け業になるによつて、マア〳〵、わしが先へ行つて、あらましを云はうから、直

に跡からござれと云ひ置いて來たれば、おつつけ自分で娘御を連れてござらつしやる筈ぢやて。

文藏　左樣なら、何はなくとも、用意せずばなりますまい。

文太　それ〳〵、婚禮は一生の納まり。たとへ浪人の身でも仕樣もあらうが、何をいうても折惡しきこの病氣。

ト又咳込む。文藏は背をさする。

杢兵　これはしたり、こなたが心遣ひさつしやると、息子どのが迷惑ぢや。病氣のさはりになつては惡い。構はずに寐てござれ。

文太　よいやうにお賴み申す。(ト又咳入る。)

文藏　マア〳〵、あれへござつて、暫くお休みなされませ。

文太　そんならさうせう。

ト文藏は父を介抱して一間へ連れて行き、又出て來る。

杢兵　もう見えさうなものぢやの。(ト表を見る)

文藏　杢兵衞どの、どう支度したらようござりませう。

杢兵　サア〳〵よいてや〳〵。心遣ひさつしやらぬやうに、庄屋杢兵衞呑み込んで、これぢや。(ト内懐

から貧乏徳利を出して）コレ、懐で酒の燗も出來てある。ハ、、、、、、。さて鰹節も持つて來たちや。（トこれも懐から出し）吸ひ物の味噌も買うて來た。（ト袂から竹の皮包みを出し）サア、杯も杯臺も御持參ぢや。（ト背中や袂からいろ〳〵出して）まづ膾に吸ひ物と、祝言なれば鯣の附け燒。（ト竹の皮包みを出し）南無三、吸ひ物の種、汁の實にする物を忘れた。

文藏　イヤ、先刻見舞に貰ひました、肴がこれにござりまする。（ト先刻の肴臺を出す。）

杢兵　ある〳〵。なんぢや、赤貝に鯛、片身を刺身にして、骨附きは汁、赤貝の吸ひ物、こりや獻立が違うて來た。時にもう見えさうなものぢや。（ト時々表を覗いては又内へ入る）

文藏　ドレ、料理にかゝりませうか。

杢兵　わしが味噌をすつてやりませう。

ト大小鼓入りの賑やかな三味線になり、杢兵衞は摺り鉢を出して味噌を摺り、文藏は俎板を出して鯛を拵へながら

文藏　時に庄屋樣、何か親仁樣に未進があるさうにござりまするな。

杢兵　ハテサテ、それを爰で云ふ事かいの。

ト唄になり、向うより伊丹郷左衞門、お妻を連れて出る。

郷左　文太夫どのゝ宅はこの邊であらう。
つま　大方さうでござりませう。
郷左　サヽ、來やれ〱。（ト舞臺へ來て）頼まう。庄屋杢兵衛どのが來てゐやる筈ぢや。伊丹郷左衛門
娘を連れて參つた。誰そ取次いで下され。
杢兵　そりやこそ娘御のお入りぢや。そこらを方附けたり〱。
トこれにて文藏は狼狽てゝ道具を方附ける。杢兵衛、表へ出て
これはお早うござりました。サア〱、入らつしやりませ。
郷左　杢兵衛どの、この度は何かと世話にあづかつた。禮はゆる〱申さう。して、親父どのには、得
心でござるかな。
杢兵　得心からズツと上でござる。今か〱とお出でを待ち兼ねました。コレ〱、文藏どの、御挨拶
御挨拶。
文藏　これは見苦しい所へ、ようお越し下されました。マア〱、お入りなされませ。
郷左　文藏どの、何かは杢兵衛どのにお聞きの通り。娘の戀聟、早速得心あつて重疊に存ずる。此方の
家が浪人、釣り合はぬと卑下めさるゝと承つて、それゆゑ嫁入りの儀式も致さず、殊に當時質

素に暮し居れば、丸綿も白無垢も着せず、親が直々連れ參つた。サア、お渡し申す、受取りめされい。娘、聟どのゝ宅は、これぢや〳〵。

つま　アイ〳〵。父樣、こゝが文藏樣の

杢兵　お邸はもう爰かえ。わしやはづかしい……といふやうな事ぢやないかえ。

鄕左　ハテ、氣さくな男ぢや。

杢兵　サア〳〵、あれへお出でなされませ。

鄕左　イヤモウ、それへは參るまい。

杢兵　なぜでござりまする。

鄕左　親御文太夫どのには病氣とあるに、その中で心遣ひに與るも氣の毒、婚禮萬事は其許に任せおいたれば何氣遣ひ、くど〳〵と申すに及ばぬ。親が直々に送つて參つた。聟どの、面倒を見て下さい。

トお妻の手を取つて內の中へ突きやる。杢兵衞、お妻をよき所へ坐らせる。

文藏　杢兵衞どのへ申す通り、身不肖の拙者、家柄の息女を申しうけるは、親御の御所存を押はかりまして

郷左　アヽイヤ、御挨拶には及ばぬ事。遣はすからは手前の娘ではござらぬ。こなたの氣の入つたやうにほッ使うて、末長う面倒頼み申す。ヤイ、娘、其方の望み通り、嫁入りをさせたからは、聟どのは元より、舅御を大切に、イヤ、これも云はいでも知れた事ぢや。イヤ、拙者はお暇。

文藏　これは餘りお粗末。せめて祝儀の御酒一獻。

郷左　ハテ、そのお世話になるまいと内へ入り申さぬ。したが祝儀だ、ちよつと手を打つて下され。

杢兵　それ〳〵、何も祝儀ぢや。

三人　ヨイ〳〵〳〵。

ト三人は内と外とで手を打つ。

郷左　これで心が濟み申した。人手のない内、里開きなどといふ事も致すな。一生戻らいでも大事ない杢兵衛どの、跡を頼む。聟どの、さらば。ドリヤ、身共は歸りませう。（ト云はうとして）イヤ、開きませう。

ト唄になり、郷左衞門は脇目もふらず、ツカ〳〵と向うへ入る。

杢兵　ハテ、きつい偏屈な。

文藏　あの堅くろしい所が、侍ひの喜ぶ所でござりまする。

杢兵　サア〳〵、娘御、そこは端近ぢや、こちらへ〳〵。

つま　ハイ〳〵、これが勝手でござりまする。

杢兵　偏屈な人の娘御ほどあつて、ちよつぽりと小偏屈ぢや。サア、これからは祝言の杯ぢや。あんまり早う見えたので、まだ料理が出來ぬ。何ぢややら急がしいやうな

つま　わたしも何ぞ致しませうかえ。

杢兵　イヤ〳〵、杯の濟まぬうちは、嫁は使はれませぬ。時にこれでよしと……南無三、肝心の吸ひ物椀忘れて來た。おりや、ちよつと取つて來る程に、そこで釜の下を焚きつけておかしやれ。

文藏　心得ました。

杢兵　鰹節も搔かうぞや。

文藏　ハイ。

杢兵　時に得手物はあるか。

ト手振りにて、蒲團はあるかといふこなし。文藏頭を振る。

よし〳〵、それも持つてくる。

ト表へ出る。向うより村の歩き、出て來て

歩き　オヽ、李兵衛樣、川役所から寄合ひを申して參りました。

李兵　また寄合ひか、エヽ、面倒な、立合はずばなるまい。

歩き　ちよつとござりませ。

李兵　コレ、德助、貴樣はわしが内へ行つて、吸ひ物椀五人前と、夜具蒲團一組、爰の内へ持つて來て下されゝ

歩き　ハイ〳〵、畏りました。

ト歩きは向うへ入る。

李兵　早くぢやぞよ……まづよいワ。サテ、急に寄合ひ、急がしいぞ。(ト内へ入る)娘御、そこにたつた一人默つてゐても仕樣がない。話でもしたがよい。

つま　アノ、わたしとたつた二人かえ。(ト恥かしげに云ふ。)

李兵　エヽ、初心なお娘ぢや。たつた二人が嫁入りの命ぢやわいの。ドレ行てかうか。(ト表へ出て、又ふりかへり)文藏どの、その赤貝一つ下され。晩の寐酒の肴ぢや。(ト赤貝を一つ貰つて表へ出て)文藏どの、めでたいとて、酒を過すまいぞや。そして又……過すまいぞや。

ト云ひながら赤貝で指を挾まれ、痛がつて飛び上る。「元より藥の酒なれば」と「慈童」の唄になり、

杢兵衞は手を振り〳〵向うへ入る。文藏見送つて

文藏　御苦勞でござりました。ハテ、氣の輕いお人ではある。アヽ、庄屋どのが歸られたら、どうか寂然となつた。イヤ、これはしたり、歸るといふ事は云はぬ事ぢや。

ト此方向く途端にお妻と顏見合せ、互ひに思ひ入れ。合ひ方になり、文藏は莨盆を取つて來て、お妻の前へおき

莨あがりませ。

つま　不調法にござりまする。

文藏　あがりませぬか。

つま　アイ。

文藏（茶を汲んで來て）茶をあがりませませぬか。

つま　これはお慮外でござりまする。

ト茶碗を取りながら、ヂツと俯向く、

文藏　ドレ、鰹節でも掻かうか。（ト盆の上で鰹節を掻く。）

つま　申し、わたしが致しませうかえ。

文藏　滅相な、お客樣にこんな事さして、よいものでござりまするか。

つま　それでも今宵からお前の女房、何事なりと、御用をいひつけて下さりませ。

文藏　イヤ／＼、まづ祝言の濟んだ上、親仁樣にも引合せ申した上の事。聞けば親御の寵愛のこなた、われ／＼如きへ望んで嫁入りを致されたは、物好きといはうか、變つた望みでござるの。

ト鰹節を搔き／＼云ふ。

つま　ハイ、あなたを昨日厚原の、曾我のお宮でツイちよつと、見染めてわたしが父さんへのお願ひ。杢兵衛どのにお世話を頼んで、嬉しい祝言。必ず見捨てゝ下さりますなえ。

文藏　そりやモウ互ひの事、親仁どのへ、まづ孝行を頼みます。

つま　舅御樣はわたしが爲にも、眞實の父さんも同じ事、孝行せにやなりませぬ。早う舅御樣へ、お目見得したうござりまする。

文藏　サア、今スヤ／＼と御寢なつてござれば、お目覺め次第、親仁樣にも逢はせ申さう。

文太　（奧より）イヤ悴、嫁女に逢ひ申さう。

ト文太夫、奧より出てくる。合ひ方。

文藏　お目覺めでござりましたか。

文太　委細はあれから聞いて居つた。サヽ、嫁女、近う來やれ。不束な悴を、よく戀ひ慕うて下された忝い〳〵。ドレ〳〵、顏を見よう。

ト　お妻は恥かしさうにしてゐる。文太夫は目鏡をかけ、お妻の顏をしげ〳〵と見て

オヽ、よい器量ぢや。褄はづれといひ、育ちもさこそ。して、母親はありしか。

つま　イエ、母様はござりませぬ。この上ながら、孝行に致しませうほどに、本の娘を持つたと思うてお氣に叶はぬ事があらば、お叱り下されし、可愛がつて下さりませ。どうぞお願ひ申し上げます。

文太　ムウ、父親育ちに似合はぬ。さて〳〵、風俗といひ、挨拶ぶり。オヽ、氣に入り申した。イヤナニ悴、早う祝言致して、喜ぶ顏を見せてくれい。ソレ、銚子杯を持つて來い。

文藏　畏りました。（ト杯と酒を持つて來て）あまり不意にござりまするゆゑ、熨斗、島臺もござりませぬ。

文太　イヤ、それには及ばぬ。悴、納戸の古葛籠と、佛壇の蠟燭立て持つて來い。

文藏　畏りました。

ト納戸より古葛籠と、鶴龜の蠟燭立てを持つて來る。文太夫、葛籠より、模樣の裲襠を出し、それを着て、葛籠の上へ蠟燭立てを直す。

文太　親仁様、見ますれば、女模様のかいどりを召して、そりや何事でござりまする。

文太　悴、不審は尤も。文太夫は狂氣したかと思やらう。左樣でない。イヤナニ、嫁女、これは身が女房のかいどり。悴文藏が斯樣に祝言致すを見たいと、云ひ死に死んだが、いま息才で見るなればいかばかり喜ぶであらう。このかいどりが即ち母親、蠟燭立ての鶴龜が、當座の島臺。身共はさしづめ尉と姥。サヽ、一つ飲んで、悴へ獻しやれ。

つま　エヽ、有り難う存じまする。

文太　ドレ〳〵、酌を致さう。

　　ト　お妻は杯を取る。隣の二階で高砂の謠ひになる。

幸ひ隣家に高砂の謠、これで治まる道理ぢや。サヽ悴、一つ飲め〳〵。

文藏　イヤ、お酌は憚り。

文太　ハテサテ、遠慮は無用。

　　ト　酌をする。杯はお妻にをさめ

三々九度も、これでめでたう納めておきやれ。アヽ、めでたい〳〵。

　　ト　三人ともこなし。「樣の召したる風折烏帽子」と「種蒔」の唄になり、向うより沼五郎、着流し、大

小、五分月代の浪人、左司馬、左近、金兵衞、彌助、いづれも中間の姿にて、鰹や蛸を提げて出て來て

沼五　爰だ〳〵。みんな入れ〳〵。

金兵　文藏、めでたうごんす。

左近　どうだ、支度は出來たかな。

文藏　待たつしやれ。どれも見知らぬ若衆達。（ト左近と左司馬を見て）こなさん達は、たしか昨日。

左司　イヤ、知らないぞ〳〵。

文藏　こなた衆は、何ぞ用があつてござつたか。

沼五　この男は、よそ〳〵しく云やァがる。さては文太夫の息子の、お妻の聟の文藏か。

金兵　ハテ、いゝ男だ。成る程、お妻の惚れるも尤もだ。どうで娘子供の惚れさうなしやッ面だ。

左近　その聟なら、祝へ〳〵。

文藏　待たつしやれ。こりや理不盡とや云はん、法外千萬な。（トきつとなる。）

文太　コリヤ悴、待て。いづれも、文太夫は身共でござるが、悴を祝ふと仰しやるが、何を祝はつしやるのだ。

沼五　コレ〳〵、親仁、とぼけるな。高が爰の內へ、ソレ〳〵、そこにゐるお妻が、今日嫁入りしたを若い者達が祝ひに來たのだ。

金兵　先刻祝儀の樽を入れたを、受けたぢやァないか。コレ〳〵、爰にある劍菱一駄、石打ちも水浴せも野暮だと思ふから、樽を入れて若い者が、馳走になりに來たのだ。

左司　どうで肴も食はれまいと思ふから、蛸も茹でゝ爰に三ばい。

左近　刺身で飲まうと鰹を三本。

四人　みんな肴を御持參だ。

沼五　おれは先達て鎌倉から、この駿河の淺間の宮へ勤番に來た、進藤沼五郎といつて、金のたんとある二本差し、跡の奴等は子分、子方。

金兵　おらァ子分の頭、唐犬の金兵衞といふ、額の大きな男だ。コレ、見知つてくんなよ。

五人　聟どの、めでたうござんす。

文太　（文藏のムッとするを目で押へて）これは〳〵いづれも方、悴をお祝ひ下されし上、打揃うてのお出で、まづは大慶。したが、御覽の通り身共は病中、家內は悴と嫁女ばかり、何の用意も、

金兵　癡事つきやァがるな。吹けば飛ぶやうな屋臺骨、先へ知らせたとて何の用意が出來よう。ヤイ、

その樽を奥へ持つてゆけ。
彌助　合點だ。
金兵　ちつとの間奥を借りるから、客あしらひを賴んだぞ。
文太　それは心安い儀でござる。心おきなうお使ひ下され。
沼五　とりたての嫁を使ふのが此方の肴だ。コレ、お妻坊、酌人はこなたを賴むぞ。
つま（氣味惡さうに）ハイ〳〵、畏りました。
金兵　御亭主、あふりきりにゐるから、茶碗を貸して下せえ。
文藏　イヤ、おツつけ跡より、持たして遣はしませう。
沼五　エヽ、見れば見るほどムカ〳〵する。
文藏　エ。
沼五　イヤ、見れば見るほどいゝ男だ。
五人　めでた〳〵の花聟樣よ。
金兵　こんな時に飮み据ゑにやア飮む折がない。臺座はきまつた。菰つかぶりを持ち込め〳〵。
三人　合點だ〳〵。よい〳〵わい〳〵、なんまいだ。

ト大念佛にて皆々酒樽をころがし、暴れちらしながら奥へ入る。文太夫、呆れてゐる。文藏、見送つて

文藏　親仁樣、あの者共は、お近附きでございまするか。

文太　イヤ、一人も存ぜぬ。嫁の名を知つて居るからは、お妻の親御の近附きであらう。

つま　イエ〳〵、父樣は堅くろしいゆゑ、あんな暴れ者に、近附きはございませぬ。

文藏　見ず知らずの多勢が、樽を入れたは合點ゆかぬ。マヽ、何にもせよ、相手にさへならねばよい。存分騷いだら歸るであらう。

文太　それ〳〵、めでたい日なれば、よい程にあしらうて歸すがよい。構ふな〳〵。

トこのうち奥にて無性に手を叩き、やがて彌助、出て來て

彌助　ヤイ、茶を持つて來ないか。あれほど手を叩くのが聞えないか。（ト怒鳴つて入る。）

文太　アレ〳〵、茶を持てとある。嫁女、茶を持つて行つてやれ。

つま　アイ〳〵、皆にくんで行きませうかえ。

文藏　コレ〳〵、この土瓶と茶碗を持つて行て下され。

ト盆に茶碗をのせ、土瓶を出す。

つま　アイ〳〵………祝言も濟んだ上からは、女房のわたし。（ト振り袖を帶に挾み、風呂敷を前垂れにして土瓶と盆を持ち）こちの人、似合うたかえ。

ト嬉しさうにする。文藏は父の方を目くばせする。お妻は恥かしさうに思ひ入れ。

文太　忰、女房と云うてやりやれさ。

ト脇を向く。文藏、云ひ憎さうに

文藏　女房ども。

ト、お妻、嬉しさうに顏見合せて俯向く。ト、シヤンと唄になり、お妻は奥へ入る。

文太　親仁樣、萬更捨てゝもおかれますまい。幸ひのこの赤貝を、吸ひ物にでも致しませうか。

文太　さうなと致したがよい。

ト奥より金兵衞出て來て

金兵　コレ、どうするのだえ。客を打つちやつておいて濟むかえ、酒も肴も持つて來たのだ。せめて吸ひ物でも出さないのか。いま〳〵しいケチな內だ。こんな湯灌場のやうな內だから、何も出來ないのか。何なりとして出せ。親子ながら返事もしない。死人のやうな奴等だ。早くしやがれエ、

ト惡口ついて奥へ入る。

文藏　婚禮ぢやといふに、氣にかゝる事ばかり云ひをるな。

文太　ハテサテ、捨てゝおけさ。忰、味噌があらば摺つてやらう。

文藏　御病氣でござりまするに、お構ひなされますな。

文太　イヤ〳〵、又氣が變つて大分心よい。そちや鍋の下を焚きつけたがよい。

文藏　畏りました。

ト文太夫は摺鉢を引きよせ、文藏は鍋の下を焚きつける。二人とも、氣にかゝる思ひ入れにて、思はず顏見合せ、ツト外けて、文太夫は味噌を摺り、文藏は火吹竹を吹きつける。祇園囃子にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、東西とも筋かひに障子を見せ、見附け、唐紙、柴垣、外に枝折り戸、こゝに沼五郎、お妻にしなだれゐる。金兵衞、左近、左司馬、彌助、酒樽の鏡を拔き、茶碗酒を飲み、蛸の足を嚙つてゐる。右の鳴り物にて道具とまる。

ト六段の合ひ方になり

つま　もう惡い事をせずと、お放しなされて下さりませ。

沼五　何も惡い事はしないよ。

金兵　おいら達はお客だから、嫁御に酌を頼むのだ。
沼五　但し又、客の酌を、する事はならないのか。
つま　サア、お酌は致しませうが、お銚子がござりませぬ。ちよつと取つて參じませう。

ト逃げようとするを放さず

沼五　さう云つて逃げる氣か。
つま　それでもお銚子が
金兵　オツトあるぞ〳〵。（ト土瓶をあけて、酒樽の酒をすくび）サア、お銚子だ〳〵。これでついだり、ついだり。

トお妻に持たせる。沼五郎は茶碗を取つて

沼五　サア〳〵、これへつぎたまへ〳〵。

トこれにてお妻は不承々々につぐ。

四人　ヨウ〳〵、親分の色男め〳〵。
沼五　エヽ、なぶつてくれるな。時にお妻坊、ちよつと口をつけてもらはうかえ。（ト茶碗を出す。）
つま　わたしや酒は不調法でござりまする。

沼五　どうであの馬鹿聟どのゝやうぢやァあるまい。金兵衞、おれの心意氣を云つてくれろ。

金兵　よし、呑み込みやした。コレ、お妻坊、親分が今夜來さしつたは、高が斯うだ。親分がこなたに強氣に惚れて首つ丈だワ。どこの娘と聞き合したところ、長沼の鄕士、伊丹鄕左衞門といふ、堅藏の祕藏娘と聞いたゆゑ、手を入れても、足を入れてもくれぬから、金を出して妾奉公におかうといつても承知しない。其うち爰へ嫁入りと聞いての大癇癪。と云つて仕樣はなし、そこで子分の若い者が寄つて、この樽を先へ入れて、今夜祝儀に來たのだわな。

つま　エヽ。（ト悔りして）それは御深切に、お嬉しう存じまする。

金兵　所で爰へ來て見れば、素寒貧正氣散風藥、吹けば飛ぶやうな、こんな貧乏なしみつたれた所へ嫁入りしようより、親分の女房になれば、芝居は見次第、物見遊山、旨い物は食ひ次第、榮華この上なしだ。親分に乘りかへて見る氣はないか。どうでごんすな。

つま　ホヽヽヽ、何を仰しやりまするやら。たとへどんな事があつても、親が許して嫁入り致しましたれば、今更どうも。

金兵　そりやァ氣遣ひないワ。こなたさへ得心すれば、すぐに引ッ浚つて隨德寺、跡腹やめずに埒の明く事だ。なんと相談する氣はないか。さうすりやァ親分の顏も立つ。

沼五 コレ、お妻坊、どうだ〳〵。ウンと承知してくれないか。どうだ

つま 滅相な。そんな事して、どんな難儀せうも知れぬ。わたしや怖いわいなア。

沼五 そりやア怖い事も、難儀な事もない、といふ譯を云つて聞かさう。おれが親類に、藤川卜庵といふ醫者があるが、この醫者の息子に、藤川水右衛門といふ浪人があつて、大江の領地因幡の國で神妙劍といふ、日本でたつた一巻の、神影流の奥儀の祕書、それを盗んで遠州濱松へ來て、立身せうと有附きを待つ內に、劍術の遺恨によつて、石井右內といふ奴を、その水右衛門が討つて立退き、鎌倉へ行くといつて、おれの所に暫く逗留。それも卜庵どのゝ緣によつてだ。そこで神妙劍の一巻を持つて、江戸の邸の寺西閑心といふ人の取次ぎで、水右衛門が立身出世。その緣でこの沼五郎も、共々立身さしてやる程に、江戸へ來いとある、コレ、この密書。（ト懐から密書を出して見せ）さうなれば駿河を立退き、こなたを引ツ浚つて、江戸へポイと行くつもりだ。なんとうまい話であらう。サア、ウンと云ひな〳〵。

つま 何を嘘ばつかり。わたしや存じませぬわいなア。

沼五 ナニ嘘を云ふものだ。眞實といふ證據はこの密書、こなたに預けておくほどに、持つてゐやれ。

ト お妻の懐へ無理に密書を押し込む。

つま　エヽ、穢らはしい。最前から座興と思ひ、相手になれば、武士の女房に不作法千萬、郷士なれども伊丹郷左衛門の娘、今又田邊文藏といふ夫のある身ぢや。慮外したら免さぬぞ。法外者めが。

ト きつと云ふ。沼五郎思ひ入れあつて

沼五　すりや、これ程云つても聞き入れぬか。

金兵　おへねえへんぽうらいだわえ。

つま　聞くも中々穢らはしい。夫の耳へ入らぬうち、早く歸りや〳〵。

三人　こりやア親方、手強いぞえ。

沼五　エヽ、いま〳〵しい。唐犬、どうせうな。

金兵　高の知れた女一人。親分、いつその事に手足を押へて

沼五　それがいゝ。人の花と諦めさせうより

つま　エヽ、穢らはしい。

ト 聲を立てんとするを、金兵衛引き抱へ、沼五郎手籠めにせうとする。お妻突きのけろ。渡り拍子になり、チヨン〳〵にて道具廻る。

元の道具になる。文藏、俎板で刺身をつくつてゐる。文太夫は膳を拭いてゐる。

文藏　ハテサテ、奥はどさ〳〵と、騷々しい事ではあるぞ。

文太　いま聲を立てたは、嫁女のやうであつたぞや。

文藏　酒興の惡狂ひでござりませう。膳はようござりまするか。

文藏　それ〳〵。

ト膳を渡す所へ、奥よりお妻、髮も亂し、走り出て、文藏に取附き

つま　文藏さん、口惜しいわいなア。

ト泣き伏す。兩人見て、

文藏　髮亂したその形、口惜しいとは何と致した。

つま　わたしが奥で酌をしてゐたれば、いろ〳〵の無體な事云ひかけて、エヽ、口惜しいわいなア。

文太　嫁女々々、何も泣く事はない。大方奥の客人が惡洒落であらう。

文藏　ハテサテ、人馴れぬと申す者は仰山な。座興であらう。

つま　イエ〳〵、座興ぢやござりませぬ。わたしを捕へて、嫌らしい事の有り丈。女房になれの、夫を捨てろのと、いろ〳〵の無體。否ぢやといふたれば（ト云ひさして又泣く。）

文太　コリヤ、泣いてゐては事が解らぬわいの。
文藏　さうぢや〳〵。親と夫が控へてゐる。どうした〳〵。
つま　それから寄つてたかつて、わたしを手籠めにして連れて行かうと
文藏　何といふ。多勢寄つて、其方を手籠めに
つま　わたしもお前の女房ぢやもの。死んでも手籠めになるまいと、やう〳〵振り放して逃げて來たのでござんす。この儘では濟まぬ。どうぞ思案して下さんせ。わたしや腹が立つて〳〵、口惜しいわいなア。

ト泣き伏す。文太夫思ひ入れあつて

文太　悴、こりや意趣ある事と見える。君子は危きに近寄らず。

トきつと云ふ。文藏、思ひ入れ、お妻を前へ連れて來て

文藏　お妻、今尋ねる事、隱さずに云へよ。
つま　何でござんすえ。
文藏　奥にゐる客人のうち、そちやこれまでに、云ひ交した者のあらうがな。
つま　エヽ、穢らはしい事云うて下さんすな。わたしやこれまで男と、文取交した事もござんせぬ。殊

更奥の者は、見た事もない者ども。

文藏　それに又女房になれと、無體の仕方は

つま　わたしや知らねど、彼方から惚れてゐたのぢやわいなア。

　　ト云ふうち、沼五郎の捻ぢ込んだ密書、お妻の懐より出かゝつてゐるのを、文藏見て

文藏　イヤ、云ひ譯は暗い。その覺えない者が、其方が懐中のこの艶書は

　　ト密書を引出す。お妻、思ひ出した心にて

つま　ほんに、それはな

　　ト寄るのを睨めつけ

文藏　ウヌ、いたづら者め、斯樣な事を致す女。田邊文藏の女房にせうか。暇をくれた。出てうせう。

つま　イエ〳〵、そりやお前の氣の廻りといふもの。それ見て下さんせ。密書とやらいふ物で、江戸へ持つて行くと立身出世、金になるほどに、女房になるなら駈落ちする印ぢやと、無理に懐へ入れをつたわいなア。

　　ト此うち文藏、密書を開いて見て、恟りし

文藏　こりやこれ敵の水右衛門（ト云はうとして）して〳〵、この密書を持つてゐた者は

つま　奥にゐる若い侍ひ。醫者の藤川卜庵とやらの
　　と云はうとするを文藏とめて
文藏　コリヤ、もうよい……すりや、その緣組の
　　卜奥を見込む途端に文太夫と顏見合せ、密書を隱し、お妻を見て
　　こりや迂濶に離緣はならぬわい。
　　卜思ひ入れ。合ひ方、靜かになる。文太夫、莨盆を控へて、文藏の樣子を見てゐる。文藏思ひ入れあつて、文太夫の前に手を突き
　　親人樣へ、悴めがお願ひ。
文太　親子の仲に、改まつた願ひとは。
文藏　養育ありしお膝許を去り、神影の達人石井家に奉公。不幸にして立歸り、親人の御介抱申さんと存じたれども、御覽の通りの今宵の仕儀、武士道が立ちませぬによつて、何卒親人の武士道を、お捨てなされて下さりませ。
文太　ハテ、變つた其方の願ひ。今宵の仕儀によつて、身に武士道を捨てよとは
文藏　御先祖より代々傳はる田邊の名を、貧苦に暮らせど親人樣まで御相續、今その武士道を

文太 捨てゝくれいと其方の願ひは……ムウ。

　ト持つたる煙管をカラリと落し、手を組んで文藏の顏をヂツと見て

悴、武士道を捨てゝくれうが、其方はいよ〳〵田邊の家名を潰すか。

文藏 立てられませぬによつて、このお願ひ。

文太 イヤ、面白い。家を立つる心がなくば、詞を番うた、必ず立てるな。

文藏 潰してお目にかけませう。

文太 イヤ、まだ若いゆゑ合點がゆかぬ。（ト思ひ入れ）

つま 申し、そんならいよ〳〵わたしの疑ひは

文藏 晴れたはやい。

　トお妻の顏をヂツと見る。

つま エヽ、嬉しうござんす。

　ト手を合はす途端、文藏、拔き討ちにお妻の首をポンと切る。文太夫、悑りして文藏を見詰める。文藏、手早く膳の上へ首をのせ、風呂敷を卷く。合ひ方變る。兩人顏見合せ、文太夫、撞と腰をおとす。時の鐘。文藏、膳を持つて、ツイと奧へ入る。文太夫、見送り、「出かした」といふ心にて、硯箱を出

し、何か手早く紙へ書き流し、懐中して、下げ緒を取つて襷にかけ、立上り、刀を拔いて寐刃を合せながら、お妻の死骸を見詰めて、撻と坐して思ひ入れ。道具廻る。

元の奥座敷に戻る。沼五郎はじめ一同は醉つ拂ひ、寢轉んだり酒を飲んだりしてゐる。眞中に文藏、膳を据ゑ、手を突いてゐる。

金兵　どうだ。今まで亭主が面を出さないは、第一不躾け。肴も出さず、酌もせず、こりやァ客を馬鹿にするのだな。

彌助　大きな面をするなら、ぶんのめせ〳〵。

文藏　成る程、御立腹の段は御尤も、眞平御免下さりませう。やう〳〵肴一種調へました。珍物でござれば、これを肴に、一獻召上り下されい。

沼五　珍物などとうぬが口から、自慢をしてもろくな肴ではあるまい。ドレ、見てくれうか。

ト風呂敷を取つて首を見て、愕りし

ヤア、これは

皆々　その肴は

文藏　お客人の好物ではござらぬか。

皆々　ヤア。

ト吃りする。合ひ方變る。

文藏　この肴をお望みで、お越しなされたお客人方へ、亭主が手料理、魚の作り身。（トきつとなつて、刀を拔き）血汐の酒にて盛り殺し、何奴こなたの容赦なく、一人も生けては歸されぬ。藤川水右衞門が緣者の沼五郎、それに與なす不屆き者、押へてお酌仕らうか。

ト首をさしつけて、キツと大見得。

沼五　さては女が口走つたな。

文藏　いかにも。

沼五　聟といふのは慥かに昨日

文藏　曾我の社の鳥居先

沼五　顏は知らねど編笠越し、

文藏　摺れ違つたるお侍ひ。

沼五　その時の浪人で

二人　あつたよなア。

金兵　四の五はいらぬ。疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト一同刀を拔いて切つてかゝる。文藏、枝折戸を締め、刀をさしつける。合ひ方變つて、五人を相手に見事な立廻り、左司馬と左近は障子の中へ逃げて入り、あとの三人は斬り倒される。文藏、沼五郎の首を打ち落す。時の鐘にて舞臺廻る。

元の表の方になる。文太夫、刀を提げて待つてゐる。

ト奥から左司馬、左近、逃げ出してくる。文太夫、切つてかゝり、立廻りあつて、兩人を切り倒す。

奥より文藏、お妻と沼五郎の首を持ち、血刀を提げて出てくる。

文藏　親人樣。

文太　悴、皆仕留めたか。

文藏　二人は逃げうせ、跡は殘らず、

文太　イヤ、滅多に一人も逃がしはせぬ。（ト兩人に止めを刺す）

文藏　天晴れ。御苦勞。（ト首を捨て、刀を鞘に納め）斯くの如く手に掛けたれば、遁れぬ命、この世のお

暇。おさらば、

トつか／＼と行かうとする。

文太 悴待て。

文藏 イヤ、捕り手の手にかゝらぬうち、此方より名乘つて出て

文太 待て。親に武士道捨てさせたは、田邊の家を立てぬゆゑか。コリヤ、親に物事隱さずと、明して
行け。

文藏 明して行けとは

文太 敵討出立の田邊文藏。

文藏 ヤ、なんと。

文太 敵、藤川水右衛門の、行くへが知れたか。

トこれにて文藏、ツカ／＼と戻り、文太夫の前へドツカリと坐り

文藏 すりや、仇討の一儀を

文太 其方が實の親ぢやわやい。

文藏 さては何かの樣子をば

文太　いかにも。

文藏　ハッ。（ト辭儀する）

文太　文藏、ホヽウ、出かしたなア。

　　ト手をあげて褒める。合ひ方變る。

濱松の騷動、藤川水右衞門の爲に討れしは石井右内と、聞くより直に其方の身の上、病中ながらも案ぜし所、この程の歸國、殊に今日女房まで、持つ心になりしは、南無三我が目違ひ、忠義の魂ひとろけしかと、何ぼうか心苦しく、殊にはこの文太夫、藤川卜庵に仕へ、その悴水右衞門は無道者ゆゑ見限つて、今の浪人。悴の其方は石井へ奉公、主人の敵は親の古主、その緣によつて何事も打明けぬか、但しは卑怯未練の魂ひかと疑ひしが、親を捨て、家を捨て、女房の首を討つて、相手を仕留める心の鐵石、それでこそ誠の武士、人は一代名は末代、天晴れ出かしたなア。

文藏　ハヽア、驚き入つたる御眼力、御推量の上は何をか包まん。幼少の折家出なし、神影の達人石井家へ仕官のところ、右内どのは橫死、元より石井家は沒收。源之丞樣兄弟はじめ、家來の者は仇討出立。この文藏は猶更に、神影流の祕術まで、敎へ給ひし主なり師なり、共々に敵討と、主從誓ひの神文なし、お暇乞ひと立歸つて、樣子を見れば、案に相違の御大病、南無三寶、われ相果

てなば田邊の家名斷絶、とあつて今更存命なし、不忠の汚名とる時は、却つて家名の恥辱となり武士も立たず、先祖へ不孝。女房に無體の戀慕しかけたる、沼五郎が所持の密書は、水右衞門が方より、彼の神妙劍の一卷ゆゑ、沼五郎も共々立身との書面。女房を手にかけしも、敵の密事を知つたるゆゑ。意趣斬りにもてなしこの場を立退き、敵討の發足と、口外こそ致さねども、親にも家にも女房にも、替へたるは主人の仇討。あはれ不便と思しめし、お見遁し下さらば、五百生まで御恩は、さら〳〵忘れませぬ。武門の家に生れたを、不肖と思し諦めて、仇討發足のお許しを、偏へに願ひ奉る。

文太　ホヽウ、さうありたき事。忠孝二つながら全からざるは辨へをる。大事ない〳〵。親もそれで安堵致した。發足の餞別くれう。

ト最後の書き物を出す。文藏見て、

文藏　こりや狼藉者を討つたといふ屆けの書附け。

文太　申し開きのその訴狀。跡構はずと發足いたせ。

文藏　ハツ。

文太　めでたう別れの杯くれう。

ト　お妻の首の血汐を、有り合ふ柄杓へうけて
一夜の枕も交さねど、未來の緣の血杯、卽ち門出の血祭りよし。
ト　一口のんで渡す。文藏戴いてのむ。
肴くれう。
ト　刀を腹へ突ッ込む。文藏　驚き
文藏　こは親人には、何故の御生害。
文太　家を捨て、妻子を忘れ、親をも捨てるが武門の習ひ、別してはこの文太夫の、古主は藤川水右衛門なれば、勘當うけねば、敵討はなるまいがや。
文藏　誠に御尤も。
文太　コリヤ、心殘らず、手柄をせいよ。
文藏　恐れ多い御生害、心魂に徹し、有り難う存じます。
文太　（にっこり笑み）ホヽウ、喜ばしい。老いさらばうたこの體、病死は武士の本意でないわい。
ト　刀を引廻す。
文藏　とはいひながら

文太　大事の門出にそのほえ面。
文藏　ぢやと申して、これが一世の
文太　何を繰り言。
文藏　でも
文太　早う行かぬか。
文藏　サア、それは
文太　エヽ、未練な。出立。
文藏　ハツ。

ト靜かな三重になり、文藏、形を正して、門口へ出る。文太夫、門口へよろばひ出て、格子につかまつて見送る。文藏、歩みかれ、花道の中程で見返る。文太夫、撞と腰を落す。文藏、ハツとしてツカツカと舞臺へ戻ると、文太夫、門口の戸を閉す。文藏、聲を忍んで泣く。文太夫は靜かに落ち入る。

よろしく

幕

吉原井筒屋の場
大音寺前の場

七幕目

役名――寺西閑心。白井權八。絹賣り、彌市實ハ本庄助市。三浦屋小紫。蝮の次兵衛。長兵衛一子長松。中間、土手助。子分、半助。同、權助。同、仁右衛門。同、六助。宗匠、石斧。藝者お梅。若い者、喜助。女中、お勝。禿、ゆかり。同、色香。

本舞臺、三間の間、三重舞臺、向う茶壁の一文字、馬盥に白交りの杜若生けてあり、井筒屋といふ掛け行燈、長暖簾、下の方に二階、この下は青簾、すべて仲の町の體。幕の内よりお梅、藝者にて、三味線を彈いてゐる。お勝、茶屋の下女、前垂れの形にて、喜助、若い者にて、三人、虎拳をしてゐる見得にて幕明く。

ト向うより下座より、女郎買ひの仕出し多勢出て來て行き違ふ。向うより五郎作、雲助のなりにて、竹杖をかつぎ、ノツ〱出てくる。

三人　ヨイ〱〱〱。

かつ　サア、わたしや和藤内。

喜助　此方は虎で
うめ　喜助どんが負けノ〳〵。
喜助　ナニ、和藤内と虎では、虎が勝サ。ハテ、虎負けて酒飲ましよといふわな。
五郎　拳に負けて酒を飲むなら、おいらは常住拳に負けてゐるわい。
喜助　何を此奴が。乞食と誰が拳をするものか。
五郎　なんだ、乞食だ。
喜助　うぬァ乞食ぢやァないか。
五郎　おらァ千住の雲助だ。
喜助　千住には百姓ばかりと思つたら、雲助もゐるか。
五郎　知れた事だワ。乞食と云はれては合點しないぞ。
喜助　合點しないといつて、どうするのだ。
五郎　斷うするわえ。
ト喜助を突き飛して下座へ逃げて入る。喜助、起き上がり
喜助　ウヌ、どう乞食め。

うめ　ハテ、もうよいわいな。

トとめてゐる。津島やうの鳴り物になり、向うより若い者、鈨菊の紋附いたる大提灯を持ち、小紫、裲襠衣裳、ゆかり、色香、二人とも禿にて附き添ひ、遣り手附いて出てくる。その次に閑心、五十日鬘、羽織衣裳、白柄の大小、下駄がけ。土手助、中間にて草履を持ち、權助、着流し、白柄の一本差しにて、誂への丹前仕立ての羽織を肩に掛け、半助、香爐を持ち、六助、仁右衞門、いづれも白柄の一本差し、下駄がけにて、銘々いろ〳〵な物を持ち、後より石斧、撫でつけ、道行を着た俳諧師。後より長松、着流し、一本差し、籠に入れた鰹を持ち、次兵衞、着流し、下駄がけにて附き添ひ、ズッと後より彌市、手拭を吉原かぶりにして、着附け、羽織、雪駄がけ、風呂敷包みを背負ひ、出て來て皆々花道に立ちどまり

閑心　一双の玉手千人の枕と、この不夜城の三千樓。さればその頃の發句にも「闇の夜も吉原ばかり月夜かな」とは、晦日の月もあればあるもの。

土手　そこで四角な玉子の君へ、通ふお供は中間土手助。

權助　閑心どのゝ召替へ持ち、よしや男の丹前羽織。

半助　東木といふ名香を、焚きしめさせて移り香の、それとゆかしきお召し物。

仁右　男を磨く湯灌場の、仁右衞門といふかすり取り。

六助　おらァ何にも白柄組、名も早桶の六助といふめでたい男。
小紫　傾城の、賢な柳のいとしらしい、外の男の肌知らず。
みど　禿は緑、二葉より
色香　花はくれなゐ深見草。
石斧　閑心どのゝお髭の塵、とつた千句の秀逸は、「大佛の髭のあたりが若葉かな。」
長松　持ち遊びの張り子仕立て、拵へ物でも初鰹、初時鳥きかぬうち、買はうといふのがほんの江戸ッ子。
次兵　アヽつがもねえ折助の、子だと思つてなぶるのか。あれでもちよつぼり男達。
土手　癡言つくと土手助が、張り子の鰹をぶち毀すぞ。
小紫　ハテ、奴さん、よいわいなア。
うめ　これはお早い閑心さん、大門から連れ立つて、揚屋入りの小紫さん。
かつ　マア〱こゝへ
閑心　サア、小紫。
小紫　知らぬわいなア。

ト淸搔にて、皆々本舞臺へ來て床几にかゝる。彌市、ズッと下の方に立つてゐる。

閑心　誠や、長生殿の中に不老門たるこの世界。鄙珍らしき紅粉の、かをりにひかれて慮外者。

仁右　ヤイ、在鄕者め。

彌市　わしが事かえ。

仁右　そこへ出ろ。(ト大きな聲でいふ)

彌市　へイ〳〵。(ト恟りして坐る)

半助　お頭が執心の、小紫どのに指でもさすと、閑心どのゝ罰があたるぞ。

彌市　ハテ、女郎は賣り物買ひ物。わしは上州の絹賣り彌市、金にかけたらこの通りなれど(トちよつと金財布を出して)あのやうに、怖い男の權柄で、心のたけの小紫どの、もう女郎買ひはよしませうわい。

ト行かうとする。小紫思ひ入れあつて

小紫　ハテ、ようござんす。情を商ふ流れの身、心意氣次第で賣る事もござんせう。怖い事はない程にマア、莨でものましやんせいなァ。

ト莨を吸ひつけて出す。ゆかり、煙管を取つて彌市の側へ持つてゆき

ゆか　おいらんのざんすよ。

　　ト出す。彌市取つて

彌市　これは忝い。

石斧　ハテ、おいらんの意氣地といふものは又格別。成る程「傾城の親を見よかし鴛鴦の閨」とは、蕉門の生粋ぢやなア……併し、旦那、どうやらあれでは

閑心　ハテ、小柴が色よい返事聞いたる上は、江戸生えぬきの白柄組、身請け致すは知れた事。

次兵　（思ひ入れあつて）イヤ、白柄組の閑心どのとやら。江戸の生えぬき／＼と云はつしやるが、小鬢ながら、爰にも生えぬきが居りますわえ。

權助　此奴は大分、大たば附け木と出かけたな。お旦那に向つて、うつかりと吠えるなよ。

次兵　遠からん者は音羽屋と、古いせりふはとりおいて、お江戸生えぬき日本橋、土一升に金一升、子分となつた蝮の次兵衛、一生御贔屓親代々、隱居に似ます三升の地廻り、面を見ておかつしやい

閑心　うぬが蝮の次兵衛とやらか。して、其方の小僧は

次兵　サア、長松どの、爰へ來さつしやい。

長松　（前へ出て）出たが、おぢいどの、何を下さるか。

土手　オヽ、この土手助がやるべい、握り拳を

ト つか〳〵と來て長松を捕へる。次兵衞さゝへる。

長松　この二合半め。

ト 下駄をぬいで、土手助の頭をぶち割る。

土手　アイタヽヽヽヽヽヽ。切つたぞ〳〵。

閑心　ウヌ、身共が家來に疵を附けたな。

ト きつとなつて拔きかける。次兵衞とめて

次兵　ハテ、疵を附けても相手は子供だ。又、二本差しであらうが、喧嘩といつちやァ五分でも引かない。これが江戸での男達。

閑心　して又、小僧は

長松　お父さんは花川戸の幡隨長兵衞、橋場、今戸の瓦燒きで、ちつと煙てえ男でごんす。

彌市　（悔りして）ハテ、お江戸の子供には、たまげ申す。

ト 中途になり、彌市、下座へ入る。土手助キッとなり

土手　ウヌ、小ぴッちよめ。

閑心　コリヤ、土手助、捨てゝおけ。
土手　さうでもあらうが卯月時、てッぺん割れて時鳥。
閑心　土手助がその疵にて（ト思ひ入れあつて）ヨシ／＼、奥へ行け。
石斧　ドレ、醫者様代りに介抱してやらうか。
　　ト合ひ方になり、石斧、土手助を介抱して奥へ入る。この時、月出て、時鳥啼く。閑心、空を見て
閑心　「一聲は月が啼いたか時鳥」、あれを肴に、ドレ一つ。
喜助　それは宜しうござりませう。
　　ト女形皆々、酒肴を持つて來て
うめ　サア、閑心さん、一つ飲ましやんせ。
　　ト閑心、杯を取り、お梅酌をする。
閑心　なんと小紫、今啼いた時鳥の初音、面白く聞いてゐるか。
小紫　アイ、珍らしい時鳥ぢやから、聴き事でござんすわいなア。
閑心　その時鳥も、初音の時はよけれども、西も東もやかましく聞えては興がない。初めは啼く音も賞美すれど、八千八聲啼きつくし、血を吐く思ひも知らぬ白癡。されば發句にも、啼き續けに啼く

小紫　も時鳥と、人間も丁度その通り、血を吐く思ひのない内に、覺悟が大事。
（思ひ入れあつて）「鴨川に放して見たき時鳥」。アヽ、まゝならぬものぢやなア。
ト閑心思ひ入れあつて、長松の張り子の鰹を取つて

閑心　こりや持ち遊びなれど、この鰹といふ魚もその通り。初めは初鰹々々と懇望なれど、後には肴魚なれば、どんな者の口にも入る。それぢやによつて、早く覺悟しろ。

小紫　閑心さん、わたしに當て附けて、鳥や魚のたとへ、身請け／＼と口癖に云はしやんしても、たとへ時鳥でも、鰹でも、まさかの時には死ぬるが高、命を捨てるとさへ思うてゐれば、別に驚く事はござんせぬ。

閑心　なんと。

小紫　死骸を身請けする氣なら、アイ、お心任せ。

閑心　ヤア。

小紫　啼きつゞけに啼け時鳥。

閑心　エヽ、うぬア、

小紫　子供、來や。

ゆか　アイ、。

　　ト清掻にて、小紫先に、ゆかり、色香、奥へ入る。

皆々　呆れたものだ。

閑心　小紫の我が儘も、ありや江戸育ち。

次兵　その江戸者の生えぬきに

閑心　この閑心が、近附きの杯獻さうか。

次兵　アノわしにかえ。

　　ト閑心、杯を取り上げる。お梅、酒をつぐ。閑心飲んで、杯を次兵衛へ打ち附ける。次兵衛、身をかはす。杯微塵に毀れる。次兵衛、思ひ入れあつて

　　こりや、近附きの杯を

女皆　あのやうに割らしやんしたは

閑心　よもやそれでは飲まれまい。

次兵　藪に馬鍬、横に車、引くに引かれぬこの場の難題、杯うけぬも蝮の恥辱。

子分　飲まねば濟まぬ白柄組。

次兵　とはいへ碎けし

子分　杯うけぬか。

次兵　サアそれは

皆々　サア〳〵〳〵

次兵　ムウ。（トきつと思ひ入れ。空を見ると、肥前節になる）。水の面に照る月なみを數ふれば……（ト鉢肴の鉢を取つて）この鉢へ一つ、ついで下され。

うめ　アイ。

ト銚子を取つて酒をつぐ。次兵衛、一口飲んで、閑心へさしつけ

次兵　微塵に割れたる杯の返杯。

閑心　ハテ、合點のゆかぬ。碎けて捨てし杯の、その難題の鉢杯を、蝮の次兵衛の返杯とは

次兵　うけたる酒に映る月、とりも直さずこの杯、心の返杯、閑心どの、一つうけずばなるまいが。

閑心　酒に映りし寒の月、たとへの杯、納めてくれうか。

次兵　そんなら肴に、ちよつと

ト閑心へかゝる。立廻りにて閑心、懷中より一卷を落す。次兵衛見て

この一卷は（ト取らうとする。）

子分　ウヌ、お頭に慮外をなして
　　　ト四人かゝるを、立廻りあつて次兵衞、見事に投げる

次兵　こなさん達に、近附きになりたかアねえ。

長松　ア、、つがもない。

子分　何を、野郎め。

次兵　その息の根がとまつたら

閑心　なんと。

次兵　引き取る旦那の寺西どの。

閑心　蝮の次兵衞、

次兵　さらばでごんす。
　　　ト唄になる。次兵衞、長松を連れて下座へ入る。引違へて、五郎作出て

五郎　閑心どの

閑心　赤羽五郎作どの。

五郎　この關東へ下りしも、奪ひ取つたる蛙丸にて、立身出世はこなたの推擧。併し人目にかゝらぬやうに、竹杖に仕込んでこの通り。

閑心　すりや、兼ねて話しの蛙丸、見るは初めて。

　ト五郎作、仕込みを拔いて見る。蛙の聲すさまじくする。皆々思ひ入れあつて

權助　成る程、鞘を放れると

六助　すさまじい蛙の聲。

半助　疑ひもない蛙丸だ。

五郎　併し難儀はこの一腰、濱名家にて紛失と云ひ立て、鎌倉より嚴しき詮議。

閑心　暫らくどこぞへ。

五郎　して、藤川水右衛門どのは

閑心　敵持つ身の大事なれば……以前の家來、おなみといふ者の忰、山谷あたりの船宿に密かに隱まひ、隨分息才。

五郎　萬事よろしく頼み存ずる。この上は、蛙丸をどこぞへ（ト思ひ入れあつて）おさらばでござる。

　ト清掻になり、五郎作は竹杖を持つて向うへ入る。

子分　して、お頭、どうさつしやります。
閑心　これから身共が一思案、是非とも小紫の身請けの一埒。
半助　さうさへすればお頭の
六助　イヨ、奥樣、御新造樣、有り難いね〳〵。（ト大きく云ふ。）
閑心　エヽ、よしにしてくれろ。弄るなえ〳〵。
子分　それでも、嘘ぢやァなし。
閑心　さうせう爲の通ふ神。
子分　その御祝儀にめでた酒。
閑心　サア、來やれ。
ト清搔にて、閑心先に、子分皆々奧へ入る。引き違へて石斧、少し醉つたるこなしにて出て來て
石斧　あの土手助が疵洗ひの、燒酎ながぶりとやつたら、強氣に醉つた。「燒酎で虎の涙や千鳥足」。よく叶つた句だね。どうでごぜえす。
ト　よろ〳〵して行かうとする。この時、下座より彌市出て來て
彌市　モシ〳〵（ト呼ぶ。）

石斧　エ、こちの事かえ。

ト云ふと、彌市、跡へ寄つて知らぬ振りにてゐる。

玉句があらばお附けなさい。如何だね。

彌市　イヤ申し（ト呼びかけて、どうせうかと思ひ入れ。）

石斧　ハテ、何事でごぜえす。

彌市　申し、俳諧師とやら樣。

石斧　お句があるかな。

彌市　アノ、申し兼ねましたが、こなたを見かけて、お頼みがござりまする。

石斧　俳諧師を見かけてお頼みとは、賀の御發句か、但し神祇か、戀のお句かな。

彌市　成程、御推量の通り、その戀ゆゑに御覽じませ、ろく／＼月代さへも剃らぬ戀煩ひでござる。

石斧　エヽ。

ト悚りする。合ひ方。彌市、手拭を取ると、月代伸びし鬘になる。

石斧　ハテ、同じ戀の世界。して、先の女は娘か、後家か、月がこひか。傾城や藝者なら、何ま、[illegible]まいに。

彌市　サア、その傾城も傾城、三浦屋の小紫といふ、美しいお女郎。
石斧　そんならあのおいらんに、
彌市　恥かしい事ながら、惚れました。
石斧　それを何も戀病にする事があるものか。金さへ出せば三つ蒲團の上で、抱かれて寐られる事だわな。
彌市　されば、わしがフッとこの正月、吉原のおいらんを見物、仲の町を道中と聞いたによつて、草鞋がけで歩く事かと思つたら、揚貴妃のやうな美しい顏で、錦繪のやうな着物で歩く姿。中にも紫の衣裳を着たお女郎、ちよつと見るから、惚れたとこそいへ〳〵。あのお女郎の名は何といふと聞けば、三浦屋の小紫と、耳へ入るよりうつとりと、跡を慕うてあちこちする間に、その夜も早引け四つ。また來る月も吉原へソッと來て、どうぞあの女郎を買うて見たいと、商ひの細い利分から、やう〳〵と溜めた金、先刻にも見せた二百兩。（ト又金を見せ）ア、どうぞ小紫どのを買ひたいと、思ひ思うて來て見ても、何にも知らぬ田舍の芋掘り。そこでウカ〳〵、身は空蟬の絹賣り彌市、見ればこなたは、廓の案内が詳しい樣子。あの小紫どのをお世話して、買はして下されゝ、賴みます。

ト手を突いて頼む。石斧、手を打つて

石斧　したり「戀病に巻き紙はふる秋の暮れ」とあるが、今ぞ發明いたした。したが、女郎買ひは兎角金次第さ。

彌市　サア、その金次第は合點なれど、一向不案内の事ゆゑ、こなたの御指南を受けられませうか。

石斧　それは隨分世の中の、滑稽を渡世に致す、俳諧の業でござれば、承知の助〳〵。

彌市　その承知の助と申す人も、傾城買ひに參る人でござるかな。

石斧　イヤ、廓の洒落で、合點だといふ事を、承知の助と申す。兎角は派手な事も承知でなければならぬ。茶屋、揚げ屋の若い者、女どもへも、心附けが肝心々々。

彌市　その心附けも隨分合點。

石斧　それこそ、承知の助〳〵。

彌市　心附け、承知の助〳〵

ト何か考へるこなし。石斧、奥へ向ひ

石斧　サア、お客だよ〳〵。

皆々　アイ〳〵。

ト[illegible]、喜助、お勝、出てくる。

うめ　宗[illegible]八とわえ。

石斧　そ[illegible]ぬしさ。

かつ　あの人は、先刻閑心さんが邪魔にさしやんした田舎の衆。ほんにお客も

皆々　すさまじい。

ト このうち彌市、風呂敷包みより、反物、莨入れ等、いろ〳〵出して

彌市　わしはこの通樣のお世話で、小紫どのを買ふ者。元より上州者でござれば、持合せたこの反物、まづこちらの女中には、縞柄はどうか知らぬが、上州織の出來のよい太織一反。

ト お梅の前へ持つて行つてやる。お梅笑つて

うめ　左樣さ。

彌市　こなたへは沼田莨、男衆には斜子の帶地。（ト銘々へ並べる。）

かつ　わたしや莨は嫌ひぢや。男帶でもよい、半襟にするから、喜助どん、取替へておくれ。

喜助　イエ〳〵、それは名指しさ。したが、上州斜子は少とあやまる。

彌市　どうぞしましたか。

喜助　イヤ、あんまりお心がつかれて
三人　嬉しいわいな。
彌市　さて宗匠どのには、派手に誂へ織の上州八丈。
ト反物を出す。石斧取つて
石斧　これは本八と思ひの外、上八とは、白木屋の手代で、少とにぶいではござらぬか。
彌市　イヤ、二分位ではござらぬ。それで二十三四兩の八丈でござる。………時に、お女郎買ひの御指南はな。
石斧　まづ、その長髪を剃つて、粋なちよいたばね。仲の町の井筒屋へスツと上がると、内から女や若い者が
喜助　モシ旦那、ようお出でなされました。
かつ　ソレ、お茶や莨盆。
喜助　早くお杯を持て來いよ。
かつ　アイヽヽ。（ト仕形する。）
石斧　あれ、あのやうに大仰に、そやし立てるが、どうだえ〳〵。

彌市（喜んで）それはハヤ、面白い事でござらう。
石斧　それから會所へ藝者を呼びにやると、三味線箱をズツと持たせて
うめ　斯うわたし等がお見世へ參つて「ぬしが來さしつたのかえ、嬉しいなア。」
　トこなしあつて彌市の側へ來る。
石斧　あの通り、お定まりの挨拶があつて、調子を合せて、彈くとそれから
うめ　外にまた男の藝者衆が、二組も三組も來て大騷ぎ。
喜助　モシ、おいらんでござりますと、お知らせ申すと、おかみさんの出迎ひ。
石斧　約束の見立て迎ひで、初會からおいらんが、仲の町へ八文字。影向あると、味な心になるやつサ
　ト仕形する。彌市思ひ入れあつて
彌市　さうであらう〳〵。
石斧　そこで裲襠をヒラリとして、見世へ腰をかけ「おかみさん、この間は」とたつた一口、ツンとしてゐるその目元が千兩サ。（ト彌市の形を見て）何にしても、おいらんと一つ寐をする事だから、コレ〳〵、このやうに上州風の形では惡い。下着は本八、縞縮、小紋縮、いづれもゴツ〳〵物の粹なやつ。まづ、おいらん買ひの事なれば、羽二重の黑仕立て、帶は博多、銀煙管、越川の莨入

れ、沼田蓙でなしに、本物の國分でズッと脂さがり。（ト一つ〱仕形して）それから揚げ屋入り
大騷ぎの上で、座敷は引けて、三ツ蒲團の中で大きまり。

彌市　そこで何うするのぢやな。

石斧　そこが云ふに云はれぬ命どころ。ソレ、今も教へた

彌市　成る程、合點……承知の助〱。

石斧　時に暫く寐しづまると、憎や鳥鐘、きぬ〴〵の烏に居續け。內の約束、內證のけて惣花、その晩
に床花、これまでが餘程の物いり。

うめ　そんならわたしが、マァおいらんを、呼び申して來ようわいな。（ト入る）。

彌市　小紫どのにしつぽり逢はれる事なれば、たとへこの身は（ト思ひ入れあつて、ザッとなる。）

石斧　それさへ委細合點なら

彌市　ハテ遲うなつた。承知の助。

皆々　ても情あるお客さんなア。

ト奧にて

うめ　サア、おいらん、お出でなんしえ。

小紫　わたしが行て、逢はうわいなア。

　ト合ひ方になり、奥より小紫、お梅出てくる。

彌市さんとやら、何かの樣子は聞きました。あんまり嬉しいお前の眞實に、惚れて〳〵惚れぬいたわいなア。

彌市　ヤア〳〵〳〵。（ト大きに恟りして）そりやマアほんまに。（ト小紫の顏をヂッと見て）小紫どの、忝い〳〵。

石斧　こいつは、とんだ事になつて來たわえ。

彌市　宗匠どのゝお働き、皆の衆、忝うござる……小紫どの、少つとも早く來て下され。

　ト小紫の手を取り、立上がらうとする。この時、五ツの鐘鳴る。

今打つ鐘は

喜助　ありや觀音の五ツでござりませう。

彌市　エヽ。（ト驚き、思ひ入れ。）

うめ　彌市さん、五ツを聞いて、なぜ驚かしやんす。

彌市　されば、今打つ鐘は初夜の鐘、諸行無常を告ぐるといへば、何やら物の哀れを誘うて

ト云ひ〳〵、寒氣立ちたるこなしにて、身を慄はす。

小紫　モシ、きつうお前は慄へさしやんすが、寒氣でもするのかえ。

彌市　イヤ、こりや病氣ではござらぬ。

小紫　でも、このやうに慄へさしやんすものを

彌市　こりや、小紫どのを戀風ぢや。

小紫　エヽ。

彌市　コレ、皆の衆、少と折入つて、話したい事があれば、暫く爰をうめ成る程、こりや心附きませなんだ。ナア、皆さん

皆々　そんなら奥で待つてゐますぞえ。

石斧　ても、あやかり者め。

ト唄になり、石斧にお梅、お勝、喜助附いて奥へ入る。彌市、思ひ入れあつて、

彌市　コレ、小紫どの、今度の江戸出は、先月の十九日、こなたの顏を見るよりも、忽ちゾツと戀風が身にしむ夜半の二十日月、戀の闇路も生得の、田舍の月の朧にも、こなたの顏がチラ〳〵と、見ゆると思ふ戀病に、この身も慄ふ初夜の鐘、四ツ、五ツの合圖の時、一夜の契りあるなれば、そ

れ思ひ出に死ぬとても、なんの厭はう、小紫どの。（ト思ひ入れあつて）情を賣つて下されい。コレ、拜むわいの〳〵。

小紫　夏の夜はまだ宵ながらその寒氣、身を慄はせての戀病は、よく〳〵の事でござんせう。それ程までに在所氣質に、思ひ合うて下さんす、眞實ゆゑにわたしも又、お前の心に惚れたれど、抱かれて寐られぬその譯は（トあたりを見て）あの馬盥。

彌市　ナニ、寐られぬ譯が馬盥とは（ト合ひ方になり、馬盥を取つて前へ直し）これが何うしました。

小紫　わたしが深ういひ交した、男といふのは杜若。

彌市　すりや、間夫の男は業平風。

小紫　花の白いは苗字の白井、間夫の替へ名は杜若とて、比翼の契りは權八どの、ぬしの姿繪を、コレこのやうに（ト懷より守り袋に入れたる、權八の似顔の錦繪を出して）ぬしの似顔に描いてもらうて、肌身離さず、守りのやうに

彌市　すりや、どうあつても、この錦繪の間夫があるゆゑ、彌市に情はかけられぬとか。

小紫　アイ。

彌市　實にや傾城傾國とて（ト云はうとして）成る程、杜若の云ひ譯、聞入れぬではなけれども、又わし

が云ふ事も、少つとは聞分けて下され。今も見せた二百兩の、金はこなたへやる程に、親方と相談して、わしが願ひを叶へて下され。

小紫 (思ひ入れあつて) 取るも憂し、取らぬもつらしと、弓に譬へし古歌の心。いかに流れの身なればとて

彌市 二張の弓は引かぬといふのか。すりや、どうあつても、得心ではござらぬか。

ト小紫ヂツとなる。彌市、思ひ入れあつて、ズツと立つて行かうとする。

小紫 こりや、どこに行かしやんす。

彌市 知れた事、わしがこれ程まで云ふに、得心ないゆゑ、思ひ切つて

小紫 それでは身請けの事も、その二百兩の金とやらも

彌市 得心なければ、せう事がござらぬ。わしや悲しうてならぬもの。

小紫 アノ、それ程までに。(ト思ひ入れ)

彌市 すりや聞入れて下さるか。

小紫 さうして、その二百兩はえ。

彌市 こゝに大事に持つてゐる。小紫どの、身請けの上は、わしが儘になるといふ約束の

小紫　アレ、また疑ひ深い
彌市　間夫と名に立つ權八と
小紫　緣を切れかえ。
彌市　手切れを見たなら、手附けどころか、直に身請け。
小紫　エヽ。

ト思ひ入れ。彌市、ガタ〳〵と慄へる。

ほんにお前の寒氣しのぎ。（ト裲襠を脫いで彌市へ着せる。）
彌市　こりや忝うござる。そんなら二階で、心のたけを（ト云ひ〳〵二階の際へ行き、思ひ入れあつて）
小紫どの、田舍者ぢやと思うて、必ず騙して下さるなや。

ト誂へ獨吟のメリヤスになり、彌市は二階へ上がる。

〽紫の水にあうたる杜若、開くや花の五丁町、露にしをるゝこの涙。

トこのメリヤスにて、小紫思ひ入れあつて文を書き、手を叩く。奧より、ゆかり、色香、出てくる。

小紫　コレ、江戶町に權八さんが
ゆか　居さつしやるなら、お連れ申して來ますのかえ。

小紫 この文を持つていて
色香 早うお連れ申して來いせう。
小紫 行て來やア。
兩人 アイヽヽヽ。
ト兩人向うへ入る。小紫、思ひ入れあつて
小紫 いかに勤めの習ひとはいひながら 何にも知らぬ彌市さんを、騙して手附けの二百兩。これも誰ゆゑ、權八さんの爲……とはいへこれまで、つひに物云ひ一つした事もない權八さん、心に思はぬ愛想づかし。彼方を思へば此方へ氣の毒。此方を思へば彼方へ笑止。ほんに思へば時鳥の、八千八聲であるわいなア。
〽夏書に夢の命毛も、ありたけ緣の濃い墨と、ならぬ契りの薄墨や、夜目にや讀めど讀みかぬる
トこの文句にて、向うよりゆかり、色香、先に立ち、權八、着流し、大小、草履にて、文を見ながら出て來て、花道へとまる。このうち小紫、いろ〳〵こなしあつて、手酌にて酒を飮み、また莨盆を引寄せ、莨をのむ。

權八　紫の、色によるべの井筒の井の字、ゆふべ〳〵の通ひ路を、待ち兼ねての文での迎ひ。長兵衛どの〻思惑も、いとはで廓の花の露、濡る〻を知らぬこの身にも、色は思案の外ぢやなア。
ゆか　サア〳〵早う
兩人　ござんせいなア。
權八　ハテ、行くといふに。
　〽濡れてゐよとの時鳥、うちしめりたる空に一聲。
　　トこれにて本舞臺へ來る。
兩人　おいらん、權八さんが
權八　小紫、そこにか。
小紫　權八さん、お前アノ（ト顏を見て思ひ入れ）ようござんしたなア。
權八　さうして文で逢ひたいと、呼びに寄越したその用は
小紫　サア、その用は
權八　樣子聞かねば氣が落ち着かぬ。ナヽ、何の用で
小紫　サア、わたしの身請けの事で

権八　ヤア。

小紫　逢ひたうござんす。

権八（急いたるこなしにて）して、その身請けは、誰がしようといふぞ。

小紫　サア、それは

トつかへる。この時、奥にて、

閑心　その身請けは云はずとも、白柄組の閑心だ。

ト合ひ方になり、奥より閑心先に、権助、六助に、喜助附いて出る。権八見て

権八　ムウ、こなさんが聞き及んだ、小紫へ通はつしやる

閑心　いかにも寺西閑心だ。

権八（ムッとして）大方身請けは襟に附く、白柄組であらうと思つた。（ト下の方の床几へ来る）。

閑心　ヤイ、若い者。

喜助　ヘイ〳〵。（ト前へ出る）。

閑心　明日までに相違なく、手附けを渡すその證據に、身共が着替へのその羽織。

権助　金の代りはお頭が、伽羅をとめたる移り香の、よしや男の丹前羽織、明日までの當座の質物。

ト羽織を出す。喜助取つて

喜助　このやうにプン〳〵と、伽羅のかをりのお羽織は、明日まで預かりまして、コレ、この通り衣桁へかけ（トそこにある衣桁へかけ）併し、今にもお金の早い方へ、相談は致しますぞえ。ドレ、委細を奥へ話しませう。（ト奥へ入る。）

六助　お頭、これで落ち着きました。

閑心　どうで勤めの盗みをして、くッつき合ふ夏の蟲、飛んで火に入る態の惡さ。その蟲けらのフラフラと、うるさくまよふ蠅蟲め。（ト權八に當てつけ）穢れを拂ふはこの香氣。

ト側にある香爐を引寄せ、香合を出して香を焚く。

權八　すりやアノ、いよ〳〵

小紫　わたし〳〵が身請けは

閑心　ハテサテ、寺西閑心だ。

小紫　イヽエ、閑心様ぢやござんせぬ。

閑心　ヤ、なんと。

小紫　アイ、いとし可愛の男の方へ。

閑心（ムッとして）ムウ、この閑心と思ひの外、いとしい男といふからは、矢ッ張り白井權八の

權助 イヤ、若衆は、立派に見えたとて、花川戸の掛り人、一文なしのほんの素丁稚、身請けなぞとは及ばぬ事だ。

小紫 なんの出來よう。お前のやうなかひしよ無しに。

權八 イヤ、出來まいものでもあるまい。ナウ、小紫。

權八 ヤ、なんと。

小紫 アイ、働きのないお前には、マア身請けは出來ぬといふ事。

權八（キッとなって）ヤイ、小紫。

小紫 なんでござんす。

トこの時、二階の障子を明け、彌市窺ひゐる。

權八 今更云ふも愚なれど、去年初めて燈籠の、灯影にフッと見るよりも、初手は一度か二度の月、長兵衞どのを力にて、やう／\逢うた關の戸に、たてし屛風も吉原の、雀形なる比翼塚、思ひの鳥の深い仲。それに今夜の心變り、これには何ぞ譯があらう。サア、その譯を云へ。（ト思ひ入れ）。

小紫 サア、これには深い樣子の

ト云はうとして二階を見て、思ひ入れあつてツンと脇を向く。閑心、小紫の側へ寄り

権助　ウヌ、小紫の物知らずめ。よくも白柄組と名に立つた

閑心　この閑心を馬鹿にしたな。またしも廓で浮名の立つた、権八への貞節は、珍らしいとも思つたが外にいとしい可愛いゝ男と、権八までに愛想づかしは、あんまり呆れて

ト小紫を引附けようとする。

小紫　エヽ、何を

ト突きのける立廻り。閑心、懐より神妙剣の一巻を落す。小紫、取つてこの巻き物は

権八　（見て）そりや慥かに

トきつとなる。閑心、手早く一巻取つて懐中し、小紫を突き放す。権八、ツカ〳〵と上つて、閑心の懐へかゝるを、突きのける。

権八　オヽ、これは

閑心　聞えた。わりやァ晝鳶か。懐めがけて引ツ浚ふ、晝の鳶も四十八鷹、女郎買ひのぬくめ鳥、客の比翼の枕探し、なぜ懐をめがけたのだ。可哀や果は野晒しの、烏がせゝるたまり木へ、首のとま

るを見るやうだ。早く心を改めて、同じ鳥でも鶴になれ。

權八　ムウ。（トきつとなる。

小紫　コレ、權八さん

トとめるを突き退け、立廻る所へ、下座より次兵衞、長松、ツカ〳〵と出て權八を押へ

長松　コレ、權八さん、待たつしやれ。

權八　エヽ。（ト長松を見て）オヽ、坊か。

次兵　モシ、長兵衞どのゝ夜食の固まりがとめるから、マア待たつしやい。萬更捨てるやうにもしますまいわな。

ト權八思ひ入れ。長松、小紫の側へ行き

長松　モシ、姉さん

小紫　なんでござんす。

長松　おいらが所の權八さんに、このやうに腹を立てさせちやァ、可愛がつてもらふおれが合點しないよ。

次兵　オヽ、さうだ〳〵。去年から馴れなじんだ、色客の權八さんに、覺めやすい小紫どの、イヤサ、

性悪どの。こりやァ聞えた、突き出すのか。
小紫　イエ〳〵、どうして（ト彌市が方へ思ひ入れあつて）どうもわたしや（トぢつとなる。）
長松　權八さんにあやまつて、仲直りをしてくれなさい。（ト小紫に取附く）。
小紫　ほんにマア、可愛らしい（ト云はうとして、思ひ入れあつて）この子かいなア。
　　ト突きのける。このうち權八思ひ入れ。長松、キツとなつて
長松　エヽ、なぜおれが云ふ事を聞入れぬ。コレ、姉さん（ト云ひながら、眠たきこなしあつて）おりや眠たうなつた。姉さん、お前と寐たいわいの。
　　ト小紫の膝へ寄りかゝつて寐る。小紫これを見て
小紫　マア、子心にさへこのやうに、眞實に思うて（ト權八の方へこなしあつて）思はず寐入るにそれにマア、一つ寐さへもならぬと思へば（トこなしあつて）風ひかぬやうに寐さつしやれや。
　　ト長松を寐せ附ける。次兵衞、キツとなつて
次兵　エヽ、おかつしやい小紫どの、子心にも權八さんの事を思へばこそ、眠たい目にも腹を立つて、仲直りをしろといふに、それにもかまはぬこなたの心。これからは又、權八どのが構はないでもおれがきかない。大事の親方の子だ。こなたの側には寐させない。（ト小紫を突きのけて、長松を

抱き取り）エ、穢らはしい。

ト長松を抱いて寐させる。小紫思ひ入れ。

閑心　金銀のありあまる閑心が、奥方と敬はれるさへ、色よい返事のない女に、地廻りどもが楯をつくとは、身の程知らぬ馬鹿ものめ、此方は明日までに身請けする。今夜はブラ〳〵歸らうか。

六助　そんなら今夜は

閑心　どうで歸りは大音寺前。

權助　お駕籠を云ひ附けませうか。

ト權八これを聞いて思ひ入れ。件の文を出し

權八　宵に寄越したこの文が、思へば今では縁の切れ文。

ト小紫を見て思ひ入れ。小紫は、前にある以前の馬盥を見て

小紫　この馬盥の杜若、白井と一緒に生けられる、紫が嫌がるわいなア。

權八　すりや、馬盥の

次兵　アノ、杜若を

ト次兵衞、馬盥を見る。これに彌市の顏うつるこなし。

この人影は

小紫　エヽ

ト恟りする。權八見ようとする。彌市、手早く障子を締める。小紫、ちやつと馬盥をひつくりかへす

皆々恟りして

閑心　すりや、馬盥を打明けて

小紫　どうで落花は縁の切れ目。

次兵　再び返らぬこの水の

長松　おりや歸りたい。（ト次兵衞におぶさる）。

小紫　この紫の

ト杜若を取つて差出す。權八、もぎ取つて

權八　朱を奪うて

ト打附け、次兵衞に「來い」と顔にて思ひ入れ。次兵衞は長松を背負ひ、先へ行く。權八、後より花道にて

すりや、閑心の歸り道は

次兵　エ。

權八　サア、行きませう。

ト唄になり、次兵衞、權八は思ひ入れあつて向うへ入る。小紫「ハア、」と泣き落す。この時奥より石斧、仁右衞門、半助、土手助出て來て

石斧　モシ、絹屋の彌市は

閑心　そんならアノ

石斧　見屆けましたが

閑心　コリヤ、何をツカく

石斧　モシ。（ト閑心に囁き）大音寺前を

閑心　ハテ、大音に野暮な聲だの。（ト思ひ入れあつて）コレ、小紫、羽織を質に身請けの手附け、素足に足袋を穿かせたい、この閑心の胸の中。玉の輿へと根曳の門出、待つて今宵は早歸り。小紫、返事は無いのか……たとへ否でも金次第、ある所にはありあまる。

子分　そんなら、お頭

閑心　駕籠をいひ附けろ。

ト清掻になり、閑心先に子分皆々附いて向うへ入る。小紫思ひ入れ。奥より喜助走り出で

喜助　モシ〱、おいらん、何かの様子は聞きましたが、あの彌市さんは裏から直に、どちらへかお出でなされましたわい。

小紫　エ。（ト恟りして）そんならアノ彌市さんが……折よい身請けの二百兩、あのお金を貰はんため心にもない愛想づかし。いつそ跡を追ひかけて（ト行かうとする。）

喜助　モシ〱、お前それでも廓の内を

小紫　ほんにわたしは勤めの身、廓を出られぬ籠の鳥。

喜助　ようござります。（トあたりを見て）幸ひのこの羽織、これを着て大門を

小紫　そんならアノ、こなさんが

喜助　權八さんには、少と恩もあれば

小紫　アノ、跡の事を請け込んで

喜助　この羽織に、この手拭を頰かむりで

ト羽織を着せて、手拭ひを渡す。小紫。頰かむりをする。

小紫　そんなら必ず

喜助　構はずと、ござりませ。
　　ト淸掻になり、兩人よき見得にて、道具廻る。
　　本舞臺、三間の間、二重舞臺、向う黑幕、土手の蹴込み、この上に蒲鉾小屋、うしろ一面に藪だたみ、よき所に石塔あり、舞臺前に流れあり、道具とまる。
　　ト雨車、時の鐘にて、向うより五郎作、矢張り竹杖を持ち、出て來て
五郎　仲の町にて閑心どのに逢つたれど、詮議巖しき蛙丸、暫くどこぞへ埋めておいて、折を見合せ、鎌倉へ差上れば身の出世、人目にかゝらぬその爲に、雲助となつて今の世渡り。(トあたりを見廻し)幸ひのこの新佛、三股竹へ、ソレ〳〵。
　　ト三股竹を抜いて持ち出し、その跡へ、持つてゐた仕込みの竹を刺し、三股竹をいぢり廻す拍子に、同じく仕込みの刀抜ける。
ハテ、合點のゆかぬ。この三股竹にも矢ツ張り仕込みの刀。ハテ、變つた物が隱してあるわえ。(ト抜いて見て)身共が所持なす刀とは事かはり、常の刀で稀有もなし。葵下坂とでもいふやうな事か。ハテナア。(ト思ひ入れあつて)幸ひ〳〵、こいつを持つてゐれば、詮議に會つても氣遣ひな

し。（ト向うを見て）あれへ見えるは提灯の灯影。人目にかゝつては一大事。ソレ。

ト取り拵へた仕込みを持つて、下座へツイと入る。時の鐘、合ひ方になり、向うより權助、半助、六助、仁右衛門、下駄、傘にて出てくる。後より四ツ手駕籠、鞠ばさみに三の字の紋附いたる提灯をつけて出てくる。花道にて、駕籠の中より

閑心　駕籠の者、爰へ下せ〳〵。

駕舁　ハイ〳〵。

ト駕籠を下す。中から閑心出て、下駄を穿き

閑心　大分暗さうだが、爰から駕籠は歸れ〳〵。

駕舁　それでも又降ります。お屋敷まで參りませう。

閑心　イヤ、大事ない、爰から歸れ。

仁右　それぢやァお頭、空手かえ。

閑心　オヽ。

駕舁　モシ、そんなら提灯をあげませう。

ト提灯を渡す。仁右衛門取る。駕籠は向うへ入る。

權助　お頭、合點がゆきませぬ。小紫どのゝ手附けを約束して、歸らつしやるこの道で
牛助　駕籠を歸してやらしつたは
閑心　その小紫を女房にせん爲、身請けの手附け二百兩。
六助　矢ッ張り合點がゆきませぬ。
閑心　表は飾れど內證は、一文無しの寺西閑心。全盛つくす白柄組。手附けの當ては絹屋の彌市。
仁右　そんなら彌市が
閑心　正金二百兩持つてゐるを、大音寺前に待ち伏せして
權助　さはいへお頭、おい等が無體を仕掛けたとわかつては、白柄組の名の穢れ。
閑心　そりやァ合點。爰の田圃の野伏りどもを、賴んで喧嘩を仕掛けるのだ。
四人　こいつは奇妙だ。
閑心　向うに見える蒲鉾小屋は、慥かに乞食の
四人　頭分。
閑心　彼奴を呼び出し、早く賴めサ。
四人　合點でごんす。

ト此の時、月出る。皆々本舞臺へ來て、下駄をぬぎ、傘を投げやり、左右へ立ち別れ、仁右衛門、提灯を差出し

仁右　ヤイ、非人め、爰へ出ろ。ト云つても音なきゆゑ）もう、どぶさつたさうでござる。

權助（さし覗き）ヤイ、非人め、おいらがお頭閑心樣が、密かにわれに頼みがある。

四人　爰へ出ろ。

彌市（蒲鉾小屋の内にて）やう／＼今トロ／＼と寐たばかり。用があるなら、明日でもござらつしやい。

六助　ヤア、急用なればこそ寺西閑心樣が、自身にお出でなされて頼むと仰しやる。

半助　小屋にゐながら挨拶は

仁右　いけッ太え、どう乞食め。

閑心　ソレ、引摺り出せ。

四人　合點でござる。

ト四人、小屋の菰を上げる。内に彌市、乞食の形にて寐てゐるを、引摺り出して

權助　白柄組のお頭分

半助　寺西閑心樣といふお侍ひ樣が

六助　密かに頼みたき御用あつて

仁右　直々これへお出でなされた。よく聞き分けて

四人　お請けを申せ。

閑心　(思ひ入れあつて)われを密かに頼みたいといふのは、上州の絹商人彌市といふ者、吉原から坂本への通り道、この大音寺前に歸りを待ちうけ

權助　乞食仲間の者どもに、喧嘩仕掛けて彌市を締めさせ、彼れが所持の二百兩

彌市　ナニ、身の二百兩

ト思はず悸りする。この時、閑心と顏見合せ

閑心　ヤア、わりやァ非人と思ひの外、絹賣り彌市か。

四人　ヤア〳〵〳〵。(ト驚く。)

彌市　さては身共が所持の金子を。

閑心　大事を聞いた絹賣り彌市、生け置いては後日の仇、ソレ。

四人　心得ました。

ト四人、彌市へかゝるを、立廻りあつて見事に投げる。閑心、刀を拔きかけるを、彌市とめて

彌市　こりやア何とさつしやります。
閑心　一大事を聞いたるうぬ
彌市　そりや餘りに理不盡。
閑心　して又、絹賣り彌市が、非人と樣を變へたるは
彌市　何をか包まん、親の敵討でござる。
四人　ナニ、敵討とは
閑心　敵討なら、敵討にもしてくれうが、それには何ぞ證據があるか。
彌市　サア、それゆゑにこそ絹賣り彌市と、町人にまで姿を變へるも、敵の行くへを尋ねん爲。
閑心　イヽヤ、合點のゆかぬ。敵討とさへ云やア、遁れると思ふ間に合せ、小刀一本所持もせず、僞りをいふどう乞食め。ウヌ

ト彌市へかゝるを、立廻りあつて、五郎作の入れ替へた竹杖を取つて、拔き合せ、閑心と立廻りよろしく、兩人キッと見得になる。誂への合ひ方、蛙すさまじく啼く。兩人驚き、思ひ入れ。

彌市　ハテ、合點のゆかぬ。親重代の無銘の刀、敵を討たんと人目を憚り、竹に仕込みて隱せしが、拔かねばならぬこの場の仕儀。刀は鞘を離るゝと

閑心　數多の蛙の聲を發するこの有樣。さては遠州濱名家にて、紛失なしたる蛙丸。

彌市　覺えなけれど竹杖の、仕込みの刀は蛙丸とや。

閑心　ムウ、鎌倉より詮議嚴しき、蛙丸を所持なす奴が、さし當る刀の盜賊。

彌市　たとへ盜賊の惡名受くればとて、一旦手に入る蛙丸、滅多に人手へ渡さうか。

閑心　敵討とあるからは、何れの家中、覘ふ敵の名は何と。

彌市　迂濶にそれを顯はしませうか。

閑心　たつて云はねば聞くまいが、此方は名乘るといひ、大事を明かした上からは、是非ともうぬが息の根とめて……エヽ、面倒な。

ト彌市へかゝる。立廻りあつて、兩人を拂ひ退ける。よき見得のとまりにて、ゴンと四ツの鐘鳴る

彌市　ありや四ツの鐘。

ト思ひ入れにて、又寒氣立つこなし、身を慄はす。四人見て

權助　どう乞食めが、強情に吐かせども

半助　お頭の威勢に恐れてか

六助　齒の根も合はぬ胴震ひ。

仁右　お頭が怖いのか、恐ろしいのか。

四人　卑怯者めが。

彌市　この胴震ひは非人めが、この程より瘧の病ひ。

四人　なんと。

彌市　敵を覘ふ艱難に、この大音寺前の田圃住ひ。青天井に小草の疊、壁は蓆に戸は菰垂れ、犬の吐ゆるを寢耳に聽いて、果敢なき夜半の草枕。それゆゑの瘧病、どうぞ命はお助け下さりませ。

閑心　ムウ、さう云へば聞き分けた。瘧ぶるひの正體なし、殺したところが益もない。よいワ、命は容赦いたして遣はし、異議なくこの場は歸つてくれう。

四人　それではお頭

閑心　ハテ、大事ない、武士の情だワ。

彌市　すりや、聞き分けて閑心樣

閑心　助けてくれた。非人め、さらば。

ト時の鐘にて、閑心先に四人、花道へ悠々と行きかけ、閑心は皆々に、「先へ行け」と仕方するゆゑ、四人うなづき、閑心も思ひ入れ。これをキッカケに三味線入り、禪のツトメになり、皆々向うへ入る。

彌市殘り、思ひ入れあつて

彌市　閑心が理不盡にて、すんでの事に命をば……それが却つてこの蛙丸、思ひがけなく手に入りしは心得ぬ。身が隱せし仕込みの刀と、入れ替りしこの竹杖、さすれば何者が取り替へしか。誠に石井右內が拜領の蛙丸、エヽコレ、どうぞして石井兄弟へ返したいものぢやが（ト思ひ入れあつて）思へば養父も、また右內どのも因果の身の果。その追善も折惡い瘧の病、早う全快あればよけれどもしこの儘に死にもやせんと、兼ねて書き置くこの一書。（ト懷中より書附けを出し）弟權八が行末を認め置きしが、どうぞこれを屆けて死ぬれば、弟ながら兄の立つる義理。養父助太夫どのゝ惡事を知つて、討つて立退くとは、兄を思ふ弟の實心、心の中では手を合せ、拜まぬばかりも情なや、討たで叶はぬ義理の敵。大音寺前に小屋住ひも、敵討と世上へ流布なし、現在敵の弟は覗はいで、主人を計るこの苦しさ。殊に小紫といふ傾城に、通ひ詰めるといふ噂。その緣を切らう爲、絹賣りと樣を變へ、瘧の病を戀病といひ立て、貯への二百兩にて、身請けの手附け、小紫に、愛想づかしをさせしも、思ひ切らせて切腹遂げさせ、その上にて養父の敵討と、云ひ觸らす心組みも、弟に武士の本意を立てたさ。最前仲の町にて、短氣を起して立歸つたゆゑ、跡追ひ駈けしも病氣にて、追ひつき兼ねて逢はなんだが、とてもこの病では、命の程も心許ない。死

んだ上ではこの一書、讀んだ上にて、切腹とけつい、弟權八。

ト思ひ入れ　バタ〳〵と人音するゆゑ、彌市、また小屋へ入る。雨車、月隱れる。下座より小紫、以前の形の上へ丹前羽織、頰かむりにて走り出るを、五郎作、追ひ駈け出て、舞臺眞中にて捕へ

五郎　しめたぞ〳〵。

小紫　エヽ、穢ない形をして嫌らしい。何するのぢやぞいなア。

五郎　何をするものか。見りやァ慥かにおいらん風、羽織でやつして頰かむりは、大門を拔けて來たか……但し又、鐵漿溝を越して來た、關所破りの女なら、引ッ捕へて連れて行かうか。この雲助の女房になるか。二つに一つの返答は、サア〳〵……土手の方から追手が來るぞえ。

ト小紫にしなだれる。

小紫　エヽ、嫌らしいわいなア。

五郎　否でも應でも

小紫　アレエヽ。

ト逃げ廻り、五郎作へ砂礫を打つ。これにて五郎作、目の見えぬこなし。そのうち小紫、蒲鉾小屋へ逃げ込む。

五郎　ヤア〳〵、今の女はきつい手者ぢや。さうして砂をぶつかぶせて、コレ、目が見えぬ〳〵。

ト　そこらを探り廻る。このうち向うより坊主一人、網代笠をかむり、鉦を叩きながら來て

坊主　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト　本舞臺へ來るを、五郎作、小紫と思ひ、坊主を捕へる。坊主、悔りして

南無阿彌陀佛々々々々々。

五郎　コレ、死ぬには及ばぬ。おれの女房にするワ。

坊主　南無阿彌陀佛々々々々々々々、

ト　逃げようとするを、五郎作捕へ、立廻りながら下座へ入る。小屋の中より小紫、逃げて出るを、彌市追ひ駈けて出て捕へる。

小紫　エヽ、こゝ放して下さんせ。

彌市　イヽヤ、放さぬ〳〵。

小紫　雲助とやらの手籠めにあうたを、折角助けて下さんしたが、矢ツ張り野伏りどの、コレ、堪忍して下さんせ。

ト　振り放して逃げるを、又捕へて

彌市　これがマア、どう堪忍がならうぞい。顏は見えねど小紫どの

小紫　エヽ。（ト合點のゆかぬ思ひ入れ。）

彌市　最前逢うた彌市ぢやわいの。

小紫　その彌市さんが身請けの手附けの、相談もせずに歸らしやんしたは

彌市　サア、それにもいろ〳〵樣子のある事。

小紫　それに又、お前がこの非人小屋に

彌市　さればいの、合點がゆくまい……上州の商人、絹屋彌市といつたは僞り、誠は野伏り。

小紫　そんならお前はアノ、絹商人ではなうて、非人であつたか、情ない。

ト又立ち上がつて逃げようとするを、彌市捕へて

彌市　心底の程見えたれば、いよ〳〵身請けの金の工面に、井筒屋を歸つたが、是非に手附けの二百兩。

ト財布を出して、小紫の手に持たせる。

小紫　そんなら權八さんへ

彌市　ナニ、權八とは

小紫　サア、それはナ

彌市　身請けの相談する心か。
小紫　サア、それは
彌市　サア
兩人　サア／＼／＼。
　　ト彌市、また寒氣立ちたるこなしにて
彌市　エヽコレ、また寒氣がして。矢ッ張りこなたの、こりや戀風。
小紫　これ、非人どの、その戀風の寒さの足しに、わたしが着てゐるこの羽織。（ト羽織を脱いで彌市へ着せ、介抱して）わたしが介抱して進ぜる程に
彌市　そりや忝い／＼。（ト着て）こりや移り香の留め木の羽織、こなたが着たとあれば、嬉しうござる。
小紫　ちつとも早う、權八さんへ、
　　ト暗がりにて、小紫、財布を持つて逃げようとするを、彌市捕へる。このうち向うより閑心、火繩を振つて出て來て、花道にて思ひ入れあつて火繩を消し、こなしあつて刀を拔く。時の鐘、誂への合ひ方にて、舞臺へ來て、探り／＼小屋の上より、グツと刀を突ッ込む。雨車。手ごたへせぬゆゑ
閑心　南無三。

ト思ひ入れ。彌市は小紫を捕へようとする。閑心、窺ひ〳〵兩人に探り寄る。この見得にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、一面の藪疊、爰に權八、俵をかむり、雨を除けてゐる。雨車にて道具とまる。

權八　閑心の歸り道は、大音寺前とあるからは、爰に待ちうけ……さうぢや。

ト思ひ入れ。下手より、バタ〳〵にて、小紫走り出て來て、權八に行き當り

小紫　ハイ、御免なんし。わたしやきつう急く者でござんす。

權八　（聲を聞いて）さういふ聲は小紫。

小紫　ヤア、權八さん。（ト恟りする。）

權八　ウヌ、人でなしめ。

ト暗がりながら切りかけるを、小紫、權八にしがみつき

小紫　コレ、早まらしやんすな。

權八　なんと。

小紫　心に思はぬ愛想づかしも、二百兩といふ手附けの金を持つてゐる、絹屋の彌市を騙して取らう爲

これもお前がいとしさゆゑ。

權八　それに又、廓を拔けたは

小紫　彌市の歸つた跡追うて、氣の急くまゝに廓を拔け、この田圃にて逢うたれば、藪のあちらの非人小屋、その野伏りが絹賣り彌市。

權八　ヤア。（ト合點のゆかぬ思ひ入れ。）

小紫　コレ、二百兩の手附け金。（ト財布を見せる。）

權八　すりや、これを取らうばつかりに、愛想づかしを

小紫　又もやわしを口說く所へ、非人を殺しに、あの閑心が

權八　ナニ、閑心がこの所へ

小紫　藪のあちらで非人を尋ねて

權八　閑心ならば神妙劍。（トこなしあつて）この金持つて花川戸へ。

小紫　よいかえ。

トこの時、藪の後にて

閑心　非人め、覺悟。

彌市　おのれ閑心。

權八（聞いて）すりや、閑心の

小紫　モシ。

ト押へるこなし。道具廻る。

本舞臺、また元の蒲鉾小屋になり、甘軍、閑心切りかけ、彌市、仕込みにて受けとめてゐる。道具とまる。

閑心　二百兩といひ蛙丸、殊に敵討といふからは、石井の餘類、生けては置かれぬ、覺悟しろ。

ト又切りかけるを受け流して

彌市　エヽ、情知らずめ。

閑心　小癪な事を。

ト暗がりの立廻り。始終、誂への鳴り物にて、兩人とも二重へ探り上り、立廻りあつて、彌市、藪際へ押し附けられると、苦しむ。閑心、これにて思ひ入れ、蒲鉾小屋へ入り、窺ふ。忍び三重、一つ鉦の念佛になり、藪の中より彌市の羽織を捕へ、權八、血刀を持ち、ズッと出る。彌市、よろぼひ

ながら

彌市　折惡いこの病。

ト苦しむ。權八、窺ひ〳〵、彌市の側へ來て

權八　留め木の伽羅の香に知るゝ、丹前羽織を着たは閑心。ムウ。

トまた彌市を一かせ切る。「ウン」と苦しむ。このうち閑心は思ひ入れあつて、件の蛙丸を拾ひ取り、うまいといふ思ひ入れあつて、花道へかゝる。權八、彌市を探り見て

兼ねて尋ぬる神妙劍。（ト彌市の懷を探し、書置きを引き出し、心得ぬ思ひ入れにて）こりや一卷と思ひの外。

ト思ひ入れ。閑心、これを聞いて

閑心　ハヽア。

トこの聲を聞いて權八、「さては」トこなし。書附けを透して見ようとする。これをキツカケに雨車。權八、書附けを懷へ入れる。閑心は花道にて蛙丸をちよつと拔いて見る。蛙の聲。彌市「ウン」と反るを、權八捕へ、とゞめの刃をさしつける。これを木の頭。双方引ッ張りよろしく、拍子

幕

幕の外、時の鐘にて、閑心、向うへ入る。あと、シャギリ。

八幕目

山谷堀船宿の場
船中の場

役名――石井源之丞。藝者、お松。船宿、因幡屋助八。船頭、濱松屋松藏。松藏母、おなべ。女髪結ひ、お大。船頭、仙六。同、勝藏。家主、源兵衞。通人、文歌。埼玉屋小助。按摩、笛市、石井下部、袖助。醫者、藤川卜庵。

本舞臺、三間の間、山谷堀船宿の體、上手屋體の障子に、屋根船、網猪牙、荷足、と書き、誂への格子、「因幡屋」といふ行燈をかけ、下手は川口。同じやうなる船宿のこしらへ、同じ障子、行燈に「濱松屋」と書いてあるをかけ、上の方に小舟一艘つなぎ、下の方にも小舟をつなぎ、長床几に松藏、船頭のこしらへにて「船か〳〵」と呼んでゐる。おなべは白髪の婆、やつし形にて、大盥にて洗濯をしてゐる。上の方に仙六、船頭にて、長床几に烏賊を揃へてゐる。勝藏、船頭にて、肴鉢を持ち、立ちかゝつてゐる。文歌、通人の形。小助、若い者の形。お大、女髪結ひ、前垂れがけにて、抱き子をいぶりつけながら挨拶してゐる。すべて隣り同士の船宿、錫杖入り、さんげ〳〵、てんつゝにて幕明く。

だい　これは文歌さん、お久し振りでござります。今日は洲崎へお出でなされますかえ。

文歌　左樣々々、今日は橋場まで用事があつて來ましたが、埼玉屋の小助に逢づたゆゑ、ちよつと寄つて一つ飮むつもりサ。歸りはどうで屋根船を頼むほどに

小助　そこでちよつと藝者衆といふところサ。この頃評判のある、こちの抱へのお松さんがよからうとあの子を一緒に連れるつもりサ。して、お松さんは留守かえ。

だい　待乳山へ願がけに行きなさんした。歸りなさんしたら、お後からあげませうわいな。

文歌　そんならお松坊が歸り次第、大早に頼むよ。

だい　畏りました。直に送らせてあげませう。モシ、文歌さんえ、河岸からお船でお出でなさんせぬか。

文歌　何さ、橋場の寮へ、ちよつと寄つて行く所があるサ。

小助　モシ、お大さん、必ずお松さんを早く連れ申しなさいよ。サア、旦那、參りませう。

だい　モシ、お後から直に連れ申しますぞえ。

ト流行り唄にて、文歌、小助、東の口へ入る。

仙六　勝や、今の息子は粋な面だの。

勝藏　さうサ、女郎に可愛がられる質だ。時に、親分はまだ歸りませぬか。

仙六　さうサ、親方は強氣に長湯だよ。
松藏　モシ、お大さん、その小さいのは、あの抱へのお松さんの
だい　これはしたり、門中でそのやうな噂を……あのマア藝者をしなさんすお松さんに、このやうな
　ものがゐるというてはナ
松藏　成る程、子があつちやア氣がなくなる奴だよ。こいつは少つと惡かつた。……コレ、おふくろ、
　洗濯も大概にしなさいな。
なべ　なんのわれが知つた振りな。明日の日和も知れぬわいやい。
松藏　エヽ、そんなに齷齪する事はないわな。隣の手合ひも聞いてゐるわな。
なべ　ハテ、聞かしやつてもいゝわえ。お隣の助八さんは、若い衆を抱へてござる船宿よ。おいらは親
　子二人暮しの船乘り、人一倍稼がにやア、鼻の下が乾上がるわな。
松前　エヽ、どういへば斯ういふと、婆アの古いのは鐵氣が拔けねえ。
　　ト呆れてゐる。矢張りてんつゝ、さんげ〳〵にて、向うより助八、下駄ばき、單衣帶、浴衣の形、着
　　物を抱へ、手拭と糠袋を持ち、右の手にて按摩の杖の先を引ッ張つて出てくる。笛市、按摩にて、安
　　下駄、笛を吹きながら出てくる。跡より源兵衞、家主の拵へにて、附いて出てくる。

源兵　コレ〳〵、助八どの、いま錢湯へござらしつたか。

助八　アイ、こりやァ家主の源兵衞さんかえ。急がしさうに、どこへ御用が

源兵　イヤ、別に用でもござらぬが、お觸れがあつて參りましたて。

助八　そりやァ御苦勞でござりまする。私しは只今錢湯へ參りまして、按摩を一人見附けて參りました。

笛市　ハテ、慇懃な御挨拶でござります。

助八　左樣なら家主どの、一緒に參りませうか。

源兵　サア〳〵、ござりませ。

ト三人、本舞臺へ來る。

仙六　親方、いま歸りかえ。

だい　モシ、助八さん、今いつもお出でなさんす文歌さんがござんして、埼玉屋に居る程に、お松さんを連れてゆきたいと、口をかけて行かしやんしたわいな。

助八　アヽ、そりやァ呼んでやらずばなるまい。大儀ながらお前、お松を呼んで來てくんねえ。何をいふにも、女房のないわしが、子のある女を藝者に抱へ……ほんに、こんな事を云つちやァ、手前の代物に疵でもつけるやうなものだが、いつか口が出來次第、お松は吉原へ內藝者にやるつも

り。マア、口のあるまでは、此方の内の抱へのお松。ほんに、ちよつと呼んで來てくれねえな。大
だい　アイ〳〵、ちよつとわたしが（ト抱き子をいぶりつけ）コレ〳〵、のゝさんへ連れて行くぞえ。
家様、お話しなされませ。
ト流行り唄にて、お大は子を抱へて向うへ入る。松藏、源兵衞を見て
松藏　大家さん、この間はお目にかゝりやせぬ。
源兵　オヽ、松藏どのか。お觸れがあります。お前も爰へ來て聞かつしやりませ。
松藏　アイ〳〵……おふくろ、お前も爰へ來て聞きなさい。モシ、助八さん、今日は遅うござりました
たね。
助八　こりやア松さん、今日は樣々な用があつて……大家さん、御免なさりませ。こりやア大きに待
ち遠だの。
ト抱へて來た着物を着て、細帶を締め、皆々床几にかゝる。
源兵　時に助八どの、松坊も聞かつしやい。昨夜大音寺前で人殺しがあつた。
皆々　エヽ。
源兵　田圃の非人が切られたのだが、非人ぢやともいひ、又は、土地の絹商人だともいひますが、なん

でも切られたは非人に違ひござらぬ。又一説には、その非人は親の敵を覗ふとやら。慥か國は、鳥を掴まへたやうな所………オヽ、それ〳〵、鳥取々々。

助八　ナニ、鳥取と云はつしやりますか。その鳥取は、因幡の國では

源兵　サア、その鳥取で、本庄とやら、本郷とやらいひました。

松藏　もしや遠州濱名家より、土地へ下りし石井一家が

助八　ヤア。（ト兩人顏見合せる。）

松藏　度々の辻切り沙汰、助八さん

助八　松藏さん、

兩人　うるさい事だね。

勝藏　モシ、親方へ。今日は屋根は、江戸へ上下に行きました。船もみんな出拂ふし、河岸に殘つたは荷足一艘。今日は強氣に急がしかつた。

松藏　おらの内の荷足も、明日松戸へ送る荷がある。曉六ツから行かずばなるまい。母さん、あの船へナ、………もう飯にしてもよからうぞえ。（ト思ひ入れ。）

なべ　エヽ、忙しない。洗つた物も濯がねばならぬわいの。

松藏　ハテ、呑み込みの惡い……わしが飯より、あの船に（ト目顔で知らせ）ハテ、氣轉のきかぬは困つたものだ。

源兵　ドリヤ、そろ〳〵と參りませうか。

助八　ハテ、烏賊の木の芽あえが出來てゐます。一つあがつてお廻りなされませ。

源兵　そいつは有り難いの。

笛市　モシ、旦那、療治をなされませぬか。

助八　オイ、ちつとのうち待つてござれ。いま三里へ灸を据ゑてから……イヤ、大家どの、お前ちつと揉みなされませぬか。

源兵　成る程、やつてもらはうかえ。

松藏　サア、母さん、飯にしなさい。

なべ　エヽ、やかましい。

松藏　ハテ、不氣轉な。（ト船へ思ひ入れ。）

助八　大家どの、ゆるりとお揉みなされませ。

ト流行り唄にて、源兵衞・笛市の手を引き、仙六、烏賊を持ち、勝藏附いて、因幡屋の內へ入る。松

藏、おなべ、濱松屋の内へ入る。助八殘る。合ひ方。

助八 今の辻切りの噂といひ、吉原道の人殺し、助市どのに極まれば、顏は知らねど古主の御養子。以前はこの身も因幡にて、助太夫どのには母もろとも、御恩を受けたお旦那の、助の一字を貰つた助八。誠に妹は助太夫どのゝお胤。勤めをさせては草葉の蔭の

ト思ひ入れ。よき時分に下の方の船の中より、水右衞門、板子を上げて窺ひゐる。

サア、斯ういうたばかりにて、廓を拔くには大枚の金。(ト思ひ入れあり) それにつけても、田圃で切られた非人といふは、本庄氏の身寄りの方か、但し緣なき石井一家か。

ト思はず振り返る。水右衞門、ちやつと隱れる。助八、ギヨツとして

あの船には(ト思ひ入れあつて) エヽ、まゝよ。

ト唄になり、こなしあつて因幡屋の内へ入る。あと合ひ方。濱松屋より松藏、障子を明けて窺ひ出る後よりおなべ、膳へ飯ごしらへをして、廣島藥罐を持ち添へ出て、船の方へ窺ひ寄り

松藏 水右衞門どの〳〵。

ト板子を叩く。これを合圖に、板子をソツと揚げ、水右衞門出かける。松藏、側へ寄り

水右衞門どの、今の樣子をお聞きなされましたか。

水右　これにて殘らず聞いて居つた。

松藏　お前を敵と附け覗ふ、モシ、源之丞めが切られたのなら、濡れ手で粟の返り討ち。

なべ　お仕へ申したこの乳母を、尋ねてござつて何かのお賴み。悴と二人相談して、船の中へお隱まひ申し、さぞ窮屈でござりませうが、朝夕は斯うして御膳を上げるも、心に任せぬ事だらけ。もう時分でござります。サア〱、お茶を沸かして參りました。

水右　アヽイヤ、身共は未だ欲しうはないが、して、親卜庵の

松藏　昨日巣鴨の旅宿へ參り、あなたが爰へお出での樣子、殊に右内の切り附けし、刀疵の事までも、委細を親御へお話し申しましたら、あなたがお出でなさる砌り、金瘡癒える良藥を、御持參なされるさうにござります。

なべ　お前がこの程お預けなされた、この毒は、こりや何者に食はせまするな。（卜毒藥の包みを出す）

水右　その毒藥は藤川の相傳、身共を敵と附け覗ふ、石井の奴等に食はせる一藥。

松藏　正しく隣の抱への藝者、お松といふは、源之丞が隱し妻、乳呑み子は源之丞が胤。さすれば毒はあのお松、敵の末は根を斷つて、葉を枯らすといふ譬へ、東西知らぬ餓鬼までも

水右　して、親卜庵が尋ね來るに、所を詳しく

なべ　そりやお氣遣ひなされますな。わたしが在所の濱松を、家名に附けし濱松屋。

松藏　門にかけたる行燈の、その目じるしは濱松屋。河岸に繋いだこの船へ、外よりソツと訪るゝ、その手番ひも詳しく昨日、お話し申した上からは、その毒藥も、コレ、おふくろ。（ト毒の包みを取り）幸ひ藥鑵のこの中へ、仕込んで後にお松めに。（ト藥鑵の中へ毒を入れる。）

なべ　喰はす手番ひ。

松藏　コレ。

だい　（向うにて）サア、お松さん、早うござんせいなア。

松藏　（向うを見て）あの聲は髮結ひのお大、見られぬ内に（ト水右衞門を船へ隱し）おふくろ

なべ　松藏。

松藏　サア、ござりませ。

ト唄にて、おなべ、膳を持ち、松藏、藥鑵を持つて、濱松屋の中へ入る。この唄をかりて向うよりお松、藝者の形、引摺り、下駄をはき、跡よりお大、子を寐かしながら出て來り、直に本舞臺へ來る。

だい　モシ、お松さん、お前持病が起つてなら、雇ひ先へ斷りいうてやりなさんせいなア。

まつ　それぢやというて、昨日今日お內へ來て、助八さんの世話になるわたし。とりわけ御近所のお前

にまで、お世話になるも小さいのが（ト思ひ入れ。）

だい　これはしたり、この子の事は、人さんの聞く手前、あまり噂はなさんすな。ハテ、今にもよい傳手があれば、先へ預けてお前獨り身。座敷雇ひのその内は、どうでお前の髪結ふわたし、この子の事は世話　てあげる程に、氣遣ひをしなさんすな。殊にお内儀さんの無い助八さん、世間でなんと云はうがまゝ、主に於ては、それは〳〵男氣な、いゝ方でござんすぞえ。

まつ　わたしもそれを見拔いたゆゑ、男やもめの助八さんに、女やもめのわたしが身の上。吉原の藝衆の見習ひ、客さん方のあしらひ覺えるうち、當分ぬしのお世話して、藝者の勤めが致して見たうござんすわいなア。

だい　それ〳〵、藝者の勤めが致して見たいとは、矢ツ張り賤しき奉公が拔けぬわいなア。ホヽヽヽほんにこの子も、もう乳の呑みたい時分、サア、人の見ぬ所で、ちやつとあげなさんせ。

まつ　アイ、爰へ。（ト抱き子を取る。）

だい　ほんにお前、持病の頭痛が重らぬうち、あの振り出しを服みなさんせ。そしてマア、座敷へ行きなさんすなら、三味線の絃も掛け替へてゆきなさんせ。ドレ〳〵、わたしが（ト障子を明けて見世先より長棹の箱を取出し、蓋を明けて、思ひ入れあつて）モシ、調子も合せて置きなさんせ。

まつ　アイ、よう氣を附けて下さんす。嬉しうござんすわいなア。

だい　エヽ、わツけもない、必ず氣遣ひなさんすな。ほんに振り出しを、ドレ、仕掛けてあげようか。

ト合ひ方にてお大、因幡屋の内へ入る。お松、子を抱へ、殘つて

まつ　よう物事に氣を附けて（ト思ひ入れあつて）ほんにマア、この子の顏を見るにつけ、お別れ申した源之丞どの、又ぞろ江戸へお出での樣子。今にお目にかゝらねど、日にましこの子の面差しが、源之丞どのにこれ程まで………聞けば昨夜の辻切りは、若い男といふ噂。敵持つ身の、もしひよつと………エヽ、いまはしい／＼。そんな事は思ひますまい。どうぞ御武運長久に、首尾よう本望………（トこのうち抱き子泣き出す。いろ／＼介抱して）オヽ、堪忍しや／＼。おとなしうねんねしや。（ト顏を見てホロリとして）コレ、とりわけ寐顏は源之丞どのに、これ程までも（ト見詰める。抱き子泣く。これにて抱きしめ）ドレ／＼、うま／＼を呑ませませうか。

ト唄になり、床几へ腰をかけ、抱き子に乳を呑ませるこなし。向うより源之丞、深編笠、大小、丸に井の字の紋附きにて出て來り、花道にて

源之　妻のお松が隱れ家は、因幡屋と申す船宿と承つたが、どの家も同じ商賣。門口とても同じ造りどうぞ尋ね逢ひたいものぢやが（ト本舞臺へ來て、思ひ入れあつて）イヤ、お女中、ちと物が問ひ

たうござりまする。

まつ　ハイ、お尋ねなされたいとは

ト振りかへる。源之丞見て

源之　ヤ、お松ぢやないか。

まつ　さう仰しやるお前は（ト思ひ入れあつて）源之丞どのかいなア。モシ、おなつかしうござりますわいなア。（ト縋り寄つて思ひ入れ）。

源之　オヽ、尤もぢや。身共もやう／＼この程到着いたし、其方の住うてゐた明石町へ尋ねゆきしに、この山谷堀へ藝者抱へになつてゐると聞き、四五日あとより尋ね居つたが、先は堅固でめでたいめでたい。（ト笠を取る。）

まつ　お前も無事で、このやうなめでたい事はござりませぬ……とは云ふものゝ、親御様のお討たれなされしも、去年の夏の初め方。直に敵の在所を詮議に出られてから、丁度一年。モシ、半次郎はこのやうに、息才に成人いたしましたわいなア。コレ、御覧じませ。お前の附けて置きなさんしたこの子の守り、井筒つなぎに石疊み、赤地の錦、中にはこの子の生れし年月。（ト子を見せ）果報拙ない半次郎、一倍可愛うござんすわいなア。（ト愁ひの思ひ入れ。）

源之　ドレ、半次郎が（ト抱き上げて）オヽ、よう其方は大きうなつたの。誠にこの間は、夥う疱瘡が流行るので、身も殊の外案じ居つたが、息才の顔を見て安堵いたした。誠に子を持つて知る親の恩、寐た間も忘れぬ悴の事、様子如何と思ふにつけ、忘られぬ父の御無念。おのれ藤川水右衛門

ト無念の思ひ入れ。お松とめて

まつ　アヽモシ、他人の聞え。（トこなしあつて）お恥かしい事ながら、あなたにお別れ申してより、この子を連れて男氣な、この因幡屋の世話になり、御酒のお相手、船遊山、殿さん方のその中で、調子も狂ふ町藝者、これが誠に、藝が身を助ける程の不仕合せ、御推量なされて下さりませ…………して、今以て敵の在所は

源之　いかにも相知れぬて。家來文藏は、妹八重梅を誘ひ、上方邊を詮議なし、身共は敵の本國たる、奥州棚倉を志し、袖助を召し連れ、立越えたれども、あの地にても廻り逢はず、又ぞろ當地へ引ッ返し、旅宿は阿部川町と申す所、爰に暫く逗留いたし居れど、長の旅とて恥かしながら、路用とて心に任せず、幸ひ以前明石町にて、わが身を世話いたした、召仕ひのお時といふは、今では幡隨長兵衛ヽ女房といふ事、この間金龍山にて逢うた時、細き路用の話しを聞き、流石は達衆に連れ添ふ女房、用立てませうと彼方から、云ふを幸ひ相談して、今日袖助を便り聞きに遣はした

ところぢや。其方の親の中野藤兵衞、病死の後は緣でがな、この半次郎を懷胎して

まつ　身一つならぬわたしが苦勞、この身の苦患はいとはねど、大望かゝへしお前樣が、御苦勞なさる所爲かして、やつれなされたその上に、どうやら惡いお顏の色。

源之　そりやその筈の事ぢや。いつぞや水右衞門めが切り附けし、肩先の刀疵、この間より再發して、これこのやうに

まつ　すりや、その疵が今以て

源之　暑さ寒さに再發して、難儀いたす。これにつけても、夜前、田圃の人殺し、討たれし者は非人と見え、後にて聞けば朋輩の、本庄助市どの。これも義理ある養子親、助太夫の敵たる、實の弟權八を　討たねば武士の道立たずと、當所へ來ると聞きたるが、夜前の横死は返り討ちに、あはれしかとは思へども、よも權八が兄助市を

ト思ひ入れ。この時、奧にて

助八　お松や〳〵。

ト聲する。お松囁く。源之丞、ちやつと笠を冠る。合ひ方にて、助八出て

オヽ、お松、爰にか。（ト源之丞を見て）あのお侍ひ樣は、どなたぢや。

まつ　エヽあのお方は

助八　てまへの近附きの客か。

まつ　イヽエ、あのお方は……オヽ、それ〳〵、ぬしは占屋さんぢやわいなア。

助八　エ、あのお方が占屋さんの浪人……ハテ、そりやいらぬものぢや。おりや占ひは大嫌ひぢや。斯う見たところがまだ年若……こなたも知つてゐやる通り、わしが妹は三浦屋の小紫、妹といへど主人の胤を、身に宿したるおれがおふくろ、御本妻の思ふ手前と、お暇うけて江戸へ下り、産み落して音信不通。母の病氣のその爲に、苦界に沈みし妹ながら、あのまゝ勤めをさせて置いては、未來のお主へ立たぬゆゑ、廓を拔かうと思ふうち、云ひ交したる者ありと、噂に聞けど叶はぬ縁。

源之　小紫を主人の胤、殊に妹とお云やるは。

助八　コレ、とぼけまい御浪人。妹の小紫は、閑心といふ侍ひ客、身請けの相談ありと聞く。向うは扶持人、此方は浪人、身請けの金の手がかりと、吉原道に辻切りの

源之　ヤ、なんと。

助八　或ひは三の輪、中田圃、入谷通りも夜に入れば、醉うた振りしてすツぱ拔き、又も辻切り物取り

も、勤めの金に詰つての

源之　ハテ、亭主には變つた事をお云やるが、身共毛頭妹御の、小紫に何のゆかりが

助八　ゆかり、かゝりも無いとは云はさぬ。苦界の妹と云ひ交し、先の素性を聞くよりも、又も抱へのお松にまで、足を附けたる不敵者、顔に似合はぬ魂と、聞くばかりにて知らぬ同士。ちよつと面を覺えるため

ト笠を取らうと手をかける。源之丞さゝへて

源之　こりや不作法、身の笠へ、なんで手をかけ召されたのぢや。

助八　意外咎めは此方から、妹の深間のこなたの面、見覺えるため

ト立廻る。お松とめて

まつ　アヽモシ、あなたは左樣な

助八　エヽ、退いてゐやれな。マア、この笠を

ト源之丞と立廻りにて、笠落ちる。助八見て

ヤ、前髪ならぬ御浪人。

源之　これで御亭主、其許の、疑ひは晴れませうがな。

助八　權八なればまだ前髪　それにはあらぬ御浪人、その定紋は一つでも、そんならあなたには

源之　身共は遠州濱名の家中、家名は石井

助八　アヽ、それで御紋も一對の、石井、白井の同家中、さうとは知らず權八と、思ふがまゝに不調法
誠にこの子の（ト抱き子を取つて、顏をよく〱見て）あなたによく似たこの子の面ざし。誠に胤は
（ト源之丞と見合つて）御苦勞なさる御浪人、世の成行きは樣々に、今ではお松はわしが抱へ。女
房氣の無いこの助八、不遠慮ながらこれ程も、色氣を去つて船頭の、櫓柄を取つて稼ぐより、外
に所在のない男。子のあるお松を樣々に、世間の者の口の端に、かゝるもいとはず正眞に、この
子の身の上聞いたゆゑ

源之　お世話なされて下さるか。

助八　乘かゝつたる船乘り商賣。

トこの時、障子の中より仙六、急しさうに出てくる。

仙六　モシ〱、親分、大家さんが尋ねてゐなさる。ちよつとお出でなされませ。

助八　オヽ、今行くわえ……モシ、他聞の憚り、必ずともにお松、目立たぬやうに、ぬしが内へ同道
して、話もあらうが、何をいつても出入りはげしい船宿商賣。あなたは大事を抱へたる……

（ト思ひ入れあつて、抱き子を見て）オヽ、よく寐たやつさ

まつ　ドレ、抱かうかえ。

助八　イヤ、この子はわしが寐させてやらう。この頃はよく馴染んで、顏さへ見れば跡を追うて………

エヽ、親の苦勞は白川夜船。

源之　何かと御亭主、いかいお世話に

ト入り相の鐘鳴る。助八、思ひ入れあつて

助八　お侍ひ樣。

源之　御亭主。

助八　ごゆるりとなされませ。

ト唄になり、助八は子を抱き、仙六附いて障子の中へ入る。跡に兩人、思ひ入れあつて

源之　すりや、因幡屋の助八といふは、本庄氏に仕へし者か。いま源之丞が身の上を、詳しく聞かねは

その身も願ひあつての事か……願ひといふも討たれたる、助太夫の正しく仇たる（ト思ひ入れあつ

て）それにつけても、まだ其方に話もあり、誠に家來の袖助も、慥かにこの家へ參る筈。

まつ　わたしや積る話も山々。何をいふにも家來の手前、少しの內もお忍ばせ申す（トあたりを見廻し、

こなしあつて）斯うなされませ、暫くの間、窮屈ではござりませうが、河岸に繋いだ船の中に、お忍びなされませいな。

源之　成る程、暫くの間、あの船へなりと（ト上の方の船へ寄り、板子を揚げ、思ひ入れあつて、提げたる刀（こなしにて）刀は卽ち父の形見、銘は名におふ仁王三郎、緣頭も親人のお物好き。

まつ　アノ、このお刀は（ト取る）

源之　父の魂ひ、回向しやれ……目立たぬやうに。

まつ　舅御樣になぞらへて、暫くわたしが御回向を……幸ひ爰の（ト三味線箱へ入れて蓋をする。）

源之　身共はちよつと袖助へ、知らせの狀を（ト腰の矢立を出し、サラ〳〵と書き）して、この家は因幡屋と申したな。

まつ　さうぢやわいな。アレ、あの行燈が、よい目じるしぢやわいなア。

源之（見て、因幡屋といふ船宿の、行燈が目じるし。あの岸に繋ぎの小舟の中に

ト鼻紙に認める。障子の中より笛市、杖を突き出て

笛市　モシ〳〵、お松さん、あのお大さんが云ふには、お前は頭痛がなさるげな。療治をなされませぬか。

まつ　アイ、先刻にはきつう痛んだが、今はよいやうぢやわいな。
笛市　そりやお仕合せでござりまする。
源之（笛市を見て）コレ〳〵、盲人、貴樣は身が阿部川町の旅宿へ參る、按摩とりの笛市ではないか。
笛市　ハイ〳〵、左樣でござりまする。旅がけの旦那でござりまするか。
まつ　エヽ、お前の近附きかえ。
源之　毎日療治に參る座頭ぢや。コレ、よい所で逢うた。おてまへ、なんとこの手紙を、身が旅宿にゐる袖助に、渡してはくれまいか。
笛市　ハイ〳〵、お易い御用でござりまするが、今からソロ〳〵療治に
　　トもぢ〳〵する。お松心得、鼻紙の間より豆銀一つ、紙に捻つて
まつ　コレ〴〵ちよつと行つて下さんせ。その代り、お前、小遣ひにさしやんせ。
　　ト手を取つて渡す。笛市、思ひ入れあつて、
笛市　エヽ、これは有り難い。これなら隨分參りまする。行つて來てからお松さん、揉んであげませう。
源之　コレ〳〵、行きやるなら、この狀を、人に見せぬやうに、ちよとも早う袖助へ渡してくりやれ。大事の狀ぢや、落すまいぞ。必ず誰にも見せまいぞ。

笛市　ハイ〳〵、畏りました。決して人に見せる事ぢやござりませぬ。（ト狀を懷中する）。

源之　急いで行きやれ。

笛市　畏りました。

ト合ひ方、暮れ六ツの鐘鳴り、笛市は裾をからげ、下駄を提げて、一散に向うへ入る。この時、濱松屋の中にて人音する。お松、源之丞に囁き、上の方の小舟の中の板子を揚け、源之丞を忍ばす。お松重たげに板子を元のやうに並べる。松藏、廣島藥罐と茶碗を盆にのせ、持つて出て

松藏　お松さん〳〵、煮花が出來やした。飲みなさらぬか。

まつ　アイ、そりや忝うござんすが、わたしやいつそ頭痛がして

松藏　頭痛には奇妙だね。搔き餅でも燒いて、出花を二三杯飲むと、直に頭痛は癒るのサ。サア、飲みなさい〳〵。

まつ　イヽエ、わたしや頭痛に茶を飲むと、猶痛んでくるわいなア。

松藏　ナニ、そこを飲むと癒るわね。

ト床几に腰をかけ、無理に飲まさうとする。この時仙六、屋根船の提灯に灯をつけ、これを持ち、醉つたる體にて出る。

仙六　エヽ、强氣に醉つたさうだ。木の芽田樂で小一升も………ドレ、行燈をとぼさうか。エヽ、うるさいこツた。

ト門口の看板行燈を取つて、火をとぼし、舞臺前へ持つてくる。松藏これを見て

松藏　オヽ、仙六か、もう暮れだな。ドレ、おれもとぼさう、灯を貸しや。

ト濱松屋の行燈を取つて來て、舞臺前へ置き、灯をつける事あつて

コレ、仙坊や、てめえ大分くらつたの。かぶるなよ。

仙六　よしてくれ、かぶるやうなケチな船頭ぢやァねえよ。なんだ、ぬしやァお松さんの側へ寄つて、罰があたるヮ。退いてゐや〳〵。

松藏　おきやァがれ。藝者衆の側へ寄つたとて、この松さんなどは、嫌味といつちやァ微塵もないヮ……

……サア、お松さん、茶がさめるわな。飲みなさいな〳〵。

まつ　忝うござんすが、わたしや煮花は嫌ひでござんす。

松藏　ハテ、味な物が嫌ひだの。

仙六　コレ〳〵、お松坊〳〵、煮花か。おらァ煮花はきつい好きだ。そして、きつう醉つたから、一杯飲みやせう。

トよろ〳〵として茶碗を取りにかゝる。松藏肝をつぶし、茶碗を引ッたくる。

松藏　このべら坊め、とんだ事を云やァがる。うぬに飲まれてたまるものか。とつけもない才六だ。

仙六　なんだ、この野郎、煑花を飲ませる事はならねえ……エヽ、けちな奴ぢやァねえか。煑花を一藥罐や二藥罐飲んだらどうする。藥罐ごと飲んだといつて恐れる話もねえ。エヽ、けちな野郎だ飲ませねえか。

松藏　飲ませてたまるものか。うぬに飲ませる科は無いワ。なんの益にもたゝねえ、われにやァ飲ませねえよ。

仙六　否だ〳〵、飲まにやァ男が立たねえ。飲むべい〳〵。（ト立ちかゝる。）

松藏　コレエヽ、ふざけた野郎ぢやァねえか。飲まされねえ〳〵。

仙六　飲まにやァならねえ〳〵。

ト立ちかゝる。松藏、藥罐を持つていろ〳〵と思ひ入れ。捨ぜりふにて仙六をくらはす。これより藥罐は床几の上に置き、兩人摑み合ふ。お松とめる。この物音に源兵衞、勝藏、お大、出てくる。此方よりおなべも出て來て、捨ぜりふにて双方をとめる。

源兵　コレ〳〵、行燈を踏み毀してわるい。

勝藏　其方へやつて置きなさい〳〵。
　　ト源兵衞は濱松屋の行燈を因幡屋の方へ持つてゆき、勝藏は因幡屋の行燈を濱松屋の方へ持つてゆくこと。
だい　モシ、お松さん、危なうござんす。マア〳〵、お前は內へ來なさんせ。
まつ　ありや、わたしも聞いてゐたが、みな間違ひでござんす。よいやうに挨拶してあげなさんせいな。
だい、そりや皆さんがござんすから、如才はござんすまい。マア〳〵、危ない、お前は內へござんせいなア。
まつ　松さん、料簡してあげなさんせいなア。
だい　ハテマア、來なさんせいなア。
　　トお大は三味線箱を持つて、お松の手を引き、因幡屋の內へ入る。
松藏　エヽ、野郞め、うぬの面を叩き挫くぞ。
なべ　コレ、松や、酒の上の悪い衆と、なぜ喧嘩をする。
源兵　仙公も、靜かにさつしやい〳〵。
仙六　ナニ、あの野郞が、あんまりしみつたれた事を云ふから

松藏　おふくろ、構はつしやるな。朴念仁め。

なべ　エヽコレ、われもいゝ加減に料簡しやいの。

源兵　これサ〳〵、温なしくもない。仙坊、靜かにしねえか。モシ、隣の息子どのも、もういゝわな。

松藏　なにサお前、お構ひなされますな。途方もないそばへた野郎でござります。

仙六　おきやアがれ、人聞きのいゝ、附け馬にいぢめられて、吐え面をして頼むなよ。

ト捨ぜりふ云ひながら濱松屋の行燈を取違へて因幡屋の格子へかける。松藏も因幡屋の行燈を取り仙六の惡口を聞いて

松藏　どうしたと。

ト振り返るを、源兵衞とめる。勝藏、行燈を取り

勝藏　ハテ、不承さつしやいな。

トこれもウツカリと因幡屋の行燈を門口へかける。皆々心附かずにゐる。

源兵　これサ、互ひに心安い仲ぢやァないか。そんなら何も云ふ事はないワ。

なべ　お隣のお客さん、宜しうお頼み申しやす。

源兵　ようござる、おふくろ、落ち着いでござれ。

勝藏　サア〳〵、二人ながら仲直りしてくんねえな。

松藏　そりやアもう、此方はどうでもなるのサ。

仙六　わしだといつて、お前方に任せたわナ。

勝藏　サア〳〵、〆めてもらはう。（ト皆々手を打つ。）

源兵　まづこれで仲が直つた。

松藏
仙六　大きにお世話でござりやした。

源兵　一體この喧嘩は何から起つたな。

仙六　お聞きなせえ、もう濟んだ事だが、事の起りは、煮花を飲ませろ、ならないといふ事から起つた事サ。

源兵　そんな事であらうよ。煮花の喧嘩なら、茶にしておくがよい。一體、茶から始まつたいざこざ、兎角町内に事なかれ、ドレ、この茶は家主が一杯下されう。

ト藥鑵を取り、飲まうとする。松藏うろたへ、その手に縋つて

松藏　コレ、大家さん、その藥鑵をお前、どうさつしやります。

源兵　ハテ、目覺ましに一杯ゆく氣だ。

松藏　エヽ、とんだ事を云ふ。よしなさい。
源兵　ハテ、この男はケチな事を云ふ。道理で喧嘩になつた筈だ。飲まさつしやい。
松藏　ハテ、大家さんでもなりやせぬ。
源兵　ハテ、大家なら飲んでもいゝわな。
松藏　エヽ、惡い洒落だ。
　　ト二人して藥罐を奪ひ合ふ。おなべも捨ぜりふにて奪はうとする。はずみに下手の船の中へ藥罐の茶を殘らずこぼす。松藏、おなべ見て
なべ　ソレ〳〵、松や、船の中へ茶がこぼれた〳〵。
松藏　オヽ〳〵、コレ〳〵、この茶をみんな船の中へ、こぼした〳〵。（ト慌てる）
源兵　ハテ、茶の一藥罐や二藥罐、こぼれてもいゝわな。
松藏　ナニいゝ事があるものか。折角仕込んで（ト思ひ入れあつて）途方もない無駄をさせたぞ。
　　ト手拭にて船の中を拭いて廻り、思ひ入れあつて手拭を腰へ挾まうとして心附き、川へ投げ込む。
　エヽ、大事の藥を（ト云はうとして思ひ入れ。）
なべ　松や。

松藏　おふくろ、强氣に無駄をさせたな。
源兵　なんだな、茶の一藥鑵や手拭一筋、しはい手合ひだ。
松藏　おきなさいな。錢金で買へるものか。
源兵　エヽ、大さうな男だ。
勝藏　ドリヤ、仲直りの酒を買はうか。
源兵　もう二三軒觸れて來ようか。
　　ト合ひ方になり、源兵衞は向うへ、仙六、勝藏は濱松屋へ入る。おなべ、松藏殘り
なべ　松藏や、折角仕込んだこの毒を
松藏　あの船へぶちまけてしまやァがつた。エヽ、極道め。（ト藥鑵を持つて向うばかり見てゐる。）
なべ　それにつけても船底へ、もしや毒が
松藏　成る程、ちよつと樣子を
　　ト船へかゝるを、濱松屋の内にて
勝藏　松さんや〳〵、仲直りをしねえか。
　　ト呼びかける。松藏思ひ入れあつて

松藏　エヽ、折わるい。

なべ　そんなら後に

松藏　母さん。

なべ　松藏。

松藏　ドレ、行かずばなるまい。

卜唄になり、おなべ、松藏、障子の中へ入る。この唄にて、向うより卜庵、跡先に心遣ひしながら出てくろ。東の口より袖助、奴の形にて、スタ〳〵と出てくろ。兩人とも花道より、舞臺の掛け行燈を見て

袖助　源之丞樣より手紙を以ての知らせ。お松樣のござるは、因幡屋といふ船宿。その河岸に繋いだ小舟の中に、暫く忍んでござるとの事。アヽ、向うの行燈に、因幡屋と書いてあるわえ。

卜庵　濱松屋といふは、水右衞門の乳母おなべの惣領、松藏が今の世渡りは船宿と聞く。河岸に繋いだ板子の下には、慥かに忰。あの行燈がよい目じるし。さうぢや〳〵。

卜兩人、本舞臺へ來り、舞臺にて行き違ふ。袖助は下の方へ行き、卜庵は上の方へ行き、兩人とも船の際へ窺ひ寄つて

袖助　モシ、源之丞樣、袖助でござりまする。先刻のお手紙屆きましたゆゑ、早速に參りました。花川戸の長兵衞が女房、お時どのにお賴みなされし、路銀の金子二十兩、手紙も附いて參りました。源之丞樣々々々々。

卜板子を上げんとする。下より板子を上げる。袖助、金と手紙を差し出す。水右衞門、二品を取る。上の方にて卜庵、内を窺ふ。この時、内にて、流行り唄、騷ぎの聲する。卜庵、思ひ入れあつて

卜庵　アヽ、家内には客來の樣子。あの中へ參り、何かの話も致されまい。こりや、二人の者に逢はずとも、河岸に繫いだあの小舟。（卜思ひ入れあつて、船の方へさし寄り）悴々、水右衞門……先夜家來の松藏が、愚老を訪ね參り、其方がこの所に忍び居る樣子、詳しく承つた。誠に其方は右内を討つて立退く砌り、肩先に疵をうけしと聞いたゆゑ、調合いたし參つたる、金瘡癒やすこの良藥。疵につければ忽ちに癒やす祕方の藥。少しも早くつけてよからう。忽ち痛みは平癒いたす快氣次第に勢州へ立越え、龜山の城主、神影流にすぐれし者を、召し抱へんと尋ねる由、これ屈竟。あれへ便つてその身の有り附き。それにつけても、手疵あつては心に任せぬ。サヽ、この一藥を少しも早く。

卜藥の包みを出し、板子の下へやらうとする。源之丞、下から手を出して包みを取る。卜庵は板子を

抑へ

コリヤ、愚老に逢ひたいと思ふも道理。身共も逢ひたいが、逢うては却つて未練が起る。誠に川風、疵口にあたらば、忽ち破傷風。人目に立つては一大事。コリヤ、矢張りそのまゝ。

ト思ひ入れ。時の鐘になり、下の方の内より勝藏、一升徳利を提げて出てくるゆゑ、袖助も卜庵も、船を離れて窺ふ。

勝藏 誰だ〳〵。船の方へ行くのは誰だ。盗人ではないか。

卜庵 イヤ、愚老は左様な者では

勝藏 なんでも怪しい奴だ。敷き物を盗みに來やァがつた盗人め。

ト卜庵にかゝる。袖助、駈け寄つて

袖助 コレサ、若い人、何か様子は存ぜぬが、物には間違ひと申す事もござる。(トとめながら、行燈の灯にて卜庵を見て) ヤア、どうやら見たやうなお人。誠に醫者體のこなさんは

卜庵 さう云はつしやるこなさんも、見受けた若い人。アヽ、どこやらで……オヽ、さうだ〳〵。遠州の家中、石井に勤めた慥かに小者。

袖助 この袖助を知つたこなたは……ほんに思ひ出した。水右衛門の親の卜庵。幸ひな所で

ト取附く、を振り切り

卜庵　こりやモウ爰には

ト逃げようとする。袖助、引戻す。勝藏、この中へ交つて邪魔になる、立廻り。卜庵、小石を摑んで袖助へ目潰しを打つ。袖助、これにて、タヂ〱となる内、卜庵、一散に向うへ逃げて入る。袖助跡より

袖助　敵の手がかり、遠くは行くまい。

ト時の鐘にて、向うへ追ひ駈け入る。勝藏は因幡屋の内へ入る。靜かなる合ひ方、矢張り時の鐘。下の方の船の中より水右衞門、顏は半分紫色になり、手紙と二十兩の金を持つて窺ひ出て、行燈にて狀をよく〱見て

水右　コリヤコレ、長兵衞の女房お時は、源之丞が隱し妻の、お松が爲には以前の下女、よしみあるゆゑ貢ぎの金、二十兩送り越したるこの文言。今うせたのは石井のゆかり。路銀に渇ゑ、難儀な最中、手も濡らさずに、この金子。未だ武運に盡きざる身共。天道哀れみ給ひしか、忝い。さりながら合點ゆかぬは、何と思つて隱れし船へ。（ト思ひ入れ。行燈を見て）さてこそ門の掛け行燈、隣同士の間違ひゆゑ、岸の船まで取違へたか。斯うして置けば、後まで難儀。（ト兩方の行燈を取

つて、左右へ掛けかへんとして思ひ入れ）さるにても船底へ、何やらん滴りしと思へば、面體俄に痛みしは（ト持つたる行燈にて、あたりの手桶を見つけ、これにて顔をうつし、よく〳〵見て）さては最前板子より、船底へ滴りしは、身共が仕込みし毒であつたか。その毒氣より半身痺れ、面體變りしこの痣は、我れと我が身を見まがふばかり、世を忍ぶには最屈竟、豫讓が漆のそれにもまさるこの痣は、天の助けか、エヽ、有り難い。

ト思ひ入れあつて、二つの行燈を以前のやうに掛け戻し、上の方の船に目を附け

もしや船には石井のゆかり

ト立寄らうとする。人音するゆゑ、また下の方の船へ忍ぶ。矢張り時の鐘にて、濱松屋の中より仙六出て來り

仙六　アヽコレ、おらアとんだ物を落した。客人に貰つた三分通用の煙管を落したわえ。たしかあの小舟の板子の下へ落ちたらう。ドレ探して

ト上の方の板子を上げる。源之丞ヌッと出るゆゑ恂りして

ヤア、うぬは盗人だな。泥坊々々。

ト立騒ぐを立廻りあつて

源之 合點のゆかぬこの一藥、こりやコレ正しく卜庵が、祕方の良藥、敵の父たる卜庵が、このあたりに居るからは、すりや水右衞門は、當所に隱れ忍ぶに疑ひなし。彼奴も疵に惱む樣子。思はず手に入るこの一藥、天の與への品なゝか。それにつけても、お松に預けし身が刀は

なべ 仙六、其奴は盜人だぞ。

卜藥の包みを持つて思ひ入れ。後へおなべ、出かゝりゐて

仙六 さうであんべい。ウヌ盜人め。

卜かゝる。屋根船の騷ぎ唄になり、三人立廻りあつて、藥の包みを奪ひ合ふ所へ、因幡屋より勝藏出て、又この中へ交り、仙六は藥の包みを引つたくる。

なべ コレ〳〵、必ずその包み、渡してくれるな。

仙六 呑み込んだ。

卜藥包みを持つて駈け出す。源之丞引き戾さんとして、腕の痛む思ひ入れ。おなべ取附くを突き退ける。このうち仙六、包みを持つて一散に向うへ入る。源之丞この跡を追つて入る。おなべ、腰を痛め、ワナ〳〵してゐる。

勝藏 母さん、どうした〳〵。

なべ　エヽコレ、年寄りをひどく投げやァがつた。アヽ、痛い〳〵。

ト勝藏介抱してゐる。この時、上手の下座にて

○　因幡屋々々々、向う越しだヨウ。（ト大聲にて呼び立てる。）

勝藏　アレ〳〵、向う越しだ。

なべ　おいらは向う脛と腰の骨をぶつた。

ト腰をさすつて濱松屋へ入る。勝藏は捨ぜりふにて船へ乘り、上手へ入る。騷ぎ唄になり、向うより小助、スタ〳〵と出てくる。内よりお大出かゝる。

小助　モシ〳〵、お松さんはどうしなさる。客がいつそ待つてるわな。たつた今來なさるやうに云つてくんねえ。そして、お連れが出來てね。しかも三州のお侍ひだが、何だかむづかしさうな侍ひだ。今來なさるやうに賴むよ。

ト奧よりお松出かゝり、聞いてゐる。

だい　ほんにさうでござんす。お前ちよつと連れて行つて下さんせ。

小助　イヽヤ、わつちやァ聖天町まで廻つて行かねばならぬ。ちよつと送つてくんねえな。賴んだよ〳〵。

ト騒ぎ唄にて、小助、花道へ入る。

まつ　お大さん、埼玉屋の迎ひの人かえ。

だい　好きな事ばかり云うて、走つて行たわいなア。

まつ　わたしや今から行かうと思ふわいなア。

だい　お前、持病はようござんすかえ。

まつ　アイ、今方は餘程ようござんす。誠に、お侍ひのお連れも出來たと、今の使ひも云はしやんしたわいなア。お侍ひ方のお座敷を勤むるも、もしや手がかり

だい　エ。

まつ　ちよつと行て來やんせうが、定めてあの船で行くのでござんせう。

だい　アイ、船で行きなさんせ。

まつ　どうぞ船にして下さんせ。わたしやあの岸に繋いだ船で（ト上手の方を見て、船なきゆゑ、こなしあつて）ヤ、今まで岸に繋いであつた船、ありやどれへ參りましたえ。（ト悧り思ひ入れ）

だい　アイ、船はみんな出拂うたわいなア。

まつ　すりや、あの船は……もしやお忍びなされたる、源之丞どのが

だい　雇ひ船なとしてあげうわいなァ。

まつ　アイ……心にかゝる

ト屈託の思ひ入れ。松藏出かゝりゐて

松藏　モシ、お大さん、船ならわしの船を雇ひなさい、送つてあげやせう。

だい　松さん、お前大儀ながら、送つてあげて下さんせ。

松藏　案じなさんな、わつちが行くわな。サア、お松さん、乘んなさい。モシ、埼玉屋だネ。

まつ　アイ、ちよつと送つて下さんせ。

だい　ドレ、蒲團も入れてあげやんせう。ほんに三味線箱も（ト内へ行かうとする。）

まつ　箱はわたしが持つて來やんせう。

ト合ひ方になり、お松、障子の中へ入る。お大は三幅蒲團を出す。松藏、捨ぜりふにて下手の船へ蒲團を敷く。お松、奥より三味線箱を重たげに持つて出る。お大見て

だい　ドレ、爰へ

まつ　アイ、こりやわたしが（ト持つて船へ行く。）

だい　危ないぞえ。松さん、大儀ながら

松藏 案じなさんな。サア、乘んなさい（トお松の手を取つて船へ乘せる）

まつ ア、これにつけても、ぬしのござんすあの船を（トこなし。）

松藏 オツト、手が危ないよ。

ト流行り唄にて、船は下手の口へ、松藏棹さして入る。お大も思ひ入れあつて內へ入る。入り相の鐘になり、向うより源之丞、袖助、足早に出て來る。跡より仙六、窺ひながら附いてくる。

袖助 源之丞樣、合點が參りませぬ。因幡屋の棧橋に、繫いだ船とござるゆゑ、二十兩に手紙まで、添へて屆けしその船は（ト舞臺を見て思ひ入れ）ヤヽ、小舟の見えぬは、さては棹さし逃げをつたか

源之 殊に思はぬこの良藥、板子の下へ屆けしは、もしや二軒のあの家の、門違ひして

袖助 誠に申せば（ト門の行燈を見て）ヤヽ、今來た時は因幡屋は、西の方と思うたに、今又見れば行燈の、東の方に掛けてあるは、こりや目串に迷つたわえ。

源之 されども藥は藤川が、家の祕方のこの良藥、身が忍びたる船底へ

袖助 持ち來りしは親卜庵、只今これにて見附けしゆゑ、引ツ捕へんと思ふうち

源之 とり逃がせしか。さすれば敵水右衞門、繫ぎし船に隱れ居つたか。これにつけてもお松に逢うて預け置いたる身共が刀を

袖助　エヽ、左様ならお刀は、あのお松様にお預けなされてござりまするか。然らば袖助めが彼方に逢つて、受取つて參りませう。源之丞樣は暫くこれに
　ト因幡屋の方へ行く。おなべ、窺ひゐて
なべ　源之丞なら、おのれは、わしが
仙六　先刻の盜人。覺えてうせろ。
　ト おなべは出刃を持ち、兩人かゝるを立廻りよろしく
源之　敵の手がかり。
　ト おなべを引敷く。袖助、仙六よろしく立廻りの見得。佃の騷ぎにてよろしく
　幕のうち時の鐘、佃の騷ぎにて引つ返し。

幕

本舞臺、三間の間、向う打抜き、眞崎の夜の景色、遠目に見せ、上の方へ寄せて誂への川の緣、爰に蘆のしげり。舞臺、花道とも一面に浪布。空に星の光り物凄く、千鳥の聲、時の鐘にて幕明く。
ト爰に以前の船をつけ、松藏、お松を押へつけ、手籠めにしようとしてゐる。お松、いろ〳〵あつて

まつ　アヽコレ、悪い事しなさんすな。コレ、てんがうさしやんすな。コレ、こなさん、只の藝者と思うたら、ちつと譯が違ふぞえ。エヽ、女子ぢやと思うて、大概にしたがよいわいの。

松藏　コレサ、女だによつて口說くのだわな。野郎ならナニ構ふものか。なんぼお前が大きな聲をしてもナ、ハテ、川の中だわな。どうなるものか。雇ひ船を幸ひに、河岸をつッ切つて乘せて來た。お松さん、もういゝ加減にころびなさいよ。

まつ　エヽ、よい機嫌な。わたしやこなさん達にころぶやうな藝者ぢやござんせぬ。川の中ぢやと思うて、悪い事さんすと、きく事ぢやないぞえ。

松藏　オヽ怖い、こいつはおつかないワ。コレナア、お前も立派な藝者だが、あんまり大きな顏をさつしやるな。公卿の娘か、姬樣か。氣轉のきいた姐えだから、河岸をついて口說くのだ。嫌はれちやアもう自棄だ。否だ〳〵と力味を云ふ、こなさんの手も足も、船べりへ縛りつけ、思ひのまゝになぐさむソ。得心してころべばよし、四の五といへばなぐさんだ、跡はざんぶり川施餓鬼。それが怖くば色になれ。誰だと思ふ神田川、江戸船仲間に隱れのねえ、その名も猪牙の松藏が、返事をきかぬその内は、疾風が來ても動かねえ。お松坊、マアさう思つてゐなさいよ。

まつ　すりや、どうでもこなたはアノ、わたしを口說いて（ト思ひ入れあつて）成る程、それほどまでに

云はしやんす事。ようござんす。いかにもこなさんの心に隨はゝわいの。

松藏　そりやァ有り難い。この松藏が色になるな。

まつ　サア、どうなとならうが、その代り、必ずともに沙汰なしに

松藏　そりやァおれも合點だ。承知したなら、サア、ころんでくんねえ。

まつ　アヽコレ、そのやうに忙しうせいでも、得心してゐるわいなア。

松藏　でも、おらァ祭りの渡らねえうちは落着かねえ。

まつ　ハテ、こなさんの云ふなりになるのぢやないかいな。斯う打解ける上からは、帶紐解いてしつぽりと

松藏　木綿蒲團も節句前、二人抱き寐の柏餅。

まつ　三味線箱を長枕、天井拔けた氣散じは、誰憚らず川中で

松藏　比翼連理の

まつ　その睦言は

ト三味線箱より手早く以前の刀を出し、拔く手も見せず松藏を切り下げる。松藏苦しみ

松藏　ヤア、切りやがつたな。どうして刃物がこの船に

トむしやぶりつくを、お松また切る。立廻りよろしく、松蔵川中へ落ちる。この時下より白刃出てお松を突く。お松苦しみ、船より向うの岸へ見事に飛ぶ。時の鐘の頭を打込む。板子を刎れのけ、水右衛門、血刀を提げ出る。これより忍び三重、時鳥、蛙の聲。お松、苦しみながら透し見て

まつ　ヤヽ、船の中より怪しき男子、船底に忍びゐて

水右　日陰に暮らすも何故か。石井のゆかりの奴原に、狭められたる某こそ

まつ　もしや遠州濱名家にて

水右　石井右内をブッ放した

まつ　さては其方は

水右　わいらが敵とつけ覗ふ

まつ　いよ〳〵藤川

水右　水右衛門とは、おれが事だワ。

まつ　エヽ……さてこそなア。

水右　源之丞の隠し妻、わりやァ明石のお松だな。石井ゆかりの扶持離れ、身共を敵と覗ふとは、いらざる精をつくさずとも、頭の上の蠅を追へ。毒を喰はせ方附けんと、思つた事も運強く、のがれ


松本幸四郎
岩井半四郎
豊國画

たもの〻もう叶はぬ。源之丞めも後からやる。その先觸れにわれが行け。暗くて黒白は見えまいが、わいらが覘ふ遠州浪人、身共は藤川水右衛門だ。よく面體を見覺えて、あの世へ行つて討つなら討て。この世に身共がある內は、うぬらに討たれてたまるものか。ハヽヽヽヽ、大だはけめ。

まつ　エヽ、船中といひ、女子ばかりと侮つて、思へば無念なその惡口。たとへこの身はひしびしほになるとても、夫源之丞になりかはり、憎しと思ふ水右衛門、一太刀なりと討たいで置かうか。サア、立ち上がつて、勝負々々。

水右　小癪な女め。さては某を討たんずため、刃物まで用意したか。

まつ　これも最前思はずも、右內どのゝ形見の刀、源之丞どのより預かりしは、爰で討てよと草葉の蔭より、知らしめたまふか。これにつけても廻りあうたこの由を、どうぞ夫へ（ト思ひ入れあつて）イヤ〳〵、取逃がしては後での後悔。（ト白刃を見て）刀は卽ち夫の差し料、さすればこの場に源之丞樣お出でも同然。たとへ深手を負うたりとも、中野藤兵衛が娘の松、舅の敵、お主の仇、お刀所持する上からは、夫婦揃ひし敵討。やはか討たいで置くべきか。

水右　その一言がこの世の別れ。返り討ちだ、覺悟しろ。

まつ　討たるゝまでも、おのれ藤川

水右　小癪な女め、くたばつてしまへ。

ト船よりヒラリと岸へ飛び下り、切つてかゝる。お松も切り附け、立廻りよろしくあつて、トゞお松、深手を負ひ倒れる。この時、下座より灯見ゆるゆゑ、水右衛門、お松を切り倒し、お松の刀を手早く取つて船へ投げ込み、元の通り乗り移り、刀を納め、火縄箱にて莨を吸ひつけゐる。矢張り時の鐘、時鳥の聲する。下座の方より助八、小舟に棹さし、岸の方へ乗り附け

助八　南無三、とんだ岸へ乗り附けたわえ。(トいろ／＼するうち、お松の呻き聲を聞きつけ)ヤア、慥かに女の呻き聲。アヽ、身投げだな。(ト岸へ飛び下りて、お松を見て)ヤア、お松ぢやアねえか。コレこりやアマア、何者が／＼

ト介抱する。お松、苦しみながら

まつ　助八様か。

助八　オヽ、助八だ／＼。

まつ　わたしや敵の水右衛門に

助八　ヤ、すりや、こなたが覗ふ水右衛門の

ト このうち水右衞門、咬へ煙管にて、そろ〳〵船を出す。

まつ　コレ、氣を慥かに持たつしやい〳〵。エヽ、口惜しい。深手を負うたその上に、夫より預かりし、右内どのゝ形見のお刀　あの水右衞門が（ト鞘に取り附き、立たうとして）どうで存命叶はぬわたし。この由詳しく源之丞どのへ。モシ、我が子の事を

ト手を合す。助八思ひ入れ。このうち船は花道へゆく。もやひ綱でとめる。

助八　氣遣ひせずと、心を慥かに（ト介抱しながら船の影を見て）ヤ、小舟に怪しき

ト飛びつかんとする。水右衞門、上草履を打ちつける。助八の目先へ當らうとして、手早くもやひ綱を引く。水右衞門、拔き打ちにもやひ綱を切る。助八、跡ずさりに撞と坐す。この途端、一度に木の頭。お松、よろばひ寄つて、助八に取附き、向うをキツと見詰めて

まつ　エヽ。

ト思ひ入れ。これをキッカケに、よろしく、拍子

幕

幕の外、捨て鐘にて、水右衞門、櫓を押し切り、船は向うへ入る。知らせにつきシヤギリ。

九幕目　花川戸の場

役名――幡隨長兵衞。寺西閑心。白井權八。蝮の次兵衞。非人、五郎作。奴、鐵平。下郎、紀の平。同、土手助。長兵衞一子、長松。長兵衞女房、お時。傾城、小紫。因幡屋助八。

本舞臺、三間の間、上の方に障子屋體、二重舞臺、まひら戸棚、眞鍮の錠をおろし、正面のれん口下の方の壁に酒肴、蒸籠の進物札澤山に貼り、爰に長松、菖蒲刀を差し、枠にかけし誂への座敷幟飾りあり。樽拾ひの丁稚、相手になり、靑竹を持つて、牛若熊坂の立廻りをしてゐる。次兵衞、大きなる俎板にて、出刃庖丁を持つて、千ごりの梵天を拵へてゐる。二重舞臺にお時、世話女房にて、女むきの絞りの浴衣地の尺を差しゐる。上の屋體に二枚折りの屛風、この蔭に小紫、扱帶の形にて、文を書いてゐる。すべて花川戸、長兵衞宅の體。祈禱垢離の掛け念佛、法螺貝、鈴の音、四つ竹節の合ひ方にて幕明く。

丁稚　どつこい、さうはさせぬぞ。

長松　ところをおれが斯うして切る。

ト兩人立廻つて長松、丁稚をしたゝかに打つ。丁稚・泣き出し

丁稚　おらア否だ〳〵。切られては否だ〳〵。おかみさん、見なさい。長松さんがわしを切つたわな。

長松　それでもわしは牛若、てまへは熊坂、それぢやによつて切つたがどうした。

丁稚　エヽ、こいつはをかしい。牛若が熊坂を切つてたまるものか。熊坂が牛若を切ります。ハテ、牛より熊が強いわな。エヽ、何にも知りもせないで、ワアイ〳〵。

長松　そのやうに笑ふと、また斯うして。（ト菖蒲刀を以てしたゝか打つ）

丁稚　アイタヽヽヽ。おかみさん、又ぶつたわな〳〵。

とき　これはしたり、長松もよい加減にしや。また跡で喧嘩せうと思うて。コレ、御用どの、こなさんも、もうよい加減になぶらんせえ。

次兵　コレ〳〵、御用、いゝ加減に惡ふざけをしろ。長松さんもおとなしくしなさい。その代りにやア御前がねだつたコレ、祈禱垢離の梵天を拵へてやるわな。（ト靑竹を取つて幣を附け、卷き藁を竹の先へ附けながら）コレ、見なさい。今日は山の宿の手合が、祈禱垢離に出た、その通りに拵へて、明日は花川戸の子供中の梵天だ。子供を集めて、掛け念佛で歩いたら、面白からうぞえ。

長松　こりや面白い。もうこの幟は捨てゝ置いて、わしやこの梵天を河岸へ持つて行つて、千ごりして

遊ばう。コレ、母さん、見さんせ。

とき　ほんに、こりや次兵衞さんが、よう拵へなさんした。明日はいつもの友達を寄せて、後の三社樣の祭の時、拵へた浴衣の揃ひを着て遊んだら、山の宿の子供衆も、羨ましう思はうわいの。

次兵　左樣サ。こんな思ひ附きは、外の町內の子供衆は、眞似も出來ない。何と云つても親分の幡隨長兵衞どの、祈禱垢離はおろか、百萬遍のお十念の遊び事がありさうなものサ……イヤ、そりやアさうとモシ、おいらんへ。お前もそこへ引ッ込んで、文ばかり書いてゐずと、ちつと爰へ出てこの子の騷ぐのでも見なせえ、爰の內にゐりやア何も怖い事はない。爰へ出なさいな。

小紫　サア、わたしもさうは思へども、この間のもや〳〵から、心も心ならぬゆゑ。（ト屈託の思ひ入れ）

次兵　ハテ、大事ない、爰へ出ねえな。

とき　これはしたり、次兵衞さん、そりやあんまり廓へ對して、踏み附けをするやうで惡うござんす。主が長兵衞どのだけに、向うでおとなしうして下さんすりや、猶更義理で遠慮せにや惡いわいな。コレ、小紫さん、お前の氣には入るまいが、錢湯へ連れて行つても浴衣がいるであらう、早う仕立ていと、長兵衞どのが云はしやんすが、お前のゆき丈は、どれ程に縫うてようござんすえ。

小紫　何ほうぢややら、よいやうに……そのやうに厚く世話して下さんすといひ、お氣の毒ゆゑ　兄

さんの所へ行かうとは思うたれど、それでは權八さんに逢はれまいと思ふから、殊に主から預かつた、この大枚の（ト懐より財布入りの二百兩を出しさうにして）サア、なんであらうと、もう〳〵廓へは歸らぬ程に、次兵衛さん、お前も共々、譯を附けて下さんせえ。

次兵　ハテ、そりやァ氣遣ひしなんすな。今朝も町の手合ひが來たが、外と違つて長兵衛どのが、預かつたといふ一言で、お頼み申すの八百も云つて歸りやした。もう落ち着きなさい。親分は滅多に歸しさうな氣色はなかつたによ。

小紫　そりや嬉しうござんすが、このマァ權八さんは、どこへ行きなさんしたのぢややら、わたしや主の事が案じられる。井筒屋まで文を出さうと思ふわいな。

次兵　おいらんは何ぞといふと文を書くが、わしやァ又ごろつきの癖に繪が出來るから、見なさい、この屛風へ、枯れ木に梟。なんと繪はきつからう。

ト二枚屛風を引つ返して見せる。丁稚、見て

丁稚　こいつは大笑ひな繪だね。その繪よりは、コレ〳〵（ト鍾馗の幟を取つて）この幟の鍾馗は餘ッ程いゝね。こいつは淸長が描いたのであらう。次兵衛さんの描いた梟は、木兎か達磨かわからねえわアイ、こいつは大笑ひだ〳〵。

ト持つたる幟にて屏風の繪をくらはす。はずみに幟破れる。長松見て

長松　それ〳〵、大事の幟が破れたわいの。

とき　これはしたり、又この御用は、大きな形をして、惡さをしやるかいの。

丁稚　惡さはしないが、ツイ鐘馗が破れたもの。

次兵　この餓鬼は、よく惡戯をしやァがるぞ。

長松　わしやその幟が破れては、否ぢや〳〵。

ト丁稚が持つてゐる幟を引つたくり、丁稚を散々にぶつ。これにて又幟そこれる。長松、腹を立てゝ泣く。小紫、立ち寄つて

小紫　もう堪忍さんせ。こりやお前も腹立てさんすが尤もぢや。コレ〳〵、わしがよい繪を上げう程に泣きやまんせ〳〵。（ト懐より權八の繪姿を出し）こりやわたしが大事の繪ぢやけれど、お前に上げる程に、泣かんすなえ。

次兵（見て）成る程、こいつはいゝ繪だ。しかも豐國が描いたのだね。どうか半四郎に似てゐるの。

小紫　アノ、そりや權八さんぢやと思うて、

次兵　抱いて寐るか〳〵。エヽ、おいらんに思はるゝ、權八どのはあやかり者だ。………ドレ〳〵、お

れが幟にしてやらう。

ト捨ぜりふにて、手早く繪姿を糊附けにして幟に拵へ

サア〳〵、幟が出來た〳〵。こりや鍾馗よりは又格別だわえ。

長松 ほんに、こりやよい幟になつたわいの。

小柴 よい笑ぢやわいの。權八さんと鍾馗さんとは、きつう違うてゐるわいの。

とき コレ、長松、又その幟を破りやんな。

小柴 ほんに、大事に持ちなんせえ。

丁稚 エヽ、大事に持てとは、おいらんは權八さんの繪と思つて、ホオヤラホォ、おいらは知らぬ、權八さんとよ。

ト手を打つて囃し廻ろ。小柴、思ひ入れ。長松、丁稚を追ひ廻し歩く。合ひ方になり、のれん口より長兵衞、單衣帶、寐間着の形、誂への枕と、繪本を二三冊持つて出て來る。丁稚、囃し歩き、長兵衞に行き當り、悔りする。

長兵 なんだ、小やかましい。又あの御用めを呼び込んで惡騷ぎ。小柴どのも三浦屋にては、かゝり合ひの身を以て、あんまり端近く出さつしやるな。コレ、お時、われも爰にゐながら、なぜその位

な事を云つて進ぜねえ。殊にこの頃、この邊の辻斬り沙汰。あの權八も、まだ歸らぬか。

とき　アイ、小紫さんがござんした明けの朝、ちよつと歸らしやんしてから、身請けの事を聞くとそのまゝ、出やしやんして、今に於て

次兵　どこに何をしてゐる事やら。親分の世話になりながら、夜泊り日泊りの權八どの、いかに年がゆかないといつて（ト思ひ入れあり）ほんに、こりやァおいらんの前で、權八どんの噂をして、モシ氣にかけてくんなさるな。

小紫　なんのマア、お前がそのやうに、深切に云うて下さんすのは、主を思ふからの事。殊に好かぬお客の閑心さへ、身請けの噂が氣にかゝり、その上仲の町で、初めて逢うた彌市さん、田圃住居のあのやうな（ト長兵衞と顏見合せ、こなしあつて）なぜこのやうに遲い事やら、アヽ、辛氣な事ではあるわいなア。

長兵　今云ふ通りの辻斬り沙汰。世間の口には戶が閉てられない。氣を知らない奴等は、浪人の掛り人ゆゑ、さま〴〵な惡い噂を（ト皆々と顏見合せ）アヽ、辻斬り沙汰の惡い噂。歸らない時は內の者は案じるに、若いといつて、心無しには困つたものぢや。

トめい〳〵思ひ入れ。唄になり、向うより權八、着流し、一本差し。後先へ心遣ひあつて出て來る。

はるか跡より五郎作、前幕の乞食にて、竹杖を絲立に包み、見え隠れに出て來り、權八はツカ〳〵と内へ入る。五郎作は内を窺ひ、思ひ入れあつて路地口へ入る。

權八　長兵衞どの、只今戻りました。

小紫　オヽ、權八さん、戻つてかいなア。今も今とてお前の噂。どこにマア居さんしたぞえ。

とき　こちの人も、大抵案じてゐさんすわいな。

次兵　悪い噂もある程に、あんまり夜は出歩かつしやらぬがようごんすによ。

小紫　今朝からモウ、廓の挨拶やら何やらで、長兵衞さんの大抵世話になる事ぢやないわいな。

長兵　ハテ、何も世話といふ程の事もないが、知つての通り一昨日の晩から、この小紫は駈落ちして、おれが内にこけ込んで、どの道おぬしに添はにやァならぬ、といふ譯は、あの寺西閑心とやらいふ侍ひが、身請けして女房にしようといふげな。それが煩さいとて、廓を拔けて來てはゐれど、實の兄は因幡屋助八、萬更な野暮白癡でもない。殊に吉原花川戸、目と鼻の間ながら、引請けたこの長兵衞。おれが面だけ向う方も、おとなしく出るゆゑに、いづれ悪いやうにはしまいと挨拶をして歸したが、搦んだせりふを云はずに素直に出るは、こりやアコレ長兵衞が一枚はまつてゐる故だと思やれ。

權八　左樣でござりまする。そりやモウ長兵衞どのゝ息がかゝらずば、何として〳〵、關破り同然の小紫、廓の法と權八ぢろとも、どのやうな憂き目にあひませう。そこが達衆の男一疋。これと申すも、あなたのお庇、忝う存じまする。(ト兩手を突き、思ひ入れあつて)私しも小紫が志は存じたれど、金の工面も致さうかと、幸ひこの間、國許の近しき者に逢ひまして、旅宿は下谷と承り、金子の才覺いたさんと、尋ね參つて只今まで

長兵　コレ〳〵、權八、そりやァ無駄といふものだ。江戶で生れたおれでさへ、出來るといつて出來ぬは金。まして遠國因州から、江戶にしるべの無いおぬし、親兄弟とも思やるは、この長兵衞ばかりであらう、外に知る人は無い筈だ。おぬしも難儀な一人旅。男と見拔いて賴まれて、長兵衞が世話をして置く事は、江戶中に誰知らぬ者もない。おれが內にかゝつてゐる內は、外へ無心合力に步いてくりやるな。それとも步かないで叶はぬなら、おれが內を別れてから步いてくりやれ。

小紫　長兵衞さん、お前のその眞實なお志、わたしや淚がこぼれて、嬉しうござんすわいなァ。小紫は長兵衞が、貧乏屋體を賣つてなりと、身請けして添はせる程に、そりや案じぬがよいぞや。

長兵　ハテサテ、なんの禮に及ぶものか。人の落目といふ時は、見捨てぬわしが生れつき。こゝにゐる女房が、以前勤めた主人といふは女主、世話する旦那は勤番の侍ひ衆、今ではきつう苦勞さつし

やるげな。以前のよしみ、わしが所へ使ひを以て、頼みの御狀……お時や、おぬしは用立て進ぜたか。

とき　アイ、お前に斷つておいた通り、わたしが着替へをやう〳〵と、二十兩の預け物。

長兵　屆けて進ぜたか。

とき　アイ。

長兵　よくしやつた。人の落ち目を救ふが誠の人間の魂ひだが、同じ落ち目でも、大枚の金を費し（ト權八を見て）コレ、權八、腹を立てやるな。おぬしはおれが居候、無職で暮らす身を以て、金の生る木はあるまいし、中三買つての居續けは、ちつと世間の噂が惡い。それとも云ふのが氣に障らば、向後これきり云ふまいが、畢竟おぬしの身の爲だから、異見半分のこのせりふ。小紫が押しかけて、斷うこけこんでは破れかぶれ。おぬしも男なら、一旦女房に持たずばなるまい。そのやァおれが持たせる程に、今までのやうに吉原は勿論、あんまり外へも出あるかぬがよい。權八マアさう思つてくりやれ。

權八　御深切なるそのお詞、誠の兄弟、親なりとも、それ程にござりませうか、有り難うござりまする。殊に只今の強異見、返す詞もござりませぬ。ふとした事から吉原へ通ひ初め、小紫と馴れ染め

も、浮氣ばかりの事でもなく、兼ねてお前に話し置いた、尋ねにやならぬ一卷の

長兵　ハテサ……一夜二夜は附合ひの、若い身空にある習ひ。夜晝なしの廓通ひ、それも幡隨長兵衛が、權八は掛り人、針ほどの事も棒ほどに、云ひ立てる人の口。殊にこの頃辻斬りの、流行るにつけても、もしやおぬしが（ト權八と顏見合せ、思ひ入れあつて）サ、もしや辻斬りにでもあひはせぬか、ひよつとした間違ひで、卷添へにはなるまいかと

權八　成る程、この頃多い辻斬り沙汰。一昨日の夜も田圃にて、思ひがけなき間違ひに、現在兄と知らぬ身の、殘し置かれし書き物にて（ト七幕目の書物をちよつと見る。）

長兵　ヤ。

權八　サ、何か樣子は存じませぬが、切られた者は非人とやら。定めしこれも、間違ひでがなござりませう。（トほろりとする）

長兵（思ひ入れあつて）アヽ、田圃で切られたは非人か。

權八　ハイ、左樣ぢやさうにござりまする。

長兵　ハテナウ。物取りの辻斬りなら、よもや非人は切るまいが、もしやこれらが今流行る……コレコレ（ト畫入りの讀本を取つて）焉馬が書いた潮來節・京傳が趣向に綴る敵討、豐國が筆に任せた

野伏りや。非人にやつして窺ふを、敵の身寄りが、卑怯未練の返り討。（ト權八と顔見合せ）得てその類が、ナウ、權八。

權八　ハイ、左樣でござります。

長兵　ハテ、切られた非人も、萬更腹から（ト思ひ入れあつて）なんの役にも立たぬ事を。ドリヤ、讀みかけた本でも讀まうか。

ト合ひ方になる。向うより紀の平、中間にて、スタ〳〵と出て來り、門口へ來て

紀の　頼まう〳〵。花川戸の幡隨長兵衞どの、宅は爰かな。

次兵　アイ、長兵衞は爰だが、どこから來さしつた。

紀の　イヤ、身共は寺西閑心が家來。何か旦那が御用があるゆゑ、只今これへ見えらるゝ。長兵衞どのに、他行いたさぬやう、きつと申してくりやれ。

次兵　親方、聞かつしやりましたか。

長兵　イヤサア、よく〳〵の用事と見え、使ひを以ての先への知らせ。（ト思ひ入れあつて）長兵衞、宿に居りまする、承知仕りましたと申して下さい。

紀の　畏りました。

ト合ひ方にて。向うへ引返して走り入る。皆々思ひ入れ。

とき こちの人、お前逢はしやんしてもようござんすかえ。

長兵 ハテ、向うも名におふ寺西閑心、おれも知られた幡隨長兵衞、逢はぬはどうか、逃げると噂をされるも殘念。てつきりおれに逢はうといふは（ト思ひ入れ。）

權八 （こなしあつて）もしや田圃の人殺し。留め木の伽羅の香に匂ふ

小紫 よしや男の伊達羽織。

權八 その羽織ゆゑ情なや、現在實の

長兵 ヤ。

權八 おのれ閑心。（トきつとなる）

長兵 コレサ、いらぬおぬしが顏に筋。マア、何事もおれ次第。

權八 でも私しは、逢うて詮議の

長兵 ハテサア、逢ふといつて寄越した宛名は長兵衞。すりや横合からいらぬ事。殊に小紫が、せめて身請けの手附でも

權八 ハイ、その金も少しは心當りが……とはいふものゝ權八が、この身に附かぬ

小紫　お前の渡して置かしやんした
權八　ア丶コレ
長兵　すりや、おぬしが手先で、手附の金が
權八　サア、その金子の出來方も、とくとお話し申した上にて
とき品によつたら小紫さんの、手附に渡すか、何事も、ぬしととつくり相談して
小紫　手附が濟めば閑心さんが、何と云はうと……エヽ、わたしや嬉しうござんすわいな。
權八　小紫、其方が喜ぶ手附の金も、思ひ廻せば
小紫　エ。
權八　（思ひ入れあつて）長兵衞様。
長兵　ドリヤ、見えられるまで奥で待たうか。
ト唄になり、權八、小紫、障子屋體へ入る。長兵衞、長松が手を曳き、のれん口へ入る。お時、次兵衞殘る。
次兵　ハテ、味な使ひを寄越したな。親方に他行するなとの先觸れは、こりやアてつきり吉原で、奴が頭をぶち割つた、その仕返しに出てうせたか。こいつは一番褌を、しめてかゝらにやアならぬ

わえ。

とき　わたしも聞いたその噂、樣子によつて……ハテ、急かしやんすな。

　　トとめる。唄になり、向うより油單を掛けし吊り臺を、中間二人にて擔ぎ、門口まで荷ひくる。跡より閑心、紀の平附き出て來り、門口にて

閑心　長兵衞の宅はこれか。

紀の　左樣でござりまする。

閑心　案内いたせ。

紀の　畏りました……賴まう／＼。

次兵　ソラ來たぞ……閑心どのなら、入らつしやりませ。

とき　これはしたり、まだどなたやら知れもせぬに。（ト門口へ來て）ハイ、どれからお出でなされました。

閑心　身共は寺西閑心だ。長兵衞の宅はこれか。

とき　左樣でござりまする。只今わざ／＼お使ひの口上。長兵衞ことも、お出でをお待ち申して居りまする。

閑心　それは重疊。然らば許しやれ。
　　　ト合ひ方になり、閑心、內へ入り、上の方へ通る。次兵衞と顏見合せ、思ひ入れあつて上座に直る。
次兵　どなたかと存じましたら、この中、町でお目にかゝつた閑心樣、ようお出でなされました。
閑心　其方は長兵衞が、子分とやらの若い者。この程は吉原で、事ない馳走、過分に存ずる。禮に參つた。して、長兵衞は宿に居るか。
次兵　ハテ、先觸れのあつたもの、內に居ないでどうするものだ。先刻から待つてゐられまするよ。
閑心　それは重疊………コリヤヤイ、家來ども、その吊り臺をこれへ。
紀の　畏りました。
　　　ト皆々手傳ひ、吊り臺を內へ持込み、よき所へ置く。
閑心　コリヤ、紀の平、其方は跡に殘り、外の者共は歸つて、後方迎ひに參れ。
　　　ト紀の平殘り、中間は向うへ入る。
ときして、連合ひ長兵衞へは、何御用ござりましてあなたのお出で。
閑心　近附きにならうと存じて。
ときすりや、閑心樣がわざ〳〵と、町人風情の長兵衞へ

閑心　知る人にならうと存じ、心ばかりの身が手土産。聞けばおぬしと長兵衛が仲に、一人の忰があるげな。男の子なら丁度よい手遊び。持たせ參つた吊り臺の、その手土産を受けてくりやれ。

とき　何か樣子のありさうな、忰が方へ下され物。

閑心　受けてくりやれ……紀の平、その品、これへ。

紀の　畏りました。

　ト油單を取る。吊り臺の中より土手助、頭を割られ、片面血に染みたる體、白布にて鉢卷しめ、これに水引、結び熨斗を横面に挾み、唸りながら出てよき所へ倒れる。

とき　見ますれば、手負ひの顏へ熨斗を附け、これをあなたの進物とは

次兵　こりやアこの中吉原で、そばへた奴の腦天を、ぶち毀したを根に持つて、持込んでござつたのか。

閑心　いかにも、其方が云ふ通り、吉原町で身が家來、素天邊をこの通り、ぶち割られて半死半生、先の相手は長兵衛が、祕藏の餓鬼の仕業ゆゑ、家來を一人進上する。武士の小者のしやッ面を、生疵受けちやァ寺西閑心、刀の手前相立たぬ。其方が連合ひ長兵衛に、この由しかと云ひ聞かせろ。

とき　サア、それは（トつかへる）

次兵　コレサ、かみさん、何も驚く事はねえ。奴が相手はわしでごんす。蝮の次兵衛が一番相手に

ト立ちかゝる。お時とめて

とき　これはしたり、何事も、長兵衛どのと相談して、

次兵　ハテ、相手ははしたの蝮の次兵衛だ。小鬢ながら幡随長兵衛が子分の小二才だ。水道の水で育つた江戸ッ子、五分でも交りのあるのぢやァねえ。誰だと思ふ、つがもねえ。

とき　コレ、そのやうに慮外云はしやんして、御立腹のその上に、猶更それでは

次兵　ハテ、うつちやつて置きなさい。相手はわしだ、退きなさいよ。

とき　エヽ、聞分けの悪い。

次兵　エヽ、退かつしやい。

ト立ちかゝつて騒ぐ。この時のれん口より長兵衛、長松を連れて出て來り、この體を見て

長兵　これはしたり、何を騒ぐのだ。

次兵　親分、かまはつしやるな。相手はわしだ。

とき　コレ、長兵衛どの、あの子のしたこと根に持つて、閑心様が

長兵　これはしたり、わいらが知つた事ぢやァない。おれに任せて退いてゐろよ。

トこれにてお時、次兵衛、捨ぜりふにて控へる。長兵衛、閑心の側へ寄り

これはお初にお目にかゝりましたが、あなたが寺西閑心樣でござりまするか。即ち私しは幡隨長兵衞めでござりまする。お見知りなされて下さりませう。殊には見苦しい所へ、よう入らつしやりました……コレ、お茶でも淹れぬか。アヽ、氣のきかねえ、どうしたのだ。

閑心　アイヤ、心遣ひ無用にしやれ。すりや、お手前が男と呼ばれし幡隨長兵衞。成る程、立派な男だ……身共は寺西閑心と申す者。定めて家名は聞いても居やらう。今日參つた譯は、女房に云ひ聞かせ申したが、餓鬼が仕出した手てんがう、取上げるも大人氣なけれど、このまゝに濟ましては、朋輩の手前が立たぬ。殊に相手は男一疋、長兵衞が悴ゆゑ、猶更濟まぬ。濟み申さぬぞ。サ町人ながらも性根を据ゑ、身が侍ひを立てゝくりやれ。

長兵　ようござります。あなた樣が仰しやります、この間の始末は、子方の者が話で、よつく聞いて居ります。今日は御沙汰があるか、明日は私しを召さるゝかと、この間は遠出も致さず、待つて居りましたに、あなたの方から入らしやつて、恐れ入つたる長兵衞が、始末方に手古摺つて居りまする、と申してお侍ひ樣を私しが、どうしてお立て申す事は

閑心　出來ぬと申すか。

長兵　ヘイ、左樣も申しますまい。あなたのお氣には叶ひますまいが、この長兵衞が御返答は

ト思ひ入れ。合ひ方になり、ズッと立つて、傍にある大俎板を閑心の前に持つて行き、長松を引ッ捕へ

俎板の上にのせ

ちつとの内だ、寢轉んでゐろ……サア、閑心樣、長兵衞が悴長松は、家來衆のいはゞ敵。あなたのお顏を立てる爲、その俎板でお手料理、煮るとも燒くとも刺身でも、旅と違つて江戸前のこの長兵衞が活の魚。あなたの差した太刀の魚で、親が見る前細作り。あらの出ぬうち骨附きはわしら夫婦へ閑心樣、かたみと分けて貰ひたうござります。

トこれにて閑心、思ひ入れ。お時、こなしあつて

とき　こちの人、ようさんした。あの子の命をすつぱりと、惜まぬお前の思ひ切り、ようマア俎板へのせさんした。聞けばあなたは權八どのと、云ひ交してゐるあの小紫さんを

長兵　ハテ、そりやァおれも合點だ。さう見たゆゑにあの餓鬼が

とき　命惜しまぬこなさんの

閑心　氣性は聞けどこれ程には、よもあるまいと思ひの外、我が子を突出す男氣は、流石達衆の幡隨長兵衞。こゝは寺西閑心が、義理にもこのまゝこの悴、助ける事と思はうが、そこを助けぬ生れ附き、涙をかけては刀の手前、白柄組へ身が立たぬ。馳走に任せ、庖丁するぞよ。

長兵　御念に及ばぬ、餓鬼めが命、お手を下して存分に、サア、切らつしやい、突かつしやい。コレ、長松、われも幡隨長兵衞が子だ。一度死んでも二度は死なない。百まで生きる者もあり、生れて直に死ぬのもある。われは六つまで生きてくたばるも、それまでの約束だ。その俎板の上で死ね吠え面は見つともない。どうで死ぬなら笑つて死ね。

長松　アイ、笑つて死にます。この俎板の上で、鯉や鰻を切るやうに、その庖丁で切らつしやい。コレ母さん、魚は弱うて刎ね廻る、わしやァちつとも刎ねずに死にます。

とき　オヽ、よう云やつた。その辛抱が大事ぢやぞや。

次兵　あんな氣丈な息子どの、卯の毛で突いた程なりと、疵を附けさせてはわしが立たねえ。切るならおれを切らつせえ。野郎が命は、野へ出した死人だワ。

ト寄るを長兵衞、立廻りにて留め

長兵　コレサ、おぬしは退いてゐろ。サア、閑心樣、庖丁さつせい。

閑心　馳走に任せて

ト抜かうとする。お時、思ひ入れ。次兵衞、立ちかゝる。長兵衞、二人を引附け

長兵　コレサ、ざわ〳〵と立騒ぐな。お客へ對して不馳走な。マア、控へてゐろといふに。

閑心　馳走とあらば（ト立ちかゝる。）

長兵　サ、すつぱりとやらつしやい。町人づれのわしらと違ひ、閑心樣のお手料理、殘つた骨は骨酒に夫婦の腹へ納めてやる。その代りにやァ下された、面にあたりのある奴は

ト土手助を捕へ、出刃を取つて立ちかゝる。土手助、慄へて

土手　アヽコレ〳〵、どうする〳〵。

紀の　コレ、土手助をどうするのだ。

閑心　長兵衞、わりやァ身が家來を

長兵　モシ、閑心樣、あなたの家來と仰しやるが、たつた今この奴は、近附きになる印だと、コレ、見さつしやりませ、面に熨斗を挾んで、下さつたぢやァござらぬか。

閑心　サ、そりやァ

長兵　そりやァとは覺えの惡い閑心樣。悴を突出す上からは、貰つた奴はわしが存分。精進ならぬ生魚併し奴は寒晒し、生かして置けぬ悴が弔ひ。頭の疵が癒えようが、ぶたれた骨身が直らうが、餓鬼と此奴を替へ〳〵の、料理は互角の出刃庖丁。餓鬼の命は取らつしやい。わしも奴が息の根を

ト出刃を持つて土手助に立ちかゝる。

紀の　こいつは堪らぬ。
　ト慄へゐたりしが、一散に門口より路地へ逃げて入る。土手助、ブルブルして

土手　アヽ、モシモシ、旦那、小倡を切るとこの奴も、長兵衛どのに料られまする。家來を一人お助けと思し召し、モシ、どうぞその子の命を、ヘイヘイ……親方、ありやうは、さのみな疵でもござりませぬ。（ト膏薬をめくつて見せる）

長兵　無駄をぬかすな。ドレ、息の根を
　ト立ちかゝる。土手助、手を合せ思ひ入れ。閑心、こなしあつて

閑心　長兵衛、待ちやれ。

長兵　どうしました。

閑心　悴が命、助けてやらう。（ト長松を俎板より下す）

土手　エヽ、よい思し召しでござりまする。

長兵　イヽヤ、さう云はずとも是非に悴を

閑心　まだ老先のある小悴、命取るのは益ない事。餓鬼を切るよりまだ外に

長兵　外に切るとは小柴が、手を切つてくれといふ事か。

閑心　流石は長兵衛、よく見抜いた。

長兵　大方そこらでござらうよ。

閑心　男を立てる長兵衛へ、この閑心が折入つて、賴むといふは小紫、是非とも身請けは身共が致す。
さう心得てもらひたい。

長兵　そりやモウ、わしが抱への女郎といふではなし、殊に小紫には助八といふ兄はあり、わしの儘にもなりませぬ。

とき　併し、小紫さんと權八さんの譯合は、人も知つたる深い仲、今更切れいと云うたとて

閑心　イヽヤ、切らせる工夫がある。

長兵　切らせる工夫がござるとは

閑心　この閑心がこれで切らせる。
ト懷中より袱紗包みの一卷を出す。兩人見て

とき　切らせる工夫と閑心樣の

長兵　持つてござつたその品は

閑心　諸流に渡る神妙劍。

長兵 エ。
閑心 この一卷が出るからは、よもや權八、切れずばなるまい。
長兵 すりや、その品は日頃から
次兵 權八どのが在所を尋ねる
閑心 神妙劍の一卷だワ。
長兵 イカサマ、それなら色戀より、殊によつたら小紫と
閑心 切れる話にならざアなるまい。どの道おぬしが働きで
長兵 きつと工夫もしませうが、今云ふ通りおいそれと
閑心 ならぬは合點、何事も、家來の疵の癒えるまで
とき あの御家來の顏の疵。
長兵 癒えたる跡は小紫
閑心 身共の身請けか、但し又
次兵 權八どのに極まるか。
閑心 家來が疵の

長兵　癒えるそれまで

とき　閑心樣。

閑心　奧で返事を（ト一卷を出し、見せびらかす思ひ入れあつて）待つてゐるぞよ。

ト唄になり、閑心に土手助附き、次長衞は長松を連れ、のれん口へ入る。長兵衞、お時殘る。暮れ六ツの鐘。お時、丸行燈を灯し、よき所へ置く。この唄にて向うより助八、前幕の形にて、抱き子を懷へ入れ、出て來り、直に門口へ來て

助八　長兵衞どの、お内にござりますか。（ト内へ入る）

ときャ、助八さん、ようお出でなさんした。何と思うて（ト思ひ入れあつて）ほんにこりやお妹御の、小紫さんの事を聞いて、それで案じて

長兵　成る程、さうであらう。一兩日以前から、おれが内へ轉げ込んだ小紫どの、その譯道を附けるのは

助八　廓を拔けた妹が、こなさんの世話になるといふ事は、今朝らよつと聞いたが始めて。何かとマア、いかい苦勞をかけまする、忝うござります……モシ、長兵衞どの、知らつしやる通り妹の事は、ありや三浦屋の抱へ、別してその譯ぢやァ來ませぬ。わしはちつと無心があつて、モシ、

お時さん、一ぱいふるまつてやつちやァ下さるまいか。

とき　ほんに、見ればお前は小さいのを抱いてござんしたが、お内儀さんも無いお前。こりやそのお子は、貰ひなさんしたのかえ。

助八　サア、貰つたでもなし、貰はぬでもなし、男の子だが果報のない奴サ。生れ落ちから苦勞しますよ。聞きなさい、この子には母親がござらぬよ。

長兵　そりやァ可哀さうな事だの。親なし子にしては、よう肥つてゐるの。

助八　さればサ、親があつたら、常と違つて時分柄（トそこにある小幟を見て）ほんに、わざと幟も拵へて、初の節句も祝つてやらうに、父親はあれど外を家。可哀や、モシ、一ぱいふるまつて下さりませ。

とき　アイ、爰へ寄越しなさんせ。（ト受取り、乳をのませんと思ひ入れあつて）ほんによい男の子、名は何と云ひやんすえ。

助八　アイ、半次郎と云ひやす。聞けばこの子の父御は、筋目のある武士の胤。母は即ちその屋敷に、久しく勤めた若黨の、娘であつたが、緣でがな、その若旦那の隱し妻、明石のお松と浮名の立つた、女中の産み落したこの小僧サ。

とき　何と云ひなさんす。明石のお松と云ひなさんすか。そのお方を世話なさんしたは、石井の御子息
そんならこの子の母御といふは、

助八　オヽ、そのお松サ。この間子を連れて、わしが内へ抱への藝者に

とき　エヽ、このお子の母御さんが

長兵　コレ、お時、てめえも以前、女主に奉公して、しかも先の旦那どのは、石井源之丞樣といふ、遠州のお武家樣。

とき　今も今とてあなたのお噂、用立つ金も路用の貯へ。モシ、このお子は、お松さんの產ましやんした

長兵　小さいながら、おぬしの爲にやァ古主の子だ。たつぷりと呑まして進ぜやれ。

助八　成る程、見るにつけても……ハテ、そりやァ變つた緣でござりました。モシ、お時さん、この子が提げてる守り袋、赤地の錦に井筒つなぎ、石疊みの昔織り。（ト守り袋を見せる）

とき　成る程、見覺えのある守りの切れ。して、この子の母さんわえ。

助八　サ、聞かれて話すも涙の種。わしが抱へた藝者のお松、昨夜迎ひで眞崎へ、乘せてやつたは雇ひ船。可哀や揚げ場の緣へ附けて、その夜送つた船頭か、但し意趣ある者あつてか、所々に數ケ所

の刀疵、隅田川原へ浮く死骸。

とき　エヽ、すりやァノ、お松さんを

助八　意趣ある奴か、但し又、もしや石井の由縁の者と、屬魂知つた

長兵　水右衛門とやらいふ侍ひが、附け廻したる返り討か。何につけても……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（ト回向する）

とき　さうとは知らずこの間、お松さんのお連合ひ源之丞樣より、路銀に盡きしと譯いうて、切ない無心のお文ゆゑ、お前に頼んで二十兩、持たせてあげたは、慥か昨日の

助八　サ、わしも抱へたあのお松、切られて死んだといはれちやァ、世間の手前、外聞が惡いから、なんでも願つて殺した奴を、と思つても見たが、ちつと仕憎い譯もあり、以前は若黨奉公もしたわしなれど、ツイそれなりにずる〳〵と。

長兵　さうサ、武士なら武士とも思はうが、町人の身ぢやァ、敵討はいらぬものサ。

助八　サア、わしもさう思ふから、この子を連れて乳の無心。お内儀がこの子の親に、緣があるならこれ幸ひ、折々ふるまつて下さりませ。

とき　そりやモウ易い事。とはいふもの丶、夢見たやうなお松樣の成行。さぞ源之丞樣がお聞きなされ


尾上菊三郎
豊國画

たら

長兵　ハテ、武士だもの、ナニ女房に心が殘らう。殊に石井の人々は、敵を尋ねる手足まとひ。

助八　その小さいを緣もない、この助八が厄介とは、アヽ、これも何ぞの緣であらうか。

長兵　男やもめのこなさんが、世話なら幸ひ女房が、持つた乳でもねぶらす程に、遠慮なく置いてござりませ。

助八　そりやァ何より忝うござりまする。そんならお前の、詞に任せて

とき　わしが世話してあげませう。（ト抱いたまゝ思ひ入れあつて）オヽ、蚤がせゝるか、眠氣が來たか。

助八　親の死目も知らぬ子を

とき　連れて來たのも

助八　亡者の導き。

長兵　エヽ、小氣味の惡い……コレ、嚊ァや、寐させてやりやれな。

とき　アイ。ドレ、添へ乳してあげようか。

長兵　小紫を爰へ寄越しませう。兄貴、話してござりませ。

ト唄になり、お時、子を抱き、長兵衞と一緒にのれん口へ入る。

助八　そんなら噂に違ひなく、妹の小紫は、長兵衛どのゝ世話になつて、爰の内に居候ふ。それといふのもあの前髪

ト云はうとして思ひ入れ。合ひ方になり、障子の内にて

小紫　アイ、兄さんはどこに居なんすえ。兄さん〳〵。（ト呼びながら出て來て）ヤ、お前は兄さん、ようマア來て下さんした。定めてわたしが廓を拔けたと聞かしやんして、それでお前は

助七　案じに胸も休まらず、樣子を聞かうと來たところ、男氣な長兵衛どのゝ詞を聞けば、おぬしやア閑心どのとやらいふお侍ひが、身請けさつしやるといふ噂があるが、すりやその客人が不承知で

小紫　アイ、わたしや外に一生添はうと、云ひ交したお方があるゆゑ。

助八　その云ひ交したといふ男は、爰の内にかゝつてゐる

小紫　モシ、このお方ぢやわいな。

ト袷姿を幟にせしを見せる。助八、受取り見て

助八　前髪立ちの姿袷も、一際目立つ風俗は、池の菖蒲か杜若。丸に井の字の紋附きは、アヽ、聞え。この袷がこの頃噂のある

小紫　權八さんぢやわいなア。

助八　アノそれが妹の、云ひ交したといふ權八か。
小紫　アイ、辛い勤めのその內も、末は女夫と云ひ交し、それ樂みに今日が日まで
助八　すりや、この姿繪に似たお方と、紋日物日の苦界もいとはず、流れの身にし妹が、その名ゆかしき小紫、若衆盛りの權八に……惚れたも無理ではあるまいわえ。
小紫　兄さん、さう立てゝ下さんすは、お前もまんざら野暮ではなし、推量して下さんせ。
助八　そんならどうでもこの繪に似た、思ふお方と女夫の約束。
小紫　權八さんと世帶して
助八　二人仲よう
小紫　緣を結はゞ
助八　妹が本望。
小紫　あの世にござんす
助八　二人の親達
小紫　草葉の蔭より
助八　さぞや御無念

小紫　エ。

助八　サ、夫婦になつては、親御へ立つまい。

小紫　そりや何故に立ちませぬ。

助八　サ、添はれぬ譯は、(ト合ひ方になり、思ひ入れあつて硯箱を引寄せ、姿繪の幟へサラ〳〵と書くことあつて)妹、これでは其方は添はれまい。

小紫　(取上げ見て)「遠州濱名の屋敷に於て、本庄助太夫樣を討つて立退き、剰さへこの吉原田圃にて、非人となつて身をやつせし、助市樣も返り討、素性を糺せば白井家より、本庄家へ御養子なれば兄を討つたる白井權八」(ト思ひ入れあつて)ヤ、、すりやお顏は知らねど實の父さん助太夫樣を、討たしやんしたは權八さん、わたしが爲には父さんの敵。殊に田圃の人殺し、非人姿の彌市さんと、いはしやんしたは助市樣、その兄御まで人知れず

助八　返り討とは人面獸心。(ト枠にかけたる小槍の鞘、殘らず取捨てる。鍍金の白刃になる)槍一筋も突かせし身も、左右にきらめく拔き身の穗先、紙の幟も野晒しに(ト姿繪の幟を眞中へ立て)天下のお仕置なき内に、町人ながらも以前は侍ひ、その助八が妹の其方は腹替り、胤はお主の實の娘御。敵同士の權八と、よもや夫婦になられはせまい。

小紫　すりや、云ひ交したる權八さんは、わたしが爲には敵ゆゑ、討たねば父御へ立たぬといひ、敵を討つはいとしいお方。殊に討たれぬ夫の惡事。兄さん、こりやマアどうせう、何としやんせうぞいなア。

閑心　極惡人の權八に、添はぬばかりか親の仇、敵を討たずば小紫、女ながらも武士の娘、未來の親御へ云ひ譯あるまい。

ト思ひ入れ。よき時分、のれん口より閑心、出かゝりゐて

小紫　ヤア、さう云はしやんすは閑心さん

助八　すりや、このお方が

閑心　逢ふは初めて、小紫が兄の助八。すりや其方は本庄氏の

助八　若黨上りの因幡屋助八。小紫に執心の、あなたが寺西閑心樣。

閑心　其方が妹の小紫、身共が請け出し、手活けの花。

助八　アノ妹を、あなた樣が

小紫　そりやどのやうに云はしやんせうが、たとへ添はれぬ義理あるとも、心中立てる小紫、この姿繪のお方から、渡さんした身請けの手附。（ト財布入りの金を見せる）

助八　アノ、その金を權八から
閑心　小判の數は知らねども、慥かに金は二包み。正しく田圃の人殺し
小紫　エ。
閑心　科は眼前、印したる（ト紙の幟を取つて）切られた非人は本庄助市、彼れが所持せし二百兩。
　ト手をかけるを、助八立廻つて
助八　金がさを御存じの、閑心樣のそのお詞。殊に橫死の助市どの、死體に召したる伊達羽織、よしや男のよしや誰れ、もしやその場へ。（ト閑心へ目を附ける）
小紫　留め木の伽羅の一炷きも、今は手向と情なや
閑心　覗ふ敵をやみ〳〵と、討たでその身も剩さへ、日本堤の草の露、兄を害せし大罪は、末は驛鈴の鈴ケ森。この閑心が女敵の、權八ならば
　ト紙幟を見て、思ひ入れあつて刀を拔きかける。この時、蛙の聲數多聞える。思ひ入れあつて
小紫　ハテ、夥しく鳴きつる。
助八　蛙の聲はこれ正に、聞き傳へたる濱名の重寶。
　ト刀へ立寄る。閑心、突き廻し、しやんと納める。蛙の聲、一度にとまる。この途端に閑心、懷より

以前の一巻をわざと落し、小紫、取上げる。

小紫　この一巻は

閑心　神妙劍。

小紫　エ、アノ、これが

閑心　（取つて）白井が欲しがるこの一巻。

助八　これをあなたが

ト立ちかゝる。三人立廻りよろしく、閑心、一巻を懐中する。皆々思ひ入れ。

閑心　小紫、思案をしやれ。

トきつとこなし。唄、時の鐘にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、黒塗りの板塀、忍び返し、すべて花川戸河岸の體。時の鐘、だらにて道具とまる。

ト爰に五郎作、仕込みを持ち、これを次兵衞、引附ける。土手助立ちかゝつてゐる。三人立廻りあつて

次兵　動きやァがるな。長兵衞どのゝ合長屋から、なんでウソ〱窺ふのだ。蝮の次兵衞が目にかゝつちやァ、只は通さぬ、動きやァがるな。

五郎　動けといつても動かれぬ。胡亂者の權八を、隱まつて置く幡隨長兵衞、殊に駈落ちの小紫も、こけ込んでうせるといひ、關破りに違ひない。その同類は白井權八、人殺しの詮議があるワ。

土手　さうだ〱、奴も頭の返報し、權八が身許を糺し、人殺しの詮議をするワ。

五郎　面倒な。土手助、野郎を、合點か。

土手　合點だ。

　　ト兩人かゝる。立廻り。觀音の双盤になり、三人立廻りあつて、土手助に手桶を冠せ、五郎作を捻ぢあげてキツとなる。矢張り時の鐘、だらにて、この道具廻る。

　　　本舞臺、元の長兵衞内の道具になる。

　　ト二重舞臺に蒲團を敷き、長兵衞、誂への枕をして、裾へ搔卷をかけ、枕許に丸行燈を置き、うたゝ寐をしてゐる。しめやかなる唄、時の鐘。奧より小紫、書置を持つて出て來る。長兵衞の方へ思ひ入れあつて

小紫　兄さんの話しで、初めて聞いた父さんの橫死。敵は現在……とても添はれぬ事ゆゑに、この身

の素性を書き殘し、お世話なさんす長兵衛さんへ。

トまた唄になり、懐の書き物と、財布入りの金とを出し、そろ〳〵と長兵衛の側へ寄り、枕の引出しをソッと引き、二品を入れて、ワナ〳〵と慄へながら、引出しを元のやうにして、門口の方へ行きかかる。この時長兵衛、寐返りをして、目の覺めたるこなしにて

長兵　誰だ〳〵。そこへ行くのは、小紫ぢやァないか。

小紫　アイ。（トつかへるこなし）

長兵　アヽ、よい心持ちにトロ〳〵とやつたさうな。コレ、おいらん、醉醒めだ。慮外ながら、水を一つ下さい。

ト矢張り唄にて、小紫、下の方へ行き、茶碗に水を汲み、そろ〳〵と持つてくる。この内長兵衛、枕の引出しを明けて見る。小紫、水を持つて來り

小紫　アイ。サア、持つて來いした。

ト差出す手許、ワナ〳〵慄へて水をこぼす。長兵衛起き返り、小紫の手許へ目を附け、その手をヂッと取つて

長兵　コレ〳〵、水がこぼれるワ。コレ、おいらん、なんでそのやうに慄へるのだ。

小紫　エ。

長兵　そこらが水だらけになるわな。

　　　ト右の手にて小紫の手を取り、左の手にて茶碗を取り、水をグッと飲んで

アヽいゝ心持ちだ。（ト思ひ入れあつて）コレ、おいらん、なんだかそこら中を水だらけにした。ぬしも長兵衞も、コレ〳〵、濡れたワ〳〵。いかに濡れるは傾城の常だといつて、ぬしはおれに濡れる氣か。（ト手を取つてこなし、）

小紫　何をマア長兵衞さん、じやら〳〵と、こりやてつきりまだ醉ひが醒めぬと見えるぞえ。ちよつとマア爰を

　　　ト手を振り切り、行かうとするを、きつと手を取り

長兵　コレサ、話があるよ。

　　　ト手を取る。小紫こなしあつて

小紫　エヽコレ、惡い事を

長兵　ハテ、善いも惡いも、そりや素人の云ふ事だ。廓の水で育つたおぬし、まんざらな野暮でもある

まい。この客なら深切を、盡す男は、とサ只一筋に思はうが、夜毎日毎の仇枕、替る枕のその内には（ト思ひ入れあつて、引出しより書置と財布の金を出し）コレ、小紫、おぬしはこの長兵衞へ。

小紫　その書き物は、わたしがお前へ

長兵　附け文か。

小紫　ナニ滅相な。わたしやこのまゝ

ト門口へ行かうとする。裾を控へ、棲先を膝の下へ挾み、行燈を引寄せ、書置を讀む。時の鐘、誂への合ひ方。上の障子を明け、權八窺ふ。のれん口よりお時、子をいぶりつけながら出かゝり、窺ふ。

長兵「書置の事」。

小紫　サ、それぢやによつて、

長兵「一筆しめしあげ參らせさふらふ」。

小紫　エヽ、何をそのやうな文言が

ト書置へ手をかける。長兵衞、思ひ入れあつて

長兵　辛い苦界のおいらんが、お屋敷者か生娘の、書いたやうなる樣まゐる、この附け文は長兵衞を、しらの俠と思ふから、ひねる手もなく差附けに、かり名で口說くは死ね死なう、手鍋提げても契

約の、あの權八を長兵衞に

小紫 コレ、滅相な、なんでマア。恩になつたるお前ゆゑ、この身の上を書き殘す、その書置を附け文とは、あじやれも事に

長兵 ハテ、隱しやるな、こりや附け文。深い仲ぢやと謳はれた、あの權八は仇つきの、浮氣ばかりの色仕掛け。しんの所は長兵衞に、女房子のあるも合點で、乘りかへる氣で打ちつけに、口說くおぬしが心根を、野暮なおれでもまんざらに、恥はかゝさぬ、小紫、文の返事は胸にある。コレ、ちつと此方へ寄つてもよからう

ト小紫を引寄せて思ひ入れ。後にてお時、悋氣のこなし。權八、窺ひゐる。

小紫 これいなア、長兵衞さん、常の氣質に事かはり、譯もない事云はしやんす。よい機嫌な、あじやれも事によるわいなア。この身に詰まるその文言、それをわたしが附け文とは、いかに阿房なわたしぢやとて、勤めする身に羞かしい、なんでマア附け文を。こりやお前、酒機嫌でござんすか。よもや素面ぢやござんすまいぞえ。

長兵 成る程、おらア酒機嫌よ。その酒機嫌なところへ附け込んで、おぬしが心のありつたけ、書いておれへのこの文か。女子供に惚れられたといつちやア、幾歳になつてもまんざらなものぢやアね

え。たとへ義理の惡い女でも、身に引受けて世話をする、子分子方の下齒でも、殊によつちやア
それそこが、思案の外といふ字だワ。小紫、あの山の神が來ないうち（ト小紫を引寄せる。）

小紫　エヽ、滅相な。

長兵　コレ、こいつアまんざらでもねえわえ。

ト小紫の帶を捕へて引寄せる。捨ぜりふにて小紫、逃げあるく。この時お時、堪へかねて、この仲へ入る。抱き子泣く。これをいぶりつける。長兵衞も捨ぜりふにて、小紫へ立ち寄る。この中へ權八入る。小紫見て

小紫　ヤヽ權八さん。コレ、あの長兵衞さんが

權八　ハテ、何も云やるな、みだらな事を

小紫　イヽエイナア、これには段々

とき　エヽ、置きなさんせ。主ある男を。コレ、長兵衞どの、聞いてゐたぞえ〳〵。エヽ、こなさんは
こなさんは

長兵　今のじやらくらを見たのか。

とき　見たわいなア。エヽ、あた見つともない。きつとわたしや見たわいな。

長兵　したり。こいつは又、鍋釜の割れる話だわえ。

權八（思ひ入れあつて）長兵衞どの、これまでは段々と、この權八が身の上を、御深切ならお世話の段忝う存じまする。殊に私しが緣につれ、小紫まであなたのお世話、禮は詞に述べられませぬ。長兵衞どの、私しは只今より、お內には居りませぬ程に、決してお案じなされまするな。左樣思し召して下さりませ。

長兵　こりや早、改まつたおぬしの詞。これには譯の……エヽ、なんだの、今の小紫と長兵衞が、大人氣ねえあのじやらくら、味に氣取つて、それで大方

權八　ハイ、お世話にあづかるその上に、常の女が吉原に、年季の殘つた小紫、連れて參つて何かと惡い（ト思ひ入れあつて）一つ家にまじ〳〵と、今のしだらを（ト云はうとして）小紫、其方も今から權八が事、ふつつりと思ひ切り、閑心が方へなりと、又はお內の長兵衞どのゝお世話になるとも、そりや面々の料簡次第、決して心は置かぬがよい。さう思つて居やれ。

小紫　權八さん、そんならお前は長兵衞さんの、今のしだらを見さんしては、尤もではござんすが、元の起りは長兵衞さんが

長兵　これはしたり、其方が何も云ひ譯しやる事はない。小紫が心底は、常からよツく

とき　コレ、權八さん、さぞ腹が立ちやんせう。わたしも側から氣が揉めるわいなァ。深切に世話をする、大事の男をアタなめ過ぎた。女郎衆といふものは、このやうなあつかましい事をしなさんすものかいなア、お前は（ト疊を叩き）いたづらな商賣しなさんす小紫どのは、惡性とも思はうが、コレ、お前は又、いかにわたしのやうな者ぢやというて、長松といふ六つになる、子まであるぢやござんせぬか。

長兵　コレ、その子があるで、愛想の盡きまいものでもない。世帶じみた嚊アとナ、世間知らずのおいらんと、一口に云へるものか。その上、全盛の小紫が、おれのやうな手のない男に、コレ、この文だワ。斯ういふ羽目になつて來ちやア、こいつはまんざらか〻れると、思ひながらも口あたりがよけりやア、餓鬼も女房も、別れ引きにも及ぶものだ。コレ、この文の文言では、達衆といはれる長兵衞も、横にこけざアなるまいわえ。

ト文を出しかけて思ひ入れ。小紫、立寄るを、ちやつと懷中する。

小紫　コレ、長兵衞さん、そりやお前、情なうござんすわいな。云ひ交したる權八さんに、添ふに添はれぬ譯あつて、この身を捨てる書置を……サ、書いて置いたあの文は、ありやそのやうな浮氣な文ぢやござんせぬ。それに見す〳〵嘘云うて、疑ひ受けては、どうもわたしや

ト長兵衞へ立寄るを、權八きつと思ひ入れ。

權八　コレ、お世話になつた長兵衞どのへ、なんで其方はそのやうに、お恨み申す事がある。ハテ、其方ばかりではない、男へ文を送るのは、こりや傾城の常。殊に落ち目になる時は、また外々の客をたらして、……あるが中にも大恩ある、長兵衞どのを口說くとは、恩知らずといはうか………ア丶、勤めする身は尤もでもあり、只心得ぬは男氣な、長兵衞どのがよもやそのやうな……定めしこれには（トこなしあつて）よし此やうな事がござらうが、これまでの大恩、なんで物が申されませう。お內に居つては短氣な私し、どのやうな間違ひが、出來まいものでもござりませぬ。只今までのお禮は追つて。私しは只今から、別宅いたすでござりませう。

とき　權八さん、尤もでござんす。常から男氣なこちの人、どういふ心で今の惡洒落。

ト腹の立つ思ひ入れ。

長兵　これサ、わいらが知つた事ぢやァない。埒もない話から、夫婦喧嘩の枝が出ちやァ、近所隣りへ外聞が惡い。われは退いてゐろ……コレ、權八、おぬしが今云ふのは、何か小紫が事から間違ひ事が出來てはと、手前の方から巢立ちをする氣になつたのか。

權八　お前に面の立たぬ事が出來ては、後の後悔。そこを存じて私しは、何事もないその內に

長兵　巣を替へる心になつたのか。

權八　左樣でござりまする。

長兵　近しき仲にも垣とやら、得て斯ういふ間違ひから、愛想づかしも出來るものよ、と云つて今更廓へ、二度の勤めに歸されもしまいし、いゝワ、世間で何と云はうとも、小紫はこの長兵衞が、世話をしてやらう。

小紫　エ。

長兵　ハテ、氣遣ひしやんすな。權八に身請けさせうと思つたが、向うにその氣が無いならば、これからはこの長兵衞が

ときよい機嫌な長兵衞どの、アノ、こなさんは圍ひ女房しなさんすか。

長兵　事と品によつたなら、圍ひ者の二人や三人、これも男の名聞だ。權八、小紫はおれが引取る。必ずおぬしは案じぬがよい。

權八　そりやモウ、思ひ切つたと申すからは、私しはお賴み申しませぬ。いづれともあなたの御勝手になされませ。その名杜若と廓には、浮名の立つた杜若。

長兵　ゆかりの色を捨てるなら、拾うて床へ長兵衞が、手活けの花の小紫、濡れの稽古はしつぽりと、

雨の箕輪へ通ふ筋、大恩寺前の辻切りは

權八　武運に盡きし間違ひも、現在實の

小紫　すりや、大恩寺の藪際で

權八　コレ………サ、大恩受けしこのお內、今夜限りに

ト門口へ行かうとする。小紫縋るを、振切つてツカ／＼と行く。

長兵　權八、捕つた。

ト枕を打ちつける。權八、手早く提げたる刀の鞘にて打落す。枕二つに飛び散る。權八、きつとなり

權八　長兵衞どの、こりや何をとらしやりました。

長兵　サ、とつたと云つたは

權八　サ、とつたと云ふは

長兵（思ひ入れあつて、敷いたる蒲團をとつて）權八が出た跡は、すぐさま爰へ長兵衞と、小紫の床をとつた。

權八　アノ、それゆゑに今のやうに

長兵　とつたる床は新枕。

とき　アノ、こなさんは

小紫　そりやマァほんまに

長兵　サ、投げた枕に科はなく

權八　科はこの身に覺えある

長兵　心覺えの手練の程、天晴れひるまぬ

權八　エ。

長兵　サ晝寢にするは、細工なら、水もたまらぬ籠枕。

權八　比翼枕の二つになつたは

とき　その添臥しの枕さへ

小紫　切つて添はれぬ仇枕。

權八　仇ある仲を

小紫　結ぶの神の告げたまふ、モシ

ト立寄るを、權八引廻して、思ひ入れある。

權八　長兵衛様

長兵　權八

權八　何かとこれまで（ト長兵衞と顏見合せ、淚ぐみたる思ひ入れにて）立つ鳥、跡を濁さぬうちに

トつか〳〵と門口へ出る。

小紫　アコレ

ト又寄るを、長兵衞隔てる。拍子に長兵衞の懷より書置落ちる。お時取上げ

ときや、こりやこれ書置……そんなら文をと云はしやんしたは

小紫　長兵衞さんの

ト云はうとする。長兵衞、書置をちやつと取つて懷中する。

權八　さこそあらん。

ト内へ思ひ入れ。長兵衞、以前の金財布を出し

長兵　これぞ形見の

ト投げつける。權八取つて、よく〳〵見て

權八　アノ、用意の金も

長兵　今は跡問ふ

権八　エ。

長兵　路銀にしやれ。

ト唄になり、権八、門口を外より閉す。立寄る小紫とお時を、長兵衛隔て、思ひ入れ。二人の手を取り、のれん口へ入る。あと合ひ方。権八、門口へ残る。

権八　小紫が書置を、附け文なりと云ひなして、権八をこの家に、置かぬ心は立退けと、云はぬばかりの長兵衛どの。さはさりながら神妙剣、慥かに所持の閑心を

ト門口を明けかけ、内を窺ふ。助八、出かゝりゐて

助八　現在兄御の助市どのを、討つたる大罪、どうで遁れぬ天の網、逃げるは卑怯未練であらう。

権八（これを聞き、思ひ入れあつて）助市どのを討つたると、口外なすその上に、卑怯未練とさみなす町人、して、おてまへは

助八　堀の船宿助八は、本庄氏の家来筋、小紫は腹替り、妹ながらも主人の胤、添はせる事はさておいて、親の敵にお主の仇、おのれ逢つたらこの恨みと、云うたところが町人の、及ばぬながらも武士の端、見遁しおかれぬ白井氏。

権八　すりや、聞き及ぶ小紫が、腹替りの兄、助八とはおことよな。町人ながら神妙の至り。さりなが

ら、神妙劍の一卷を、取り得ぬ内は大事の命、卑怯未練と云はゞ云へ、この身の願ひ叶ふまでは命はどうも捨てられぬ。

助八　イヽヤ、討つとも町人の、刄物帶せぬ助八が、所詮この身は返り討、あうたる後は他人向き。緣が切れたら妹と、あの世の緣を

權八　エ。

助八　刄物にあらぬ町人の、刄向ふこの場の（ト凡天を見附け、これを取つて扱くと、卷き藁落ちて、竹の切尖となる）これ幸ひのそゝぎの竹槍。

ト突いてかゝる。權八、立廻つて、きつと捕へ

權八　その成敗は天下の大法、三尺高く

ト刀の鞘にて拂ふ。助八、附け入つて突きかけ

助八　サア、眞劍で刄向へ權八。

權八　町人づれに、なんの眞劍。

助八　その町人も以前は武士。

權八　いらぬ腕立て

助八　ところを、ちよつと

ト立廻りよろしく、鳴り物入りの合ひ方にて、よろしくあつて、助八は返り討にならうといふ心。權八は鞘のまゝであしらふ立廻り。奥より閑心、つか／＼と出て、この中へ入り、ありあふ衝立を眞中へしやんと置き、兩方をとめる。助八、突きかけし竹槍にて、衝立の繪を突き貫く。

ヤヽ、こりや誤つて衝立の

閑心　畫面は卽ち梟木に、かゝりやつながる助八が、古主の仇を貫くは、取りも直さず天下の成敗。

權八　ヤ、さいふは閑心、正しく所持なす

閑心　神妙劍は權八へ

ト差出す。權八取つて

權八　こりや疑ひもなき尋ねる一卷。

助八　故なくこの場で渡されしは

閑心　白井の家を相續しやれ。

雅八　ヤヽ、なんと。

閑心　思ひ出せばその以前、武藝の指南いたされし、中國武士の家名も白井。

權八　すりや、父が東國住所の砌り

閑心　師弟のちなみはこの閑心。

助八　して又一巻、何故あなたの

閑心　手に入つたるは藤川が、仕官のありつき賴みの印し。我へ贈りし神妙劍。白井の家の難儀と聞き、今改めて閑心が、師の恩忘れぬ寸志の一品。

權八　師弟の緣に一巻を

助八　手渡しめされし志、流石はお江戸の白柄組。我も敵の權八を、主人の仇とこの姿繪、槍の穂先にまツこの通り。（ト姿繪の幟を取つて、手槍にて突く）

閑心　藤川一味の曲者が、所持せしところの蛙丸、めぐり／＼て助市の、仕込みと替りしこの刀、石井の幼子養育の、助八其方へ身が餞別。

ト差出す。この時、土手助出かゝり、窺ふ。

助八　然らば石井の子息たる、半次郎への下され物。

土手　權八こそは人殺し、殊には兄を

トかゝる。閑心、拔討ちに切り倒す。この時、所々にて蛙の聲する。

權八　さてこそ蛙の啼きつるは

助八　劒の威德。

ト閑心、血刀を差出す。助八、これを拭ふ。閑心、シャンと鞘に納めて差出す。助八、刀を取つて

慥かにお屆け申しませう。（ト腰に差す）

權八　閑心どのへは權八が、路次の間の腰ふさぎ。

ト差したる刀を取つて閑心に渡す。この時下手より中間一人、箱提灯を持ち、出かゝる。

閑心　白井が魂ひ、暫く借用仕つた。

中間　お迎ひ。

閑心　然らばこのまゝ

權八　閑心どの

閑心　權八、必ず命全うして

權八　ヤ。

閑心　提灯やれ。

ト三重になり、中間先に閑心、向うへ入る。この時長兵衞、のれん口より出かゝり

長兵　神妙劍は手に入つたか。
權八　閑心どのが情を以て、手に入る一卷。
長兵　因幡の古主に差上げなば、白井の家のめでたき榮え。
權八　この權八になり替り、御苦勞ながら長兵衞どの、御持參あつてこの身の詫びを（ト一卷を渡し）我は遁れぬ天の網。
長兵　サ、その刑罪にかけまいと、小紫の書置を、文と僞り權八に、思ひ切らせてこの土地を、高飛びさせんか二つには、間違ひながら兄殺し、死なで叶はぬ事なれば、未練殘さず殺さうと、思ふが上の拵へ事。小紫も覺悟して、一つに死なんこの書置。（ト以前の文を出す）
權八　男氣な長兵衞どの、深き恩案のあらんずとは、存じたなれど此方にも、コレ（ト助市の書置と、財布入りの二百兩を出し）兄助市が懷中に、情を以て某に、腹切らせんとのこの文言。かねて貯へ置かれたる、金子と共にとひ弔ひ。
長兵　いかなる緣の因みにや、他人同士のかほどまで
權八　誠に兄弟同然の、御深切なるいつくしみ。
長兵　鈴ケ森での白刃の稻妻。

権八　渡りに船の花川戸。

長兵　知らぬ前世の宿業か。

権八　不思議なちなみで

兩人　あつたなア。

ト思ひ入れ。この時、上の障子屋體の内騒がしく

ときヤヽ、小紫さんは自害して

助八　ナニ、妹が

ト皆々思ひ入れ。助八駈けゆき、階子を引抜く。内に小紫、剃刀にて自害の體、お時介抱してゐる。

助八、立寄り見て

ヤヽ、思ひ切つたるこの深手。すりや、権八どのにこの世では

小紫　添はれぬ仲と諦めて、自害なすのも、せめては武士の（ト権八の方を見て思ひ入れ。）

長兵　娘に生れた健氣な最期。せめてあの世の縁なりと

とき　敵同士の権八さんに

助八　息あるうちに未來の契約。

権八　同じ蓮に夫婦の結び。

小紫　エヽ、嬉しうござんす。必ず未來で（ト苦しき思ひ入れ）。

とき　コレ、せめて末期の

ト介抱する。小紫絆切れて倒れる。おとき、助八、泣き落す。この時四ツの鐘、所々にて拍子木を打ち合せる。権八、刀を提げて突つ立ち、聞き耳立て

権八　ハテ、殺伐なる拍子木の、數も亂れて定かならず、所々にて合はすは、時打つ木にはあらざるか。ハテいぶかしい。

トきつとなる。バタ〳〵にて、下の路地口より次兵衛、仕込みの刀を持ち、ツカ〳〵と出て

次兵　権八どのか。

長兵　蝮の次兵衛か。その竹杖は

次兵　こりやア田圃で助市どのが、所持せし刀、蛙丸と替りしと、持つてうせたは雲助五郎作。殊に罪人権八を、召捕へんと捕り手の大勢、大川橋に屯ろの様子。兄の魂ひ、この竹杖、腰に帶して、サア、落ちた〳〵。

ト権八へ竹杖を渡す。このせりふのうち向うより、捕り手の人數窺ひ出る。

權八　すりや、權八をお上より、召捕れとの手配とな。（ト向うを見て思ひ入れ）さるにても竹杖に、仕込みし劍は兄の魂ひ、手に入るからは潔よく、人手にかゝらぬこの身の覺悟。

長兵　この幡隨が十念で、迷はぬやうに。（ト淨土の珠數を差附ける）

權八　あの世の苦患を長兵衞どの……これが別れに

ト長兵衞と顏見合せ、思ひ入れ。この時、五郎作、後に窺ふ。門口には捕り手大勢、忍び提灯にて窺ひゐる。

五郎　神妙劍を

トかゝるを權八、見事に切り倒し、刀を持ちかへる。この時、竹の柄落ちる。よく／＼見て

權八　銘は即ち備前長光、疑ひもなき兄の差し料。

皆々　アノそれが

權八　（白刃を見て、きつと思ひ入れ）兄者人、これで未來の（ト腹へ突き立てる）。

とき
助八　ヤヽ、權八どのは

長兵　コレ。（ト思ひ入れ）

捕手　捕つた。

ト捕り手皆々十手を振りあげろ。助八、門口をシヤンと閉す。次兵衛、行燈を吹き消す。長兵衛、持つたる珠數をふり上げ、權八の後へ廻ろ。これを木の頭。權八、白刃を引廻す。これにてキザミ、各各思ひ入れよろしく、ひやうし

幕

大詰

龜山城下仇討の場

役名——藤川水右衛門。石井源之丞。同妹、八重梅。田邊文藏。下郎、袖助。大岸主水。

本舞臺、正面打ちぬき、龜山の城、大手先の體。眞中に水右衛門、白半纏の形。上の方に主水、上下、大小。源之丞、八重梅、白の形。文藏、袖助、奴姿にて左右に控へる。後に菖蒲革の侍ひ大勢、六尺棒を持ち、固めてゐる。この見得、時の太鼓にて幕明く。

主水 この程當家へありつきし、赤堀源吾と變名なせしは、石井右内が敵たる、藤川水右衛門との聞えあるによつて、今日仇討。役目を蒙むる大岸主水。左右方、用意いたしてよからう。

水右 すりや、どうあつても某を水右衛門と、主水どのには言上あつて、これにて勝負いたせとか。

源之　云ふにや及ぶ、其方こそ、父右内を討つて立退き、剰さへ女房まつを返り討。

八重　殊にその節兄上の、御所持なされし仁王三郎、奪ひ取つて當國へ立越え

文藏　神影流を申し立て、立身のありつきも、毒にて變へる面の痣。卑怯未練の水右衛門。石井の若黨田邊文藏、お許し受けて今日の助太刀。

袖助　汝が親の藤川卜庵、關東にてめぐり逢ひ、老ぼれながら敵の片割れ、この袖助が引ッ捕へ

源之　汝が所在を尋ぬれども、白狀なさぬ親卜庵、不便ながらも某が手にかけて

水石　すりや、親人を討つたりとや。

主水　親を討たれておめ〳〵と、遁るゝ心か水右衛門。

源之　誠の武士の魂ひあらば、この源之丞を敵と討たぬか。

水右　サア、それは

八重　現在親を討たれても

袖助　無念でないか水右衛門。

源之　卑怯未練の腰拔けめが。

水右　すりや、親人まで我ゆゑに（トロ惜しきこなしあつて）名乘るまじとは思へども、親卜庵を討つた

る汝等、いはゞ互ひのこの仇討。石井右內を討つて捨て、その後汝が隱し妻、お松めを返り討。面體變へてありつきの、よき主取りと當國へ、入込みし赤堀こそ、うぬらが敵と附け覗ふ、いかにも藤川水右衛門だワ。

四人　さてこそな。

水右　返り討た、覺悟なせ。

源之　名乘り合せし上からは、初太刀は卽ち源之丞。

八重　二の太刀は妹の八重梅。親の敵は優曇華の、花待ち得たる浮木の龜山。

文藏　日頃念ずる曾我兩社、荒人神の利生によつて、日頃の本望、御兄弟。

源之　イザ立上つて、勝負なせ。

主水　心靜かに、双方支度。

水右　イザ

源之　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵

ト白囃子になり、水右衛門、源之丞、タテあつて、よき程に八重梅入れ替り、立廻りあつて、水右衛

門手を負うて倒るゝ。

源之
八重　親の敵。

文蔵
袖助　お主の仇。

四人　思ひ知つたか。

主水　オヽ、お手柄〳〵。

まづ今日はこれぎり

打出し

大南北全集　第一巻　終

大正十四年二月十七日印刷
大正十四年二月二十日發行

『大南北全集第一巻』

非賣品

校訂 坪内逍遙

編纂者 渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷者 上村新輔

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所 博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂

